シンポジウム　1993, 10

細石刃文化研究の新たなる展開

II

細石刃文化研究の諸問題

佐久考古学会
八ケ岳旧石器研究グループ

シンポジウム

細石刃文化研究の新たなる展開

開催要項

1　日時　　１９９３年　１０月３０日（土）・３１日（日）
　　３０日（土）　午後１時　～　６時
　　３１日（日）　午前９時　～　３時

2　場　所　　長野県南佐久郡南牧村　野辺山高原　帝産ロッヂ

3　主　催　　佐久考古学会、八ケ岳旧石器研究グループ

4　テーマ　　細石刃文化研究の新たなる展開

5　基調報告およびパネラー予定者（五十音順）

◆阿部朝衛（帝京大学）
◆安蒜政雄（明治大学）
◆石井浩幸（山形県東根市小田島小）
◆小畑弘己（福岡市埋蔵文化財センター）
◆大沼克彦（国士舘大イラク古代文化研究所）
◆織笠　昭（東海大学）
◆梶原　洋（東北福祉大学）
◆加藤真二（奈良国立文化財研究所）
◆加藤博文（筑波大学大学院）
◆木崎康弘（熊本県教育委員会）
◆栗島義明（埼玉県立博物館）
◆桜井準也（慶応義塾大学）
◆桜井美枝（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
◆笹原芳郎（静岡県埋蔵文化財調査研究所）

◆佐藤宏之（東京都埋蔵文化財センター）
◆沢田　敦（新潟県埋蔵文化財調査事業団）
◆島立　桂（千葉県教育委員会）
◆白石浩之（神奈川県埋蔵文化財センター）
◆白石典之（立教大学）
◆菅沼　亘（十日町市博物館）
◆鈴木忠司（京都文化博物館）
◆砂田佳弘（神奈川県埋蔵文化財センター）
◆諏訪間順（小田原市教育委員会）
◆早田　勉（古環境研究所）
◆高橋春栄（北越考古学研究会）
◆谷口康浩（国学院大学）
◆田村　隆（山武郡市文化財センター）
◆立木宏明（朝日村教育委員会）
◆辻本崇夫（パリノサーヴェイ）
◆堤　　隆（八ケ岳旧石器研究グループ）
◆寺崎康史（今金町教育委員会）
◆長沼　孝（北海道教育庁）
◆中村由克（野尻湖博物館）
◆西井幸雄（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
◆西村尋文（香川県埋蔵文化財センター）
◆橋本勝雄（千葉県教育委員会）
◆松浦五輪美（奈良市教育委員会）
◆光石鳴巳（岡山大学大学院）
◆宮田栄二（鹿児島県埋蔵文化財センター）
◆森嶋　稔（長野県考古学会長）
◆横山裕平（石器文化談話会）
◆吉井雅勇（荒川町教育委員会）
◆米村　衛（網走市郷土博物館）
◆綿貫俊一（大分県埋蔵文化財センター）

シンポジウム

細石刃文化研究の新たなる展開

- その、めざすもの -

矢出川における細石刃文化の確認から四十年、いまや細石刃文化遺跡は日本国内のいたるところで発見され、資料の蓄積がなされ、その様相が明らかにされつつある。一方、それに伴って“研究の方法論的進展”や“新しい視座からの研究”もみられようという昨今である。

そこでこのシンポジウムでは、国内の最前線で積極的な研究をすすめておられる研究者の方々にお集まりいただき、以下のテーマにそった、紙上および論壇上における、論議の深化をめざした。

八ケ岳旧石器研究グループ
堤　　隆

①　【列島諸地域における細石刃文化の様相】

第Ⅰ部では、列島諸地域の細石刃文化資料の集成をおこない、それぞれの地域での、①研究の経過・②遺跡の分布や立地・③石器群の内容（技法や組成・石材など）・④細石刃文化の様相⑤研究の現状と課題について論じていただいている。

遺物の集成と遺跡一覧表は、それぞれの地域について、もれなくできるかぎり網羅的に作成していただいた。

地域資料の蓄積とその様相の把握、問題点の抽出が議論の土台である。

② 【細石刃文化の成立・展開・終焉をめぐって】

日本列島における細石刃文化の成立について、自生論的見地あるいは伝播論的見地をふまえ、止揚的な議論の深化をはかる。

一方、細石刃文化の展開や尖頭器との共存関係、細石刃文化の終焉と縄文時代の始まりについての考察もおこなう。また、その年代的把握の鍵となる指標テフラについての論文もいただいた。

加えて列島をとりまく大陸の細石刃文化の様相にも注意したい。

③ 【細石刃技法と細石刃、植刃器をめぐって】

細石刃剥離技法に関する研究、細石刃と石材環境、細石刃の形態と機能、東アジアの植刃器をめぐる研究を展開する。

細石刃はどのような技法によって生みだされたか。そして本来的な研究の主役のひとつであるべき細石刃のかたちや機能とは、さらにそれが複合石器としてどのような軸に埋め込まれていたか、についての考察をおこなう。

④ 【細石刃文化期の生活様式をめぐって】

細石刃文化人の生活の一側面として残された石囲い炉や、そのほかの遺構のあり方、そして、その存在の背景についての考察がなされる。

また、細石刃文化期において「内水面漁撈が存在しえたか」という重要なテーゼを含めた、その生業にまつわる議論、一方で細石刃文化期における行動論的な理解に向けての視座が提示される。

第 II 部

細石刃文化研究の諸問題

目　次

細石刃文化の成立・展開・終焉をめぐって

① 細石刃文化の出現過程 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 白石典之

② 九州で細石器文化が始まった頃 ・・・・・・・・・・・・ 木崎康弘

③ 細石器の出現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 砂田佳弘

④ 中部高地の細石刃過程の課題 ・・・・・・・・・・・・・ 森嶋　稔

⑤ 細石刃と槍先形尖頭器の併存とその意味 ・・・・・・・ 島立　桂

⑥ 相模野台地における細石刃石器群と尖頭器 ・・・・・・ 諏訪間順

⑦ 細石器石器群の終末と神子柴型・長者久保系石器群
の関連性について ・・・・・・・・・・・・ 白石浩之

⑧ 細石器石器群の終焉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 栗島義明

⑨ 日本細石器文化研究の現状と課題 ・・・・・・・・・・ 橋本勝雄

⑩ 日本列島とその周辺の示標テフラ ・・・・・・・・・・ 早田　勉

⑪ 中国華北の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 加藤真二

⑫ シベリアの細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 加藤博文

⑬ 細石刃文化の拡散 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 梶原　洋

細石刃技法と細石刃、植刃器をめぐって

① 細石刃技法の把握 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 阿部朝衛

② 細石刃剥離に関する実験的研究 ・・・・・・・・・・・ 大沼克彦

③ 細石刃文化と石材環境 ・・・・・・・・・・・・・・・ 栗島義明

④ 細石刃研究の最も基礎的な形態 ・・・・・・・・・・・ 織笠 昭

⑤ 細石刃の使用に関する二・三の問題 ・・・・・・・・・ 堤 隆

⑥ 東アジアの植刃器について ・・・・・・・・・・・・・ 小畑弘己

細石刃文化期の生活様式をめぐって

① 細石刃文化期の石囲い炉 ・・・・・・・・・・・・・・・ 中村由克

② 細石刃文化期の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 辻本崇夫

③ 細石刃文化遺跡と河川次数 ・・・・・・・・・・・・・・ 桜井準也

④ 細石刃文化と生業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 鈴木忠司

⑤ 野辺山を視る眼 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田村 隆

⑥ 細石刃石器群の行動論的分析のための視点 ・・・・・・ 佐藤宏之

日本の細石刃文化遺跡と細石刃文化資料

① 日本の細石刃文化遺跡と細石刃文化資料 ・・・・・・・ 堤 隆

細石刃文化の成立・展開・終焉をめぐって

日本列島における細石刃文化の成立について、自生論的見地あるいは伝播論的見地をふまえ、止揚的な議論の深化をはかる。

一方、細石刃文化の展開や尖頭器との共存関係、細石刃文化の終焉と縄文時代の始まりについての考察もおこなう。また、その年代的把握の鍵となる指標テフラについての論文もいただいた。

加えて列島をとりまく大陸の細石刃文化の様相にも注意したい。

細石刃文化の出現過程

白石　典之

1　問題の所在

これまで40年あまりの細石刃石器群研究の歴史の中で、数多くの研究成果が公にされ、活発な議論がなされてきたことは、ここで改めて述べるまでもあるまい。これにより多くの成果が得られたが、しかし近年、些かの行き詰まりを見せているかに感じているのは筆者のみではなかろう。特に、その出現過程については顕著にみられる傾向と言える。その原因のひとつとして、細石刃石器群研究の視点とも言うべき問題があるように思える。それは端的に記せば、外的な視点中心であったという研究経緯にある。すなわち、外的視点とは、周辺大陸にその起源を求め、関係・系統を注目するといったものである。

たしかに、細石刃石器群が北東アジアにおける晩氷期終末の変動の中から出現したことについては大枠においては承認されることであろう。しかし、一方的な伝播により細石刃石器群出現を捉えるのでは不十分で、当時の日本列島側、すなわち受け手側の在り方を注目する姿勢に欠けていたという点は否めまい。筆者がここで最も問題にしたい点は、細石刃石器群出現過程を考える際の、日本列島側の在り方を理解しようとする視点（内的視点）の欠如にある。

これについては稲田孝司氏の「尖頭器文化と細石刃文化との内的なつながりの究明がおろそかにされる傾向が強かった研究のあり方」という指摘（稲田　1986,p.84）が状況を的確に表現している。槍先形尖頭器の石器群の出現については、先行のナイフ形石器群との関連から捉えようとする動きが盛んであり、中には、社会組織の動態まで読みとろうとするものさえ散見される。一方、細石刃石器群を先行石器群から論じたものとしては、管見では数例の業績にとどまる（安蒜　1984・86など）。

その背景には、細石刃石器群の研究が細石刃核の分類と、その製作技術復元に注がれてきたという点が指摘されよう。このことが、独特で精細な技術型式学的方法を確立し進展させた反面で、先行・後続する石器群との比較研究を妨げていた原因のひとつであると考えられる。さらに、槍先形尖頭器と細石刃石器群とが個別の視点で論じられてきた研究経緯に問題があると考える。両者を統一した視点より分析し、相互の関連を明らかにする必

要があろう。

筆者は既に、一様に捉えられてきた細石刃石器群の列島内における出現過程を、前段階のナイフ形石器群にまで遡り、石器製作技術の視点から検討を加えた（白石　1989）。これにより、一様ではなく、スムースに移行する列島両極の北海道・九州地域と、技術上の変化と断絶の存在する関東・中部地域の、言い換えれば「北海道型」・「九州型」・「関東型」の三つの形態が存在することが明らかにされた。

本稿では、内的な視点より列島内における細石刃石器群の出現段階の様相を、この３地域ごとに、今まで得られてきた考古学データを集積することによって比較検討してみたいと考えている。もちろん、伝播のみではなく列島内での出現の可能性も否定するものではない。

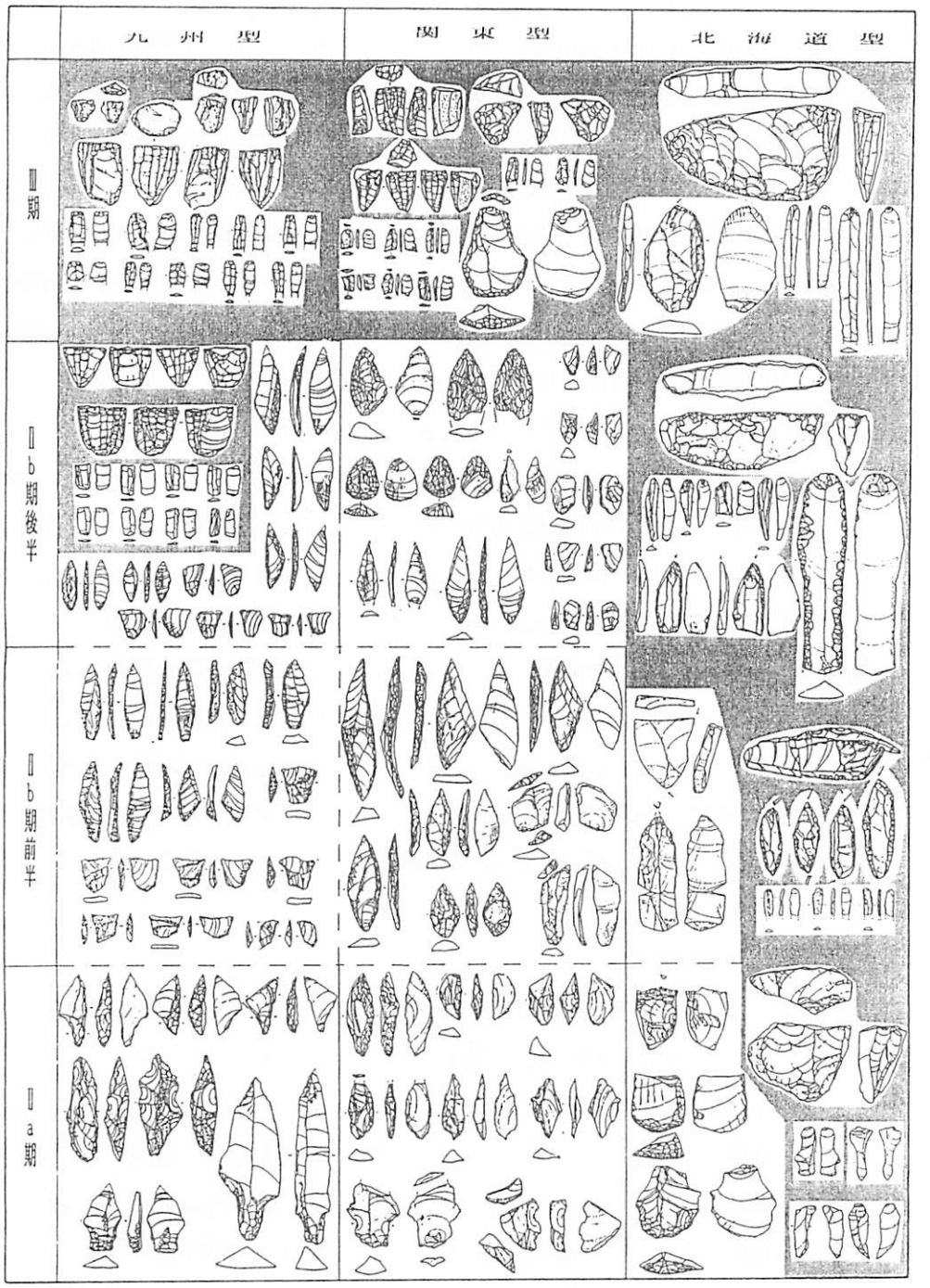
2　細石刃石器群出現期の諸現象

ここでは、３地域ごとに、石器の組成（道具立て）の変化、利用石材の変化、遺跡立地の変化に着目して、出現期における列島内の様相を比較検討してみる。時期区分は武蔵野編年に準拠し（Oda・Keally 1979）、出現期として、いわゆるⅡａ期からⅢ期までを対象とする。Ⅱｂ期のみ前後に二分する。

(1)石器群の変化

北海道型地域では、上士幌鳴木遺跡の例（Ⅱａ期）に細石刃石器群がみられる（筑波大学鳴木遺跡調査グループ編　1988）。また、越川遺跡から２万年相当の層位から細石刃の出土が報告されている（曽根他　1991）。このように北海道では、今のところ最古と考えられる石器群の一部に既に細石刃石器群が組成される。以後の石器群が型式的・組成的に大陸部（沿海州やサハリン）と連動しながら変化したことは、今までの研究成果から異論をはさむ余地がなかろう。細石刃石器群の出現は時間的にも、石器製作技術の基盤の面からもシベリアと変わりない。しかも細石刃核の準備段階などの細部に独自性が看取れることから、同様の環境内で多元的に発生した可能性が高い。その立証のためには先行石器群を解明しなければならないが、北海道型は、周辺部との関連の中で細石刃石器群が出現・展開した地域であると考えるのが穏当ではなかろうか。

九州型では、二側縁加工ナイフ形石器を基軸にして、剥片尖頭器、台形石器を組成に加えながら変遷し、細石刃石器群に至るという過程を大枠でたどる。その内容は斉一的と言ってよい。この石器組成は九州独特と考えられてきたが、朝鮮半島や中国東シナ海沿岸地



第1図　細石刃石器群出現期の石器群変遷

域から類似例が散見されるようになり、大陸部とのつながりが指摘されるようになった。この間、石器製作技術の基盤は石刃技法である。この中に細石刃技術の母体を見出すことは、今のところ九州では不可能であり、完成された形での大陸からの導入と想定するのが妥当と言えよう。また、ナイフ形石器と細石刃石器群との共伴ついての議論があるが、中国大陸側の東灰山、油房、黒龍潭などの遺跡で石刃と細石刃石器群の共伴が近年報告されてきている（白石　1993参照）。このような周辺地域の動向や短時間に細石刃石器群が出現する九州の状況から、原Bや船野などの共伴事例を過渡期の一時的な傾向として積極的に評価すべきではなかろうか。九州型は大陸と同様の石器組成と技術基盤を有し、大陸とほぼ連動する形で変化していたが、その度合いは北海道型に比べ低く、独自性が強い。細石刃石器群の出現に関しては自生ではなく、大陸から直接導入した地域と言える。

関東型地域は、Ⅱb期前半に二側縁加工ナイフ形石器を主体とする斉一的な組成と技術基盤（石刃技法）をもつ石器群が確立するが、後半になると、石刃技法が画一的でなくなるとともに、ナイフ形石器の形態が多様になった。特に、二側縁ナイフ形石器は小型化して幾何学的になり、素材の形状に左右されることの少ない槍先形尖頭器が発達した。この傾向は関東地方と中部地方南半で顕著にみられるもので、この範囲が関東型の地域と把握できると考える。この地域での細石刃石器群の出現は、組成的にも技術的にも前段階との整合性はみられない。すなわち、特徴的だったナイフ形石器と槍先形尖頭器が欠落し、あわせて石刃技法の連続性も看取できないということである。このことから想定できることは、関東型での細石刃石器群出現は、在地的な石器群からの自生ではなく、他地域からの移入と捉えることであろう。

⑵石材利用の在り方の変化

北海道型では、Ⅱa期の遺跡は道央地域に集中するため地域全体での把握はできないが、敢えて概観してみると、使用石材の種類は黒曜石、チャート、安山岩、メノウと言うように多様で、しかも近接地域で採集できるものが主体となる。Ⅱb期になると全道的に遺跡の存在が認められるようになる。この時期には、主体となる石材により地域差が発現する。ひとつには道南地域であり、もう一方は道央・道東地域である。前者は頁岩を主体とし、後者は黒曜石を主体とする。この傾向は細石刃石器群が展開する時期に長くみられるものである。ともに遺跡と給源との距離は60kmほどが頻繁に交流があった地域と想定されるが、300km 離れた互いの石材が通時的に安定して供給されているということも見逃してはいけない事実である。このことは北海道ほぼ全域を範囲とする、広域にわたる石材供給システ

ムの存在を想起させる。さらにサハリンにおける石材をみれば、そのシステムが周辺地域にも及ぶことは明らかである。約言すると、細石刃石器群の存在する時期を通して、原産地周辺を基盤としながらも、より広域を範囲とする安定した石材供給（利用）の在り方を看取ることができる。

九州型は、九州島内での利用石材とその原産地の在り方から四つの小地域に細分できる。すなわち、西北九州で腰岳や松浦周辺の黒曜石を主に用いるもの、多久や老松山地域のサヌカイトを主に用いるもの、南九州の出水などの黒曜石を用いるもの、東九州における流紋岩・安山岩・堆積岩系の石材を用いるものである。研究成果から判断すると、例外的な資料を除けば100km 以内に給源と遺跡との関係がおさまる（藁科・東村　1988）。また、小地域間での石材の交流は顕著ではなく、かなり強く在地の石材に依存していた状況をうかがい知ることができる。この地域圏はおそらくⅡａ期には確立していたものと推測され、全体の変化の様子については言及していないが、北西九州に限れば、Ⅱｂ期後半まで同様の利用状況が連続していた状況が報告されている（萩原　1990）。

関東型の地域では、データの豊富な南関東に限定して概観してみる。この地域の石器原材に適したものとしては、黒曜石系、頁岩系（頁岩・チャート）、安山岩系（安山岩・玄武岩）の三者に大枠で分類できると考える。さて、ここで三者の時期別出現頻度を、相模野、武蔵野、下総の３台地で比較してみる（第２図）。Ⅱａ期からⅡｂ期前半にかけては、いずれの台地でも黒曜石の減少、頁岩系の増加が認められる。しかし、Ⅱｂ期後半になると相模野・武蔵野両台地では黒曜石の比率が増加し頁岩系が減少する一方で、下総台地では黒曜石の増加を頁岩系の比率が上回っている。Ⅲ期になると相模野・武蔵野両台地では黒曜石を主体とし、頁岩系や安山岩系は低率であるが、下総では三者がほぼ同率という傾向を示している。この事例はⅡｂ期前半までの３台地共通の石材利用の在り方が、後半以降になると下総のみ独自の展開を示すものと要約することができると考える。具体的にⅡｂ期後半の槍先形尖頭器の石材は、西部関東との脈絡を欠き、関東北東部と結びついていたとする意見もある（田村他　1987）。一方で、相模野・武蔵野台地でもⅡｂ期の前後半で近在の石材から遠隔地の黒曜石と主要石材を変化させる。このように南関東では、Ⅱｂ期後半に不整合がみられ、それが細石刃石器群まで継続するという傾向が指摘できそうである。

⑶遺跡立地の変化

北海道型の地域では、Ⅱａ期以前の遺跡は独立丘陵や河岸段丘縁辺などに孤立して存在

する場合が多い。ところがⅡb期になると石材原産地周辺に遺跡が形成されはじめ、後半には遺跡群を形成する。このほかにも主要河川にも集中が認められる。この傾向はⅢ期にも連続することから、細石刃石器群の展開を通じて、ほぼ同一の地域で遺跡が継続して形成されたものと把握できる。

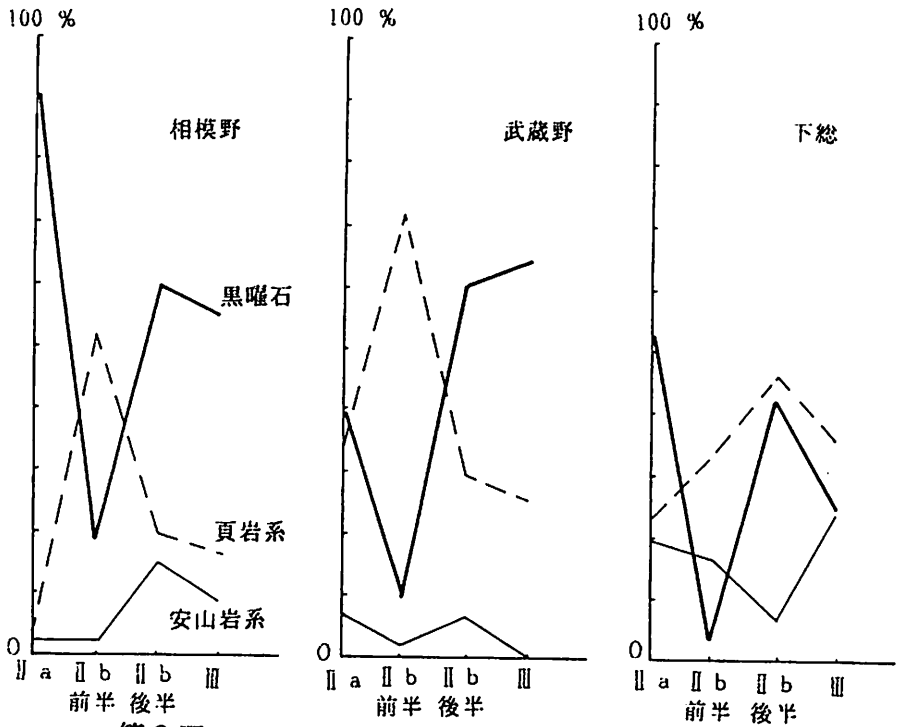
九州型地域では、Ⅱa期には石材原産地である多久や、大野川流域に遺跡群が形成され始める。Ⅱb期前半には西北九州で遺跡集中がみられる。これらの集中化現象は石材供給の在り方と無関係ではなさそうである。しかし、この傾向は長続きしないようである。ナイフ形石器を主体とする時期には原産地やその周辺に大遺跡が形成されたが、細石刃石器群の登場以降は石器を多量に製作する大遺跡は見られなくなるという指摘がある（萩原 1990）。

関東型の地域では、安蒜政雄氏の研究を参考にしながら南関東の事例を概観してみよう（安蒜 1985）。これによると遺跡の群的集中はⅡa期に始まる。この傾向は関東型地域に一般的であるが、以後の変化が小地域ごとに異なることは興味深い。例えば、武蔵野ではⅡa期には33遺跡あったものが、Ⅱb期前半以降3分の1に減少しているが、一方で、相模野ではⅡa期に13遺跡が、Ⅱb期前半には2遺跡と激減するが、後半には21遺跡と急増している。このように関東型の地域ではⅡa期の前後半で遺跡立地に差異がみられる。遺跡数の多寡がはたして当時の集団の行動の、どのような側面を示すかという議論は帰結をみていないが、少なくとも行動領域、すなわち生活の在り方に変化が生じたことは明らかであろう。Ⅱb期後半の傾向は細石刃石器群が出現してからも存続する。

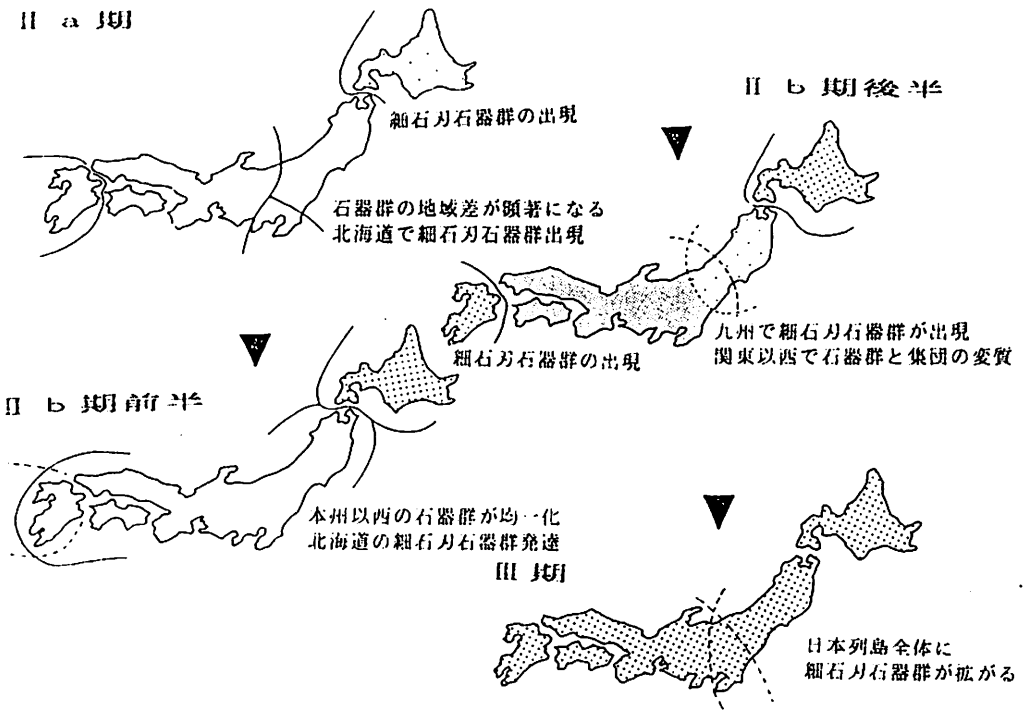
3　細石刃石器群出現期の様相

既に述べた石器製作技術からみた3地域について、三つの項目から比較してみた。北海道型では、技術基盤と石器組成はスムースに移行し、石材利用の在り方とその供給システムは通時的に存続し、遺跡の立地も変化することなく群的に拡大する。この傾向は周辺大陸部と同一歩調と言える。

九州型では、細石刃出現までは技術基盤も組成もスムースに移行するが、細石刃石器群出現を境に一変している。石材利用と供給の在り方と、遺跡の立地に関しては大きな変化は存在しないが、遺跡の規模が細石刃石器群出現と共に小型化する。石器群の様相からは東シナ海沿岸部との類似が指摘できるが、それはごく一部である主体はあくまで独自性の強いものである。



第2図　関東型地域における石材利用の変化



第3図　日本列島における細石刃石器群の出現過程

関東型では、技術基盤の斉一性が崩れることにより、その影響が石器組成にも現れる。石材利用や供給の在り方も、細石刃石器群出現直前にそれまでの傾向が一変する。遺跡立地にもその傾向は顕著にみられる。周辺地域と比較すると、その差異は顕著であり、地域的独自性を持って変化した様子が理解される。

このように３地域は技術基盤だけではなく、さまざまな側面で細石刃石器群出現までの過程に独自の展開があったことが明らかになったことと思う。ここで取り上げた石材利用や遺跡立地の在り方は、当時の集団関係を反映しているという見解が広く受け入れられているものと考えられることから、本稿でも最後に細石刃石器群出現期の集団関係を予察しておくことにしよう。

北海道型では、細石刃石器群出現以降その在り方に変化はみられず、安定的な拡大の傾向をとる。さらにその範囲は周辺大陸にも及ぶ。その荷担集団は大陸と密接な関係をもったものと推測でき、その動向に敏感に対応していたものと想定できる。また、九州型でも、大陸部と関係の深い在来集団が存在していたが、細石刃石器群導入に関して、そこにいささかの不整合を看取ることができる。現状からその荷担集団は短時間的な外来集団の移入を考えることが一案として許されよう。そしてこの地域は、このような移入を短期間に柔軟に受け入れられるような対外的に開かれたシステムを有していたものと想定する。

一方で、関東型は、あらゆる側面で細石刃石器群出現前段階に大きな変化がみられる。この変化の主体者は基本的には在来のシステムを踏襲していることから在地の集団であったと想定できよう。この変化は要約すると、在来の関係を離れて、さらに広範囲に交流を拡大するというものであった。この変質は、これまでの閉ざされた在地型の集団関係を清算して、開かれたシステムに転換したものと言い換えることができよう。それにより新たな技術を導入する下地が形成されたものと想定している。細石刃技術は連続性が乏しいため、その荷担集団は他所（おそらく九州型地域）からの移入と考えられるが、開放的に変化した在来集団と次第に同化して、その地域圏を踏襲したものと推測する。

このような地域差成立の背景にはいくつかの要因が想定されようが、ここでは日本列島の地理的側面から推定してみたい。細石刃技術は晩氷期における環境変化に適応するために、北東アジアで広範囲におこった技術革新であったと考えられている。その流れに連動し、一早く対応できたのが北海道型と九州型の地域であったのだろう。北海道型地域は大陸と連結していたために、その動静と歩調をあわせて変化できたのである。しかし、九州型地域は、大陸部と陸橋で連結していなかったために、その対応がいささか遅れ、在来の

システムを変質せざるを得なかったようである。一方、関東型地域では、大陸部の動向の両窓口から最も遠い位置にあるため、環境変化に独自の対応をせざるを得なかったのであろう。道具立ての変化と集団関係の再編がこれにあたる。弧状に大陸の縁辺に存在する日本列島の地理的特徴と、それによる集団の大陸との関係の親疎が、この３地域成立の大きな要因なのである。

最後ではあるが、細石刃石器群出現の母体について想定しておきたい。前に述べたように、北海道型地域では大陸と連動した変化を見せている。また、出現の年代も２万年前というように大陸部と変わりない。このことから地域内での自生は充分に考えられる。関東型の地域は先行する石器群や集団関係に母体を見い出すことはできない。完成した形で導入されていることと、西南日本との共通性が高いことから、この方面からの波及と考える従来の見解を支持したい。九州型地域は前段階との不整合が明確なため、今のところ大陸からの波及を考えておきたい。しかし、技法や形態に地域差がみられることから、数度の波及、複数の起源地、波及の影響を受けて在来の技術からの自生などの可能性も捨てきれない。より細かい編年の整備を含め、注視を続けていかなければなるまい。

参考文献

安蒜政雄　1984　「日本の細石核」『駿台史学』47、152-183 頁

―　1985　「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集日本原史』　193-216 頁

―　1986　「先土器時代の石器と地域」『岩波講座日本考古学』５、27-60 頁

稲田孝司　1986　「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学』６、66-117頁

Oda,S.,C.T.Keally 1979　Japanese Paleolithic Cultural Chronology.

白石典之　1989　「細石刃石器群の出現過程」『季刊考古学』29、66-69 頁

―　1993　「北東アジアの細石刃石器群」『筑波大学先史学・考古学研究』４、1-29頁

曽根敏雄・米村衛・隅田まり　1991　「北海道、越川遺跡における約２万年前の細石刃様の石器」『第四紀研究』30-2、107-114 頁

田村隆他　1987　『研究紀要』11　千葉県文化財センター

筑波大学嶋木遺跡調査グループ編　1988　「北海道河東郡上士幌町嶋木遺跡の石器文化」『歴史人類』16、279-342 頁

萩原博文　1990「西北九州の黒曜石旧石器製作遺跡」『考古学ジャーナル』315、17-22 頁

九州で細石器文化が始まった頃

木崎康弘

1　細石器文化の起源の議論 — 研究略史から —

細石器文化は，いつ頃，日本列島のどこに登場したのか？

この命題は，その研究当初から，北海道の細石器を中心にして議論されてきた．芹沢長介氏が提唱した「日本発生説」（1960）は，1953年の矢出川遺跡調査から数えて7年後であった．ところが，こうした考えは，シベリアでの研究成果が明らかになるに従って，しだいに影を潜めていった．その嚆矢となったのが，加藤晋平氏の論文（1965）である．彼は，北海道の細石器文化が東アジアの細石器文化をその出自として成立していた，と指摘したのである．以後，日本列島の研究者は，加藤氏による数々の調査研究の中で，その事実を強く認識していった．

一方，1970年代に入ると，西日本の細石器文化の出自を問題にする研究者が現れた．林謙作氏（1970）や小林達雄氏（1970）で，その結論には共通する部分も少なくない．つまり，「矢出川・休場インダストリー」（林1970）や「システムB」（小林1970）は，日本列島を南下してきた細石器文化の影響の下で発生した，としたのである．おそらく，この見解には，当時一般に流布していた「ナイフ形石器の小型化」という観点が相当に反映していたと見なされるし，こうした考えは，西日本において未だに生きているようだ．

これに対して，九州地方に細石器文化が伝播し，その後，西日本一帯に広がったという考え方もある．安蒜政雄氏（1979）や木崎（1981）の考え方である．安蒜氏は，船野遺跡を評価し，木崎は，その考えを継承しつつ，中国下川遺跡（安・王・陳1978）との類似点に着目して，その一帯の地域からの伝播を考えた．

こうした状況をうけて，私は，本稿をとおして，1981年の観点をさらに深めてみたいと考えたのである．それは，九州ナイフ形石器文化と細石器文化との関係から導き出される結論であり，私が1988年に提出した論文（木崎1988）での主観点の一つでもある．

2　九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期の様相

姶良火山が大噴火をおこし，南九州一帯は入戸火砕流に覆われ，その火山灰は広く日本

列島を覆った．今から２万数千年も前のことである．この事件が契機となり，九州地方は，ナイフ形石器文化における新たな段階に入っていく．九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期（以下，第Ⅲ期とする）の成立である（木崎1988）．

さて，この第Ⅲ期は，その特徴から三つの段階に区分できる．初頭と呼ぶ比較的継続期間が短い段階（木崎1991，1992）と，前半そして後半という段階である．そこで，それぞれの段階を概観し，細石器文化直前の時期の様相を把握することにしたい．

①第Ⅲ期初頭の様相

対象となる遺跡は，大分県岩戸遺跡や宮崎県片田遺跡で，出土状態が信用できるならば，佐賀県船塚遺跡もその中に入りそうだ．このように遺跡数は少ないが，火山災害をまともに受けなかった地域では，多くの遺跡が見つかる可能性は高い．

ナイフ形石器の形態組成では，第２形態Ａ（いわゆる「九州型」）と，第３形態Ａ（台形石器），第４形態（部分加工）の組み合わせに，第１形態Ｂ（剝片尖頭器）や国府型ナイフ形石器が加わるのが特徴である．石器組成では，ナイフ形石器，掻器，削器などに加えて，三稜尖頭器が新たに加わっている．この時期は，第Ⅱ期の様相（ナイフ形石器の型式学的特徴）をそのまま継承しつつ，新たな形態のナイフ形石器が形態組成に加わったり，石器組成に三稜尖頭器が入り込むなど，新しい様相が始まる段階である．

現時点では，この時期の遺跡としては，中九州を中心にして見つかっているが，今後は北九州での遺跡把握に努める必要があるだろう．ただし，南九州は，層位的な調査例が多いわりにはこの時期の遺跡が見当たらず，当時，無人であった可能性が高そうだ．

②第Ⅲ期前半の様相

各地で遺跡が急激に増える段階である．北九州では長崎県堤西牟田遺跡，同県百花台遺跡，同県百花台東遺跡などがある．この時期の石器が出土している遺跡が多いわりには，参考となる遺跡は少ない．これは，この地域が層位的に恵まれていないことに起因している．中九州では，大分県岩戸遺跡，同県津留遺跡，同県百枝遺跡，熊本県大観峯遺跡，同県狸谷遺跡，同県大丸・藤ノ迫遺跡，同県天道ケ尾遺跡，同県村山・闇谷遺跡，同県白鳥平Ａ遺跡などがある．また，南九州では，鹿児島県小牧３Ａ遺跡，同県尾越・堀添遺跡，宮崎県堂地西遺跡，同県赤木遺跡，同県芳ケ迫遺跡などがあげられる．

ナイフ形石器の形態組成では，第１形態Ａ（基部加工），第１形態Ｂ・第２形態Ｂ（剝片尖頭器），第２形態Ｃ（切出状），第３形態Ａ～Ｃ（台形石器・台形様石器）によって構成されているが，遺跡によって組合せを違える場合がある．例えば，第１形態Ｂと第２

形態Bが主体となり他の形態が付属する様態と，第2形態Cが主体となって他の形態がこれに加わる様態である．さらに，百花台遺跡のように第3形態Aが形態組成の中心を占めて，これに第1形態Bや第2形態Bなどが加わるもの，また，国府型が加わる場合もある．石器組成では，ナイフ形石器，掻器，削器，彫器，磨石・敲石の他，三稜尖頭器もみられる．特に，三稜尖頭器では大きさの点でも，二面加工と三面加工，半三面加工などの形状的な点でも，多様性がある．これは，三稜尖頭器が当時の中心的な道具であったことの証拠でもあろう．また，三稜尖頭器が石器組成の中心になる遺跡，ナイフ形石器が中心となる遺跡というように，遺跡間に大きな石器装備の違いもみられるようになる．

③第Ⅲ期後半の様相

北九州には佐賀県老松山遺跡があるが，長崎県日ノ岳遺跡のように，この時期の特徴的な遺物を出す遺跡も多くみられる．ただし，この地域は，層位的に恵まれている遺跡が少なく，見かけよりは使える遺跡は少ない．中九州では，大分県岩戸遺跡，同県片島道下遺跡，同県製糸工場前遺跡，同県今峠遺跡，熊本県下城遺跡，同県鼓ケ峰遺跡，同県血気ケ峰遺跡がある．南九州では，鹿児島県成岡遺跡，同県木場A遺跡，同県山崎B遺跡，同県奥木場遺跡，同県西丸尾遺跡，宮崎県船野遺跡があたる．

ナイフ形石器では，剝片尖頭器（第1形態B・第2形態B）が形態組成の中から姿を消して，第1形態C（「今峠型」）や第2形態A（剝片尖頭器に近い特徴を持つもの）に置き代わっている点が特徴である．そして，このナイフ形石器と共に形態組成をなすものが，第1形態A（基部加工），第2形態C（切出状），第3形態C（所謂「枝去木型台形様石器」）などである．また，一部であるが国府型ナイフ形石器を出す遺跡（鼓ケ峯遺跡）もある．石器組成では，ナイフ形石器，三稜尖頭器，掻器，削器などの他，南九州を中心にして槍先形尖頭器や細石器の共伴例が目立っている．

三稜尖頭器には，下城遺跡や老松山遺跡で出土しているような槍先形尖頭器化した三面加工もあるし，これと同じ頃，南九州には西丸尾遺跡のように槍先形尖頭器も存在する．全国的にも最古に位置づけられる槍先形尖頭器として興味深い．一方，南九州での細石器の共伴例も興味深い．ただし，この共伴例には，懐疑的な意見（徳永1991）や慎重意見（富田1991）が多くみられる．でも，南九州では，さらに新しいナイフ形石器文化の遺跡は無いので，第Ⅲ期後半の次の時期にはすでに細石器文化に変わっていた可能性が相当に高い．そうならば，第Ⅲ期後半をナイフ形石器文化と細石器文化との過渡的時期としてとらえて，その共伴例を積極的に評価することも，あながち不自然なことではなさそうだ．

3　九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期後半の年代とその位置づけ

九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期後半は，その様相からみて，南九州にあっては細石器文化との過渡的時期と捉えられそうだ．それは前項でも述べておいたが，南九州では，この段階の遺跡で細石器とナイフ形石器が伴う状態で検出されている点，また，この段階よりも新しい時期のナイフ形石器文化の遺跡がみられない点，以上二点からそう判断できる．そしてまた，西丸尾遺跡や下城遺跡，老松山遺跡のように，槍先形尖頭器や偏平化した三稜尖頭器がみられる点も併せて時期的な特徴として認識できるだろう．そこで問題となるのは，その年代であろうし，日本列島の先土器時代の中での位置付けであろうか．

そうした中，鹿児島県西丸尾遺跡が調査され，第Ⅲ期後半の石器文化と火山灰との関係から，そのことを推測する事実が明らかとなった．

西丸尾遺跡では，薩摩火山灰（BP11,000年）の下から三つの石器文化がみつかった．一つ目は，縄文時代草創期の文化（Ⅶａ層），二つ目は，細石器文化（Ⅶｂ層），そして三つ目は，ナイフ形石器文化（Ⅷ層中位～下位）である．この中で，ナイフ形石器文化と，その包含層の直上でみつかった桜島起源の火山灰との関係は，注目されるものである．分析者によると，その火山灰は，桜島起源のＰ15ないしはＰ17に対比できるという．しかもその二つの火山灰の噴出時期にはそれほどの年代差がなく，いずれも放射性炭素の年代測定ではBP17,000～18,000の年代がもとめられる，というのである（成尾1992）．その評価の仕方によっては，西丸尾遺跡でみつかったナイフ形石器文化の位置づけと同時に，九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期後半の位置づけを知る上でも重要な基準になりそうだ．

ところで，この西丸尾遺跡のナイフ形石器は，第１形態Ａ（基部加工），第１形態Ｃ（今峠型），第２形態Ａ（剥片尖頭器に近い特徴を持つもの），第２形態Ｃ（切出状），第３形態Ａ（台形石器）による形態組成をとっている．この形態組成の特徴は，九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期後半（木崎1989）のそれによく合致している．しかも，こうした様相は，近畿・瀬戸内を視野に入れて考えても，関東地方でいうⅣ層下部段階に近い内容であるし，^{14}Ｃ年代測定値の結果とも矛盾しない．ここに，西丸尾遺跡で得られた石器文化の内容と科学的な年代測定の結果によって，日本列島のナイフ形石器文化の中に，九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期後半を位置付けることが可能となろう．

4　九州で細石器文化が始まった頃

九州で細石器文化が始まった頃，それは，九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期後半であった．

九州の他の地域では，三稜尖頭器が残りつつも，一部では槍先形尖頭器化した三稜尖頭器も作られていたし，南九州ではすでに槍先形尖頭器が作られてもいた（南九州では，第Ⅲ期前半からみられるが）．当時，九州以外の地域は，岡山県宮田山遺跡や南関東Ⅳ層下部で代表されるようなナイフ形石器文化の最盛期であった．そうした中で，南九州に細石器文化が登場したのである．しかも，石器文化の内容を見るかぎり，この文化はナイフ形石器文化から発生したものとは思われず，やはり大陸側にその原郷土を求めなければならない．仮にそうならば，湧別技法が主流の朝鮮半島からの伝播ではなく，かつて私が触れた「下川遺跡を含む中国に分布する細石器文化での石核構成の一部が総体として九州へ搬入されたという技術的系譜」（木崎1983）や、小畑弘己氏のいう「黄河・沂河グループ」との関係（小畑1989）をもう一度考え直さなければならないだろう．

今から18,000年前，ヴュルム氷期の極寒期，南九州に細石器文化が登場した．それは，現在よりははるかに狭い東中国海を直接渡ってきた人々によってもたらされた文化だった．当然のことながら，彼らは，海を渡る手段を持っていただろうし，そうした技術を駆使して生業域を河川はもとより海域にまで広げていたに違いない．しかも，そうしたことは，その前の段階，すなわち九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期初頭や前半においても窺うことができる．例えば，中国馬陵山の台形石器（加藤1988），三稜尖頭器と朝鮮半島の船底形石器との関係，そして剝片尖頭器（松藤1987）などは，大陸と九州との関連を窺わせるとても良い資料である．このことは，今後の検討を経なければ何も言えないとしても，私は，細石器文化の登場が決してアクシデンタルな出来事によってもたらされたのではなく，ＡＴ以後，頻繁に繰り返されていた往来の一結果にすぎなかったことを強く意識したい．そして，その背景には九州ナイフ形石器文化を蹂躙した姶良火山の大噴火もまた大きく係わっていたとも評価されようか．

九州ナイフ形石器文化は，一部の地域を除けば，第Ⅲ期後半をもって終わった（木崎1988）．当時，近畿・瀬戸内の状況はまだまだはっきりとはしていないが，中部・関東では依然としてナイフ形石器文化（Ⅳ層中部段階）の段階に止まっていた頃である．以後しばらく，九州では細石器文化が続き，その後細石器文化の波はしだいに東へと広がっていった．その結果，西方の細石器文化は，北方系のそれと合流し，日本列島全域が細石器文化一色に塗りつぶされてしまうわけである．その^{14}Ｃ年代は，静岡県休場遺跡の例をとれば，BP14,000年前後である．土器出現は，もうまじかに迫っている．

付記：以上，九州での細石器文化出現を九州ナイフ形石器文化の終焉という観点から捉えてみた．覚書的な文章になってしまったが，その主なる論点は，私が1981年の論文以来，機会ある論文や研究会の席上で主張してきたことであり，今後もこの論点を中心にして，剥片剥離技術の推移も含めて，より深く検討を進めていきたいと思う．

引用参考文献

麻生優　1965　「細石器文化」『日本の考古学』Ⅰ　先土器時代

安蒜政雄　1979　「日本の細石核」　駿台史学47

王建・王向前・陳哲英　1978　「下川文化 — 山西下川遺跡調査報告」　考古学報3

小畑弘己　1989　「中国大陸から日本列島へ」　季刊考古学29

加藤晋平　1965　「北海道の石刃 — とくに細石刃技術について」　歴史教育13－3

加藤晋平　1988　『日本人はどこから来たか — 東アジアの旧石器文化 — 』

木崎康弘　1981　「九州地方の細石核」　熊本史学55・56合併号

木崎康弘　1983　「東日本細石核技術展開についての一理解」　旧石器考古学26

木崎康弘　1988　「九州ナイフ形石器文化の研究 — その編年と展開」　旧石器考古学37

木崎康弘　1989　「姶良Tn火山灰下位の九州ナイフ形石器文化」　九州旧石器　創刊号

木崎康弘　1991　「九州地方の様相」　石器文化研究3

木崎康弘　1992　「九州からみた白石編年・佐藤編年」　石器文化研究4

小林達雄　1970　「日本列島に於ける細石刃インダストリー」　物質文化16

芹沢長介　1960　「細石器問題の進展（その4）」　貝塚96

徳永貞紹　1991　「九州の礫群等に関する覚書」　九州旧石器2

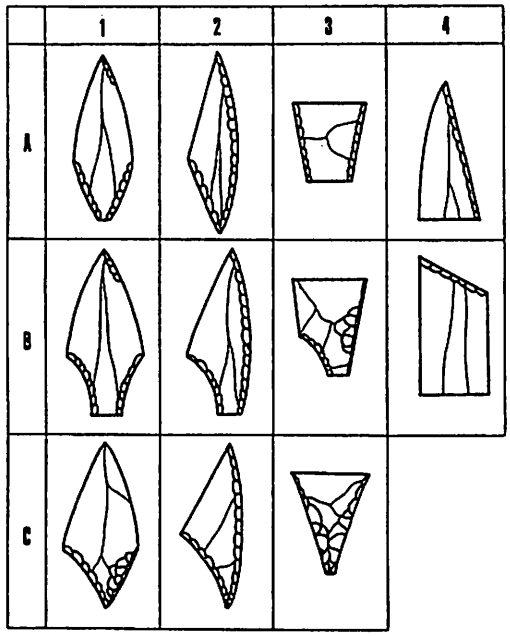
富田逸郎　1991　「南九州における「ナイフ形石器と細石刃核の共伴例」について」　九州旧石器2

成尾英仁　1992　「西丸尾遺跡の地質と火山噴出物」『西丸尾遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告(64)

林謙作氏　1970　「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置づけ（上）（下）」　考古学研究16－4，17－2

松藤和人　1987　「海を渡った旧石器“剥片尖頭器”」　花園史学8

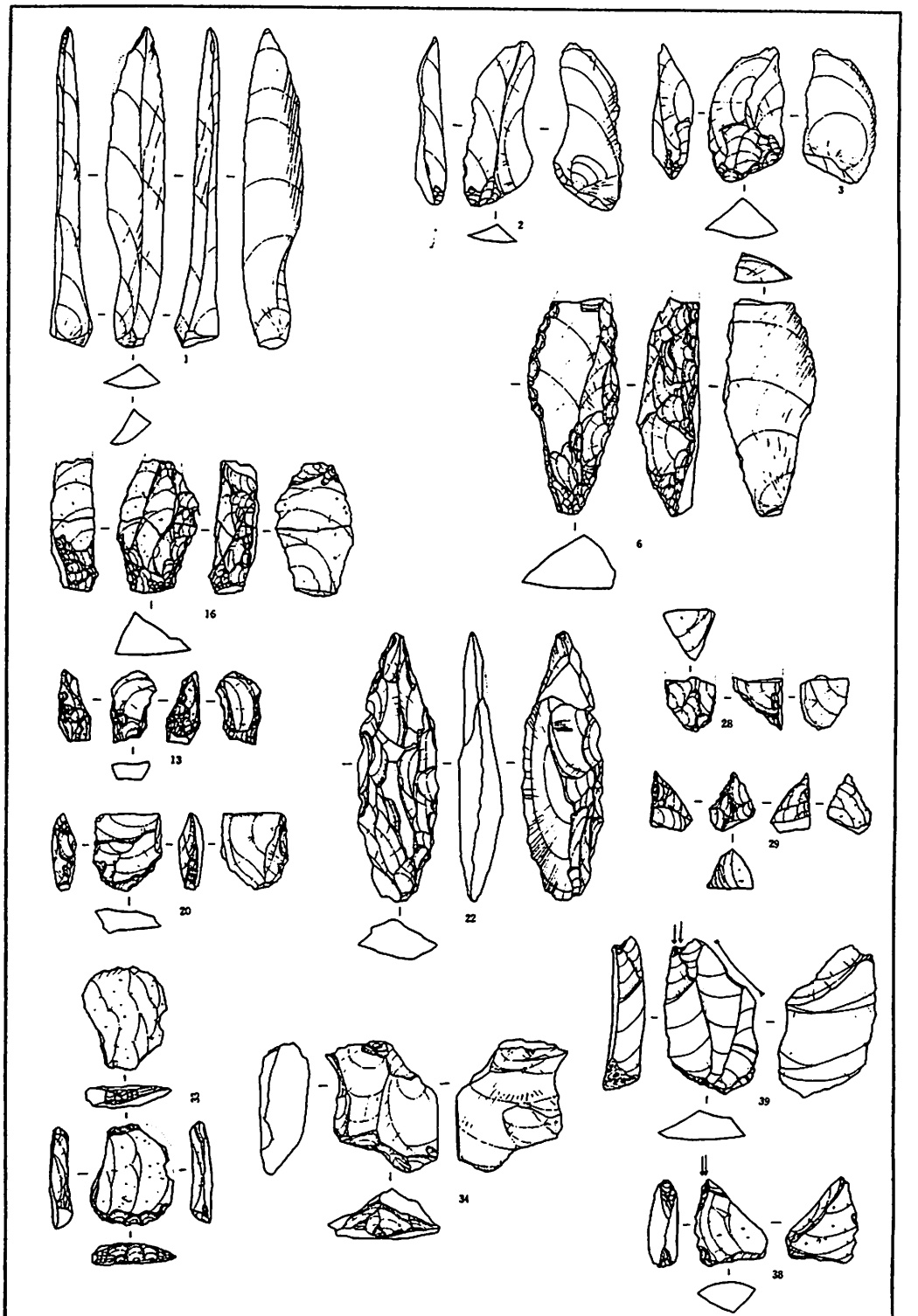
なお，紙面の都合上，文化財調査報告書については参考文献から省かせていただいた．ご了承ねがいたい．



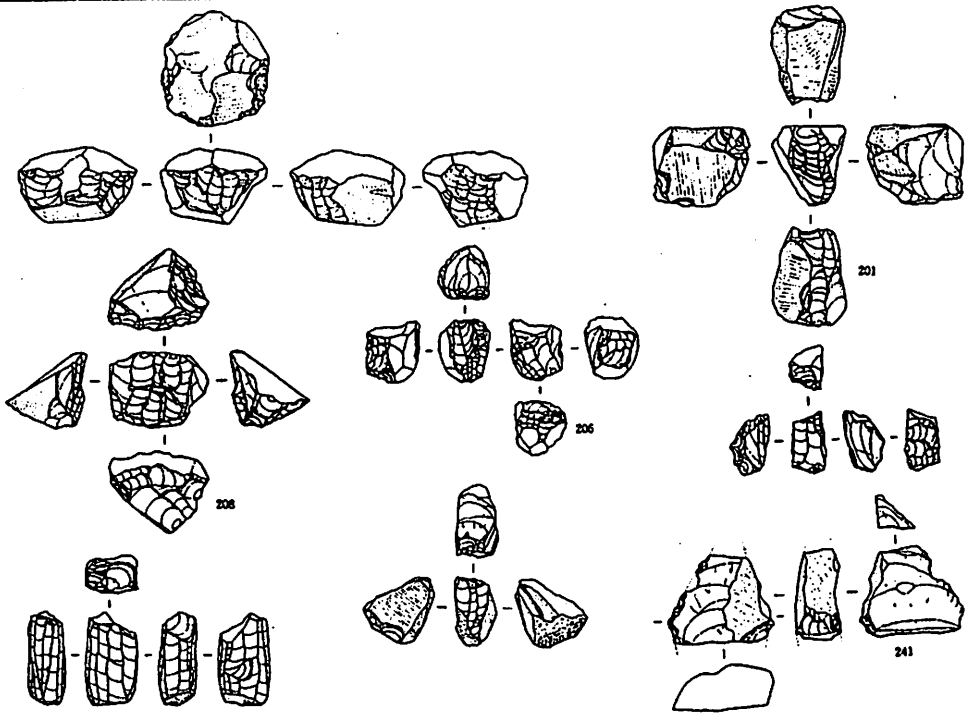
ナイフ形石器の形態

文化	期		中九州西部	中九州東部	南九州西部	南九州東部	北九州西部	北九州東部
ナイフ形石器文化	Ⅰ		曲野	百枝	〈上場Ⅵ〉	—	〈日の岳〉	諸岡A
	Ⅱ		狸谷Ⅰ	駒方古屋	上場Ⅵ	—	堤西牟田Ⅰ	諸岡館跡B
	Ⅲ（Ⅰ）	初頭	—	岩戸D	—	片田	船塚	—
		前半	狸谷Ⅱ	岩戸Ⅰ	小牧3A	赤木Vb	百花台Ⅳ	—
		後半	下城1	岩戸6上	成岡・西丸尾	船野	老松山	—
細石器文化	Ⅳ（Ⅱ）		—	上下田	加栗山	赤木Va	堤西牟田Ⅳ 福井4	〈峠山〉
	（Ⅲ）		〈伊野〉	平草	石峰	—	百花台Ⅲ	〈門田〉

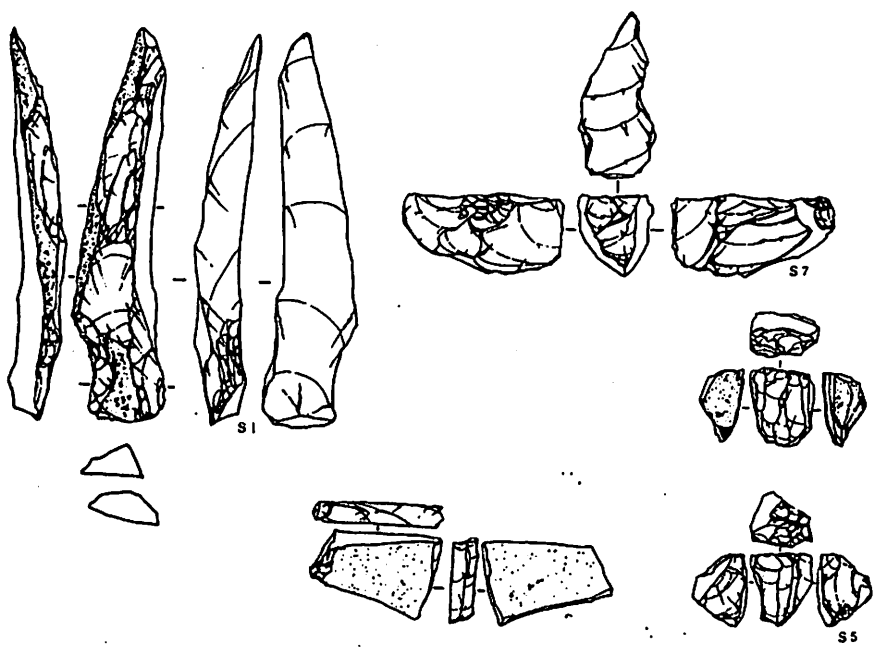
九州先土器時代の編年



鹿児島県西丸尾遺跡第Ⅷ層出土の石器



鹿児島県西丸尾遺跡第Ⅶb層出土の石器



鹿児島県成岡遺跡出土の石器

0 (1:2) 5cm

細石器の出現

－相模野の検証－

砂田　佳弘

はじめに

自生か渡来か、極めてオーソドックスな議論である。全ての文化事象がそうであるように、最古とか一番とか一張羅とか一等最初といった起源論は、常にヒトの心をトキメかせたりもするのである。

相模野最古の細石器がＬ１Ｈ上部において検出され始め、10余年が経過した。しかし、同層序で細石核・細石刃が集中地点として捉えられた遺跡の検出は僅かに４遺跡である。僅かという表現が的を得ているか否かは別にしても、層序別に他の指標石器となりうべき遺跡数と比較しても相模野においては10分の１近い遺跡数である。

さらに、Ｌ１Ｈ上部の細石器遺跡を吟味すれば、細石器出現時の遺跡は２遺跡である。藤沢市代官山遺跡（1983年調査）と綾瀬市吉岡遺跡群Ｂ区であり、後者は本格調査の真っ只中（1993年８月末）でもあり、両遺跡の調査に筆者が関わることとなったのも何とも感慨深い。これはもう、自生で行くしかないのである。冥府魔道の世界に踏込むようである。

では、どのような肉付けが必要であろうか。

今回は相模野Ｌ１Ｈ層という限定した層序の中で、器種・石材組成、遺構、分布等から該期、先土器時代終末発端期の目まぐるしい変化の過程を浮き彫りにし、細石器出現背景を考察する一助になればと考える次第である。

なお、本稿を草するにあたって、原稿締め切り日を守らない筆者を見捨てないで頂いた編者の堤氏には衷心敬意を表するものである。また、職場の白石浩之・鈴木次郎・御堂島正・武田賢一・畠中俊明・三瓶裕司・加藤勝仁・大塚健一・比留川あゆみの皆様には、神奈川県立埋蔵文化財センター旧石器（先土器・岩宿）研究プロジェクトチームで啓発されるところが大である。また、本報告未完の柏ケ谷長ヲサ遺跡については、中村喜代重・諏訪間順両氏に懇切丁寧なお教えを頂いた。そして、石器文化研究会の皆様には常日頃御指導頂いている。まずは記して、感謝申し上げる次第です。

1　細石器の自生

細石器の発生過程を世界史的に看ると、「石刃技法による石刃が次第に小型化」、「ルヴァロワ技法による剥片が小型化」「竜骨状石器から派生」（藤本 1982 pp. 1）といった3者が観察されるという。日本の場合、総体として第1番目が最大要因であろうし、「技術史でみると、細石刃石器群の出現は、後期旧石器時代の初期から一貫して進行してきた「石刃の小型化」動向の必然的帰結である。しかも、出現の当初からクサビ形細石刃石核を製作上の特徴としている」（織笠・木村 1992 pp. 30）のである。

細石器の大前提は組み合わせ道具であるという点である。この前提は10点前後の細石刃が植刃器に填め込まれて使用されたという世界史的考古学事象に立脚している。「石器製作に於いて類似な技術が随處に起り得ると仮定しても、日本の一般打製石器に於いて、之と同種の技術によるものが甚だ不顕著であった事実に鑑みて、将来北海道・樺太方面に斯かる技術に依る細石器的石器の探求が重要となる譯である」（八幡 1935 pp. 46）。「類似の技術が随處に起り得る」ことは、「細石器の技術というものは、世界のあるひとつの地域において出現して、それが各地にひろがっていったものではなくて、むしろ、世界各地でおなじような時期に、共通の基盤からうみだされるに至ったと考えたほうがよい」（芹沢 1960 pp. 78）に端的であり、「踏み台の原理」（小林 1980 pp. 51）で、もう一息で次段階に進むことのできる個別文化階梯が散在するのである。

また、細石刃と植刃器の関係については、「技術革新による間接打撃法の出現と、より必要とされるようになった植刃器というお互いに不可分の2つの背景があったと考えられる」（加藤 1992 pp. 17）や、「細石刃の出現がやがて狩猟具の技術改良を招き、植刃器の出現に結実したと考えられる」（加藤 1993 pp. 7）という様に石器とシャフトの出現時期に若干のニュアンスの相違がある。前者は細石刃出現の背景を、後者は細石刃普及の背景を物語っていよう。

【組み合わせ道具発生説】

汎世界的な細石刃出現の背景の中で、日本の場合の自生の可能性も植刃器を介在させた組み合わせ道具の発生をその要因とする場合がある。「日本列島には、細刃器に代表される細石器とともに、ナイフ形石器にかたちをうつした特徴的な側刃器が存在した可能性が強い」（安蒜 1984 pp. 152）や、「ナイフ形石器そのものを組合わせ道具として使用した場合があったとする考えが実証されるならば、日本列島独自で細石刃の生れた可能性も皆無ではなくなるだろう」（稲田 1986 pp. 83）といった所論である。

【共伴出土根拠説】

「関東・中部地方から九州の西日本に広く拡がって発見される野岳・休場型細石刃核を有する石器文化は、クサビ形細石刃核を有する石器文化と無関係に成立したものであろう。これらは、ナイフ形石器や槍先形尖頭器がまま伴出することから、先行するナイフ形石器文化の中から発展してきた可能性が大きいものである」（加藤 1984 pp. 48）。

相模野では細石器の出現以降のＬ１Ｈ層で、細石器とナイフ形石器・槍先形尖頭器との共伴例は、月見野ⅣＡ、槍先形尖頭器との共伴例が長堀南、代官山の３遺跡にとどまっており、重複文化層と遺物分布範囲との関係や母岩別資料の再検討などを考慮に入れると、同一遺跡内での共伴例に対する積極的な評価は与えにくくなっているのが現状であろう。

【製作技術根拠説】

細石刃の製作工程は、武蔵野（武蔵台）Ｘｂ層以降の剥片剥離工程においてそのすべての工程が包括されており、「細石刃剥離に先立つ、打面の設定や側面調整・打面再生等の石核調整は総て細石刃発生以前の剥片剥離工程において解決され、そのまま適用される」（砂田 1988 pp. 59）のである。石器の製作という最も基本的な視点からの分析であり、先に述べた細石器の発生過程の傍証ともなろう。

また、「『原細石刃文化』の縦長剥片がトゥールの素材となっていないことも考慮すれば、『原細石刃文化』段階で、植刃器製作の前提は整っており、連続的に剥離された縦長剥片を植刃した細石刃植刃器の祖形となるものが存在していた可能性がある。Ⅰ期に入り、細石刃技術の発生とともに、石刃技術を含めた、こうした縦長剥片を連続的に剥離する技術が姿を消すこともこのことを傍証しているのではないだろうか」（加藤 1992 pp. 16）といった、ナイフ形石器を組み合わせ道具とするのではなく、決定器種の素材とはならない縦長剥片の存在と、細石器の発生以降の縦長剥片剥離工程の消滅から植刃器の発生と絡めながら論じている。

【地域変化根拠説】

「細石刃石器群は、一か所の起源地から周辺地域へ同様の形で伝播したのではなく、伝播の経路が一方向のみでないこと、各地域ごとに受容の在り方が同様でないこと、さらに、各地域ごとに独自の変化の過程もつ」（白石 1993 pp. 23）

また、自生説を採らないものの、下鶴間長堀遺跡の剥片素材の細石核形態の観察から作業面・打面の設定の仕方、石核調整の方法等「打面の調整や再生は確認できない。この種の細石刃核は素材の用い方や作業面設定の方法が前段階の資料とも脈絡を有する点から、

在地の系統として理解できるのかも知れない」（栗島1993 pp. 7）としている。こうした細石器に係わる各地域別発展論は「西北九州の削器、円錐形石核という不明な手法ではなく、野岳・休場型細石核の製作手法からみた際の細石刃技法、石刃技法、石器組成の一貫した単調さ、茂呂、九州型、小形などと呼ばれる折断技法を有するナイフ形石器の分布領域がそのまま野岳・休場細石刃文化の領域となっていることなどが、ナイフ形石器文化と細石刃文化との間のランドブリッジとなっており、両文化を結ぶ強い紐帯を考えないわけにはゆかない」（鈴木 1971 pp. 189）との所論に看ることができる。それは台形様石器を直剪鏃のイメージから細石器的様相としてとらえ、「西南日本を舞台にした先土器文化に、その初期から細石器的傾向－つまり中石器的様相－をもっていた」（小田 1969 pp. 61）とか、「西日本には、異質の、おそらく自生の細石刃技法が分布している」（林 1970 pp. 51）といった所論を受けるかのようである。同じ西南日本における細石器については「第Ⅰ期の細石器文化は西南日本で比較的均質な文化を形成していたようである。しかも、本石器文化に特徴的な船野型や矢出川型細石核は現段階では大陸側との直接の対比はできないようである。よって、西南日本のナイフ形石器文化にその起源が求められるかも知れない」（萩原 1989 pp. 23）や、「「野岳・休場型」は、組合せ石器として石器群が移行していく過程で、最も合理的な石器として細石刃に到達した際に日本列島内で出現したものと考えるべきではないだろうか」（松浦 1993 pp. 90）といったように、西日本での細石器自生説が繰り返し述べられている。

2　細石器の渡来

列島への細石器文化の渡来については数多の所論が提出されている。その基本的渡来感は「ほとんど同じころ日本列島の両端に流入した細石器をもった文化は、相前後して関東平野にも姿をみせている」「九州から東進したものは、中部地方以西の各地にかなり定着し、関東平野にも広く散開した」「伝統的なナイフ形石器のなかに、いきなりとびこんできた、非伝統的・外来的な細石器の存在はなにを意味するだろうか」（戸沢 1970 pp. 20）に収束する。

【北海道・九州渡来説】

その後も「九州地方で、そしておそらく北海道地方においても、細石器文化の時代に突入していたころ、本州地方を中心とする地域では、ナイフ形石器の時代であったといえそうである。やがて、北海道地方と九州地方からそれぞれ南下、北上し伝播する細石器文化

本州地方中央部に達するまでに時間差をもち、そこには最後のナイフ形石器や槍先形尖頭器が、いわば擂り鉢状に残された」（安蒜 1979 pp. 179）、「細刃器の製作はまず北海道と九州地方に伝播し、両地方で開始された」（安蒜 1984 pp. 138）、「東北アジア一帯に広大な文化圏をもった細石器は、南北の二手に分れて、ほとんど同時に九州地区と北海道地区とに姿をあらわすが、やがて中央地区と東北地区との間という回廊上での出会いをむかえるわけである」（安蒜 1986 pp. 52）、「大陸からの細石器化の波は、北海道地方の湧別系細石器と九州地方の矢出川系細石器との二手に分かれて伝播した。湧別系細石器と矢出川系細石器は、それまでの文化圏を南と北の双方から飲み込むようにして、関東・中部地方を二分することとなった」（安蒜 1992 pp. 29）のであるが、細石器の故地は「北アジア」であり「大陸」といった莫とした彼の地である。それは、「南北に細長い日本列島では、双方の窓から大陸の細石刃文化（細石器文化）が流入」（橋本 1989 pp. 12）し、「東日本の楔形細石核をともなう細石刃文化は北アジアから拡散してきたものと推定され、西日本の楔形細石核をともなう細石刃文化は、華北以南との関係が求められそうである」（加藤 1986 pp. 58）にも共通し、九州地方へは、やや具体的に、「下川遺跡を含む中国に分布する細石器文化での石核構成の一部が総体として九州へ搬入されたという技術的系譜を考えたい」「畦原型細石核と船野型細石核の関連の中で加栗山型細石核を成立させるという展開を示していくことになる。そして、この段階に初めて細石核の技術は、瀬戸内・東海・関東地方へとひろがる」（木崎 1983 pp. 69）といった中国渡来説である。

さらに、近年の血液遺伝子の研究によるバイカル湖畔に起源する「現日本人の渡来の時期は二万年前頃から始まった」（松本 1992 pp. 54）とする説も手伝って、「荒屋型彫器を含む細石刃石器群は、（中略）バイカル湖では、すでに二万年前以前に現われるが、より南方、より東方へ進むにつれて、例えば日本列島に達したのは一万四千年前であり、ベーリング海峡を渡り、アラスカ半島やアリューシャン列島に到達したのは一万年前以降のことである」（加藤晋 1992 pp. 67）と論ぜられる。

北海道への細石器の渡来については大陸に接するという点で九州と双璧をなしているが、列島内への細石器の波及の原因地も北海道である旨が論ぜられてきた。「日本列島に於ける細石刃インダストリー普及の震源地は北海道を措いてない」（小林 1970 pp. 6）に代表され、「多数の細石刃技術のあるものは大陸から渡来したことが考えられ、またあるものは北海道で誕生した可能性がある。そして、あるものは本州へ渡って彼の地で最初の細石刃文化の灯をともした可能性があり、またあるものは、北海道から出ることなく終始した

ようである」（鶴丸 1985 pp. 18）、同様な論点で「恐らく大陸より将来された細石器石器群は、北海道で在地の伝統的な社会・生態適応的な改革を受けて北海道固有の文化として育まれ、その後東北地方から南へ伝播していった可能性が高い」（佐藤 1992b pp. 81）と述べられる。

何れにおいても日本の細石器における伝播系統論は「二系列の文化の伝播の経路を、細石刃剥離技術の比較を基礎とする系統論によって跡付けながら、両者の年代的関係を明らかにしていくことが、依然として大きな課題となっている」（谷口 1991 pp. 22）状態が常に継続しているのである。

3　細石器の空間

相模野における細石器出現前夜の槍先形尖頭器はかなりのバラエティーを所持している。「月見野ⅣA遺跡L 1 H上にみるように、中形・木葉形、細身柳葉形の二つの両面調整のものと、小形・周辺調整のものの組み合わせに象徴される。いずれも形態的に規格性の高いものであり、特に小形・周辺調整のものなどは、Head Piece のようなものとして Fore Shaft などの存在を考えなければならないものではなかろうか。各形態ごとに、その機能領域は完全に分化しきっている」（鈴木・矢島 1979 pp. 18）と評価される。そうした状況下での細石器の出現はどのように理解されているのであろうか。

【槍先形尖頭器と細石器の共存説】

相模野における細石器の出現以降も槍先形尖頭器が継続して使用される所論である。残存した槍先形尖頭器はやがて大型の神子柴型槍先形尖頭器へと推移していくのである。機能面からは、「槍先形尖頭器の利点は、やがて細石器の応用による大形槍先形尖頭器を生む原動力」（中村 1988 pp. 25）ともなり、分布論上では「遺跡の性格・機能、あるいは生活のサイクルと関係したあらわれ方の差」（鈴木・矢島 1988 pp. 180）として解釈される。「相模野L 1 H上部の層位において新たに細石刃が登場して通常の狩猟具が槍先形尖頭器から細石刃に交替した後でも槍先形尖頭器は完全になくなったわけではなく、数量を減じながらもある部分では従来から存在した槍先形尖頭器を保持して用いていた」（鈴木 1989a pp. 292）のであり、「相模野Ⅴ期後半では、（中略）槍先形尖頭器と細石刃の共伴関係は、一石器群の石器組成の中で多量に共伴している事例は少なく、槍先形尖頭器石器群と細石器石器群が分布を異にしたり、あるいは同一層位の中で遺跡単位で両石器群が別々に残されているのである。しかもこの段階の槍先形尖頭器石器群は、遺跡数は比較的多

いものの出土石器が少ない小規模なものが多いという特徴がみられる。このことは、細石刃の登場に伴って通常の狩猟具が槍先形尖頭器から細石刃に交替した後でも、ある部分では従来の槍先形尖頭器を保持して用いていたことを示しているものと考えられる。そして、この段階においても槍先形尖頭器の改良が行なわれていたことが伺われ、細石刃の衰退後に再び隆盛する槍先形尖頭器石器群に特徴的にみられる大形の槍先形尖頭器や柳葉形の槍先形尖頭器は、すでにこの段階に出現して」おり、石器組成上、礫器を共通する点も指適（鈴木 1989b pp.50）されている。しかし、細石器の出現と普及が槍先形尖頭器の使用頻度を低下させたことは確かであろうし、遺跡数も減少する。それは、「細石器が波及し、槍先形尖頭器とナイフ形石器は衰退した」（安蒜 1992 pp.42）のであり、「槍先形尖頭器とナイフ形石器という二種類の狩猟具の機能と用途が、組み合わせ道具である細石器のもとに吸収され、二者を使い分けるようにして繰り返されてきた移動の頻度が低下した」（安蒜 1992 pp.42）事を論拠ともしている。

【槍先形尖頭器と細石器の断続説】

対して、細石器の出現はそれまでの指標石器をことごとく駆逐したという所論である。

「相模野台地においては、細石刃文化と、それ以前の槍先形尖頭器文化やナイフ形石器文化との文化様相の連続性はまったく認められないといってよい。それ以前の石器文化に細石刃という利器を生み出しうる素地は見いだし得ないのである。むしろ、細石刃文化の特色は、いわば唐突に出現するところにこそ帰されるものであろう。そのような意味においても、相模野台地の細石刃文化は、それ以前の石器文化からいわば発展的に成立したのではなく、何処かからの波及によって成立したものであることが理解される。細石刃という新しい利器は、それ以前の伝統的な石器を保持する人々の間に急速に受容されたものと考えられる」（堤 1987 pp.38）に極めて端的に表現されている。「第Ⅲ期（消滅期）」として「Ｌ１Ｈ層上部からＬ１Ｓ層下部にかけての層位から検出される石器群で」「層位的段階の第５段階に相当し、急激に進出してきたと考えられる細石刃石器群によって、尖頭器が壊滅的な状況を呈する時期である」（伊藤 1988 pp.100）、「両石器群が混在するＬ１Ｈ上部堆積時に細石刃石器群が他地域から派生し、そして相模野台地で受容された石器群であった」（伊藤 1989 pp.295）、「もし仮に、ナイフ形石器石器群の関係のように共伴が捉えられるものならば、多くの細石刃石器群に尖頭器が組成されてもよいはずであり、技術基盤の相違によって同時期に別の石器群を形成するようなあり方が生ずることは、極めて可能性の低い状況と考えざるを得ない」（伊藤 1989 pp.297）、さらに、「尖頭器

石器群を駆逐しつつ相模野台地に受容された石器群」「発達期の尖頭器石器群がＬ１Ｈという限定された層位から集中して検出されるあり方からも、比較的短期間の内に細石刃石器群に取って代わられた」（伊藤 1989 pp. 298）となる。「尖頭器がごく臨機的に用いられること（上草柳１Ｉ）を除けば、相模野細石刃文化の段階１・２の石器装備において尖頭器は基本的には組列しないものと解され」（堤 1991 pp. 23）てくるのである。

【槍先形尖頭器の細石器への段階的変遷説】

「槍先形尖頭器Ａ・Ｂ群と細石刃石器群とは、ブロックの分布形と石器組成が対照的な様相を示しているが、単に製作された石器の差の反映だけではなく、活動パターンにも差のあったことが想定される。細石刃の流入が単に道具の変化にとどまらず、生活形態をも変えた可能性のあることは注目される。従って、細石刃石器群は槍先形尖頭器Ａ・Ｂ群から漸移的に変化した同一系統の石器群ではない」（島立 1993 pp. 73）、「槍先形尖頭器Ｂ群はＢ１上部からＢ０下部にかけて認められるが、槍先形尖頭器の若干の形態変化以外には石器群の内容をほとんど変化させていないようにみうけられる。本石器群の消滅とほぼ同時に野岳・休場型石核を指標とする細石刃石器群が出現しており、両者の関係が想定される。すなわち、使用石材の面では、両者ともに伊豆、箱根系の黒曜石を多用すること、細石刃石器群の中に幅広不定型の縦長剥片を生産する技術をもつ例があり、同時に、槍先形尖頭器Ｂ群はＢ０下部段階で細石刃石器群に転換した」（島立 同 pp. 74）という共存説と断続説の折衷的所論でもある。ただ、相模野Ｌ１Ｈ上部の出現期細石器の大半が伊豆・箱根産の黒曜石であり、Ｂ０層段階に至るや、神津島産黒曜石が殆どである。しかも、細石刃製作工程も異なる。Ｂ０下部段階と一括して、槍先形尖頭器Ｂ群の消滅～細石刃石器群の出現～細石刃石器群に転換といった図式は一筋縄では律しきれないと思われる。

4　細石器の時間（表１）

相模野では層序区分の明瞭さと遺跡数の豊富さから、細石器編年案も数多く提示されている。ここでは、ここ数年来の編年案を槍先形尖頭器編年、諏訪間編年と併記した。全体には極端な差異が生まれ出ずるはずもないが、層序・細石器・地域区分などにより細部な点では微妙に異なってくる。ここでは細石器出現段階の編年についての覚えとする。

「関東地方出土細石器文化編年試案（1987年11月）」において、「第Ｉ期第Ⅱ地域、第Ⅲ地域」をそれぞれ「小山高町遺跡、代官山遺跡」（西井 1988 pp. 17）を並置し、「相模野細石器文化最古の一群（L1II上部出土）」（織笠 1992 pp. 76）とし、「第１段階－Ｌ１

H上部～B０下部」（織笠 同 pp.87）としている。さらに、「第１段階はおそらく泉福寺洞穴10層、すなわち豆粒文土器文化層の細石核にほぼそのまま対応すると考えることが可能である」（織笠 同 pp.89）との結論に達している。ラージヒルタイプの傾斜編年案であろうか。Ｌ１Ｈ層縄文時代説である。同様な編年案は、「上野遺跡第１地点第２文化層の細石器は、西北九州を中心に卓越した西海技法の細石刃核に最も近いものと考えられる」（白石 1988 pp.40）にも垣間見られる。「かくて西南日本において、最も古期のホロカ技法代官山型細石核は九州地方の福井洞穴７層や大分県船野遺跡に対応する可能性がある」（白石 1992 pp.52）とする。恩原等での湧別技法による細石核の検出は、「西海技法福井型と東日本に凌駕した湧別技法札骨型の新旧関係は恩原遺跡や池の原遺跡などで共伴関係にある。このことは九州地方で発達した西海技法の細石核がいち早く東遷し、瀬戸内地方、中部地方そして関東地方以北に影響を及ぼしたものと思われる」（白石 同 pp.52）に対して、「中国地方においては湧別技法が南下した時点でもなお矢出川型細石核の製作が続いていたものといえよう」（稲田・絹川・光石 1993 pp.93）では、西海技法と湧別技法の対峙であり、「九州へ達した湧別技法が福井技法を生み出す母体となった可能性もでてきたわけである」（稲田 1988 pp.167）とする論拠になっている。

細石核や細石刃の形態と大きさから「関東地方の細石器石器群は大別して３つのグループがある」「①立方または角柱、厚手の板状の素材から製作される稜柱系細石核（野岳・休場型）の一群（グループ１）」「主に黒曜石から成る」「グループ１は、細石核及び細石刃の形態と大きさにより小型（１ａ）とやや大型（１ｂ）のサブ・グループに細分される。前者は相対的に多いが後者は比較的少ないという傾向がある。神奈川県代官山遺跡や上和田城山遺跡等の層位的出土例により、１ａ→１ｂという時間的関係が跡付けられる。従って小型稜柱系（１ａ）→中型稜柱系（１ｂ）→大型船底系（２，３）という形態上の変遷傾向が伺われ、かつ石材も、おおむね遠距離石材である黒曜石を多用する段階から在地産石材依存へと移行する（ただしサブ・グループ３ａを除く）」（佐藤 1992）とされ、グループ１は「中部日本の細石器石器群については、良好な層位的出土例の多い相模野台地を中心に、赤城山麓・開田高原などの層位的事例から」「第１段階　西南日本的な稜柱形細石刃石核の単独構成をみせる石器群の段階」（堤 1992）に対応してくる。

また、「東日本地域における細石器文化編年案（1993.3.1作成）」として、矢出川、越中山、荒屋、柳又の４段階に区分し、矢出川段階をＢＢＯ上位で二分し、代官山、かしわ台駅前を最古期に並置している（栗島 1993 pp.32）。

台駅前を最古期に並置している（栗島 1993 pp. 32）。

5　細石器の組成（表２、表３）（図：ＰＬ１～14）

相模野に初めて細石器が出現する頃、それはＬ１Ｈ層上部段階である。Ｌ１Ｈ層自体は赤褐色スコリア礫層が中心でありY-137-1～4（上杉・上本・由井 1993）に相当する。

石器組成表（表２）ならびに石材組成表（表３）は上段からＬ１Ｈ層の下部から上面へと記してあり、層位の（）内は本層での遺物出土ピークや生活面が報告書に示されていない遺跡で他の遺跡を検討しながら適宜振り分けている。なお、石器組成の総計と石材組成の総計とは必ずしも一致しない。また、本報告未完の遺跡については、出土している場合を最小の１として表現してある。集中地点数や集中範囲は分布図から判断した。石材種では玄武岩を安山岩へ、硬砂岩は砂岩へ、珪質泥岩は珪質頁岩へ編入してある。

相模野のＬ１Ｈ層出土遺跡は19遺跡を数え、遺跡群を念頭に容れるとさらに遺跡数は減少し、相模野における他の段階に比較すると半数程度に過ぎないのではと思われる。

【下部】

２遺跡あり、石材は全て黒曜石であり信州系であろうか。決定器種には乏しいが、いずれの剥片も縦長志向であり、栗原中丸－Ⅳ（大上 1984）の残核（PL1-1）は厚手の剥片素材であろうか、石核側面の調整により作業面の幅を規定した後、縦長剥片を剥離している。上草柳第３西－Ⅱ（堤 1984c）の削器は「器種内再生」（砂田 1993a）の１例であるが、細石器を念頭に置いた場合、折断とシャフトへの装着が意識されてくる。

【中位・中・中部】

９遺跡を数えるが中位と記される遺跡が割合に内容豊富である。上野第１第Ⅳ文化層（相田 1986）はＬ１Ｈ層では最も出土点数が多い。石材は黒曜石以外も安山岩、チャート、凝灰岩、粘板岩、流紋岩、砂岩と多種にわたる。黒曜石は箱根・伊豆を中心としているようだが、信州系も含まれる。器種では黒曜石製の細石刃様剥片（PL1-6～11）が興味深く、６点中４点を折断している。残核は出土していないが、剥片の背面構成から大方が同一方向からの連続した剥片剥離を行なっている。ただ、Ｌ１Ｈ層上部の細石刃と比較すると幅広であり、大形であるが、ナイフ形石器や槍先形尖頭器の素材である他の剥片類（PL1-13～27）とは一線を画し、全く様相を異としている。しかも使用痕まで観察されるに及んでは組み合わせ道具としての植刃器をも積極的に考慮しても差し支えあるまい。

また、小形の黒曜石製の残核（PL2-5）が検出されており、接合資料によると寸詰りの縦長剥片が剥離され、一部に使用痕が観察されている。また、石材は異なるものの、安山

刃の長幅比に匹敵する剥片が剥離される残核（PL2-3）も見出される。厚手の剥片を素材にして、剥片剥離作業面の幅を限定し、より縦長の剥片を剥離する指向性が伺われる。これらは打面を原礫面や折断面等の単剥離面とし、打面調整や打面再生を施していない。対して、打面調整、打面再生等の石核調整をが施す90度打面転位で、小振りの剥片を剥離するチャート製（PL2-4•6）と凝灰岩製（PL2-7）の残核が検出されてい。

上野１－Ⅳではナイフ形石器と槍先形尖頭器が１対６強で検出されている。中でも、先の細石刃様剥片と大きさがさほど変わらないナイフ形石器（PL3-1～3）がある。背稜が認められない点や素材の用い方、、調整角、先端角、安山岩・チャート製など他のナイフ形石器（PL3-4～9）と大きさ以外では共通している。周縁、片面加工の槍先形尖頭器（PL3-10～29）は黒曜石やチャート製が主体であり、ナイフ形石器様の周辺加工の大形の槍先形尖頭器（PL-3-10•11）は安山岩製である。これらは縦長剥片かそれに準ずる剥片を素材とするが、周縁、片面加工の槍先形尖頭器はナイフ形石器に比較して器体幅に比較してその厚みが大である。また、製作中途と思われる欠損品（PL3-27～29）を除けば、ナイフ形石器と同様、完成品の多い点も指適されよう。

対して、両面加工の槍先形尖頭器もまた対照的である。安山岩を中心に黒曜石、粘板岩製（PL4-1～13）であるが、製作中途と思われる製品が大半を占めている。

安山岩製の一群（PL4-1～3）は正面観がいずれも左右非対照で極めて良く似る。厚さは幅の1/2～2/3を計り、片面ずつ交互に整形を施す中途の状態を示していよう。その他も製作中途の折損（PL4-5•7•11）か未製品（PL4-4•9）である。完成品であろう槍先形尖頭器（PL4-8•10•12•13）も厚さが幅の1/2以上を計測し、横断面形も偏平というよりも楕円に近い形状を示している。これらの特徴は器体の調整方法にも起因しようが、その整形剥離が縁辺から器体中央部にようやく届くか否かといった状況である。

小形の槍先形尖頭器（PL4-14～18）は黒曜石製で周辺、片面加工の槍先形尖頭器と平面形では類似するが、素材である縦長剥片の反りが縦断面に観察されない状況は他の両面加工品とその製作工程が共通する点からであろうし、その横断面形も極めて類似している。

大形と中形の槍先形尖頭器（PL5）は安山岩を主体に、凝灰岩、チャート製の両面加工品である。既に看た両面加工品（PL4）と最も異なる点は厚さが幅の1/3前後であり、横断面形が偏平な凸レンズ形を呈することである。器体側縁からの整形剥離痕も器体中央部あるいは中央部を越えて、反対の側縁近くまで及ぼうとする点にある。こうした器面調整は縄文時代草創期に通じる平坦剥離であり、より長く、より薄い槍先形尖頭器を製作する根

幹となる製作工程であろう。また、分厚い槍先形尖頭器（PL4）がこれら槍先形尖頭器の素材とならない事は、両者とも同様な大きさである点と、素材の場合は黒曜石製の小形の一群（PL4-14～18）の大きさが該当しようが、石材が異なる点から、これらは好対照の二者の槍先形尖頭器として捉えられよう。

なお、槍先形尖頭器製作の集中地点は細石刃様剥片の出土地点から南方へ15mほど離れている。

中村－Ⅲ（伊藤 1987）はナイフ形石器と槍先形尖頭器が1対8強で出土している。

ナイフ形石器はチャート製の小形品1点（PL6-1）が含まれ、上野1－Ⅳ（PL3-1～3）と良く似る。粘板岩製の台形あるいは切り出し形の微細な調整加工を施す形態（PL6-3•4）も上野例（PL3-4•5）に類似する。

槍先形尖頭器はチャート、粘板岩、安山岩等で製作される。加工の状態によって、表裏両面の一部が未加工（PL6-6～8•11）、周縁加工（PL6-9•10）、半両面加工（表面全面と裏面の打瘤除去）（PL6-12•13）、両面加工（PL6-14～22）がある。平面形態はほぼ同じであるが両面加工に先端部や基部の折損する個体が目立つが、これらの折れ面が使用による折損であることは衝撃剥離痕（PL6-16•17）からも明らかであろう。また、表裏両面の一部が未加工品（PL6-6～8•11）についても、裏面の打瘤除去等半両面品と同様の製作工程を踏んでおり、大形で分厚い未製品（PL7-1～3）とは一線を画す完成品であろう。また、両面加工品には器体の整形が入念であり、横断面形も偏平な凸レンズ状を呈し、調整剥離が器体中央部を越える例も多く、上野例（PL5）と類似する。ただ、平面形態のみでは分厚い一群（PL4-7～18）に類似する。

その他の器種では、搬入石材である鉄石英製の掻器（PL7-4）、チャート（PL7-5）製や硬砂岩製（PL7-6）の削器が出土している。槍先形尖頭器には硬砂岩製の石材が認められないが、チャートではさかんに槍先形尖頭器を製作しており、チャート製の削器とされる剥片の裏面打瘤部分にも調整加工が及んでおり、槍先形尖頭器作成を作成するため素材剥片に調整加工を施し始めた状態であることも考えられよう。

なお、チャート製の真正な縦長剥片（PL7-7～9）には使用痕が観察されている。ただ中村Ⅲではこうした剥片類を剥離した残核が一点も検出されない点は特筆されよう。

月見野ⅣA（明治大学考古学研究室 月見野遺跡群調査団編 1969）はナイフ形石器と槍先形尖頭器が2対3と拮抗し、上記2遺跡とはナイフ形石器の数量比が極めて高いこととなる。しかし、組成する石器形態は「中形・木葉形、細身柳葉形の二つの両面調整のもの

と、小形・周辺調整」で「形態的に規格性の高い」「各形態ごとに、その機能領域は完全に分化」（鈴木・矢島 前掲）する。その内容は上野・中村両遺跡とも共通して看取できるが、細石器２点が伴出する点においては不明である。

宮ケ瀬No.12－Ⅲ（鈴木・桝渕・武井 1988）は安山岩、凝灰岩製の槍先形尖頭器が石囲い炉を伴って出土している（PL8-12～14）。横断面は割合に薄い凸レンズ状を呈している。完形品には欠損資料が多く、製作最終段階での折損か、諸作業による折損か、狩猟時の折損等が考えられ、遺体回収解体処理後の槍先形尖頭器先端部側と着柄基部側の接合かもしれない。

寺尾－Ⅱ（白石 1980）では槍先形尖頭器７点とナイフ形石器１点が出土している。槍先形尖頭器（PL8-21･22）は粘板岩製で、厚さが幅の1/2以上ある一群である。なかでも平面形は上野例（PL5-9）に類似する。槍先形尖頭器は製作工程の一端を表して、両側縁が上下交互にジグザク状に凹凸する。剥片類にはチャート製（PL-15･17～19）と黒曜石製（PL8-16）の折断剥片が出土している。

川尻－Ⅲ（御堂島 1992）では珪質頁岩製で周辺加工の槍先形尖頭器（PL9-3）とチャート製（PL9-4）と黒曜石製（PL9-5･6）で両面加工の槍先形尖頭器が出土している。どの形態も中村－Ⅲの槍先形尖頭器（PL6-6～22）に類似し、特にチャート製の折損品（PL9-4）は中村－Ⅲ（PL6-16）と形態のみならず、基部側の衝撃剥離による折損の状態まで類似しており、当時の槍先形尖頭器の使用法や着柄方法をも探る手がかりとなりえよう。

上草柳第２（服部 1984）の残核(PL9-7）は小形で両刃礫器状を呈する。箱根産の黒曜石製の転礫を素材としているようだが、目的剥片が存在するとすれば上野例の細石刃様剥片に匹敵する可能性もあろうが、本例は現礫面を残置する横長剥片が主体であろう。

栗原中谷（小池 1990）の黒曜石製の槍先形尖頭器は中村Ⅲの半両面加工に相当しようが下膨れの形状を呈する。裏面の打瘤は除去されており、槍先形尖頭器製作の手順は中村例と共通する。

田名稲荷山－Ⅱ（鈴木 1986）では、黒曜石（PL9-11）、チャート（PL9-12）、硬砂岩（PL9-13）製の石材の異なる剥片類３点が出土している。

【上部・上半部・上位】

相模野ではこの段階で細石器が出現する。ナイフ形石器が組成に含まれることはＬ１Ｈ層内においての本段階以降は認められない。

代官山－Ⅲ（砂田 1986）は、上多賀中心（鈴木・福岡・戸村 1986）か、あるいは柏峠

西（藥科 1992）の伊豆箱根産の黒曜石製の原材から細石刃にいたる細石刃剥離工程が復原されている。細石器関係以外の器種は乏しいが、20m南西で片面加工の槍先形尖頭器（PL12-10•11）が出土している。ただ、槍先形尖頭器出土集中地点と同一地点のＢＢ１層で同様の槍先形尖頭器、ナイフ形石器等の集中地点が検出されている。「代官山Ⅲの槍先形尖頭器は、独立した文化層としてとらえるよりも第Ⅳ文化層に帰属する」（鈴木 1989b pp. 48）の指摘のように、下層文化層の一部であれば、Ⅳ－４・12の母岩別資料と同一母岩の可能性を指摘しておきたい。

Ｌ１Ｈ下部から中部へと変遷してきた槍先形尖頭器の形態組成と調整加工の方法や素材の用い方からも層序としては１段階前の文化層としての蓋然性が強いようである。ただ、同じＬ１Ｈ層中であれば、上野例（PL3-16）の裏面の打瘤を除去する片面加工の槍先形尖頭器に近似しようか。

吉岡Ｂ区（砂田・小野 1991）では伊豆箱根産の黒曜石を利用した代官山技法と同じ細石刃製作工程による細石器が検出されつつある。

柏ケ谷長ヲサ－Ⅳは「生活面は配石のレベルから層位Ｌ１Ｈ上部と考えられる」（堤・矢部 1983 pp. 20）。代官山、吉岡Ｂ区と同様のＬ１Ｈ層上部である。ただ、配石の下場がＬ１Ｈ上面に相当し、その意味ではＢＢ０下底部とも表現できるのではなかろうか。図示される細石刃も該期の特徴通り極めて小形であるが、石材は信州産も量的に保証されているようであり、細石核もＢＢ０層で検出される神津島産の様でもある（報文写真図版22）。細石核の素材は板状あるいは剥片を素材とし、残核形状は直方体の所謂稜柱形を呈している。さらに、打面縁辺には細石刃剥離に先立つ打縁調整が施され、細石刃剥離作業面が前後両面にあったり（PL13-10）、両設打面の上下から細石刃が剥離されてもいる（PL13-11）。こうした細石刃剥離工程は代官山技法に見られる工程とは異なり、ＢＢ０層段階の細石核に看取される工程により類似しており、代官山→柏ケ谷長ヲサの時間的推移が妥当となる。また、他の石器組成からは、礫器状の石核から剥離された砂岩、凝灰岩、安山岩製の剥片類が300点以上検出されている点からもＢＢ０層段階として捉えられよう。

慶応校地－Ｉ（関根 1992）ではＬ１Ｈ上半部から黒曜石製の原礫面を残置する小礫を素材とした細石核（PL14-1）が出土している。打面の一部に二次欠損を受けているが剥離面打面に打縁調整が施されている。右側面に原礫面を残し、左側面は細石核側面調整剥離痕かもしれず、素材の用い方から代官山例（PL12-4～7）の諸例の可能性もある。また、出土地点から西２ｍ前後の集中地点から出土した黒曜石の蛍光Ｘ線分析による原産地推定

出土地点から西２ｍ前後の集中地点から出土した黒曜石の蛍光Ｘ線分析による原産地推定によると伊豆柏峠という分析結果（二宮・網干・大沢 1993）が出ており、代官山－Ⅲとの共通性に興味が持たれる。これらの黒曜石製の剥片は13点出土しているがいずれも２～３㎝と小形（PL14-2）であり、他の珪質頁岩製の剥片は長さ５～６㎝が多いという。

凝灰質頁岩製槍先形尖頭器がＬ１Ｓ層からＢＢ０層上部にかけての第１石器集中部で検出されているが、文化層としては該期に比較して新期に属しよう。Ｌ１Ｈ層中であれば、上野例（PL5-1･2）に該当しよう。

かしわ台駅前－Ⅱ（小池 1986）ではＬ１Ｈ上位から黒曜石製の細石器関係の資料のみが出土している。細石核（PL14-8）の出土は１点にとどまり、細石刃剥離作業面の一部に原礫面を留めるがほぼ全周で細石刃を剥離している。石核調整は打面調整や打面再生が行なわれ、細石刃剥離当初は現細石核に残された剥離面の７割り増し以上の細石刃が剥離されていることが、接合資料から理解される。層序としては、ＢＢ０層により近いと思われ、細石刃製作工程上、代官山－Ⅲ→柏ケ谷長ヲサ－Ⅳ→かしわ台駅前－Ⅱといった時間的推が考えられる。他には頁岩製の折断剥片や砂岩製の大形剥片が伴出している。

長堀南－Ⅱ（麻生 1987）ではＬ１Ｈ（上位）から細石核の打面調整剥片と打面再生剥片の接合資料と細石刃が出土している。細石刃は透明度が高いようである。細石核の調整剥片は明らかに打面を再生しており、かしわ台駅前と共通するが、その大きさはＬ１Ｈ層内の他の細石核に比較して大形である。槍先形尖頭器はチャート製の両面加工で、器面の調整剥離は器体中央部を十分に越え、器体の厚さは幅の1/3以下と薄手である。中村－Ⅲ（PL6-16）や川尻－Ⅲ(PL9-4）と類似し、石材も共通しており、長堀南例では先端部に衝撃剥離痕が観察される。

上草柳第３東－Ⅰ（堤 1984a）では砂岩製の５㎝前後の方形をした剥片の接合資料がある。礫器状の残核形態をとる石核から剥離された剥片類である。剥離の過程によっては縦長剥片（PL14-14･15）が剥離される。

上草柳第３西（堤 1984c）では、安山岩製の横長剥片（PL14-17）が剥離時に打点から二分した状態で、径40㎝ほどの礫群内から出土している。

６．相模野の検証

石器組成は中位を中心にナイフ形石器と槍先形尖頭器が共伴するが、月見野ⅣＡを除けば圧倒的に槍先形尖頭器が優位である。共伴段階以降は極めて散発的な出土状況となる。

両器種共伴段階でのその他の器種は削器や掻器が５点前後検出されるが、槍先形尖頭器の製作工程の途上と思われる器種も散見され、その数量は減少する可能性がある。他には上野１－Ⅳで錐器、中村－Ⅲでは磨石１点、宮ケ瀬No.12では叩き石１点が出土している。

細石器出現段階以降はナイフ形石器が皆無となり、槍先形尖頭器が数点伴う場合が見られる。しかし、槍先形尖頭器と細石器との同一遺跡内での共伴関係は、層序や平面・断面分布、母岩別資料等の再検討を精緻に実施すれば悲観的な雰囲気が強まりそうである。

その他には、長堀南－Ⅱで礫器が出土するほかは、錐器・掻器・削器等の器種は極めて乏しい組成となる。さらに、剥片・砕片の多い遺跡は槍先形尖頭器や細石器の製作址であるが、それら工程器種以外に、細石刃様剥片や折断剥片といった植刃器を介在させるような器種も抽出された。これらの器種を剥がした明瞭な残核を検出することはできないが、製作工程上、細石核に通じる残核形態のいくつかが指適された。なお、細石器出現以降には礫器状の石核から剥離された剥片の接合資料や多数の剥片が出土している。

石材組成はＬ１Ｈ下部段階から中位までは、黒曜石と安山岩ほぼ拮抗し、チャート、粘板岩、砂岩、凝灰岩などが組成している。細石器の出現以降は黒曜石の数量比が圧倒的に高くなり、安山岩、砂岩、珪質頁岩、粘板岩、凝灰岩が僅かに残存するようである。チャート、流紋岩に至ってはほとんど皆無に等しい状況となってしまう。

集中地点は中位段階の上野第１－Ⅳの２区では径２～８ｍの範囲で37ヵ所が設定されるが、その内、径４～５ｍの範囲の６ヵ所の集中地点が目立っている。礫群は径50㎝～２ｍほどの範囲に数点から100点未満の焼けた破礫によって構成され、主だった石器集中の南端に一部重なるように分布している。中村－Ⅲでは14ヵ所の石器集中として提示されるが、隣接する集中地点をまとめると、径５～７ｍで３ヵ所の集中範囲が認められる。礫群は２ヵ所の集中地点内の割合に散漫な分布内に径４ｍの範囲で10点未満の拳大以下の完形・破砕礫によって構成されている。寺尾－Ⅱでは径２～３ｍの５ヵ所の石器集中の内、３ヵ所の石器集中に５ヵ所の礫群が５～20個の径10㎝未満ほどの完形礫や破砕礫が焼けた状態で検出されている。宮ケ瀬No.12の石囲い炉が山間部遺跡における該期の形態とすれば、台地・丘陵上の細石器出現直前期の礫群は個別礫群の数量としてはややまとまるものの、散漫な礫群である。しかもその散在状況は点数による視覚的な感慨かもしれないが、直線的な配置として映ずる場合がある。

細石器出現期の代官山－Ⅲでは６×９ｍの範囲に細石器６ヵ所の石器集中のうち、隣接する集中をまとめると、径２～３ｍの４ヵ所の石器集中となる。その内２ヵ所の石器集中

mの４ヵ所の細石刃製作址が隣接し、焼け礫が数点含まれるに過ぎないようである。

柏ケ谷長ヲサ－Ⅳは径４～５mの集中地点１カ所に２×３mの核的集中が存在する。そのほぼ中央に人頭大の礫８点が配されるが、このような大形礫の配石は相模野ではＢＢ０層に看られる特徴である。かしわ台駅前－Ⅱは６×２mの範囲に石器が集中する。柏ケ谷長ヲサ－Ⅳと同様に集中地点は１カ所であり、石器集中の南側に集中するようである。

おわりに

相模野における細石器の出現はＬ１Ｈ層上部である。それは、代官山－Ⅲであり、吉岡Ｂ区のようである。細石器出現前夜の石器組成が槍先形尖頭器を中心として、ナイフ形石器、掻器、削器であった。槍先形尖頭器の内容は一見すると極めて豊富な形態組成を示している。器種量の豊富な上野１－Ⅳや中村－Ⅲではナイフ形石器の刃潰し加工を駆使しながら槍先形尖頭器の作成にあたり、中村－Ⅲや川尻－Ⅲでは器面調整が対辺にまで及ぶ剥離痕さえ見られ、器体の厚みが幅の1/2という、横断面形が偏平な凸レンズ状を呈する中形の槍先形尖頭器を作成しているのであった。上野１－Ⅳでは大形の一群や中形の一部が次代の槍先形尖頭器を髣髴とさせる段階にまで達してはいるが、小形や中形の一群に、ナイフ形石器の刃潰し加工を駆使しきれず、両面加工ではあるものの極めて太い槍先形尖頭器が作製されている。横断面形が円に近い楕円を呈する、丸棒状の槍先形尖頭器とでも言えそうである。また、ある程度の器面調整が進行する過程で折損の憂き目にすら遭遇するのである。細石器出現前夜の石器製作工程上の調整剥離過程は、槍先形尖頭器の製作において器面調整の方法が種々入り乱れる様な極めて錯綜した器種製作を演じているのである。

一方、剥片剥離工程に目を向けると、細石刃様剥片が上野１－Ⅳで同一打面から連続的に剥がされ、一部は折断され、使用痕が観察されている。さらに、剥片剥離作業面幅を限定し、原礫面や単剥離面を打面として縦長剥片を剥離する残核も検出されている。折断剥片や小形剥片は栗原中丸－Ⅳ、寺尾－Ⅱ、川尻－Ⅲなどでも検出されており、上野１－Ⅳや中村－Ⅲの長さ４cmを越える縦長剥片の大方に使用痕が観察されている。

石材に目を転じると、槍先形尖頭器の大形の一群は黒曜石以外のチャート、凝灰岩、安山岩を利用し、その他の器種形態は黒曜石を含め大半の石材で対応し、上野１－Ⅳの細石刃様剥片は黒曜石である。細石器出現前のＬ１Ｈ層の黒曜石出土数比は27%を示すが、細石器出現後はＬ１Ｈ層上部の細石器遺跡出土石材の98%が黒曜石で占有することとなる。

石器の集中地点では、細石器出現前が、散漫な分布を除き、径２～７mの集中範囲が３

～６ヵ所であり、宮ケ瀬No.12の石組み炉以外は焼け礫が疎らに分布するようである。細石器出現時は径２～３ｍの集中範囲が４ヵ所と、以前と比較し、集中度が増すようである。しかし、柏ケ谷長ヲサ－Ⅳやかしわ台駅前－Ⅱでは６ｍ前後の１ヵ所の集中地点の一部に石器が集中し、出現期の分布状況とは異なる。柏ケ谷長ヲサ－Ⅳの配石も次段階ＢＢ０層で顕著であり、細石器出現後の礫群等のあり方も前段階同様、散漫な分布である。

以上のＬ１Ｈ層上部段階での細石器の出現は、大形槍先形尖頭器作製における調整剥離工程の器体調整への応用が細石核側面調整への適用と細石刃剥離における加撃方法に結びつき、細石刃様剥片や小形の残核に見られる剥片剥離工程上の細石刃剥離のための手はずは全て整い、石器製作工程における剥片剥離工程と調整剥離工程の直結とが細石刃製作情報の相乗効果のもと、細石器の出現となる。その過程において「集団間で技術のみが伝播する」（加藤 1992 pp.22）状況も考えられる。また、石材の黒曜石への効果的集結が図られ、従前の槍先形尖頭器の形態上の豊富さと多器種製作による機能分化から、細石器出現後は万能器具として各種組み合わせ道具製作に導くのである。その背景には細石刃様剥片等で推測される植刃器が既に各種製作されていたと思われ、そこで賄えきれない諸作業に礫器が行使され始めたのであろう。礫器の出土点数が「１遺跡１文化層あたりの出土点数が10点を越える例が細石器文化に限定される」（織笠 1992 pp.473）のである。

さらに、細石器出現前のＬ１Ｈ層の槍先形尖頭器にみる有効刃部長（着柄を想定した器体最大幅中央部から先端までの側縁の長さ）を計測すると、大形（4.6～6.0cm）、中形（3.0～3.6cm）、小形（1.6～2.0cm）の長さであり、出現期細石刃の長さが完形で2.0cm前後を考えると刃部のみを生産する細石器の効率の良さを最認識するのである。また、遺跡における分布上からも細石器出現期は前段階とほぼ同様であるが、やや集結するようであり、その流れは、次段階ではさらに集約的な細石刃の製作が行なわれるようである。

「湧別技法の起源・発生についても不明とせざるを得ない」（千葉・吉崎・横山 1984 pp.20）、「野岳・休場型細石核の製作技法が不分明な現状」（佐藤 1992 pp.80）、田名塩田原遺跡では、ＢＢ１層上部から黒曜石製の細石核と叩き石が出土している（滝澤・小池 1991）といった現状を思うに、日本の細石器の発生は「各地域で石器の編年が確立され、周辺大陸の情勢がさらにあきらかにされたときに、はじめて結論が与えられ」（芹沢 1965 pp.16）、「大陸からの移入された文化という説と、日本において発生したのだとする説との両面をつねに考えて、今後の研究を進める必要がある」（杉原 1974 pp.298）。「森の文化」（鈴木 1992）の究明はたった今始まったばかりである（1993.9.12）。

参考・引用文献

相田　薫 1986「旧石器時代・縄文時代草創期の調査　第Ⅳ文化層」大和市文化財調査報告書第21集 月見野上野遺跡第1地点 pp. 298-500

麻生順司 1987「先土器時代 第Ⅱ文化層」大和市文化財調査報告書第28集長堀南遺跡発掘調査報告書 pp. 13-15

安蒜政雄 1979「日本の細石核」駿台史学 47 pp. 152-183

安蒜政雄 1984「日本の細石器文化」駿台史学 60 pp. 133-159

安蒜政雄 1986「先土器時代の石器と地域生」岩波講座日本考古学 5 pp. 28-60

安蒜政雄 1992「赤土の中の人類文化」新版〔古代の日本〕8 関東 pp. 23-44

出居　博 1987「日本列島への細石刃文化伝播に関するノート」唐沢考古 7 pp. 46-51

伊藤恒彦 1987「先土器時代の調査 第Ⅲ文化層」中村遺跡－都市計画道路町田南大野線埋蔵文化財発掘調査報告書－ pp. 36-97

伊藤恒彦 1988「相模野台地の2種類の尖頭器石器群」大和のあけぼの2 pp. 93-113

伊藤恒彦 1989「細石刃石器群の成立と尖頭器石器群の関連について－相模野台地の場合－」長野県考古学会誌 59・60 pp. 294-298

稲田孝司 1986「縄文文化の形成」岩波講座 日本考古学 6 pp. 65-117

稲田孝司 1988『古代史復原1 旧石器人の生活と集団』pp. 198

稲田孝司・光石鳴己・絹川一徳 1992「西日本の湧別技法」北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散 pp. 13

稲田孝司・絹川一徳・光石鳴己 1993「西日本の湧別技法」岡山大学文学部紀要 18 pp. 87-94

上杉　陽・上本進二・由井将夫 1993「慶応義塾藤沢キャンパス内遺跡の降下火山砕屑物層位」湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻総論 pp. 210-231

大上周三 1984「第Ⅳ文化層」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 3 栗原中丸遺跡 県立栗原高等学校建設にともなう調査 pp. 86-87

大山　柏 1936「直剪鏃」史前学雑誌 8-2 pp. 1-16

小田静夫 1969「日本先土器時代の様相－西南日本における細石器的性格への指向－」人類学雑誌 77-5・6 pp. 40-61

織笠　昭 1992「南関東における西海技法の受容と変容」人間・遺跡・遺物 －わが考古学論集2－ pp. 75-92

織笠　昭 1992「日本列島における片刃礫器と丹生１－Ｂ地点北区第２群石器の位置付け」古代學研究所研究報告第３輯 大分県丹生遺跡群の研究 pp. 560

織笠　昭・木村英明 1992「道具の組合わせ f 細石器文化」図解・日本の人類遺跡 pp. 30-33

加藤真二 1992「中国細石刃文化の展開とその背景」筑波大学先史学・考古学研究 3 pp. 1-30

加藤晋平 1984「日本細石器文化の出現」駿台史学 60 pp. 38-56

加藤晋平 1986「日本列島における人類文化の出現」岩波講座 日本考古学 6 pp. 25-64

加藤晋平 1992「シベリアから日本へ」言語 21-8 pp. 64-69

加藤博文 1993「サハリン・北海道地域における細石刃技術の受容の様相－近年の日ロ両国の調査成果から－」古代文化 45-4 pp. 3-12

木崎康弘 1983「東日本細石核技術展開についての一理解」旧石器考古学 26 pp. 51-73

栗島義明 1993「湧別技法の波及」土曜考古17 pp. 1-37

小池　聡 1986「先土器時代 第Ⅱ文化層」かしわ台駅前遺跡発掘調査概報 pp. 8-10

小池　聡 1990「出土位置不明の石器」神奈川県座間市栗原中谷遺跡 pp. 27-28

小林達雄 1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」物質文化 16 pp. 1-10

小林達雄（司会）1980「座談会 縄文土器の起源」國學院雑誌 81-1 pp. 19-63

桜井美枝 1991「北方細石刃文化の南下」考古学ジャーナル 341 pp. 2-7

佐藤宏之 1992a「関東地方における北方系削片系細石器石器群の移行期にはたした役割」北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散 pp. 14

佐藤宏之 1992b 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」法政大学大学院紀要 29 pp. 55-83

島立　桂 1993「相模野台地における槍先形尖頭器と細石刃の展開」潮見　浩先生退官記念論集 pp. 61-76

白石典之 1993「北東アジアの細石刃石器群」筑波大学先史学・考古学研究 4 pp. 1-30

白石浩之 1980「第Ⅱ文化層」神奈川県埋蔵文化財調査報告 18 寺尾遺跡 県立綾瀬高等学校建設にともなう調査 pp. 89-122

白石浩之 1988「縄文文化の起源を求めて－神奈川県大和市月見野遺跡群上野遺跡第１地

点出土の遺物から－」大和のあけぼのⅡ pp. 27-44
白石浩之 1989『ＵＰ考古学選書７　旧石器時代の石槍』pp. 105
白石浩之 1992「細石器文化の研究－西南日本の細石器文化について－」人間・遺跡・遺物 2 pp. 41-55
白石浩之・砂田佳弘 1993「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群」日本考古学年報 44 pp. 456-460
杉原荘介 1974『日本先土器時代の研究』pp. 318
鈴木次郎・矢島国雄 1979「相模野台地におけるナイフ形石器文化終末期の様相」神奈川考古 7 pp. 1-20
鈴木次郎・矢島国雄 1988「先土器時代の石器群とその編年」日本考古学を学ぶ（１）＜新版＞pp. 154-182
鈴木次郎 1986「先土器時代の遺構と遺物 Ａ地区 第Ⅱ文化層」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 12 田名稲荷山遺跡 県立県北方面高校建設にともなう調査 pp. 24-25
鈴木次郎 1989a「槍先形尖頭器石器群と細石刃石器群の時間的関係」長野県考古学会誌59・60 pp. 291-293
鈴木次郎 1989b「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」神奈川考古 25 pp. 27-56
鈴木次郎・桝渕規彰・武井　勝 1988「宮ケ瀬遺跡群サザランケ（No. 12）遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター年報 7 pp. 2-5
鈴木忠司 1971「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」古代文化 23-8 pp. 175-192
鈴木忠司 1985「再論　日本細石刃文化の地理的背景－生業論への視点－」論集日本原史 pp. 161-191
鈴木忠司 1992「日本列島細石刃文化の分布論的検討－地理・動植物そして人口－」北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散 pp. 9
鈴木正男・福岡　久・戸村健児 1986「藤沢市代官山遺跡黒曜石の分析」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 11 代官山遺跡 県立長後高等学校建設にともなう調査 pp. 442-451
砂田佳弘 1986「先土器時代の遺構と遺物 第Ⅲ文化層」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 11 代官山遺跡 県立長後高等学校建設にともなう調査 pp. 46-164
砂田佳弘 1988「相模野の細石器－その発生と展開に向けて－」神奈川考古 24 pp. 31-64

砂田佳弘 1993a「相模野の石器再生－器種形態の存続と改変－」神奈川考古 29 pp. 1-23
砂田佳弘 1993b「細石器技法の発達」考古学の世界古代を拡大する②関東・中部 pp. 88・89
砂田佳弘・小野和夫 1991「吉岡遺跡群 本格調査（A区）」神奈川県立埋蔵文化財センター年報 10 pp. 34-38
関口博幸 1992「槍先形尖頭器の変容過程－相模野台地における槍先形尖頭器の製作と廃棄プロセス－」研究紀要 10 pp. 1-26（財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
関根唯充 1992「第Ⅰ文化層（B0・L1H）」湘南藤沢キャンパス内遺跡第2巻 岩宿時代 縄文時代Ⅰ部 pp. 41-56
芹沢長介 1960『石器時代の日本』pp. 327
芹沢長介 1960「日本における細石器文化」歴史教育 pp. 10-16
滝澤 亮・小池 聡 1991「相模原市田名塩田原地区遺跡群」第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨 pp. 40-43
谷口康浩 1991「木曽開田高原柳又遺跡における細石刃文化」國學院雑誌 92-2 pp. 21-51
千葉英一・吉崎昌一・横山英介 1984「湧別技法」考古学ジャーナル 229 pp. 16-21
堤 隆 1984「上草柳第3地点東遺跡 第Ⅰ文化層」大和市文化財調査報告書第15集 一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告 pp. 229-237
堤 隆 1984「上草柳第3地点西遺跡 第Ⅱ文化層」大和市文化財調査報告書第15集 一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告 pp. 294-296
堤 隆 1984「上草柳第3地点西遺跡 L1S及びL1H下部出土の石器」大和市文化財調査報告書第15集 一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告 pp. 296-297
堤 隆 1987「相模野台地の細石刃石核」大和市史研究 13 pp. 1-43
堤 隆 1991「相模野細石刃文化における石器装備の構造」大和市史研究 17 pp. 1-32
堤 隆 1992「中部日本における細石器文化」北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散 pp. 8
堤 隆・矢部秀一1983「第Ⅳ文化層」先土器時代海老名市柏ケ谷長ヲサ遺跡発掘調査報告書 pp. 20-24
鶴丸俊明 1985「黒曜石供給の一形態とその技術」考古学ジャーナル 244 pp. 18-23
戸沢充則 1970「狩猟・漁撈生活の反映と衰退」古代日本 7 関東 pp. 7-24
中村喜代重 1988「相模野台地における槍先形尖頭器の出現について」旧石器考古学 36

pp. 13-27

西井幸雄 1988「関東地方細石器文化小考」転機 2 pp. 1-35

二宮修治・網干　守・大沢真澄 1993「蛍光X線分析による慶応義塾藤沢校地内遺跡出土黒曜石の原産地推定」湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻総論 pp. 707-724

橋本勝雄 1989「東日本の細石器文化－東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向－」考古学ジャーナル 306 pp. 12-21

萩原博文 1989「西日本の細石器文化」考古学ジャーナル 306 pp. 22-26

服部隆博 1984「上草柳第2地点遺跡 L 1 H出土の石器」大和市文化財調査報告書第15集 一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告 pp. 122-126

林　謙作 1970「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置づけ（下）」考古学研究 17-2 pp. 37-57

藤本　強 1982「常呂川流域の細石刃」北海道考古学 18 pp. 1-21

松浦五輪美 1993「西南日本の細石刃文化について－特に「野岳・休場型」、「船野型」細石核を中心に－」潮見　浩先生退官記念論集 pp. 77-92

松本秀雄 1992「遺伝子から探る北方の民族」言語 21-8 pp. 48-54

御堂島　正 1991「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」古代 92 pp. 79-97

御堂島　正 1992「旧石器時代の遺構と遺物 第Ⅲ文化層」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 23 川尻遺跡 県道相模原津久井線川尻バイパス建設にともなう調査 pp. 18-22

明治大学考古学研究室 月見野遺跡群調査団編 1969「概報 月見野遺跡群」大和市史 7 資料編考古(1986)所収 pp. 481-521

八幡一郎 1935「北海道の細石器」人類学雑誌 50-3 pp. 44-46

Lee, Yung-jo、Yun, Yong-hyun『Tanged-points and Micro-blade Cores from Suyangge Site, Korea』pp. 30

藁科哲男 1992「神奈川県下遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析（向原、金沢文庫、代官山、寺尾、早川天神森、新戸、田名稲荷山、栗原中丸遺跡）」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 25 向原遺跡Ⅱ　県企業庁平塚配水池建設に伴う平塚市上吉沢所在遺跡の調査 pp. 150-156

表1　Ｌ１Ｈ層前後の時期区分案

層序		白石'89	鈴木'89b	諏訪間'88	砂田'93b	織笠'92	堤'91	西井'88
		槍先形尖頭器			細石器			
漸移層(Y-141-1•2)	上		6期	段階ＸⅡ				
	中				第4段階			
	下							
Ｌ１Ｓ(Y-140～138)	上		5期	段階ＸⅠ		第4段階 第3段階	段階3	第Ⅳ期
	中		－			－	段階2	
	下			段階Ⅹ	第3段階	第2段階		第Ⅲ期
ＢＢ０(Y-137-4)	上	4期						第Ⅱ期
	中		4期		第2段階	－		
	下			段階Ⅸ				
Ｌ１Ｈ(Y-137-3～1)	上				第1段	第1段階	段階1	第Ⅰ期
	中	3期		段階Ⅷ				
	下		3期					
ＢＢ１(Y-136～130)	上		2期	段階Ⅶ				
	中	2期						
	下	1期	1期	段階Ⅵ				

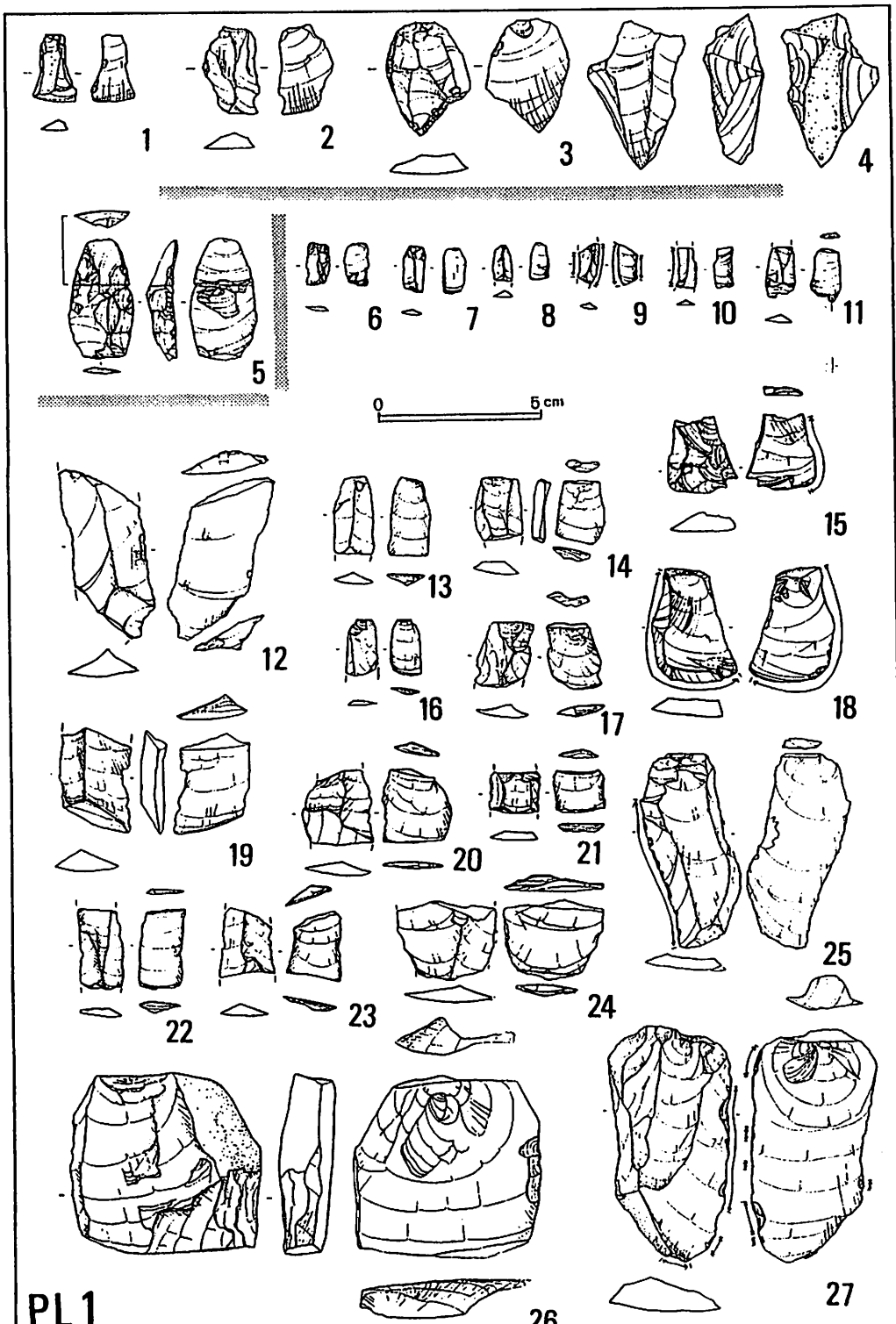
*層序のＹ番号は上杉・上本・由井1993に準拠する。
*太罫破線は層序が継続する。
*時期区分間に罫線のない編年案は同一層上部と上面(諏訪間、織笠)、層序が各期にまたがる(西井)。

表２　相模野Ｌ１Ｈ層石器組成

遺跡名	層位	ナイフ	槍先	細石核	細石刃	細石素材	彫器	掻器	削器	礫器	磨石	叩き	加F	使F	剝片	砕片	調F	石核	原材	他	総計	備考
栗原中丸－Ⅳ	L1H下部												1		3			1			5	加Ｆは槍先形尖頭器未製品
上草柳第３西－Ⅱ	L1H下部								2												2	器種内再生
上野第１－Ⅳ	L1H中位	12	76				5		3				27	53	3384			15		11	3586	剝片に石刃25点を含む
中村－Ⅲ	L1H(中位)	5	42					4	4		1		6	15	1064						1141	剝片は砕片を含む
月見野ⅣＡ	L1H(中位)	20	30		2			4						7	10			3		3	79	剝片に石刃10点を含む、細石器は細石刃とする
宮ケ瀬No.12－Ⅲ	L1H中位		30						1			1		1	1	1	1				36	サザランケ遺跡
寺尾－Ⅱ	L1H中	1	7						6				7	1	62	130		2			216	槍は両面加工
川尻－Ⅲ	L1H中部		4										1	2							7	槍は両面加工
上草柳第２	L1H（中）	1												2	7			1			11	石核は写真図版によると箱根産か
栗原中谷	L1H中		1																		1	半両面に近い洋梨形
田名稲荷山－Ⅱ	L1H（中）													1	2						3	
代官山－Ⅲ	L1H上部		4	36	461	8		1				1	3	3	72	689	216	1	6		1501	槍は片面加工、調Ｆは細石器以外も含む
吉岡Ｂ区	L1H上部			2	43	2											89		2		138	試掘調査分、調整Ｆには調整砕片を含む
柏ケ谷長ヲサ－Ⅳ	L1H上部			5	200										300			20		195	720	細石刃・剝片数は概算
慶応校地－Ⅰ	L1H上半部		1	1									1		26						29	
かしわ台駅前－Ⅱ	L1H上位			1	93										8	12	7				121	
長堀南－Ⅱ	L1H(上位)		3		1					3			1	1	2		2			1	14	槍：両面加工２、調Ｆは細石核打面再生剝片
上草柳第３東－Ⅰ	L1H上面														21			1			22	
上草柳第３西	L1H上面														2						2	接合後１点の横長剝片

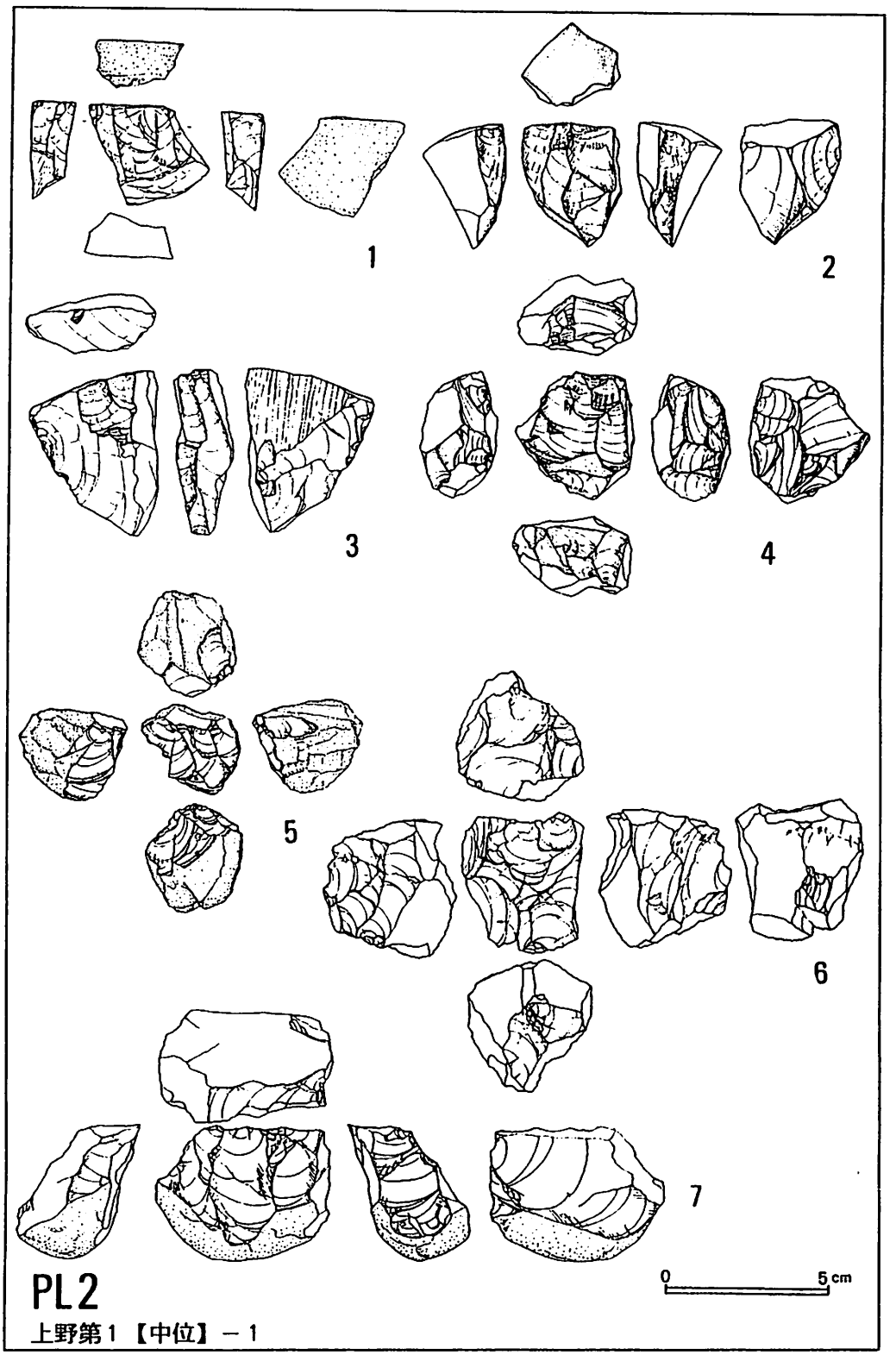
表３　相模野Ｌ１Ｈ層石材組成

遺跡名	層位	黒曜石	安山岩	流紋	砂岩	頁岩	珪頁	粘板岩	凝灰岩	チャート	他	?	総計	集中地点数	集中範囲（ｍ）	遺構
栗原中丸－Ⅳ	L1H下部	5											5		散漫な分布	
上草柳第３西－Ⅱ	L1H下部	2											2			
上野第１－Ⅳ	L1H中位	1238	1639	68	32			99	116	394		1	3587	３７（６）	径２～８	礫群14基
中村－Ⅲ	L1H(中位)	28	55		102			339	2	392	7	8	933	１４（３）	径３～８	径４ｍの礫群２基
月見野ⅣＡ	L1H(中位)	11	7							6			24			
宮ケ瀬No.12－Ⅲ	L1H中位		36					1	1				38	6		石囲い炉２基
寺尾－Ⅱ	L1H中	20	21		33			18	9	116			217	5	径２～３	礫群：５～20個体の焼け礫で構成
川尻－Ⅲ	L1H中部	4					1			1			6		散漫な分布	礫群：46点の焼け礫で構成
上草柳第２	L1H(中)	6	2							3			11		散漫な分布	
栗原中谷	L1H中	1											1			偏平完形小児頭大礫（被熱）１点
田名稲荷山－Ⅱ	L1H(中)	1			1					1			3		散漫な分布	
代官山－Ⅲ	L1H上部	1484			3		1	10	3				1501	６：細石器、１：槍	６×９（細）３×４（槍）	焼け礫：32点が散漫
吉岡Ｂ区	L1H上部	138											138	４：谷頭部（本調査）	径６～８	
柏ケ谷長ヲサ－Ⅳ	L1H上部	505	1		1				1				508	1	径４～５	配石：人頭大の礫８点
慶応校地－Ⅰ	L1H上半部	11	1				13		1				26	２：隣接	径３	自然礫（焼けなし）が混在
かしわ台駅前－Ⅱ	L1H上位	54	3		1	1							59	１：南部に集中	６×２	
長堀南－Ⅱ	L1H(上位)	2	1				1			1			5		散漫な分布	
上草柳第３東－Ⅰ	L1H上面				22								22	1	径３	破砕礫１個体
上草柳第３西	L1H上面		2										2			礫群（16個体）に伴う



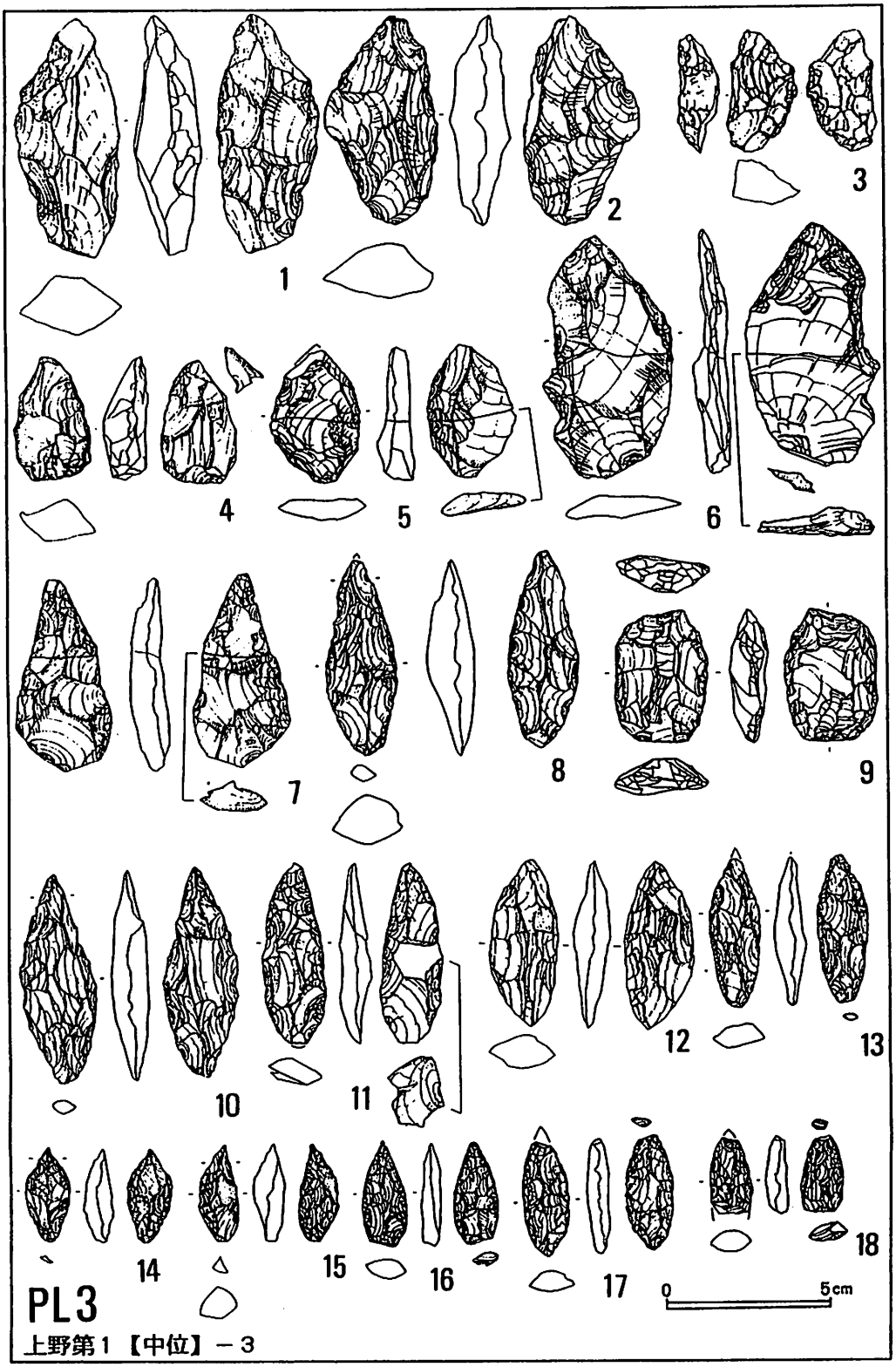
PL1

1段：栗原中丸【下部】、2段左端：上草柳第3西【下部】、上野第1：【中位】



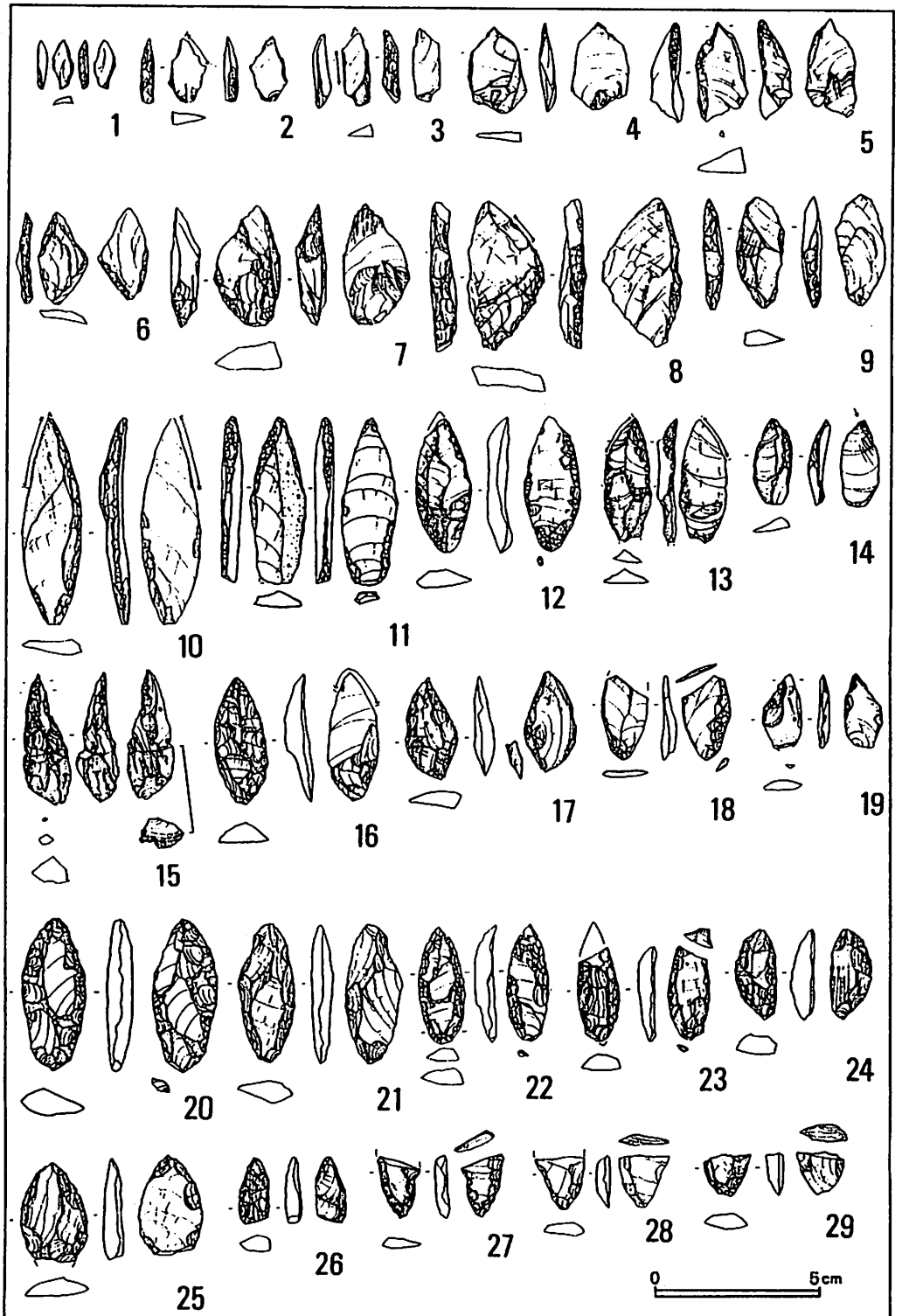
PL2

上野第1【中位】－1

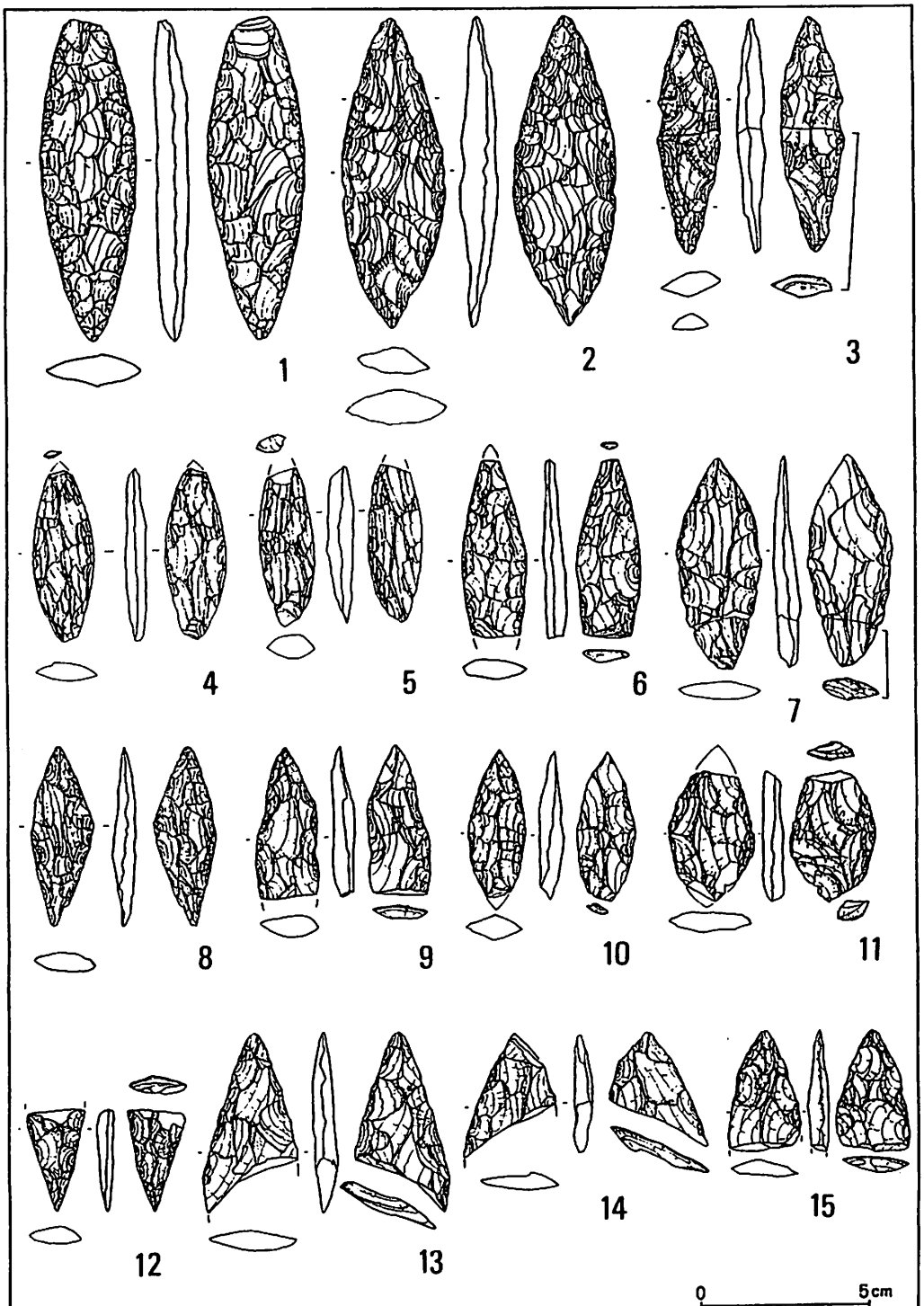


PL3

上野第1【中位】－3

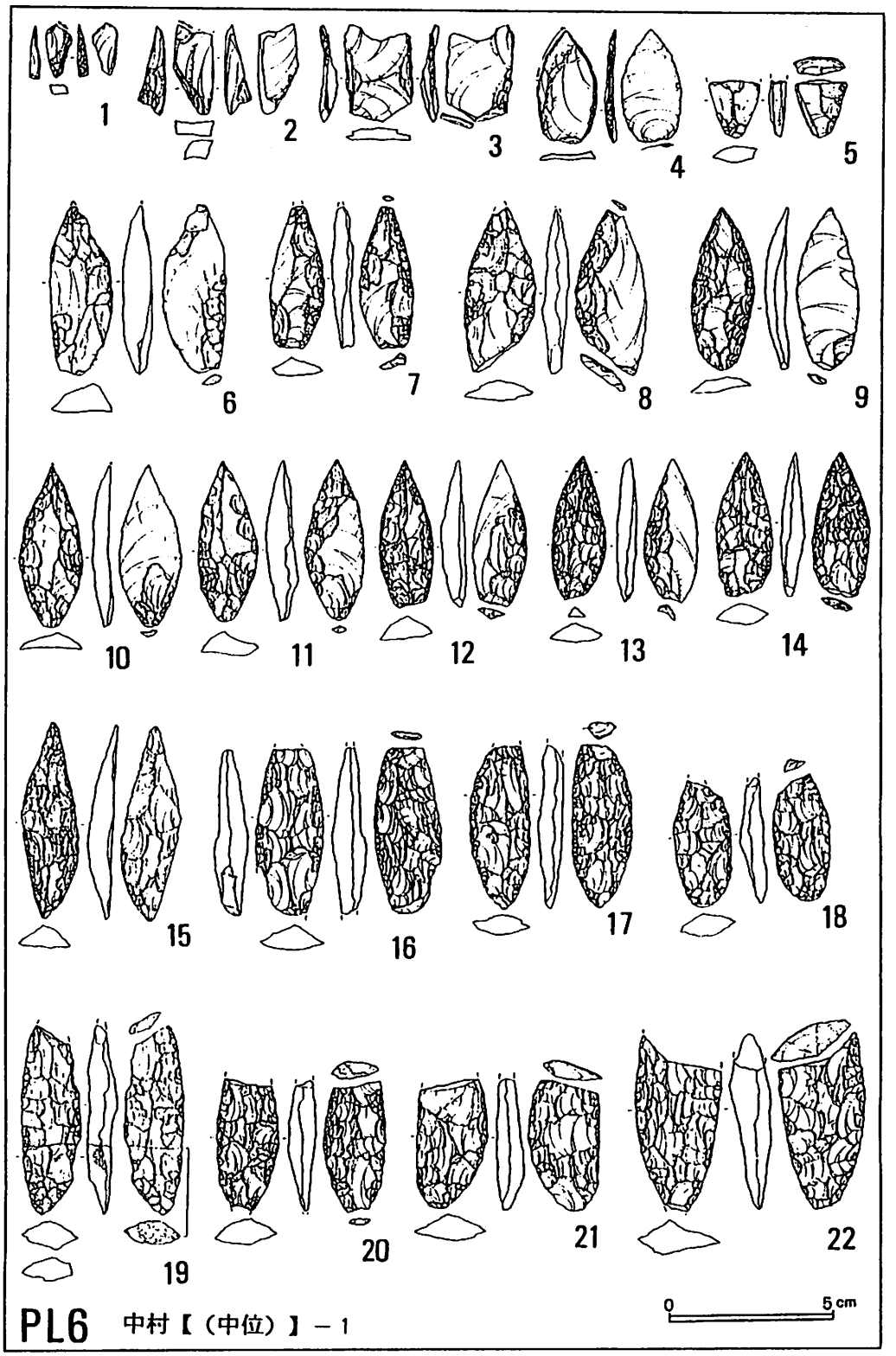

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5cm

PL 4 上野第1【中位】－2

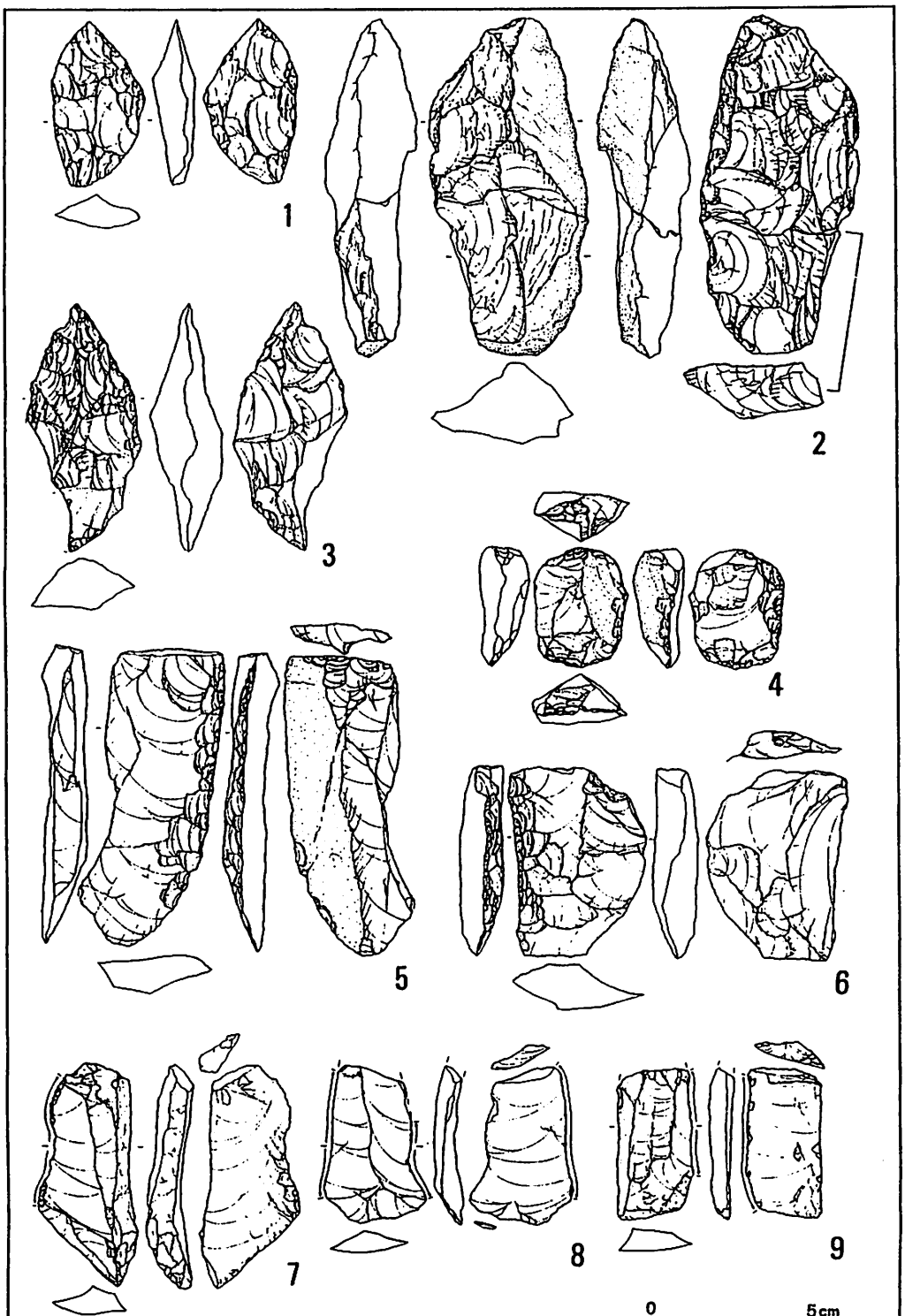


PL5

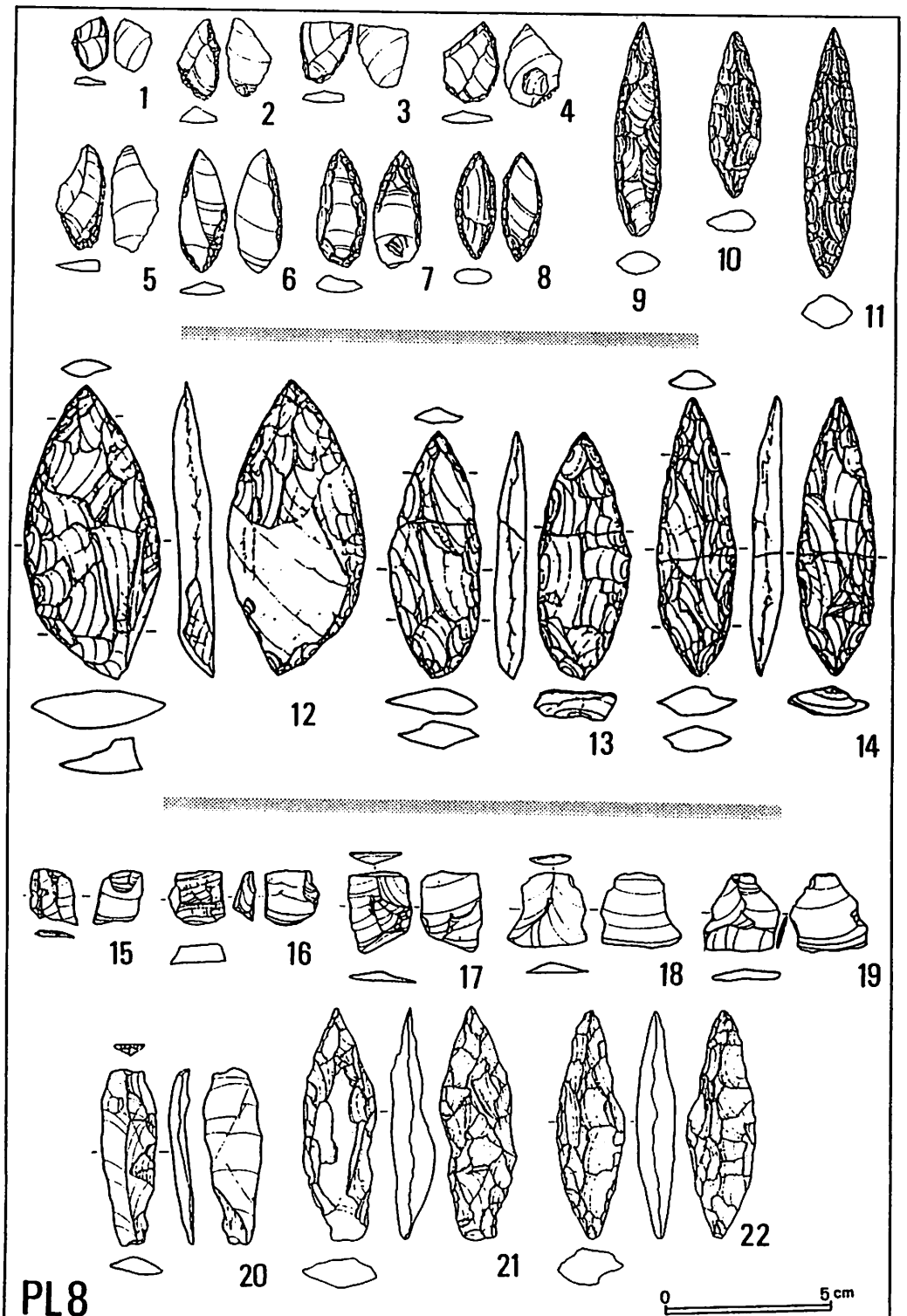
上野第1【中位】－4



PL6 中村【（中位）】－1

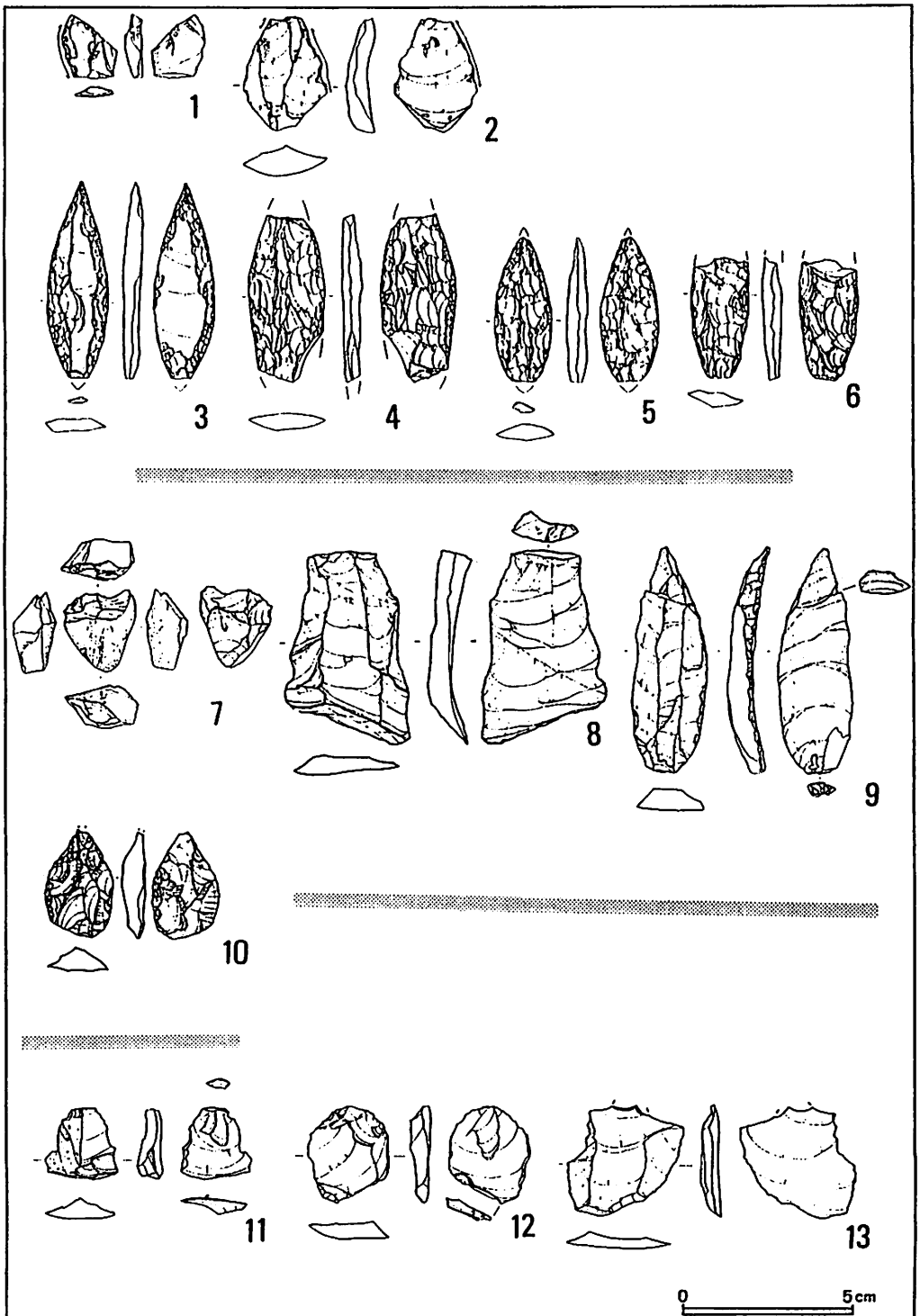


PL7 中村【(中位)】－2

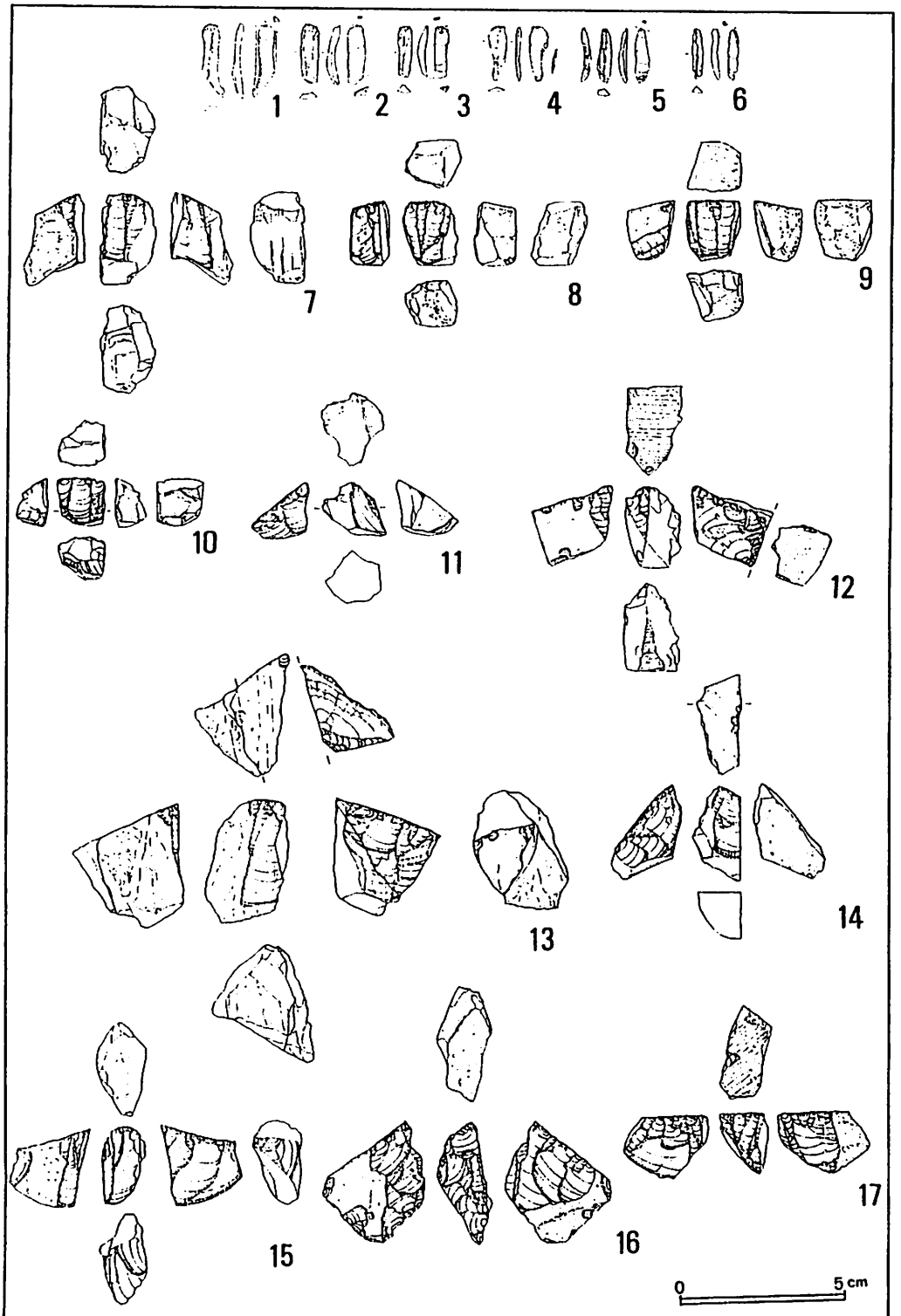


PL8

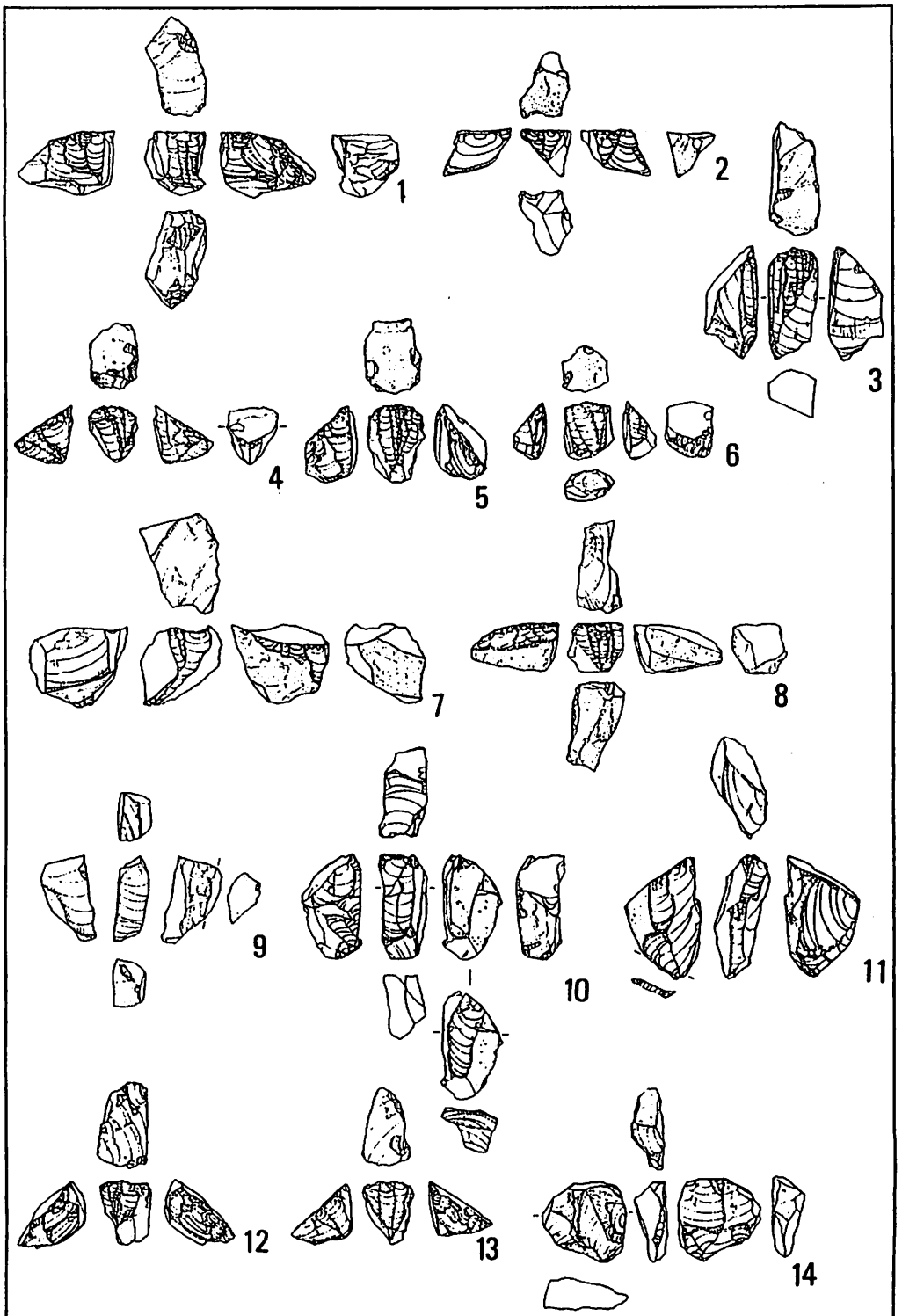
上段：月見野ⅣＡ【（中位）】、中段：宮ケ瀬No. 12【中位】、ほか：寺尾【中】



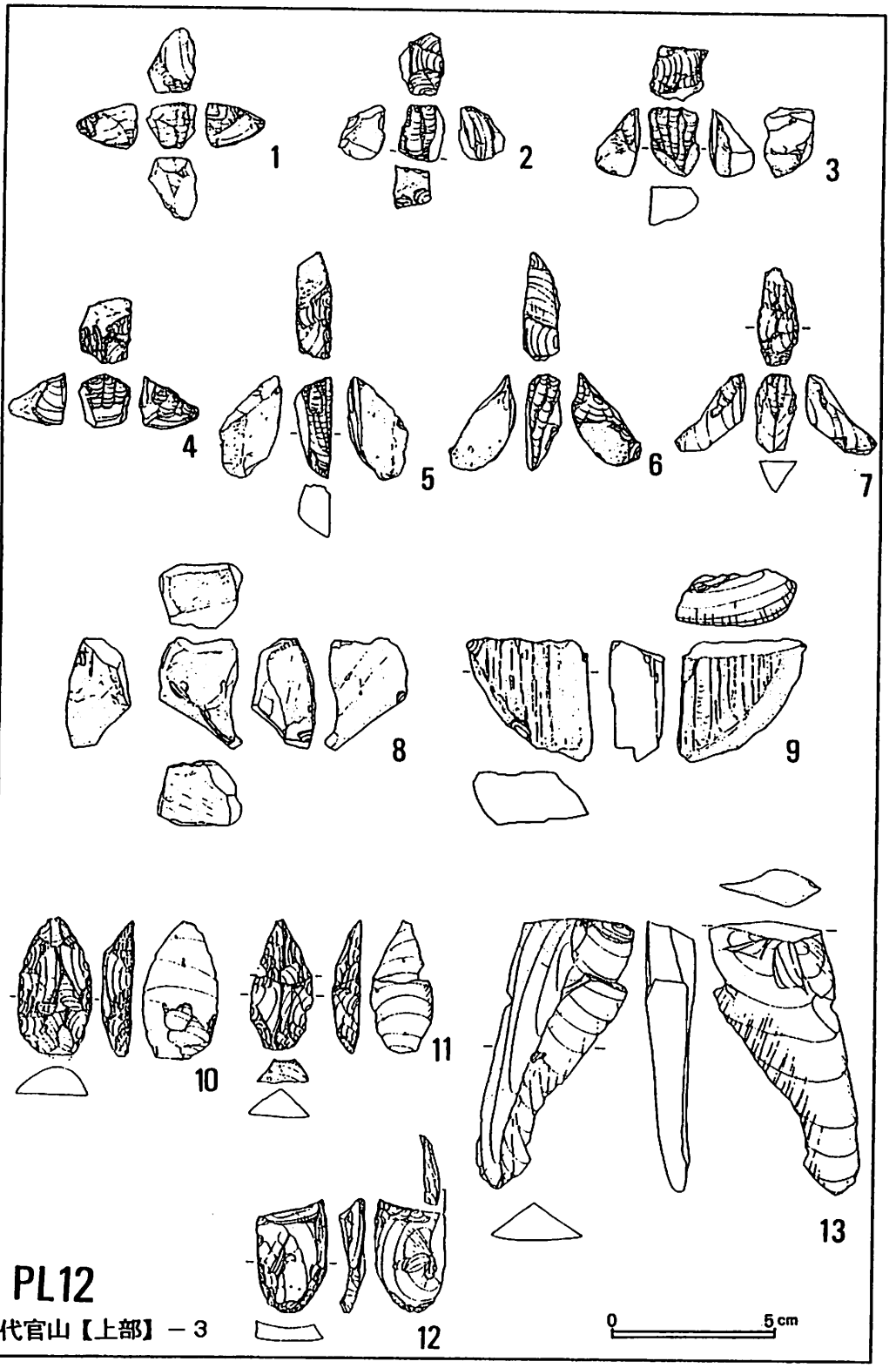
PL9 1・2段:川尻【中部】、3段:上草柳第2【(中)】、4段:栗原中谷【中】、5段:旧石福前山【(中)】



PL10 代官山【上部】－1

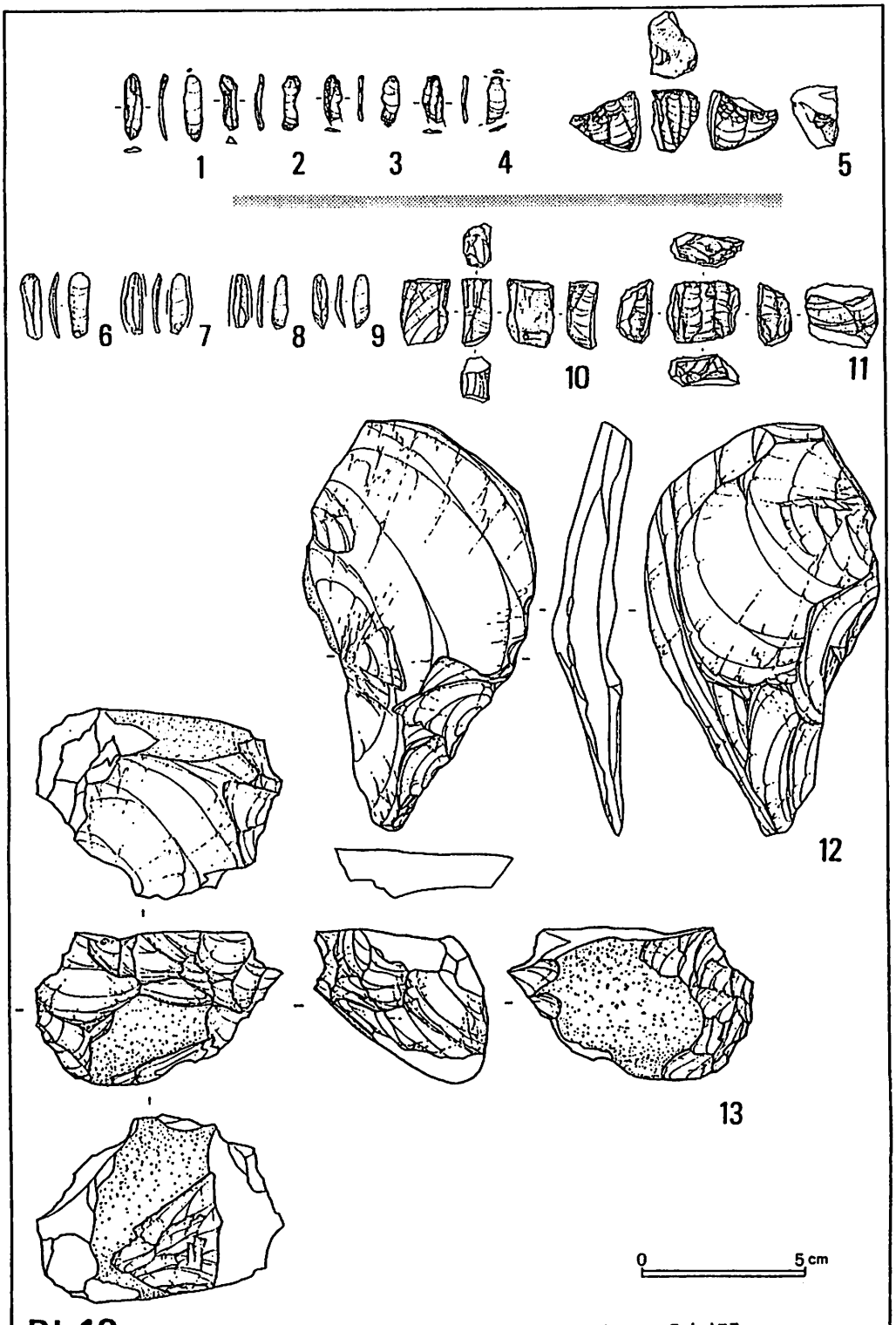


PL11 代官山【上部】－2

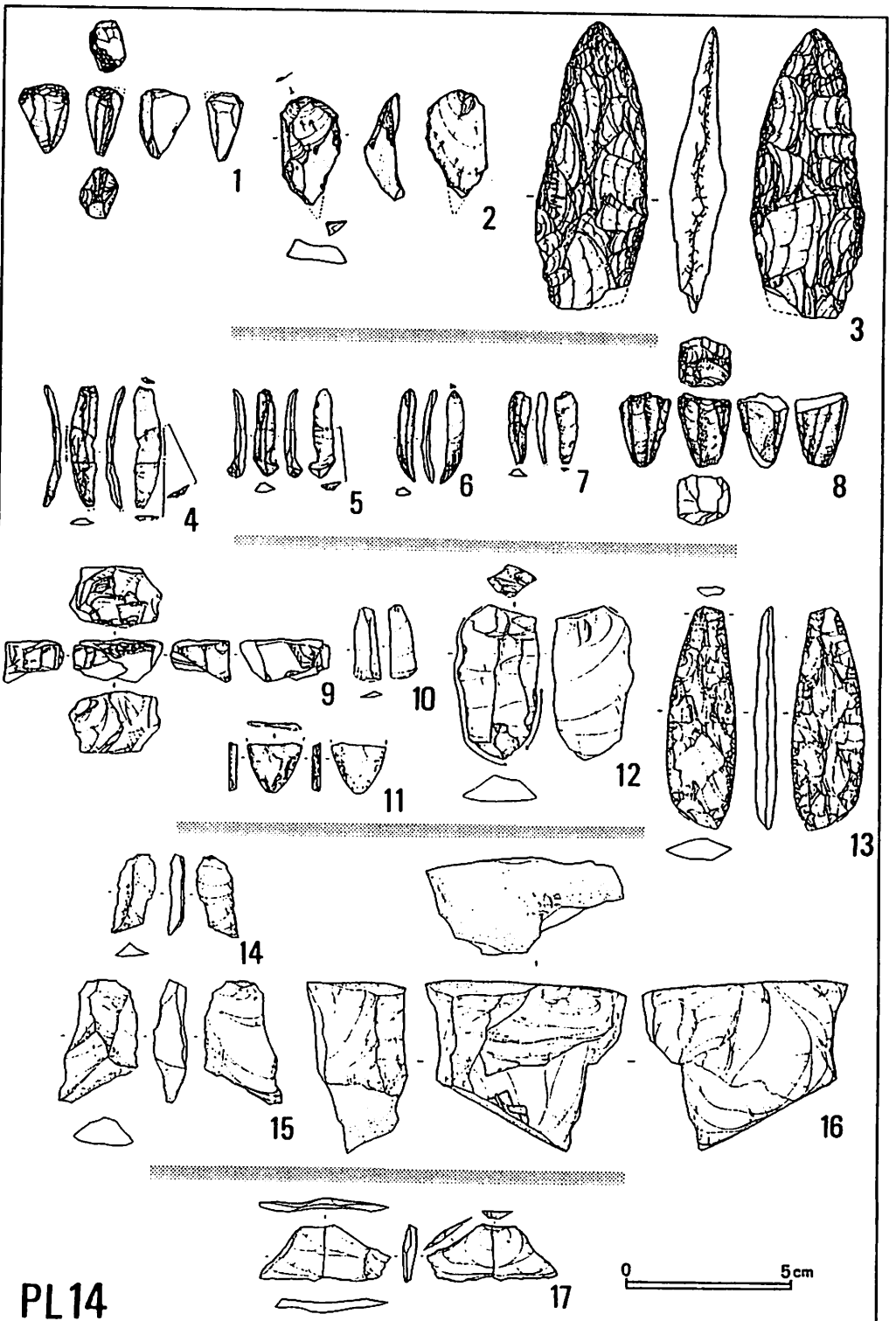


PL12

代官山【上部】－3



PL 13 最上段：吉岡B区【上部】、ほか：柏ケ谷長ヲサ【上部】



PL14

1段：慶応校地【上半部】、2段：かしわ台駅前【上位】、3段：長堀南【(上位)】、4段：上草館第3東【上面】、5段：上草館第3西【上面】

中部高地の細石刃階程の課題

森嶋　稔

1　はじめに

はじめにあたって、「細石刃文化」は有り得たかを問うこととしたい。すくなくともそれが文化であるとすると“意図の物質的精神的成果であり、生産の束（組成）であり、伝承・発展するもの”であるはずである。その点“尖頭器文化”と言われる階程の週末期に出現してくるかと見られるこの種の石器群は、次ぎの日本列島的新石器文化である縄文文化との間隙を埋めるものとしての去就が注目される。文化と呼ぶにふさわしい生産の束であるのかを当初に問うておきたいのである。

かつて私は性急に国外の資料と比定させ、その系統や新旧を云々するより、日本列島内でここまでは可能であると言える骨組みを作るべきであり、比定はそれからでも遅くないのではなかろうかと言ったことがある。同じドットの大きさを用いるなら、日本列島の遺跡のドットは真赤になり、国外、とりわけシベリアなど極東のドットは米の井のアラ程に過ぎないのではないかと疑ったからである。しかし今回、国外の資料も増加し、日本列島との比定も、年代観を除けば容易になって来た事情があって、認識は更に広がりを見せて来ているのが現実である。その中で「細石刃文化」は有り得たか、あるいは「細石刃文化」は「文化」たり得たかをあえて問い返し、勉強したいものと思う。

2　成立をめぐって

細石刃の階程は一存続した剥離により生産された細石刃をもととする複合石器一を概念としている。細石刃はブレードテクニックを基本としていて、単体では役に立たない。いわば組み合わせによる刃物である複合石器を再生産して目的物たる道具たり得るものである。

この複合石器の生産技術はまったく尖頭器を主とする階程にはなかったものであるかについて若干のアプローチを試みてみたい。

尖頭器はナイフ形石器の中から機能的に分化して来た可能性が高い。その中には両面加工という石器生産技術の展開があってのことである。一つの石器生産技術が発生し、獲得

されると、その技術の展開の中で必要な機能の道具がまかなわれる傾向がある。両面加工と言う新しい石器生産の技術は、したがって多様化する。目的化した石器、いわば両面加工という技術を用いて各機能を充足させる合目的的な石器をつくり出す。本来、刺突と切削を機能としていた尖頭器が、刺突の機能と切削の機能とを分離独立させ、最もふさわしい形態へと変化をはじめる。こうして尖頭器型の石器、両面加工を基本とする合目的的な石器がつぎつぎにつくり出されて行く。こうした尖頭器型の石器の多様な形態の時期が存在するかに受け取られる。こうしたなかに何等かのものに装着された単体の石器が、複数の石器になり、より合目的的な機能を果たすことになっていったものが生まれて来る土壌はないのであろうか。技術の系譜はその可能性を指向しているように思える。だが多様な両面加工の尖頭器様の石器組成の中に最早や尖頭器としては機能し得ないものがあることに気づく。塩尻市高出などの資料はその最たるものである。複合石器と見られるものは特に小形のナイフ形石器（切出し形石器と呼ばれたこともある）にすでに言及されているが、こうした技術的系譜はすでに潜在していたものと考えてよい。複合石器の生産技術は小形のナイフ形石器や両面加工を基本とする尖頭器の展開の中に存在していたとみるべきではないだろうか。

3　二つの流れ

北まわりの楔形細石刃核と南まわりの円筒・円錐形細石刃核とは象徴的に論議されてきた。シベリア、中国を含めて極東のヤクート、サハリン、日本列島の北域に楔形細石刃核＋荒屋型彫刻器の分布はすでに広域にわたって注目されているところである。日本列島も北海道、東北、北陸、中部高地、関東など最近は中国地方の一部までその系譜に入るものが確認されている。広義の湧別技法の中にあって両面加工の尖頭器状ブランクをもとに縦割りのスキー状スポールなどを伴うものもある。荒屋型彫刻器の範疇に入るものも組成している。実は北九州を中心にこの種の概念の中にある楔形細石刃核と土器を伴うものがあることは周知の事である。これには荒屋彫刻器の類は伴出していない。したがって同列に把握することは難しいが、ルートの差と時間差と受けとれる気配である。

南まわりの円筒・円錐形細石刃核の一群はユーラシア大陸でも中南部と比定される気配である。中部高地以西から瀬戸内にかけて分布し、その主体となっている。

はからずも中部高地は北まわりの楔形細石刃核と円筒・円錐形細石刃核を検出できる地域であるのも興味ある事象である。野辺山高原には有名な円筒・円錐形細石刃核を出す

矢出川遺跡があるが、ここからも楔形細石刃核の系列に入るものも採集されており、同高原の中ツ原第５地点をはじめとして柏垂などからもこの系列のものは調査検出されているのである。

中部高地にはこの二つの細石刃核の流れ、細石刃を生産する技術の流れが交錯しているとみることができる。北まわりのそれは遊牧民的であり、南まわりのそれは農耕民的色彩をみて言及する研究者もいる。しかし結論は性急に求めるべきではなくその前になさねばならない多くの課題が横たわっている。

４　時間的位置へのアプローチ

シベリア中央北部では二万数千年前とされる細石刃の階程が報告されている。日本列島の細石刃の資料をすべて横並びに把握して、二つの流れを相対的にみてよいのだろうか。単に技術的な系譜の違いとのみ理解出来ない時間的位置の違いを把握される可能性がある。この問題に最初に自然科学のデータを使ってではあったが指摘したのは杉原荘介氏であった。今は当然のごとく自然科学のデータを用いるが、楔形細石刃核と円筒・円錐形細石刃核相互のあるいはその内部における時間的差異について明らかにしていく必要がある。型式学的方法を根幹とすることは当然のことであるが、重要な課題であると言えよう。

ナイフ形石器を少量伴う楔形細石刃核をもつ一群と円筒・円錐形細石刃核の一群・彫刻器の型式学的去就の中で、神子柴型石器組成のある段階の石器や最古形式群の土器を伴う一群と共に関東などから検出されて来ていることに留意する必要がある。すくなくとも両系列の石器群が加わり一つの組成となって行くことを示唆している。これが縄文化現象への道程だとすると、併列石器文化の解体への過程が内存していることになる。これは重要な課題であって観過ごして通れぬ認識であるように思う。それはさておき以上みて来ただけでも①二つの系統の問題、②成立期の問題、③展開期の問題、④解体期の問題がそれぞれの内にあるばかりでなく、⑤年代観の問題や⑥他系列との関連の問題などが存在している。時間的位置その去就はこうした問題を型式学的にアプローチされねばならない。その中には北まわり、南まわりの構造的な意味、機能論的な意味を克服しなければならない。すくなくとも日本列島では細石刃の階程に①成立期、②展開期、③解体期の段階が存在することは確実である。

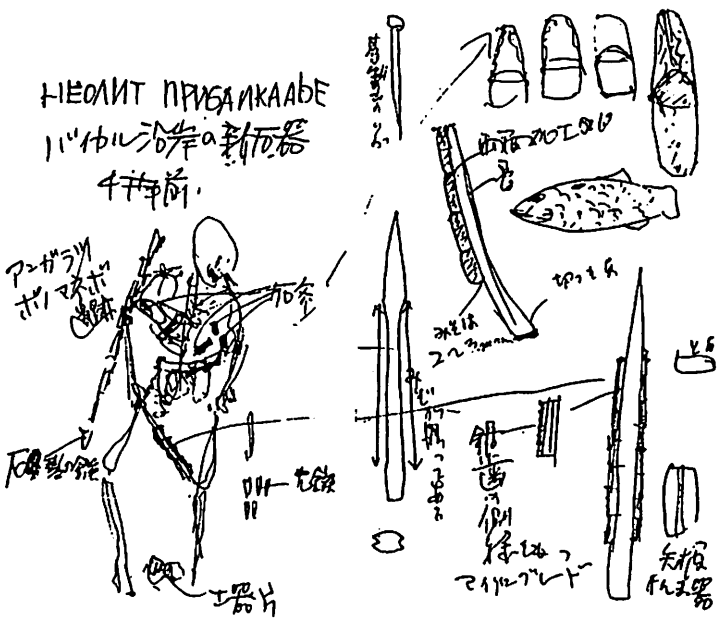
5　複合石器にかえる

約２０年前レニングラードのエルミクージュ博物館で見たシベリア新石器時代のボノマネボ遺跡埋葬資料についてはすでにふれたことがあった。前4000年という人骨の身に帯びていたのは①骨製の柄の両側に細石刃のはめこまれた剣、②骨製の柄の片側に両面加工の植刃がはめこまれたナイフ、あるいは刀、③木製の柄の先端に装着された鏃形石器の手槍であった。定角式の石斧、刃部磨製の断面三角の石斧、矢柄研磨器、骨製ナイフ、砥石、石鏃、魚形石製品、無文の土器片が副葬されていた。複合石器を目の当りにした驚きはまだ消えない。その道具と組成にいたっては本物を見た思いがいつまでも残った。

あの小形の石器を用いて、どんな大形の道具も自在につくれるのである。着脱は容易である。補充も容易である。かなり合目的的な利器をつくり出すことができる。もしかしたら大形の石器（道具）のイメージがあったからこそ発達して来た技法ではなかったか。大形で破損しやすい道具（利器）をクリアーするために発生し、発展し、終末をむかえた利器ではなかったかと夢想はひろがる。

基本にかえることがどうしても必要である。それも素朴な原点へかえることがどうしても必要である。ズームレンズのように遠地点も近地点もそれによってつかまえられる。

（１９９３・８・３１）



アンガラ川上流、ボノマネボ遺跡の埋葬資料
（ソ連邦エルミタージュ博物館蔵　筆者スケッチより）

細石刃と槍先形尖頭器の併存とその意味

島立　桂

本稿では、細石刃と槍先形尖頭器の併存とその意味について、西南日本における細石刃文化がどのような過程を経て出現したかという問題に焦点をあて、これを検討しながら考えてみたいと思う。

さて、西南日本において最も普遍的にみられる、野岳－休場型細石刃核を指標とする細石刃文化の出現については、①在来の石器製作技術、例えば小型の縦長剥片剥離技術を独自に発達させて細石刃生産を開始した、②外来の石器製作技術の影響を部分的に、あるいは全面的に受け入れた、という見解がある。さらに、関東地方という一定の地域において、必ずしも各集団が等質の石器製作技術を保有していたとは限らず、細石刃文化に対する取り組みが集団ごとに異なっていた、すなわち、各集団の様々な事情に応じて、外来の石器製作技術を受け入れたり、在来の石器製作技術を踏襲したことも充分に考えられる。果たして、関東地方の場合は、どのような解釈が可能なのだろうか。細石刃文化直前期の石器群を検討することによって考えてみたい。

堆積条件の良好な神奈川県相模野台地をみると、細石刃文化の上限を示す石器群として、立川ローム層Ｌ１Ｈ上部に包含されている柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層、代官山遺跡第Ⅲ文化層がある。したがって、相模野台地における細石刃文化直前の石器文化は、Ｂ１上部以降、顕著な発達をみせる槍先形尖頭器文化ということになる。

Ｂ１上部において成立し、Ｌ１Ⅱ以降に発達する相模野台地の槍先形尖頭器文化には、様相の異なる２つのグループが認められる。これを、それぞれＡ・Ｂ群とする。

Ａ群は月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅳ文化層を典型例とする。槍先形尖頭器は、細身の木葉形を基本形態とし、①中（・大）型両面調整で、安山岩、チャートなどの地元石材を用いるものと、②小型片面・周辺調整で、遠来の黒曜石を用いるものの組み合わせで構成されている。槍先形尖頭器以外の器種として、形態の一定しない中・小型のナイフ形石器、削器が少量ある。また、「不定型」の剥片を生産する技術が伴う。

Ｂ群は深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層を典型例とする。槍先形尖頭器は、小型で幅広の木葉形を基本形態とし、両面調整、あるいは片面調整が施され、石材は不純物を多く含む漆黒色の黒曜石を用いるもので構成されている。槍先形尖頭器以外の石器としては、小型幾何形のナイフ形石器が安定して伴う。また、こうした石器の素材生産技術として、幅広ながら縦長剥片を生産する技術がみられる。石器群全体の石材は、黒曜石が圧倒的多数を占める。

以上の２石器群は、Ｂ１上部からＬ１Ｈ下部にかけて平行して存続しており、時間的前後関係ではなく、集団による技術的伝統の差ではないかと思われる。

Ａ群はＢ１上部で成立して以降Ｌ１Ｓに至るまで、槍先形尖頭器の形態とその組み合わせ、使用石材を徐々に変えながら存続する。具体的には、①槍先形尖頭器の大量生産を開始した、槍先形尖頭器文化出現の段階（下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層；Ｂ１上部）→②槍先形尖頭器の形態組成や素材が多様化する段階（月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅳ文化層→中村遺跡第Ⅲ文化層；Ｌ１Ｈ）→③両面調整の増加と大型化の段階（風間遺跡第Ⅰ文化層（ａ）→寺尾遺跡第Ⅰ文化層；ＢＯ～Ｌ１Ｓ）に変化する。土器出現期の石器群も、こうした展開の中で考えることができる。最終の③の段階には、北方からの、神子柴・長者久保文化や湧別技法をもつ細石刃文化の一部をも取り込み、複合的な様相が強くなる。一方、Ｂ群はＢ１上部で成立し、大きな変化もないまま、Ｌ１Ｈ上部をもって消滅する（深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層→中村遺跡第Ⅳ文化層→上和田城山遺跡第Ⅱ文化層４区）。Ｌ１Ｈ上部において細石刃文化が出現すること、槍先形尖頭器文化Ａ群が継続的な展開を示すものの、槍先形尖頭器文化Ｂ群が断絶することを考え合わせると、在来石器文化（集団）の中で野岳－休場型細石刃核をもつ西南日本型の細石刃文化となんらかの関わりをもつのは、槍先形尖頭器文化Ｂ群の担い手という可能性がある。

野岳－休場型細石刃核をもつ西南日本型細石刃文化初期と槍先形尖頭器石器文化Ｂ群との共通点は、不純物を多く含む漆黒色の黒曜石を主要石材に用いること、小型で幅広な木葉形を呈する槍先形尖頭器をもつこと、幅広の縦長剥片を生産する技術を保有することである。反面、細石刃製作技術にみられる各種石核調整（打面・頭部・側面調整）と押圧剥離手法、微細剥片を組み合わせて道具とする技術は、在来石器文化に顕著ではなく、突発的である。こうした共通点と相違点を考慮すると、細石刃文化と槍先形尖頭器文化Ｂ群とは互いの関連が想定されるものの、漸移的、連続的な変化とはいいがたい。

したがって、西南日本型細石刃文化は、関東地方で独自に形成されたものではなく、他地域から流入した別個の文化と考えられる。

近畿・瀬戸内地方では、槍先形尖頭器文化の発達はみられず、細石刃文化直前の石器文化は、大阪府大園遺跡や香川県井島遺跡に代表されるような小型不定型の剥片を素材とするナイフ形石器文化と考えられる。本石器文化には定型的な縦長剥片を生産する剥片剥離技術は伴わない。九州地方においても、細石刃文化直前期には槍先形尖頭器文化は存在せず、小型の台形石器（百花台型）をもつ石器群、あるいは台形石器を伴わず、中型の縦長剥片を素材とするナイフ形石器群（堤西牟田第Ⅳ文化層）がある。したがって、西南日本のいずれの地域においても細石刃生産に漸移的に移行し得る要素（小型の石刃を生産する技術）はみられず、突然出現した観が強い。また、一方で、西南日本各地における石器文化は、上記のとおり独自性が強く相互に異なる内容を示しているにもかかわらず、突然、

斉一性の高い細石刃文化へと転換した背景も考えていかねばならない。

翻って、中国大陸に目を向けると、北緯35～40度を境とし、北の河北省、吉林省、遼寧省、黒竜江省、内蒙古自治区などに湧別技法を代表とする楔形細石刃核や荒屋型彫器、石刃技法などをもつ細石刃文化が分布し、南の河南省、山東省から広東省にかけては野岳－休場型、船野型細石刃核の類例をもつ細石刃文化が認められる（河南省靈井遺跡、山東省黒竜潭遺跡、江蘇省大賢庄遺跡、広東省西樵山遺跡）。中国における細石刃文化の出現経緯は、当該期直前の資料が極めて少ないため不明であるが、少なくとも中国には日本列島と同様、南北に２種類の細石刃文化があり、その内、南の一群が山東半島付近を経由して、西北九州地方に渡来した可能性が極めて高い。

細石刃文化の起源について忘れられない見解として、東北日本に展開する湧別技法をもつ細石刃文化が南下し、西南日本において伝統的な縦長剥片剥離技術（小型の石刃生産）に影響を与えた結果、野岳－休場型細石刃核が作られたというみかたがある。しかし、近年の調査・研究の成果から、関東地方に湧別技法が到来した時期は細石刃文化の後半から終末の段階という可能性が高く、上記のみかたに否定的である。

以上をまとめると、関東地方において細石刃文化の直前には、石器製作技術や使用石材の違いから認識される２つの槍先形尖頭器をもつ集団群が存在し、一方は在来の槍先形尖頭器文化を踏襲、発展させ、土器出現期に至る。他方は中国南半部を起源とする、外来の細石刃文化を全面的に受け入れ、在来技術を一時的に放棄したと考えられる。同一地域内に異なる技術をもつ集団が併存した理由のひとつには、石器石材の供給地を取り込んだ移動ルートの違いと、移動範囲の生態系、狩猟方法の違いが互いに結び付いて形成された「生活様式全体の差」が背景にあったと思う。その結果、槍先形尖頭器文化の形成された東北地方南部から関東・中部地方にかけては、槍先形尖頭器文化と細石刃文化という異なる２種の石器文化がモザイク状に併存し、近畿地方以西では、細石刃文化一色になったと考えられる。

したがって、西南日本における細石刃と槍先形尖頭器は、本来同一石器文化の中で共存するものではなく、系統の異なる別個の石器文化の個別要素として存在した。それが、互いの地域的、時間的展開の巡り合わせで、一定地域の中において併存したとみたい。石器の形態、製作技術、石器ブロックのあり方や炉のような施設を含めた一集落の景観、石器製作地と消費地の区分が明瞭であったか否かといった点に反映される社会構成など、様々な文化要素をみても、同時期に存在する両石器文化は互いに頻繁な交流があったとは思えない。道具としての細石刃と槍先形尖頭器は共存せず、それを担った集団が、互いに隣接しながら共存したというのが結論である。

なお、本テーマについての先学の業績は枚挙にいとまなく、それに基づいて本稿を成したが、今回は参考文献を省略させていただきます。

相模野台地における細石刃石器群と尖頭器

諏訪間順

1　相模野台地における細石刃石器群の変遷

相模野台地における細石刃石器群は、Ｌ１Ｈ上部からＬ１Ｓ上部までの層厚にして50～70cmいう全国的に見ても極めて厚い出土層順を持っている。したがって、同一遺跡から時期の異なった細石刃石器群が層位的に検出されている例もあるため、こうした層位的出土例を基軸としてその変遷を検討することができる。

現在では野岳・休場型細石刃核（稜柱形）－船野型細石刃核（船底形）－削片系細石刃核（楔形）という細石刃核の型式的な変遷が明らかになっている（鈴木1983、堤1987等）。筆者は相模野台地における先土器時代から縄文時代草創期までの石器群の変遷を層位的出土例の検討により１２の段階に区分しているが、細石刃を石器組成に持つ石器群は相模野段階Ⅸ～Ⅺの３段階に認められ、それぞれ野岳・休場型細石刃核（稜柱形）－船野型細石刃核（船底形）－削片系細石刃核（楔形）３型式の細石刃核を特徴として段階設定している（諏訪間1988）。そして、こうした相模野台地での石器群の変遷を基にして、相模野台地を含むより広い範囲でその広がりと展開を考えた場合、細石刃文化第１段階から第４段階までの大きく４段階の石器群の変遷が考えられる（諏訪間1991）。まず、議論の前提である相模野台地の様相について簡単に述べてみよう（第１図）。

段階Ⅷ

本段階は、尖頭器を主体としており、細石刃出現以前の段階として位置付けられるものである。層位的にはＬ１Ｈ層中部から上部に出土層順を持つ。主な石器群としては中村遺跡第Ⅲ文化層（伊藤1987），月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅳ文化層（相田1986），寺尾遺跡第Ⅱ文化層（白石1980）等が挙げられる。石器組成は尖頭器を主体とし、削器、掻器、彫器、錐器等によって構成される。尖頭器は両面加工、半両面加工、片面加工とあるが、両面加工のものが多く、大きさはバラエティーに富むが５㎝～７㎝の中形品が最も多い。削器は大形の剥片を素材としたもので、比較的多く検出されている。その他の加工具である掻器、彫器、錐器は少ない。ナイフ形石器は各石器群に数点認められるが定形的な

ものは極めて少なく、出土状況は共伴として積極的な根拠に欠けるものも多い。石材はチャートや安山岩、細粒凝灰岩を多用し、黒曜石は少ない。剥片剥離技術は尖頭器製作の技術基盤として、大型の剥片を目的とするものであるが、遺跡内で剥片剥離を行った形跡が認められない石器群も存在する。

段階Ⅸ

本段階は、細石刃主体の石器群であり、Ｌ１Ｈ上部からＢ０中部までに出土層位を持つ石器群である。主な石器群としては代官山遺跡第Ⅲ文化層（砂田1986）、柏ケ谷長ヲサ第Ⅳ文化層（堤1983）、月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅲ文化層（堤1986）、上和田城山遺跡第Ⅱ文化層（中村他1979）等が挙げられる。石器組成としては細石刃、細石刃核、彫器、削器、掻器、錐器、礫器等によって構成される。石材は細石刃関係にはほとんどが黒曜石を用いている。中～大型の削器は安山岩や凝灰岩を用いている。

本段階は細石刃核が野岳・休場型細石刃核（鈴木1973）で占められ、細石刃は両側縁が平行し、幅が狭いという特徴を持っている。

段階Ｘ

本段階は、船野型細石刃核の出現を持って段階設定できるものである。Ｂ０中部からＬ１Ｓ上部までに出土層位を持つ石器群である。主な石器群としては、上草柳遺跡第１地点第Ⅰ文化層（堤 1984a）、報恩寺遺跡（鈴木・矢島1979）、相模野№.１４９遺跡Ｌ１Ｓ下部文化層（鈴木1989）、下鶴間長堀遺跡第Ⅰａ 文化層（堤 1984b）等が存在する。

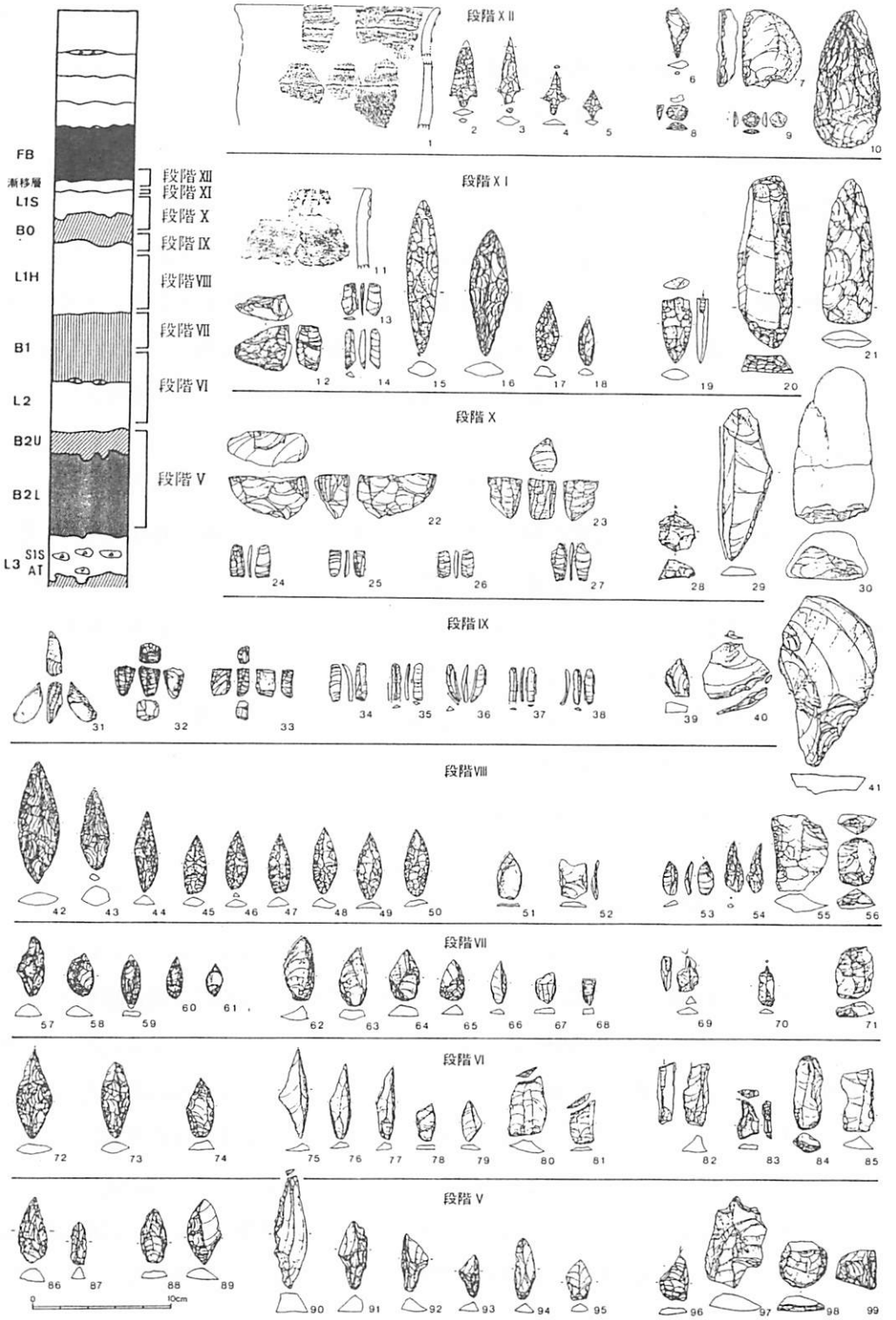
本段階は石器組成は段階Ⅸとは基本的に変わらないが、細石刃核が野岳・休場型細石刃核のみで構成されるわけではなく、船野型細石刃核も新たに出現する。また、細石刃の形状が全体的な傾向として幅広であることが特徴として挙げられる。石材は黒曜石は少なくなり、在地系石材といわれる細粒凝灰岩やチャートが多く用いられるようになる。

段階Ⅺ

本段階は、尖頭器を中心として削片系細石刃核を持つ段階として設定している。Ｌ１Ｓ上部から上面に出土層位を持つ石器群である。

主な石器群としては、月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅱ文化層（相田・小池1986）、寺尾遺跡第Ⅰ文化層（白石1980）、栗原中丸遺跡第Ⅰ文化層（鈴木1984）、相模野№.１４９遺跡Ｌ１Ｓ上部文化層（鈴木1989）、長堀北遺跡第Ⅱ文化層（小池1991）、勝坂遺跡（内川・高橋1993）等がある。

石器組成は尖頭器、削器、掻器、石斧、礫器などで構成され、これに削片系の細石刃核



第Ⅰ図　段階Ⅴ～段階XIIの石器群

が共伴する石器群もある。本段階に有舌尖頭器が共伴するかは微妙である（註１）。寺尾、相模野№.１４９、月見野遺跡群上野第１－Ⅱ、勝坂遺跡では土器の共伴が認められる。石材は安山岩、細粒凝灰岩を多用するという特徴を指摘することができる。

段階XII

漸移層から富士黒土層（ＦＢ）下部に出土層位を持つ石器群である。

主な石器群としては月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅰ文化層（小池1986）、月見野遺跡群上野遺跡第２地点ＦＢ下部（戸田他1984）、柏ケ谷長ヲサ遺跡ＦＢ下部文化層（中村1983）、代官山遺跡第Ⅰ文化層（砂田1987）、長堀北遺跡第Ⅰ文化層（小池1991）等がある。石器組成は有舌尖頭器、尖頭器、削器、掻器、錐器、石斧等によって構成される。有舌尖頭器が主体となり尖頭器は少なくなる。まだ、石鏃は出現していない。土器は隆起線文系土器である。石材はチャート、安山岩、黒曜石などが用いられている。

以上、相模野台地における細石刃石器群とその前後の尖頭器石器群の様相について簡単に述べたが、こうした石器群の変遷は南関東地方のみならず、岐阜県開田村柳又遺跡での層位的な出土例をはじめとして、長野県南部から北関東地方までの広い範囲で基本的に同じような変遷がたどれると予想できる（諏訪間1991）。

また、細石刃石器群については、次の４段階に区分できる（第２図）。

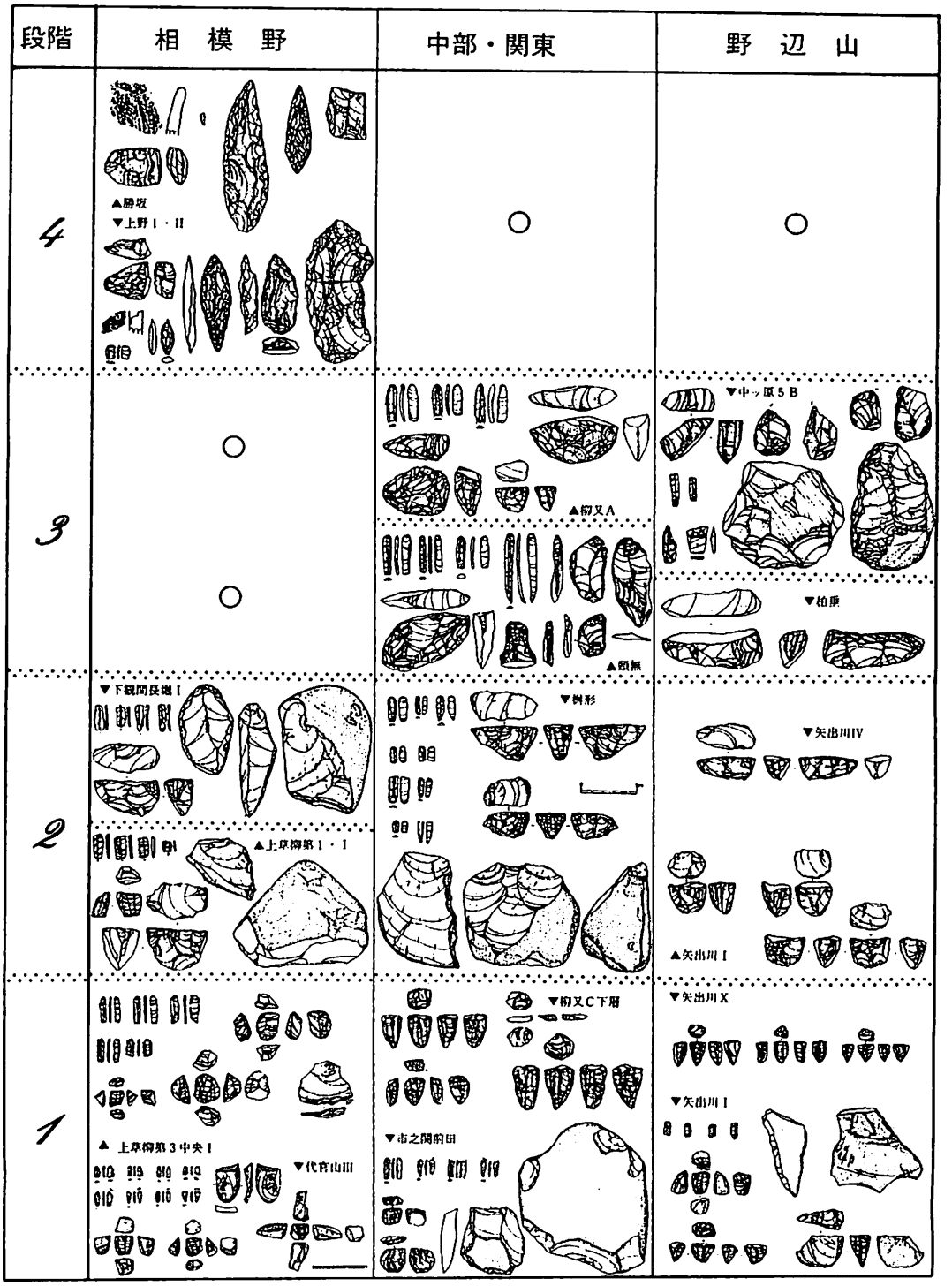
第１段階　野岳・休場型細石刃核のみ（段階IX）

第２段階　野岳・休場型細石刃核＋船野型細石刃核（段階Ｘ前半）

第３段階　削片系細石刃核のみ（段階Ｘ後半）

第４段階　神子柴系尖頭器＋削片系細石刃核（段階XI）

上記の４つの段階区分は既に論じたようにいくつかの問題を含んでおり、あくまでも細石刃核の型式と尖頭器の共伴等によって区分したものであり、段階的な変遷観を示したに過ぎない。特に第３段階は相模野台地では現在まで確認されておらず、第４段階との時間的な関係については、層位的に裏付けられているわけではなく、特に削片系細石刃核と尖頭器の分布状況からは中部高地と相模野台地との地理的な位置による削片系細石刃文化や神子柴系文化の波及の仕方の違いとして捉えられる可能性もあり、地域相の違いを示唆しているのかもしれない。また、第３段階内でも頁岩製の荒屋遺跡をはじめ、白草遺跡、頭無遺跡などと、中ッ原遺跡群第５遺跡Ｂ地点や柳又遺跡Ａ地点・同Ｃ地点等の在り方は時間差として考えられる可能性もある。



第2図　中部日本における細石刃石器群の段階変遷についての試案

2　細石刃石器群と尖頭器の関係

細石刃石器群に尖頭器が共伴するかいなかという問題は、細石刃石器群の構造を考える上で極めて重要な点である。そして、細石刃出現の直前に展開する尖頭器石器群と細石刃石器群の終末期に尖頭器を中心とした石器群が展開することが明らかとなってきているがこの細石刃石器群を挟んで展開する尖頭器石器群の系統性と断続性、そして、神子柴文化というものの評価にも関わる問題であろう。こうした点は既に細石刃石器群（段階XIを除く）には尖頭器は共存しないとする見解を筆者をはじめ（諏訪間1989）、伊藤恒彦氏（伊藤1988・1989）、堤隆氏（堤1991）らが論じている。一方、細石刃以前の尖頭器は継続するという見解も鈴木次郎氏（鈴木1989a ・1989b ）、白石浩之氏（白石1989）、そして最近では島立桂氏（島立1993）らによって提示されているところである。この伴うかどうかという議論は、砂川期に尖頭器が伴うか否かという議論にあったように（田中1979・1984、諏訪間・堤1985））、非常に微妙な点を多く含んでいる。

ここでは、その共伴の否定（例えば伊藤1989）を中心に若干の検討を行ってみる。

相模野台地で細石刃と尖頭器の共伴と報告されている事例は代官山遺跡第Ⅲ文化層（砂田1986）、上和田城山遺跡第Ⅱ文化層（中村1979）、上草柳遺跡第１地点第Ⅰ文化層（堤1984）等が挙げられる。

代官山遺跡第Ⅲ文化層では、尖頭器が共伴すると報告されているが、鈴木氏や伊藤氏が指摘するように、下層の尖頭器を主体とした第Ⅳ文化層の石器群と平面分布が重複し、尖頭器自体の形態からも第Ⅳ文化層に帰属するものと考えられ共伴するとは認められない。上和田城山遺跡第Ⅱ文化層でも、尖頭器を主体としたＣブロックが共伴すると報告されるが、Ａブロック、Ｂブロックともに配石を持ち頻繁な接合関係を持っているが、Ｃブロックとの接合もなく垂直分布図からはＢＯ下部にからＬ１Ｈ中部にかけて集中するようであり、本来の生活面はＬ１Ｈ上部に求められる可能性が高い。従って、段階Ⅷに対比される石器群である可能性が高いと考えられる（註１）。

上草柳遺跡第１地点第Ⅰ文化層は細石刃を主体とするブロックの外縁部に単独個体資料の尖頭器が出土しているもので、ブロックの中心部でないことや個体の共有も認められないことから共伴の可能性は低いものである。

以上、現在までの資料ではＬ１Ｈ上部からＬ１Ｓ下部までの層順での細石刃石器群（段階Ⅸ・段階Ⅹ）には確実に尖頭器が共存するという事例はないと考えられ、尖頭器は段階で主体となった後、細石刃の出現・波及によって狩猟具としての座を追われ、段階XIの御

子柴系石器群の出現・波及によって再登場するまでは、技術的消滅すると考えられる（註２）。したがって、細石刃石器群の前後の尖頭器石器群の系統性・連続性については積極的に認めることはできないと考えている。

註

註１　特に問題とされるのは繰り返し述べていることであるが、報告書作成にさいしての資料整理に問題があると考えられることである。まず、配石や礫群が伴う場合はそのレベルが当時の生活面であった可能性が強く、石器群の内容もほぼ問題ないが、これらの存在しない石器のみで構成される文化層の場合は、垂直分布図に投影して出土層位を設定する場合どうしてもそのピークを持って設定するため、本来の生活面と考えられる層順より上位に設定されている傾向がある。たとえば、上和田城山遺跡第　文化層のようにＡブロック・Ｂブロックは配石のレベルからＢ０下部に設定されているが、尖頭器主体のＣブロックは配石等の重量の有る遺物が無いため全体的な垂直分布によりＢ０下部としてしまうことである。調査・報告書作成時の段階ではやむを得ないことであるが、こうした再検討をしなければ解決できない事例も少なくないのが現状である。したがって、様々な問題意識を持って報告書の行間を読み取ることが、微妙な問題を一つ一つ解く鍵になると考えるのである。相模野台地は層位的に有効であるが故、より厳密な手続きを経た報告書の作成が求められる。

註２　柏ケ谷長ヲサ遺跡第　文化層や風間遺跡、栗原中丸遺跡などＢ０層から尖頭器石器群が出土していることもあり、一概に断言することは難しい。風間遺跡についてはその石器群の内容から、縄文時代草創期初頭の段階　　に位置付けられ、Ｂ０層と調査時に認定した層位が細尾根の斜面地であったこともあり特異な堆積状態であった可能性が高い。

引用・参考文献（主要なもののみ）

相田薫編　1986　　月見野遺跡群上野遺跡第１地点　　大和市教育委員会

内川隆志・高橋真実　1993　『神奈川県勝坂遺跡第45次調査』相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団－」『考古学ジャーナル』324

麻生順司　1987　「長堀南遺跡」大和市北部処理場建設予定地内遺跡調査団

麻生順司　1993　「先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器文化－風間　a石器文化層の位置付け－」『考古論叢神奈河』２

安蒜政雄　1984　「日本の細石器文化」　駿台史学　60

伊藤恒彦　1988　「相模野台地の２種類の尖頭器石器群」『大和のあけぼの　』大和市教育委員会

伊藤恒彦　1989　「細石刃石器群の成立と尖頭器石器群の関連について」『長野県考古学会誌』59・60

織笠　昭　1987　「相模野尖頭器文化の成立と展開」　大和市史研究　１３

栗島義明　1988　「神子柴文化をめぐる諸問題－先土器・縄文の画期をめぐる問題（一）－」『研究紀要』４

小池　聡　1991　『長堀北遺跡－本文編－』大和市教育委員会

島立桂　1993「相模野台地における槍先形尖頭器と細石刃の展開」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集』

白石浩之　1980「第Ⅰ文化層」「第Ⅱ文化層」　寺尾遺跡　神奈川県教育委員会

白石浩之　1989　『旧石器時代の石槍』　東大出版会

鈴木次郎　1983「細石器－関東・中部地方を中心に－」『季刊考古学』４

鈴木次郎　1989　「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」　神奈川考古　２５

鈴木次郎・矢島國雄　1978「先土器時代の石器群とその編年」　日本考古学を学ぶ　３

砂田佳弘　1986　代官山遺跡　神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書１１

砂田佳弘　1988　「相模野の細石器－その発生と展開に向けて－」『神奈川考古』24

諏訪間順　1988　「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による石器　群の段階的把握」『神奈川考古』24

諏訪間順　1989a　「ナイフ形石器文化の終焉と尖頭器文化の成立－相模野台地を中心に－」『旧石器考古』38

諏訪間順　1989b　「相模野台地における尖頭器の様相」『長野県考古学会誌』59・60

諏訪間順　1991　「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』八ケ岳旧石器研究グループ

中村喜代重他　1979　上和田城山　大和市教育委員会

堤　隆　1987　「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13

堤　隆　1991　「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』17

細石器石器群の終末と神子柴・長者久保系石器群の関連性について

白石浩之

1 目 的

関東地方における細石器石器群はその層位的出土例から短期間にめまぐるしく変容していることが知られている（堤1987,1991）。その細石器石器群に競合するかのように神子柴・長者久保系石器群が惹起すると考えられており、細石器石器群との関連が注目されるところである。

本稿は特に神子柴・長者久保系石器群を含む石槍石器群と細石器石器群がどのような様相をもち、相互に関連するのか、その変遷過程をとおして概観してみようと思う。

2 細石器石器群の二大潮流

周知のように、細石核は削片系と非削片系よりなる（小林1970・安蒜1979）。東北日本に卓越した削片系を主体とした細石器は石刃石器例えば、先刃掻器、削器、彫器、鏃形石器、石刃等が凌駕する。それに対して、非削片系を主体とした細石器は西南日本に主として分布し、不定形な剥片を素材とした削器や掻器、揉錐器等が少量、他に礫器が伴出する。

これらの特徴的な細石器石器群は同時期に列島を二分するような分布をしていたわけではない。それは非削片系が古く、削片系が新しいことがほぼ相模野台地の層位的出土例から指摘できるからである（堤前掲,鈴木1983,諏訪間1991）。削片系を代表する湧別技法による細石核の出土例は今まで東高西低の分布であったが、最近では岡山県や香川県でも出土するようになった（稲田・絹川・光石1992）。九州地方での発見も時間の問題であろう。他方非削片系を代表する矢出川技法の細石核の出土例は西高東低の分布をしている。確実な例は青森県大平山元Ⅲ遺跡（三宅1981）で類例が認められている。これまた北海道地方への分布の広がりが充分予測されるところである（麻生1965,林1970）。また、打面形成後に体部調整を施し、体形を整えた後に、細石刃剥離をするホロカ技法の細石核は列島の広範囲に幌加型と船野型の分布が認められる。これらの細石核は系統的に同じ出所か否か検討しなければならない（橋本1989,白石1992）。特に関東地方では矢出川技法よりも古いホロカ技法代官山型が既に出現している点も看過できないことである（砂田1986,白石

前掲)。これらのホロカ技法の細石核と矢出川技法そして両面調整技術をもつ石槍とが相互に影響して湧別技法を誕生させた可能性もあろう。

3　石槍石器群の二大潮流

東京都仙川遺跡第Ⅲ文化層（小田1974）や群馬県武井Ⅱ石器文化(杉原1977)では石槍の他に寸づまりの縦長剥片を素材とした定形的な掻器や削器を安定して作りだしている。しかしこれだけ定形的であっても神子柴・長者久保系石器群特有の彫・掻器、先刃掻器や神子柴型石斧等は未だ持っていない。また、石槍や掻器そして削器は黒曜石製の母岩を共に用いている点で、器種間の共通性が構造的に認められる。しかるに月見野遺跡群上野遺跡第Ⅴ文化層では石槍の大きさに応じて石材が利用されるようになる。すなわち大形に近い石槍は凝灰岩、中形の石槍は玄武岩、そして小形の石槍は黒曜石がそれぞれ用いられていた（相田1986）。大形の石槍は器種間において母岩の共通性は顕著でなく、独自性が強い。この点は神子柴・長者久保系石器群も同様である。石刃石器間では同一母岩の存在も予測されるものの、石槍や石斧との共通性は少ない。かくて、石槍の大形化につれて、黒曜石の受容は原石の大きさに見合うことが出来ず、急速に減少していったのである。

それでは関東地方ではいつごろ神子柴・長者久保系石器群が流入されたのであろうか。この点は神子柴・長者久保系石器群間の層位的出土例がないので、確定的なこと言えない。筆者は神子柴・長者久保系石器群の出現を第0黒色帯（B0）層上部層に求め、以後間断をもちながらローム漸移層まで継起していたものと推定している。その場合大まかに組み立てて、神子柴遺跡・長者久保遺跡→寺尾遺跡・吉岡遺跡群A区（白石・砂田1992）の変遷を基軸として、石槍文化の吉岡遺跡群C区へと続くものと考えている。

かって筆者は、神子柴・長者久保系石器群をどの段階まで捉らえるのか研究者間で一致をみていない点を指摘した（白石1990）。このことは神子柴・長者久保系石器群とは何か、といった視点がない限り、これらの石器群の消長を正しく把握することはできないであろう。この点、岡本東三は神子柴遺跡（第4図1～4）や長者久保遺跡の出土遺物を基準資料として捉らえねばならないことを指摘している（岡本1979、1993）。

筆者は寺尾遺跡（第18図1～3）(白石1980)を神子柴・長者久保系石器群として把握した。その理由は神子柴型石斧、神子柴型尖頭器、石刃製の掻・削器等、神子柴・長者久保系石器群の主要な器種を保持していたことによる（白石前掲,白石1988）。しかるに寺尾遺跡に時期的に近い月見野遺跡群上野遺跡1地点第Ⅱ文化層（第15図1～3）や長堀北遺跡第Ⅱ

文化層跡（第13図1～3）の石器群を神子柴・長者久保系石器群として今日まで明確に位置付けなかったのは、神子柴・長者久保系石器群を構成する器種組成が弱く、かつ変容しているからである。つまり石刃石器が無かったり、石斧が神子柴型でなくなったり、石槍の形態が変化するような諸ケースが現出しているのであり、このような欠落、変質した石器群は本来的には神子柴・長者久保系石器群とは言いがたいことになる。それでも個別石器の中には、神子柴・長者久保系石器群の特徴をとどめた石槍や石斧が細石器石器群の中に搬入した場合もあったであろう。この場合には神子柴型尖頭器や神子柴型石斧と呼称すべきで、石器群の総体からみる限り、細石器石器群に対峙できるほどの確固とした神子柴・長者久保系石器群と言いえるような様相を保持していない。筆者が石槍や石斧を各々検討してきたのはまさにこの神子柴・長者久保系石器群がどのように変容し、崩壊していくのかを究明することであった。

4　終末期細石器の様相

(1) 相模野台地

相模野台地の細石器の層位的出土例によれば、矢出川技法がほぼ終わる頃、ホロカ技法が席捲する。このホロカ技法と削片系細石核の一群との先後関係は必ずしも明らかではないが、削片系の細石核が終末期に相当するらしい。削片系の細石核は大きく見れば所謂湧別技法で作られているものが多い。しかし中には稜付きスポールが無い遺跡もあり、別系統の細石器文化である可能性もあろう。長堀北遺跡（第13図1～3）（小池1990、1991）の安山岩製の石核原形（同図1）に見られるように、両面加工されたブランクの長軸の一端から稜付スポールが剥がされ、その後にスキースポールも剥出していることが接合資料から理解される。かくてこれらの細石核は在地の石材を利用するようになるが、依然として湧別技法によって製作されている。

それに対して、月見野遺跡群上野遺跡第1地点（第15図1～3）（小池1986）の玄武岩製の細石器は湧別技法の範疇に入るかどうか問題がある。それは細石核とスポールとの接合から、稜付きスポールが出土せず、断面台形の縦形のファストスポールのみが認められるのである。細石核の打面は器体の長軸方向に突き抜けていないのがひとつの特徴である。これらの点から上野遺跡第1地点の細石核は湧別技法によるものか確定することができない。と言うのはこのようなスポールをもつ細石核は西海技法によく見られるからである（織笠1992）。勝坂遺跡（第16図1～3）（青木・内川1990、内川・高橋1993）出土の細石核も湧別技

法によるものかどうか定かではない。凝灰岩製の槍先状の両面加工品を長軸方向から一撃して打面を作出しているが、稜付スポールを剥いでいるかどうか明らかでないからである。また、湧別技法と異なる点は側面上端から細かく調整を加えていることである。比較的幅広の石槍の半欠品は、槍先状の器体を二分割し、その面を打面として長軸方向に打撃して打面を形成した細石核のブランクの可能性があろう。もしそうであるならば、このような例は湧別技法の範疇から逸脱するものであり、新種の技法であった可能性もあろう。

以上の点から神子柴・長者久保系石器群を含む石槍石器群との関連で細石器を位置付けるならば、先ずホロカ技法の一群を桝形段階と呼称し、荒屋型彫器を伴う札滑型の細石核を荒屋段階としたい。そして長堀北段階まで湧別技法が残存する。上野1段階以降が前述の理由から湧別技法とは言い難い一群である。最終末の勝坂段階は伴出する石槍の基部を意識的に逆三角形に作りだしている（第16図3）。このような石槍は有舌尖頭器の初期ないし直前形態と考えられており、上記遺跡の中ではより後出のものと推定できる。

（2）中部地方

中部地方の中ツ原第5遺跡B地点（第10図1～3）（堤・吉沢1991)では細石核、稜付きスポール、スキースポール、彫器、錐状石器、削器、掻器、礫器が組成している。黒曜石製の細石核は湧別技法によるものか認められる。チャート製の荒屋型彫器の共伴から、札滑型の細石核を主体とした時期に相当するものであろう。留意することは大形の石槍や石斧が共伴しない点である。このような様相をもつ遺跡は頭無遺跡（第6図1）（前原・関根1988）後野遺跡B地区（第7図1・2）（川崎・鴨志田1976）、白草遺跡（第8図1・2）(川口1993)、木戸場遺跡（第9図1・2）も同様で、いづれも大形両面調整の石槍の共伴は認められない。荒屋遺跡（第5図1～3）では尖頭器7点が検出されている。全て周辺加工によるもので（芹沢・須藤・会田1990）、鏃形石器と呼称をされたものである（芹沢1979）。このことは荒屋型彫器を伴う湧別技法をもつ細石器文化の時期は神子柴・長者久保系石器群との接触がなかったことが考えられる。しかし柳又遺跡A地点第Ⅴ文化層（第14図1～4）になると、左右非対称形で両面調整の珪岩製石槍と偏平な打製石斧片が検出されるようになる（小林・谷口編1992）。細石核は稜付きスポールやスキースポールをもつ湧別技法が認められる。また、ホロカ技法と思われるハリ質安山岩製の細石核や長軸に直交する打面をもつ黒曜石製の細石核原形があり、多様である。かくて、柳又遺跡A地点の石器群の様相から、中ツ原第5遺跡B地点→柳又遺跡A地点の変遷が考慮されよう。

5 東日本の細石器石器群と神子柴・長者久保系石器群の様相

神子柴・長者久保系石器群を含む石槍石器群と細石器石器群をみてきたが、額田大宮遺跡(川崎・鴨志田1978)の石器群はホロカ技法による細石核と石斧が共伴していた（第1図1～5）。この技法による細石核は桝形遺跡（第2図1～3）(相沢・関矢1988)や越中山遺跡S地点（加藤1975）でも出土している、石槍や石斧は認められていない。したがって本来的には伴わない石斧が存在する額田大宮遺跡での事例は、神子柴・長者久保系石器群が搬入されたものと解釈しておきたい。縄文土器の伴出は認められず、いわゆる無土器文化の状況であったものとここでは捉らえておきたい。

さて、湧別技法で構成される細石器文化の中に、少なくとも二段階の細石器文化が認められる。関東地方では木戸場遺跡（第7図1・2）・後野遺跡B地区（第7図1・2）→長堀北遺跡（第13図1～3）、中部地方では中ツ原第5遺跡B地点（第10図1～3）→柳又遺跡A地点（第14図1～4）の変遷である。木戸場遺跡・後野遺跡B地区、中ツ原第5遺跡B地点は荒屋段階、長堀北遺跡、柳又遺跡A地点が長堀北段階に相当しよう。湧別技法による札滑型の細石核と荒屋型彫器をもつ荒屋段階前半期は神子柴・長者久保系石器群や縄文土器を共伴しない。しかし後野遺跡では神子柴・長者久保系石器群〈A地区〉（第12図1～6）と札滑型の細石核と荒屋型彫器をもつ石器群〈B地区〉（第7図1・2）が20m離れて検出されているが、同一個体が相互の石器群に認められるという（川崎・鴨志田前掲）。このことは重要な意味をもち、充分検証されねばならない。いずれにしても極めて近い時期の所産であろう。このことをもってしても、湧別技法札滑型の細石器と荒屋型彫器、鏃形石器、角二山型掻器などで構成される細石器石器群と神子柴・長者久保系石器群は系統を異にしながらも相互関東・中部地方にも波及ないし影響を少なからず及ぼしたであろう。

かくて、土器が伴出しない桝形段階の神子柴遺跡や長者久保遺跡は桝形遺跡や下触間長堀遺跡に相前後しよう。額田大宮遺跡では、恐らく神子柴・長者久保系石器群の影響によるものと思われる石斧等が見られる点は注意される。次の荒屋段階では湧別技法札滑型の細石核を主体とした一群の独自性が強く、排他的であり、神子柴・長者久保系石器群と当該細石器との交流は一時途絶する。しかし長堀北段階では再び、交流が再開され、湧別技法をもつ長堀北遺跡の中にその影響を見て取ることができる。しかしこれらの石器群は在地の石材を使用して作られており、荒屋型彫器の伴出は見られなくなる。このような点から、初期の湧別技法によって製作される細石器石器群は、他の石器を受容するようなことをせず、極めて独自性が強い石器群であった。しかしこのような様相は各地域に浸透する

につれ、徐々に石器製作技術のみ受入れられ、在地の石材が用いられるようになったものと考えられる。そしてこの緩和された段階に神子柴型尖頭器と神子柴型石斧と縄文土器がの技術的移入を細石器を担う集団が積極的に行ったものと解釈されるのである。しかし受容するにあたっては直接石器の器種を搬入することは少なく、細石器石器群の集団が独自に技術習得して組成とした可能性が高い。これらの様相を細石器・石槍複合石器群（文化）と仮称しておこう。この段階の神子柴・長者久保系石器群としては寺尾遺跡（第18図1～3）や吉岡遺跡群A地区（第17図1～3）（砂田・小野1991,1991,白石・砂田1992）が該当しよう。最も吉岡遺跡群A区では最終末の神子柴・長者久保系石器群の石斧と石槍がこの地で製作され、その石器が搬出されていた。長堀北段階以後、湧別技法は恐らく衰退する。そのことは細石核の製作技術を見てもよく理解される。そして勝坂段階では細身の基部を逆三角形にした吉岡遺跡群C区（第19図1～4）の石槍文化に類似しており、勝坂段階が古く吉岡遺跡群C区の変遷を辿ろう。

表１　旧石器時代終末から縄文時代草創期初頭における石器群の変遷試案

文化	段階	技術	細石器石器群	細石器・石槍複合石器群	神子柴・長者久保系石器群	土器伴出とその特徴
無土器文化	槍形	ホロカ技法	下頓別長堀 上和田城山 槍形	祖田大宮	神子柴 長者久保	
縄文草創期文化	荒屋	湧別技法	後野B・木戸場 頭無・白草 中ッ原5B		後野A 大平山元Ⅰ	無文
	長堀北			長堀北 柳又A	寺尾 吉岡A	押圧文・縄文
	上野1	西海技法		月見野 上野1地点		無文
	勝坂	？		勝坂	吉岡C 本ノ木	無文 縄文・沈線文 ハの字形爪形文

引用文献

相沢忠洋・関矢晃1988「槻形遺跡」『赤城山麓の旧石器』講談社

青木豊・内川隆志1990「神奈川県勝坂遺跡第45次調査」考古学ジャーナル324

麻生　優1965「細石器文化」『先土器時代』日本の考古学1

安蒜政雄1979「日本の細石核」『特集　日本細石器文化の研究』駿台史学47

稲田孝司・絹川一徳・光石鳴巳1992「西日本の湧別技法」岡山大学文学部紀要18

内川隆志・高橋真実1993「A地点の調査」『勝坂遺跡第45次調査』

岡本東三1979「神子柴・長者久保文化について」奈良国立文化財研究所学報研究論集Ⅴ

岡本東三1993「縄紋文化移行期石器群の諸問題」『シンポジウム1 環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会第1シンポジウム資料集

小田静夫1974『調布市仙川遺跡』東京都埋蔵文化財調査報告2

織笠　昭1992「南関東における西海技法の受容と変容」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集2』発掘者談話会

加藤稔1975「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』2 遺跡と遺構（上）

川口　潤1993「白草遺跡の旧石器時代」『川本町白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書129

川崎純徳・鴨志田篤二1976『後野遺跡』後野遺跡調査団編

川崎純徳・鴨志田篤二1978『額田大宮遺跡』茨城県那賀町史編纂委員会

栗島義明1993「湧別技法の波及」土曜考古17

小池　聡1986「第Ⅰ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書21

小池　聡1990・1991「長堀北遺跡」大和市文化財調査報告書39

小林達雄1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」物質文化16

小林達雄・谷口康浩1992「長野県木曽郡開田村柳又遺跡A地点」国学院大学文学部考古学実習報告21

白石浩之1980「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』神奈川県立埋蔵文化財調査報告書18

白石浩之1988「縄文文化の起源を求めて」『大和のあけぼのⅡ』

白石浩之1991「神子柴系石器文化のポイントの系譜」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』平成2年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書

白石浩之1992「細石器文化の研究－西南日本の細石器文化について－」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集2－』発掘者談話会

白石浩之1992「旧石器時代終末から縄文時代初頭の石斧の研究」『加藤稔先生還暦記念東北文化論のための先史学論集』

白石浩之・砂田佳弘「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群における神子柴・長者久保系石器群の終末とその様相」日本考古学協会第58回総会研究発表要旨

鈴木忠司1988「上野Ⅱ文化層の位置づけをめぐって」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会

鈴木次郎1983「細石器－関東・中部地方を中心として－」季刊考古学4

杉原荘介1977「群馬県武井における二つの石器文化」明治大学文学部研究報告考古学7

砂田佳弘1986「先土器時代の遺構と遺物」『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11

砂田佳弘・小野和夫1991「本格調査（A区）」神奈川県立埋蔵文化財センター年報10

砂田佳弘・小野和夫1992「本格調査（A区）」神奈川県立埋蔵文化財センター年報11

諏訪間順1991「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』

芹沢長介1959「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について（予報）」第四紀研究1-5

芹沢長介・須藤隆・合田容弘1991『荒屋遺跡－第2・3次発掘調査概報』東北大学文学部考古学研究室

堤　隆1987「相模野台地の細石刃石核」大和市史研究13

堤　隆1991「相模野細石刃文化における石器装備の構造」大和市史研究17

堤　隆・吉沢靖1991「中ッ原第5遺跡B地点の研究」八ケ岳旧石器研究グループ

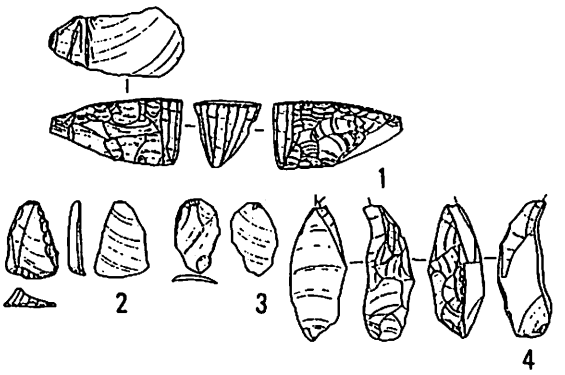
中村喜代重1979『上和田城山』大和市文化財調査報告2

橋本勝雄1989「東日本の細石器文化」考古学ジャーナル306

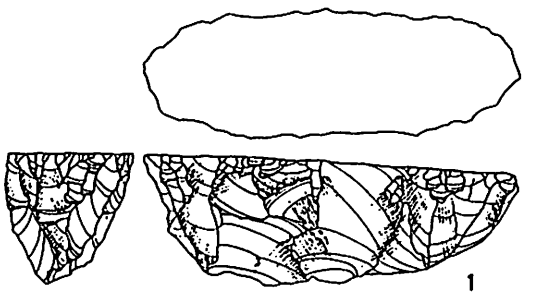
林謙作　1970「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置づけ（上）」考古学研究16-4

前原豊・関根吉晴1988「柳久保遺跡群頭無遺跡」第2回東北日本の旧石器を語る会予稿集

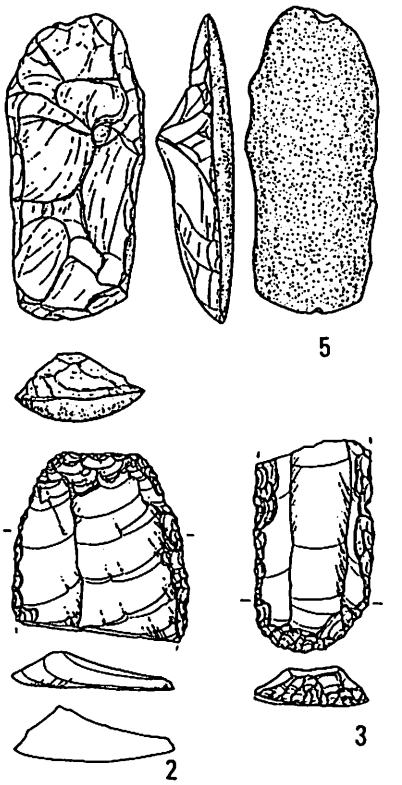
三宅徹也1979『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告5

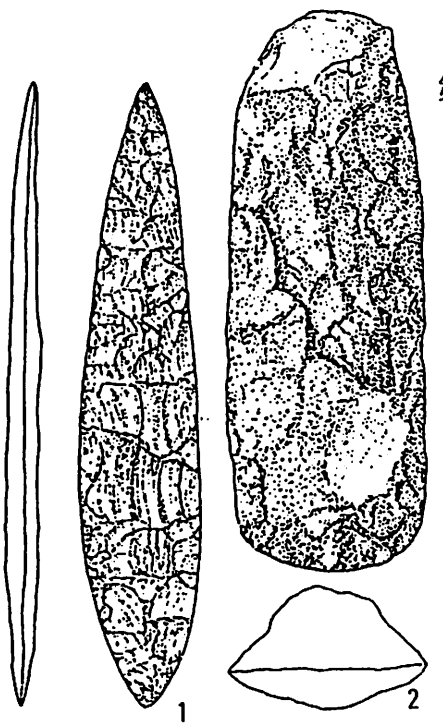


第1図 北関東地方 額田大宮遺跡

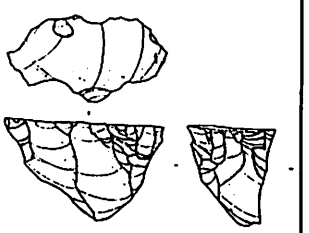


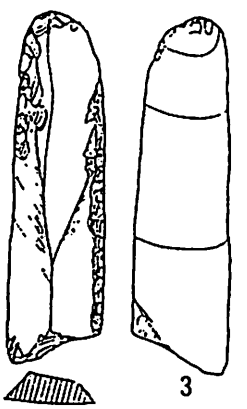
第2図 北関東地方 桝形遺跡

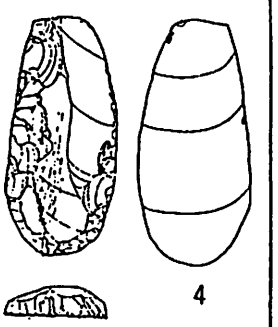




第3図 相模野台地
下鶴間長堀遺跡
第1文化層

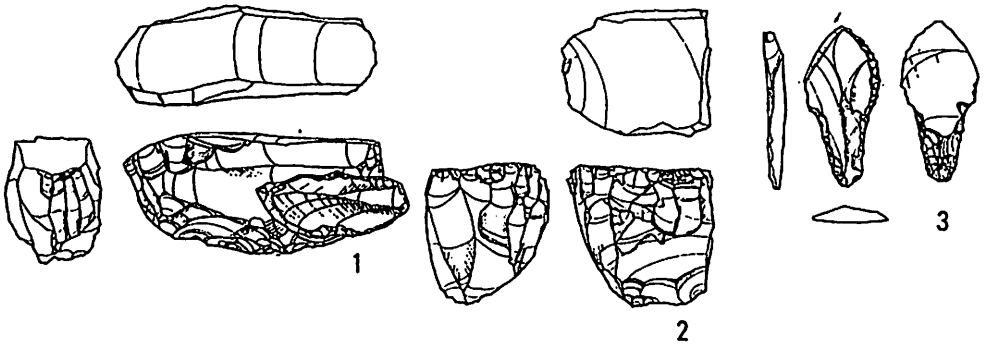




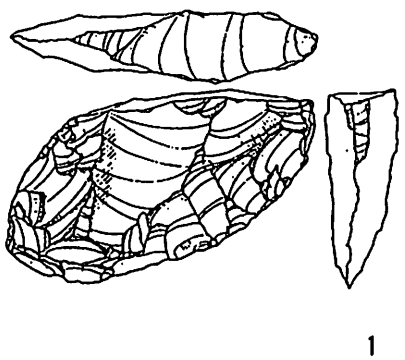


第4図 中部地方
神子柴遺跡

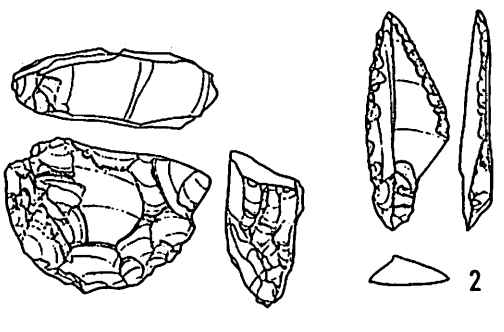
0 5cm



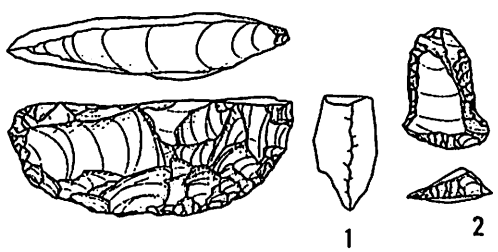
第5図 上越地方 荒屋遺跡



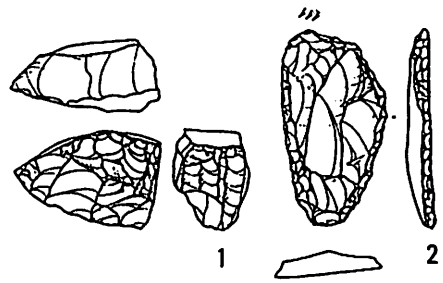
第6図 北関東地方 頭無遺跡



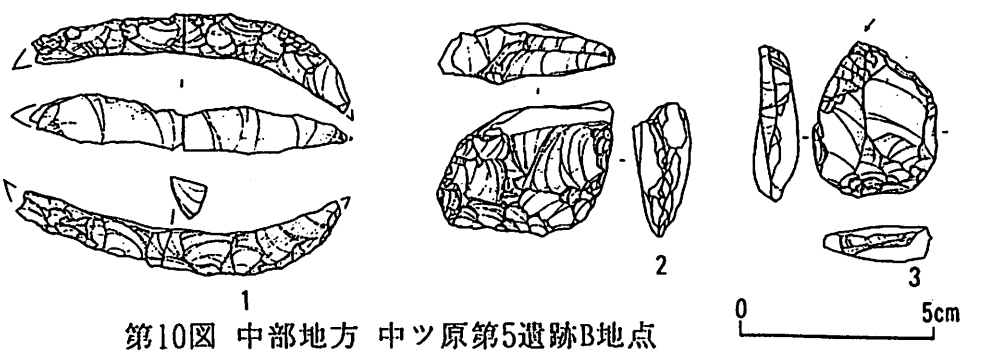
第7図 北関東地方 後野遺跡B地区



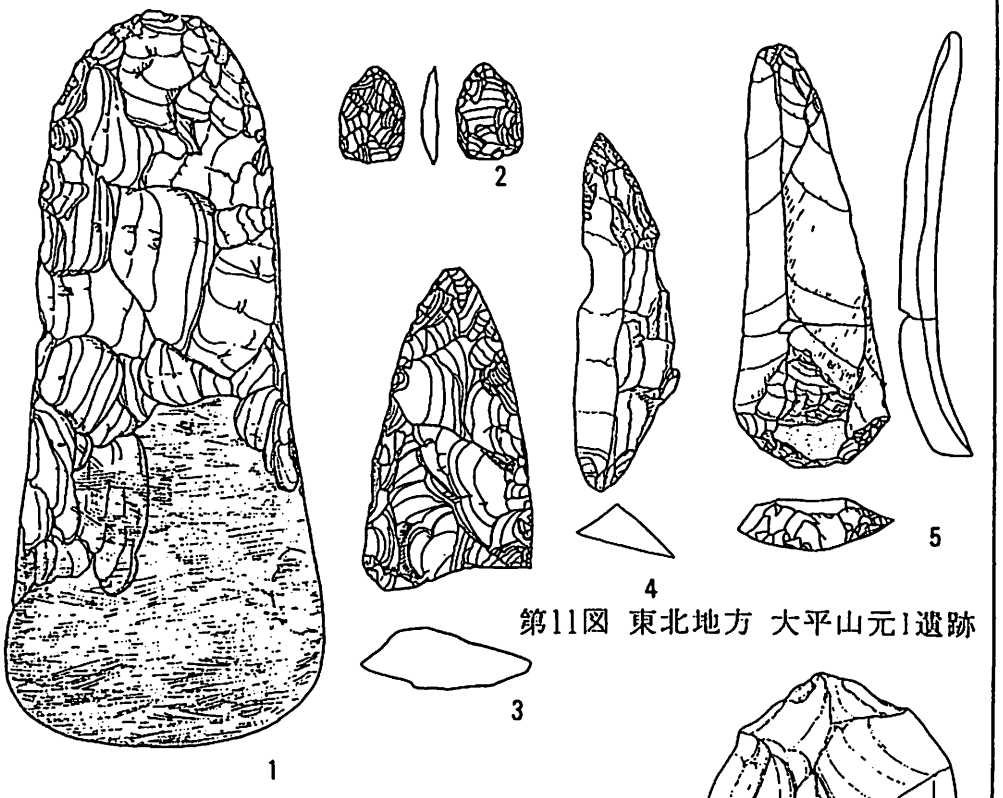
第8図 江南台地 白草遺跡



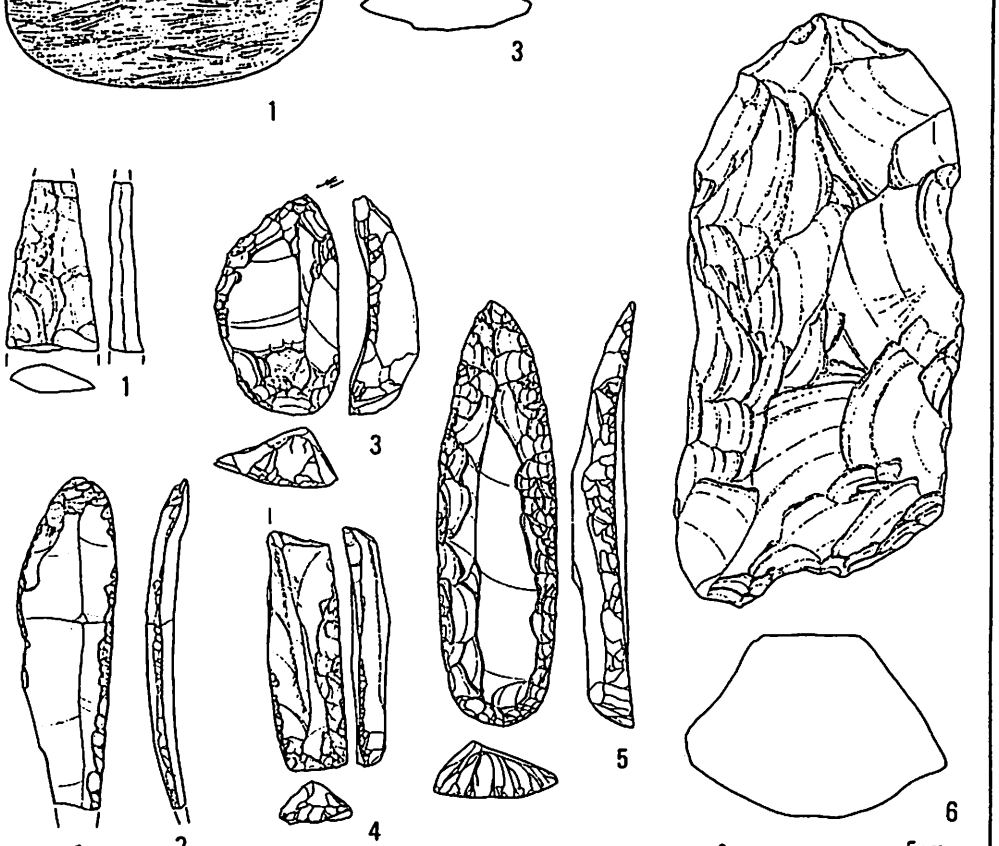
第9図 下総台地 木戸場遺跡



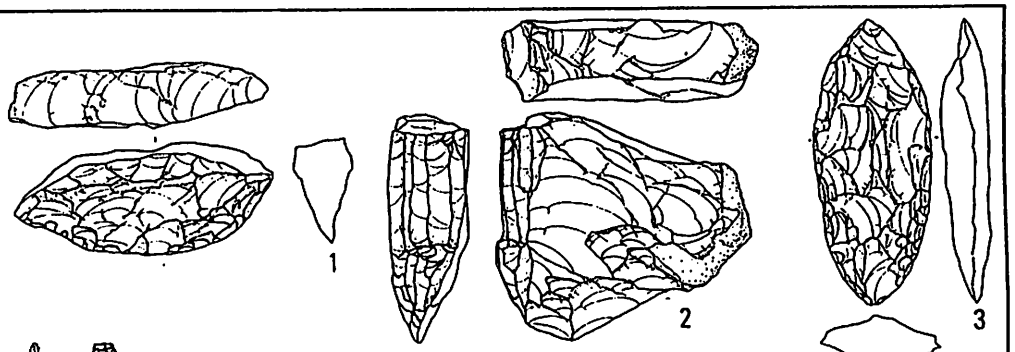
第10図 中部地方 中ツ原第5遺跡B地点



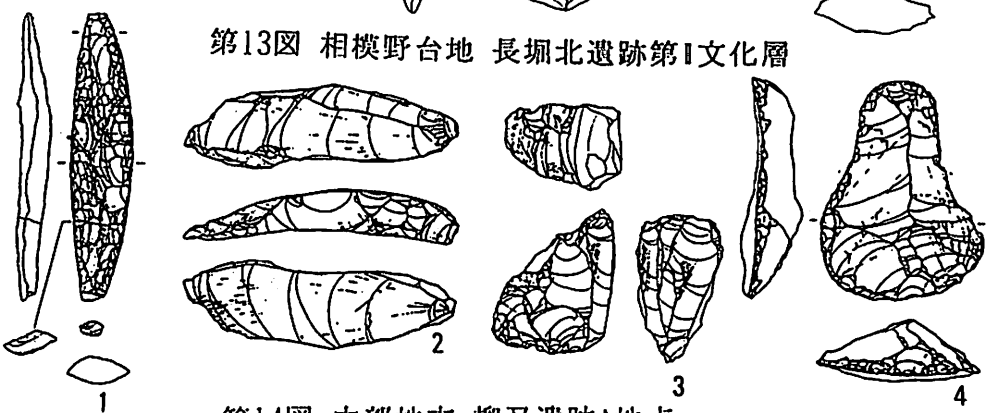
第11図 東北地方 大平山元I遺跡



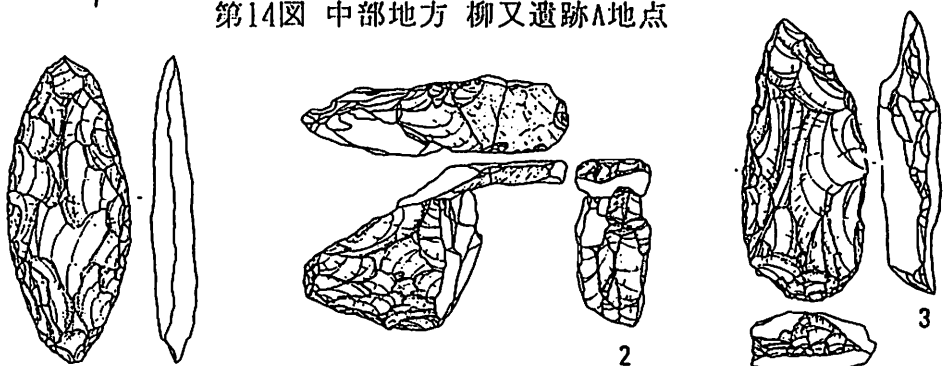
第12図 北関東地方 後野遺跡A地区



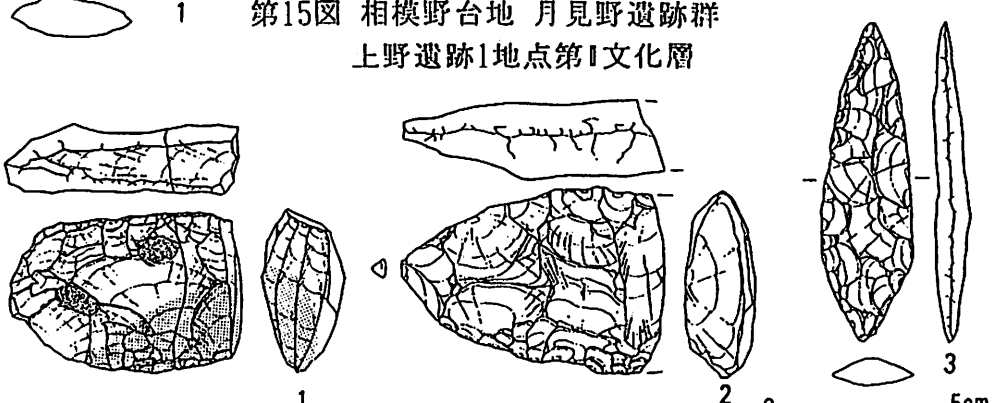
第13図 相模野台地 長堀北遺跡第Ⅱ文化層



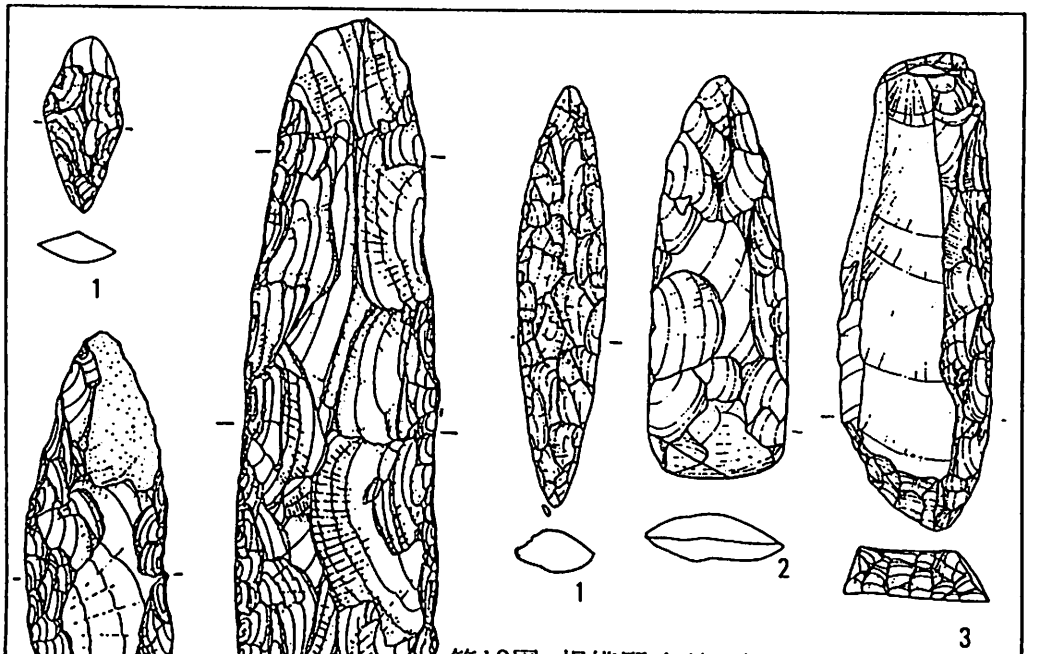
第14図 中部地方 柳又遺跡A地点



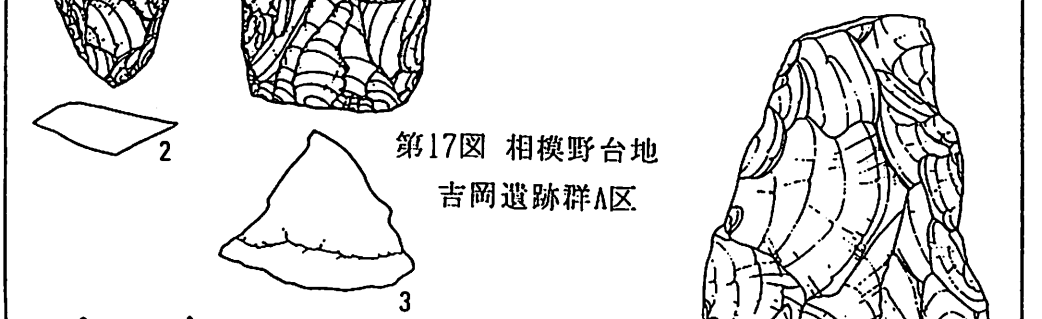
第15図 相模野台地 月見野遺跡群
上野遺跡1地点第Ⅱ文化層



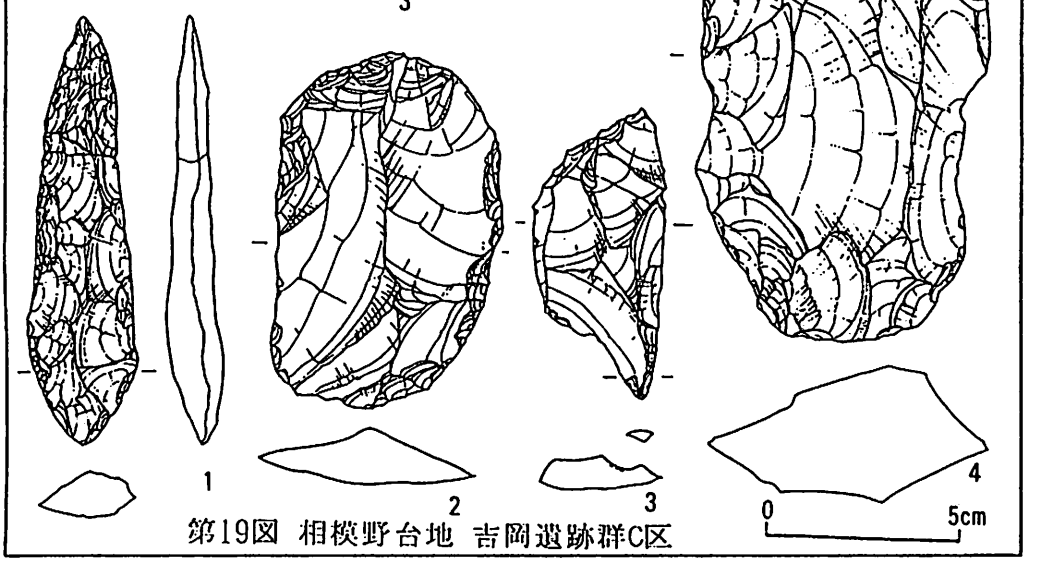
第16図 相模野台地 勝坂遺跡



第18図 相模野台地 寺尾遺跡第I文化層



第17図 相模野台地
吉岡遺跡群A区



第19図 相模野台地 吉岡遺跡群C区

細石器文化の終焉

栗島義明

1、はじめに

現在、細石器文化の問題の中で多くの関心と議論を呼んでいるのが、相模野地域での神子柴系石器群と共に発見された細石刃石器群にあると言えよう。上野遺跡、長堀北遺跡、勝坂遺跡等に見られる遺物総体をどのように理解するか、それは取りも直さず神子柴文化の波及、土器の起源問題、そして細石器文化の終末という、旧石器時代から縄文時代への変革にかかわる様相を如何に理解するか、という重要な考古学的課題と必然的に抵触してくるからである。

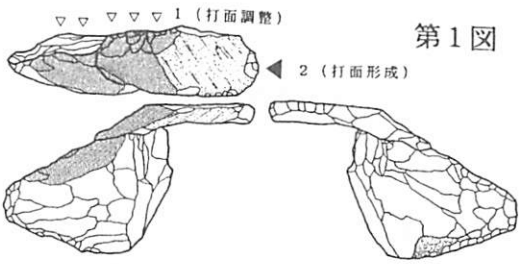
ここではこれらの遺跡から出土した細石刃石器群の分析を通じて、その系統が従来から指摘されてきたような北、南といった他地域からの影響によって生成したものではなく、あくまで中部日本での細石器文化の伝統のなかから生み出されたものである点を型式学的に明らかとしたい。その過程で細石器文化研究の一つ問題ともなっている削片系の波及の編年的位置付けの問題、地系石器群との関係、そして両者の関係と削片系のその後の地域的展開の姿等、概略的ではあるが触れることとしたい。なお、紙面が限られているので個々の問題の詳細に関しては、別の機会に果たしたいと考えている。

2、終末期の細石刃石器群

まず、相模野台地での神子柴型石斧・石槍に伴出する細石刃石器群について概観してみることとしよう。長堀北遺跡からは、安山岩製の細石刃石器群が出土している。特に所謂「湧別技法」による典型的な削片系の石器群の存在が注目され、その幾つかは接合関係によって、技術的工程の理解を助けてくれる。それによれば、細石刃核素材は両面体の石槍状のものであり、その長軸方向に加撃することによって船底状、スキー状それぞれの削片を順次作出して、素材分割と打面の形成を図っている。スキー状削片の表裏にのこる剥離面は、一例を除いて互いに同一方向であり、両面体の一端が削片作出の打面部位として固定化していたことを伺わせている。削片の作出に際しては、素材縁辺部から器体の腹面方向に表裏にわたり加撃を行い、打面相当部位の横断面がV字状となるように加工されることが通例である。こうした言わば「削片剥離調整」は、削片の作出毎におこなわれるのが通例なようである。削片作出後に形成された剥離面を打面とした石核側面への調整は確認されず、削片の作出が素材分割のみの意義を有していたことを明示している。

月見野上野遺跡からは素材・原形・細石刃核がそれぞれ一点ずつ発見されている。特に注目されるのが打面再生剥片の接合する細石刃核であろう。原形は石槍状の概観を有した両面体であるが、その一部に平坦に節理面を残している。この節理面を打面として細石刃が剥離された工程の存在することは、再生剥片に残る細石刃作業面の残存から明らかである。加えて注意しておきたいのは、細石刃核の打面部位のみならず、その左右の側面にまで自然面或は節理面の観察される点であり、上面そして左右の側面が自然面や節理面によって構成された、言わば逆二等変三角形状の厚手の剥片が素材とされていたことを彷彿させている。石核の側面調整は入念におこなわれているが、打面として転用される節理面には及んでいない。この面が意識的に残されていた点は、石核調整段階の剥離面からも想定し得るものであり、節理面に続く部位の調整は側面側からの打面調整と同様な形態を有している。これらの一連の調整によって節理面に続く背面部位にもやや傾斜するものの平坦な打面相当部が確保されていることを知る。同様な調整は細石刃核原形にも観察され、鈴木忠司氏の指摘されたように上野遺跡の細石刃核製作の特徴と言えるであろう。

上野遺跡の細石刃核に見られるこの種の打面調整の持つ意味について考える場合、見落としてならない点は、上野遺跡には長堀北遺跡などと同様な両面体の原形を用意しながらも、船底形・スキー状といった削片を順次作出して素材である原形の分割が確認できないことであろう。上野例では平坦な節理面、船底形削片の剥離面それぞれを打面として、直ちに細石刃の剥離作業を行っているからである。船底形の削片の剥離は、直接的に打面形成へと結び付いているのである。こうした点を基本的に認めた場合、石核側面からの調整が略平坦な面を作出していることは重要と言えよう。何故ならばこうした石核調整工程の介在によって石核原型の縦断面は、楔形に近いD字状を呈することとなり、調整によってやや斜め方向に傾斜した部位を長軸方向から一回加撃することによって、細石刃剥離の打面の確保が適うからである。この側面調整は船底形の削片の作出と同様に、原形の打面部位に於ける端部法量を減じる意義を有していたものと捉らえておきたい。

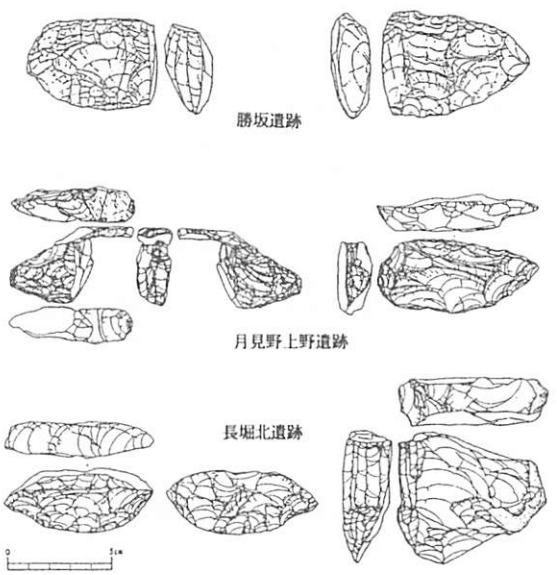


第1図
上野遺跡出土細石刃核（1から2へ）

勝坂遺跡の細石刃核原形にも同様な調整は確認され、その縦断面はD字状を呈している。伴出している細石刃核にはこの種の調整が確認できないが、打面の形成が船底形削片の剥離によってなされている点は間違いないであろう。また勝坂遺跡には両面体の原型の端部を断ち割った資料も見受けられる。恐らくこの分割面を加撃して細石刃剥離の為の打面を直ちに作り出すのであろう。

これまでの検討から、少なくとも削片系として纏められる傾向の強い三遺跡の資料が、相互に製作にかかわる複数の工程を共有していたものでない点は再確認できたであろう。「湧別技法」の各工程の存在を見た場合、最も純粋な形でそれを伝えているのが長堀北遺跡の資料であることは多言を要しないであろう。上野遺跡と勝坂遺跡のそれぞれについては決しかねる部分があるが、工程的多様性の存在する点は後者がやや顕著である。こうした相違についてはそれを時間的な前後関係として理解することも可能であろうか。いずれにせよ長堀北遺跡を古く理解することについては疑問視する余地はあるまい。

長堀北遺跡には削片系と共に剥片を素材とした大形の細石刃核が存在する。石核の側面には剥片の表裏剥離面を充て、素材の側面に残る自然面を石核背面としている。打面は横方向の加撃によって形成され、対する石核下縁は斜め方向の側面からの一回の加撃によっており、V字状の横断面が形成されている。作業面側に接した部分にのみ若干の下縁調整が確認される。細石刃の剥離作業に際しては、石核側面からの加撃による剥離面と共に、それに直交するように正面側からの打面作出の剥離も観察される。本資料は素材、石核調整、打面形成等の諸点で削片系のものとは、明らかに一線をもって区分し得る特徴を兼ね備えていると言えよう。こうした非削片系の細石刃核の石核構

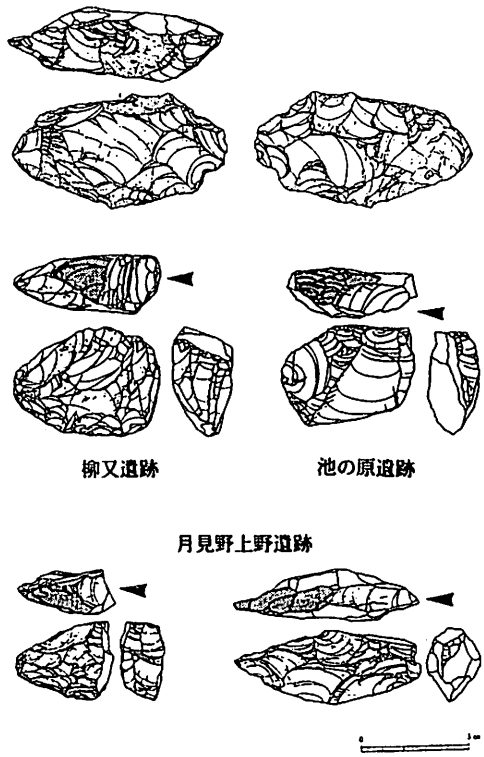


第2図　終末期の細石刃核

成の認められる点も、長堀北が編年的に古く位置付けられることを示唆している。この点は後に詳細に論ずることになろう。

3、系統的な問題

相模野台地から検出されたこれら削片系を中心とした細石刃石器群の系統的問題に関しては、既に幾つかの見解が提示されている。しかし、石器群の系統問題に就いて論じる場合、まずは同一地域内での型式学的な連続性の是非という、言わば時間的な遡上の検討を経て断絶の確認された場合に至り、始めて空間的なそれを追及するのが本筋のように思われる。こうし観点に立脚し、近年、注目されている在地系石材を用いた中ツ原・柳又の双方で確認されている細石刃核について検討を進めていくこととしょう。

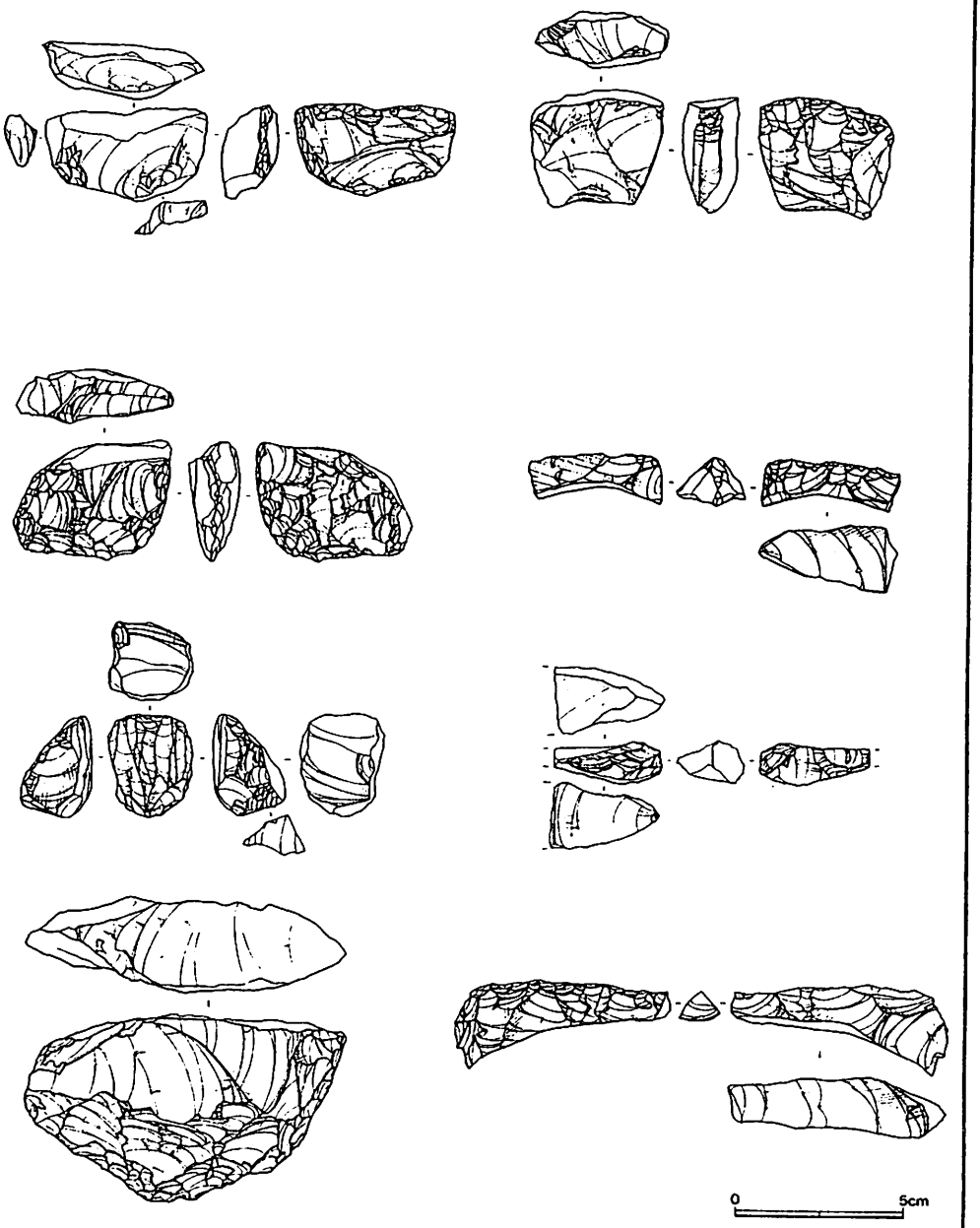


第3図　打面形成にみる系統

中ツ原・柳又共に削片系細石刃核が安定している。両面加工の原形を長軸方向に断ち割りって打面の形成を図っている点も共通し、両遺跡では船底状・スキー状各々の削片の検出がなされている。だが、出土資料に限ればスキー状削片の存在は柳又遺跡でより安定し、またその剥離に先行した石核側面への調整もより顕著な傾向が窺われる。スキー状削片の表裏に残る剥離面観察によれば、両遺跡共に削片の作出は同一方向からの加撃によっていたものと言える。だが、細石刃剥離作業面の設定は、削片作出の際の加撃部位にではなく、対向する端部に設けられることもあり、この傾向は柳又遺跡の資料に於いてより顕著と言えよう。この際、新たに打面形成の剥離を行っていたことが、細石刃核と剥片の存在から指摘できる。こうした例は中ツ原では確認されておらず、柳又独自の特徴と言えよう。

さて、中ツ原・柳又それぞれを比較すると共に「湧別技法」による削片系細石刃核を有するものの、その工程の細部に至っては若干の相違が見いだされよう。両遺跡の資料を瞥見する限り、工程的にもより整った、即ち「湧別技法」の各々の工程資料を純粋に残すのは柳又遺跡に於いてであり、この点はスキー状削片の安定的存在や原形の完成度（調整度）からも肯首されるであろう。中ツ原遺跡の船底状削片は、湾曲した側縁部分ではなく直線的なそれを残存させたものが顕著であり、原形自体が石槍状というよりは湾曲した側縁と直線的なそれとを持った、むしろ半月形状に近い形態を有していた可能性も強い。また石核原形が既に打面としてその一部に平坦な自然面を残存させた資料も散見される。この種の細石刃核では最初の加撃によって剥離された削片は、スキー状削片と同様に横断面が略四角形を呈することとなり、一回の加撃によって打面の形成が可能となったものと考えられる。削片の側面に観察される剥離面から想定されるこの種の細石刃核の原形は、典型的な削片系細石刃核原形と比較してかなり粗いものであったことは間違いないであろう。

中ツ原遺跡の細石刃核は、基本的に削片系と在地系とに二分されるが、削片系としたものの中には典型的な一群に加えて上記したような相違した原型形態、技術工程を有するものもある。これらも削片系の在地化した姿なのかも知れない。これらは打面形成が先行し、



第４図　中ッ原５Ｂ地点

石核調整がその後に行われている点で、削片系との違いを際立たせているが、楔形の形態をとることと、細石刃作業面が木口方向にて行われている点での類似点は否定し難い。これらの要素については削片系自体の変容（特に削片作出後の石核調整）として捉えるのか、或は在地の船底形の細石刃核の系統を考慮すべきかという点は今後、意識的に追及しなければならないであろう。いずれにせよ、これらの資料が典型的な頁岩製削片系細石刃核群に認められない点は誤りないところであろう。

柳又遺跡にも比較的多様な細石刃核の構成が見られる。典型的な削片系の一群が存在し、船底形ばかりでなくスキー状の削片も安定して存在する点は既に指摘した通りで、原形の整形は中ツ原と比較した場合により入念である印象が強い。これと共に中ツ原遺跡と同様に剥片を素材として用いた一群もあり、打面形成は側面方向からの一回の加撃によっており、そこから石核側面への調整が行われるようである。これらに加えて安定しているのが楔形を呈する細石刃核である。この類は形態的に削片系のものと変わるところがないが、その製作工程を俎上に置いた場合に大きな隔たりを認めざるを得ない。何故ならばこれらは剥片或は礫を素材とし、打面を作出した後に石核側面の整形工程が位置付けられているからである。石核整形が先行した削片系のものとは反対の製作手順を踏まえていることが知られる。石核調整と併せて下縁調整がなされる場合もある。

この類いに加えて、柳又遺跡には非常に特徴のある細石刃核が存在する。中ツ原遺跡には平坦な自然面等を残存させた石核原形が見受けられ、それらは一回の加撃によって打面形成がなされたものと考えられるが、柳又遺跡には両面調整の施された原形の打面部位を腹面方向から加撃し、原型段階で横断面がD字状となるようにした細石刃核と原形がある。この直後に直行した方向、即ち端部方向に加撃して打面形成を図っているのである。こうした打面作出工程は、言うまでもなく先に検討した月見野上野遺跡の資料に顕著に認められた工程であり、勝坂遺跡の原形にも一部同様な調整加工を留どめている点に関しては先に指摘したとおりである。

以上を纏めてみると、暫定的な編年が導き出されてこよう。第一に削片系に就いてであり、原形の整形度や削片作出を含めた工程的形態は柳又遺跡においてより純粋な「湧別技法」を踏襲し、しかも安定した姿を看取することができよう。加えて組成的に判断しても時間的に後出することが明らかな長堀北遺跡での典型的な「湧別技法」による削片系細石刃石器群の存在及び非削片系（在地系）との石核構成を念頭に置く限り、中ッ原から柳又を介して長堀北へと至る技法的な変遷が導き出されてこようか。ならば典型的な「湧別技法」による削片系の存在は、頭無遺跡や白草遺跡、木戸場遺跡などを除いて、再び純粋な形で現出するのは柳又・長堀北の遺跡であり、これらが段階差として編年的な序列を与え得るものであるのか、或は空間的な序列に収束されるものかの判断は微妙な問題を孕むこととなろう。ただし、ここで明らかとなったように中ッ原・柳又の両遺跡では、削片系と共に在地系の細石刃核、加えて特定工程や形態等の関係で相互に置換的な関係を有した細石刃核の存在する点は看過できない。特にそうした傾向は中ツ原よりも柳又に於いて顕著である。加えて、柳又で認められた直行した方向からの特徴ある打面形成工程は中ッ原には見られず、長堀北遺跡を経て月見野上野遺跡に於いてより安定化への方向性に在ることは、先に指摘した「中ツ原→柳又→長堀北→月見野上野」という遺跡間の編年的序列を支持しているものと言い得ようか。いずれにせよ、近年、相模野台地での発見が相次いでいる削片系の細石刃石器群の系統は、「湧別技法」波及後に中部日本という地域的な技術伝統の中で育まれ、そして発展していたであろう点に関しては誤りないものと考えられる。

4　在地系細石刃核の系統と由来

柳又遺跡の存在は、中部日本における旧石器時代最終末期の様相を考える場合に極めて重要な問題を提起した。一つには言うまでもなく、既に詳細に論じたように中ッ原遺跡と共に中部日本地域に於ける「湧別技法」の地域的展開の姿を伝えている点にある。そしてもう一点が、削片系の波及時に併行していた在地系細石核群の構成が確認され、更にそれを手掛かりとして広く西南日本地域の細石刃文化の様相をも研究射程に入れ得る可能性の存在することにある。次に、この問題について具体的に論及してゆくこととしよう。

柳又遺跡で特に注目したいのが、打面の形成が石核調整に先行した細石刃核群の存在である。これらの細石刃核は技術的には単一的様相を示すものの、楔形・船底形・円錐形と多様な石核形態をとる。いずれも打面の作出の後に、その剥離面を打面として石核側面への調整がなされており、この調整を通じて石核形態が決定されている可能性もたかい。素材としては礫・剥片に区分されるようであるが、石核の各々を取り上げての素材特定は困難である。円錐形のものは礫素材、楔形の一群は剥片素材と捉えるのがとりあえず妥当であろう。恐らくこうした技術的特徴を備えた多様な石核構成を示す石器群は、従来の編年観からは決して正当な評価を下すことは出来まい。ここではこれら細石刃核群を在地系のそれと認識識別し、その技術的系統の遡上を通じて柳又での構成の由来を考えてみたいとおもう。

ところで、打面形成が石核調整に工程的に先行した船底形の細石刃核群は、削片系が凌駕する以前、中部日本のみならず広く列島規模に確認される「ホロカ技法」或は「船野技法」によって作出された細石刃核型式である。中部地方では新潟県荒屋遺跡、長野県樋ケ崎遺跡、同柏垂遺跡、静岡県駿河小塚遺跡、関東地方では群馬県桝形遺跡、茨城県沖餅遺跡、神奈川県上草柳遺跡Loc.1、同下鶴間長堀遺跡等でこの類の細石刃核が検出されている。特に注目されるのが神奈川県下の遺跡であり、他地域遺跡では船底形にほぼ限定された単一的な石核構成を示すのに対して、ここでは複雑な石核構成が報告されている。上草柳遺跡では船底形と共に単一剥離によって形成された打面を持つ、略円錐形の細石刃核が検出されており、打面や作業面の設定部位等などを勘案すると、休場遺跡に類似した技術要素の存在が指摘できよう。同じく二つの形態からなる石核構成を示す相模野149遺跡では、船底形が少なく、しかも定式化しておらず、安定する円錐形のものは背面や側面に自然面を残存させ、打面調整が顕著に観察されることから、前者と比較してより古相を示していると言えようか。これらと相違した様相を示すのが下鶴間長堀遺跡の資料である。前二者が層位的にＢ０上部に位置付けられているのに対して、下鶴間長堀遺跡の資料群の出土層位はＬ１Ｓであり、まずもって層位的にその後出性が端的に物語られている。下鶴間長堀遺跡からは形態的に極めて多様な細石刃核が検出されているが、それらは一様に打面作出が石核調整に先行する点での共通性に貫からている。また石核調整の施されない一群も存在するものの例外的である。

下鶴間長堀遺跡の資料のなかで、典型的な船底形を除いたものとしては、やや分厚な剥片を素材とし、その表裏の剥離面を石核側面として充てている例が安定して認められる。打面形成の剥離は基本的に木口方向から行われているが、打面形成が側面側からの複数の剥離によっている資料も若干見受けられる。石核調整がみられない一群も同様な工程を経ていることは間違いない。こうした特徴を具備した細石刃核が、船底形の一群と共に構成するのは、現在この下鶴間長堀遺跡のみであるが、編年的に後出することが明らかな削片系の石器群の中にその存在が確認されつつある点は重要であろう。中ッ原遺跡で客体的に存在した打面形成が石核調整に先行する細石刃核はこうした下鶴間長堀遺跡の系統下に於いて認識されるべき資料と考えている。この中ッ原例と全く同様な資料が柳又遺跡にも二例見受けられる。

まずここまでの問題を整理しておこう。船底形によって代表される段階(越中山・桝形段階)、関東地方では前段階(矢出川段階)のものとの接触が石核構成として顕著に伺われ

る。相模野149遺跡や上草柳遺跡などをその具体的例証としてあげることができよう。後者遺跡では円錐形ながら打面が単一剥離によって形成されるというように、少なからず船底形にかかわる製作工程の影響が予想される。更に下鶴間長堀遺跡に至っては、通常の船底形のように分厚な剥離の主要剥離面を石核打面として用いるのではなく、素材である剥片の表裏面を石核側面へと設定した細石刃核が顕著に認められている。打面形成の剥離は木口方向からの単一剥離によっており、石核側面への調整はここを打面とすることによって行われる。当然のことながら素材である剥片の表裏面が充てられる石核側面は、既に打面とほぼ直交した面構成が得られている為に、打面形成後に行われる側面調整は部分的なものである。素材やその用い方、そして石核形態は著しく相違するものの、明らかに船底形と同様な製作工程を踏まえていると言えよう。

5、削片系と在地系の細石刃核の関係

こうした船底形段階の終末期での多様な形態の細石刃核の存在は、その片鱗を頁岩製の削片系のなかでは唯一、後野遺跡Aに認めることが可能である。後野では削片系と共に打面形成の先行する細石刃核が組成し、またスキー状削片を素材として用いた、しかもその作出時の剥離面を石核側面として転用した細石刃核が存在する。これなどは下鶴間長堀に代表される関東在地の細石刃核群からの影響を考慮すべき資料と言えよう。同様に在地系の石材によった狭山B遺跡では、削片系と共に打面形成の先行した一群の細石刃核の石核構成が知られるのである。やはり剥片の表裏面が石核側面となるような素材の用い方がされ、石核側面調整は素材の打瘤部分を除去するように、素材の主剥離面側へと集中する傾向がある。いずれにせよこれら遺跡の細石刃核に観察される技術的な工程の置換をもって湧別技法の波及時の様相、とりわけそれらと在地系との相互関係を通じて、削片系の編年的な位置を明らかとすることができようか。

頭無・白草・木戸場といった頁岩製の削片系石器群については、石核構成に見る単一性からもこれ以後の波及として認識されるであろう。更に中ッ原遺跡や柳又遺跡という湧別技法による石器群が在地石材によっていること、そして荒屋型彫器を殆ど或は全く組成しない点は、従来より指摘されているように更なる時間的後出性を示唆していようか。中ッ原や柳又遺跡に見られるように、そこに在地系の細石刃核が組成する事実は、その以前に削片系と対峙したかたちで、例えば下鶴間長堀遺跡を典型とするような在地系細石器が存続していた蓋然性がたかい。この点は今後の資料的な蓄積に拠るところが多いが、柳又段階に至るまで同種の在地系細石刃核の組成する事実は、当該細石刃核が時間幅を有した継続的な石核型式であったと捉える得ることを明示している。

こうした在地系の細石刃核は、当然のことながら削片系の石器群との間で相互に影響関係を成立させていったものと考えられる。具体的には石核形成に至る技術的な工程置換にそれを求めることができるように考えている。中ッ原遺跡を例にとってこの点を明らかとして行こう。中ツ原遺跡には大別して三種の細石刃核群に弁別することが可能であるように考えている。一つは「湧別技法」による削片系で両面体の石核原形を作り、長軸方向より船底状・スキー状といった削片を順次作出し、素材分割を兼ねた打面形成を行ったもの。二つ目は比較的大形の剥片、或は礫を素材としたもので、打面形成の後に石核側面調整がなされたもの。原形の複数の剥離面によって構成されているが、前者のような周縁部の調整は全く認められない。そしてもう一つが在地系と認定したもので、剥片の表裏面を石核側面に設定し、木口或は側面側からの単一剥離によって打面を形成、そこから側面調整が行われたもの。以上、である。特にここで問題としたいのは二番目の石核であり、側面に残る調整は総て打面形成後のものである点、そして底面が共に剥離面によって構成されている事実は看過できない。素材が仮に両面体としても調整等によって石槍状に仕上げられたものでないことは確かであり、石核調整が打面形成の後に工程的に位置付けられている点も含めて、典型的削片系とは距離を置いて理解すべき資料と言えよう。著者はこうした

特徴こそが削片系と在地系との影響関係の基に顕現したものと理解したいのである。素材や打面作出後の石核調整は在地系に近く、打面形成や石核の形態(側面・正面観)は削片系のそれにむしろ類似している。そして、これらの系譜のなかでこそ谷口氏が柳又Ⅱ類とした、楔形という削片系に通有な形態を持ちながらも、石核調整が総て打面側からなされるという特異な一群が派生するものと考えるのである。

6、柳又Ⅲ類の問題

柳又遺跡の細石刃核のなかで問題として残るのが、谷口氏がⅢ類としたものであろう。報告では楔形とされているが、形態的には船底形、そして円錐形にむしろ類似していると言えよう。前者が分厚な剥片、後者が円礫とそれぞれちがった素材を用いているが、打面形成の後に入念な石核調整を通じて正面観が楔形となる石核形態が作り出されている。下縁調整とそこからの石核調整は皆無である。ここに見られる工程的な特徴は、在地系のもの、或は削片系との接触を通じて生み出されたものとの類似性もあるが、形態的な類例は現在のところ他に見いだすことができない。

この類を谷口氏の分析に従って仮に柳又Ⅲ類と呼称しておこう。柳又Ⅲ類の重要な点は、その認定と評価を通じて、広く西日本地域との脈絡が手繰れる可能性の存在する点にあろう。柳又遺跡は中部日本にあっても、より西方に位置する遺跡である。同類の系統に関しては東海地域での様相の理解が必須となるであろう。この点、先行する細石刃核型式としては、既に鈴木氏によって「海老山型細石刃核」と呼称された特徴的な細石刃核群が想起されてくる。当該型式の特徴は円礫の分割面或は大形剥片の主剥離面を打面として設定し、そこから石核周縁部への調整が行われ、船底形の近い石核形態が用意される。細石刃剥離作業は両端からおこなわれることも多く、略円錐形に近い細石核形態が作出される場合が多い。こうした技術的特徴は、船底形細石核群に顕著に認められるれものであることから、「海老山型」は編年的にその盛行期を遡ることはないと考えておきたい。砲弾状の形態を持つ細石刃核を典型とするこうした「海老山型」は、製作上の技術的特質を念頭に置く限り矢出川段階として認識するよりも、船底形以後、下鶴間長堀遺跡に見られるようにその後の地域的な展開とて認識される可能性が強い点も指摘しておきたい。広野遺跡に見られる石核構成が上草柳遺跡と同様である点もこうした編年的な理解を支持するであろうし、何よりも柳又遺跡に於ける削片系と在地系の石核構成、とりわけ柳又Ⅲ類の存在が船底形の技術伝統のの系譜を克明に物語っていよう。

いずれにせよ、関東以西、とりわけ東海地域を中心として船底形の伝統は強く残存していたものと予想される。そうした地域伝統のなかで、打面作出の後に石核調整を行うという技術的構造性の延長として「海老山型」も生み出されたものと言えようか。こうした地域的な伝統の影響を考慮しなければ柳又遺跡の第Ⅲ類の存在は理解し得ないように思う。少なくとも現状での関東的な視野からすれば、打面からの石核調整というものが多様な石核形態の作出とは結び付かない印象が強い。この点では極めて強い船底形細石核製作にかかわる技術的伝統を想定せざるを得ない。これが中部日本を境として対峙したとも言われる「ホロカ技法」と「船野技法」との相違なのか、それとも船底形細石核段階の後半、関東では下鶴間長堀に見られたような細石刃核群が、一方、東海地域にあっては「海老山型」へと、それぞれ地域的な変容を遂げていったものなのか、二つの可能性が存在しよう。この点に関して現段階では、俄かに決し難いが、いずれにせよ、関東では二つの石核型式は層位的にも分離され、各々が明瞭な時間差を有していることから、中ッ原や柳又遺跡に於ける石核構成を念頭に置く限り、削片系に対峙した船底形の地域的展開(残存)というものが必然的に浮かび上がってくるのである。

7、柳又Ⅲ類の広がり

過去に於いて、そして現在でもまた、「船野技法」による船底形細石刃核の西南日本的

な分布が指摘されている。その系統関係はともかくとして、同じ技術工程を踏まえて製作された、同じ細石核型式がこの地域に認められる点は共通認識となっている。かつては船野型の細石刃核が最古段階の指標とされてたこともあったが、現在ではむしろ編年的な後出性が支持されているように思われる。既に著者が指摘し、綿貫氏が検証されたように船野の一部は草創期段階にまで継続していた可能性がたかい。

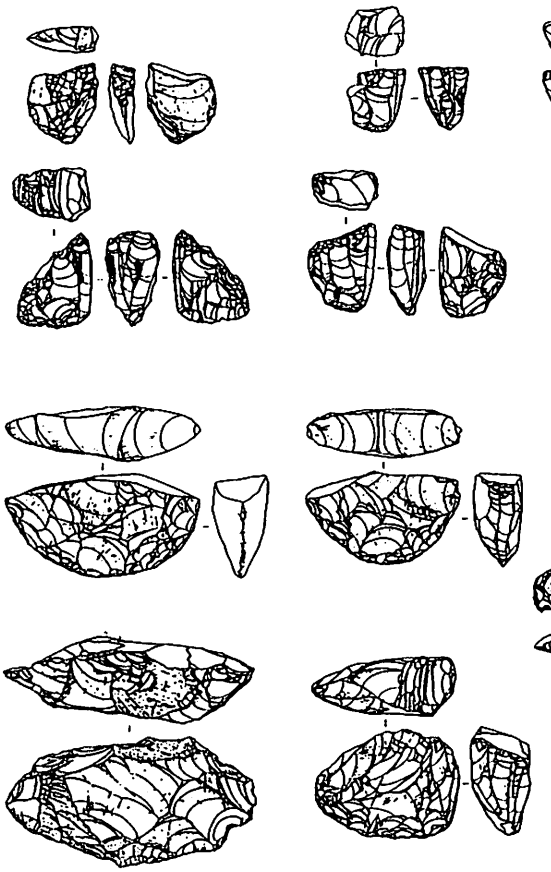
この論点でネックと言うべきは、継続性の論拠とすべき型式学的連続性の検証が困難であった点に尽くされよう。船底形の編年的後出性に関しては、相模野台地に於ける層位的事実(稜柱形→船底形→楔形)が雄弁に語っており、議論以前の現象的事実でもある。しかし、その後、関東では削片系によって代表される段階へと移行する点が明らかであるが、それと船底形との関係については不明と言わざるを得なかったように感じられる。言うならば削片系と船底形との関係が時間的・空間的に整理しきれなかった点に、総ての要因を求めることができようか。ここで削片系の変位と共に、対する在地系細石刃核の技術的・型式学的な系統の追及を意識的に行い、また柳又Ⅲ類への着目の背景にもこうした基本的課題へのアプローチを意図したからに他ならない。

ところで柳又Ⅲ類には船底形と円錐の双方が見られる。こうした形態的な相違は技術的相同の観点からすればバラエティとして解することができよう。同様な石核群の分布に関しては不明な観は否めないが、こうした在り方が九州地域と類似した様相を示している点は極めて重要と言えよう。大分県域の市ノ久保遺跡や松山遺跡、上下田遺跡などから検出されている細石刃核は、一様に船野型として認定されているが、こうした資料群の増加は、一方で船野型の範疇を拡大するという結果を招いている。あくまで九州地域内という枠で型式変遷を想定していることに要因したものであろうが、他地域を含めた連動の基での変化も想定すべきであろう。近年の大分県を中心とした上記遺跡に於ける細石刃核群は、いずれも打面形成が石核調整に先行している点で共通するが、その形態は船底形・円錐形・楔形というように多様である。市ノ久保遺跡では船底形が、松山遺跡では円錐形が、そして上下田遺跡では円錐形・楔形の双方が、それぞれ主体的に構成するような傾向が存在している。

著者は柳又Ⅲ類が東北九州地域の石核群と共通点の存在する点から、削片系の波及に先立ち、或は波及段階に打面形成が石核調整に先行する船野的な細石刃核群が広く西南日本地域に分布していたと考えておきたい。関東地域・中部両地域での削片系に伴出する石核型式がいずれも船底形からの系譜を引く点は、しかも時間差を越えて削片系と組成する事実は、削片系に対峙したかたちで船底形というものが在地系の細石刃核として展開していた事実を物語っている。それらは製作工程での共通性に貫かれてはいるものの、時間的或は地域的な要因から形態的には多様である可能性がたかい。こうした変容を時間的・空間的に追及することは今後の重要課題として認識されよう。

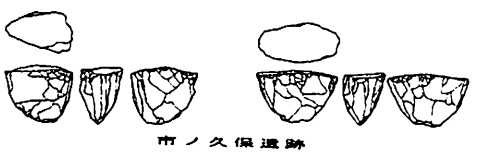
ここで想起されるのが神子柴系遺物の組成問題である。同文化の波及が波状で数次に及ぶ継続的なものとした場合は問題外であるが、現状に於いて神子柴文化の波状は一過的な理解が支配的である。その神子柴文化遺物との伴出関係から細石器文化終末の一定の編年的位相を明らかとすることも可能と考えている。関東以西での神子柴文化遺物遺物(神子柴型石斧・石槍)と細石刃石器群との関係に目を転じると、南関東地域で削片系と伴出関係が認められ、一方、九州地域にあっては上記した市ノ久保遺跡・松山遺跡で神子柴型石斧、上下田遺跡で神子柴型石槍の伴出が報告されている。神子柴文化の波及経路が北方にあるとすると、九州地域への波及に若干の時間的傾斜を想定する必要もあろうが、いずれにせよ神子柴文化遺物との伴出関係から、波及時点での各地の細石器文化の様相が逆説的に捉えることが可能と言えようか。

南関東の長堀北遺跡、月見野上野遺跡などでは神子柴型石斧・石槍が削片系の細石刃石器群との伴出関係を有している。在地系とした打面形成の先行した細石刃核は殆ど皆無の状態である。既に詳細に論じたようにこれらは柳又遺跡の直後に位置付けられ、月見野上

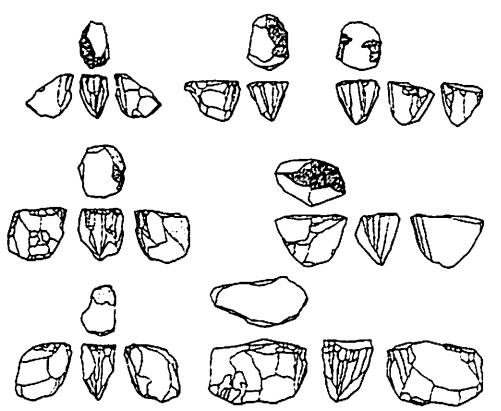


第５図　柳又遺跡

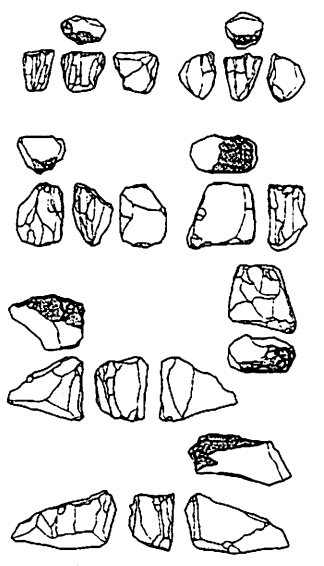
第６図



市ノ久保遺跡



上下田遺跡



上和田城山遺跡

野をピークとして変容が著しい。いずれにせよ削片系とは言っても、その最終段階の石器群である点に疑問の余地はない。

これに対して東北九州地域では神子柴文化の遺物は所謂船野型との共伴関係をもっている。現在のところ明確な伴出関係が見られるのは大分県域のみであるが、既に指摘したように長崎県福井洞穴第４層が同様な編年的位置にある可能性は非常にたかい。石槍や石斧を石器組成に含むのを始めとし、細石刃核はいずれも打面形成が石核調整に先行したものによって占められている点で大分県域との共通性が看取される。円錐形・船底形それぞれの細石刃核の石核構成に占める割合、腹面方向からの打面調整や下縁調整の出現率などを勘案すると松山・市ノ久保と上下田・福井４とでは若干の時間差が指摘し得る可能性も存在しようか。いずれにせよ、今後、船野型の型式的変位をより詳細に検討してゆく必要があろうし、そうした船野型を中心とした石核構成の時間的推移を明確としたならば、九州地域での草創期並行の様相はより明らかとなってゆくであろう。

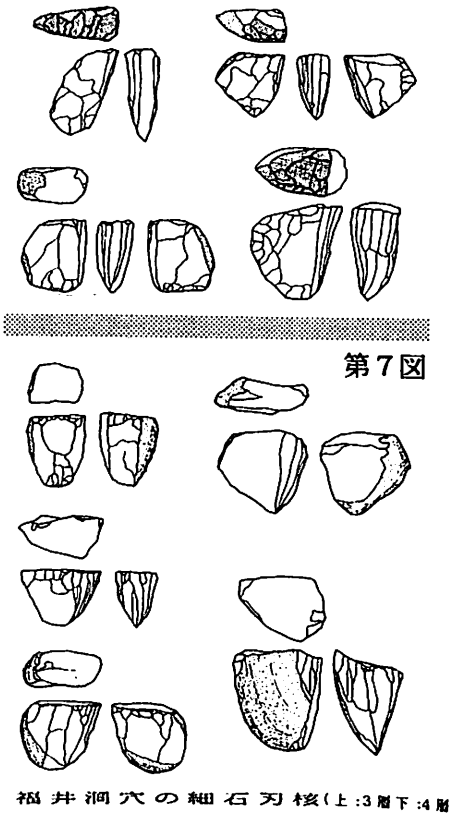
８、西海技法の問題

柳又遺跡で見られた細石刃核のなかで、Ⅰ類がその後に関東地方で神子柴文化と、そしてⅢ類が九州地方で神子柴と、各々共伴関係を持つようになる事実は重要と言えよう。つまり地域的な細石核群の展開・変位様相が神子柴文化遺物との接触を通じて把握されること、そして、西日本地域の東西で神子柴文化と接触を果たす石核形態が、時間的に先行する柳又遺跡に於いて組成している事実である。この点からも柳又遺跡に見るⅢ類を中心とした石核構成が西南日本に広く分布した、削片系に対峙させるべき在地系の細石刃石器群であったことが演繹されてこようか。ただし、柳又遺跡の石核構成が削片系に対峙した細石刃核群の内容の総てを伝えているとは考え難い。何故ならばそこでは明らかに削片系との接触・融合を遂げた姿として顕現しているからである。こうして意味でも注目されるのが神奈川県の上和田城山遺跡の細石刃核群である。出土層位と削片系を含まない石核構成から判断して、在地化した削片系が南関東へと波及する直前の姿を、更に言えば西南日本的様相の東端部域での様相を伝えているものと解して良いだろう。既に織笠氏が指摘したように、上和田城山遺跡の資料は九州地域のものと極めて類似している。略円錐形や船底形の細石刃核によって占められ、特に後者の打面が腹面方向からの調整によって形成されている点は織笠氏の指摘されるとおりであろう。ただし、著者にはこうした石核構成や技術的特徴は泉福寺洞穴や福井洞穴の土器を伴う細石刃核にではなく、むしろその直前に位置する上下田遺跡や市ノ久保遺跡、福井洞穴４層のものにこそ強い類似性 ── 略円錐形や船底形を主体とした石核構成と後者の船底形に特徴的な腹面方向からの打面調整 ── を有しているように感じられるのである。

こうした類似性を確認した場合、注目すべきはそれぞれの時間的関係にある。上和田城山の石核群は上野などと同様にＬ１Ｓ層中に包含されているものの、そこに神子柴系石器群の組成は見られず、その点に於いて長堀北・上野など削片系を組成した遺跡に時間的に先行する点に異論ないであろう。だが、上下田や市ノ久保では同様な細石刃核は神子柴系遺物と共伴関係にある。仮に系統関係を云々した場合には、むしろ前者が時間的に遡上するものであることを勘案せづるを得ず、現状の理解とは逆に関東から九州地域への影響をこそ指摘しなくてはならない。同様な点で注目されるべきは西海技法を特徴付ける腹面方向からの打面調整である。この技法工程の出現を考える場合、福井洞穴の層位と出土遺物とが重要なデータを与えている。福井４層の細石刃核は再三にわたって指摘したように大半が単一剥離によった打面を有し、石核調整はその打面作出の後に工程的に位置付けられている。ところが３層の細石刃核は一転して、両面体を素材とし、腹面方向からの調整によって作出した打面を持つものが圧倒的多数となる。石核型式にかかわる大きな技術工程の変化が、福井洞穴４層から３層への間、即ち神子柴文化から隆起線文土器の直前までの時間内に齎されていると言い得よう。その変化は概略的には両面体の素材準備と腹面方向

からの打面形成という二つの点に要約することが可能である（その後に作業面方向から削片を剥離する場合のあることも、併せて注意しておく必要があろう）。

これらの特徴は少なくとも九州地域での型式学遡上が困難なことは、福井４と編年的に並行する上下田遺跡、市ノ久保遺跡、そして松山遺跡などの資料が雄弁に物語っていよう。著者は両面体の形成と長軸方向からの削片の作出などの点から、この間に中部日本で在地化した削片系の影響が及んだものと理解している。問題は腹面方向からの打面調整であるが、この点は既に鈴木氏らが指摘されたように上野例に同様な調整が凌駕している事実をもって論理的な解釈が与えられてこよう。更に本論で述べたように、両面体作出後の腹面方向からの打面調整の類いは、柳又以後、中部日本地域で連綿として受け継がれた技術工程である蓋然性が非常にたかい。加えて福井・泉福寺両洞穴の資料に見られる腹面方向からの打面形成の後に作業面方向から削片を作出した資料も、上野例から演繹されるように隆起線文以前に中部日本地域に時間的に先行して存在するのである。一律的にその系統を論じることはできないが、西海技法を特徴付けるな複数の技術工程群が中部日本地域に認められる、しかも九州地域と比較した場合により時間的に先行して存在するる事実は、従来からの同技法の広域分布から導き出された北上説的な理解に対して、重大な警鐘を鳴らしていると受け止めるべきであろう。



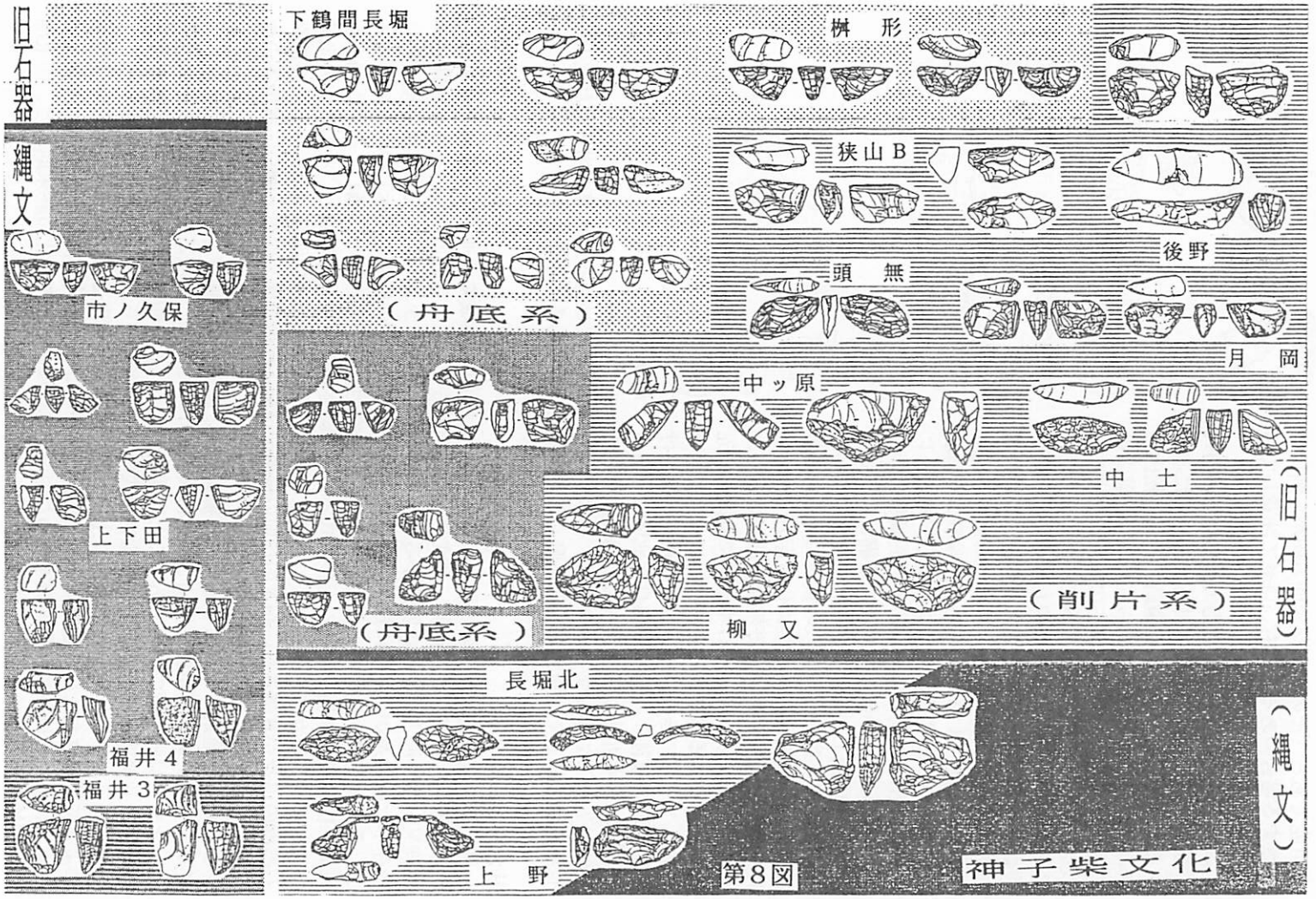
第７図

福井洞穴の細石刃核（上：3層下：4層）

９、まとめ

細石器文化の終末段階の問題について、一つは南関東地域での神子柴文化遺物を組成した細石刃核の系統を、技術的・型式学的に遡上することによって追及し、それが中部日本の柳又・中ツ原と系統的に関連するものであることを明らかとした。そこでは在地石材に依存した削片系が、さらに技術工程的に変容を果たす点での概略も提示し得たものと考えている。同時に、削片系と共に見られる石核を在地系の細石刃核と認識し、それが船底形以後に関東域で展開した細石刃核型式として認識される可能性を指摘し、その変容の系統も検討することができた。いずれにせよ、今後、削片系の波及に関してはこうした在地系石器群の追及が意識され、相互の連関の様態を技術工程の発展・変容・融合・置換等の次元で追及してゆく必要があろう。

こうした在地系への着目を通じて、柳又Ⅲ類と識別された細石刃核が広く九州地域にまで及ぶ型式である可能性を指摘した。柳又の編年的位置は、削片系の系統からたどっても長堀北や月見野上野の直前であることは間違いなく、この柳又Ⅲ類が九州地域で神子柴文化遺物と共伴関係を有する点は、遺物型式の時間的序列からも整合性のたかいものといえるであろう。少なくとも、従来より主張していた神子柴文化遺物に伴う細石器という認識によって帰結されていた船野型の編年的後出性を、ここで型式学的にも明確とし得たかと考えている。と同時に九州地域を含めた西南日本地域の細石器文化の終末期には、関東地方と同様な石核構成と技術工程を共有している可能性が存在した。そしてそこに見る多く


旧石器
縄文
下鶴間長堀
楔形
狭山B
後野
頭無
月岡
（舟底系）
市ノ久保
中ッ原
中土
上下田
（舟底系）
（削片系）
柳又
（旧石器）
長堀北
（縄文）
福井4
福井3
上野
第8図
神子柴文化

の特徴的要素は、その大半が時間的に先行する中部日本の諸終末から神子柴文化にかけて顕著に認められている事実は、従来の「西海技法」の系統的理解に関して再考を促しているように感じられる。

今後はこの点での整理に加えて、何よりも船野型と船底形、「ホロカ技法」と「船野技法」、この二つが区分し得るものなのか、編年的に整合するものなのか、そして船底形の盛行以後、削片系の波及段階を含めて地域的にどのような展開を遂げていたものか、こうした問題が次の研究射程として意識され、熱心に議論されることが急務であろう。

【引用・参考文献】

相田　薫他1986年　『月見野遺跡群上野遺跡第一地点』大和市教育委員会
相沢忠洋・関矢　晃　1988年　『桝形遺跡』
青木　豊・内川隆志1980年　「神奈川県勝坂遺跡45次調査」『考古学ジャーナル』324号
麻生　優　19965年　「細石器文化」『先土器時代』日本の考古学Ⅰ
麻生　優　1984年　『泉福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
麻生　優　1991年　「岐阜県池の原遺跡調査概要」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』（研究代表　麻生　優）
安蒜政雄　1979年　「日本の細石核」『駿台史学』47号
安蒜政雄　1982年　「日本の細石器文化」『駿台史学』60号
安蒜政雄　1986年　「先土器時代の石器と地域」『岩波講座　日本考古学5　文化と地域』
稲田孝司　1986年　「中国地方旧石器文化の諸問題」『岡山大学文学部紀要』7
宇野修平・上野秀一　1975年　「角二山遺跡」『日本の旧石器文化』2
織笠　昭　1979年　「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』47
織笠　昭　1990年　「西海技法研究序説」『東海大学文学部紀要』53
織笠　昭　1991年　「西海技法の研究」『東海大学文学部紀要』54
織笠　昭　1992年　「南関東における西海技法の受容と変容」『人間・遺跡・遺物』2　発掘者談話会
川崎純徳他　1976年　『後野遺跡』勝田市教育委員会
加藤　稔　1991年　「東北日本の細石器文化の展開」『山形県立博物館研究報告』12
鎌木義昌・芹沢長介　1965年　「長崎県福井洞穴－第一次発掘調査の概要－『考古学集刊』3-3
川口　潤　1990年　「埼玉県白草遺跡の細石刃文化」『考古学ジャーナル』306号
栗島義明　1991年　「本ノ木論争　－その学史的背景と今日的意義－」『日本考古学協会第57回研究発表要旨』
栗島義明　1991年　「西南日本における神子柴文化」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』（研究代表 麻生　優）
栗島義明　1993年　「湧別技法の波及 ── 削片系と在地系の細石刃核について ──」『土曜考古』17
小池　聡　1991年　『長堀北遺跡－本文編－』大和市教育委員会
国学院大学文学部考古学研究室　1990年　『柳又遺跡Ａ地点　第1次発掘調査報告書』

国学院大学文学部考古学研究室　1991年　『柳又遺跡Ａ地点　第2次発掘調査報告書』
国学院大学文学部考古学研究室　1992年　『柳又遺跡Ａ地点　第3次発掘調査報告書』
桜井美枝　1992年　「細石刃石器群の技術構造 ー山形県角二山遺跡の分析ー」『加藤稔先生還暦記念　東北文化論のための先史学歴史学論集』
白石浩之　1992年　「細石器文化の研究」『人間・遺跡・遺物』2　発掘者談話会
鈴木次郎　1989年　『相模野149遺跡』大和市教育委員会
鈴木忠司　1979年　「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』
鈴木忠司　1979年　「中部地方南部の細石器文化」『駿台史学』47
鈴木忠司　1988年　「上野Ⅱ文化層の位置づけをめぐって」『大和のあけぼの　Ⅱ』大和市教育委員会
砂田圭弘　1988年　「相模野の細石器」『神奈川考古』24
諏訪間　順　1988年　「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24
諏訪間　順　1991年　「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」『中ツ原遺跡Ｂ地点の研究』
芹沢長介　1959年　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について(予報)」『第四紀研究』1-5
橘　昌信　1975年　「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論　』3
橘　昌信　1981年　『上下田遺跡』別府大学付属博物館
橘　昌信　1983年　「細石器（九州地方）」『季刊　考古学』4
谷口康浩　1991年　「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『国学院雑誌』92-4
戸沢充則　1964年　「矢出川遺跡」『考古学集刊』2-3
堤　　隆他　1984年　『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　大和市教育委員会
堤　　隆他　1985年　『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　大和市教育委員会
堤　　隆　1987年　「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13
堤　　隆　1991年　「野辺山原における細石刃文化の様相」『中ツ原第5地点の研究』
堤　　隆　1992年　「中部日本における細石刃文化」『国際シンポジューム　北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』
東北大学文学部考古学研究室　1990年　『荒屋遺跡 ー第2･3次発掘調査概報ー』
中村孝三郎　1965年　『中土遺跡』
中村孝三郎　1978年　『越後の石器』学生社
中村孝三郎・小林達雄　1975年　「月岡遺跡」『日本の旧石器文化』2
中村喜代重　1979年　「先土器時代」『上和田城山遺跡』大和市教育委員会
中村喜代重　1986年　「先土器時代」『大和市史7 資料編　考古』大和市役所
橋本勝男　1989年　「東北日本の細石器文化」『考古学ジャーナル』306号
細野高伯　1991年　「柏倉芳見沢遺跡の調査」『第4回　東北日本の旧石器文化を語る会』
前原　豊・関根吉晴　1988年　「群馬県柳久保遺跡群頭無遺跡」『第2回　東北日本の旧石器文化を語る会』
八ケ岳旧石器研究グループ　1991年　『中ツ原第5遺跡Ｂ地点の研究』
吉田　格・比留間博　1970年　『狭山・六道山・浅間谷遺跡』瑞穂町文化財調査報告書
綿貫俊一　1992年　「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談　』28

日本細石器文化研究の現状と課題

橋本勝雄

はじめに

日本細石器文化の本格的な研究は、旧石器時代の存在を確認した岩宿以後のことでありとりわけ矢出川遺跡の発見が契機となったものとあとづけられる。

ここでは、以後の研究史を、主として新資料の発見・調査を画期として、別表のとおり便宜的に４期に細分した。（第Ⅰ期…岩宿・矢出川以降、第Ⅱ期…福井洞穴以降、第Ⅲ期…角二山遺跡及び泉福寺洞穴以降）

その中で現況は、第Ⅳ期に該当し、相模野編年によって、編年的研究が飛躍的に進展するとともに、北方系細石刃石器群の資料的な蓄積が著しく、系統論研究に新たな展開がもたらされた時期と捉えられよう。

本稿では、以上の現況をふまえ、今後の研究上の指針を探るべく、各地の研究動向について系統論を重視しつつ略説する。

１、各地の研究動向

（１）北海道　言うまでもなく、本地域は、大陸からの窓口として、また核地域として北方系の系譜を追究する上で、日本列島においては重要なフィールドである。

したがって、当該期の関連文献は、枚挙にいとまがないが、ここでは、ひとまず本州への波及の様態に論点をしぼり、代表的な鶴丸俊明及び山田晃弘の見解を手がかりにして若干の考察を行う。

鶴丸俊明は、北海道では「原産地あるいは原産地近辺の遺跡には粗雑な大型の尖頭器、両面調整石器が多い」ことから、その「両面調整素材」は「石器供給のための一素材」であり、細石刃核や石刃石核他の素材となり得たという。

このような見解は、後に道内における石材の「物流機構」を指摘した横山、木村説に一脈相通じ、通常の遺跡において素材剥片もしくは母型が僅少ないしは欠落するという北方系削片系細石刃石器群の汎日本的な現象にも関連づけられよう。（鶴丸俊明１９８５、横

山英介、木村英明１９９０）

一方　、山田晃弘は、湧別技法が細石刃生産技術、他の器種の素材供給も担うより多角的な石器製作技術体系であり、石刃技法そのものの素材供給における役割は低いとした。

後述するように、本州北半部においては、石刃が欠落しているもの基本的にはこの見解と合致する成果が得られており、後に、^{14}Ｃ年代で２万年を越す越川、嶋木両遺跡が発見され、北海道における細石刃文化の出現が予想外に古くかつ存続期間が長いことが指摘されたこととあいまって、北海道の細石刃石器群の本州への拡散の時期と北方系細石刃石器群の技術的分布特性を検討する上で興味深いデータとなった。（山田晃弘１９８６）

（２）東北地方　山形県角二山遺跡の発見以来、加藤稔らが、研究を精力的に推進してきた。（上野・加藤１９７３など）

加藤の言うように東北地方の細石刃石器群が北海道との関連性の上で成り立つという視点は、基本的に正しいが、資料的に零細であり、北海道編年との整合性を立証する段階に至っていない。

すなわち、本地域の北方系細石刃生産技術は、今のところ湧別技法とホロカ技法の二者が基調となっており、道内の峠下段階に対比し得る程の確実な資料は見いだせず、その出現時期は湧別技法細石刃石器群以降に限定せざるを得ないのである。

したがって、道内の多様で複雑な石器群が本州へ拡散するにあたって、周辺地域では、移動に適した効率的な技術のみが受容され、その結果、湧別技法とは技術体系を異にする石刃技法や一部の器種がほとんど潜在化し、あたかも湧別技法を中心とした「管理的」で組織的な技術構造のみが顕在化したかの印象を受ける。

このことに関連して、桜井美枝は、角二山遺跡の石器素材の大部分が、北海道と同様に、湧別技法によってもたらされたことを立証したが、このような技術的特徴は、千葉県木戸場遺跡をはじめ岡山県恩原遺跡等の本州全域の当該資料に適用でき、先述した山田見解と合致しよう。（桜井美枝１９９２、橋本勝雄１９８９、稲田孝司他１９９２）

いずれにしろ、このような技術的構造は、広範な分布圏を有する北方系細石刃文化固有の特性といえ、本州への拡散の理由は、加藤晋平の説くように、産卵遡河性のサケマス漁撈を含む内水面漁撈の発達にあるものと推察される。（加藤晋平１９８０、１９８１、加藤・松本１９８４）

（３）関東

〈関東地方東部〉　本地域では、一部に野岳・休場型が介在するものの、大略、東北地方

からのダイレクトにもたらされた北方系削片系細石刃石器群と在地石材に根ざしたホロカ技法舟底形細石刃石器群の二者が主体をなす。

後者は、細石刃核の諸特徴、北方系に伝統的な石刃技法の存在及び石器組成（石刃素材の掻器・彫刻刀形石器など）について、相模野例とは様相が異なり、時間的位置づけや関連性は今のところ不明であるが、石器組成に応じた技術構造の地域的変化（北方系削片系細石刃石器群に特有な両面調整素材を中心としたひとつの技術体系から別個の技術体系へ）と在地石材の使用に応じた石器原産地と遺跡とを結ぶ「物流機構」の崩壊等が現象化している。したがって、このことは集団の定住化の問題に波及しよう。

なお、ホロカ技法舟底形細石刃核の分布圏は福島県南部が、北限となっており、あたかも局所的に分布するかのようであるが、伝播系統論的に、東北地方の当該石器群との関連性をも検討せねばなるまい。（在地石材＝珪質頁岩）

〈関東地方西部〉相模野台地では、豊富な層位的事例を背景とした鈴木次郎の先駆的業績を受けて堤隆が、さらに研究を進展させた。

堤は、当初、相模野台地の細石刃核の変遷を、古い段階から野岳・休場型⇨船野型＋野岳・休場型⇨福井系＋土器とし、それらはいずれも南回りの細石刃石核であると結論づけた。（注１）

最古の野岳・休場型は、起源論を語る上で重要な位置にあるが、堤は「それ以前の槍先形尖頭器文化やナイフ形石器文化に…中略…細石刃という利器を生み出す素地が見いだし得ない。」と述べ、大陸からの伝播を予想している。

これに対して、加藤晋平はナイフ形石器及び槍先形尖頭器の共伴、砂田佳弘は細石器文化以前の祖源的技術基盤の存在から自生説を唱えている。しかしながら、堤が言うように「細石刃文化の特色は、いわば唐突に出現するところにこそ帰されるもの」であり、素地があったとしても、小林説に代表されるように何らかの外来的な刺激がなければなるまい。（小林達雄１９７０、加藤晋平１９８４、砂田佳弘１９８８）

野岳・休場型に後続するホロカ技法舟底形細石刃核について、堤は、「石核構成」、属性分析及び石器組成により、船野型と認識したが、今のところ、北方系（加藤稔１９８４、石井浩幸１９８７）と南方系との二説あり、関東地方の東西で石器組成を含め異質な地域性をそれぞれ有している。

相模野台地のホロカ技法舟底形細石刃核の出自については、後述するように、船野型との時間的不整合を考慮すると東漸論には賛同しがたく、むしろ分布域を接する北方系細石

刃石器群の強い影響を重視せざるをえない。

一体、石器群のクロスチェックには、相互の地域編年の確立が不可欠である。したがって、そうした意味からも、今のところ、船野型については、あくまで東九州に限定した地域的な型式概念にとどめておく方が穏当であろう。

また、後に堤が自ら改定したとおり、南方系とされた削片系細石刃核についても、石器組成等から南方系というよりもむしろ北方系の様相を示す資料であるものと考えられる。（八ケ岳旧石器研究グループ１９９１）

したがって、相模野台地を中心とした関東地方西部においては、基本的に関東地方東部にまで波及した北方系の強い影響を受けた結果、ホロカ技法舟底形細石刃核以降の時期に、独特の地域文化がかもしだされたものと考えられる。（注２）

なお、相模野台地のホロカ技法舟底形細石刃核の調整技術は、北方系に帰属する東関東に比べかなり簡略化され粗雑であり、また下鶴間長堀例のように同一母岩中に舟底志向の不定形な細石刃核が含まれており斉一性にかける。このことは既存資料の時間的な位置関係は別として、当該石器群が隣接する北方系の影響下である段階に成立し、豊富な在地石材を背景に、周辺地域としてかなり便宜的な技術構造に変容した可能性を物語っていよう。

（４）中部・東海　中部高地では、南部の野岳・休場型、北部に北方系と大きく分布圏が二分され、東海地方では、駿河以東では野岳休場型、以西では岐阜・愛知・静岡県西部を中心として在地石材の特性に根ざしたホロカ技法舟底形細石刃核の一種である海老山型が分布する。（森嶋１９８５、鈴木忠司１９７９）ところで、最近、以上の細石刃石器群に加えて、中部高地において池ノ原、柳又Ａ、中ツ原５Ｂ遺跡等の北方系の新資料が発見され、「在地の二次的展開」と捉えられている。　しかしながら、資料的な制約のため、細石刃生産技術の相互比較に不可欠な工程復元（石核素材生産～細石刃生産）を背景とした分析とは言いがたく、工程の最終段階にある細石刃核の分析に依拠せざるを得ないところに限界がある。

現状では、中間地帯の（東北～北陸）を含めて資料の不足はおおいがたく、やむをえないことではあるが、技術的地域特性の検討には、今後、資料的な蓄積をふまえ、石材や他の器種の技術基盤をも含めた総合的な研究が要請されよう。

（５）北陸　本地域は、大略、北方系細石刃石器群の分布圏に含まれるが、十分な資料的蓄積はなされておらず、最近の重要な成果としては、わずかに荒川台遺跡の調査及び荒屋

遺跡の再調査をあげうるにすぎない。

荒川台遺跡では、既知の技法とは明らかに異質な細石刃生産技術が復元され、新たに「荒川台技法」が提唱されているが、類例の探索及びナイフ形石器と彫刻刀形石器との共伴関係に検討の余地が残されている。（阿部朝衛１９９２）

一方、荒屋遺跡では、削片系細石刃核とホロカ技法舟底形細石刃核の共存が確認され、かつて大塚和義が想定した荒屋技法荒屋型細石刃核の存在に否定的な成果が得られている。このような技法の共存関係は、北方系削片系細石刃石器群では、通有のことと捉えられ、木村英明の「テクノロジカルコンプレックス」に関連づけられよう。（大塚１９６８、加藤博文・木村英明１９９０他）

（６）近畿　本地域は、織笠昭も指摘しているように「ない」という地域性が系統論的に重要な意義を持っており、誉田白鳥遺跡出土の削片及び南大塚古墳の削片系細石刃核の出土例を考慮すると、北方系の限界が、中部東海を越え本地域へも波及したことをも予測させる。いずれにしろ南北二系統の接触の動態を探る上で重要な地域である。（織笠昭１９８４）

（７）中・四国　本地域では、現在、中国地方の日本海側や四国の太平洋側において散発的な出土例が報告されているが、「鷲羽山・井島」以来、伝統的に瀬戸内を中心とした調査研究が展開されている。

一般に、瀬戸内の細石刃核は「瀬戸内的板状細石核」という言葉に象徴されるが、西村論文に代表されるように、実状は多様な形態の細石刃核を含んでいる。

西村尋文は中部瀬戸内における多様な細石刃核を素材の状態、製作工程・形態を基準として、まずⅠ～Ⅳ類に分類した上で、これにホロカ技法舟底形細石刃核と羽佐島等で出土した客体的な削片系細石刃核を加え、最終的に六類型に分類している。（西村１９８３）

西村は、そのうち、Ⅰ類の円錐～角錐状を野岳休場型、Ⅱ類を矢出川型の一部に見いだし、Ⅲ類及びⅣ類を福井洞穴２・３層の類例とした。

しかしながら、本地域は、土層の堆積状況が不安定なために資料に一括性の保証がなく、分類の前提条件となる工程の裏付けを欠くので詳細な分析は困難である。また、素材の形状の差や作業の進行の程度による細石刃核の形態の変化などの不確定要素が介在しており、そうした制約のもとでなされた分類といえる。

ともあれ、６類型の細石刃核は、技術形態学的に福井洞穴２・３層及び４層にすべて存在し、とりわけ剥片を素材としたⅡ・Ⅲ類は、側面調整の浅深の差こそあれ、２・３層に

おいて瀬戸内と同様に数量的に安定している。（橋本勝雄１９８３）

また、遺物の同時性の検証は困難ではあるが、おおむね瀬戸内の様相は、福井洞穴と同様に、ひとつの原石を消費する過程の中で生ずるさまざまな形状の素材に適合した技術を用いているものと考えられ、その結果、多様な形態の細石刃核が出現したものと推察される。

したがって、このような技術基盤が介在する細石刃石器群から、一部の形態の細石刃核のみを抽出して、技術的に斉一性の高い「船野型」、あるいは「野岳・休場型」などの型式に置き換えることには、いきおい慎重にならざるを得ない。

（８）九州　九州の旧石器時代における細石器文化の時間的位置づけについては、研究者間で齟齬がみられ、中でもナイフ形石器の共伴が象徴的な論点となっている。

筆者は、小畑弘己と同様に資料の一括性を疑問視しており、九州におけるモザイク状の技術的分布特性は、細石器文化の発生当初から生じたとするよりも、土器出現期以降のできごとであるものと推測している。（小畑１９８３）特に「船野型」については、新資料の増加にともない、土器や石斧等の共伴を前提として編年的位置を再検討すべき段階に達している。

では、このような技術的分布特性はどのような要因によって発生したのであろうか。

九州の遺跡分布の様相は、野岳休場型を除いて、モザイク状を呈するが、実際には、宮田論文や西北九州産の黒曜石を用いた細石刃石器群が出土した鹿児島県登立遺跡例に象徴されるように、同一の技術基盤のもとで生じたのであって、各地の在地石材の石質及び規格の違いによる技術・技法の使い分けないしは軽微な技術の変容によって生じたみかけのすがたであるものと推察される。（宮田栄二１９８６、鹿児島県知覧町教育委員会１９８９）

そのような意味で、岩土原遺跡における板状細石刃核（いわゆる「福井型」）と船野型細石刃核の共存、あるいは船野遺跡における船野型、野岳・休場型、及び畦原型細石刃核の共存例は、石材によって異なる技術が行使された象徴的な事例と言え、これらの細石刃石器群に含まれる細石核の技術的特徴を集約すると、福井洞穴に代表される西北九州の様相に帰結する。（鈴木重治１９７３、橘昌信１９７５）

福井洞穴の様相は単純ではなく、楔形基調は強いものの他の器種を含めたひとつの技術体系の中で、素材の形状に応じた柔軟な製作技術を有しており、板状に近い素材を用いた例のほかに、船野型に近いホロカ技法舟底形細石刃核をも含んでおり、多岐にわたる。

このような福井型細石刃生産技術は、おそらく土器出現期前後に大陸から西北九州への伝播したのち、九州全域及び瀬戸内に至るまで急激に技術が拡散し、その過程で在地石材の使用を背景とした各地域固有の技術体系に変容したのであろう。

一面で、こうした九州の技術的分布特性の出現の経緯は、島嶼である日本列島の縮図である。特に本州以西では、鈴木忠司が言うように、細石器文化を担った集団が各地の在地石材に即して多様な技法を発揮した時期に、技法・技術の発現の差によって、みかけの技術的分布特性（＝細石刃石器群の地域性）が生じたものと推察され、その時期は、ホロカ技法舟底形細石刃核の登場以後のことであろう。（鈴木１９７９）

２、まとめ―日本細石器文化の特質―

我が国では、かつて鈴木忠司によって、５３８か所の遺跡が集成された。（鈴木１９８３）その後、遺跡は激増の一途をたどり、管見では千有余の細石器文化期の関連遺跡が発見されている。

このうち、開発の先進的地域である関東地方を除くと、列島の南北の窓口である九州及び北海道において遺物分布が濃密であり、核地域が所在することが理解できる。

また、周辺地域である本州、中・四国では、永い伝統を維持してきたナイフ形石器文化が駆逐され、固有の石器群が短期間に拡散し急激な消滅に至った経緯から、細石器文化を担った集団は、それまでのいかなる時期に比べても、本質的に、より排他的でより非定着的な技術的特性を保持していたものと推察される。

以上のことから、日本列島の細石器文化期の様相が、評価が流動的な野岳・休場型の出現の経緯を含め、基本的には南北二系の伝播系統論によって説明でき、北方系が、永い存続期間と広範な分布圏から、影響力の強さをうかがわせる一で、福井洞穴・泉福寺洞穴を代表とする南方系は土器出現期以降の短期間に九州一円から瀬戸内にかけて影響を与え、相対的に狭い分布圏を形成したことをうかがわせる。

もちろん、日本細石器文化の様相のすべてを、このような外来の要素によって律することができるわけではない。おそらく拡散の過程で南北に長い島嶼的環境と急峻な地形によってもたらされた多彩な自然環境とナイフ形石器文化以来の文化伝統が加味されたことによって、日本列島固有の技術的特性が生成されたのであろう。（'93、9、19脱稿）

なお、本稿は先に執筆した「略説・日本細石器文化研究の現状と課題」（『史館』２４号）の一部を加筆修正したものである。

（注１）本稿では、土器出現期以前のいわゆる稜柱形の細石刃核を、便宜的に「野岳・休場型」と呼称した。現状では、当初の定義が拡大し、素材に規格性がなく、形状が不定形を呈する資料についても時期を問わずこの型式概念が適用されがちである。土器出現期以降の稜柱形細石刃核の系譜が不明な現状では、「野岳・休場型」の認定は、あくまでも土器出現期以前の古い段階にとどめるべきであろう。

なお、野岳・休場型を含めいわゆる稜柱形の細石刃核は、総体的に、時期を問わず、黒曜石との結びつきが強く、土器出現期以降もこの傾向が堅持される。これに関連して休場遺跡及び矢出川遺跡における石材ごとの技法の使い分け（野岳・休場型…黒曜石＋ホロカ型…非黒曜石）は、まさに象徴的な事例のひとつであろう。

（注２）筆者の仮説に対して「神子柴型石斧」が伴うことから、船野型が北方系であるとの解釈も生まれようが、真の意味で系統関係を決定づけるためには、土器共伴の問題を含め、瀬戸内以東の類例の出現を待たねばなるまい。

引用・参考文献

１、一般概説等

小林達雄　１９７０　「日本列島における細石刃インダストリー」　『物質文化』１６

鈴木忠司　１９７１　「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」
『古代文化』２３－８

加藤晋平　１９８０　「東アジアにおける狩猟漁撈社会の発達
ーとくにソ連邦極東・沿海州についてー」　『東アジア世界における日本古代史講座』１
学生社

加藤晋平　１９８１　「旧石器時代の漁撈活動ー先土器時代の経済活動を考える上でー」
『信濃』３３－４

鈴木忠司　１９８３　「日本細石刃文化の地理的背景ー先土器時代遺跡論の試みー」
『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』

橘昌信　１９８４　「日本細石器文化の地域性」　『駿台史学』６０

織笠昭　１９８４　「細石器文化組成論」　『同上』

加藤晋平　１９８４　「日本細石器文化の出現」『同上』

加藤晋平・松本美枝子　１９８４　「日本細石刃文化の源流」　『史艸』２５号

鈴木忠司　１９８５　「再論日本細石刃文化の地理的背景ー生業論への視点」
『論集日本原史』
橋本勝雄　１９８９　「東日本の細石器文化ー東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向ー」　『考古学ジャーナル』３０６
鈴木忠司　１９９２　「日本列島細石刃文化の分布論的検討
ー地理・動植物そして人口ー」
『北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』
佐藤宏之　１９９２　「北方系削片系細石器石器群と定住仮説」
『法政大学大学院紀要』第２９号

２、地域別

（１）北海道

鶴丸俊明　１９７９　「北海道の細石刃文化」　『駿台史学』第４７号
藤本強　１９８２　「常呂川流域の細石刃」　『北海道考古学』第１８輯
鶴丸俊明　１９８５　「黒曜石の供給の一形態とその技術」『考古学ジャーナル』２４４
山田晃弘　１９８６　「北海道後期旧石器時代における石器製作技術構造の変遷に関する予察」　『考古学雑誌』７１ー４
筑波大学嶋木遺跡調査グループ　１９８８　「北海道河東郡上士幌町嶋木遺跡の石器文化」　『歴史人類』第１６号
畑宏明　１９８９　「東シベリアの後期旧石器」　『季刊考古学』第２９号
横山英介、木村英明　１９９０　「北海道における旧石器研究の現状と課題」
『北海道考古学』第２６輯
加藤博文・木村英明　１９９０　「北海道白滝村ホロカ沢遺跡遠間地点」
『第３回東北日本の旧石器文化を語る会』
北海道紋別郡遠軽町教育委員会　１９９０
『湧別川遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録』
曽根敏雄・米村衛・隅田まり　１９９１　「北海道越川遺跡における約二万年前の細石刃様の石器」『第四紀研究』３０ー２

（２）東北地方

上野秀一・加藤稔　１９７３　「東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について」
『北海道考古学』第９輯

矢島國雄　１９７９　「東北地方の細石器文化」　『駿台史学』４７号
石井浩幸　１９８６　「越中山遺跡群における細石器文化の探究ー湧別技法による細石刃生産技術をめぐって」　『庄内考古学』第２０号
石井浩幸　１９８７　「細石器文化の技術基盤と展開」　『山大史学』第６号
加藤稔　１９９０　「東北地方の細石刃核」　『伊東信雄先生追悼古代史論集』
桜井美枝　１９９２　「細石刃石器群の技術構造」　『東北文化論のための先史学歴史学論集』
（３）関東地方
川崎純徳　１９８１　「竜ケ崎市沖餅遺跡出土の舟底形石器とその編年上の課題」　『常総台地』１２
鈴木次郎　１９８３　「細石器（本州地方）ー関東・中部南部を中心にー」　『季刊考古学』４
神奈川県立埋蔵文化財センター　１９８６　『代官山遺跡』
堤隆　１９８７　「相模野台地の細石刃石核」　『大和市史研究』第１３号
橋本勝雄　１９８８　「《研究ノート》千葉県佐倉市木戸場遺跡Ａ地点「第１・第２ユニット」から」『研究連絡誌』第２１号　財団法人千葉県文化財センター
砂田佳弘　１９８８　「相模野の細石器」　『神奈川考古』第２４号
（４）中部・東海地方
鈴木忠司　１９７９　「東海地方の細石刃文化について」　『日本古代学論集』
森嶋稔　１９８５　「中部高地における二つの細石刃文化」　『考古学ジャーナル』２４３
谷口康浩　１９９１　木曽開田高原柳又遺跡における細石刃文化」　『國學院雑誌』９２ー２
八ケ岳旧石器研究グループ　１９９１　『中ツ原第５遺跡Ｂ地点の研究ー野辺山原におけるもうひとつの細石刃文化』
（５）北陸地方
大塚和義　１９６８　「本州における湧別技法に関する考察」　『信濃』２０ー４
綿貫俊一・堤隆　１９８７　「研究メモ・荒屋遺跡の細　石刃文化資料」　『長野県考古学会誌』５４号
東北大学文学部考古学研究室　１９９０　『荒屋遺跡ー第二・三次発掘調査概報ー』

阿部朝衛　１９９２　『新潟県関川村荒川台遺跡第一次調査報告　法政考古学第１８集』

（６）近畿、中国・四国地方

柳田俊雄　１９７７　「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点
一特に研究課程における方法論をめぐって一」『プレリュード』２０

西村尋文　１９８３　「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術」『旧石器考古学』２６

（７）九州地方

橘昌信　１９７３　「九州における細石器文化」『考古学論叢』Ⅰ

鈴木重治　１９７３　「宮崎県岩土原遺跡の調査一土器伴出旧石器文化の一例一」
『石器時代』１０

橘昌信　１９７５　「宮崎県船野遺跡における細石器文化」　『考古学論叢』Ⅲ

橘昌信　１９７９　「東九州における細石核一船野型細石核一」
『考古学ジャーナル』１６７

橘昌信　１９７９　「九州の細石器文化」『駿台史学』４７

小畑弘己　１９８３　「九州の細石刃文化」　『物質文化』４１

橋本勝雄　１９８３　「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について一第二・三層を中心と
して一」『考古学論叢』Ⅰ

橘昌信　１９８５　「九州における先土器時代石器群の編年と地域性」『論集日本原史』

橘昌信　１９８５　「九州における細石器文化の共伴遺物」　『肥後考古』第五号

宮田栄二　１９８８　「南九州の細石器文化一福井型細石刃核の波及について一」
『鹿児島考古』第２２号

鹿児島県知覧町教育委員会　１９８９　『登立遺跡・下水洗迫遺跡』

綿貫俊一　１９９２　「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」
『古文化談叢』第１８集

（補注）文献目録は都合により最小限にとどめた。

第１表　研究史の概観 － 発掘調査史 －

'93、8、31作成

段階	「岩宿・矢出川」以前	第Ⅰ期（1949～1959）		第Ⅱ期（1960～1969）		第Ⅲ期（1970～1982）		第Ⅳ期（1983～）	
地域	～1948	1949～1955	1956～1959	1960～1964	1965～1969	1970～1974	1975～1982	1983～1989	1990～
主なできごと	宮脇遺跡の調査'47 曽根遺跡の調査'09	矢出川遺跡の調査'54、'63 芹沢・編年'54 岩宿の発見'49 矢出川の発見'53	荒屋遺跡の調査'58 立川遺跡の調査'58～'59	休場遺跡の調査'61'64 湧別技法の提唱'61'64 福井洞穴の調査'60～'64	常呂パターン仮説'69 野川・月見野の調査'68～'70 荒屋技法の提唱'68 稲田・構造論'67 西海技法の提唱'65	野岳・休場型の提唱'71 泉福寺洞穴の調査'70～'79 小林・システム論'70 角二山遺跡の調査'70	大平山元技法の提唱'81'81 加治屋園技法の提唱'81 船野型の提唱'79 海老山型の提唱'79～'81 駿台史学細石器特集号'79、'84 野辺山シンポジウム'79～'81	代官山技法の提唱'86 美利河技法の提唱'85 鈴木・相模野編年'83	荒川台技法の提唱'92
北海道		狩太西窩'55 白滝遺跡群'55～'61	タチカルシュナイ、上常呂'58 立川、曲川'58～'59 札滑'58～'59 峠下、紅葉山'59 置戸安住'56、'57	大正'60 白滝服部台'61 モサンル64、'65 置戸安住'62	吉田、中本'68 札滑K'68	吉村、岡村、祝梅三角山'70 本村'71 増田、水口'71～'72 タチカルシュナイ'72	勢雄'76 上似平'76～'77 都'77 服部台2'81 帯広空港南A'82～'83 モサンル'78～'79	湯ノ里4'83 美利河1'83～'84 新道4'84～'86 石川1'85～'87 悦加沢'87～'90 岐木、越川'87 帯広空港南B'84 帯広暁'83'～'89	帯広落合'90 帯広泉町A'91
東北					米ケ森'69～'76	角二山'70、越中山S'71、湯ノ花'73 大台野'71～'74	大平山元Ⅱ'77～'78 大平山元Ⅲ、湯ノ花、谷地前C'79、薬師堂'82	学壇'89～	
北陸			荒屋'58	中土'64	月岡'68			荒屋'88、'89 荒川台'86、'89、大刈野'87～'88、大平'88	荒川台'91、'93
関東		桜形'51		逆室'63	狭山B'69	相模野No.149'70 向原'71～'72 西之台'73～'74 下耕地'73	後野、報恩寺'75、坂田北、星谷津、新橋'76、額田大宮、上和田城山、寺尾'77、沖餅'78、上野第1、上草柳、下觜問長堀'79～'81、代官山'81～'84 木戸場、大林'82、深見諏訪山'81	高岡遺跡群、升形、大割'85～'86 頭無、長堀北'87 白草'89 勝坂'89～'90	芳見沢'90 柳戸・横田'91
中部東海	曽根'09	矢出川'54	海老山'59 男女倉'57～'60 柳又A'59、'61、'62	矢出川'63 休場'64 野尻湖遺跡群'62～		小塚'71 男女倉'72、'74～'75	寺谷'80 広野北'81～'82	柳又A'89～'92、柳又C'90、池ノ原'89、寺田・日野I'85～'86	中ツ原5B、上ノ原'90
近畿							出張'76～'77		
中四国	宮脇'47	鷲羽山、井島'54					瀬戸大橋関連（花見山、羽佐島、他）'76～'82	恩原'84～	
九州				福井洞穴、直谷洞穴'60、'63、'64、聖岳'62、百花台'63、'65、原'63	上場'66～'74 石飛分校、岩土原'68、堂崎'69	泉福寺洞穴'70～'79、船野'70、宮地前'73、門田'74、石峰'75～'78	加栗山、加治屋園'75～'76、政所馬渡'76、小牧'78、上下田'80～'81、城ケ岳平子'82	松山'87、'89 市ノ久保'86～'87 赤木'87、登立'88 宮地前'83、'84、'86	西丸尾、椎崎B'90～'91

日本列島とその周辺の示標テフラ
ーとくに細石刃文化期を中心としてー

早田　勉

1．はじめに

日本列島には、爆発的な活動を引き起こす火山が多く分布している。これらの火山は過去に大量のテフラを幾度となく噴出してきた。テフラはごく短時間のうちに広域に分布する。しかもそれぞれのテフラには層相や岩石記載学上の様々な特徴があり、識別も可能である。その結果私たちはこれらのテフラを時間と空間の指標として利用し、それらとの層位関係を調べることによって、遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代などを明らかにすることができる。テフラを指標として利用するこのテフロクロノロジー（火山灰編年学）は、日本列島の第四紀研究において最も有効な編年方法となっている。ここでは、後期旧石器時代の広域テフラ姶良Tn火山灰（AT）と縄文時代早期末の広域テフラ鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）との間に層位がある（と考えられる）示標テフラについて紹介する。

なおATは、約2.1-2.2（2.5）万年前に南九州姶良カルデラから噴出したテフラである（町田・新井，1976，町田・新井，1992）。南は宮古島近海から北は日本海北部の広い範囲で確認されている。またK-Ahは約6,300年前に南九州鬼界カルデラから噴出したテフラで、南は奄美大島近海から北は山形県月山までの広い地域で確認されている。ここで紹介するテフラの名称や噴出年代は、おもに町田ほか（1984）や町田・新井（1992）に従っている。

2．日本列島各地の示標テフラ

（1）九州地方

南九州地方では、これまで霧島ー小林軽石（Kr-K，図1，約1.5-1.6万年前，成尾，1991）、桜島ー薩摩テフラ（Sz-S，約1.1万年前）、霧島ー瀬田尾軽石（Kr-STP，約9,000年前，井村・小林，1992）、霧島ー浦牟田スコリア（Kr-UMS，井ノ上，1988）、住吉マールや米丸マール起源のテフラ（約6,500-7,000年前，成尾，1991）、牛のスネ火山灰下部（井ノ上，1988）などの示標テフラの存在が知られている。また竹島や硫黄島には、K-Ah噴出以前のテフラが認められる。さらにこれらのテフラの他にも桜島火山を給源とするテフラが多く分布している。九州地方の中部や北部では阿蘇火山中央火口丘や九重火山群を給源とするテフラの存在が知られているが、それらの詳細については不明である。

（2）中国・四国地方

ここでは、大山火山や三瓶火山を給源とするテフラが認められる。テフラは下位より大山笹ケ平テフラ（DSs）、大山東大山テフラ（DHg）、大山弥山テフラ（DMs，約1.7-1.8万

年前）、大山鏡ケ平テフラ（DKg）、三瓶浮布テフラ（SUP，＜約1.6万年前）などである。これらのうち、SUPは中国山地から岡山県域に広く分布している。

（３）近畿地方

日本海の火山島、鬱陵島から約9,300年前に噴出した鬱陵隠岐テフラ（U-Oki，町田ほか，1981）が、近畿地方から東海地方にかけて分布している。

（５）南関東・東海地方

南関東地方では、下位より富士相模野第１スコリア（F-SS1，約2.1万年前）、安房テフラ（AG，約1.3-1.4万年前，杉原ほか，1978）、立川ローム最上部ガラス質火山灰（UG，約1.2万年前）のほか、多くの富士火山起源のスコリアが分布している。これらのうちUGは東海地方東部でも検出される。

（６）北関東地方東部

ここでは下位より男体ー片岡・小川スコリア群（Nt-Kt／Og）、浅間ー板鼻黄色軽石（As-YP，約1.3-1.4万年前）、男体ー今市・七本桜テフラ（Nt-I／S，約1.2-1.3万年前）などが認められる。

（７）東北地方

中部および南部には、鳴子潟沼ー上原テフラ（N-U，約1.8万年前，早田，1989）やAs-YPまたはAs-YPkに同定されるガラス質テフラ（小岩・早田，1993）、さらに肘折ー尾花沢軽石（H-O，約1.0万年前）などが認められる。また蔵王火山東麓にもテフラ群が分布している。北部では十和田ービスケット２テフラ（To-BP2，約2.0万年前）、岩手ー滝沢第１スコリア（Iw-T1，約1.5-2.1万年前）、十和田ー八戸テフラ（To-H，約1.2-1.3万年前）、秋田駒ー小岩井軽石（Ak-K，約1.3-1.6万年前）、秋田駒ー柳沢軽石（Ak-Y，約1.2-1.3万年前）、十和田ー二ノ倉スコリア群（To-Nk，約1.0-1.3万年前）、十和田ー南部軽石（To-Nb，約8,600年前）、秋田駒ー堀切軽石（約8,000年前）などのテフラが分布している。

（８）北海道地方

渡島半島には駒ヶ岳h1軽石（Ko-h1，約1.7万年前）や濁川テフラ（Ng，約1.2万年前）が分布している。支笏・石狩地域には、恵庭ｂ軽石（n.En-b，約2.0-2.2万年前）、羊蹄第１テフラ（Yo-1，約1.5-1.8万年前）、恵庭ａ軽石（En-a，約1.5-1.7万年前）、樽前ｄテフラ（Ta-d，約8,000-9,000年前）が認められる。道東地域には摩周1テフラ（Ma-1，約1.1-1.3万年前）、摩周g-jテフラ（Ma-g～j）および摩周fテフラ（Ma-f，約6,500-7,200年前）、道北地域には利尻ワンコの沢軽石（Rs-Wn，約1.5万年前以降）などの示標テフラが分布している。

３．北関東地方西部から長野県東部に分布するテフラ

（１）示標テフラの層序

この地域には浅間山から噴出した数多くの示標テフラが分布している（図２）。浅間山

は世界的にも著名な活火山で、約2.1（2.4）万年前以降何度もプリニー式噴火や準プリニー式噴火を繰り返してきた。浅間火山起源の示標テフラには、下位より浅間－板鼻褐色軽石群（As-BP Group）、浅間－白糸軽石（As-Sr）、浅間－大窪沢第１軽石（As-OP_1）、浅間－大窪沢第２軽石（As-OP_2）、浅間－板鼻黄色軽石（As-YP）、浅間－草津黄色軽石（As-YPk）、浅間－総社軽石（As-Sj）、浅間－藤岡軽石（As-Fo）などがある（図３，表１）。

浅間－板鼻褐色軽石群（As-BP Group）：約1.8～2.1（2.4）万年前に噴出したテフラ群である。少なくとも８層のテフラから構成されており、通常それらの間には火山灰土など時間間隙を示す地層が認められる。テフラは群馬県草津町から長野県佐久市の広い範囲で確認されており、関東地方全域や新潟県で検出される可能性が大きい。

浅間－白糸軽石（As-Sr）：約1.8万年前に噴出したテフラで、浅間火山から東北東方を中心に分布している。今後北関東地方東部や東北地方南部で検出される可能性が大きい。

浅間－大窪沢第１軽石（As-OP_1）：約1.7万年前に噴出したテフラで、浅間火山から東～東南東方を中心に分布している。

浅間－大窪沢第２軽石（As-OP_2）：約1.6万年前に噴出したテフラで、浅間火山から南東～南南東方を中心に分布している。

浅間－板鼻黄色軽石（As-YP）：約1.3-1.4万年前に噴出したテフラで、下部の軽石層と上部の成層した火山灰層から構成される。下部の降下軽石層は、浅間火山から東南東方を中心に分布している。南関東地方一帯で検出される立川ローム最上部ガラス質火山灰（UG）は、このテフラの一部と考えられている（後述）。

浅間－草津黄色軽石（As-YPk）：As-YPの後に噴出した降下テフラ層である。このテフラについて年代測定が行われた例はまだ知られていない。浅間火山から北北東方を中心に分布しており、群馬県北部から新潟県魚沼丘陵周辺においてよい指標層となっている。

浅間－総社軽石（As-Sj）：約1.1万年前に噴出したテフラで、浅間火山より東方を中心に分布している。現在までのところ群馬県中央部の新田町でも検出されており、今後栃木県域で検出される可能性も大きい。

浅間－藤岡軽石（As-Fo）：約8,000年前に噴出したテフラで群馬県西部で検出されている。

（２）下茂内遺跡のテフロクロノロジー

長野県佐久市下茂内遺跡の発掘調査では、層厚約20cmの黄色降下軽石層（ＸⅣ層）の上下の土層から多くの両面加工尖頭器が検出された（図４）。このうち下位の土層（第Ⅱ文化層）からは約150点の大形両面加工尖頭器や約20,000点の剥片・砕片のほか、土器片も２点検出された。一方上位の土層（第Ⅰ文化層）からは、約150点の大形両面加工尖頭器や約20,000点の剥片・砕片が検出された（近藤・小林，1990，長野県埋蔵文化財センター，1992）。この上位の土層の上位には、比較的粗粒の黄色軽石が認められる。層厚約20cmの黄

色降下軽石層については当初As-YPに同定される可能性が指摘されていた（河西，1992）が、その後の調査分析によりAs-YPの下位にあるAs-OP$_2$に同定されることが明らかになった（早田，1992）。遺跡周辺ではAs-YPも確認されていることから、As-YPと第Ⅰ文化層との層位関係の解明が今後の課題の一つである。

（３）浅間火山軽石流期のテフラと立川ローム最上部ガラス質火山灰（UG）について

南関東地方の後期更新世に形成された河岸段丘上に認められる立川ローム層の最上部には、分厚い中間型火山ガラスや軽石型火山ガラスで特徴づけられるガラス質テフラが存在している。山崎（1978）はこのテフラをTachikawa Upper Glassy Ash（UG）と呼んだ。このテフラは、ATとともに南関東地方における後期旧石器時代の編年学的な研究において、重要な指標とされている。

町田ほか（1984）はこのUGがAs-YPに同定される可能性を指摘し、その噴出年代を約1.3-1.4万年前と推定した。その後町田・新井（1992）は噴出年代を約1.2万年前としているが、いずれにしてもその根拠は明確に示されていない。一方鈴木（1991）は火山ガラスの形態や屈折率測定さらに微量成分元素残存量などから、UGをAs-YPの上部の成層した火山灰層（鈴木，1991はAs-YP直上の火山灰互層と記載している）に由来すると考えた。そして噴出年代について、辻ほか（1989）のUGの上下の^{14}C年代（上：12,250±190y.B.P.，下：12,830±290y.B.P.）から約1.2万年前と推定している。これらの研究では、テフロクロノロジーの基礎である野外での詳細な層序学的な研究が充分に活かされていない。例はまだ少ないものの、南関東地方ではUGの一次堆積層が認められる場合がある。このような一次堆積層を埼玉県、東京都、神奈川県など関東地方各地で検出するとともに、降下ユニット単位での詳細な記載を行って層序学的な資料を蓄積し、UGの起源を明らかにする必要がある。

一方UGによく似た浅間火山起源の火山ガラスは、東北地方南部から中部にかけても露頭で認めることができる（小岩・早田，1993）。さらにその火山ガラスは、テフラ分析によってAs-YPkの分布域に近い新潟県下越地域や山形県下の遺跡の土層中からも検出されている。As-YPとAs-YPkに含まれる火山ガラスの特徴は極似することから、演者らは現在までのところこれらの火山ガラスをAs-YPkとAs-YPのいずれかまたは両者に由来する可能性を指摘するにとどめている。ただし早川（1992）や町田・新井（1992）が述べているように、As-YPとAs-YPkが同一噴火輪廻のテフラであるとすれば、いずれのテフラでも指標層としての意義に大差はないと考えられるのかも知れない。しかしその根拠にしても明確なものでないことから、As-YPとAs-YPkとの層位関係についてもやはり詳細な野外調査を行う必要がある。

今後詳細なテフラの層序学的研究と分析を行うことにより、東海地方から東北地方にかけての広い地域において、浅間火山軽石流期のテフラを時間軸とした後期旧石器時代末期の編年学的研究を展開できる可能性が大きい。

４．日本列島周辺地域に分布するテフラと細石刃文化研究

ATは朝鮮半島で検出されているほか、中国山東半島でも検出されているらしい（町田・新井，1992）。またK-Ahも朝鮮半島で検出されている。このように日本列島の火山を給源とするテフラが大陸地域や朝鮮半島において有効な指標となることが従来の研究で明らかにされている（図５）。一方前述のように鬱陵島起源のU-Okiが近畿地方に分布しているほか、歴史時代（11-12世紀）においては白頭山火山起源の白頭山－苫小牧火山灰（B-Tm，町田）が東北地方～北海道地方にまで分布しており（町田・新井，1981）、日本列島以外の火山に由来するテフラも日本列島の編年学的研究の指標として利用されている。

日本海北部の海底ボーリング調査で採取された試料の分析では、４層の白頭山起源のテフラが検出されている。これらのテフラは、阿蘇３火山灰（Aso-3，約10.5～12.5万年前，町田・新井，1992）の下位のテフラ、Aso-3とATの間のテフラ、ATとB-Tmの間のテフラ、そしてB-Tmの４層である。下位より３層目のテフラは、白頭山－ウラジオ沖火山灰（B-V）と呼ばれている（町田・新井，1992）。1992年のロシア沿海州地方ウスチノフカ３遺跡の調査（ロシア科学アカデミー極東支部と東北福祉大学との共同調査）の際に採取された土壌からは、すでにB-Vに同定される可能性が大きい火山ガラスが検出されている（早田・梶原，未公表資料）。今後日本列島はもちろん朝鮮半島さらに大陸地域を含めた広範囲での細石刃文化の編年学的研究にも、テフロクロノロジー（火山灰編年学）は有効である。

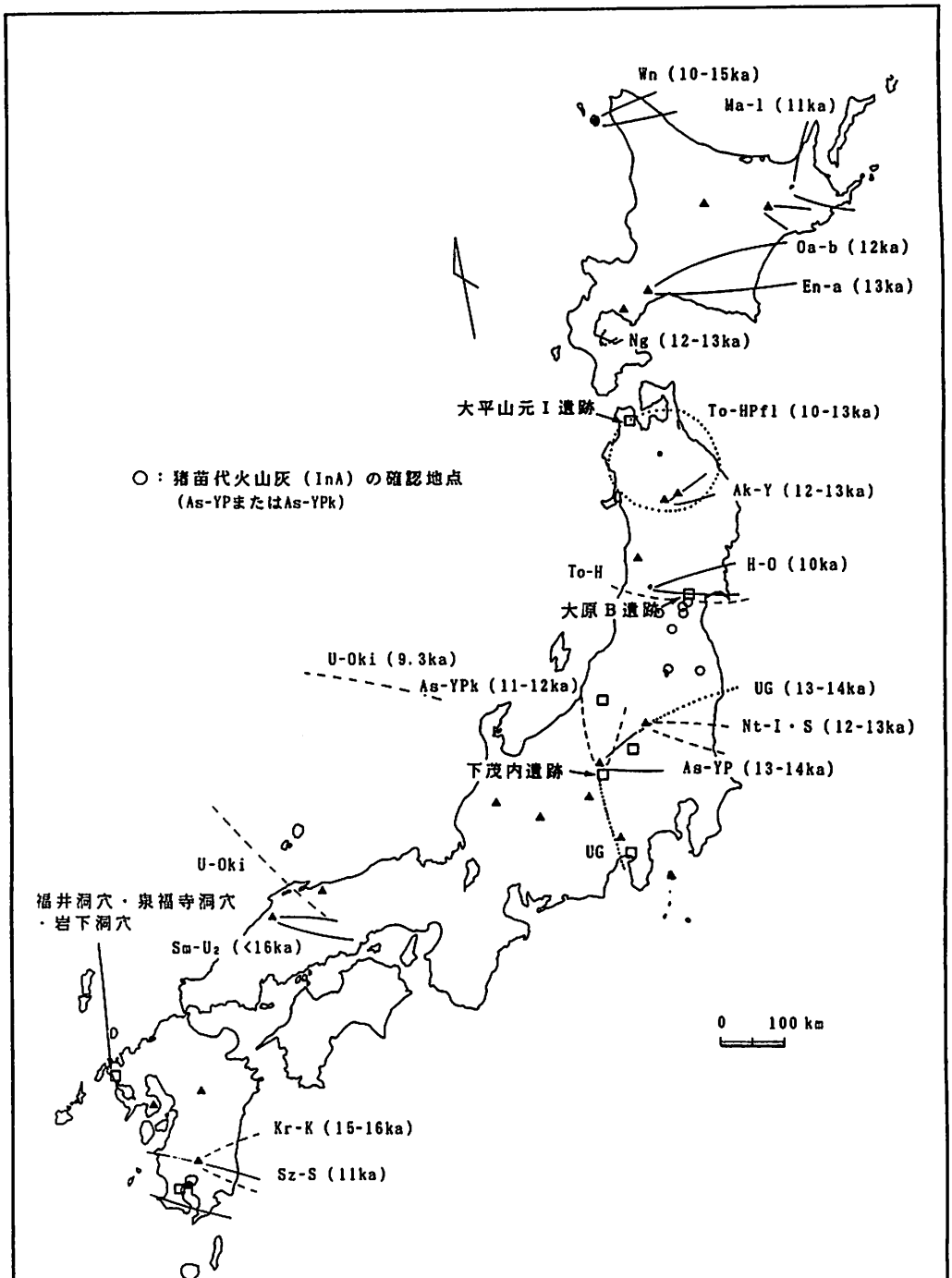


図1　後期旧石器時代末期の代表的な示標テフラの分布

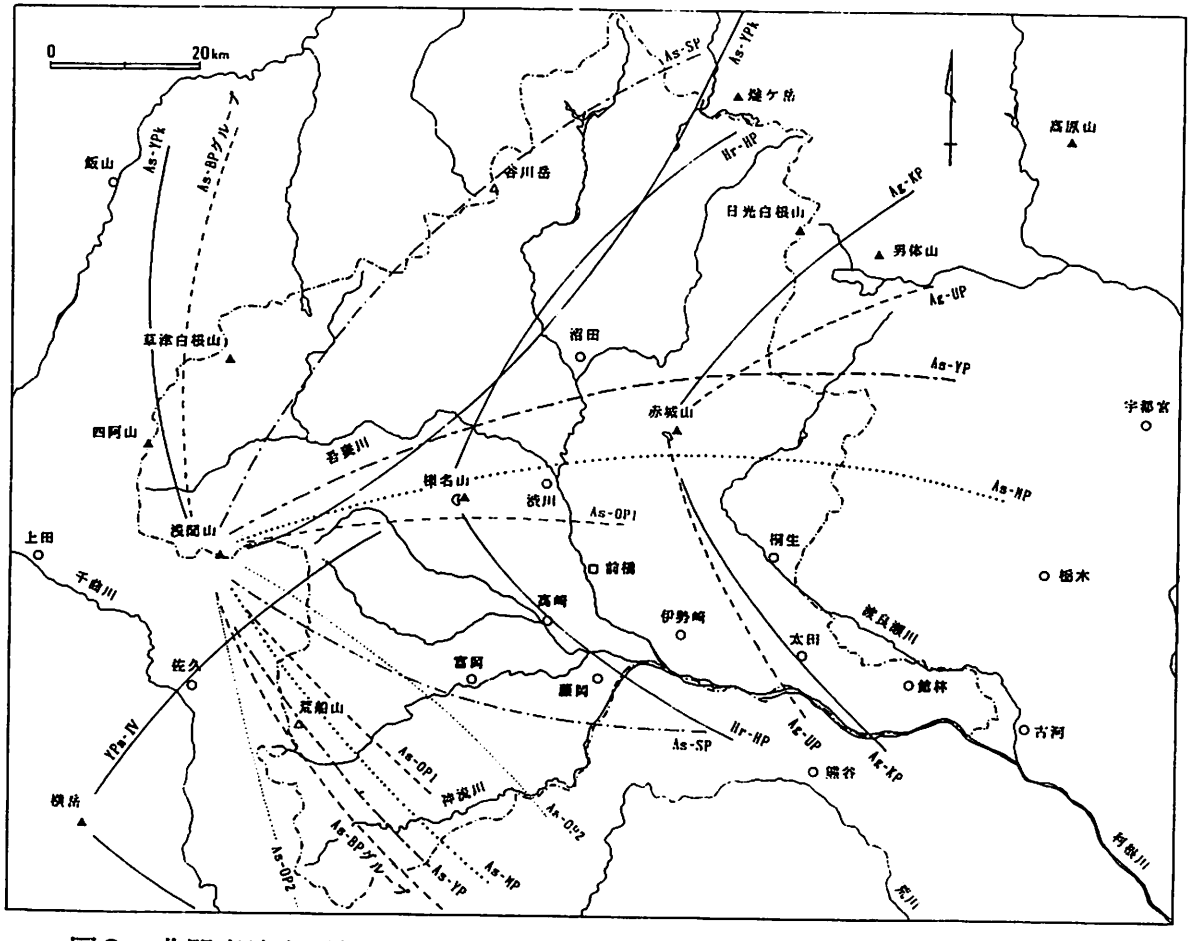


図2　北関東地方西部および長野県東部の後期旧石器時代示標テフラの分布

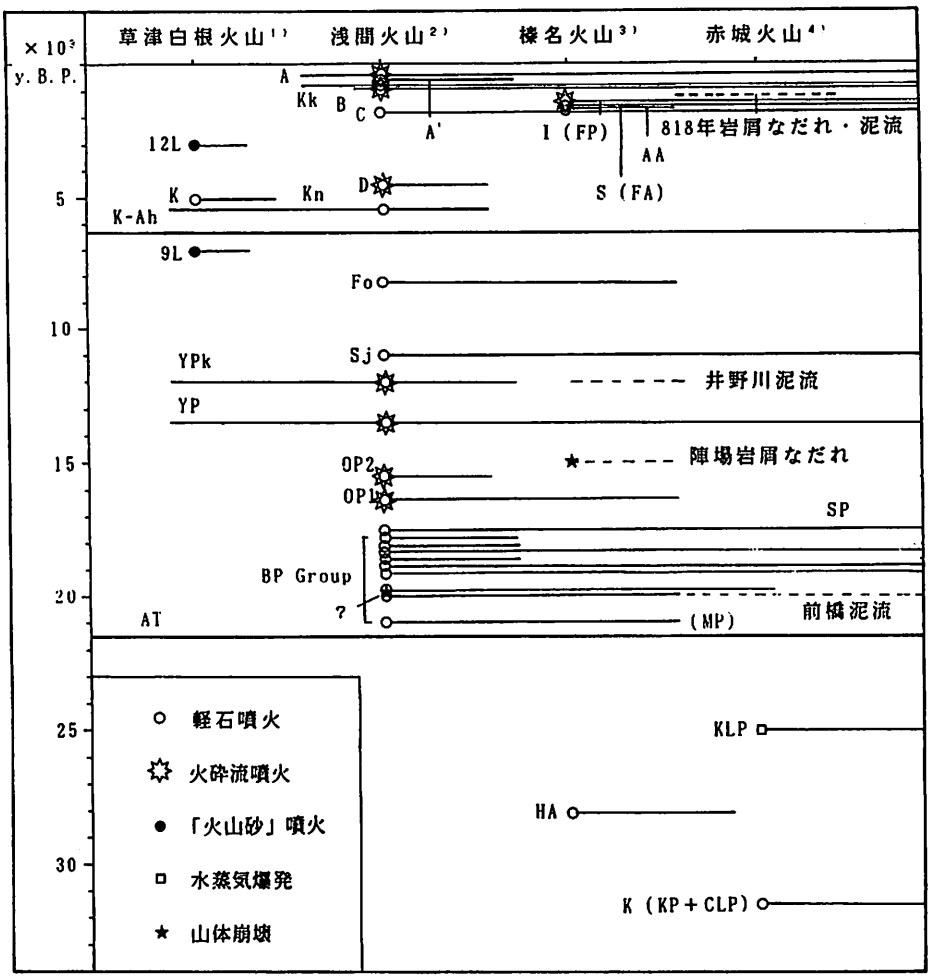


図３　関東地方北西部における示標テフラの層序

1) 早田ほか（1988），早川・由井（1989），2) 新井（1979），早田（1991），3) 町田ほか（1984），早田（1990），4) 鈴木（1976），早田（1990），能登ほか（1990）．早田　勉作成

表1　浅間火山起源の示標テフラの特徴

テフラ	噴出年代*1	鉱物*2	火山ガラス（n）	斜方輝石（γ）
A軽石（As-A）	1783A.D.	opx, cpx, ol	1.507-1.512	1.707-1.712
A'軽石（As-A'）	?	opx, cpx	1.515-1.521	1.702-1.712
柏川テフラ（As-Kk）	1129A.D.	opx, cpx	1.515-1.521	1.702-1.712
Bテフラ（As-B）	1108A.D.	opx, cpx	1.524-1.532	1.708-1.710
C軽石（As-C）	4世紀中葉	opx, cpx	1.514-1.520	1.706-1.711
D軽石（As-D）	4,500	opx, cpx	1.513-1.516	1.706-1.708
六合軽石（As-Kn）	5,400	opx, cpx		1.706-1.708
藤岡軽石（As-Fo）	8,200	opx, cpx		1.706-1.710
総社軽石（As-Sj）	10,000-11,000	opx, cpx	1.502-1.504	1.706-1.711
草津黄色軽石（As-YPk）	10,500-11,500	opx, cpx	1.501-1.503	1.707-1.712
板鼻黄色軽石（As-YP）	13,000-14,000	opx, cpx	1.501-1.503	1.707-1.712
大窪沢第2軽石（As-OP$_2$）	16,000	opx, cpx	1.502-1.504	1.704-1.709
大窪沢第1軽石（As-OP$_1$）	17,000	opx, cpx	1.500-1.502	1.704-1.709
白糸軽石（As-SP）	18,000	opx, cpx, ho		1.704-1.707
雲場軽石		opx, cpx, ho	1.495-1.498	1.704-1.709
板鼻褐色軽石（As-BP）*3	18,000-21,000	opx, cpx		1.700-1.708

*1　単位は，y.B.P.　*2　ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．*3　テフラ群（tephra group）．屈折率の測定は，新井房夫氏による．

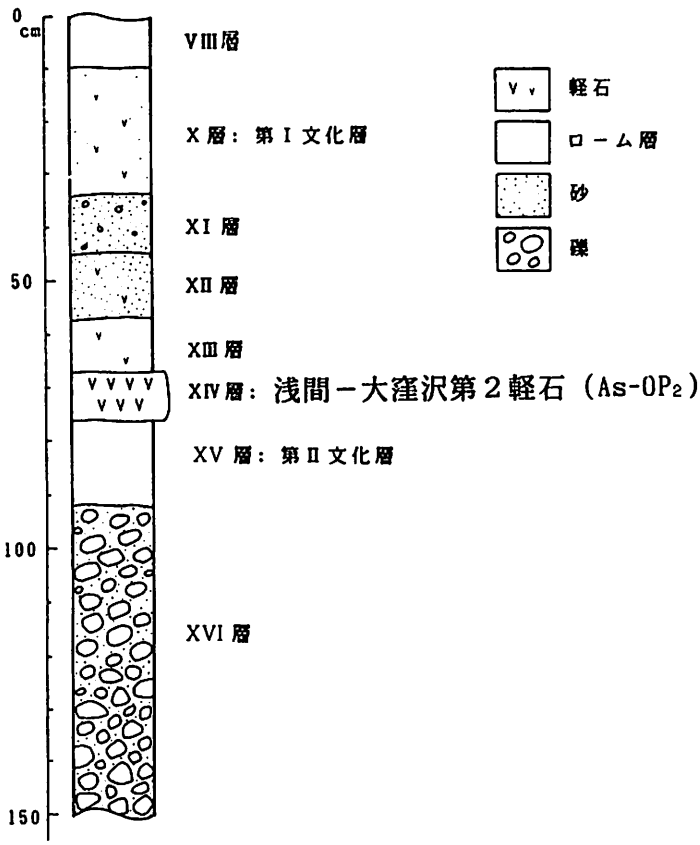


図４　佐久市下茂内遺跡（Ｂ地区）の地質層序
早田（1992）に加筆.

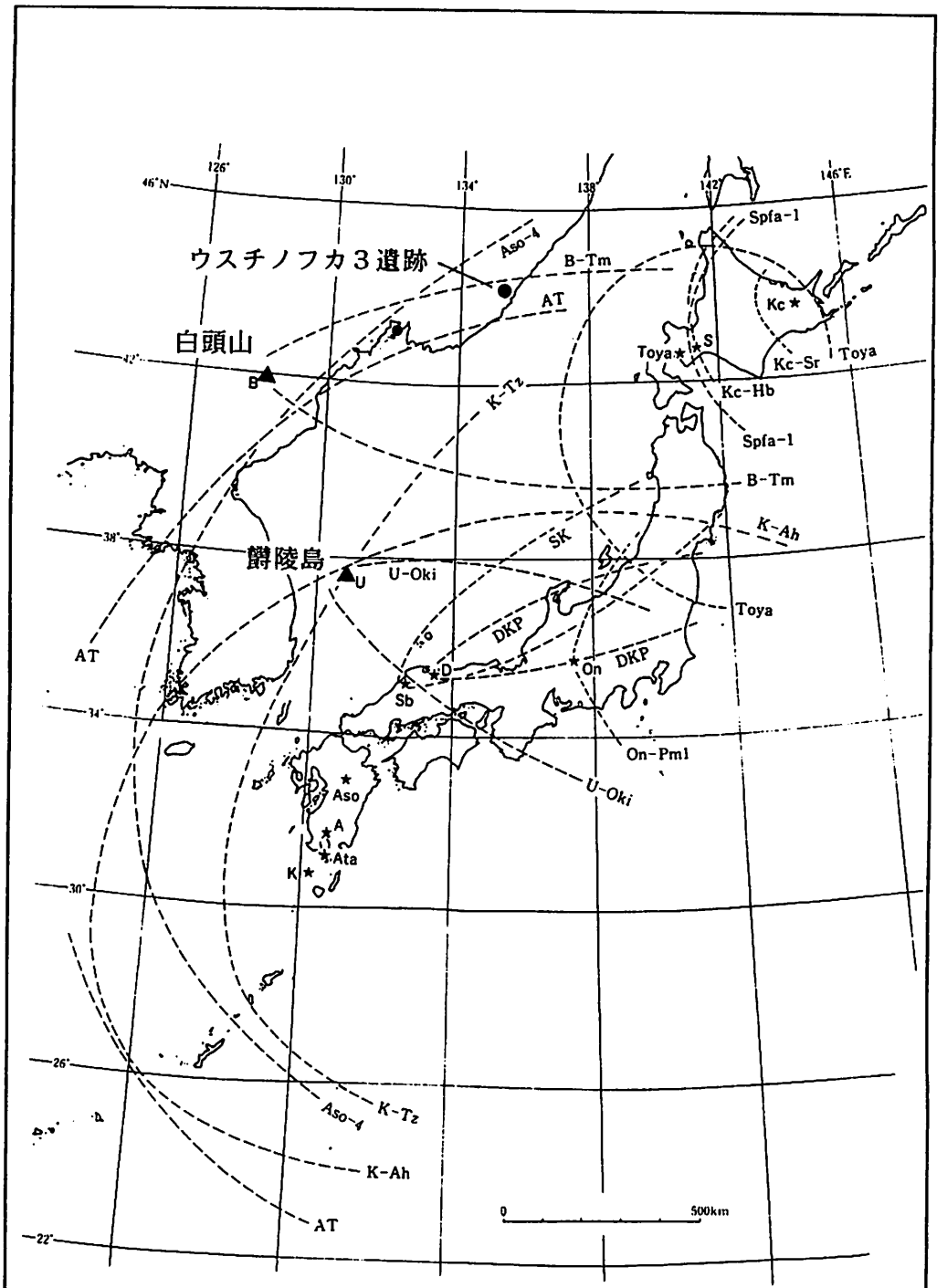


図５　日本列島とその周辺のテフラの分布
（町田・新井，1992に加筆）

中国華北の細石刃文化

加藤真二

1　中国細石刃文化研究の現状

本論考では、中国華北地域における旧石器時代末期の細石刃技術をもつ文化を中国細石刃文化と呼び、主な対象としたい。ここで、わざわざ限定するのは、中国では、一般には細石刃文化あるいは細石器文化という用語が使われておらず、日本の『細石刃文化』に比べて広い意味をもつ『細石器（技術）伝統』という用語が用いられているためである（註１）。こうした文化は、近年、山東、山西、河北、陝西の各省で資料が増加している（図１）。

中国の研究者は、ここでいう中国細石刃文化を完新世に中国西部・東北部などで見られる細石刃技術をもつ諸文化や細石器的様相を留める中原地域の諸文化の起源であると同時に、中国旧石器文化が最も高度に発達したもの、つまり、旧石器文化と新石器文化とを結ぶものとみなしている。その意味で、最近、細石刃文化は中国中石器文化存否論争としばしば関連させて論じられている（張1990）。

また、細石刃文化の起源となる旧石器文化については、賈蘭坡や安志敏は、山西省峙峪や河南省小南海などの小形石器を主体とする後期旧石器文化を楔形細石刃石核の雛形である楔状石核が存在することなどから、細石刃文化の祖形とみなしている（賈1978、安1978）。また、こうした小形石器を主体とする石器文化は、周口店や泥河湾の諸遺跡など中部更新世あるいは、それ以前に遡る小形石器を主体とする文化伝統の流れをくむものとしている。一方、張森水は、寧夏回族自治区水洞溝石器文化に代表される石刃を主とする文化伝統から発展したものとしている（張1987）。このような研究は、中国の旧石器文化研究の上で最も力が注がれている文化系譜論の延長線上にあるとみなすことができる。文化系譜論研究では、時代の異なる複数の石器文化を比較して得られる様々な面の共通点から文化系譜を把握することが行なわれる。その結果、石器文化間の差異が等閑にされ、文化の具体的な変遷が曖昧になることがしばしばである。細石刃文化についてもこのことはあてはまっている。現在のところ、細石刃技術や細石刃文化の発生の具体的な過程や同時期の石器

文化間の関係も明確ではない。

中国の細石刃文化研究で最近とみに進んだものに、細石刃技術研究がある。すでに細石刃石核の残核形態より、幾つかの技法が提示され、そのうちの幾つかは接合資料によって検証されている（蓋1977a、1977b、陳1983、Tang·Gai1986など）。この結果、概報などの記述では、細石刃石核が、角錐・円錐状石核、舟形石核、楔形石核に分類されたり、楔形石核の打面形成に注意が払われるのが一般的になってきた。また、単なる技法の提示ばかりでなく、細石刃技術に関連する遺物全体から一石器文化の細石刃技術の総体を把握しようという試みもなされている（蓋1984、王・王1991）。これらは、従来きわめて低調であった中国旧石器文化の技術論研究に具体的な事例を提示することとなった。

さらに、技術論的研究と各遺跡の地学的検討により、山西・河北両省北部の泥河湾盆地では、油房石器文化から虎頭梁石器文化への変遷が判明し、虎頭梁石器文化のような楔形細石刃石核や両面加工技術が発達したものが、年代的に新しいと認識され始めている（謝・成1989）。最近では、細石刃技術以外の石器製作技術や器種組成なども加味して、華北地域の細石刃文化もけして単一のものでないということが主張されはじめている（張1989）。

このように中国の細石刃文化研究も資料が蓄積し、徐々に深化していっているが、問題点も指摘できる。まず、多くの報告が概報であり、一石器文化の全体像の詳細な把握が難しいことがあげられよう。幾つかの遺跡の石器群については複数の石器文化が混在している可能性すら指摘できる。また、豊富な動物化石が石器に共伴していることも報じられているが、十分な分析も行なわれておらず、生業活動の復元も未了である。

さらに、省レベルの研究者が充実してきた反面、研究者間の交流が進んでいないことは、研究の大きな障害となっている。各省の研究者が他省の資料をみることすら困難なのである。その上、国外の情報の流入もまだ限られており、中国細石刃文化全体を見通した研究が極めて少ない。とはいえ、中国の考古学界は、現在、国外の情報や研究手法を取り入れるべく最大限の努力を払っている。近い将来、こうした問題点が解決することは間違いあるまい。

2　中国細石刃文化私見

①華北地域の細石刃文化とその変遷

華北地域では、細石刃石核の組合せ（表１）と器種組成から、つぎのような類型が設定できる。ここでは、細石刃石核の分類をⅠ類：楔形細石刃石核（註２、図２の 1～14）、Ⅱ類：舟底形細石刃石核（15～28）、Ⅲ類：半円錐形、円錐形、角錐形細石刃石核（29～42）とする。

靈井類型（図３）：靈井遺跡の石器文化に代表される。細石刃技術では、Ⅲ類の細石刃石核のみがみられる。トゥール製作の技術系には石刃技術が存在するが、技術体系での役割は小さい。従って、トゥールの主な素材は、打面転移を繰り返す剝片剝離技術や交互剝離によって円盤状石核から剝離された左右非対称の平面形をもつ縦長剝片、横長剝片や礫面を残す厚い剝片である。二次加工にブランティングを用いるのも特徴的である。トゥールは、削器（10・11）を中心とし、小形爪形掻器（4～6）、円形掻器、彫器（7・8）がみられる。

黒龍潭類型（図４）：大泉頭、大発、育紅河、嵐峪、黒龍潭、九頂蓮花山、宅科、大賢荘、東灰山、淳泗澗の各遺跡の石器文化に代表される。Ⅱ類、Ⅲ類の細石刃石核をもつ。技術体系での石刃技術の役割は靈井類型と同様小さい。トゥールの主な素材も靈井類型と類似している。トゥールには、小形爪形掻器・円形掻器（10～13）がみられるのが通例である。この他、舟形石器（6～9）、一側縁加工のナイフ形石器、両面加工尖頭器（18～21）、彫器（14～17）がみられる。

油房類型（図５）：下川上位文化層、薛関、油房、窖子頭の各遺跡の石器文化を代表とする。細石刃石核には、Ⅱ類、Ⅲ類を主体に関越型・福井型に類似したⅠ類がみられる。石刃技術が顕著であり、技術体系での役割が大きい。石刃を素材とした掻器（5・7）、一側縁加工のナイフ形石器（12）、彫器（10・11）のほか、小形爪形掻器（6）、円形掻器、舟形石器（14）、両面加工尖頭器（8・15）が一般的にみられる。この他、下川、

遺跡名	類型	細石核分類					
		Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅱ	Ⅲ
靈井	靈井	－	－	－	－	－	＋
黒龍潭	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
九頂蓮花山	黒龍潭	－	－	－	－	△	＋
大賢荘	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
宅科	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
大泉頭	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
大発	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
育紅河	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
嵐峪	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
東灰山	黒龍潭	－	－	－	－	＋	＋
油房	油房	－	＋	－	＋	＋	＋
下川	油房	－	＋	－	＋	＋	＋
薛関	油房	－	－	－	＋	＋	＋
窖子頭	油房	－	－	－	－	＋	＋
淳泗澗	黒龍潭	－	－	－	－	＋	－
爪墩	爪墩	－	＋	－	＋	＋	＋
望海楼	爪墩	－	－	－	＋	＋	＋
鳳凰嶺	爪墩	－	－	－	＋	＋	＋
孟家泉	爪墩	－	－	－	△	－	＋
虎頭梁	虎頭梁	＋	＋	＋	＋	＋	＋
柿子灘	虎頭梁	＋	△	＋	＋	＋	＋

第１表　細石刃石核組成

薛関では、直刃斧形石器（9）や石皿類が出土している。

爪壕類型（図６）：爪壕遺跡、望海楼遺跡、鳳凰嶺遺跡、孟家泉遺跡の石器文化が代表する。細石刃石核の組み合わせは、油房類型と同じである。技術体系における石刃技術の役割が小さく、技術体系やトゥールの特徴は黒龍潭類型と類似する。孟家泉では直刃斧形石器（14）が出土した。

虎頭梁類型（図７）：虎頭梁遺跡、柿子灘遺跡、沙苑遺跡群の一部の石器文化に代表される。石核の組成の特徴は、湧別技法によるⅠ類をもつとともに、その他のⅠ類各種を多くもつ点である。これは両面・片面調整ブランクをもとに数種の細石刃技法を組合せた複雑な細石刃技術の体系、『虎頭梁細石刃技術複合』の結果である。この他、石刃が掻器を中心とするトゥールの素材となるほか、少数の細石刃石核の素材となるなど、石刃技術が技術体系で一定の割合の役割を果たしている。ただ、それは余り大きくない。また、尖頭器製作などにみられる面的剝離による二次加工技術が発達している。トゥールでは、掻器（6）、削器、彫器（7・9・10）、両面・片面加工尖頭器（4・5・12）、直刃斧形石器（13）が目立つ。

これらの類型は、石器文化に共伴する動物群、^{14}C年代、同一石器型式の共有関係や一部地域の地質学的知見から次の三期の変遷が想定できる。

Ⅰ期（～１.5万年B.P.）：霊井類型が存在する。

Ⅱ期（～1.1万年B.P.）：黒龍潭類型・油房類型・爪壕類型に代表される。

Ⅲ期（1.1万年B.P.～）：虎頭梁類型が存在する。

このうち、霊井類型や黒龍潭類型には、ブランティングの多用、角錐状石器・小形爪形掻器・削器などの発達など、細石刃文化に先行する河南省小南海石器文化や河北省西白馬営石器文化との共通点がみられ、これら先行文化を母体として発生したと考えている。

一方、油房類型、虎頭梁類型には、楔形細石刃石核による細石刃技術や石刃技術など華北地域では見られなかった要素が存在する。楔形細石刃石核や周縁調整横刃型彫器が含まれることから東シベリアの細石刃文化との関連が強く、この地域の細石刃文化が時期を違えて少なくとも２度、南下したものと考えられる。特に、虎頭梁類型の石器文化は、黒龍江省十八站、缸窯、松山遺跡群の一部、吉林省嘎査など中国東北部にも分布を示しており（図１・８）、東シベリアから華北地域への文化の拡散を裏付けている。

また、爪墩類型は油房類型と黒龍潭類型両者の特徴をもつとともに、分布地域は黒龍潭類型と重なる。いまのところ、流入した油房類型の影響を受けた黒龍潭類型と想定している。

②華北地域の細石刃文化

ここでは、華北地域の細石刃文化の特徴について更に掘り下げて記してみたい。

華北地域の細石刃文化の石器組成には、尖頭器・ナイフ形石器や掻器など、狩猟具や皮革加工具と考えられる器種が普遍的に見られ、この地域の細石刃文化では狩猟活動が中心的な生業活動であったと考えられる。細石刃文化は、一般に小形のトゥールが主体であるとともに、石器製作技術の省資源化が図られており、移動性に富み、こうした狩猟活動中心の生活形態に適していたと見ることができる。また、石器製作技術の省資源化は、従来の技術よりも人類の活動範囲を拡大した可能性を指摘できる（註３）。こうした幾つかの点が、華北地域における細石刃文化盛行の背景にあったと考えられる。

次に、表２は、華北地域の細石刃文化の遺跡から出土した動物群を示したものである。動物化石については化石生成論的検討を経ていないので、当時の人々の狩猟活動などを直接的に示すものではない。しかし、ウマ・ロバ・ガゼルなど草原に群棲する中・大型動物とシカ・イノシシなど森林との関わりを示す動物を中心としていることが読み取れ、これらと人類、あるいはこれらの動物が示す環境と人類が密接な関係を持っていたと想定できる。草原性動物群は、華北地域で細石刃文化に先行した後期旧石器時代の諸文化でも一般的であり、これらの動物を対象とした生業活動の特殊化が説かれている。細石刃文化においても、草原性動物群を対象とした狩猟活動が主要な生業活動であったろう。また、草原性動物は、季節的な大移動を繰り返す。細石刃文化が極めて広範囲に等質な内容をもって分布する背景の一つとして、こうした草原性動物の狩猟を紐帯とした長距離間の情報・物資移動のネット・ワークが存在した可能性を指摘でき

遺跡名＼動物名	噛歯目	食肉目	長鼻目	野ウマ	野ロバ	ガゼル	原牛	シカ	イノシシ	その他
霊井		○	○	○	○			○	○	○
大発		○		○	○		○	○	○	
下川										○
油房	○					○		○		
薛関				○	○	○	○	○		○
孟家泉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
虎頭梁	○	○		○	○	○		○	○	○
柿子灘	○	○				○	○	○	○	○

第２表　各遺跡出土の動物群

る。実際、細石刃文化Ⅰ期の霊井では、海産のカキ殻が出土し、数百キロ間の物資の移動が示されている。

一方、シカ・イノシシなど森林性動物は、細石刃文化直前の小南海・西白馬営段階に狩猟対象として登場する。これは、最終氷期結束にともなう森林環境の増加に対応したものと考えられが、細石刃文化においてもこの傾向は続いたといえよう。特に、石器組成に石斧や石皿などの植物性資源加工と関連すると考えられる器種が加わったことは、細石刃文化では、この森林環境へ対応する技術系が確立、より複雑化したことを暗示していよう。

このように、華北地域の細石刃文化は、それ以前の旧石器文化から引き続いて草原環境への対応を高めている。従来の旧石器文化の発展形ということができよう。細石刃技術とは専らこうした側面を示しているのではないか。

また、同時に、最終氷期結束にともなう環境変化に対応し、森林環境にも技術的な対応をも示し出している。更に、等質な文化が情報・物資のネット・ワークを持って極めて広範囲の地域に分布することや２度にわたる北方系細石刃文化の流入は、華北地域内各地区の早期新石器文化が一定の類似性を有していることや華北地域北部の早期新石器文化に北方文化の色合が強いことと関連していると考えられる。これらの華北地域の細石刃文化の社会的側面は、細石刃文化が華北地域の新石器文化の起源の１つであることを示していよう。

このような細石刃文化の技術・社会の２面性が、新石器時代に入り、中国において細石刃技術が温帯森林環境が卓越した地域では断絶し、寒冷地や草原環境下では継続した現象を生んだと考えることができる。

③華北地域の細石刃文化と日本列島の細石刃文化

渤海湾や黄海の大きな地域が陸化していたり、水面が下がっていた当時、華北地域と日本列島は地理的に近いものであった。従って、両地域の細石刃文化に何らかの関連性があることが期待される。そうした中にあって完新世初頭、北部九州を中心として突然出現する福井技法に福井型細石刃石核に注目できる。福井洞穴第２層、第３層の細石刃技術を分析した橋本勝雄氏によれば、福井洞穴の楔形細石刃石核を生む細石刃技術は、両面調整ブランクをもとにした極めて複雑な工程をもつものであるという。また、その中に縦長スポールを作出する手法が存在したことも確認し

ている（橋本　1983）。これらの点は、華北細石刃文化Ⅲ期の虎頭梁類型の細石刃技術と極めて共通する。年代的にもほぼ同時期である。とすれば、西南日本における福井技法の出現は、華北地域では虎頭梁類型の出現に示される北方系細石刃文化の南下の動きの一環とみることができよう。

この他、華北地域の靈井類型や黒龍潭類型の細石刃技術が西南日本のそれの一部と類似することも注目できるが、この現象については資料の蓄積を待って論じたいと思う。

註

１）考古研究所の安志敏が、細石器を持つ文化は中国では旧石器時代から殷代、地域的にはモンゴル・シベリアからアラスカ・カナダまでの広範囲にみられ、同一の文化と呼ぶことはできない、細石器工芸伝統（細石器伝統）という概念を用いるべきと述べたことによる（安1978）。ただし、古脊椎動物與古人類研究所とそれに近い研究者は本論文の細石刃文化と近い意味で『細石器文化』という用語を使うことがある。

２）Ⅰ類は、ａ類（札滑型細石刃石核に類似するもの。図２の1・2）、ｂ類（薊越型細石刃石核に類似するもの。3）、ｃ類（忍路子型細石刃石核に類似するもの。4・5）、ｄ類（福井型細石刃石核・峠下型細石刃石核に類似するもの。6～14）に細分できる。

３）例えば、従来、遺跡の分布が希薄であった山東・江蘇両省にまたがる沂河・沭河流域では細石刃文化Ⅱ期の遺跡が極めて濃密に分布するようになる。その背景には、この地域では従来、良好な石材原産地に欠け、遺跡分布が限定されていたのが、細石刃文化の技術によりそれまで有効利用できなかった黄土基底礫層中の小礫を資源化できたことによると考えられる。

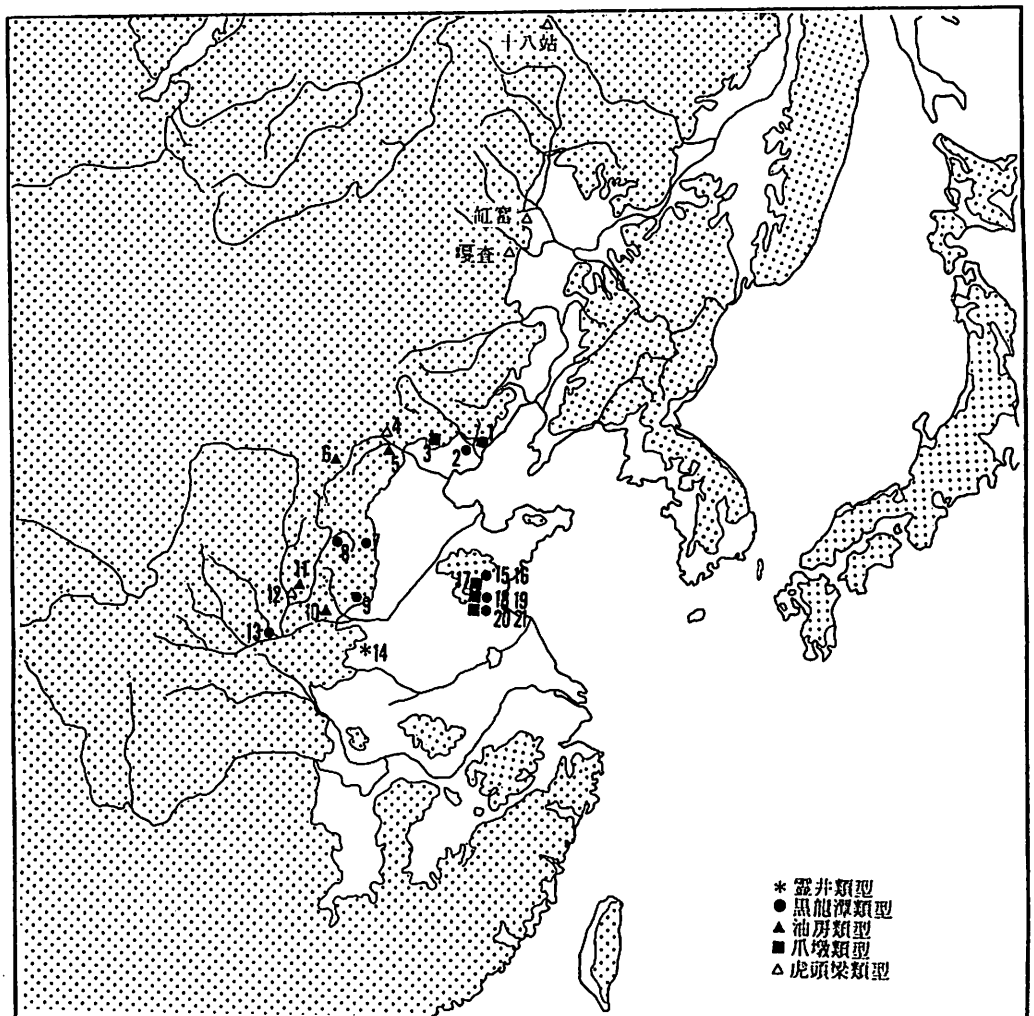
参考文献

加藤真二（1990）「中国北部における後期旧石器時代の狩猟活動」
『旧石器考古学』41　45～54頁
（1992）「中国細石刃文化の展開とその背景」
『筑波大学先史学・考古学研究』3　1～29頁

橋本勝雄（1983）「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について」
『考古学論叢』Ⅰ　105～135頁
鄧聰・蓋培（1987）「中国旧石器研究の新動向」
『考古学ジャーナル』283　5～11頁
徐　淑彬・加藤真二（1991）「中国山東省沂河・沭河流域の細石器文化」
『旧石器考古学』43　17～25頁
安　志敏（1965）「河南安陽小南海旧石器時代洞穴堆積的試掘」
『考古学報』1965－1　1～28頁
（1978）「海拉爾的中石器遺存」『考古学報』1978－3　289～316頁
陳　淳　（1983）「中国細石核類型和工芸初探」
『人類学学報』2－4　331～341頁
陳　哲英・丁　来普（1984）「山西懐仁鴛子頭的細石器遺存」
『史前研究』1984－4　63～69頁
陳　哲英・梁　宏剛
（1990）「山西陵川県大泉頭発現細石器」
『華夏考古』1990－2　9～10頁
蓋　培　（1977a）「従華北到美洲」『化石』1977－2　1～4頁
（1977b）「黄河之水通江戸」『化石』1977－3　2～4頁
（1984）「陽原石核的動態類型学研究及其工芸思想分析」
『人類学学報』3－3　244～252頁
蓋培・衛奇（1977）「虎頭梁旧石器時代晩期遺址的発現」
『古脊椎動物與古人類』15－4　287～300頁
高星ほか（1991）「山西楡次大発旧石器地点」
『人類学学報』10－2　147～154頁
葛　治功・林　一璞（1985）「大賢荘的中石器時代細石器」
『東南文化』1　2～17頁
河北省文物研究所（1989）「燕山南麓発現細石器遺址」
『考古』1989－11　967～970頁
（1989）「河北陽原西白馬営晩期旧石器研究」
『文物春秋』1989－3　13～26頁

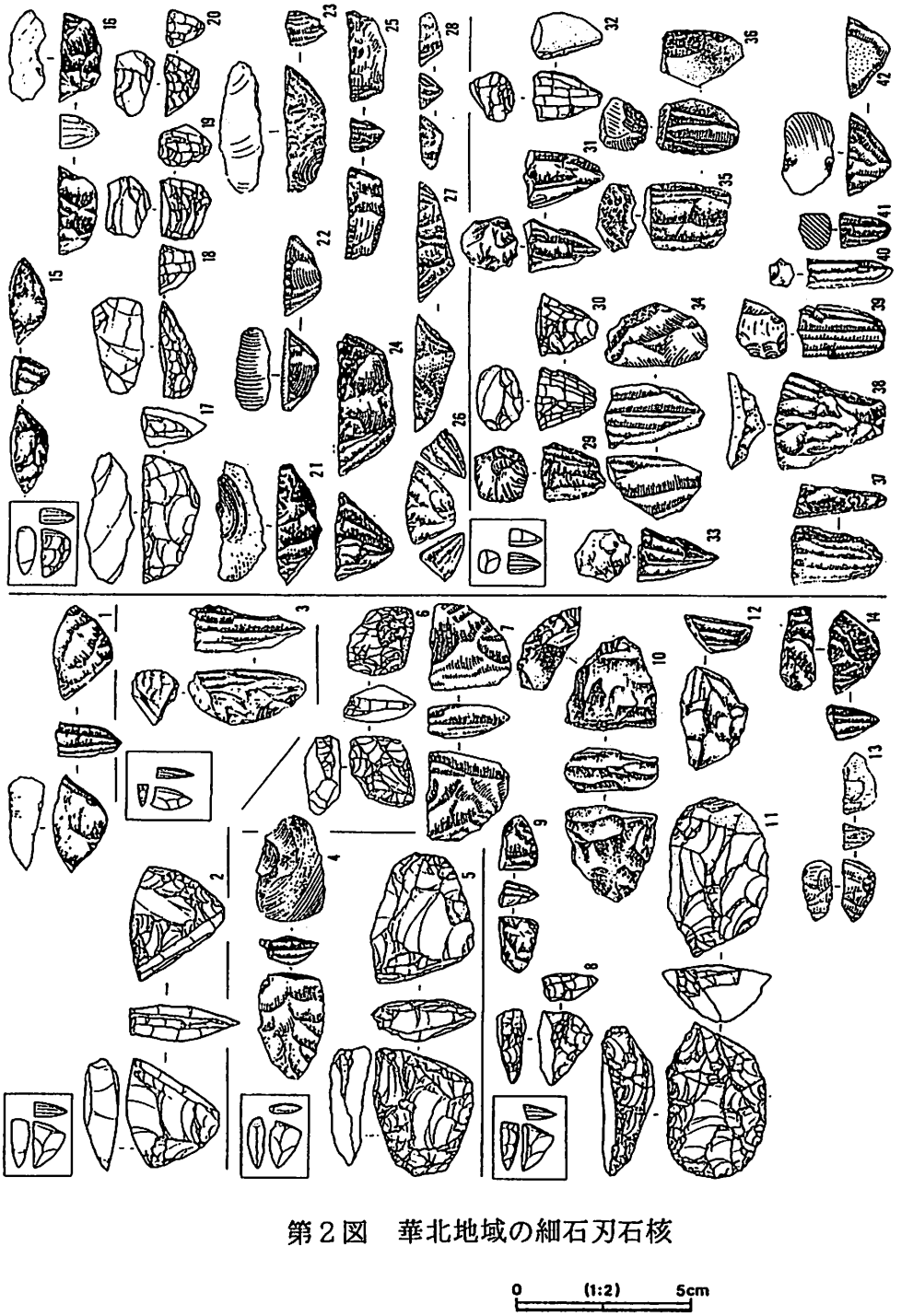
河北省文物研究所ほか（1991）「河北玉田県孟家泉旧石器遺址発掘簡報」
『文物春秋』1991－1　1～13頁
河北省文物研究所ほか（1992）「河北昌黎渟泗澗細石器地点」
『文物春秋』1992年増刊　121～127頁
吉林省文物工作隊（1983）「内蒙古科爾沁右翼中旗嘎查石器時代遺址的調査」
『考古』1983－3　673～678頁
賈　蘭坡（1978）「中国細石器的特徴和它的伝統、起源與分布」
『古脊椎動物與古人類』16－2　137～143頁
賈　文亮ほか（1989）「山西楡社県嵐峪的細石器」
『文物季刊』1989－1　14～17頁
孔　繁剛（1990）「山東省沂水県宅科的細石器遺存」
『東南文化』1990－4　174～179頁
臨沂地区文物管理委員会（1983）「山東臨沂県鳳凰嶺発現細石器」
『考古』1983－5　385～388頁
臨沂地区文物管理委員会・郯城県図書館
（1986）「山東郯城黒龍潭細石器遺址」
『考古』1986－8　673～679頁
臨沂地区文物管理委員会・沂水県文管站
（1986）「山東沂水県晩期旧石器、細石器調査」
『考古』1986－11　961～965頁
山西臨汾行署文化局（1989）「山西吉県柿子灘中石器文化遺址」
『考古学報』1989－3　305～323頁
王　建ほか（1978）「下川文化」『考古学報』1978－3　259～288頁
王　建・王　益人（1991）「下川細石核形製研究」
『人類学学報』10－1　1～11頁
王　向前ほか（1983）「山西蒲県薛関細石器」
『人類学学報』2－2　162～171頁
呉　志清ほか
（1990）「楡次大発細石器遺址及其在地層学及古気候学上的意義」
『中原文物』1990－5　63～69頁

謝　飛・成　勝泉（1989）「河北陽原油房細石器発掘報告」
『人類学学報』8－1　59～68頁
徐　淑彬ほか（1989）「山東鄒城望海楼発現旧石器地点」
『考古』1989－11　961～966頁
員　暁楓ほか（1989）「山東莒南発現的石製品」
『人類学学報』8－1　32～38頁
于匯歴・鄒向前（1992）「黒龍江省龍江県缸窯地点的細石器遺存」
『北方文物』1992－3　8～15頁
張　森水（1987）『中国旧石器文化』　天津科学出版社
（1990）「旧石器時代考古」『中国考古学年鑑』1989　1～17頁
（1991）「中国北方旧石器時代工業分類初探」
『文物春秋』1991－1　34～42頁
張　祖方（1987）「爪墩文化」『東南文化』1987－2　1～18頁
周　国興（1974）「河南許昌霊井的石器時代遺存」
『考古』1974－2　91～98頁
Tang Chung・Gai Pei（1986）“Upper Paleolithic Cultural Traditions in North China.”
ADVANCES IN WORLD ARCHAEOLOGY. vol.5 p339～364

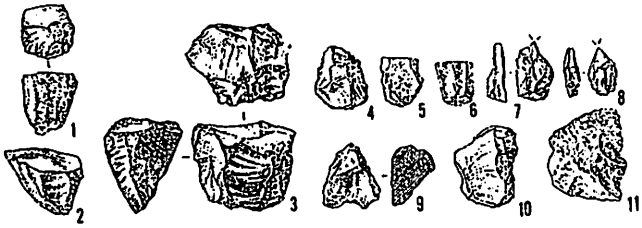


1．淳泗澗，2．東灰山，3．孟家泉，4．虎頭梁，5．油房，6．窰子頭
7．嵐峪，8．大発，9．大泉頭，10．下川，11．薛関，12．柿子灘
13．育紅河・沙苑，14．靈井，15．宅科，16．九頂蓮花山
17．鳳凰嶺，18．爪墩，19．大賢荘，20．望海楼，21．黒龍潭

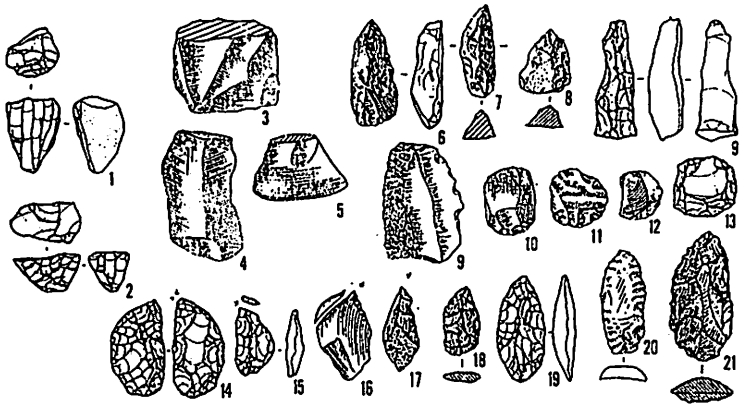
第１図　中国華北地域の細石刃文化遺跡分布図



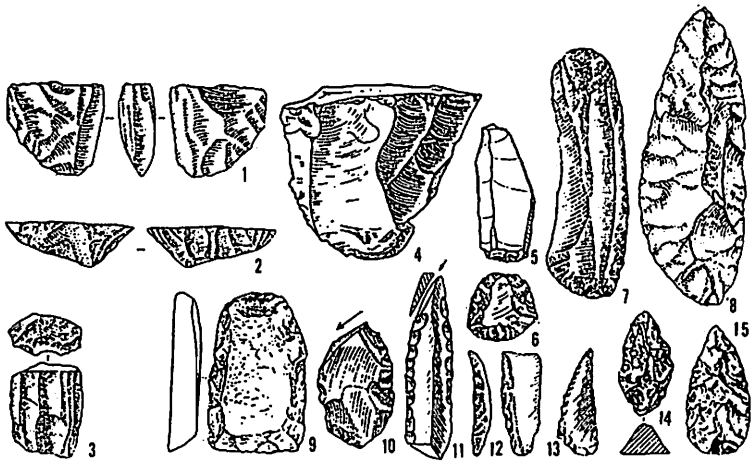
第２図　華北地域の細石刃石核



第３図　霊井類型

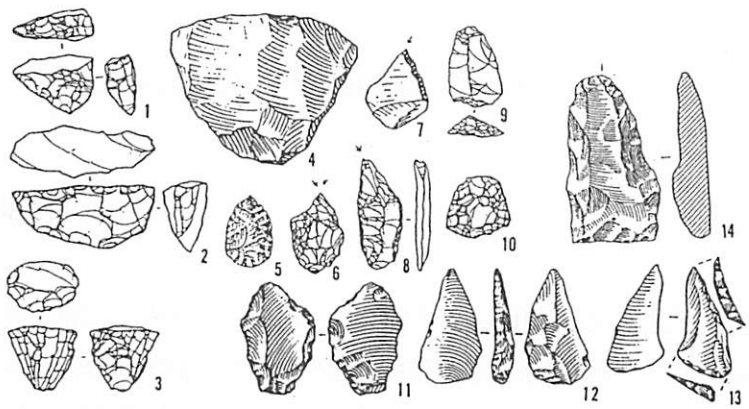


第４図　黒龍潭類型

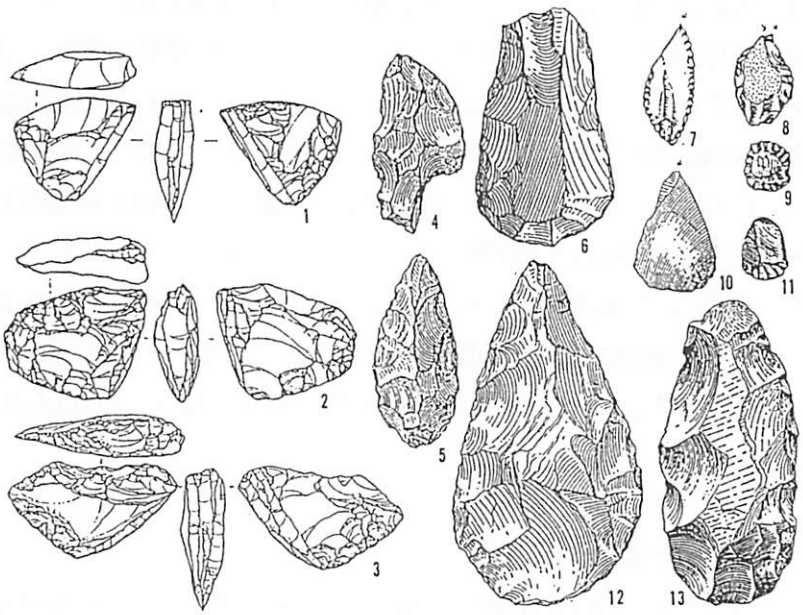


第５図　油房類型　9は25%

0　(1:2)　5cm



第６図　爪墩類型　14は25%



第７図　虎頭梁類型

第８図　中国東北地域の細石刃文化　0 (1:2) 5cm

シベリアの細石刃文化

加藤博文

日本列島における細石刃石器群は、その研究の当初から、類似した石器群が大陸に存在することが指摘され、列島内の細石刃石器群の起源を大陸に求める系統論的において、しばしば議論されてきた。しかし、シベリア地域における細石刃石器群を北アジア地域における細石刃石器群の起源地として、年代的な先行性のみで議論するのでは不十分であろう。細石刃石器群の持つ特性を考察するにあたっては様々な情報を遺跡、遺物から抽出することが必要とされている。この視点においてシベリア地域の細石刃石器群は遺跡の遺存状態に関しても、動物遺体の豊富さに関しても今後の研究を進める上で、大きな寄与を我々にもたらしてくれるものであると言える。本稿では当該地における細石刃石器群の変遷を示すほか、狩猟具としての細石刃の位置づけ、更に細石刃石器群のセトルメント、細石刃石器群を保有した集団の狩猟活動について触れてゆきたい。尚、シベリア地域は広大であり、調査が行われている地域にも片寄りがある。報告者がここで扱う資料も地域的片寄りがあり、おのずとエニセイ、アンガラ、レナの主要河川に絞ったものである点を考慮いただきたい。

1　シベリアにおける最終氷期編年

まず、シベリア地域の細石刃石器群の変遷を概観するにあたって、年代的枠組みとしてシベリア地域における最終氷期編年を提示したい。シベリア地域における最終氷期は数回におよぶ寒冷期と温暖期の繰り返しが確認されており、特に大河川流域においては、厚い堆積層の形成と侵食作用による段丘の形成がなされた。堆積層の形成は、温暖期における土壌形成と寒冷期のレスの堆積作用、更に寒冷性土壌撹乱作用によって特徴づけられる。シベリア地域は更新世を通じて周氷河環境にあり、河川流域は周氷河環境に特有な厚い河川堆積層が観察でき、氷期編年が提示されている。近年の研究の成果としてはワラビヨヴァ博士、ヤムスキー博士によるものが上げられるが、ここでは現段階で最も妥当であろうと思われるヤムスキー博士の編年を用いたい（第2図）。

2　シベリアにおける細石刃石器群の変遷

シベリア地域における細石刃石器群の出現は、まず最終氷期最寒冷期直前の先ギダン期に出現する石器群に求められる。この石器群は、細石刃の条件を満たした小型石刃[1]を持つ石器群で、小礫を原材とした単設打面、単設作業面の石核から小型石刃（細石刃）を剥離する剥片剥離技術に依っている（第3図）。

この石器群に続き、最終氷期最寒冷期にあたるギダン期入ると所謂「クサビ形」細石刃核によって細石刃を製作する細石刃石器群が出現する。アフォントヴァ山Ⅱ遺跡下層においては先行する先ギダン期の細石刃核がクサビ形細石刃核に伴っており、石核の調整度合の低さと合わせて、これ以降多用化するクサビ形細石刃核の製作技術の萌芽期的様相を見て取れる。原材には小礫を素材として軽く周縁部に調整を加えるものが見られる他、クールラⅢ下層出土の細石刃核は薄手の剥片に周縁加工を加え、薄手の円盤状に仕上げたものを素材として用いている点が指摘できる（第4図）。

ギダン・ニャパン間期からニャパン期においては、細石刃石器群は極めて多様化したものとなる。細石刃の石器群において占める比重が高くなり、細石刃核も丹念に石核調整を施されたものが主体となる。打面形成の技術が多様化するのもこの段階である（第5図）。

ココレヴォ温暖期からタイミール温暖期にかけては、細石刃核の製作技術と両面調整石器とに強いつながりが生じる段階である。細石刃核素材には両面調整石器が用いられる。各遺跡において、これらの器種の占める比重が大きく、石器製作技術全体が簡素化される（第6図）。

ノリリスク期以降では、先行する段階において簡素化された石器製作技術が複雑化し始め、細石刃の石器群において占める位置は先行する段階と比較して、さほど大きなものではなくなる（第7図）。

石器製作技術の中における細石刃技術の位置を各段階の石器群に見てみると次のような点が指摘できる。先ギダン期の細石刃はあくまで石刃の小型化の中で出現したものであり、細石刃技術と石刃技術は明確に分離したものではない。しかし、ギダン期に入るとこの様相は一変する。石器群を構成する各種の石器素材に不定形剥片を用いる状況が見られるようになり、細石刃技術は石器製作技術の中で独立した流れで製作される。ギダン・ニャパン間期からニャパン期における石器群においてもほぼ同様の傾向が見られるが、細石刃石核素材に両面調整石器が多用されるようになる。しかし、この段階ではまだその他の石器製作技術と細石刃製作技術とは別々の流れで製作されている。ココレヴォ温暖期からタイ

ミール氷期にはいると、より石器群中における両面調整石器の占める位置が大きくなる。両面調整石器の多用は極めて特徴的であり、両面調整石器の製作工程で生じる剥片類を積極的に各種の石器素材として用いている。そして細石刃の製作は、この工程の最終段階として位置づけられる[2]（加藤　1993）。

石器製作技術においては、シベリア地域の細石刃石器群は、より効率的かつ合理的な石材利用法を開発し、この到達点に両面調整石器の多用という状況が生じているようである。

3　狩猟具としての細石刃

細石刃は、骨や木を素材とした槍先の側縁部に石製刃部をはめ込んだ組み合わせ道具である「植刃器」の刃部として用いられたものであると理解されている。大陸においては細石刃を装着したままの状態で出土した例もあり、細石刃の使用に関しては、ほぼ植刃器の刃部と考えて間違いはないであろう。報告者は既に骨製狩猟具の一部としてこの植刃器について触れたことがあるが（加藤　1993）、「植刃器」自体に幾つかのタイプが存在し、細石刃石器群の変遷を考える際には合わせて考察を行う必要がある。

第　図では、各細石刃石器群の変遷と骨角製槍先の変遷を重ね合わせてみた。これに従うと、先ギダン期の細石刃石器群には骨角製槍先を持つにも関わらず、所謂「植刃器」は見られない。つまり細石刃自体の出現が先行し、「植刃器」が細石刃の出現と時間的な差をもって出現していることがわかる。また「植刃器」を含む各種骨角製槍先の器種が増加する時期はギダン・ニャパン間期からニャパン期にかけての時期に相当し、石器群の剥片剥離技術が両面調整石器を軸としたシステマティクで、石材消費において合理的な石器製作法が確立される時期と一致する点を指摘できる。

骨角製槍先を加えた視点で細石刃石器群を再度見直すと、狩猟具一つにしても一集団が複数の狩猟具を装備していたことがわかる。狩猟具としての細石刃は決して単一の狩猟具を示していない点は重要であろう。

4　細石刃石器群の遺跡パターン

シベリア地域は遺跡自体から得られる情報も豊富である。幾つかの遺跡では、周氷河性の季節的な冠水を受け、明らかにされた生活面が極めて短期間の状況を示している[3]。この時期の遺構は炉を中心として遺物が集中区を形成するものが主体であり、これに構造物を

もつ住居址遺構や狩猟対象獣を解体した解体址などが存在する。各遺構ごとの遺物出土状況や道具組成はかなり変化に富んでおり、石材消費と場との関係は遺跡の依存状態の遺跡を考察する際には示唆に富むものである。また遺跡の変異を語る際には季節的狩猟装備の差や石材消費の差を想定することも必要である[4]。

遺跡ごとの遺物構成や集中区の様相は、各々に特色があり、彼らの活動の一端を知る上で興味深い。住居遺構はシベリア地域では幾つかの遺跡で検出されているが、ザバイカルのストゥージュノエ１遺跡では複数の文化層において類似した住居以降が検出されている。この遺跡での特色は、住居遺構内部には極めて小量の遺物しか見られず、明確に作業空間と居住空間が分かれている点にある（第１０図）。住居遺構を伴わない生活面において炉の周囲に多量の遺物群を伴う状況と比較すると対象的である。

ココレヴォ遺跡群はエニセイ川の段丘上に位置し出土している動物遺体からも河川を渡る動物群を狩った典型的な渡河地点に位置するハンティングキャンプである。ここでは大量の石器製作の痕跡が炉の周囲から検出されており、破損した骨角製狩猟具の修理などのメインテナンスも行われたことが窺える。また出土遺物にみられる装飾品や骨針などからキャンプがハンターのみではなく女子を含む家族で構成されていたことがわかる。

しかし、このような状況がどの遺跡でも不変的に見られるわけではない。レナ川上流域に位置するリュボーヴァヤ遺跡ではバイソンの解体址が検出されている（第１０図）。一般的に解体址というと多量の動物骨と道具類の散布が想定されるが、この単純な遺跡においては一頭のバイソンと数点の細石刃、骨角器が見られるだけである。

季節的な遺跡占有と遺物分布との相関性ではバリショイ・ヤコリ１遺跡において興味深い資料が提示されている（第１１図）。バリショイ・ヤコリ１遺跡も遺跡立地から見ると渡河地点に占有された狩猟キャンプである。ここでは、炉と遺物の分布関係や石材の消費状況では６、７層において多量の石材消費、複数の炉周辺での集中区が形成されているのに対し、４ｂ、５層では小量の石材消費、小規模の集中区形成が見られる。この状況に動物の歯痕部の成長線に基づく季節性を重ね合わせると秋から初秋にかけて占有された６、７層と晩冬から初春にかけて占有された４ｂ，５層とに分かれる。

このようにシベリア地域の遺跡では幾つかの異なる状況が見られ、各々、各遺跡での活動と遺跡構造との相関性が窺える。これらの資料からも季節ごとの狩猟計画と環境に応じた石材消費が行われていたことを指摘できる。

5　細石刃石器群を保有した集団の狩猟活動

シベリア地域の細石刃石器群の担い手は、どのような狩猟活動を行っていたのであろうか。まず各遺跡出土の動物遺体の構成を見てみたい（第1表）。先ギダン期以降の各遺跡で共通して見られる点は、狩猟対象としてシカ類を集中的にとっている点が指摘できる。特にギダン・ニャパン間期からニャパン期かけてはトナカイを集中的に捕らえている傾向が見られ、この傾向はニャパン期以降の完新世へ向けての温暖化に伴う自然環境の変化が生じた後も各種のシカ類に引き継がれている。より細かくみるとエニセイ川中流域の遺跡群には動物遺体の90%をトナカイが占めるような遺跡も見られる。このような傾向はニャパン期以降の遺跡に見られるものである。地域的に動物遺体の構成に差が見られるが、各地域ごとの生態系に対応したものであると思われる。例えば、エニセイ川上流域の山岳地域ではトナカイ代わってアカシカやアルガリ、シベリア山岳ヤギが主要な狩猟対象獣となっており、山岳地域の特徴を示している。

総じて見るとシベリア地域の細石刃石器群を保有していた集団はシカ類を主要な狩猟対象獣として狩猟活動を行い、各々の生態系に対応した狩猟活動を展開していたことが指摘できる[5]。

6　シベリア地域における細石刃石器群が示すもの

細石刃石器群の出現は、最終氷期開始に伴う先史人類の技術適応と密接な関係を持っている。そしてその技術的特性は、石器製作工程を効率的かつ合理的な方向に極めたものであると言える。遺跡から見ても、この時期の遺跡は長期滞在を示すものは少なく、移動性の高い行動型が必要とされていたと思われる。その背景にはその生業基盤が平面的にも垂直的にも移動性の高いシカ類に置かれていたからであり、遺跡出土の動物遺体から推察するに集約的な狩猟活動が確立されていた可能性が高い。ここまで見てきた石器製作技術の特徴や遺跡構造の変異は細石刃石器群の担い手達の活動の一端をわれわれに示してくれる。動物遺体と石器群や遺跡構造との総合的な分析を更に進めることによって得られる情報は細石刃石器群研究に大きく寄与するものであろう。更に、このような狩猟装備や狩猟技術がどのように完新世の狩猟集団に受け継がれていくのかは今後の課題である。

尚、図版作成に際して、竹田眞人、本多昭宏両君の手をわずらわせた。　文末ではあるが感謝の意を表したい。

註

1)形状は「細石刃」と同様であるが、同一の石核から中型の石刃も剥離され、技術的に独立したものではない。また出土した骨角製狩猟具には槍先が見られるが、細石刃を刃部としてはめ込むものは現段階では検出されていない。

2)この石器製作技術の最大の特徴は石器製作と石器の機能転化が複雑に組合わさっている点にある。スクレブロと呼ばれる荒い大型のスクレーパから両面調整石器が製作され、石核素材としての両面調整石器の縁辺部にも磨滅などの使用痕が見られる。このことから石材消費の流れの流れの中で一つの器種が複数の機能で使用され、更に他の器種に転用される点にこの石器製作技術の特徴を見ることができる。

3)周氷河環境では季節的冠水が春と秋に観察され、河川に面した遺跡では沖積作用に挟まれた生活面が多く検出されている。遺物の分布状態や同様の石器製作技術を持つ生活面が複数層にわたって検出され、このような地形では、かなり早い速度で層の形成が行われていることが指摘されている。

4)一つの例として、ヴィチム川下流域に位置するバリショイ・ヤコリ1遺跡において季節性と石材消費との関係を考察している。合わせて参照していただきたい（イネーシン・加藤　1993）。

5)狩猟具の組み合わせと各地にの狩猟対象獣に関しては、第1表と拙著（加藤　1993）を参照していただきたい

引用文献（紙数の関係で参考文献の一部は割愛した。）

Абрамова,З.А. 1979 Палеолит Енисея:Афонтовсая культура, Новосибирск

Абрамова,З.А. 1979 Палеолит Енисея:Кокоревская культура. Новосибирск.

Астахов,С.Н. 1986 Палеолит Тувы , Новосибрск.

Васильев,С.А. 1991 "Поздний палеолит верхнего Енисея" ,Советская Археология,2,Москва,:

Геология и культура древних поселений Западного Забайкалья.1982, Новосибрск.

Медведев,Г.И.и т.д. 1982 Мезолит верхного Приангарья,

Иркутск.

Медведев,Г.И.и т.д.,1971 Мезолит верхного Приангарья. Иркутск.

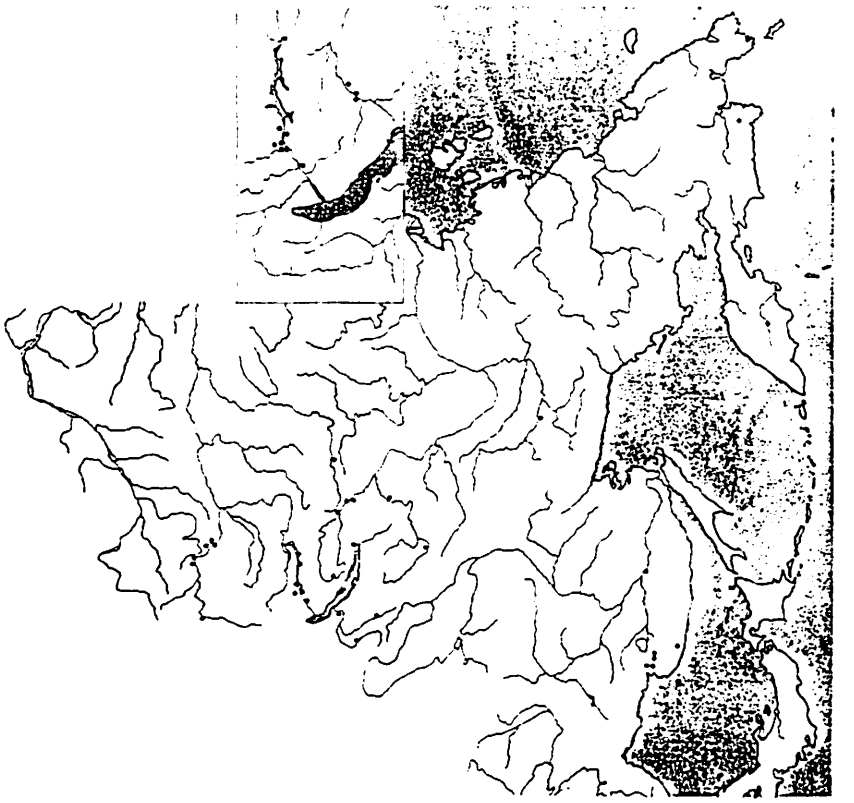
Любин,В.П.и Абрамова,З.А. 1989 Палелит Кавказа и Северной Азии. Ленинград.

Палеолит Енисея.1991 ,Ленинград.

Ямский, А.Ф. 1992 "О реконструкциях седиментационной цикличности в речных долинах Южной Сибири при изучении палеолита" Хронологстратиграфия палеолита Северной,центральной,восточной Азии и Америки, Новосибирск.

イネーシン、加藤　博文　1993　「東シベリアの細石刃石器群に見る技術適応の一例、－バリショイ・ヤコリ１遺跡の例－」『旧石器考古学』（投稿中）

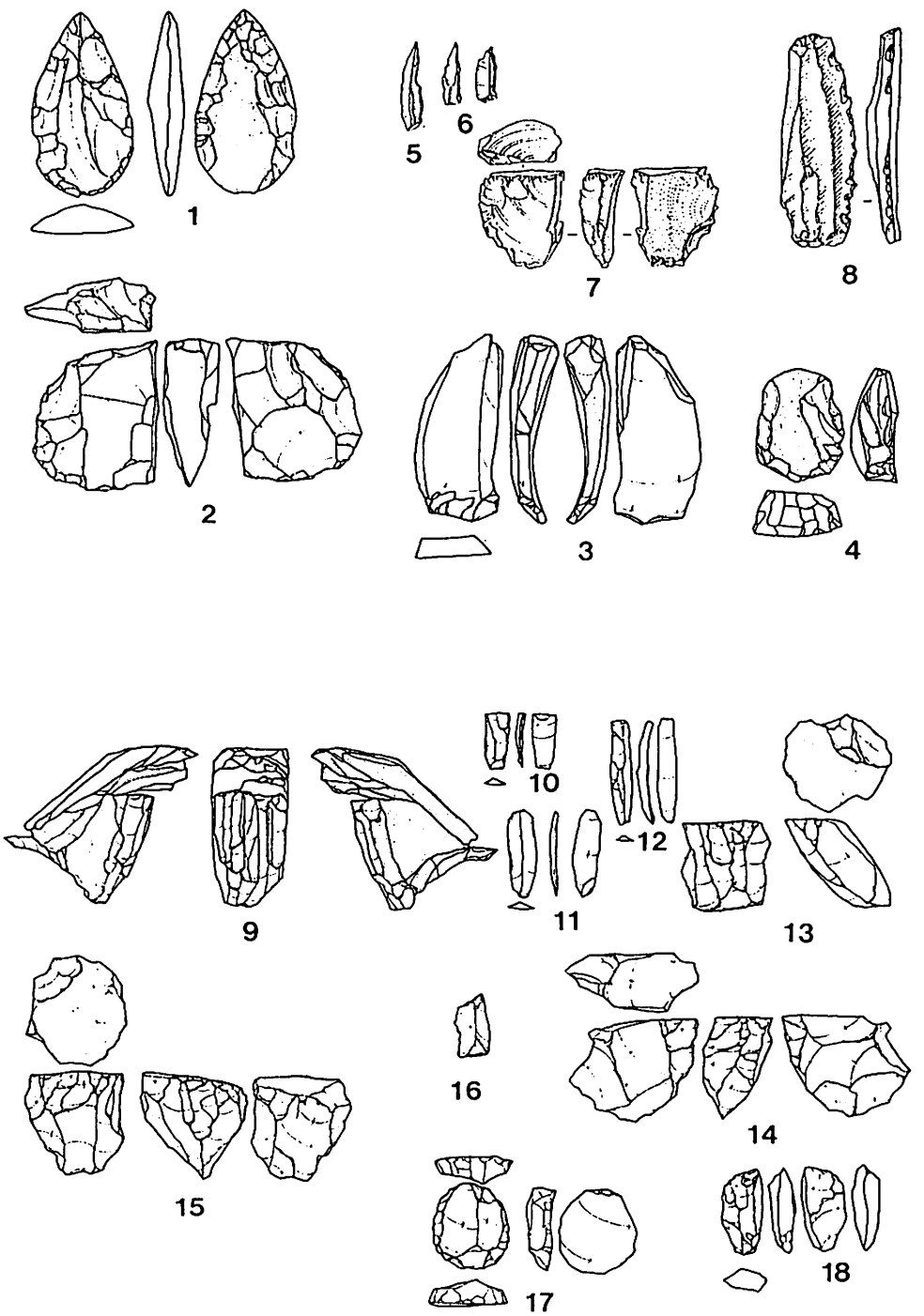
加藤　博文　1993　「東シベリア後期旧石器時代の骨角製槍先について」『古代文化』第45巻、第7号：11-26



第1図　シベリア地域主要遺跡分布図

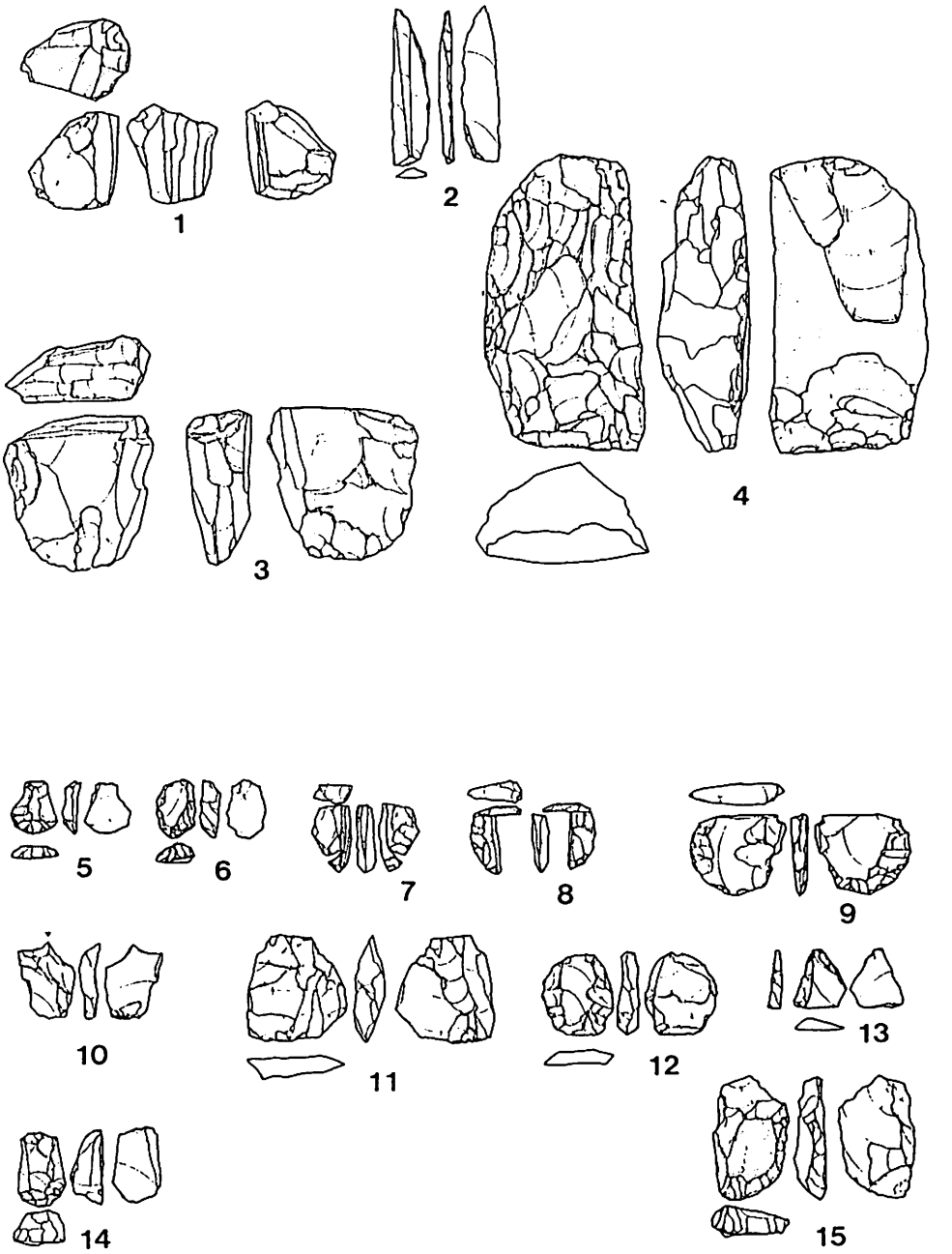
氷期	石器群	B. P. Y	エニセイ川流域	アンガラ川流域	B. P. Y
		10. 700			
	第VI期		ノリリスク期		
		11. 400			
		11. 800	タイミール温暖期		
	第V期		ココレヴォ・タイミール間期	サルタン4期	
		12. 200			
			ココレヴォ温暖期		
サルタン		13. 000			
	第IV期		ニャバン期		14. 000
		15. 000		サルタン3期	
			ギダン・ニャバン間期		
		16. 000			16. 000
	第III期		ギダン期	サルタン2期	
		22. 000			17. 000
	第II期		先ギダン期	サルタン1期	
					24. 000

第2図　シベリア地域最終氷期編年



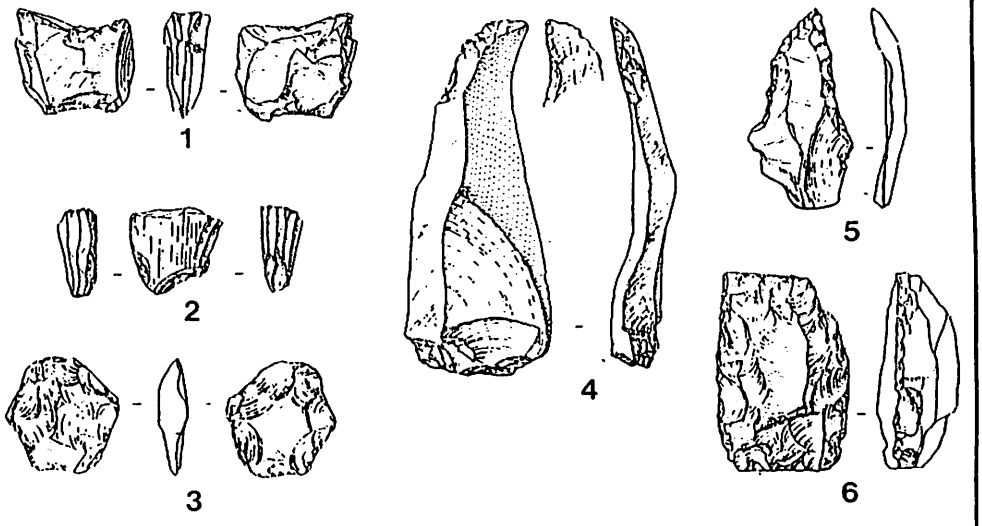
第3図　先ギダン期の細石刃石器群

1－8タラチハ出土（5－8アブラーモヴァ他1990より）、9－10アレクセーフスク出土

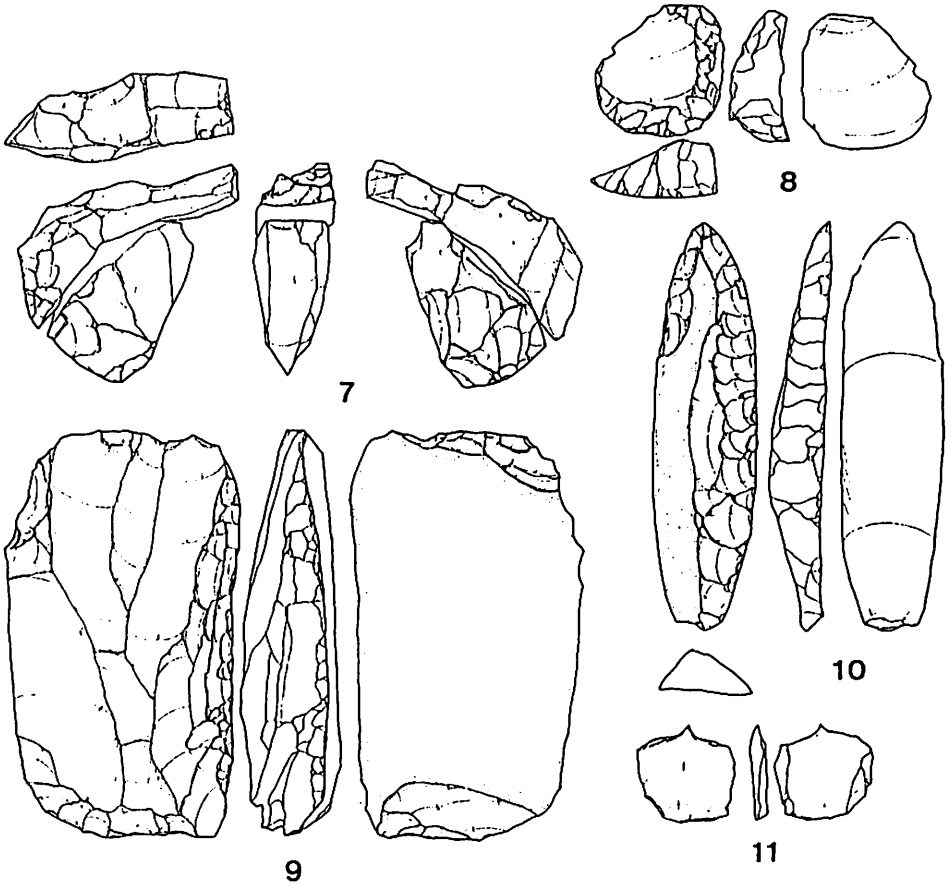


第4図　ギダン期の細石刃石器群

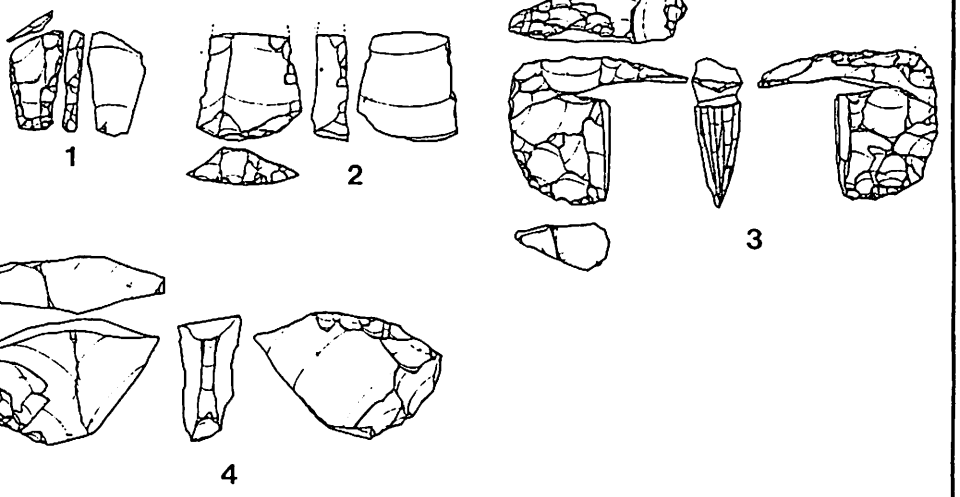
1－4アフォントヴァ山3出土、5－15クールラ3下層出土



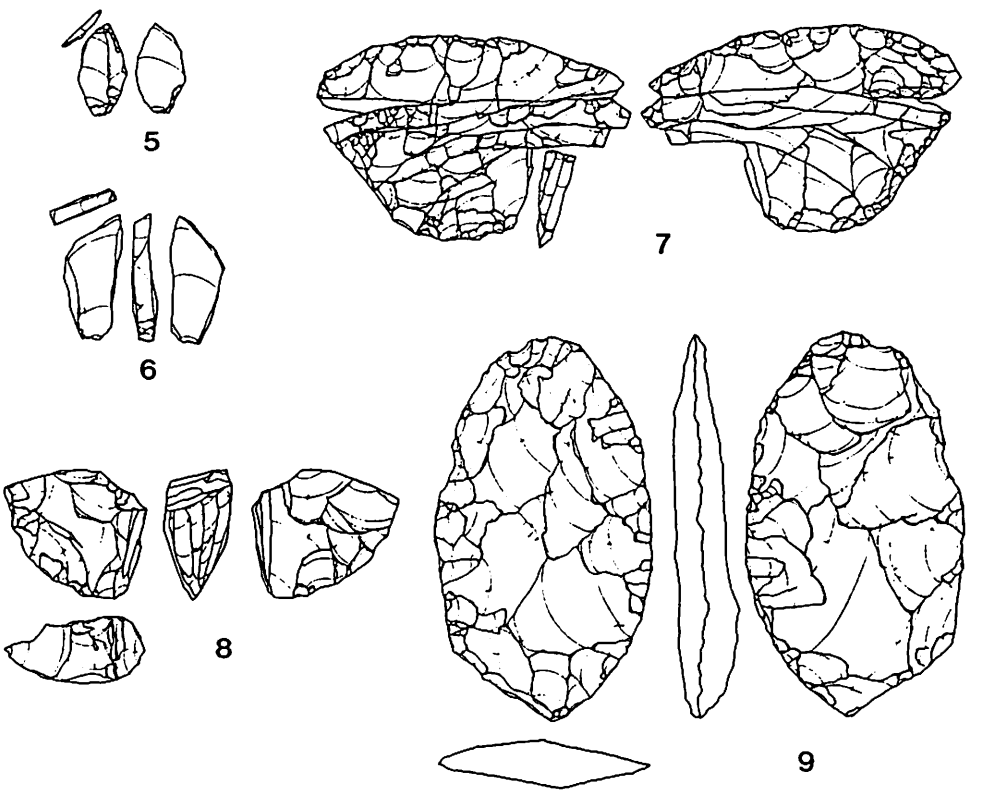
1－6ココレヴォⅣa出土（アスタホフ他1990より）、7－11ココレヴォⅠ出土



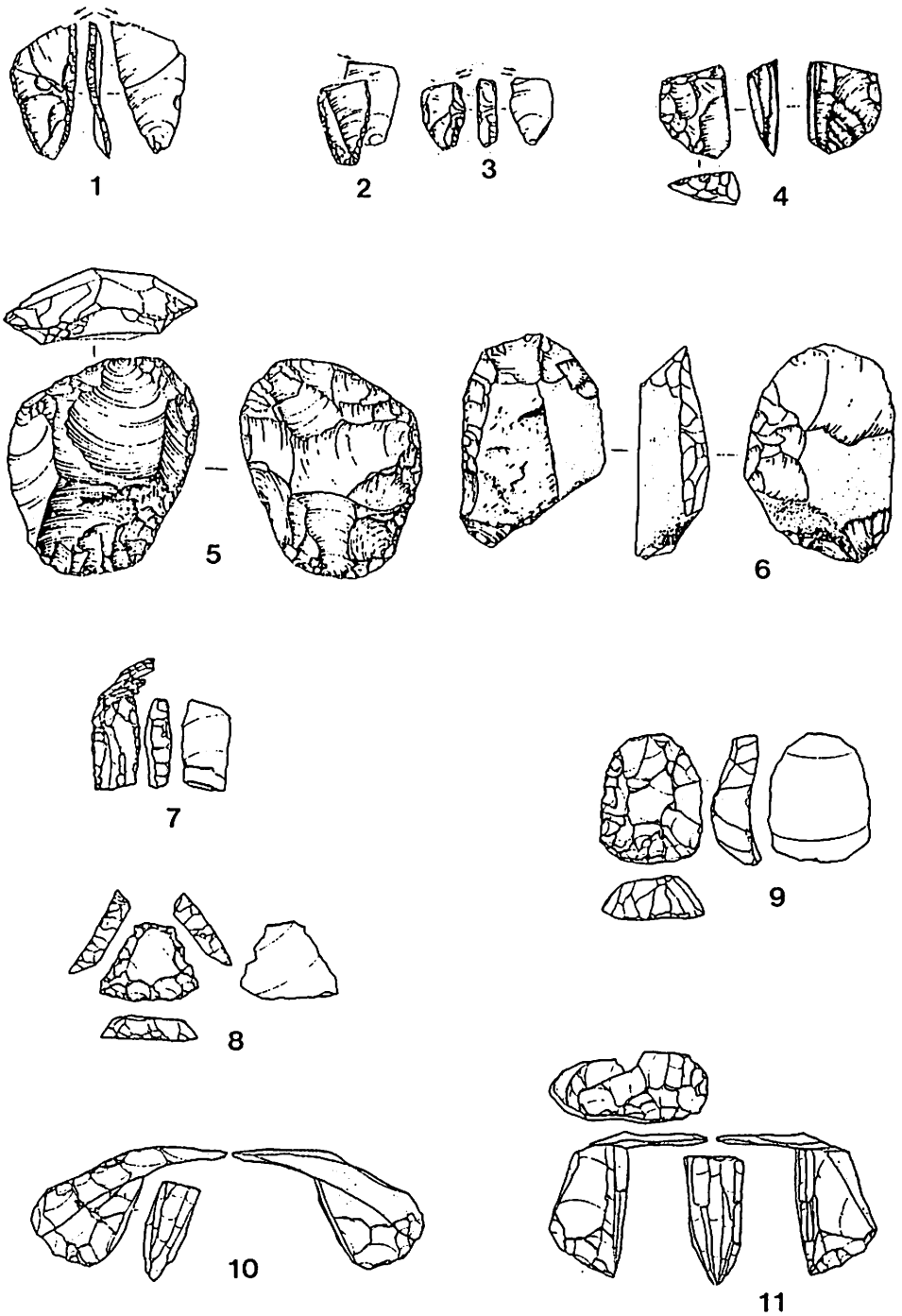
第5図　ギダン・ニャパン間期からニャパン期の細石刃石器群



1－4ウスチ・メンザ2出土、バリショイ・ヤコリ1出土

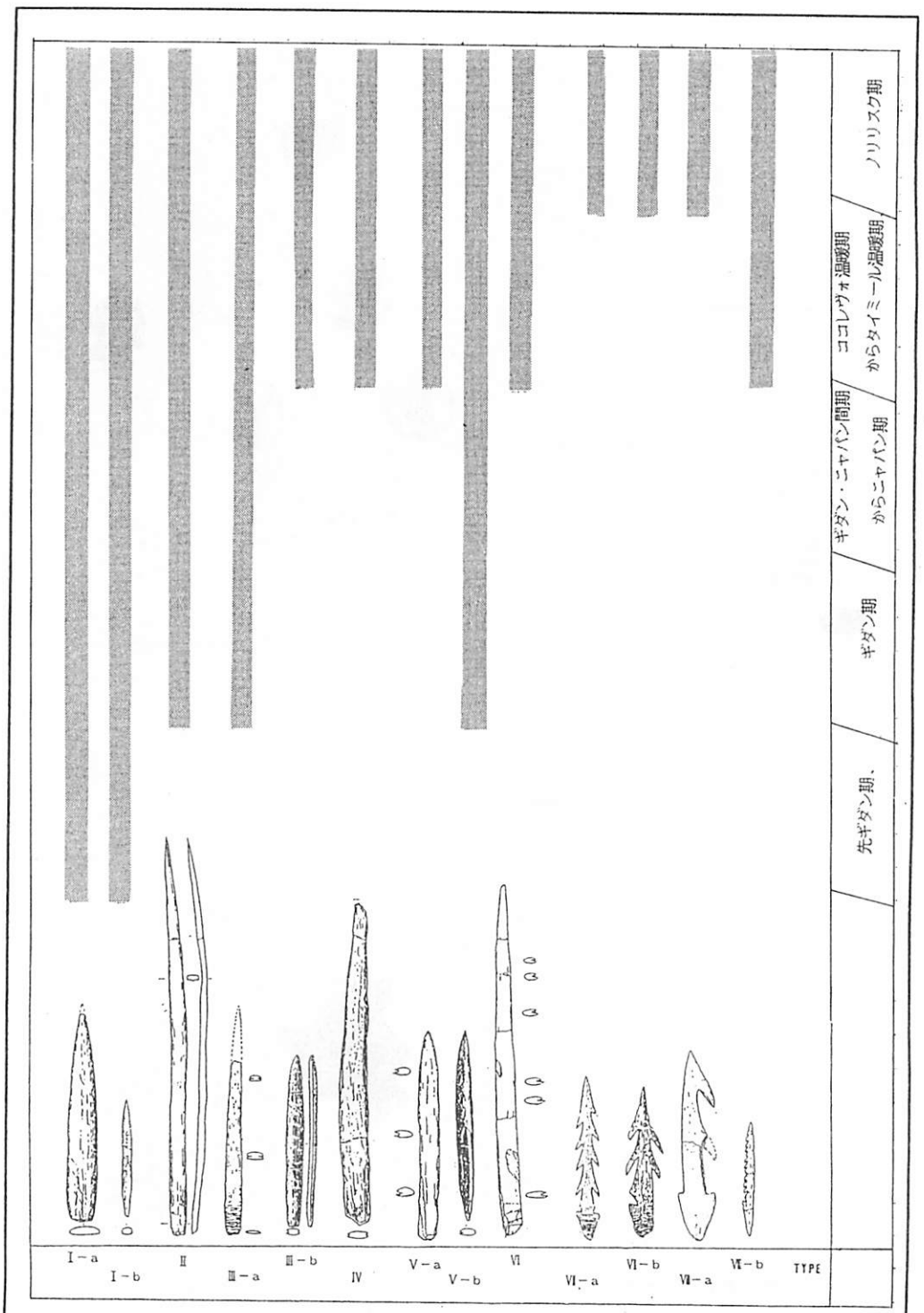


第6図　ココレヴォ温暖期からタイミール温暖期の細石刃石器群

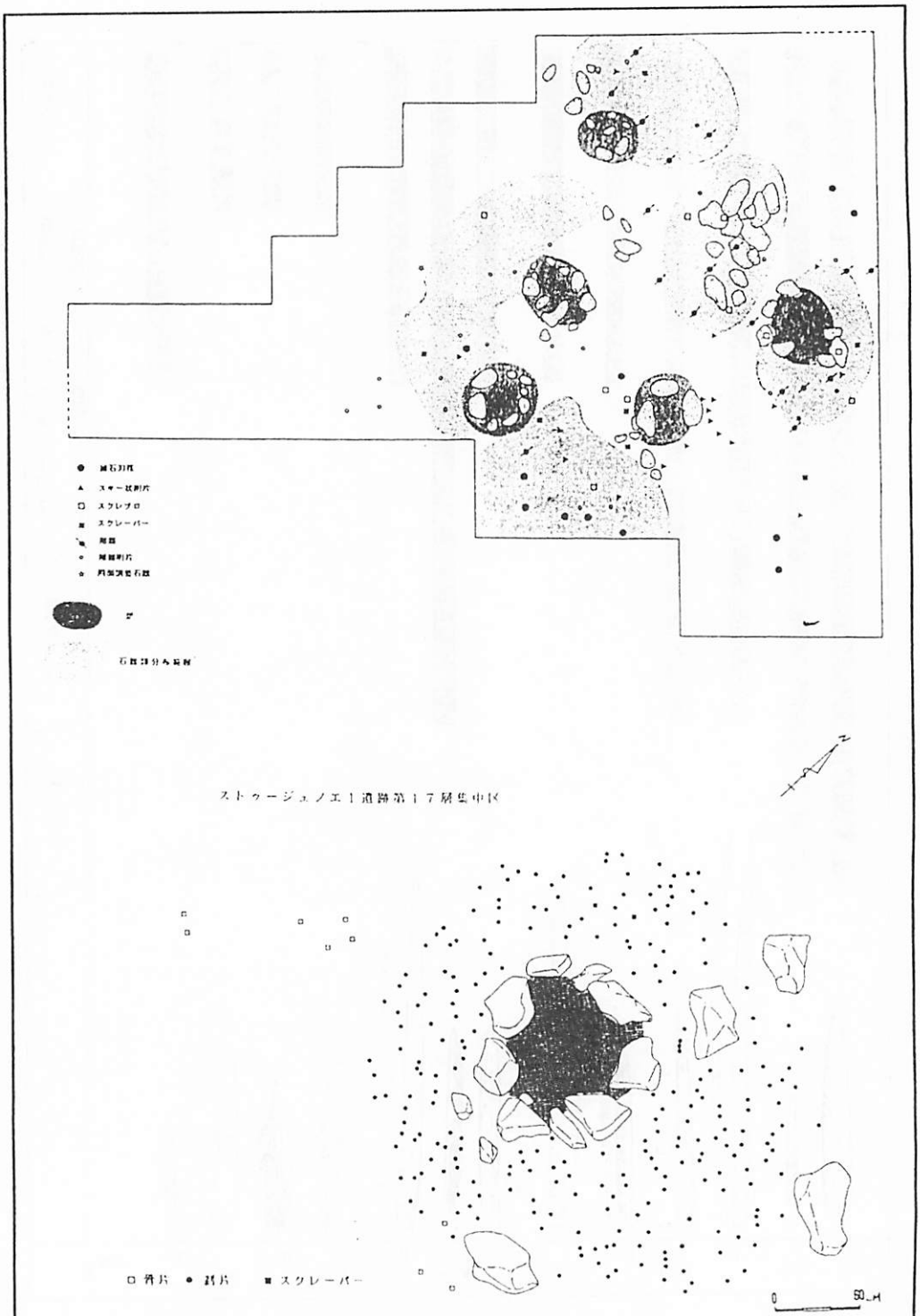


第7図　ノリリスク期以降の細石刃石器群

1－6キスチェネヴォ5出土（アクショーノフ他1975より）、ウスチ・カレンガ12出土

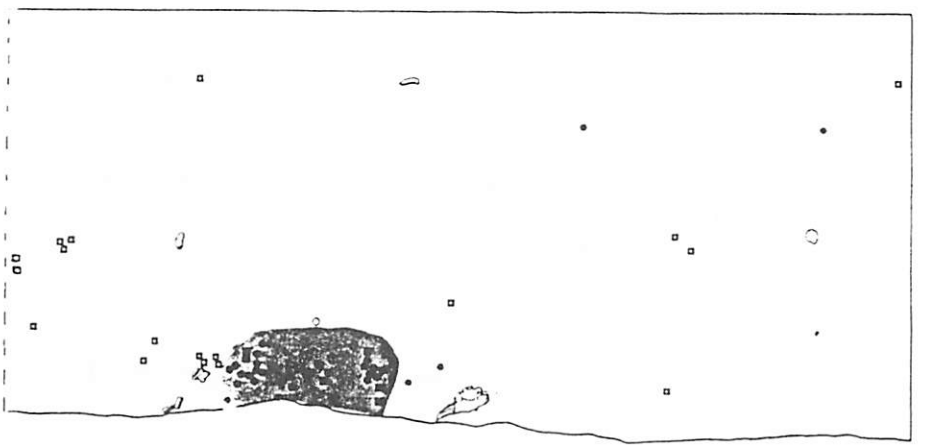


第8図　骨角製槍先変遷図



第９図　シベリア地域における各種遺構

リュボーヴァヤ遺跡



□ 剥片　● 礫石刃　○ 骨製槍先

ストゥージュノエ１遺跡第19層住居址

□ 剥片　● 礫片　■ スクレーパー

第１０図　シベリア地域における各種遺構

層位	石材の消費率	石器製作の過程	骨角器の製作	季節性
4b	低い	持ち込んだ石器の部分的な調整	無	晩冬から初春
5	低い	持ち込んだ石器の部分的な調整	無	晩冬から初春
6	高い	各種石器の製作や再生	有	晩秋から初冬
7	高い	各種石器の製作や再生	有	晩秋から初冬

第１１図　バリショイ・ヤコリ１遺跡における石器群と季節性の相関

アンガラ・ザバイカル地域遺跡に動物相

		M	Co	D	R	Ce	Al	Capre	E	Ant	Ovis	Capra	Sai	Ur	V	Alo	Le	Marm	Canis	F
1	ｱﾚｸｾｴﾌｽｸ	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ﾊﾞﾘｼｭｰｸﾞｫ	-	○	-	○	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ﾏﾘﾀ	16	25	5	589	-	-	-	2	-	1	-	-	-	3	58	2	-	1	-
	ﾌﾞﾚﾅ	2	3	2	24	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	ｸｰﾙﾗⅢL	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-
	ｸﾗｽｽｲ・ﾄﾙ L	-	○	○	●	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ｿｽﾉｸﾞｲ・ﾎﾞｽ5	-	-	○	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3	ｻﾝｽｲ・ﾑｲｽ	-	○	○	○	-	-	-	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	ｸﾗｽｽｲ・ﾄﾙ U	-	-	-	3	-	-	-	4	-	-	-	-	-	1	-	6	-	-	○
4	ｳｽﾀ・ﾒﾝｸﾞﾞⅡ	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ﾊﾞﾘｼｮｲ・ﾄｺﾘⅠ	-	-	○	●	●	●	○	○	-	-	-	-	○	○	○	○	-	○	○
5	ﾏｶﾛｸﾞｫⅡ 3	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○
	ｸｰﾙﾗⅣ	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-
	ｸﾞｪﾙﾙﾚﾝｽｶﾔﾚ山	-	-	4	2	-	3	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○
	ｳｽﾀ・ﾍﾞｰﾗﾄ	-	-	-	-	-	4	18	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	○
	ﾒｼｭﾙｺｸﾞｫ	-	-	○	●	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	○
	ｸｰﾙﾗⅡ U	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	-	-	-
	ﾚﾝｺﾌｶ	-	-	2	-	5	-	7	5	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-

第1表　シベリア地域各遺跡の動物遺体（１）

１：先ギダン期、２：ギダン期、３：ギダン・ニャバン間期からニャバン期

４：ココレヴォ温暖期からタイミール温暖期、５：ノリリスク期

エニセイ川流域遺跡の動物相

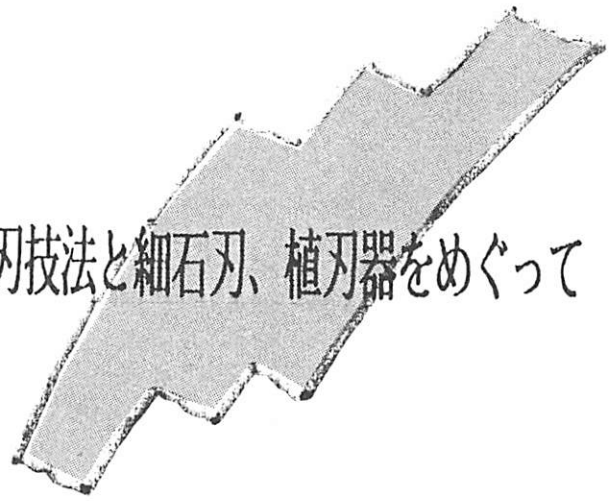
	中流域	M	Co	B	R	Ce	Al	Capre	E	Ant	Ovis	Capra	Sai	Ur	V	Alo	Le	Mam	Canis	F
1	ﾀﾗﾅﾊ	<8	-	1	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ｱﾌｧﾅｼｴｳﾞｧ山	○	-	-	●	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ｱﾁﾝｽｸ	○	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	○	-	○	○	○	-	-	-
	ｼｭﾘｮﾝｶ	○	-	-	●	-	-	-	○	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	ｱﾌｫﾝﾄｳﾞｧ山II c3	5	-	1	46	○	1	○	○	-	○	-	-	○	○	32	17	-	-	-
	ｱﾌｫﾝﾄｳﾞｧ山III M	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3	ｺｺﾚｳﾞｫI 4	-	-	0.8%	63.8%	○	-	-	○	-	15%	-	-	○	-	○	12%	-	○	-
	4a	-	-	○	●	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-
	5	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-
	ｺｺﾚｳﾞｫII	25.2%	-	2%	28%	2%	2.5%	-	16%	-	3.5%	-	○	-	○	-	0.1%	-	○	-
	ｺｺﾚｳﾞｫIV	-	-	○	●	-	-	-	●	-	●	-	-	-	-	-	●	-	○	-
	ｺｺﾚｳﾞｫIVa	-	-	○	90%	-	-	-	○	-	-	○	-	-	-	-	○	-	-	○
	ｺｺﾚｳﾞｫIVb	-	-	○	●	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	○	-
	ｺｺﾚｳﾞｫVI	-	-	○	●	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ﾀｼｭﾃｨｸI	-	-	0.6%	39%	3%	-	-	18%	-	10%	-	2%	-	-	8%	-	-	○	-
	ﾀｼｭﾃｨｸII	-	-	1%	82%	-	-	-	9%	-	0.3%	-	2.3%	-	-	-	1.3%	-	-	-
4	ｱﾌｫﾝﾄｳﾞｧ山III	○	○	○	●	○	-	-	○	-	-	-	-	-	○	-	○	-	-	-
	ｺｺﾚｳﾞｫI 2	-	-	0.3%	89%	5%	-	○	○	-	9%	-	-	-	○	-	3%	-	-	-
	3	-	-	1%	46.7%	○	-	○	○	-	○	○	○	○	-	-	47%	-	○	-
	ｺｺﾚｳﾞｫIII	-	-	1.9%	36%	-	-	-	0.5%	-	1.6%	-	-	-	-	-	59%	-	-	-
	ｱﾌｫﾝﾄｳﾞｧ山I	○	-	○	●	○	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ﾉｳﾞｫｾﾛｳﾞｫVI	-	-	1.4%	98%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.08%	0.1%	-	-	-
	ﾉｳﾞｫｾﾛｳﾞｫVI	-	-	0.5%	95%	-	-	-	0.5%	-	-	-	0.3%	-	-	0.5%	2%	-	○	-
	ﾉｳﾞｫｾﾛｳﾞｫX	-	-	○	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ﾘｽﾄｳﾞｪﾝｶ	-	-	●	○	-	-	-	○	-	-	○	-	-	-	-	○	-	-	-
5	ﾄﾞｩｸﾞｸﾞﾗｽｶ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	洪層2 ﾋﾞﾘｭｻ	-	-	○	●	○	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	○	-	-	-

	上流域	M	Co	B	R	Ce	Al	Capre	E	Ant	Ovis	Capra	Sai	Ur	V	Alo	Le	Mam	Canis	F
1	ｳｲI 2	-	-	○	-	○	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	ﾏｲﾉG-9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	○	-	○	-	-	-
4	ｶﾝﾌｪﾘﾆｰA5	-	-	○	-	○	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	4	-	-	○	-	○	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	○
	ﾏｲﾉ5	-	-	○	-	○	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-	○	-	-	-
	2-4	-	-	○	-	○	○	-	-	-	○	○	-	-	○	-	-	-	-	-

第2表　シベリア地域各遺跡の動物遺体（２）

１：先ギダン期、２：ギダン期、３：ギダン・ニャパン間期からニャパン期

４：ココレヴォ温暖期からタイミール温暖期、５：ノリリスク期



細石刃技法と細石刃、植刃器をめぐって

細石刃剥離技法に関する研究、細石刃と石材環境、細石刃の形態と機能、東アジアの植刃器をめぐる研究を展開する。

細石刃はどのような技法によって生みだされたか。そして本来的な研究の主役のひとつであるべき細石刃のかたちや機能をどのように研究すべきか、さらにそれが複合石器としてどのような軸に埋め込まれていたか、などについての考察をおこなう。

細石刃技法の把握

－荒川台技法－

阿部朝衛

はじめに

技術は、人々が生活する上で欠かせないものであり、その質的・量的発展が人類を他の生物から遊離させ、短い期間の中で異常ともいえる程の変化をもたらした。また同時代にあっては大きな変異を生んだ。技術は人間が作り出した文化的産物である。技術の進化は自然環境への改変能力を変え、また文化環境へも影響する。その一方で自然・文化環境の変化も技術に影響を及ぼす。したがって技術は実質上の機能をもちながらも、様々な社会集団のなかで広がり、変化する。

従来、細石刃生産技術には様々な技法が設定されてきた。多くは生産工程を明らかにしてそこに見られる差異を時空間に配列する編年研究のためのものであった。これらは研究の基礎であり、その果たす役割は極めて大きい。しかし、不徹底な資料分析や資料の限界性などにより問題が残されている。また自然・文化環境との係わりの中での理解となると問題は山積みされている。これは細石刃石器群研究のみが抱えている問題ではなく、他の旧石器時代そして縄文時代の石器研究でも同様であろう。ここでは資料分析とその提示を重点的に行う。

さて、新潟県荒川台遺跡の調査に際し、三つの目的を掲げてきた。細石刃生産技術の把握、細石刃石器群と石刃石器群の共存の有無の確認、人間行動の復元である。後二者についてはいまだ結論に至っていないが、細石刃生産技術の内容はかなり把握され、荒川台技法を提唱するに至った(1)。そこに至るまでの過程や前提を生産工程を中心として述べよう。なお、ここで扱う資料は第１次発掘調査資料(2)を中心とする。

1　細石刃生産工程

細石刃生産には様々な要素が関与している。一つは細石刃を必要とすることである。おそらくは槍先の植刃を作ることに目的があろう。細石刃の量・質が関与し、食料獲得と大いに関連する。荒川台遺跡ではかなりの量の細石刃が生産されていたと推定される。二つ目は知識としての技術である。そこには集団が保有する知識、個人の能力・好みが関与し

ている。集団の保有する知識はその社会の伝統あるいは規範とされるもので、技術型式学上重要な要素である。個性は伝統あるいは規範と不可分であるが、変異あるいは変化が生じる背景を追究する上でまた重要な要素となる。多元化したあるいは重層した要素群の中からみいだされるのかもしれない。しかし、実際の資料分析にあたって個性を優先させることはあまり生産的ではないであろう。ここでは技術の機能性を重視し、工程復元を行い、それぞれの加工の役割・規定性に注目したい。三つ目として原材料が上げられる。石器やそれを加工する道具に適した材料が必要となる。原石については後述するがある程度は満たされていたと推定される。鹿角など有機質の工具が用いられたと推定されるが、これについては不明と言わざるをえない。細石刃生産技術はまさにこうした要素の相互関係の中で発現したものである。以下、各工程を順におっていくが、上記の要素はその過程の中で触れてゆく。

（1）原石採集と原石の特徴

原石は頁岩が主体で、一部に流紋岩などが含まれているこの頁岩は新潟県の石刃石器群の頁岩に比べて総体的に粒子が粗く、また節理が発達している。原石は大きさ15cm内外の円礫で、重量は2kg前後とみられる。遺跡が位置する荒川・女川流域ではこれらと類似した礫が採集される。ただし、頁岩は流紋岩ほど採集されない。接合資料からみると多くの細石刃石器群は遺跡の中に原石を持ち込み、加工されたと理解される。荒川・女川流域から原石の多くが採集されたと推定されよう。頁岩が豊富に存在するとは言い切れないが、ある程度は保障されていたとみられる。一方、少数ながら良質の頁岩を素材とする細石刃核が存在し、それと同質の頁岩は荒川・女川流域ではいまだ発見されていない。これらの細石刃核は母岩別資料にまとまりにくく、遠隔地である段階まで加工されたものである可能性が高い。なお、剥離具として敲石が用いられているが、その材料は荒川流域で採集されうるものと考えられる。

（2）素材獲得

細石刃核の素材は、一部確認されないものが存在するものの、剥片である。素材剥片は厚手で、まま背面に自然面をもつ。縦長のもの、長さと幅にあまり差がないものが主体である。また打面側が総体的に末端側より厚い。荒川台遺跡では剥片を取る手法として5種類が認められる。Ⅰ類は石刃技法、Ⅱ類は縦長の分厚い剥片を一定方向から剥離する手法、Ⅲ類は縦長の分厚い剥片を多方向から剥離する手法、Ⅳ類は幅のある分厚い剥片を多方向から剥離する手法、Ⅴ類は小形剥片を多方向から剥離する手法で、細石刃核の素材はⅡ～

Ⅳ類からの剥片である。それらの剥片から選択されて用いられている。今のところⅠ・Ⅴ類からの剥片は認定されないが、それらは薄手であり、細石刃核の厚さを超えるものではない。なお、荒川台遺跡ではⅡ～Ⅴ類の剥片生産は行われているが、Ⅰ類ではその痕跡があまり窺えない。またⅡ～Ⅴ類は打面調整・再生、作業面稜調整などの石核調整はほとんどみられず、剥片のバルブの特徴からそれらはハードハンマーで剥離されたと推定される。荒川流域で採集した原石を同じ場所から採集した敲石で剥離実験を行ってみても、Ⅱ～Ⅴ類を復元することは十分可能で、バルブも同様な特徴を有していた。

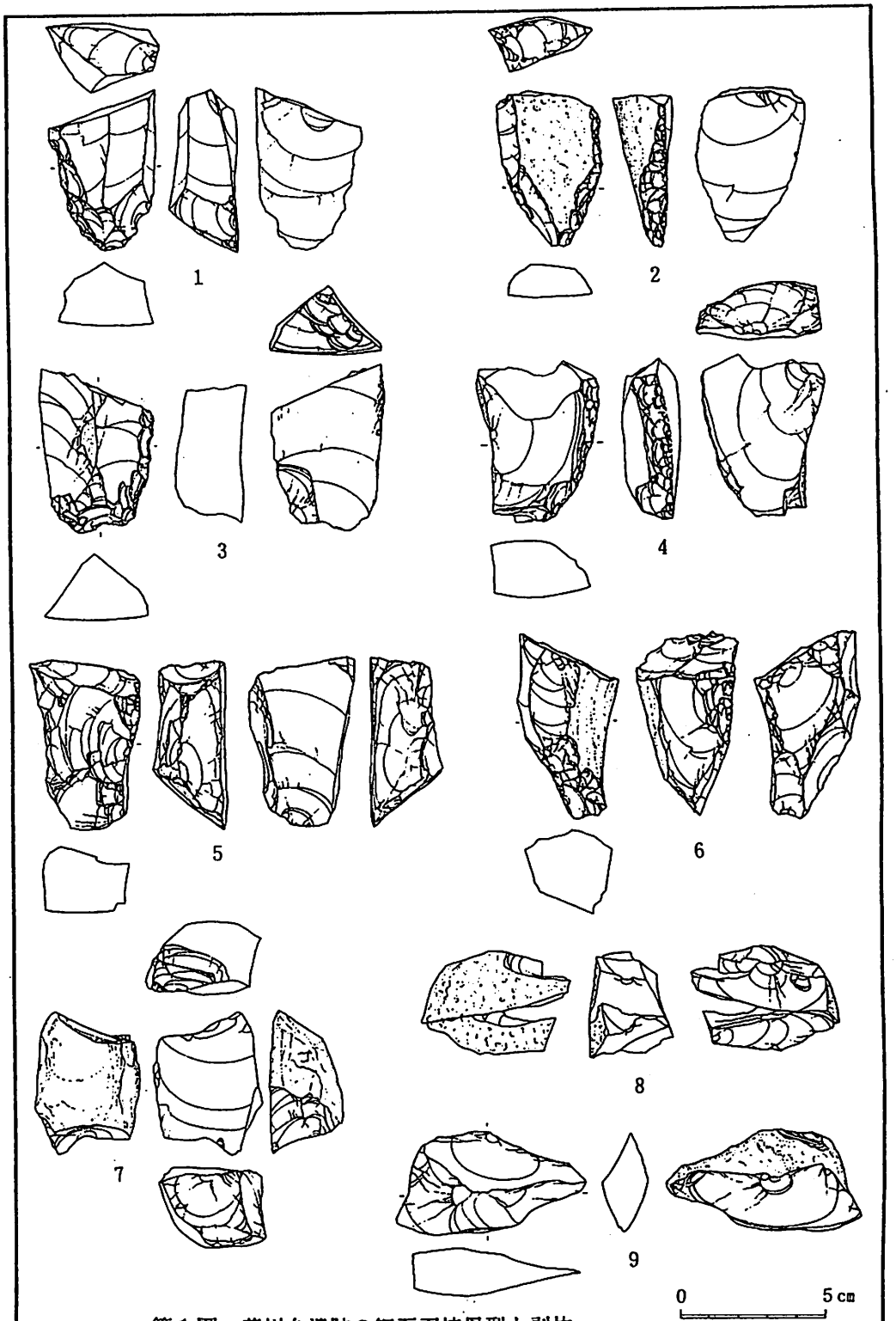
これらの生産手法から生まれた剥片は細石刃核の素材のみならずスクレイパーなどの素材にも用いられているが、それらの数量的関係から主体はやはり細石刃核素材獲得であろう。しかし、原石の消費率を考えるとかなり低いとみなければならない接合資料が存在する。また細石刃核素材にはなりえない剥片が多数存在する。消費率についてはいまだ調査途中であり、今後検討して行かなければならないが、半分を超えるとは予想できない。その一方で細石刃石核素材となりうるような大きさ・形状をもつ剥片が少数存在する。これは蓄えとして残された可能性もあり、消費率を計算する上で重要である。

素材剥片の背面に自然面を残しているものが多いが、これは原石がそれほど大きくないことと関連する。しかし、そのため素材表層部に潜在するヒビが加工や細石刃剥離時に影響を及ぼすと想定される。

（3）母型作出

母型には4つの類があり、Ⅰ類は平面形がU字形、横断面形が三角形・半円形・台形、縦断面がノミ状・三角形状のもの（第1図1～4）14点、Ⅱ類は平面形がU字形、縦断面がノミ状であるが、横断面が四辺形を呈するもの（第1図5）1点、Ⅲ類は角錐状のもの（第1図6）1点、Ⅳ類は柱状のもの（第1図7）1点である。Ⅱ～Ⅳ類は数量上からも類設定に問題が残され、ここではⅠ類を中心に述べておこう。

厚手の剥片の主に背面側に加工を施し、側縁・下縁が形成され、剥片腹面は平坦のまま残される。打面は剥片の背腹両面や側縁からの打撃によって作出され、後者が多いようである。おそらく第1図8・9に示したような剥片が取られたのであろう。また、側面の調整も若干行われる。総体的に打面が最初に形成されるようである。剥片の形状を著しく変える調整ではなく、素材面を大きく残す。また未調整の側縁なども存在する。剥片の形状をうまく利用していると理解され、それによって調整の省略が行われているのであろう。剥片打面を母型の打面側に配置するものが多いものの、側縁や下縁側に位置するものが存



第１図　荒川台遺跡の細石刃核母型と剥片

在し、これも剥片の形状・大きさをうまく利用した結果であろう。これらの調整の結果、前述した形状となる。そして、両側縁が将来の細石刃剥離作業面となる。側縁・下縁調整は剥離作業面稜形成と同じ役割を担うこととなり、細石刃の幅を限定し、下縁まで剥離時の衝撃を抜けやすくするものと考えられる。その結果、縦長で末端が鋭利な細石刃が得られるのであろう。この稜線の長さは細石刃核剥離作業面の長さよりも約1㎝大きく、この差は打面再生・調整によって石核高さが減じてゆくことを見越してのものであろう。なお、母型の幅と厚さは細石刃核のそれらとあまり変わらない。

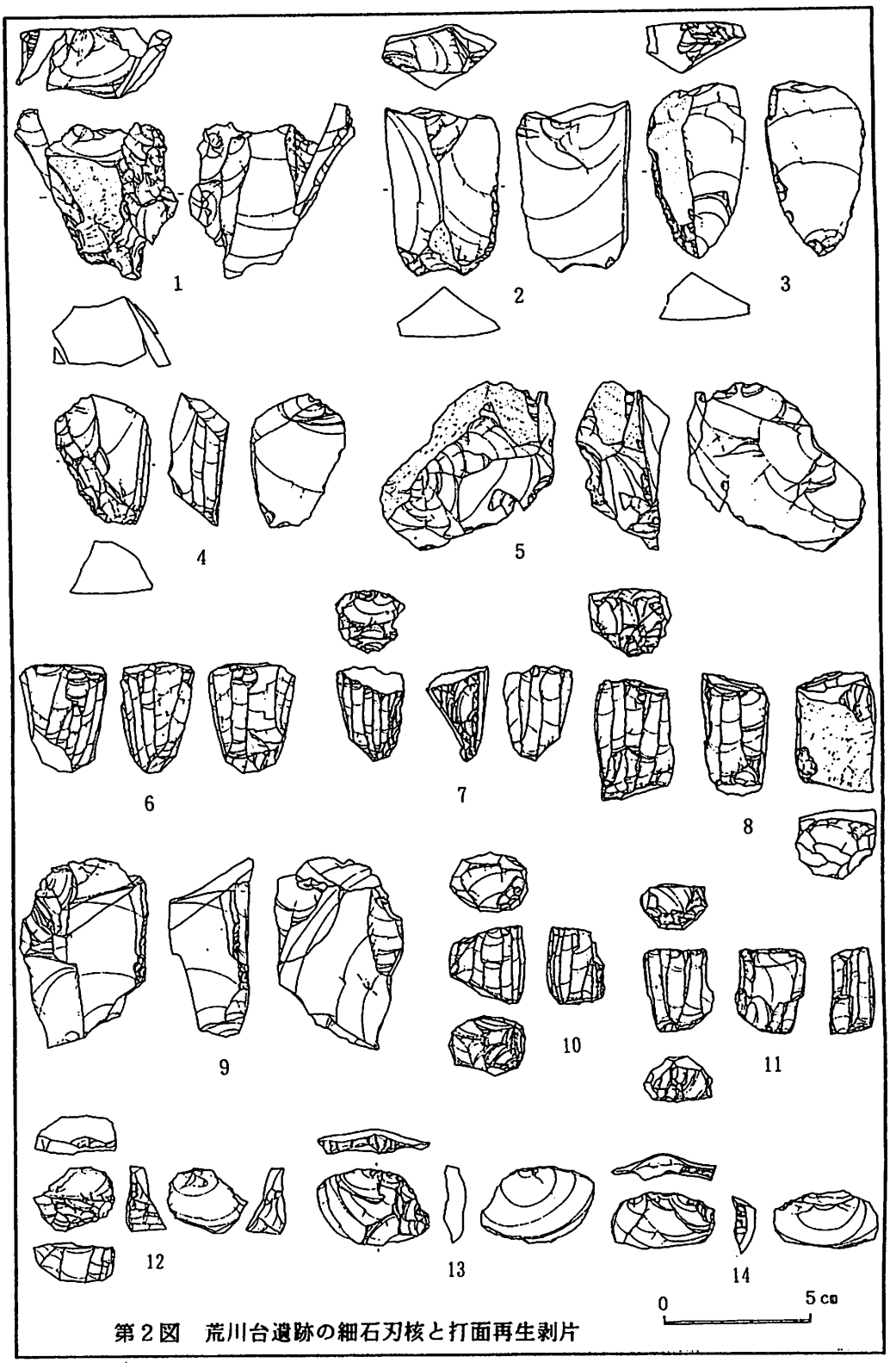
母型Ⅱ・Ⅲ類については、大きさ・形状・調整方法がⅠ類と共通するところがあり、Ⅰ類の変異とみたほうがよいかもしれない。

これら母型作出にあたってどのような剥離手法が係わったのであろうか。調整面をみるとバルブが発達した比較的幅のある剥片が取られていたと理解され、押圧剥離を想定しがたい。直接打法の可能性が高い。剥片生産と同様に直接打法で製作実験を行ってみたが、適当な剥片であればハードハンマーでも十分加工可能であった。

（4）細石刃生産

母型が作出されると打面調整などが行われて細石刃が生産される。結果として細石刃核は変形してゆくので、単設打面のものをⅠ類、両設打面のものをⅡ類として次のように分類した。Ⅰａ類が平面形はU字形、横断面は半円形・三角形・台形、縦断面がノミ状・三角形状のもの（第2図1～4）19点、Ⅰｂ類が平面形は不整形であるが、縦・横断面が三角形のもの（第2図5）2点、Ⅰｃ類が平面形・縦断面形が三角形を呈する角錐状もしくは円錐状のもの（第2図6・7）3点、Ⅰｄ類が角柱もしくは円柱状のもの（第2図8）2点、Ⅱａ類が平面形がU字形に近く、横断面が三角形または半円形のもの（第2図9）2点、Ⅱｂ類が角柱または円柱状のもの（第2図10・11）3点である。

これら石核の形状・大きさ・最終剥離面を検討してみると、多くが何らかの調整を施さないと細石刃生産の続行が困難である、または石核大きさの限界に近づいているといった状態に陥っている。まさに廃棄を思わせる資料が多い。一方、細石刃をあまり剥離していない石核も少数ながら存在する。いずれにしても石核は様々な段階で静止しているといえよう。石核の調整として打面再生・調整、頭部調整は多くの類で共通して行われる。第2図12～14のような再生剥片が取られている。剥離作業面の転移が行われる場合があり、Ⅰａ類・Ⅱａ類では反対側の側縁に転移している。多くの場合、転移の契機は剥離作業面にできたステップフラクチャーなどの高まりである。母型をU字形に仕上げているのはまさ



第２図　荒川台遺跡の細石刃核と打面再生剥片

にここに理由があろう。Ⅱｂ類では打面が転移し、結果として両設打面となるのであるが、剥離作業面も同時に転移しているものも存在する。また打面転移の契機が剥離作業面にできた高まりであるものも存在する。これら細石刃生産過程で側面・下縁の調整が若干行われているようである。

素材の用い方・調整方法・大きさなどの検討を行うことによって石核と母型との関連がおさえられた（第３図）。特に、母型Ⅰ類と石核Ⅰａ類との関連は明確となった。すなわち、母型Ⅰ類は石核Ⅰａ類となり、そして石核Ⅰｃ類になる場合がある。Ⅰａ類の両側縁の剥離が順調に進行すると必然的に石核Ⅰｃ類になることを示している。ただし、石核Ⅰｃ類は母型Ⅲ類からの可能性もあるかもしれない。また、石核Ⅰａ類は石核Ⅱａ・Ⅱｂ類になってゆく可能性もある。特に、石核Ⅱａ類は母型調整方法・形状の点で石核Ⅰａ類と共通性をもつ。そして、石核Ⅰｂ類も石核Ⅰａ類と共通性をもつ。

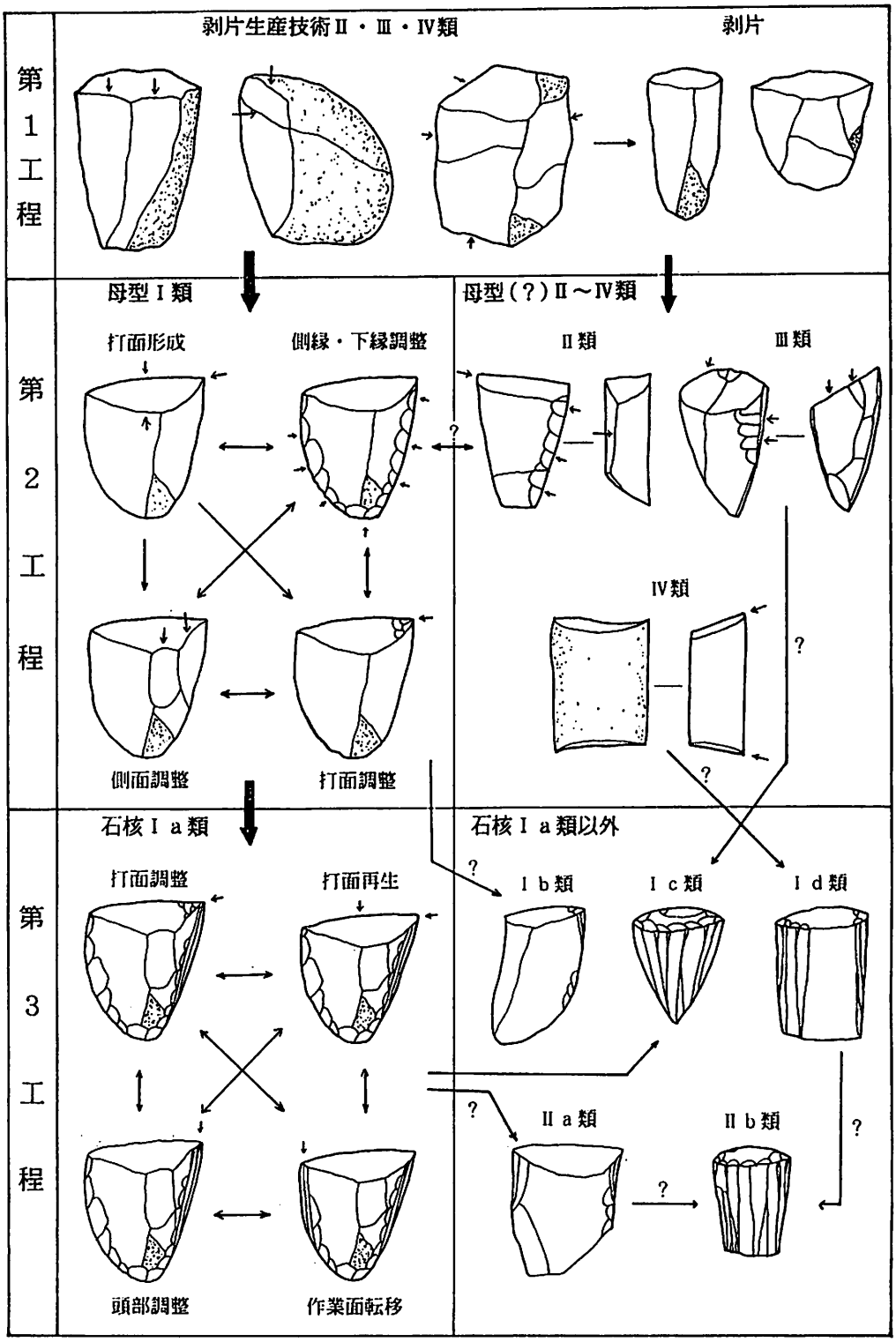
１個の石核から生産される細石刃の数を現状の石核剥離作業面の縮小量（横断面面積）と細石刃の横断面面積をもとに計算すると、石核Ⅰａ類では剥離作業面が１側縁の場合26点、両側縁の場合15点であった。しかし、石核Ⅰａ類がⅠｃ類になる場合には50点は超えるであろう。いずれにしても現状の石核ではかなり変異が大きく、また総体として生産量は著しく高いとは思われないが、これには石材の質と量・製作者の技量が大きく関与しているのであろう。剥離が進んだ小形の石核には良質の頁岩が多い。

（５）細石刃の折断と消費

細石刃は、完形品15点、破損品136点である。Ⅰ層出土資料を加えると合計169点になる。石核１個からの生産量からみると最低でも400点は剥離されたと理解され、かなりの量の細石刃が遺跡の外に持ち出されていると推定される。

136点の破損品は、打面側が残っているもの68点、中間部43点、末端部25点である。それぞれの長さの平均は15.0㎜、12.5㎜、13.9㎜で、完形品は22.7㎜である。この完形品の長さが本遺跡の細石刃完形品の平均長を示していないことは明らかであるが、石核剥離作業面の長さを検討するとおそらくは39㎜に近いものであったと推定される。破損品が多いこと、破損品の長さが近似することからこれらの破損は折断の結果と理解しておきたい。おそらく３分割ないし２分割ではなかろうか。この折断に関して実験を行ってみたが、折断は容易であり、しかもその部位を制御しやすかった。

細石刃が遺跡の外で消費されるものであったとするならば、折断資料ではその数量的関係から末端側が最も多く消費されていたとみることが可能である。末端部は長三角形状を



第3図　荒川台遺跡の細石刃生産工程模式図

呈する場合が多く、シャフトに装着されたとすれば、逆刺に近い役割があったとも推定される。なお、縁辺に微細な剥離が認められるものは少なかった。

2　工程の不連続性

工程を説明してきたが、各作業が時間的に継続して行われていたかを検討しておこう。原石の中には遺跡の下の荒川から採集されたものがあることはほぼ間違いないであろう。しかし遺跡内で原石の状態でとどまっているものは存在しない。遺跡に持ち込まれた後、あまり期間をおかずに剥離されたのであろうか。

次に原石を打ち割り、剥片が取られる。そして多くの剥片が残されている。それらのほとんどは大きさ・形状の点で細石刃核の素材にはなりえないものであるが、しかしわずかにその素材となるような剥片が存在する。石核もほとんどが細石刃核の素材が供給できないほど小さくなっているが、わずかに大形の石核が存在する。それら少数の資料は工程が停止しているとみることが可能である。

第２工程として母型が作り出されるが、この状態のまま停止しているものが数多く存在する。第３工程として細石刃の生産がある。多くの細石刃核はそのままでは継続した剥離は無理な状態であるが、一部には可能なものが存在する。これら母型・石核は平面分布ではかなり狭い範囲に集中している。細石刃はほとんどが遺跡外に持ち出されていると推定されたが、それでも遺跡内にとどまっているものが存在する。

このようにしてみると、ある工程で静止したままのものが存在すると理解され、特に母型の存在が注目される。これを、本遺跡における継続した居住期間での消費のため、あるいは再び戻ってくることを予測して残したものと理解しておきたい。いずれにしても各工程は必ずしも時間的に連続するものではないことがわかる。またその不連続性ゆえに１個の原石加工において複数の人間が関与する可能性が高まり、その場合もあったと想定されよう。仮にそういう場合が存在したとするならば、個人の技術に互換性があったことを示すことになり、個性を超えた共通性をみいだすことが可能となろう。なおこの時間軸上の不連続は集団内・集団間の分配・交換、移動の契機などを理解するうえでも有効な視点となろう。

3　荒川台技法の提唱

以上のように荒川台遺跡における細石刃生産技術を述べてきた。荒川台遺跡では、ある

程度原材料が保障され、また一定量の細石刃が必要とされた中で細石刃生産が行われていたとみられよう。多少の原材料の損失があっても、それほど技術が制約を受ける状況ではなかったと推定され、技法の把握を容易にしていると考えられる。石材が乏しい状況下では技術の活用が臨機的となり、また石材消費率・石核消費率は高まると予想される。

荒川台遺跡で各工程が明確におさえられ、そして数量の中心を占めるものは母型Ⅰ類・石核Ⅰａ類である。そして石核Ⅰａ類は石核Ⅰｃ類になりうる。その他の母型・石核も多くは母型Ⅰ類ないしは石核Ⅰａ類と共通要素をもつ。しかし、母型Ⅰ類・石核Ⅰａ類以外の資料は絶対量が小さく、今後も検討してゆかなければならないだろう。ともあれ、この中心を占める資料は従来の細石刃生産技法と異なる点を有する。すなわち、母型の作出方法と形状である。この点を指標として荒川台技法を提唱することにしたい。ただし、全工程とそれに係わる調整技術をみるならば従来の諸技法と共通性をもつところがあり、まったく無関係に存在するものとは考えられない。また、石核Ⅰａ類と類似した石核が中部高地・関東地方などで散見される。他の技法と関連を有しながら一定の時空間をもった技法として成立するか、今後検討されなければならない。

むすび

荒川台遺跡の資料を用いて、技術の発現の背景を検討しながら技法を設定してみた。細石刃生産の直接の契機、知識としての技術、資源を重要な要素として扱い、それらの関係性の中での技術の把握を目指したものであった。３要素すべてを徹底して検討している訳ではなく、技法と知識としての技術が一致するかは分からないが、実体にせまる有効な方法とみている。また、他の資料と比較するうえでも重要であろう。そして、実際の分析にあたっては技術・調整の役割あるいは生産性は重視されなければならないし、そのための接合作業や模擬実験が必要であることは言うまでもない。

註

（１）　阿部朝衛　1993　「新潟県荒川台遺跡の細石刃生産技術の実態－荒川台技法の提唱－」『法政考古学』第20集　１－22頁　法政考古学会

（２）　阿部朝衛　1992　「新潟県関川村荒川台遺跡第１次調査報告」『法政考古学』第18集　１－136頁　法政考古学会

細石刃剥離に関する実験的研究

国士舘大学イラク古代文化研究所
大沼克彦

細石刃剥離に関連して度重ねて言われる石材の有効利用と有効刃の効率的多量生産（藤本　1990: p.7;　他）については，特に押圧剥離の場合に関して，P.D. Sheets と　G.R. Muto　が実験的に確認している（1972）。

Sheets　らは，　820g の黒曜石石核から 746g にのぼる 83 点の石刃・細石刃を押圧剥離で剥がしたが，それらの鋭利な刃部の総延長は 17.32m にも達し，残核は原重量の６％（50g）にすぎない（1972: pp.632-634）。

この研究からも明らかなように，押圧剥離は極めて効率的な石材利用である。

押圧剥離は，薄い剥片を剥ぐことが出来る，或いは，薄くしか剥がせないことで特徴づけられるだろう。また，規格に沿った同様な剥片を連続的に剥がすことが出来ることも一大特徴であるだろう。

このことは，特に石材に乏しい場所に於いて，押圧剥離が軽量石器である細石刃の効率的連続剥離にとって有利であったことを推定させるものである。

とはいえ，細石刃剥離イコール押圧剥離ではなく（Inizan et al. 1990），細石刃と押圧剥離の関係，とりわけ，押圧剥離の出現に果たした細石刃剥離の役割，或いは逆に，細石刃の出現に果たした押圧剥離の役割を解明するためには，細石刃出土遺跡の年代測定とそれら遺跡の内実と立地環境の研究，そして，何よりも先ず，遺物の分析や復元製作に基づく細石刃剥離方法の研究の蓄積を待たねばならないのである。

このような観点のもと，細石刃剥離に関わったと思われる剥離方法（直接打法，間接打法，押圧剥離）の同定が一つの研究課題として浮上した。

そこで，これら三種の剥離方法で細石刃が剥離され，それら復元剥離細石刃の分析に基づき，異種剥離方法の同定が試みられた。

復元剥離用石材は北海道紋別郡白滝村産黒色黒曜石と山形県寒河江市月布川産珪質頁岩で，剥離具としては，石核荒削り段階使用の石ハンマーを除き，鹿角の各部を使用した。

直接打法には長さ 10cm 程のエゾ鹿角ハンマーを使用した。石核打面の稜線直下をこする所謂“斜角打撃”である。石核打面と剥離面の作る剥離角は 90 度以下，ほぼ 80 度を理想に設定した（図１）。

間接打法には，長さ 8cm　程のエゾ鹿角先パンチを使用した。石核を左手掌に持ち，石

核底部から打面縁辺部に延びた左手親指と人差し指でパンチの先を稜線直下に，打面に対し鋭角に固定しながら，上記鹿角ハンマーでパンチ上面を軽く打撃した。剝離角は直接打法の場合と同様である（図2）。　この剝離方法は久保田正寿氏により考案されたものである。類似の剝離方法は，中米原住民マヤ・Lacandon　部族の石刃製作に於いて観察されている（Clark 1980）。

押圧剝離には，東南アジア原産の鹿角を半割し，長さ約 40cm の先端方向部分を使用した。石核の一側面を岩石の自然の裂け目にあてながら固定し，左手を石核と岩石裂け目上部の両方にかぶせ，鹿角先端を押圧面稜線直下に固定し，角の他端を右胸部を通し体全体の力で押して細石刃を剝離した。剝離角は上記二剝離法の場合と同様である（図3）。なお，必要に応じ珪質頁岩片自然面で押圧面を強く擦ってすべりどめを施したが，このすべりどめについては，剝離直前毎の擦りは石核縁辺の破壊につながるので予め広範囲に擦るほうが良いようである。このすべりどめとしての擦りは，珪質頁岩製石核については，それがガラス質でないので，必ずしも必要でない。 D. Crabtree　は，胸・肩部から押される押圧具使用の細石刃剝離を記述している（1967: pp.68-69）。　同様な（腹部から押される押圧具による）方法は，　J. Pelegrin　によっても採用されている（1984a:　p.120; 1988）。ただ，Crabtree (1967), Pelegrin (1984b: pp.105-116) の両者に於いては，石核固定具は人工のものであって，岩石の自然の裂け目や窪みを利用することはないようである。

より小形の石核については，掌上での固定が単純・容易である（図4）。この場合，掌は軟らかく，細石刃剝離時の石核の動きが不可避である。それ故，動きを止める掌上固定具を必要とする。C. Bergman　は，剝離される細石刃の抜け道用V字形空間を抉り込まれた木製固定具を掌にのせながら，他方の手（右手）の握る角先で細石刃を剝離する。同様な固定具は Pelegrin によっても使用されている（1988）。掌上固定具としては，自然木の分枝部が充分且つ獲得容易であり，過去人にも採用された可能性が高い。掌上細石刃剝離の押圧具は，（胸部から押される）長めの角，或いは，短めの手握り角先のいずれでも良い。

以上述べた三種方法で剝離された黒曜石製細石刃（図5-1~4, 9~14; 図6-1~8, 13~14）は，各グループの中から 100　点づつ選別され，打圧面（打面・押圧面）形態と計測値的特徴に関して分析された。

分析の結果，下記四点が推定された。1）打圧面形は，ハンマーや押圧具が剝離の瞬間

に細石刃腹面に顕著な打圧点（打点・押圧点）を残すか否かにより，（突出した打圧点の存在による）角を持つ三角や菱形などの打圧面，及び，明瞭な打圧点を欠き，角を持たないなめらかな打圧面，の二つに大別される（図7）。この打圧面形は技術的な優劣，或いは個人癖を超越する割れ力学的特徴を示すと思われ，直接打法を間接打法・押圧剝離の連合グループから分離する。2）最大長／最大幅の比率は直接・間接打法の連合グループと押圧剝離グループの分離に有効である。3）最大厚／打圧面最大厚は直接打法と押圧剝離の二グループの分離に有効である。4）最大幅／打圧面最大厚は直接打法と押圧剝離の二グループの分離に有効である（大沼・久保田 1992)。

以上の有効性を実証するために，第三者による同様な復元製作の助けを必要とした。そこで，筆者は，同様な方法による細石刃剝離を久保田氏に依頼し，同氏剝離による細石刃を“テスト”によってグループ同定した。

久保田氏製作による三グループ（A，B，C） の黒曜石製細石刃のうち，グループAは，打圧面形から直接打法によるものと推定され，正解を得た。グループBとグループCについては，上記四基準の総合的考慮により，グループBは間接打法，グループCは押圧剝離によるものと推定され，それぞれ正解を得た（大沼・久保田 1992)。

次に，北海道白滝服部台遺跡出土の細石刃（杉原・戸沢 1975）を分析した。

分析サンプルは，明治大学考古学博物館保管の黒色黒曜石製細石刃のうちの 50 点である。

白滝服部台遺跡出土細石刃の分析結果をそれまでの分析結果と比較し検討し，同遺跡出土細石刃が押圧剝離によって剝離されたという結論に到達した（大沼・久保田 1992)（表1）（図8，図9，図10)。

非黒曜石製の細石刃に関しては，米国・シカゴ大学オリエント研究所保管の，イラク先土器新石器遺跡・カリム・シャヒル（100 点），ムレファート（14点）両遺跡出土のフリント製細石刃を分析した。

カリム・シャヒル遺跡は 1951 年にシカゴ大学オリエント研究所により発掘され，紀元前 8,900 年 から 8,600 年に年代づけられる（Howe 1983）単一の居住面から，多量の細石刃や抉り入り石器，刃潰し石刃，エンド・スクレイパー，サイド・スクレイパーなどの石器が出土している。

ムレファート遺跡は，同じくシカゴ大学オリエント研究所によって 1954 年に発掘された。カリム・シャヒル遺跡のもの同様に紀元前 8,900 年 から 8,600 年に年代づけら

表1　細石刃の分析結果　※：白滝遺跡合計遺跡出土細石刃の分析結果

1）打圧面形

	三角形・菱形打圧面	なめらかな打圧面
直接打法	32.1%（大沼）：22.9%（久保田・A）	67.9%（大沼）：77.1%（久保田・A）
間接打法	79.8%（大沼）：74.4%（久保田・B）	20.2%（大沼）：25.6%（久保田・B）
押圧剝離	56.1%（大沼）：59.5%（久保田・C）	43.9%（大沼）：40.5%（久保田・C）
	※ 65.1%	※ 34.9%

2）最大長／最大幅

	大沼　平均値：標準偏差	久保田　平均値：標準偏差
直接打法	3.51：1.07	(A) 4.06：0.96
間接打法	3.31：0.96	(B) 3.90：0.85
押圧剝離	5.08：1.57	(C) 4.21：0.86
	※ 5.33：1.57	

3）最大厚／打圧面最大厚

	大沼　平均値：標準偏差	久保田　平均値：標準偏差
直接打法	2.19：0.74	(A) 2.74：1.41
押圧剝離	1.17：0.40	(C) 1.35：0.52
	※ 1.31：0.38	
間接打法	1.72：0.56	(B) 1.90：0.98

4）最大幅／打圧面最大厚

	大沼　平均値：標準偏差	久保田　平均値：標準偏差
直接打法	10.11：4.08	(A)10.94：4.94
押圧剝離	5.36：1.86	(C) 6.39：1.69
	※ 5.58：2.03	
間接打法	6.80：2.51	(B) 7.13：2.78

れている（Howe 1983）石器は，細石刃，抉り入り石器，スクレイパー，そして，錐形石器などから成る（Dittemore 1983）。

カリム・シャヒル，ムレファート両遺跡の細石刃と細石核は，ともに，J. Tixier が記述した押圧剝離の特徴（1984: p.66）を典型的に示している。即ち，極めて規則的で一貫した薄さ，直線的且つ平行した稜線と側辺，滑らかな腹面，狭小な打圧面，短いながら目立つバルブなどの特徴を有する細石刃，そして，規則的な剝離痕，及び，薄身で平らな細石刃の剝離で残された目立つネガティブ・バルブを持つ石核である。

これら両遺跡の細石刃の分析に用いられた項目は，打圧面形，明瞭な打圧点の有無，打圧面最大厚，細石刃自体の最大長，最大幅，及び最大厚，そして，最大長／最大幅，最大厚／打圧面最大厚，及び，最大幅／打圧面最大厚の比率である。

分析の結果を，日本のフリント状岩石とも言うべき良質珪質頁岩（山形県寒河江市月布川産）で復元剝離していた細石刃（図５-5~8，15；図６-9~12，15）の分析結果と比較した。

打圧面の形は，両遺跡出土の細石刃を，間接打法と押圧剝離で復元剝離された珪質頁岩製細石刃グループに近づけた（表２）。

また，明瞭な打圧点の有無は，両遺跡の細石刃を，直接打法と押圧剝離で復元剝離された珪質頁岩製グループに近づけた（表３）。

表２　珪質頁岩製復元細石刃とカリム・シャヒル，ムレファート両遺跡出土細石刃の打圧面形による分離

打圧面形	三角形・菱形打圧面	なめらかな打圧面
直接打法	40.2%	59.8%
ムレファート出土細石刃	72.7%	27.3%
カリム・シャヒル出土細石刃	74.4%	25.6%
押圧剝離	77.1%	22.9%
間接打法	87.0%	13.0%

表3　珪質頁岩製復元細石刃とカリム・シャヒル，ムレファート両遺跡出土細石刃の打圧点による分離

打圧点	明瞭	不明瞭
カリム・シャヒル出土細石刃	30.0%	70.0%
直接打法	31.0%	69.0%
ムレファート出土細石刃	35.7%	64.3%
押圧剝離	39.0%	61.0%
間接打法	52.0%	48.0%

それ故，これら二つの非計測値的分析結果は，カリム・シャヒル，ムレファート両遺跡出土の細石刃が押圧剝離で剝離されたという結論をもたらすのである。

しかし，これら両遺跡の細石刃は，黒曜石製復元細石刃の分析に於いて信頼すべき同定基準と考えられた最大厚／打圧面最大厚の比率に於いて，押圧剝離による珪質頁岩製復元細石刃グループに近づかない。

その理由として考えられるのは，両遺跡の先史人と筆者の間に存在した押圧剝離方法の相違である。即ち，両遺跡出土細石刃の打圧面は極めて狭小で，しかも，細石刃自体は筆者の復元物よりもむしろ厚身であるが，これは，北イラクの先史人が，石核の打圧面を極めて孤立・突出するように準備したことを示しているのである。

細石刃自体の最大厚という計測値的属性は，打圧面厚に比例し，少なくとも頁岩・フリント製細石刃については，信頼できる同定基準であると思われる。

この計測値に関して押圧剝離細石刃グループに見られる他よりも小さい変異幅（表4）は，押圧剝離による細石刃の厚さが直接打法や間接打法による細石刃のそれよりも一貫することを示している。

このことは，更に，最大厚の変異幅が押圧剝離細石刃グループのそれよりも小さいカリム・シャヒル，ムレファート両遺跡の細石刃が押圧剝離で剝離されたという結論をもたらすのである。

表4　珪質頁岩製復元細石刃とカリム・シャヒル，ムレファート両遺跡出土細石刃の最大厚による分離

最大厚	平均値	標準偏差
押圧剝離	1.8mm	0.5
ムレファート出土細石刃	2.3mm	0.5
カリム・シャヒル出土細石刃	2.3mm	0.6
直接打法	2.9mm	1.0
間接打法	3.1mm	1.1

以上，復元製作細石刃の分析，分析結果に基づく異種剝離方法の“テスト”同定，そして，分析，及び“テスト”で有効と判断された同定基準の考古遺物への応用の概略を紹介した。

我が国に於いては，吉崎昌一が湧別技法工程の記述の中で，同技法の細石刃剝離が鹿角製道具を用いた押圧剝離であったと述べている（1961：pp.15-19）。また，麻生優は押圧剝離による細石刃剝離を言及している（1965：p.168)。

しかしながら，松沢亜生は，細石刃が（直接的，或いは間接的な）打撃剝離と押圧剝離のいずれによっても剝離され得ることを述べている（1988：p.14）。

過去人の押圧剝離の採用・不採用については，同剝離に適した石材の有無，或いは，剝離具となり得る素材の有無という，極めて根源的な問題が絡んでいる。それ故，細石刃剝離イコール押圧剝離という直線的図式が成立しないことは言うまでもないだろう。

本研究の遂行にあたり，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター・松沢亜生先生に有益な教示を多々賜わりました。東京都青梅市役所・久保田正寿氏には“テスト”用黒曜石製細石刃製作の労を賜わりました。明治大学文学部考古学研究室・大塚初重教授，戸沢充則教授，同大学考古学博物館・熊野正也，黒沢浩の諸先生には白滝服部台出土資料の計測とその成果の公表に関する便宜を賜わりました。シカゴ大学オリエント研究所の McGuire

Gibson 教授, Robert J. Braidwood 教授, Linda S. Braidwood 教授, 及び, Raymond D. Tindel 博士の諸先生には, カリム・シャヒル, ムレファート両遺跡出土細石刃分析に関わる便宜を賜わりました。以上, 末尾ながら, 記して厚く御礼申し上げます。

文 献

麻生 優 (1965) 4. 細石器文化, 『日本の考古学 I 先土器時代』, 杉原荘介 編, 河出書房新社, 161-172頁。

Clark, J.E. (1980) Invitation Announcement to the Conference Obsidian in MesoAmerica, *Flintknappers' Exchange*, Vol.3, No.3, p.1 - Fig.1.

Crabtree, D.E. (1967) Notes on Experiments in Flintknapping: 4: Tools Used for Making Flaked Stone Artifacts, *Tebiwa*, Vol.10, No.1, pp.60-73.

Dittemore, M. (1983) 21: The Soundings at M'lefaat, *Prehistoric Archeology along the Zagros Flanks*, edited by L.S. Braidwood, R.J. Braidwood, B. Howe, C.A. Reed and P.J. Watson, Vol.105 of the University of Chicago Oriental Institute Publications, Chicago, pp.671-692.

藤本 強 (1990) 細石器 (1) - 細石器のもつ意味・ソ連極東地域と北海道出土資料の比較 -, 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 9, 1-23頁。

Howe, B. (1983) 1: Karim Shahir, *Prehistoric Archeology along the Zagros Flanks*, edited by L.S. Braidwood, R.J. Braidwood, B. Howe, C.A. Reed and P.J. Watson, Vol.105 of the University of Chicago Oriental Institute Publications, Chicago, pp.23-154.

Inizan, M.-L., Lechevallier, M. and P. Plumet (1990) Pressure Blade Débitage. Its Origin in the Paleolithic of Northern Asia and its Diffusion, *International Symposium "Chronostratigraphy of Paleolithic of North, Central, East Asia and America (the Paleoecological aspect)"*, July 23 - August 11, Novosibirsk, U.S.S.R., pp.1-7.

松沢 亜生 (1988) I. 器具の製作と用途 1 - 細石器の製作技術, 『日本考古学を学ぶ (2) 原始古代の生産と生活』, 大塚初重・戸沢充則・佐原 真 編, 有斐閣選書 841, 2-18頁。

大沼 克彦・久保田 正寿 (1992) 石器製作技術の復元的研究: 細石刃原理方法の再定義, 『ラ-フィダ-ン』 13, 1-26頁。

Pelegrin, J. (1984a) Débitage par pression sur silex: nouvelles expérimentations, *Préhistoire de la pierre taillée: 2: économie du*

débitage laminaire, C.R.E.P., Paris, pp.117-127.

———— (1984b) Systèmes expérimentaux d'immobilisation du nucléus pour le débitage par pression, *Préhistoire de la pierre taillée: 2: économie du débitage laminaire*, C.R.E.P., Paris, pp.105-116.

———— (1988) Débitage expérimental par pression "Du plus petit au plus grand", *Technologie préhistorique: Notes et monographies techniques No.25*, C.N.R.S., Paris, pp.37-53.

Sheets, P.D. and G.R. Muto (1972) Pressure Blades and Total Cutting Edge: An Experiment in Lithic Technology, *Science*, Vol.175, pp.632-634.

杉原 荘介・戸沢 充則 (1975)『北海道白滝遺跡群における旧石器文化』(明治大学文学部研究報告:考古学・第五冊), 明治大学文学部考古学研究室。

Tixier, J. (1984) Le débitage par pression, *Préhistoire de la pierre taillée: 2: économie du débitage laminaire*, C.R.E.P., Paris, pp.57-70.

吉崎 昌一 (1961) 白滝遺跡と北海道の無土器文化,『民族学研究』26-1, 13-23頁。

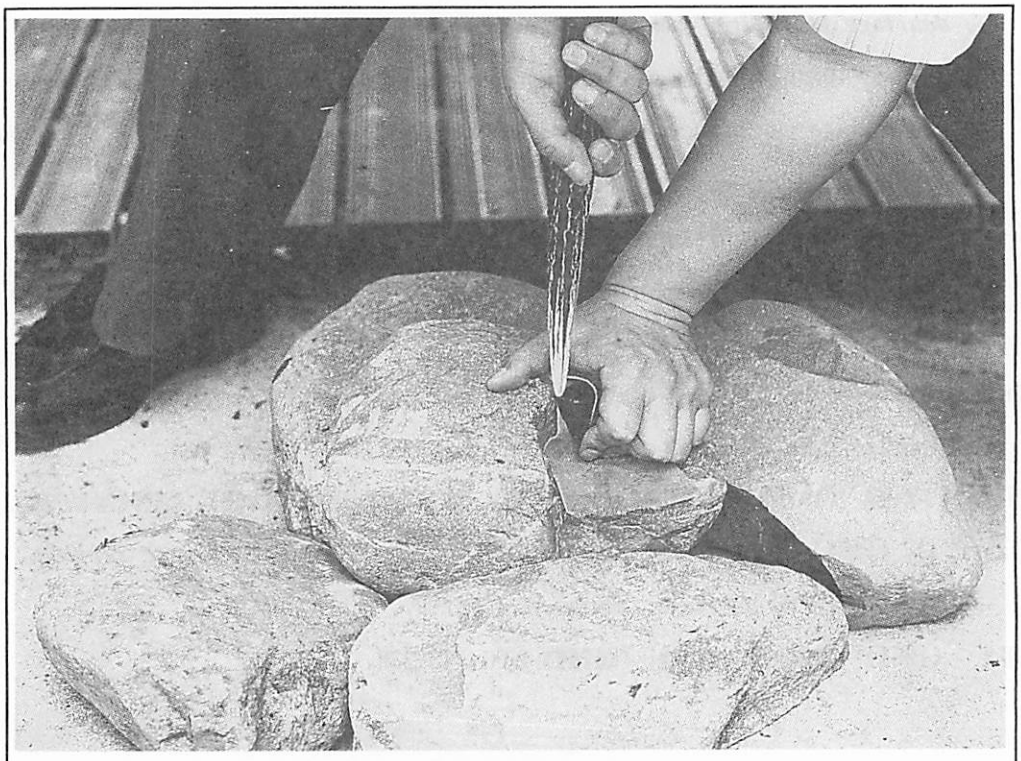


図3　押圧剝離による黒曜石刃剝離

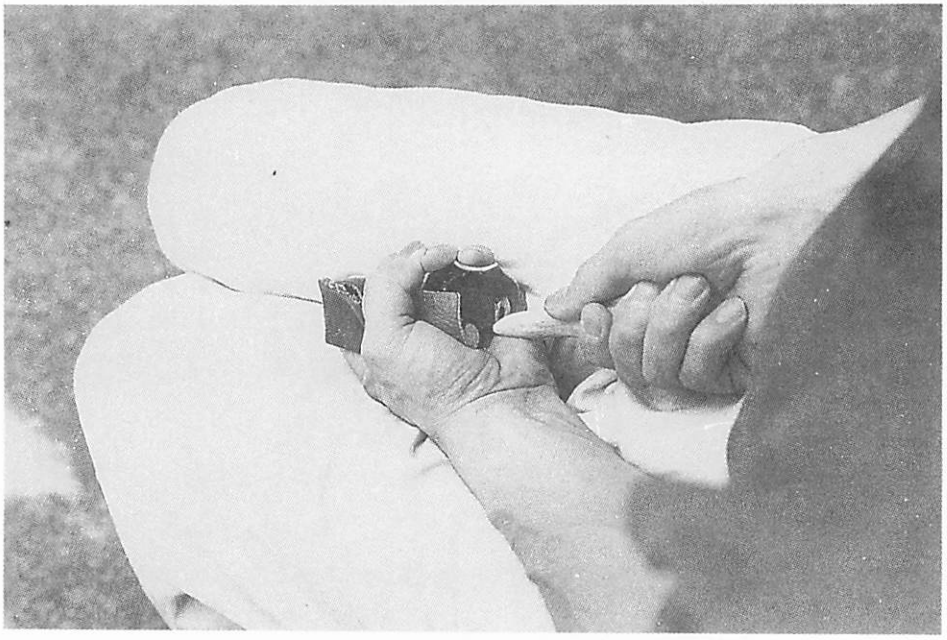


図4　掌上押圧剝離による黒曜石刃剝離

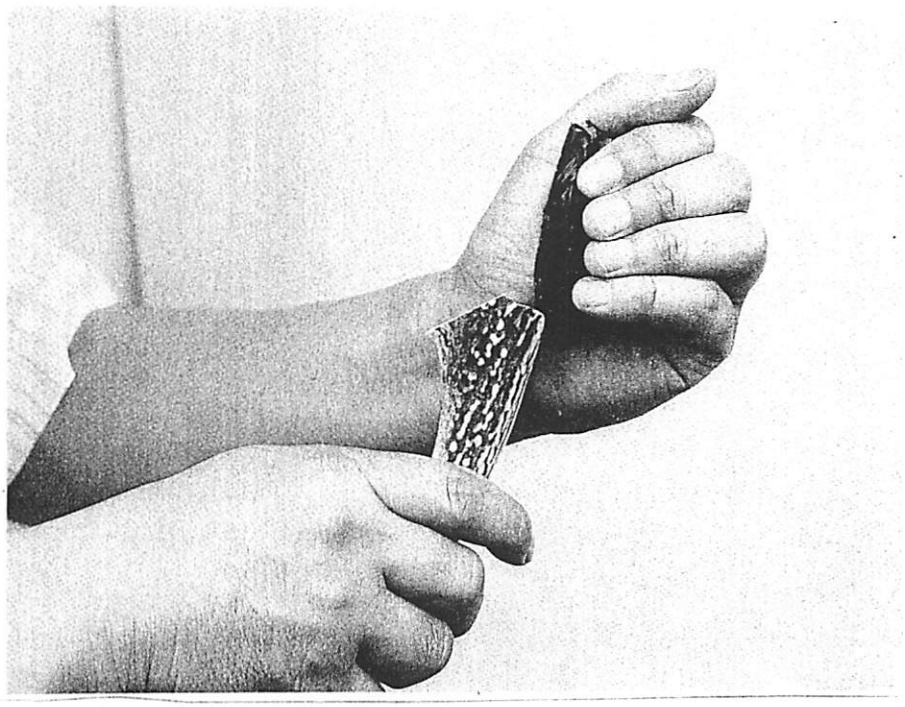


図１　直接打法による細石刃剥離

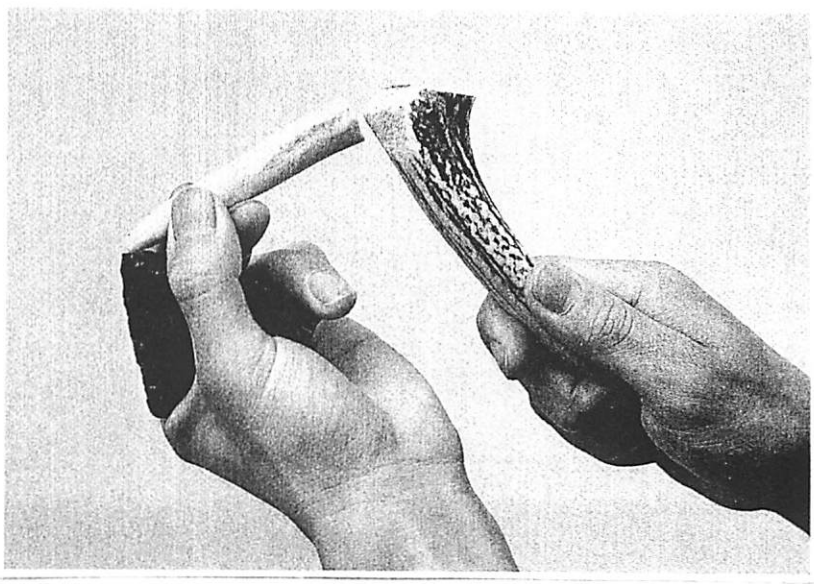


図２　間接打法による細石刃剥離

第Ⅱ分冊　１８０頁　大沼克彦付図

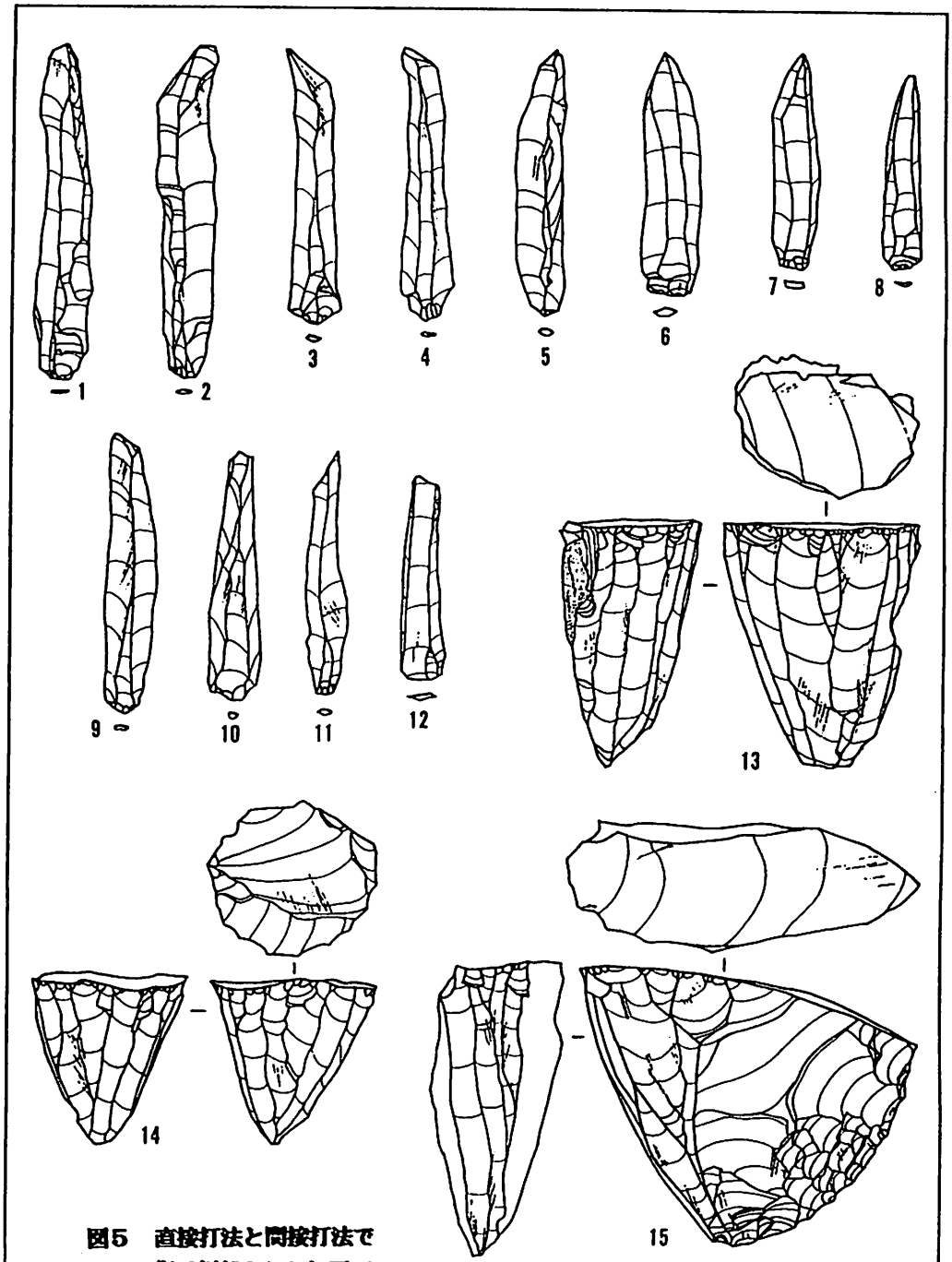


図5　直接打法と間接打法で復元剥離された細石刃

1～4，13：直接打法；5～12，14～15：間接打法
（1～4，9～14：黒曜石製；　5～8，15：頁岩製）

0　5cm

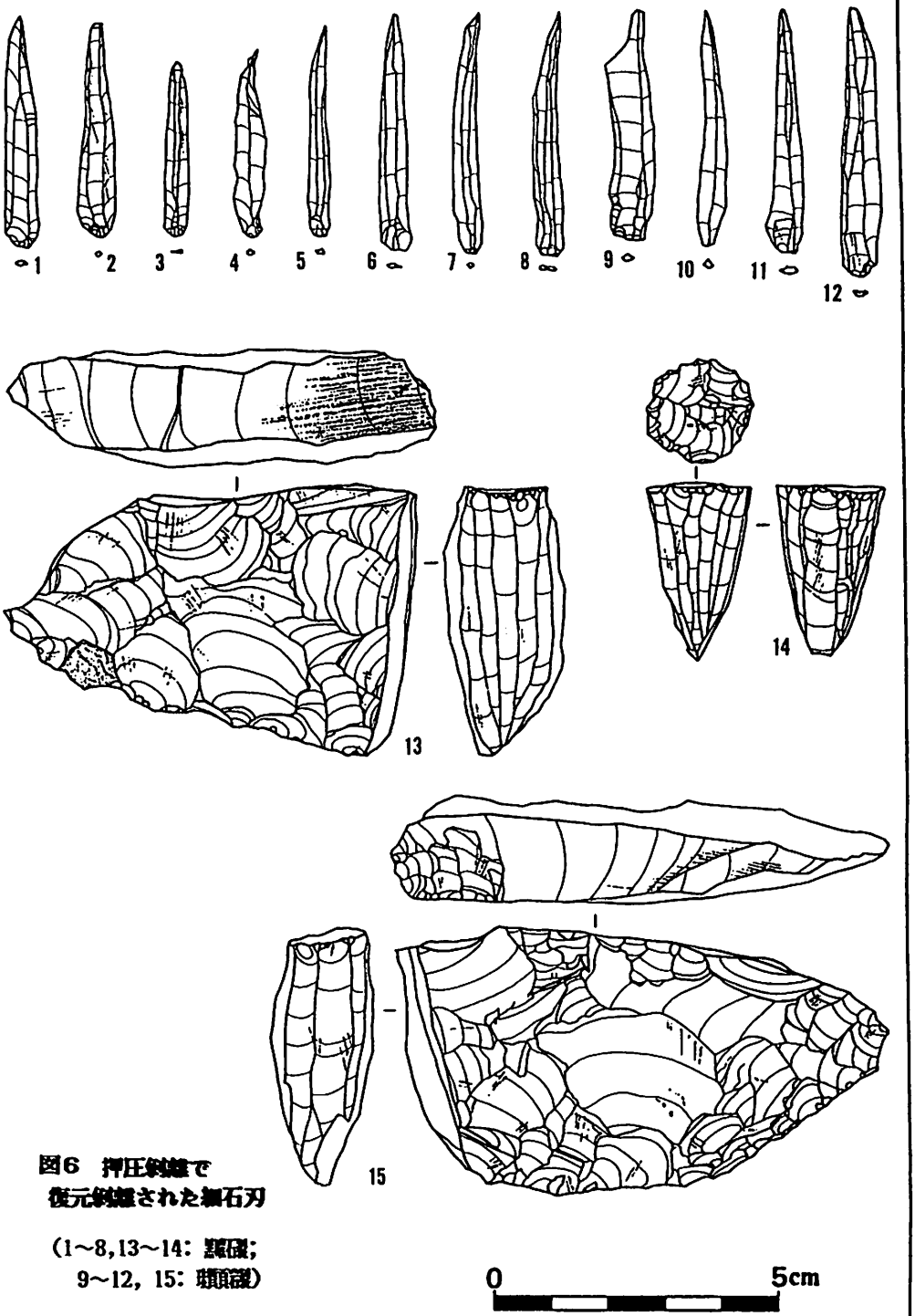


図6　押圧剥離で
復元剥離された細石刃

(1~8,13~14: 黒曜;
9~12, 15: 頁岩)

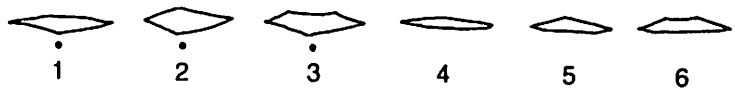


図7　打圧面の形態

1～3：打圧点（・）の存在による三角形，菱形などの打圧面；
4～6：打圧点が不明瞭ななめらかな打圧面

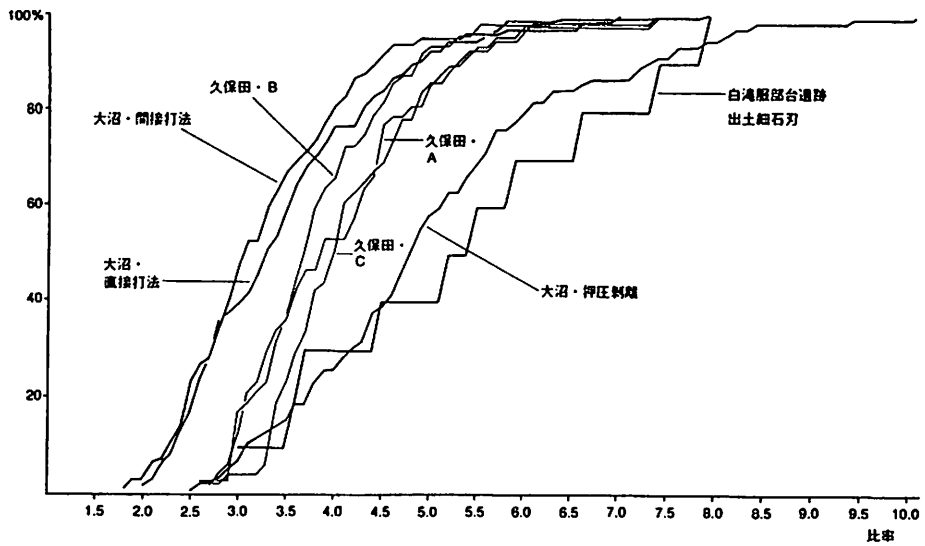


図8　最大長／最大幅の比率を示す集積グラフ

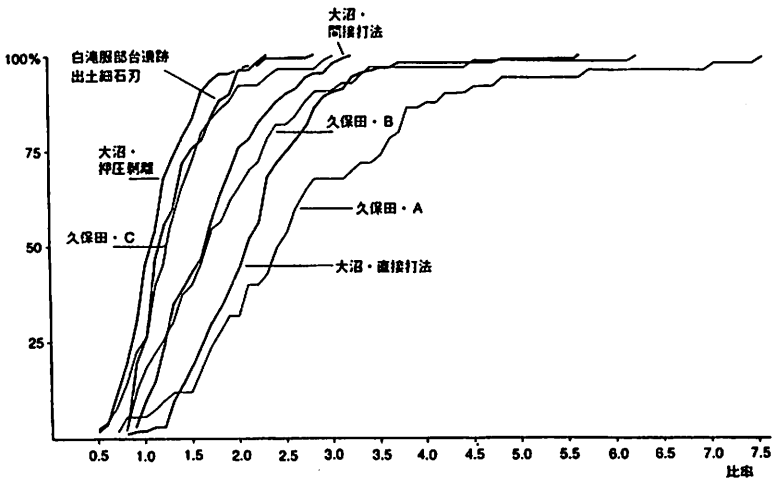


図9　最大厚／打圧面最大厚の比率を示す集積グラフ

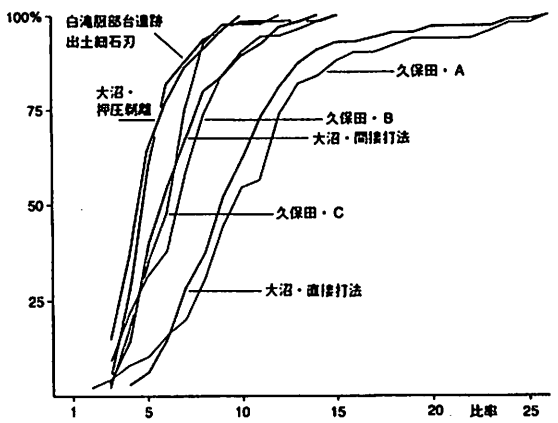


図10　最大幅／打圧面最大厚の比率を示す集積グラフ

細石刃文化と石材環境

栗島義明

1、はじめに

今日の旧石器研究にあっては、型式・技術研究に立脚した編年的そして系統的研究が主流である。細石刃石器群の研究もこうした展開を通して推進されてきた学史的な事実もある。そうしたなかで細石刃そのものを主対象として分析した織笠氏のユニークな研究がある。また、今日では石器群の残された姿を社会経済学的な側面から解釈した梶原氏等による斬新な研究成果も提出されている。この両氏の提言を基礎として咀嚼したうえで、本稿では稜柱形の細石刃核を含む石器群に対し、原産地域と周辺地域での細石刃核の法量(作業面長・重量)及び細石刃の大きさ等を検討俎上に置き、石材の獲得難易度と石器群との対応及び影響関係等について検討してみたい。そうしたうえで細石器文化の地域的様相の理解が得られたならば、と考えている。なお前提的に資料を黒曜石使用のに限定し、また地域的にも南関東に対象を絞らざるを得ない点のあることを付言しておきたい。

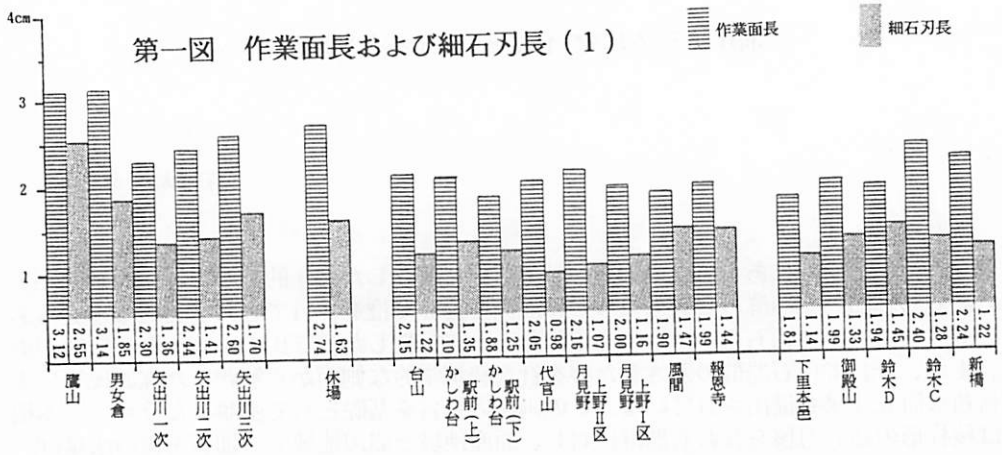
2、作業面及び細石刃長

言うまでもなく遺跡から出土する細石刃核は、既に細石刃剥離作業を終了して残核として打ち捨てられたものである。それは細石刃剥離作業の進展に伴い石核法量が減少し、それ以上の剥離作業が望めなくなった状態を示すものと考えることができよう。しかし、遺跡から出土する細石刃核を見ると、大形のものから、まさに残核と言うべき小形のものまで多様である。細石刃剥離作業の終了は、地域や石質等の様々な要因によって差異を生じたものであったのかも知れないが、その基本的な規制は石材獲得難易度によって規定されていたものとの印象が強い。そこで原産地の確定している黒曜石製に限定して、その法量、とりわけ細石刃剥離作業面長を比較することによって、石材獲得難易度が石器群に及ぼす影響についてのアプローチをおこなって行きたい。

まず黒曜石原産地に立地する男女倉遺跡H地点と鷹山遺跡第Ⅰ地点の細石刃核を見てみよう。細石刃剥離作業面長の平均は、それぞれ3.14cm、3.12cmと近似した値を示している。これと呼応するように鷹山遺跡第Ⅰ地点の細石刃は、平均2.55cmと他の遺跡のそれと比べて大形の傾向が指摘される。当然とも解されようが、長い作業面を持つ細石刃核からは長い細石刃が剥離されていたのである。

次に研究史上、著名な矢出川遺跡の資料を検討してみよう。三次にわたる調査資料のそれぞれを計測すると、細石刃核作業面長については2.6cm(一次)、2.3cm(二次)、2.44cm(三次)、一方、細石刃の平均長について見ると1.7cm(一次)、1.36cm(二次)、1.41cm(三次)とやはり類似した数値が得られている。いずれも同一遺跡の資料でうあり、当然と言えば当然ではあろうが、原産地の鷹山遺跡などと比べると細石刃石核の作業面長で約7~8mmの減少となっている点は興味深い。

さて、より原産地から離れた相模野台地を眺めてみよう。まず細石刃核長を見てみると長さが2cmを越えるものと、それを下回るものとが存在する。前者として台山遺跡、かしわ台駅前遺跡(Ⅱ)、代官山遺跡、上野遺跡第2区などの諸遺跡が挙げられ、後者としてはかしわ台駅前遺跡(Ⅰ)、上野遺跡第1区、風間遺跡、報恩寺遺跡がある。しかし、いずれも2cmのラインを上下する数値を示し、最も長い作業面は台山遺跡の2.15cm、最も短いのがかしわ台駅前遺跡(Ⅰ)のそれで1.88cmを計測し、その振幅は僅かに3mmの中に収まってしまうのを知る。相模野台地という空間間にあっては、極めて均一的な姿を示すものとして理解することができよう。細石刃長についてはどうであろうか。最長のものが風間遺跡の1.47



cmであり、最短のものは代官山遺跡の0.98cmで、平均は1.2cm前後の数値を示している。

武蔵野台地ではどうであろうか。ここでは細石器文化へと至って遺跡数が極度な減少を示し、資料的に相模野と比肩し得るものではないが、各遺跡から出土している資料の作業面長／細石刃長をそれぞれ示すと次のようになる。下里本邑遺跡（1.81cm/1,14cm）、御殿山遺跡（1.99cm／1.33cm）、新橋遺跡（2,24cm／1.22cm）、鈴木遺跡Loc, D（1.94cm／1.45cm）。ここでもやはり細石刃核の作業面長は2cm前後に纏まり、細石刃も1.2cmを若干上回る数値が得られている。資料的には少ないものの、ここで得られた双方の数値は基本的に相模野台地と同様な傾向を示していると言えようか。

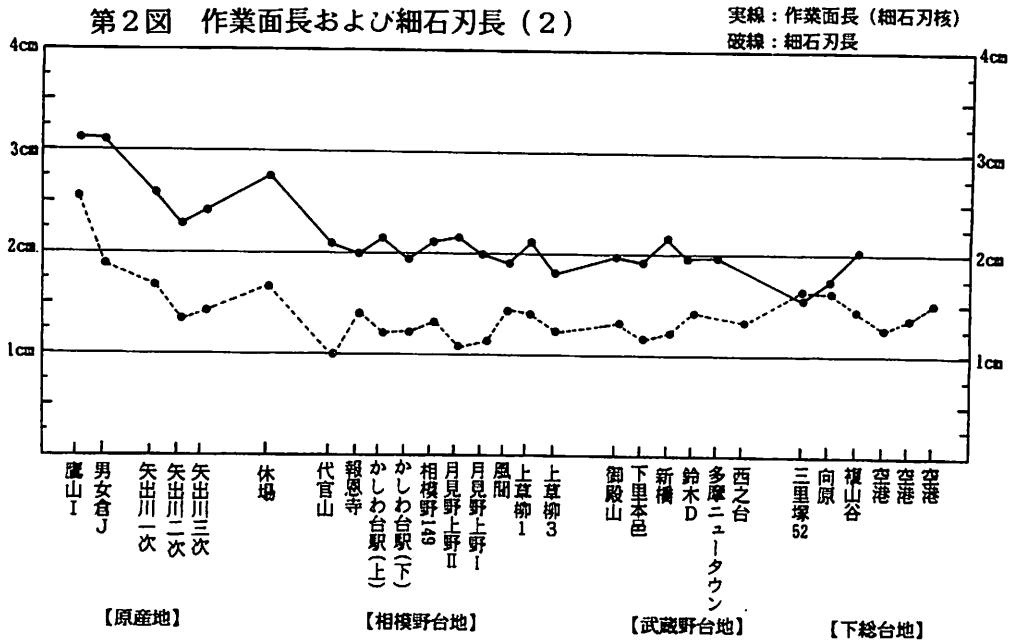
下総台地では一層、細石器文化の遺跡が少なく、しかも黒曜石製のものは極端に少なく、僅かに三里塚No52遺跡（1.56cm／1.65cm）、向原遺跡（1.74cm／1.66cm）の二遺跡である。また、空港No 遺跡では多数の細石刃核と細石刃の出土が報じられているが、前者の数値は明らかでなく、細石刃のみの数値が一部のみ公表されている。それによれば片側に使用痕のあるもの（1.25cm）、両側に使用痕のあるもの（1.35cm）1.55cm。である。

3、地域的な偏在

さて、各地域毎の細石刃核作業面長を概略的に述べると、鷹山、男女倉といった原産地周辺の遺跡では3cmを若干上回り、そこをやや離れた矢出川遺跡は2.5cm前後、相模野・武蔵野両台地では2cm前後、そして下総台地では2cmを下回る数値が平均的に得られている。それぞれの地域での遺跡間での差異は、非常に少なく極めて均一的と看做すことができる。こうした作業面長と呼応するように細石刃長の平均値も原産地からの距離に比例して小さな値を示すようになる。それぞれを比較すると原産地地域で2cmを上回り、矢出川遺跡では1.5cm前後、武蔵野・相模野両台地では1.25cmとなる。これに対して下総台地では1.5cm、空港のまとまった資料でも1.25cmを上回り、距離的に近い武蔵野や相模野の資料と同等かそれ以上の大きさを有している。このように下総台地の資料に関しては、細石刃核に於ける作業面長と細石刃長とがほぼ同様な計測値を示しており、極めて興味深い点として注目しておく必要があろう。原産地や武蔵野・相模野両台地での資料では、作業面長は常に細石刃長を7～10mm上回る値が得られているからである。両者が同様な数値を示すのは下総台地に限られており、その要因については後述することとして、この点は一つの地域的特徴として認識しておく必要があろう。

この点に関連して、細石刃の完形例についての数値を見てみよう。やはり原産地地域の遺跡から出土した細石刃は大形である。事実、鷹山遺跡では2.7cm程の平均値を有している。しかし、それを上回る数値を示す遺跡がある。静岡県の休場遺跡である。休場遺跡出土資料は、例えば細石刃核作業面長・細石刃長においてもそれぞれ2.74cm／1.63cmという、原産地遺跡とほぼ同様な大きさを保有した資料が存在していたが、完形の細石刃にしても

第２図　作業面長および細石刃長（２）

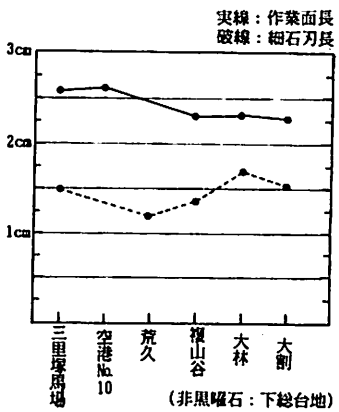


2.8cmという計測遺跡の中で最も高い平均値を誇っている。この休場遺跡に関しては、伊豆産の黒曜石との関連がこうした数値に現れている可能性があろう。

さて、原産地から20km程の距離にある矢出川遺跡では完形の細石刃の平均値は2.1cm、相模野・武蔵野両台地の遺跡でも同様に2.0mを若干上回る数値を示している。この数値も作業面長や細石刃平均長と同様に、矢出川遺跡での数値は相模野・武蔵野両台地の遺跡で得られたデータの振幅の内にあると判断して大過ない。これに対して下総台地での資料は、データが少ないものの、完形細石刃の平均長は1.7cm程であり、明らかに前者の遺跡群と比較して一ランク下回っていることを明示している。下総台地の細石刃資料が、完形資料とそれ以外の資料とを比較するとほぼ同様な数値を示す、即ち他の地域と比較して細石刃の完形品が総体的に小形である点を注視しておく必要があろう。他の遺跡では必ず前者が後者の数値を上回っているからである。こうした相違は何を原因として生じたものなのであろうか。

３、細石刃の分割

改めて言うまでもなく、細石刃は完形例よりもその上下のいずれか、或は両方に折断面を有したものが大半を占めている。この点を評価して細石刃が意識的に折断されたことを指摘されたのが杉原氏であった。各遺跡で検出された細石刃を部位別に、その内訳を示して見てみよう。遺跡を単位として各部位が偏在することが一目瞭然である。ただしこの点は各部位の認識差に起因する点も否定できまい。事実、中間部を除いた頭部、或は末端部といった部位呼称は、実際の資料分類に際して多くの矛盾を内蔵していよう。ましてそれが頭部・中間部・末端部というように基本的に細石刃を三部位に分割したという意味を内包しかねない点、特に矛盾感じるのは著者一人ではあるまい。とりあえず、ここではこの点への論

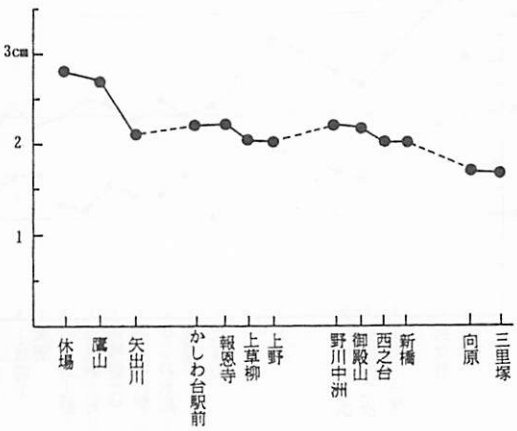


第３図　作業面長および細石刃長（３）

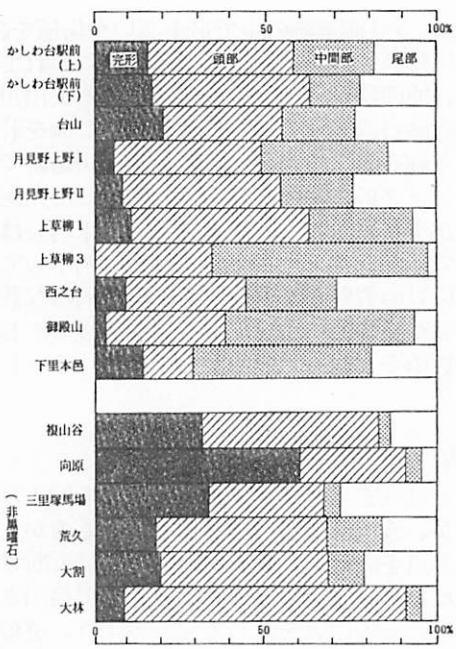
及は避けて、敢えて報告書に則って分類をおこなっている。

確かに遺跡単位に部位別の偏在が顕著である。かしわ台遺跡のように頭部が安定して認められる遺跡が存在する一方、御殿山遺跡・下里本邑遺跡では中間部がほぼ半数を占めている。だが、平均すると頭部・中間間が主体を占め、末端部そして完形がそれに続いた割合を有している点は一致した傾向と言えよう。ところが下総台地での様相は相違している。覆山谷遺跡・向原遺跡の細石刃の部位別の割合を見ると、他地域の遺跡に比して完形例の割合が非常に高いという特徴がある。頭部の多い点も特徴として認識できるであろう。もう一つの際立った相違点として中間部がこれらの遺跡では非常に少ない。武蔵野台地等の遺跡と比較すると四分の一、或は五分の一程度に留どまってしまう。この点は資料的制約の感が否めないが、こうした傾向が黒曜石製の細石刃に限定されるものではなく、頁岩やチャートを石材とした一群に於いても同様に看取される点、地域的な傾向として認識される蓋然性がたかい。或は細石刃の利用、仮に分割使用したものであるならば、その分割自体が相模野・武蔵野両台地と下総台地とでは相違していた可能性も存在するのである。

さて、この下総台地における特徴を纏めてみるならば、細石刃の中間部の希少性と完形品及び頭部部位の安定にあると言えようか。こうした特徴は逆説的には、中間部や末端部が少ないという点を示唆している。細石刃の中間部位とは、言うまでもなく細石刃の打瘤部分と末端の除去がなされた、その上下が折断面によって構成されたものであり、折断という行為によって素材である完形細石刃の長さは著しく減じられることとなる。中間部の確保に際しては、そうした完形細石刃の上下端部の除去がなされなければならない。中間部に限らず細石刃が一定の長さ(約1.25cm)を有していた、しかも地域的な越えて一般的傾向として同様な数値を有していることは、こうした一定の長さがその装着や機能を考えた場合、必要不可欠なものであったことを示唆して



第4図　細石刃（完形品）の長さ



第5図細石刃の部位別出現率

いる蓋然性がたかい。こうした点を基本的に了承した上で、改めて下総台地の様相を考えれば、一定の理解が得られてこよう。つまり石核法量が他に比べて1ランク下回る下総台地にあっては、結果的に見た場合には他地域よりも総体的に短い細石刃が多く生産されることとなる。だが、先に指摘したように細石刃の機能性からは、一定の長さの確保が必然的なものとなっており、バルブ部やヒンジした末端部の除去、つまり細石刃の中間部の確保という問題は、下総台地のように生産される細石刃が相対的に小形の場合には、分割によって製品(中間部)が平均値を下回ってしまい、細石刃自体の機能性の喪失にもかかわる問題を孕むこととなる。当然のことながら分割を最小限に留どめ、長さを最大限確保することが原産地と距離的に隔たった地域での適応形態として浮上してくるのである。下総台地での細石刃完形品及び頭部の安定と中間部位の出現率の減少は、こうした有機的な背景を要因としているものと捉えたておきたいのである。

4　石材環境の作用

石材環境の石器群へ及ぼす影響について梶原氏は幾つかの仮説要因を挙げているが、特に「より効率的な剥離のためには、両設打面が採用される例が多い」点に注意を払っている。細石刃核に展開する剥離作業面が複数確認されたり、或はまた上下に打面が設定され、細石刃剥離の作業工程が対向しつつ進展した状況を留どめる石核は頻繁に目にするところである。各地域毎にこうした両設打面を有する細石刃核の存在を検討してみよう。

細石刃核の大量の出土が確認された矢出川遺跡第二次調査の資料の中で、両設打面を有するものは僅かに3点であり、出現率は4%と非常に少ない。相模野台地での出現率は遺跡単位の偏在が認められるが、平均した場合には約15%で、武蔵野台地に於ける13%とほぼ同様な出現率を示している。この一方、下総台地にあっては両設打面を有する細石刃核の出現率は32%と突出した数値を誇っているのである。検討対象が数量的に限定されている点は否めないが、非黒曜石製の細石刃核を分析対象とした場合には、41%という更に高い数値が得られ、この突出した両設打面を備えた細石刃核の出現率が下総台地に於ける一般的傾向として認識し得ることを支持していると言えよう。石材の産出しない下総台地にあっては、黒曜石のみならずチャートや凝灰岩などの石材もより効率的に使用されていたのであろう。この点は先に分析した細石刃の部位別の出現率等と併せても、見事な整合性を示しているものと言えよう。

次に検討したい点は、地域的な細石刃の生産量である。言うまでもなく、石核自体の法量の多寡はそこから生産される細石刃の数量的多寡と呼応関係にある筈である。小さな細石刃核から生産される細石刃は、当然のことながら少量に留どまったであろう。ここで各

遺跡名称	作業面長	細石刃長	完形長
男女倉遺跡J・	3．14cm		
鷹山遺跡I	3．12cm	2．55cm	2．7cm
矢出川遺跡(一)	2．6cm	1．7cm	
矢出川遺跡(二)	2．3cm	1．36cm	2．1cm
矢出川遺跡(三)	2．44cm	1．41cm	
休場遺跡	2．74cm	1．63cm	2．8cm
かしわ台遺跡I	1．88cm	1．25cm	2．2cm
かしわ台遺跡II	2．1cm	1．35cm	1．8cm
報恩寺遺跡	1．99cm	1．33cm	2．2cm
上野遺跡I区	2．0cm	1．16cm	2．0cm
台山遺跡	2．15cm	1．22cm	
御殿山遺跡	2．0cm	1．33cm	2．2cm
下里本邑遺跡	1．82cm	1．33cm	
新橋遺跡	2．24cm	1．22cm	2．1cm
三里塚No52遺跡	1．6cm	1．65cm	1．7cm
向原遺跡	1．74cm	1．66cm	1．7cm

第1表　細石刃属性表

遺跡名	細石刃核数	両設打面石核	出現率
矢出川遺跡	73点	3点	4．1%
かしわ台遺跡	6点	2点	
報恩寺遺跡	7点	2点	
中村遺跡	6点	0	15%
上野遺跡	4点	0	
相模野149遺跡	10点	1点	
下里本邑遺跡	6点	1点	
御殿山遺跡	4点	0	13%
多摩NT	6点	1点	
向原遺跡	7点	2点	
覆山谷遺跡	3点	1点	32%
三里塚遺跡No52	3点	1点	
三里塚遺跡No14	6点	2点	
(非黒曜石)			
黒田遺跡	18点	6点	
大林遺跡	25点	8点	41%
覆山谷遺跡	16点	6点	

第2表　両設打面石核の出現率

第3表 細 石 刃 の 生 産 量 （細石刃÷細石刃核）

原産地域		相模野台地		武蔵野台地		下総台地	
鷹 山 I	1 1	上 草 柳	4 3	新 橋	13.5	向 原	5
矢出川(二)	1.7	上 野	4 5	御 殿 山	1 6	三里塚No52	4
矢出川(三)	4.2	かしわ台駅前(I)	32.8	下里本邑	11.3	覆 山 谷	1.3
		かしわ台駅前(II)	82			(非黒曜石)	
休 場	5 1	報 恩 寺	10.5			大 割	1.8
		台 山	27.3			大 林	1.7

遺跡で出土した細石刃核と細石刃との数量を単純に比較し、その対応関係を示してみよう。数値は細石刃の総点数÷細石刃核数をもって求めたものである。

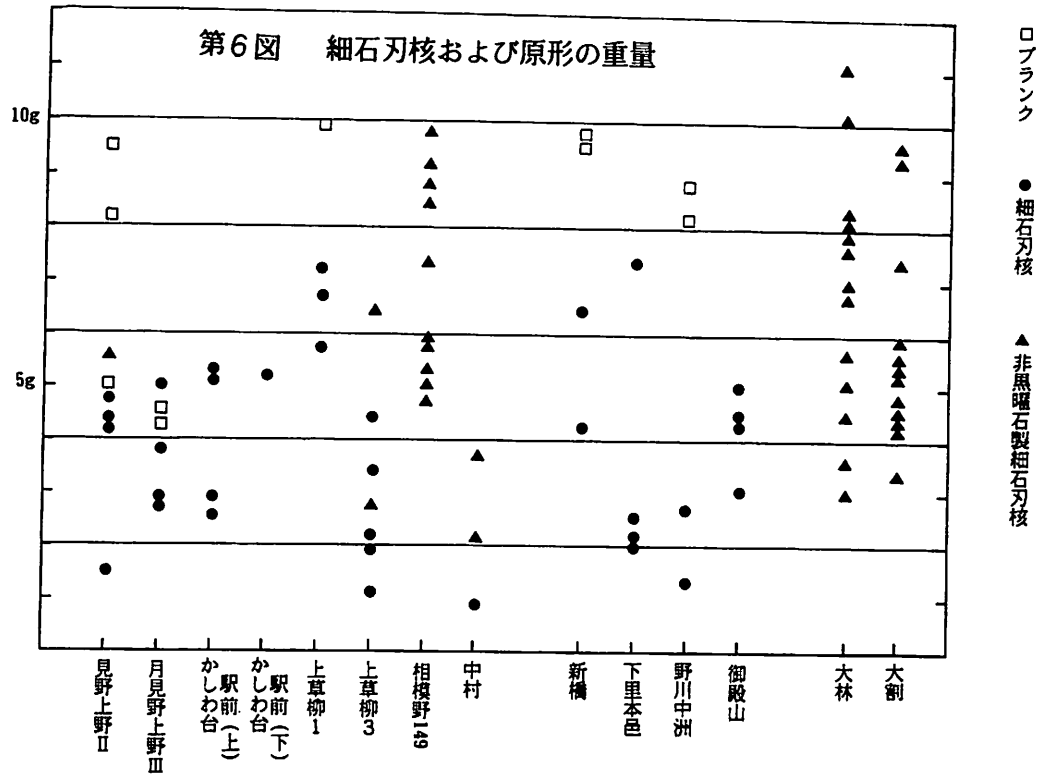
極めて概略的な数値であるが、ここでも興味深い偏在が確認できる。第一に遺跡単位での偏在の大きい点はともかくとして、黒曜石原産地での生産量が極めて低い点である。発掘段階での調査精度の問題が要因してている点は、総てのこうした数値にかかわりを持つものであり、ここでは考慮せずにおくが、いずれにせよ矢出川遺跡での生産量の低さは注目すべきであろう。こうした数値は当該遺跡に於いて細石刃の生産量が低い、という点に直ちに結び付くものではなく、むしろ矢出川にあっては細石刃核の数量が他と比して以上とも言える出現率を示す点にこそ、こうした数値が得られる要因を求めるべきなのかも知れない。この点、確かに矢出川遺跡は細石刃文化期での特異な存在なのである。

相模野台地では遺跡によってばらつきはあるが、平均すると生産量は40点程度である。一方、細石刃核や細石刃の諸属性に於いて常に相模野と同様な傾向を示していた武蔵野台地の遺跡は、この細石刃の生産量という点では大きく相違し、15点程にその生産量が留どまっている。無論、資料的な制約は否定できない。これに対して下総台地にあっては細石刃核と細石刃とも対応関係、細石刃の生産量を見ると異常に少ない。せいぜい3点前後という状況なのである。非黒曜石資料に於ける細石刃と細石刃核との対応関係を見ても、2点程度の生産量であり、黒曜石製のものと同様な傾向を見ることが可能である。いずれにせよ、下総台地という石器石材に恵まれていない、原産地から距離的に隔たった地域では、一つの細石刃核から剥離される細石刃の数量は他地域の遺跡よりも劣っていた点は間違いない。こうした石材環境が、細石刃の遺存形態の差異として顕現していたのであろうか。先に指摘したように、細石刃の部位別構成に見られる完形品と頭部部位の安定、対する中間部位の欠如という特質は、こうした原産地から距離を隔てたという石材環境下での適応形態として認識されるのである。

5、まとめ

細石刃核はナイフ形石器文化期の石核などと比較した場合、極めて法量の少ないものである。しかし、こうした小形の石核にもかかわらず、地域的にその利用と消費については極めて効率的な扱いがなされていたと考えられる。原産地を控えた鷹山遺跡や男女遺跡においては礫面を残存させた大形の細石刃核が見られる。ここでは細石刃作業面が3cmとならないうちに残核として打ち捨てられてしまう。相模野・武蔵野両台地の諸遺跡に於いては、細石刃核は作業面長が2cm程になるまで細石刃の剥離が進められている。更に下総台地に至っては作業面長1．6cmまで細石刃作出がおこなわれており、希少石材を可能な限り利用した姿を彷彿させる。こうした各地での相違した石材環境下(原産地からの距離)にあっては、このように石核利用率を高めると共に、両設打面を設けて細石刃剥離をより効率的に行うという技術適応も進められていた。

黒曜石製の細石刃核が効率的に利用された点は、その重量から見ても納得し得るものである。在地系石材を用いた細石刃核よりも黒曜石製のものの方が、打ち捨てられる基準が



低いことが知られる。無論、遺跡差というものが存在するが、双方の細石刃核が見られる遺跡では在地系石材のものは、打ち捨てられる重量がいずれも黒曜石製の細石刃核を上回っている。黒曜石製の細石刃核の打ち捨てに関しては、2~3gと4~5gという二つのピークが明瞭に伺われ、石材補充等の関係でいずれかの時点(重量)で細石刃の剥離作業が停止されたものと考えられる。

このような点と共に石器としての細石刃確保に際し、分割を末端部に限るという利用効率面での適応も注目しなければならない。頭部と末端部という双方の分割除去は、素材確保の困難な地域にあっては厳しいものであったに違いない。事実、作業面長が2cmを下回る細石刃核から作出した細石刃の上下端部を除去することは、残った中間部自体が細石刃の基本的サイズ(約1.25cm)を満たさない可能性がある。完形品や末端部のみを除去した頭部部位の卓越は、作出された素材を細石刃として効率的に利用する為の手段であったものと考えたい。そうした点からは、中間部の卓越と石材環境とは何等かの相関関係にあったことが予想されてくるのである。同時にまた、こうした部位別の偏在が石材環境によって影響を被っていたとしたならば、地域毎に細石刃を埋め込む溝や軸自身といった、言わばハード面での適応形態も当然、今後の研究射程として意識しておく必要があろう。

安斉正人　1990年　『無文字社会の考古学』
安蒜政雄　1979年　「日本の細石核」　『駿台史学』47号
織笠　昭　1983年　「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物』
梶原　洋　1991年　「石器群形成に及ぼす石材環境の意義」『北からの視点』
栗島義明他　1982年　「矢出川遺跡群の細刃器の分析」『報告・野辺山シンポジューム1981』
鈴木忠司　1979年　「中部地方南部の細石器文化」『駿台史学』47号
堤　隆　1987年　「相模野台地の細石刃核」『大和市史研究』13号
堤　隆　1991年　「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』17号

細石刃研究の最も基礎的な形態

織笠　昭

1、細石器文化資料論構築のために

考古学者とは何か。

考古学をなりわいとするか否かにかかわらず、それに対して何らかの感情と方法を持ち得た人を言う。

感情とは動機であり、方法とは動機によって生じた目的遂行のための過程である。これが実践化されたとき、学芸の形成も可能とする。

そのようにして考古学は発達してきた。

「細石器文化」は考古学者なら誰もが一度は取組んでみたいと考える魅力あるテーマのひとつであるかもしれない。人は誰しも時の移りゆきを何らかの経験を通して実感するときがある。その時の範囲を考古学流に「時代」と呼ぶか「時期」と呼ぶか、あるいはまた別の呼び方をするか、それはさまざまである。ただ、移りゆきの中にあって移りゆく過程を認識することは困難であることの方が多い。

よく言われることがある。ソヴィエト連邦の再編成やパレスチナ暫定自治宣言を取上げ、数年前には考えられなかったことであると。しかし注意深くみれば、その変化の要因はすでに変化の生じたそれ以前の中に胎胚していることが歴史の常である。問題はその常々の中における現状をよりリアルな形で見ていたのか否かというその一点にかかっている。

たとえば、本稿で言う細石器文化とは細石刃細石器文化の略称である。その地理的範囲は北米からユーラシアまでに広がる細石刃を伴なう一万年前前後の世界であり、そうした石器文化をもつ時期や地域の資料群に対しては細石刃文化と言う表現もされる。ところで私たちが○○文化とするとき、その○○が何であるのかを抜きにして議論することは、ありえないことであるとしてよいだろう。細石刃文化とするときのその範囲が一遺跡であっても、日本列島、あるいは東アジア全体であってもである。たとえば日本列島における細石刃文化とした場合、日本列島における細石刃がどのようなものであり、そしてそれにどのような石器を伴って、どのように石器文化が形成されるのかが論じられねばならないだ

ろう。そうでなければ細石刃文化という術語は存立し得ない。

だが、そのあり得べからざることがあり得たのも事実である。ではなぜ、細石刃の汎列島的な分析がなかったのか。その理由は次の諸点にある。

① 細石器の研究と言えば、細石核がその主体であったこと。細石核によって種々の地域性や編年が論じられ、その製作過程はよく注意されてきた。だから細石刃はおろかこれに伴なう石器自体、その組成の研究もまた、北海道にかかわる一部の試みを別とすれば、低調だった（織笠　1984）。

② 細石刃それ自体は、その形態的型式的特徴がつかみづらい。編年や地域性の問題は細石核でできるのだから、あえて細石刃ですることもないという考えがあった。

③ これがもっとも大きな問題であるが、石器を量的に分析し比較検討するという視点と方法が、石器研究において十分実践されてはいなかった。

細石刃それ自体の観察・分析例としては、芹澤長介氏による数々の観察や杉原荘介氏らによる休場遺跡出土細石刃の分析をはじめとし、さまざまに試みられてきた（芹沢　1959　加藤・大井 1961 、戸沢　1964、杉原・小野　1965）。

しかし、1960～1970年代の研究では、常に上にあげたような問題をかかえていたのである。そうした研究の蓄積は1982～84年、大きな進展を見せることになる。常呂川流域遺跡群の着実な資料分析によって、一遺跡から一地域への視点の展開がはかられた（藤本1982）。一方、矢出川遺跡群や上草柳遺跡群等でのより狭い範囲での徹底的な分析も注目された（栗島・辻本・斎藤・望月1982、堤 1984 ）。いずれもそれぞれの目的にしたがったはなはだ有意で目的的分析的な試みであり、大きな成果を上げることになった。

それらの研究は一遺跡、一地域の研究として意味あるものであり、同時に分析の方法として呈示されていた点でも有意な業績であった。その意義は、これを各遺跡各地域を通した広域比較研究をすることで、より高まり、より深まるところである。筆者による『細石刃の形態学的　考察』の狙いはその点にこそあった（織笠　1983）。すなわち、列島各地の細石刃を共通した視点から分析し、総合し、細石器文化の中核的な性格とその実態を数量的にも把握することである。そのときまで、細石刃の特質のかなりの部分は一般的事実として把握、あるいは予察されていた（麻生　1965）。そして細石刃最大の特徴はその小さな点にあると言われ続けていたにもかかわらず、全国の資料に対して具体的な数値の検討を経たうえで定義的に説明されることはなかった。

筆者による1983年論文は日本考古学史上初の細石刃についての汎列島的な集成研究で

あった。具体的には細石刃についての研究史的な検討をふまえながら、分析可能な細石刃資料を汎列島的に集成し、大きさと分割のあり方、そして縁辺の剥離痕と使用との関係、石材や製作量の問題を取上げた。

その結果、日本列島における細石刃完形例の平均的な大きさが明らかにされ、これと分割例の大きさとの比較によって細石刃分割の実際と意義を知ることになった。すなわち、細石刃完形例における細形と広形の区別とその地域的な型式差の抽出、さらに細石刃分割例にみられる汎列島的な形態的斉一性の指摘である。また、道具としての細石刃についての可能な範囲での検証を試みた。

その後、新たな資料の増加を見ることになったので、あらためて細石刃を全国集成し、その数値資料化した結果を呈示することにした。同時に1983年論文と今回における資料化の過程を記すことにした。こうした研究では、どのような資料をどのように資料化したかという経過が明らかにされることは少ない。筆者による研究の一部ではあるが、特に細石刃の大きさに関する資料化の過程を記すことで、今回のシンポジウムのための具体的な基礎資料呈示とともに、石器文化研究のための資料論構築のひとつの試みとしたい。

2、どのように遺跡を選定したか

さて、検討の対象とした資料は66遺跡（文化層）、19998 点である。このうち分割例が17356 点、完形例が2642点である。ただし完形例のうちの1464例は、後述するように細石核の細石刃剥離面から抽出したものである。

まず、大きさに関する結果を呈示しておく。

細石刃完形例の全国的に平均的な長さは2.66cm、幅は0.61cm、厚さは0.21cmである。細石刃分割例の長さは1.53cm、幅は0.61cm、厚さは0.18cmである。長幅比（ここでは幅に対する長さの比）は完形例で4.36、分割例で2.51となる。以上が日本列島から検出された細石刃の平均的な大きさである。

これらの数値の基礎となる遺跡ごとの結果を第１・２表に提示した。数値は遺跡ごとの資料総数の平均値であり、これを全国平均の基礎とした。次に第１・２表の作成経過を記し、数値資料化上の問題点を記す。こうした資料化はどのようになされたのか。

対象遺跡の選定基準は、第一に発掘例であること、次に数値の検討可能な細石刃、あるいは細石刃と細石核とを併せた数が50点以上公表されているという点にある。一遺跡の出土資料で50点を越える場合、それらの平均値が大きく変わることは少ないからである。む

ろん資料数が多ければ多いほど、数値の示す蓋然性は増す。

ときに表面採集資料や総数が50点以下の遺跡があるが、これはその周辺地域に他に良好な出土例が無い場合や、編年的序列の中で不可決の位置を占める場合、そして細石刃に関連する技法として特徴的な例を伴う場合等である。

なお、完形例が無いか少ないために、幅と厚さの数値だけが多数詳細に示されることがあるが、それらの資料は用いていない。分割例の長さが呈示されていないからである。長さを検討するうえであくまで完形を重視するのは、道具としての細石刃に対しての偏見である。しばしば幅と長さのみの数値の示されるのは、完形ではないからとの判断からくるところだろう。幅と厚さの数値だけでも比較研究は可能である（藤本　1982·1990 ）。しかし道具としての細石刃を考慮するなら、分割例の長さこそが重要であり、もっとも基本的な数値資料となる。これまでもそうした例が数多くあるが、いかに精緻な計算法を採用し分析したとしても、幅と厚さだけでは画竜点睛を欠くと言わざるを得ない。細石刃分割例の長さには、幅や厚さ以上の情報量が秘められているのである。

一方、従来射的山型あるいは置戸型彫器とされた石器を再検討し、それが「広郷型細石刃核」であるとする有力な根拠のひとつとして、それに伴う細石刃分割例の長さが、筆者による全国集成の平均値にきわめて近似することが指摘されている（鶴丸　1985）。石器の種類を判定する属性は多様であるが、細石刃分割例の長さが決め手になったという例である。もし広郷型の所産になる細石刃完形例の長さのみにこだわるとしたら、その6.0cmを越える格別な長さは、むしろ彫器としてのイメージを強く与えるかもしれない。しかし、分割された細石刃そのものの長さは、ごく一般的なものであることに着目された鶴丸氏の視点の確かさが、筆者の分析結果と整合した例である。

細石刃はその形と大きさによって完形例の用いられたこともあったろうが、基本的には分割することによって組合せ道具として用いられたことをはっきりと認識すべきだろう。杉原荘介氏によって細石刃分割への着目（杉原・小野　1965）が示されて以降、この点が具体的な数値をもって認識されたのは実に1983年以降のことなのである。ちなみに今回取上げた細石刃の完形例実数1464点に対して分割例は17356 点である。完形例が実測図化されたりその数値が示される確率は、分割例のそれよりもはるかに多いから、実際には細石刃として残されているものはほとんどが分割例であると言っても過言ではない。

1983年論文で数値検討対象として取上げた遺跡数は41遺跡であり、他に数遺跡の補足資料を加えた。このうちで先にあげた選定基準を満たすものは、実は泉福寺洞穴、原、門田

第１表　日本列島出土細石刃の遺跡別数値資料（1）

	遺跡名	主要石材	完形例				分割例			
			長	幅	厚	点数	長	幅	厚	点数
1	佐賀県　生石	O	2.22	0.64	0.15	4	1.35	0.78	0.17	172
2	原	O	2.54	0.50		(4)	1.40	0.60	0.15	158
3	中尾二ツ枝	O	3.68	0.47		(12)	1.37	0.52	0.18	97
4	石ケ元下道	O	3.82	0.48		(9)	1.17	0.53	0.17	78
5	福岡県　門田	O	2.70	0.45		(47)	1.15	0.47	0.12	73
6	長崎県　泉福寺洞穴10C 層	O	1.99	0.48	0.16	51	1.35	0.44	0.15	831
7	泉福寺洞穴 8C 層	O	2.08	0.57	0.17	244	1.38	0.49	0.15	5409
8	城ケ岳平子	O	1.95	0.47		(26)	1.17	0.48	0.14	78
9	野岳	O	3.00	0.70		(24)				
10	西輪久道	O	2.06	0.58		(12)	1.30	0.67	0.16	135
11	百花台	O	1.75	0.47		(7)	1.50	0.50	0.17	39
12	鹿児島県　加治屋園	TS·SA	2.18	0.48		(343)	0.95	0.62	0.20	248
13	加栗山	O·T	2.13	0.73		(349)				
14	横井竹ノ山	O	1.63	0.48		(20)	1.05	0.53	0.16	71
15	西丸尾	O·CR·S	1.81	0.65		(36)	0.95	0.67	0.19	181
16	宮崎県　船野	O.R	1.90	0.60		(32)	1.23	0.60		118
17	大分県　上下田	R	2.82	0.50		(12)	1.25	0.69	0.14	52
18	松山	R	3.15	0.83	0.35	24	1.46	0.82	0.20	93
19	山口県　長桝第1 地点	O	2.17	0.58		(13)	1.49	0.74	0.25	94
20	香川県　花見山	HA	1.61	0.50	0.17	104	1.25	0.50	0.16	190
21	羽佐島	HA	1.80	0.83	0.27	51	1.57	0.75	0.26	73
22	岡山県　恩原	S	2.78	0.68		(4)				
23	岐阜県　海老山	C·A	2.60	0.70		(10)				
24	静岡県　広野北	S>T	1.81	0.69	0.16	14	1.15	0.66	0.15	113
25	小塚	S	3.60	0.70		(3)				
26	休場	O	2.40	0.85	0.19	21	1.44	0.55	0.19	360
27	大奴田場A·Ⅰ文	O	1.83	0.62	0.16	68	1.26	0.54	0.13	589
28	神奈川県　代官山Ⅲ文	O	1.23	0.41	0.13	148	0.84	0.41	0.11	313
29	上和田城山Ⅰ文	T	2.56	0.60		(9)	1.53	0.73	0.24	24
30	月見野上野1·Ⅲ文Ⅰ群	O	2.02	0.66	0.23	12	1.17	0.51	0.18	213
31	上草柳3 中央Ⅰ文	O	1.41	0.58	0.19	21	1.23	0.51	0.17	67
32	上草柳1 Ⅰ文	O	1.61	0.64	0.25	11	1.29	0.78	0.21	136
33	月見野上野1·Ⅲ文Ⅱ群	O	1.75	0.78	0.26	7	1.25	0.73	0.19	88
34	報恩寺	O>C	2.50	0.66	0.21	11	1.60	0.70	0.20	57
35	台山Ⅱ文	O	1.90	0.58	0.19	22	1.08	0.47	0.13	280
36	下鶴間長堀Ⅰ文a	T	1.77	0.60	0.19	36	1.22	0.61	0.17	241

第２表　日本列島出土細石刃の遺跡別数値資料（２）

	遺跡名		主要石材	完形例				分割例			
				長	幅	厚	点数	長	幅	厚	点数
37	神奈川県	相模野No.149	TS>C	2.44	0.63	0.23	28	1.61	0.58	0.17	39
38		上和田城山Ⅱ文	O	1.52	0.53	0.18	6	1.05	0.45	0.15	34
39		長堀北Ⅱ文	A	3.03	0.80	0.58	4	1.23	0.73	0.30	54
40	東京都	T.N.T No.769	O	2.47	0.47		(11)				
41	千葉県	向原	O	2.0	0.62	0.19	28	1.00	0.60	0.20	32
42		大林Ⅰ文	C>T	1.95	0.53		(19)	1.48	0.62	0.26	30
43	茨城県	後野	S	3.0	0.68	0.22	31	2.04	0.55	0.19	104
44	群馬県	桝形	S	2.7	0.54	0.14	17	1.27	0.65	0.14	20
45	長野県	矢出川	O	1.71	0.55	0.15	25	1.33	0.56	0.15	83
46		中ッ原5･B 地点	O	3.00	0.70	0.17	6	1.73	0.67	0.17	148
47		柳又A 地点	O	3.24	0.61		(8)	1.58	0.69	0.18	241
48	新潟県	荒屋	S	3.01	0.59		8	1.97	0.67	0.20	24
49		月岡	S	3.30	0.57		(4)	1.80	0.49		30
50		荒川台	S	4.00	0.72		(22)	1.98	0.67	0.20	62
51	山形県	角二山	S	4.23	0.73		(8)				
52		越中山S	S	2.50	0.40		(5)				
53	青森県	大平山元Ⅱa	S	2.83	0.83	0.23	9	2.25	0.78	0.21	14
54	北海道	湯の里4	S>O	2.95	0.55	0.17	75	2.11	0.57	0.15	206
55	北海道	石川1	S>O	2.20	0.47	0.16	20	1.43	0.47	0.14	61
56		美利河1･Ⅲ層中	S>O	4.22	0.92	0.30	21	2.59	0.72	0.23	130
57		都	O	5.80	0.74		(5)				
58		嵐山2	O	1.24	0.41	0.18	14	1.07	0.41	0,14	35
59		日東	O	2.05			9	1.70	0.55	0.20	721
60		暁	O	3.70	0.75	0.22	203	2.79	0.87	0.22	2564
61		北栄40	O	2.52	0.57	0.21	111	1.78	0.71	0.22	1545
62		水口	O	3.29	0.37		(8)				
63		置戸安住	O	3.98	0.41		(16)				
64		白滝服部台	O	4.20	0.50		(56)	1.89	0.56	0.19	63
65		広郷20	O	6.40	0.66		(15)	1.80	0.54	0.20	356
66		幌加沢遠間	O	5.12	1.09		(29)	5.50	1.10	0.31	89

※石材略称　　O：黒曜石　TS：凝灰質頁岩　SA：砂岩
T：凝灰岩　CR：水晶　S：頁岩　R：流紋岩
HA：ハリ質安山岩　C：チャート　A：安山岩

※完形例点数の（ ）は長幅数値を細石核の細石刃剥離作業面から抽出した事例を示す。

※長さ、幅、厚さの単位はセンチメートル。

、加治屋園、加栗山、船野、櫃石島（花見山）、休場、報恩寺、向原、後野、矢出川、白滝服部台の13遺跡にしかすぎなかった。以上の中でも泉福寺洞穴は本報告未刊の段階であり、複数層位を一括し数値化していた。花見山も、後に本報告が刊行され、より多数の資料を検討することが可能となった。近年、各地域で数多くの良好な資料が検出・報告されるようになったこともあり、1983年段階での41遺跡中の13遺跡以外の事例の多くを今回省くことにした。福井洞穴、堂崎、上場、畦原、南方、鷲羽山、復山谷、鷹山第１地点、峠下、吉田、本沢、大正の12遺跡である。上記の資料はもちろん別途の視点からの資料価値は高いものばかりである。表面採集資料を別とすれば、あくまでも細石刃の検出数が少ない、あるいは報告数が少ない、または本報告が未刊であるという理由のためである。

こうして1983年の41遺跡中、今回もそのままに用いたものは原、門田、野岳、百花台、加治屋園、加栗山、船野、海老山、小塚、休場、報恩寺、向原、後野、桝形、矢出川、荒屋、月岡、角二山、越中山Ｓ、都、水口、置戸安住、白滝服部台の23遺跡である。このうちの10遺跡は選定基準を満たしていないが、先にあげた複数の理由から取上げることにした。

それら23遺跡と省略した12遺跡を併せた35遺跡以外の６遺跡、すなわち泉福寺洞穴、櫃石島（花見山）、羽佐島は現在に至るまでに本報告が刊行された。また上下田、長桝は資料検出のさらなる展開があった。そこでこれらについては、計測資料をまとめなおすことにした。

結局、今回取上げた66遺跡（文化層）中の３分の２弱にあたる43遺跡（文化層）が新たに資料化されたことになる。資料総点数も圧倒的に増加しており、個々の地域や編年的問題、あるいは遺跡の場のあり方にかかわる問題等を別とすれば、10年前に比べ、数値の確実性ははなはだ増したとしてよいだろう。

ただし本項の冒頭に記した細石刃の大きさにかかる全国平均値を1983年論文と比べると、その差はごく少ない。たとえば長さを見ると完形例で0.14㎝、分割例で0.07㎝異なるのみである。この点は対象数量の増加によって大きな変化が生じたわけではなく、少数の資料であっても平均値上の有効性はあり得るということを示している。同時に、このことは前回の結論のひとつである細石刃の形態的斉一性が基盤にあることであり、これ以外の石器に通用することであるかどうかは、それなりの検証を経ねばならないだろう。

いずれにせよ、対象資料の著しい増加は、この10年の資料の増加を示している。だが、それは発掘例が増加したためだけではない。後述するように、検討の対象となり得る方法

をもって報告書が刊行されていることに意を留めるべきだろう。

3、どのように細石刃の数値を導き出したか

現代考古学における報告書の最大の存在理由は、これをもって資料の検討を可能とするという点にある。たとえば、細石刃という一種類の石器を検討しようとするとき、出土全資料が実測図とともに一覧表として種々の属性が呈示されている報告書が最良である。

細石刃の大きさだけに限ってみれば、少くとも長さ、幅、厚さ、そして重量に関する全点の数値が個別に掲載され、なおかつ分割部位や石材ごとに記載され、最終的に全体像が再検証可能な形で呈示されていることが望ましい。しかし、そのような事例はごくごく稀である。1982年以前の時点でそのような報告書はただの一冊もなかった。

完形例と分割例とを区別したうえで、長さ、幅、厚さ、あるいは長さ、幅、重量の数値を全点掲載してあったのは、加治屋園と上下田の2遺跡の報告書だけだった。多数の資料を掲載した加治屋園遺跡報告書の複写を手にしたときはほんとうに嬉しかった。なぜなら、1983年論文の資料収集と執筆は1981・1982年の両年にわたって行なったが、ほとんどの場合は報告書から直接1点ずつ計測し、それを「筆算」でまとめていったからである。だから加治屋園には多数の実測図が掲載されており、初めにこれを眼にしたときは眼前がまっくらになり、次いで一覧表を見出したとき、心の底からほっとしたものである。そのときは「感謝」という言葉しか頭に浮かばなかった。今回さすがに「筆算」はしていないが、それでも実測図から計測した事例はいくつかある。

なお、重量については、それが石材とともに実測図からは抽出し得ない属性として、これこそが一覧表として掲載されねばならないところである。1982年以前の報告書に重量の掲載される例はきわめて少なかった。近年の報告書ではかなりの割合で重量が掲載されている。それでも66遺跡（文化層）中31遺跡であり、今回取上げた事例のうちの半分にも満たない。このこともあり、今回は重量を掲載しなかったが、重量が報告されていれば1983年論文で示したように、接合資料がなくとも、一細石核あたりの細石刃製作量の大略を容易に知り得るなど、さまざまな事象を抽出することができのである。

石器一般においても、重量の重要性は必ずしもよく認識されていないようだが、道具としての石器を認識するためには不可欠の属性であることを忘れてはならない。

次に、第1・2表について説明しながら数値のまとめ方にも触れる。

各遺跡（文化層）は、おおむね西南日本から東北日本に向けて配列した。まず各遺跡ご

との細石刃に用いられる主要な石材を掲載した。次いで、細石刃完形例と分割例ごとに長さ、幅、厚さの平均値をセンチメートル単位の小数点第二位まで記した。点数はこれに用いた資料数である。完形例の点数で( ) 印を付した数字は、細石核の細石刃剥離作業面上もっとも長く幅広の細石刃剥離痕から長さ、幅を起こしたものであることを示す。細石刃の検出数や公表数が少ない場合、この方法を用いた。それゆえに、長さと幅だけが記載されることになる。( ) 印のないものは細石刃自体から得た数値だが、数値記載や実測図に側面図や断面図のないために厚さを記載し得なかったものがある。

なお、日東の完形例で幅と厚さがともに欠落しているのは、完形例と分割例とをあわせた数値が呈示されていたためであり、これを資料数が多数を占める分割例の欄に記した。実際には日東の分割例の数値は完形例も含むことになるが、分割例と完形例はそれぞれ72 1 点と９点であり、分割例としての数値にほとんど影響を与えないものと判断した。

また、分割例の数字は可能な限り分割部位ごとに数値資料化したが、ここでは記載を省略した。ただしその結果は、1983年論文第５図同様、部位ごとに著しい数値の変化はなかったことのみ記しておく。報告書によっては分割部位の区分や完形例と分割例との区分の不明なものがあったことも省略の理由のひとつである。部位区分は実測図の分割部に補線を加えることで明確化できるので、これを常態とすべきだろう。補線がある場合でも、現代の破損と往時の破損とが区別されていない場合があるのも改善すべき点である。ちなみに筆者らは前者を破線で、後者を実線で表現している（鈴木遺跡調査団編　1978. 織笠 1992a）。

さて、ここでの数値資料の何例かは報告書の実測図から得たものであり、２分の１ほどに縮小されていたものも少なくない。それゆえにそうして得られた数値そのものに若干の疑問も生じないではない。実測図を見て、あるいは実物と見比べて首をひねる例も実は少なくないのである。ただし、長さ、幅、厚さの全国平均が前回と大きくは変わらないこと、一遺跡から任意に抽出したものはどのように組合わせても相似た傾向をもつことは、数値の妥当性を示していると考えられる。それでもやはり実物を直接計測した数値の方が良いのは言うまでもない。

計算法についての問題もある。さまざまな計算法や検定を重ねるべきである。ただし、そのときの考古学的な資料の基礎的な取扱いの問題が数多く残されている。資料の抽出や提示の方法、そして分類の目的と方法を繰返し絶え間なく問い続けることこそが大切なのである。たとえば細石刃分割例の長さを取上げることなく、幅と厚さだけを詳細に分析す

ることの問題点は、一刻も早く克服しなければならない。

4、はじまりのためのおわりに

この膨大な数字を前にして思うことは、その資料の検出と報告を可能にした考古学者のたゆみなき探求心と情熱である。そしてこれを可能にした日本考古学の性格とその社会的背景、および文化的特質である。

筆者の示した日本列島の細石刃の大きさは、加藤晋平氏の指摘したようにミシェル・ブレジョン氏によって紹介されたヨーロッパにおける定義の範囲（Brézillon, M. 1970）と一致する（加藤　1984）。細石刃の形態的斉一性がより広い範囲でとらえ得ることを予察させる。では東アジア・シベリアとはどうか。近年、藤本　強氏によるこの方面の比較研究の積極的実態的な研究がある（藤本　1990）。筆者もこの問題については、昨年の国際シンポジウム『北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』で一部触れたところがある（織笠　1992b ）。しかしそうした比較研究をさらに深めるためには、その比較の地理的範囲がどれほどであっても、つまり隣接する遺跡間でさえも、数々の条件整備をなさなければならないという困難な問題がある。

いずれにせよ、どこからどのようなものがどれだけ出土したのかを明らかにし、それらを研究・普及のためにどう保管し活用していくのかが考古学第一の課題となるだろう。細石刃の分析を行なった結果、確認されるのはこの点である。そしてそのためには、精緻な発掘と詳細な報告書とともに、しっかりとした資料の保管・活用体制こそが求められるのである。比喩ではなく、細石刃こそはもっとも紛失しやすい小さな遺物なのだから。こうした課題があらゆる地域で克服されたとき、遠く離れた地域間でも真に同等の比較研究が可能となるだろう。

現象の理解と評価は、現象それ自体についての実態的な観察を基盤とする。この基盤が固く踏みしめられたとき、細石刃それ自体による広域比較研究も可能となり、海を越え時を越え、その形態が復活することになる。そして、その基盤作りは、数々の報告書作成や鈴木忠司氏によるこの時期の遺跡分布研究の資料整備（鈴木　1983･1985 ）等々と同様に、膨大な手間と時間とを要することは言うまでもない。そして遺跡ごとのさらに多様な観察の累積こそが、広域比較研究の真の基盤となるだろう。

さて、今回のような数値資料からは、いったいどのような考古学的事象が抽出できるだろうか。1983年段階で明らかにした点についての大きな変更はないが、ともあれ、こうし

観察の累積こそが、広域比較研究の真の基盤となるだろう。

さて、今回のような数値資料からは、いったいどのような考古学的事象が抽出できるだろうか。1983年段階で明らかにした点についての大きな変更はないが、ともあれ、こうした資料化それ自体からはさらに多くの語るべき事柄が生じ、今回のシンポジウムにかかげられた数々のテーマとの相互検証がなされなければならない。地域論的な問題とともに、決して多くはない編年論的な展開（砂田　1988．堤　1991）や、近年、特に研究の進展してきた使用痕（堤　1993）や石材の問題等との対応が必要である。使用痕分析や石材研究にはそれぞれの基準があるように、石器それ自体の基準が、大きさや形などの特質から抽出されるべきだろう。こうした研究は、石器の形態的研究の最大の眼目のひとつであり、たとえば、これを前提としない技術研究は、まさしく技術研究のための研究となり、技術論的研究段階を担い得ないことになる。

細石器文化の時期は世界史的に重要な意味をもつことは言うまでもない。だが細石刃の実態研究を抜きにして、真実その重要な意味が論じられるとしたら、それは考古学者の思いあがりである。ひとつひとつの事物がどのような事象の結果生じたのか。まずはそれ自体の全容を解明すべきだろう。それだけがすべてではないが、しかしそれがなくては始まらないのだから。

第１表66遺跡（文化層）中、50遺跡（文化層）については何らかの形で実見・観察の機会を得ている。そうした際や文献について、実に多くの方々から御教示・御世話をいただいている。それなくして表の一枚さえもできはしない。御一人ずつのご芳名を記すことなく恐縮ではありますが、心より感謝いたします。

引用参考文献

麻生　優　1965「細石器文化」『先土器時代』日本の考古学Ⅰ　河出書房新社

織笠　昭　1983「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物――わが考古学論集１――』文献出版

織笠　昭　1984「細石器文化組成論」『特集：日本細石器文化の研究Ⅱ』駿台史学60　駿台史学会

織笠　昭　1992a「弥三郎第２遺跡・縄文時代草創期」『土気南遺跡群Ⅱ』　千葉市土気南土地区画整理組合

織笠　昭　1992b「日本列島における細石刃の研究」『国際シンポジウム・北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』国際シンポジウム実行委員会（口頭発表を主とする）
加藤晋平　1984「日本細石器文化の出現」『特集：日本細石器文化の研究Ⅱ』駿台史学60　駿台史学会
加藤晋平・大井春男　1961「北海道常呂郡訓子府町緑丘Ｂ遺跡――第１次報告――」『民族学研究』26－１　誠文堂新光社
栗島義明・辻本崇夫・斎藤（大竹）幸恵・望月　映　1982「矢出川遺跡群の細刃器の分析」『報告・野辺山シンポジウム1981』
杉原荘介・小野真一　1965「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』３－２　東京考古学会
鈴木忠司　1983「日本細石刃文化の地理的背景――先土器時代遺跡論の試み――」『角田文衛博士古稀記念古代学論叢』古代学協会
鈴木忠司　1985「再論　日本細石刃文化の地理的背景――生業論への視点――」『論集日本原史』吉川弘文館
鈴木遺跡調査団編　1978『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡刊行会
砂田佳弘　1988「相模野細石器　その発生と展開にむけて　」『神奈川考古24　神奈川考古同人会
芹沢長介　1959「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』１－５　日本第四紀学会
堤　隆　1984「上草柳地区出土の細石刃について」『一般国道246（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』大和市文化財調査報告書15　大和市教育委員会
堤　隆　1991「相模野台地における石器装備の構造」『大和市史研究』17　大和市役所
堤　隆　1993「スクレイピングに用いられた細石刃―中ツ原１Ｇ地点出土細石刃の使用痕分析から―」『佐久考古通信』58　佐久考古学会
鶴丸俊明　1985「『広郷型細石刃核』論――その形質と意味――」『論集日本原史』吉川弘文館
戸沢充則　1964「矢出川遺跡」『考古学集刊』２－３　東京考古学会
藤本　強　1982「常呂川流域の細石刃」『北海道考古学』18　北海道考古学会
藤本　強　1990「細石器（Ⅰ）――細石器のもつ意味・ソ連極東地域と北海道出土資料の比較――」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』９　東京大学文学部考古学研究室
Brézillon, M. 1977　Ladenominationdesobjects de pierre taillee. VI° supplement a " Gallia Prehistoire." Centre national de la Recherche scjentifique.

細石刃資料掲出遺跡文献（遺跡番号は第1・2表に一致する）

1＜佐賀県唐津市生石遺跡＞
堀川徹英　1978「生石遺跡」『生石・森の下遺跡』佐賀県文化財調査報告書43　佐賀県教育委員会
2＜佐賀県唐津市原遺跡＞
杉原荘介・戸沢充則　1971「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊』4－4　東京考古学会
3＜佐賀県唐津市中尾二ツ枝遺跡＞
田島龍太　1992『中尾二ツ枝遺跡（2）』唐津市埋蔵文化財調査報告50　唐津市教育委員会
4＜佐賀県唐津市石ケ元下道遺跡＞
田島龍太　1984「石ケ元地区の遺構・石ケ元地区の遺物」『後川内遺跡群（Ⅱ）』唐津市文化財調査報告書8　唐津市教育委員会
5＜福岡県春日市門田遺跡＞
木下　修　1976「門田遺跡」『日本の旧石器文化』3　雄山閣出版
木下　修　1979「先土器・縄文草創期の遺物」『山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告』11　福岡県教育委員会
6・7＜長崎県佐世保市泉福寺洞穴遺跡10C層・8C層＞
麻生　優編　1984『泉福寺洞穴の発掘記録』　佐世保市教育委員会
8＜長崎県北松浦郡宇久町城ケ岳平子遺跡＞
下川達彌・立平　進　1983『長崎県北松浦郡宇久町所在城ケ岳平子遺跡――第一次調査報告』　長崎県立美術館
9＜長崎県大村市野岳遺跡＞
鈴木忠司　1971「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8　古代学協会
10＜長崎県諫早市西輪久道遺跡＞
田川　肇・福田一志　1983「西輪久道遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書64　長崎県教育委員会
11＜長崎県南高来郡国見町百花台遺跡＞
麻生　優・白石浩之　1976「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』3　雄山閣出版
12＜鹿児島県鹿児島市加治屋園遺跡＞
弥栄久志・長野真一・新東晃一・池畑耕一　1981『加治屋園遺跡・木ノ迫山遺跡』九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書14　鹿児島県教育委員会
13＜鹿児島県鹿児島市加栗山遺跡＞
牛ノ浜修・宮田栄二・戸崎勝洋・黄崎和憲・立神次郎・吉永正史・中村耕治　1981『加栗山遺跡・神ノ木山遺跡』九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告V　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書15　鹿児島県教育委員会
14＜鹿児島県鹿児島市横井竹ノ山遺跡＞
出口　浩・上村純一・岡百環生・牛ノ浜修　1990『横井竹ノ山遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書10　鹿児島市教育委員会
15＜鹿児島県鹿屋市西丸尾遺跡＞
宮田栄二・吉内紫子・児玉健一郎　1992『西丸尾遺跡』一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書V　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書64　鹿児島県教育委員会
16＜宮崎県宮野郡佐土原町船野遺跡＞
橘　昌信　1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3　別府大学考古学研究会
17＜大分県大野郡三重町上下田遺跡＞
橘　昌信　1981『大分県上下田遺跡発掘調査報告書』　別府大学付属博物館
橘　昌信　1983『大分県上下田遺跡第2次発掘調査報告書』　別府大学付属博物館
18＜大分県大野郡大野町松山遺跡＞
橘　昌信編　1990『松山遺跡』　別府大学付属博物館
橘　昌信　1992「大分県松山遺跡第2次発掘調査」『日本とシベリアの先史文化交流に関する日ソ共同調査』　加藤晋平・藁本　強
19＜山口県宇部市長谷遺跡第1地点＞
山口県旧石器文化研究会　1984「宇部台地における旧石器時代遺跡（2）――長谷遺跡第1地点　その（1）――」『古代文化』36－7　古代学協会
山口県旧石器文化研究会　1985「宇部台地における旧石器時代遺跡（3）――長谷遺跡第1地点　その（2）――」『古代文化』37－2　古代学協会
20＜香川県坂出市花見山遺跡＞
西村尋文・藤好史郎・真鍋昌宏　1989『花見山遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI　香川県埋蔵文化財研究会
21＜香川県坂出市羽佐島遺跡＞
渡部明夫・秋山　忠・真鍋昌宏　1984『羽佐島遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I　香川県文化財保護協会
22＜岡山県吉田郡上斎原村恩原遺跡＞
福田孝司・山本　誠・大谷輝彦・柳川一徳　1988『恩原遺跡――旧石器人の生活跡をさぐる――』　恩原遺跡発掘調査団・上斎原村教育委員会
23＜岐阜県美濃加茂市潜老山遺跡＞
河合喜代治・吉田英敏・紅村　弘　1959「岐阜県潜老山遺跡における無土器文化の石器について」『考古学雑誌』44－4　日本考古学会
鈴木忠司　1979「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』　古代学協会
24＜静岡県賀田郡豊田町広野北遺跡＞
鈴木忠司・徳永　裕・風呂一樹　1985「細石刃文化」『静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』　平安博物館
25＜静岡県富士郡芝川町小堰遺跡＞
小野真一・杖本真澄・原紙一雄・佐野文孝　1972『駿河小堰　――静岡県における先土器文化の研究――』　芝川町教育委員会・加藤学園沼津考古学研究所
26＜静岡県沼津市休場遺跡＞
杉原荘介・小野真一　1965「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』3-2　東京考古学会
27＜静岡県田方郡函南町大竹田場A遺跡第Ⅰ文化層＞
伊藤恒彦・長野康敏・保坂康夫・持田　泉　1989『大竹田場A遺跡』『函南スプリングゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）』　函南町教育委員会
28＜神奈川県藤沢市代官山遺跡第Ⅲ文化層（L1H上）＞
砂田佳弘　1986『先土器時代の遺構と遺物』『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11　神奈川県立埋蔵文化財センター
29・38＜神奈川県大和市上和田城山遺跡第Ⅰ文化層（L1S）・第Ⅱ文化層（BO下部）＞
中村喜代重　1979「先土器時代」『上和田城山』大和市文化財調査報告書2　大和市教育委員会
中村喜代重　1986「先土器時代」『大和市史7資料編考古』　大和市役所
上和田城山遺跡出土細石刃の数値は、1992年度の大和市教育委員会「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理」の結果による。
30・33＜神奈川県大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅲ文化層1群（BO下底）・Ⅱ群（BO中位）＞
堤　隆　1986「第Ⅲ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書21　大和市教育委員会
31・32＜神奈川県大和市上草柳遺跡群第3地点中央遺跡第Ⅰ文化層（BO下部）・第1地点遺跡第Ⅰ文化層（BO中位）＞
堤　隆　1994「上草柳第3地点中央遺跡」
堤　隆・安蒜史郎「上草柳第1地点遺跡」『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』大和市文化財調査報告書15　大和市教育委員会
織笠　昭・織笠明子・相田　薫編　1992『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書――上草柳遺跡群・台山遺跡篇――』　大和市埋蔵文化財調査報告書48　大和市教育委員会
34＜神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡（BO上部）＞
鈴木次郎・矢島國雄　1979「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」『神奈川考古』6　神奈川考古同人会
35＜神奈川県大和市台山遺跡第Ⅱ文化層（BO上面）＞
麻生順司　1988『先土器時代』『神奈川県大和市台山遺跡発掘調査報告書』　玉川文化財研究所
織笠　昭・織笠明子・相田　薫編　1992『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書――上草柳遺跡群・台山遺跡篇――』大和市文化財調査報告書48　大和市教育委員会
36＜神奈川県大和市下鶴間長堀遺跡第Ⅰ文化層（a）（L1S下部）＞
堤　隆　1984「第Ⅰ文化層（a）」『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅲ』大和市文化財調査報告書17　大和市教育委員会
37＜神奈川県大和市相模野第149遺跡L1S下部文化層＞
鈴木次郎　1989「相模野第149遺跡――相模考古学研究会による発掘調査の記録――」
大和市文化財調査報告書34　大和市教育委員会
39＜神奈川県大和市長堀北遺跡第Ⅱ文化層（L1S上面）＞
小池　聡　1991「第Ⅱ文化層」『長堀北遺跡』大和市文化財調査報告書39　大和市教育委員会
40＜東京都多摩市多摩ニュータウンNo.769遺跡＞
阿部祥人　1983「先土器時代・多摩ニュータウンNo.769遺跡」『多摩ニュータウン遺跡――昭和57年度――（第5分冊）』東京都埋蔵文化財センター調査報告4
東京都埋蔵文化財センター
41＜千葉県印旛郡本埜村向原遺跡＞
高木博彦・千葉健造　1974「向原遺跡（CN601）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　房総考古資料刊行会
42＜千葉県佐倉市大林遺跡＞
田村　隆　1989「大林遺跡・先土器時代」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』　住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部・千葉県文化財センター

43＜茨城県勝田市後野遺跡＞
後野遺跡調査団編　1976『後野遺跡』　勝田市教育委員会
44＜群馬県勢多郡宮城村例形遺跡＞
宮城村教育委員会編　1981『例形遺跡調査報告書』　宮城村教育委員会
45＜長野県南佐久郡南牧村矢出川遺跡＞
戸沢充則　1964「矢出川遺跡」『考古学集刊』２－３　東京考古学会
46＜長野県南佐久郡南牧村中ツ原遺跡群第５遺跡Ｂ地点＞
吉沢　靖・吉井雅勇・堤　隆他　1991『中ツ原第５遺跡Ｂ地点の研究』　八ケ岳旧石器研究グループ
47＜長野県木曽郡開田村柳又遺跡Ａ地点＞
谷口康浩編　1990『柳又遺跡Ａ地点――第１次発掘調査報告書――』國學院大學文学部考古学実習報告19　國學院大學文学部考古学研究室
小林達雄・谷口康浩編　1992『柳又遺跡Ａ地点――第２次発掘調査報告書――』國學院大學文学部考古学実習報告21　國學院大學文学部考古学研究室
永峯光一・谷口康浩　1993『柳又遺跡Ａ地点――第３次発掘調査報告書――』國學院大學文学部考古学実習報告23　國學院大學文学部考古学研究室
48＜新潟県北魚沼郡川口町荒屋遺跡＞
芹沢長介　1959「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』１－５　日本第四紀学会
芹沢長介　1957「日本における旧石器の層位的出土例と^{14}C年代」『日本文化研究所研究報告』３　東北大学文学部日本文化研究所
杉原荘介　1974『日本先土器時代の研究』　講談社
織笠　昭　1979「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』47　駿台史学会
49＜新潟県北魚沼郡堀之内町月岡遺跡＞
中村孝三郎・小林達雄　1975「月岡遺跡」『日本の旧石器文化』２　雄山閣出版
織笠　昭　1979「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』　駿台史学会
50＜新潟県岩船郡関川村荒川台遺跡＞
阿部朝衛　1992「新潟県関川村荒川台遺跡第１次調査報告」『法政考古学』18　法政考古学会
51＜山形県北村上郡大石田町角二山遺跡＞
上野秀一　1971「後期旧石器時代末葉における東北地方と北海道の交流について―山形県角二山遺跡をめぐって―」『山大史学』４　山形大学教育学部歴史学研究会
小野一彦　1973「最上川・赤川流域における細石刃文化―とくに湧別技法を有する細石刃群の検討―」『最上川流域の歴史と文化』　山形史学研究会
宇野修平・上野秀一　1975「角二山遺跡」『日本の旧石器文化』２　雄山閣出版
剣持（柳沢）みどり　1979「角二山細石刃石器群の構造」『山形考古』３－２　山形考古学会
52＜山形県東田川郡朝日村越中山遺跡Ｓ地点＞
小野一彦　1973「最上川・赤川流域における細石刃文化―とくに湧別技法を有する細石刃群の検討―」『最上川流域の歴史と文化』山形史学研究会
53＜青森県東津軽郡蟹田町大平山元Ⅱ遺跡（Ⅱａ石器文化）＞
三宅徹也・横山裕平・松山　力・山口義伸　1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告８　青森県立郷土館内青森文化振興会議
54＜北海道上磯郡知内町湯の里４遺跡＞
畑　宏明・矢吹俊男　1985「湯の里４遺跡の調査」『湯の里遺跡群』北海道埋蔵文化財センター調査報告18　北海道埋蔵文化財センター
55＜北海道函館市石川１遺跡＞
長沼　孝・森　秀之・花岡正光　1988『函館市石川１遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告45　北海道埋蔵文化財センター
56＜北海道湿郡今金町美利河１遺跡Ⅲ層中＞
長沼　孝・畑　宏明・西田　茂・花岡正光　1984『今金町美利河１遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告23　北海道埋蔵文化財センター
57＜北海道余市郡赤井川村郡遺跡＞
木村英明　1978「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」『北海道考古学』14　北海道考古学会
58＜北海道上川郡鷹栖町嵐山２遺跡＞
石川　朗・西田　茂・佐藤和雄・谷島由貴　1987『鷹栖町嵐山２遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告40　北海道埋蔵文化財センター
59＜北海道上川郡上川町日東遺跡＞
札幌大学木村英明ゼミナール　1987「日東遺跡調査概報」『札幌大学教養部教養ゼミナール論集』13　札幌大学教養部
60＜北海道帯広市暁遺跡＞
佐藤訓敏・北沢　実編　1985『帯広・暁遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告１　帯広市百年記念館友の会
佐藤訓敏・北沢　実編　1986『帯広・暁遺跡２』帯広市埋蔵文化財調査報告５　帯広市百年記念館友の会
北沢　実編　1989『帯広市暁遺跡の発掘調査―第５次調査報告書―』十勝考古学研究所調査報告１　陸奥倶楽部
61＜北海道常呂郡訓子府町北栄－40遺跡＞
横爪　実・鶴丸俊明　1990『北栄－40遺跡』　訓子府町教育委員会
62＜北海道常呂郡端野町水口遺跡＞
畑　宏明・田原良信　1975「水口遺跡」『日本の旧石器文化』２　雄山閣出版
63＜北海道常呂郡置戸町置戸安住遺跡＞
戸沢充則　1967「北海道置戸安住遺跡の調査とその石器群」『考古学集刊』３－２　東京考古学会
64＜北海道紋別郡白滝村白滝服部台遺跡＞
杉原荘介・戸沢充則　1975『北海道白滝服部台における細石器文化』明治大学文学部研究報告考古学５　明治大学文学部考古学研究室
65＜北海道北見市広郷20遺跡＞
久保勝範・太田敏量・菅野友世　1980『北見市広郷・開成遺跡発掘調査報告書』北見市
66＜北海道紋別郡遠軽町幌加沢遺跡遠間地点＞
筑波大学歴史人類学系遠間資料研究グループ（山田昌久他）編　1990『遠軽町先史資料館収蔵資料集・湧別川・遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録』
遠軽町教育委員会

細石刃の使用にかかわる二・三の問題

堤　　隆

1　はじめに

旧石器時代末に登場した細石刃は、以下の諸点において、旧石器の中でもきわめて合理的な石器であった。すなわち、

①小さな石材から効率よく量産される点・②例えば尖頭器のように入念な二次加工工程必要とせず、不要な部分を折りとるだけでよい点・③連続して軸に装着でき・④刃こぼれしても交替が容易である点、がその合理性として想定されよう。

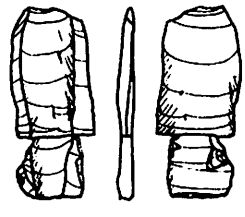
しかし細石刃は、その小ささと形態の単調さ＜むろんこれは裏返せば「形態的斉一性」（織笠1983）ということになろう＞ゆえの取り扱いにくさもあって、これまで細石刃文化の研究の主役を演じてきたとはいい難い。

しかし少ないながらも、その折断をめぐる提言（杉原ほか1965）や実践的な形態研究（藤本1982、栗島ほか1982、堤1984）があり、凡列島的な細石刃の形態学的研究も結実している（織笠1983）。また、細石刃の使用痕分析についても若干の研究がみられ、その用途が推定された（大浦・阿部1986、堤1991、堤1993）。一方で、細石刃の装着方法の想定もなされている（綿貫・堤1987、堤1991）。

本稿では、細石刃研究のうち、とりわけその使用にかかわる問題を素描しておきたい。

2　折られる細石刃、折られない細石刃

そもそも石器が折れているのか、折ってあるのかの本来的な証明は難しいが、第1図の接合をみる限り、折った（折れた）一方の部位が使用されていることは自明であろう。いうまでもなく折った（折れた）細石刃の一方にのみ加工痕が認められるからである。むろん人為的折断の証明に拘泥する必要がないことは、その折断部位が量的保証している。



第1図 細石刃接合例
相模野
上野第1Ⅲ文

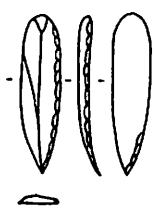
さて、かつて杉原らは、静岡県休場遺跡の細石刃について「細石核から剥離した剥片を、さらに打瘤部と先端部とを意識的に切載し、その中間部を細刃器として使用した」として、いわゆる「三分割説」

を唱えた（杉原ほか1965）。その後、織笠は、折断によって細石刃の形態的な斉一性が増したと評価する一方、「頭部あるいは尾部のいずれかを残す細石刃であっても、形や大きさが中間部を中心とした許容範囲のなかにあるのなら十分に使用の対象となった」とし、折断部位の利用のあり方に柔軟な考えを示した（織笠1983）。

一方筆者も、相模野台地上草柳地区出土の３群の細石刃の分析をつうじ、むしろ細石刃の折断は、公式的な三分割ではなく「装着に不都合な部位の除去」、つまり肥厚した打瘤部や反りのある末端部の除去に目的があるもので、打瘤部のみを除去したもの、末端部のみを除去したものも一般に用いられ、場合によっては完形もそのまま用いられたことを、使用痕と考えられる微小剥離痕のあり方から推定した。また、より長い細石刃が用いられる傾向も看取でき、折断は刃部の長さを最大限に生かすようなかたちでなされたことを想定した（堤1984）。

つまるところ、細石刃一般においては、不要部位除去の意味をもって折断がなされ、使用されていたと考えられるのである。しかし、折断がなされず、そのまま用いられたと考えられる細石刃もある。

筆者らが「荒屋型細石刃」とした特徴的な細石刃は（綿貫・堤1987）、完形細石刃において特徴的な加工痕が認められることが芹沢により以前から指摘されていた（芹沢1959）。すなわち、その加工痕は、完形細石刃の表面右側縁に連続し、裏面右側縁先端に認められるという特徴をもっており、量的なまとまりをもって存在している（第２図）。これは、折られないで完形のまま用いられた細石刃と考えられるのである。ただ、荒屋型細石刃は、現在のところ荒屋遺跡においてのみしか認められないものであり、その特異性が問題となるところである。



第２図
荒屋型細石刃

３　細石刃の使用痕

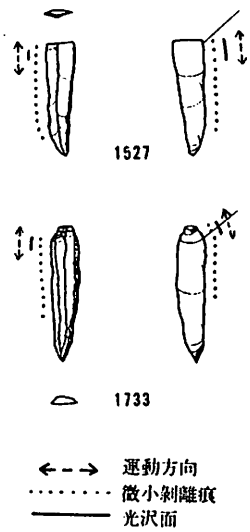
細石刃の使用痕分析については、まだ若干の研究例があるにすぎない。

相模野台地上草柳地区出土の３群の細石刃、すなわち上草柳第１地点第Ⅰ文化層Ａブロック（103 点）・同Ｂブロック（44点）・上草柳第３地点中央第Ⅰ文化層（96点）の細石刃について筆者が実施した顕微鏡観察によると、より長い折断部位ほど顕著な微小剥離痕が認められ、また一定の長さ・幅以下の細石刃においては微小剥離痕は認められない傾向が看取された。その微小剥離痕を使用痕として考えたとき、その折断部位の利用あり方か

ら、その折断についてはより長い刃部確保をめざしていることが想定された（堤1984）。ただしここでは、使用痕としての微小剥離痕そのものの性状が追及されるには至らず、二義的な使用のあり方が描かれたにとどまった。

多摩ニュータウンNo.769 遺跡の黒曜石製細石刃126 点については、大浦・阿部らによる顕微鏡観察が試みられ、そのうちの約半数の細石刃に、使用痕と考えられる「刃部と平行する高密度な線状痕」が検出され、有意義な成果をあげた（大浦・阿部1986）。おそらく細石刃からの有意なまとまりをもつ線状痕の抽出は、これが最初であろう。

一方、荒屋遺跡の調査資料において実施された使用痕分析では、「完形ないしそれに近いものから11点を選び、金属顕微鏡で観察したが、全体に表面の保存が悪く、使用痕の判定が難しい。２点の縁辺に使用痕の可能性のある摩耗痕が認められるが、具体的な機能は推定できな」かったという（東北大学考古学研究室1990）。出土した膨大な細石刃について今後の使用痕研究の展開が望まれるところである。



第３図
荒屋型細石刃
の使用痕

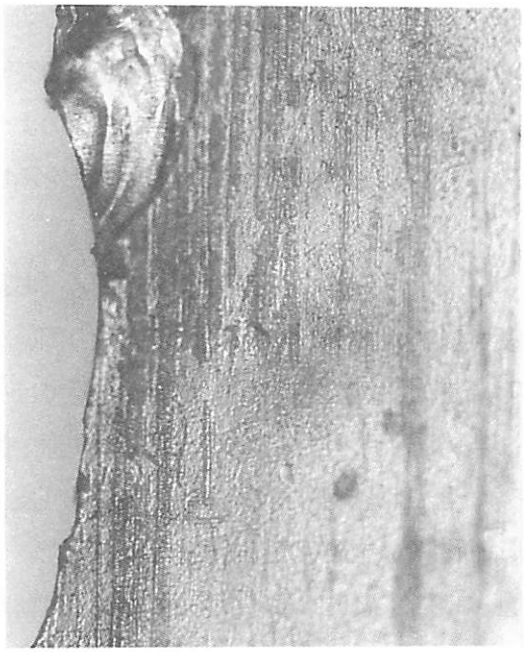
筆者がおこなった野辺山中ッ原第５遺跡Ｂ地点の黒曜石製細石刃の152 点の金属顕微鏡観察では、そのうち８点と少ない数ではあるが、細石刃の片側に刃部と平行する濃密な線状痕が認められ、またその方向もとらえられた。そしてそれらについては「植刃器の軸と平行した状態で正位もしくは逆位で植刃され、あるいは柔らかい対象物の切断に関して、側縁と平行する一方向に働きかけたものである」という結論が導き出された(第４図)。

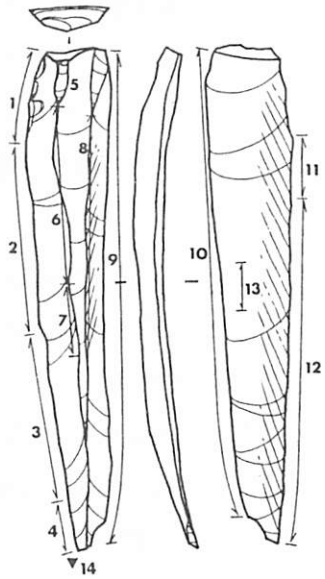
ここで特に多摩ニュータウンNo.769 遺跡および中ッ原５Ｂ地点の黒曜石製細石刃の、使用痕分析から、「刃部と平行する濃密な線状痕」の存在が注目されたわけである。

さて、細石刃が働きかけた加工対象物を推定するためには、ポリッシュの検出が不可欠である。しかし、もし仮に細石刃が狩猟具の刃部として埋め込まれていたことを想定してみた場合、その運動回数の総体的な少なさが考えられることから、ポリッシュの検出が容易でないことは察しがつく。一方、加工具の刃部として細石刃が機能していた場合には、当然ポリッシュが観察されても不思議はないはずである。

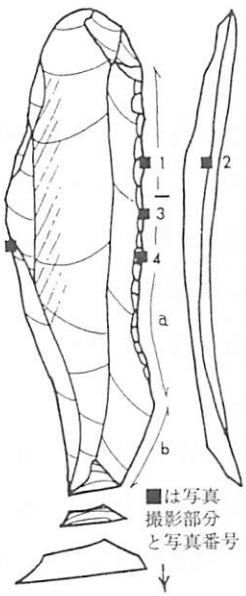
昨今、中ッ原第１遺跡Ｇ地点（５Ｂ地点の500m東に位置）の黒曜石製細石刃の26点について、筆者が金属顕微鏡観察をおこなったところ、そのうちの１点に興味深い使用痕が観

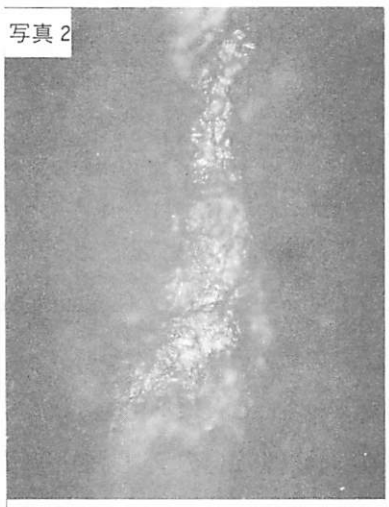
察された（堤1993）。その使用痕とは、調整加工のなされた片側の側縁の表裏両面に認められる側縁に直交する線状痕であり、御堂島のいうＥタイプ（註１）（御堂島1986）に近いポリッシュを伴うものであった（第５図）。一方、反対の側縁からは一切線状痕は検出されなかった。御堂島によれば、Ｅタイプのポリッシュは乾燥した皮に対して作業をおこなった時に特徴的に生じるものであるという。このことからこの細石刃は、「中程度の硬



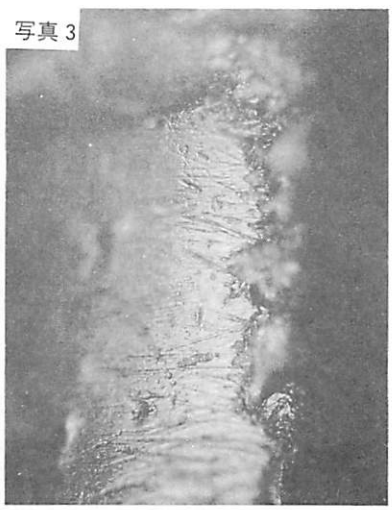


第４図　中ッ原５Ｂ地点の細石刃使用痕





ポリッシュ（Ｅタイプ？）（×200）



側縁に直交する濃密な線状痕（×200）

第５図　中ッ原１Ｇ地点の細石刃使用痕

さの物質（あるいは乾燥皮）のスクレイピングにもちいられた」と結論された。細石刃によるスクレイピングという作業は、その想定にやや難があるかもしれないが、その事例が特殊かどうかは別にしても、観察による事実として動かし難い。

この使用痕は、とりあえずは１点のみという量的なまとまりには欠けるものの、多摩ニュータウンNo.769 や中ッ原５Ｂ地点の細石刃にみられた「刃部と平行する濃密な線状痕」とはまったく正常を異にするものでありきわめて興味深い。「刃部と平行する方向の切断」と「スクレイピング」という対置的な機能の二者は、細石刃が、いくつかの道具の交替可能な刃部として、いくつかの機能を発揮していたことを想定させる。特に細石刃のような簡便な石器は、一器種が一機能のみと結び付いていたという限定ができないことを示した事例といえる。

ちなみに梶原らは、中国甘粛省の鴛鴦池（えんおうち）遺跡57号墓出土の植刃器（およそ４千年前のもの）に装着された細石刃の使用痕分析から、この植刃器は「かなり固いか乾燥した状態の肉や皮に対し、全体的には刃の長軸に平行して使用され、基部付近では一部直交方向に使用されたと推定され」「皮・肉の切断具と考えられる」という（梶原・佐川・謝1993）。加えて梶原は使用痕研究から導き出される植刃器の機能として、①「皮・肉の切断具」②「刺突具」③「イネ科植物の切断具」の機能が考えられると指摘した。

以上の研究成果は、従来の「細石刃＝刺突具の刃部」という単純な図式を描くには難があることを示している。

４　植刃のあり方を考える

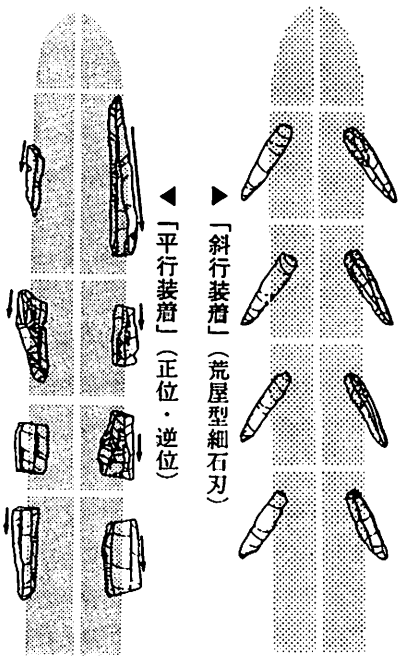
「細石刃がどのように植刃器に装着されていたか」という問いについては、無論植刃器そのものが発見されれば、ひとつの見通しを得ることができるだろう。しかし周知のとおり、列島内においては植刃器の発見例はいまだない。そこでその類推資料として、大陸での出土事例がより有効なものとなってくるわけである（Sagawa1990、小畑1992・1993）。ただ、細石刃そのものから装着の手掛かりがまったく得られないかというと、使用痕などを手掛かりにすれば、そのあり方をとらえることは不可能ではない。

たとえば、藤本が分析した（藤本1982）北海道の７遺跡の細石刃の幅の分布と加工痕のデータを解釈した木村は（木村1983）、広郷遺跡Ｃ地区の5㎜ 幅の細石刃において、左と右それぞれに損傷が集中する傾向を読み取り、両側タイプの植刃器の存在を推定している。一方紅葉山遺跡では、幅12㎜の細石刃において右側縁のみに損傷が集中することから、

片側タイプの植刃器の存在が推定されるのだという。幅と損傷の属性分布を有効に解釈した、植刃器のあり方をめぐる有意義なアプローチである。

一方、堤は、中ッ原５Ｂ地点の細石刃にみられた刃部と平行する濃密な線状痕が、片側縁に限って認められることから、その細石刃は、植刃器の軸と平行した状態（平行装着）で線状痕ない側が埋め込まれたもの推定した。また、その線状痕から推定される細石刃の運動方向から、細石刃が正位（頭部側が先に向けられる場合）で植刃される場合と、逆位（尾部側が先に向けられる場合）で植刃される場合とがあることを想定した。

すなわち、植刃器に対する「平行正位装着」と「平行逆位装着」の二者のあり方が想定されたことになる（第６図）。



※ただし、連続して装着されたこと、両側に装着されたことの直接的な証明は難しい。

第６図　細石刃の装着方法の想定

これに対し、「斜行装着」は、「荒屋型細石刃」（綿貫・堤1987）において推定できる。すなわち、「荒屋型細石刃」は、完形細石刃において、加工痕が細石刃の表面右側縁と裏面右側縁先端に認められるという特徴をもっている。この加工痕が機能部としてシャフト外側に出されたと仮定すれば、必然的に「斜行装着」が想定されることになろう。つまり細石刃をカエシにしたタイプの植刃器の存在が考慮されるのである（註２）。

むろんこうした考察はいくつかの前提のもとになされるものであり、推定の危険性を拭い去れないが、植刃器の出土をみない現状にあっては数少ないアプローチのひとつであり、その分析例・統計を増すことによって、植刃のあり方の具体像を描き出すことが可能となろう。

５　おわりに

繰り返し述べるが、細石刃についての機能的アプローチの当面の課題は、例えば１ブロックの出土資料など有意なまとまりをもつ資料について、継続的に顕微鏡観察がなされることであろう。むろんそこには、使用痕分析の普遍化という、さらに大きな課題が横たわ

っているわけである。

使用痕研究のなかで、特にポリッシュ研究は、金属顕微鏡と膨大な実験データの集積とを必要とし容易に手がつけられない面があるが、微小剥離痕や線状痕は実態顕微鏡を用いても観察が可能である。いくつかの施設で導入されつつある実態顕微鏡を用い、ひとまず線状痕のあり方などが観察されることも無意味ではなかろう。

なお、本稿の論旨は、細石刃の使用にかかわる二・三の課題という点において、そのいくつかのエッセンスを抽出することにあるため、必ずしも研究史な網羅がなされていないことをおことわりしておきたい。

註

1　御堂島によるEタイプのポリッシュとは、細かな凹凸が多数みられる鈍いポリッシュで、発達すると凸部が丸みを帯びるがそれ以外は粗れた面であり、細かなピットや線状痕が多数みられ、ポリッシュは刃部縁辺の狭い範囲に限られるという（御堂島1986）。

2　こうした装着方法の想定に呼応して、荒屋遺跡から出土した膨大な細石刃についての使用痕研究が望まれるところである。

なお、すでに実施された荒屋の数点の細石刃の使用痕分析では、二次加工のない側にキズ（使用痕？）が認められており、加工部位が機能したとする筆者の仮定とは齟齬を生じている。

引用・参考文献

阿部祥人・大浦真紀子　1986　「細石刃の使用痕」『史学』56-2

梶原洋・佐川正敏・謝駿毅　1993　「中国新石器時代の植刃器の機能をさぐる」『旧石器考古学』46

木村英明　1983　「細石器（北海道地方）」『季刊考古学』4

小畑弘己　1992·1993　「シベリアの植刃器」(1)(2)『旧石器考古学』45·46

織笠　昭　1983　「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物』

杉原荘介・小野真一　1965　「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』3-2

芹沢長介　1959　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋彫刻刀について」『第四紀研究』1-5

堤　　隆　1984　「上草柳地区出土の細石刃について」『一般国道246 号（大和・厚木バイパス）地域内発掘調査報告書』II

堤　　隆・綿貫俊一　1987　「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』54

堤　　隆　1991　「細石刃に残された損傷」　『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』

堤　　隆　1993　「スクレイピングにもちいられた細石刃」『佐久考古通信』58

東北大学考古学研究室　1990　『荒屋遺跡－第２次・３次発掘調査概報－』

藤本強　1982　「常呂川流域の細石刃」『北海道考古学』18

御堂島正　1986　「黒曜石製石器の使用痕」『神奈川考古』22

Masatoshi.Sagawa.　1990　Some characters of composite tools set with bledes and microblades in the Neolithic China.　『伊藤信雄先生追悼論集』

東アジアの植刃器について

小畑弘己

1　はじめに

東アジアにおける細石刃文化の発生は、近年では、23,000年前の最終氷期初頭にあるという意見が一般化しつつある（木村 1992、加藤 1993a）。それは、マリタ遺跡においてクサビ形石核の原形（プロトタイプ）がすでに出現しており、石刃の小型化の流れの中でクサビ形石核による細石刃剥離技術の伝統が産み出されたという（木村 1992・1993）。しかし、シベリア出土の骨角製品をみても、この段階ではいまだ細石刃を挿入する溝をもつ骨角器（植刃器）は発見されていない。これは、中国においても同じである。細石刃文化が発達するは17,000～18,000年前以降で、細石刃の使用はシベリアと中国北部を中心にそれ以降新石器時時代まで継続する。植刃器は、刃の金属器化を経て、それ自身が金属器化するまで存続し続けるが、それまでの刃の形態や用いられる器種は地域によって異なっていた。

2　植刃器研究の経過

シベリアにおける植刃器については、アブラモワ女史らが東アジアの狩猟と狩猟具について概観する中で、その形式変遷を述べている（アブラモワZ.A・グレチュキナT.IU 1985）。マリタ遺跡やアチンスク遺跡のマンモス牙製の槍から、アフォントヴァ文化になって小さな幅広の溝をもつ槍先へと変化し、有溝の植刃器もこの時期に出現する。そして、ココレヴォ文化になってトナカイの角製の植刃器が発達したとしている。アフォントヴァ文化にある角製槍先の溝は、細石刃をはめ込むには浅く幅広で、道具の重量の軽減や血樋としての機能を果たしたものと考えられている。

ギリャとピトゥリコらは、シベリアにおける旧石器時代から新石器時代までの植刃器に関して、その出土遺跡と特徴について述べている（ギリャE.YU・ピトゥリコV.V 1992）。この中で、シベリアの植刃器の特徴として、膠着材を使用しないという点で東ヨーロッパやウラル地域と異なる装着法があったこと、また細石刃は頭部を除去したものが使用され、植刃器の両側辺で細石刃が裏表の関係で配置されることなどを指摘している。そして、新石器時代になると、刃の作り方において２つの異なる伝統が存在したと主張している。そ

の一つはバイカル地域にみられるような、無加工の石刃から部分加工の石刃、そして両面加工の植刃へと変化する伝統であり、もう一つはヤクートの晩期新石器時代にみられるような旧石器時代以来の未加工の石刃を使用し続ける伝統である。

本邦において、初めてシベリア発見の植刃器に着目し、エニセイ流域とアンガラ以東の槍先型植刃器に片刃と両刃の違いがあることを指摘したのは木村である（木村 1983）。そして、このバイカル湖周辺の細石刃文化と北海道の細石刃文化の共通性を、植刃器側からも補強した。

加藤晋平と松本は、横断刻面型（荒屋型）彫器と両側縁型植刃器の結び付きを強調し、アンガラ川上流・ザバイカル以東の地域と西シベリアでは別の植刃器製作伝統があったと述べている（加藤晋平・松本 1984）

これらの研究を受けて、最近では小畑と加藤の研究が発表された。小畑は旧石器時代から中石器時代のシベリアの植刃器について集成を行い、その形式変遷と製作技術について述べた（小畑 1992、1993a、1993b）。この中で、植刃器の出現については 16,000年前をさほど遡らないこと、中石器時代にいたって多様な器種へ分化していくこと、その背景に漁撈の発達があることなどを指摘した。

また、加藤は東シベリアの後期旧石器時代の骨角製槍先を扱う中で、溝をもつ植刃器の出現は、20,000年前後にあたるIII期にあり、次のIV期（18,000～12,000年前）になって発達し、細石刃技術とともに地域的な違いが明確化すると述べている（加藤 1993b）。また、植刃器の中でも骨角製槍先の類型が増加する背景として、トナカイを主とするシカ類に対する狩猟技術の確立を考えている。また、アブラモワが先の論文で引用したマイエンドルフやアーレンスブルクの狩猟痕をもつシカの骨やハイ・ファーロング遺跡のオオシカの骨製投槍の例を引き、シカの捕獲において固定型（持槍）と離頭型（投槍）という二者の使い分けがあったと想定している。この離頭型が、エニセイとバイカル・アンガラ流域で異なり、後者では逆刺付の銛頭が使用されたと考えている。

中国の植刃器については佐川の研究に詳しい（ Sagawa 1990）。中国では、旧石器時代の植刃器は発見されていないが、 7,000年前頃まで槍先もしくは銛先形の植刃器が東北地方および西北地方に分布し、新石器時代になると短刀形と短剣形が主体となり、東北地方では３～４千年前に両面加工の植刃が出現したと述べている。また最近では、この佐川らによって鴛鴦池の植刃器の使用痕の分析が実施され、革や肉の切断に使用されたことが明らかにされている（謝・梶原・佐川 1993）。

3　植刃器の発生時期について

植刃器は、中国の出土例が中石器時代以降に限られることから、東アジア地域ではシベリアの例が最も古いことになる。そのシベリアで最も古い年代をもつものは、北バイカルのクルラII遺跡の第2文化層から出土した両刃の槍先型の植刃器である（第4図3）。これは、同層のC14年代が24,060±5700年B.P.と、年代的に古すぎるきらいがあるし、形態的にもオシュルコヴォやヴェルホレンスク山遺跡から出土したものに類似していることなどから、時期的に下る可能性がある。次に古い例としては、サルタン氷期最寒冷期に位置づけられるエニセイ流域のアフォントヴァ山II・III遺跡下層である。血樋をもつマンモスの角製の槍先などとともに片刃の槍先型の植刃器が発見されている。このアフォントヴァ山II遺跡は、20,900± 300年B.P.のC14年代をもつことから、片刃の槍先型の植刃器は、例数は微弱ながら20,000年前に出現していたことになる。しかし、このエニセイ流域で植刃器の出土例が増加して安定したものとなるのは、16,000年前以降のココレヴォ文化になってからである。アフォントヴァ山II遺跡は、斜面堆積層であるという不確実な要素を残している。また、バイカル湖・アンガラ流域以東の両刃の槍先型の植刃器も、年代的にはクルラ例を除けば、ヴェルホレンスク山I遺跡などの12,000年前以降の時期を中心としており、エニセイ流域に匹敵するような古い年代の確実な資料は存在していない。

以上のことから、筆者は両地域における植刃器の出現および発達の時期をおよそ16,000年前以降であると考えている。この植刃器の出現時期が確実なものとなるには、今少しの資料の蓄積が必要であろう。

中石器時代の植刃器は、バイカル湖周辺やアンガラ流域の諸遺跡でその様子をよく知ることができる。ヴェルホレンスク山I遺跡では、槍先以外に立川型の尖頭器に似た投槍型（第4図 10～12）が、またウスチ・ベラヤ遺跡ではヤス型（同 13）など新しい器種が出現している。また、ウスチ・ベラヤ遺跡のナイフ型の植刃器（同 14）には骨が使用されており、植刃器の素材として角（主にトナカイ）から骨へと変化する徴候がこの段階に認められる。旧石器時代には投槍（槍）とナイフに限られていた植刃器が、多様化していく現象として捉えられよう。

4　旧石器～中石器時代の植刃器の分類と機能について

さきに見てきたように、植刃器は大きく両刃と片刃に分類できる。しかし、両刃の中には、軸の長さ全体にわたって刃を付けず、それぞれ部分的もしくは補完的に刃を配置した

ものも見受けられる（第2図 A2 ）。これらは、刺突具の中でも槍先や鏃として機能したものと考えられる。筆者は刃の位置関係を重視して分類を試みたが、加藤はこれに加えて基部の形状に注意を払っている（第3図）。しかし、むしろ基部の処理のやり方は、投げられたものと手に支持されたまま使用されたもののどちらにも共通する。それは、離頭型の一つとしてシカ用の銛と考えられた銛頭（ 同 Ⅶ・Ⅷ類）についても共通している。この基部の形状は、投げて使用したか否かの判定材料とは考えられないのである。また、対応する投槍（離頭型）の一つと考えられた植刃器（同 Ⅲb・Ⅴb・Ⅵb類）には、紐止めが存在しないなど、離頭銛とするには構造上無理があると思われる。

両刃の槍先型の植刃器は、バイカル湖周辺やアンガラ流域に主に分布しているが、時期的には旧石器時代の終末から中石器時代にかけての時期に属する。先の逆刺付の銛頭は、同じく旧石器時代末から中石器時代にかけて出現する。これらを出土する遺跡では、魚の骨や鱗が多数検出されており、漁撈との結びつきが強い。ヴェルホレンスク山Ⅰ遺跡からは、ノロやアカシカなどのシカ類とともに、サケ属、チョウザメ、カマス、オークニ（Ⅲ層）、サケ属、タイメン、チョウザメ（Ⅱ層）などの骨が発見されている。また、オシュルコヴォ遺跡では炉の中に魚骨が充満した状態で発見されているし、ウスチ・ベラヤ遺跡では、中石器時代の文化層のすべてにわたって焚火跡や貯蔵穴などから魚の骨が検出されている。エニセイ流域においてもココレヴォ遺跡群から魚骨が発見されている。

このように、東シベリアでは少なくとも12,000年前から漁撈の発達を示す自然遺物の増加や釣針、逆刺付銛頭、ヤスなどの漁撈具の出現という現象が観察される。釣針や銛頭、ヤスなどの漁具の発達は、専門化された道具の出現を意味し、道具の分化を促した。植刃器においても、ヤス状のもの、短剣状のもの、ナイフなど、それまで明確でなかった形態の変化もみられ、多様化してくる。以上のような状況をみると、東シベリアにおける銛の出現は、シカ猟の発達と結び付けるより漁撈具としての発達を考えるほうが自然であろう。

バイカル湖周辺の新石器時代の植刃器は、両刃は剣もしくは槍先、片刃はナイフとして明確な機能分化を果たしている。これらを含む墓の副葬品の中には、フリントや軟玉製の定型化したナイフが伴うことから、この植刃ナイフの用途は推定が困難である。おそらく、大型魚や獣の毛皮を切り裂くものとして使用されたのであろう。

5　石器製作技術の変化と細石刃文化の終焉

細石刃文化をいかに定義付けるかは、大きな問題であるが、すくなくとも細石刃を使用

した石器群をもつ文化とすれば、その終焉の状況はモザイク状と言わざるを得ない。

東シベリアの細石刃文化を特徴づけたクサビ形も、中石器時代の中頃にはその打面の長さが短くなり、連続側方剥離による打面形成が顕著になって、次第に類三稜形へと変化していく。バイカル湖周辺とアンガラ流域をみると、両面加工の石鏃と植刃がおよそ8,000～7,000年前から出現し始めるが、クサビ形石核はその直前まで残る。この時期には多ファシットの多面体彫器や抉りをもつ礫製斧などが出現する。ザバイカル（ブリヤート）においてはニジュネベレゾフスキー文化（ 5,000年前）になって、東ザバイカルではチンダント文化（ 5,500年前）になって両面加工の石鏃が出現する。アルダン・中下部レナ流域では、5,000～6,000年前である。沿海州において両面加工の石鏃が出現するのは、新石器時代の始まる7,000 年前以降であろう。この時期アムール中下流域には石刃鏃をもつ石器文化が展開している。

しかし、細石刃から両面加工の植刃への変化は、革命的に後者が前者に取って代るといったものではない。中国においては細石刃が青銅器の時代になっても使用されているし、シベリアにおいても細石刃と部分加工の細石刃と両面加工の植刃がそれぞれの用途に合わせた植刃器に装着された例が一つの墓に副葬されていた。その変化は用途に応じて漸次進行していったのは言うまでもない。アンガラ流域のグラスコーヴォ期の墓にも、植刃のナイフは青銅器や磨製石器とともに副葬されており、道具によって金属器化するものが異なっていたという状況であろう。中国における短剣型の植刃器が遼寧式銅剣に変化した可能性は議論の分れるところではあるが、多分に植刃器から変化した痕跡をもつ青銅器や植刃器に青銅製の刃が装着された例がその可能性を示している（第7・8図）。スュリデュカル遺跡出土の青銅製ナイフは、紀元前14～13世紀のビロイ川流域のウスチ・ミリ文化に属する資料であるが、その形態は両面加工の植刃をはめた骨製ナイフに極めて類似している。

ギリャらが指摘した植刃器の２種の伝統は、鏃型の植刃器製作にもあてはまる。西シベリアやウラルでは鏃形の植刃器が発達するし、ヤクートでも同様の製品が発見されている（第6図 12･13）。石刃鏃や石刃技法が高度に適合した地域では、両面加工の鏃は発達していない。これは中国東北部にのみ鏃型の植刃器が分布するのと一致する。一方バイカル湖周辺でこの両面加工技術が適応するのが最も古いことは、両面加工の鏃の起源がより南部の地域にあったことを示唆しているのではなかろうか。ただし、C14年代のギャップや起源となる文化の問題などが未解決である。柳葉形ないし雨滴形の両面加工の小型の尖頭器は、バイカル湖周辺のみでなく、アルダン流域にも旧石器時代終末から中石器時代に存

在している。しかし、初期の鏃は平基ないし凹基の三角形であり、これらとの系統関係は弱い。

【主な引用・参考文献】

Abramova,Z.A.,Grechkina,T.IU.1985:Ob okhote i okhotnich'm vooruzhenii v pozdnem paleolite vostochnoi Sibiri./ KSIA,181,44-49.

Girya,E.IU.,Pitul'ko,V,V.1992:Vkladyshevye orudiia v Paleoliye-Neolite Sibiri./Arsen'evskie Cheniia Tezicy dokladov regional'noi nauchnoi konferentsii po problemam istorii, arkheologii i kraevedeniia.161-165.

Obata Hiroki 1993a:Grooved bone shafts with microblades in the Siberian Paleolithic and Mesolithic./シンポジウム「北太平洋の考古学」発表要旨. ロシア科学アカデミー極東国立歴史考古民族学研究所主催.1993.4.ウラジオストック.

Sagawa Masatoshi.1990:Some characters of composite tools set with blades and microblades in the Neolithic China./『伊藤倡雄先生追悼考古学古代史論功』67-89.

云　翔 1988:「試論石刃骨器」/『考古』1998-9.825-835.

小畑弘己 1992:「シベリアの植刃器（１）」/『旧石器考古学』45.11-22.

小畑弘己 1993b:「シベリアの植刃器（２）」/『旧石器考古学』46.31-45.

加藤博文 1993a:「サハリン・北海道地域における細石刃技術の変容の様相」/『古代文化』45-4.3-12

加藤博文 1993b:「東シベリア後期旧石器時代の骨角製槍先について」/『古代文化』45-7.11-26.

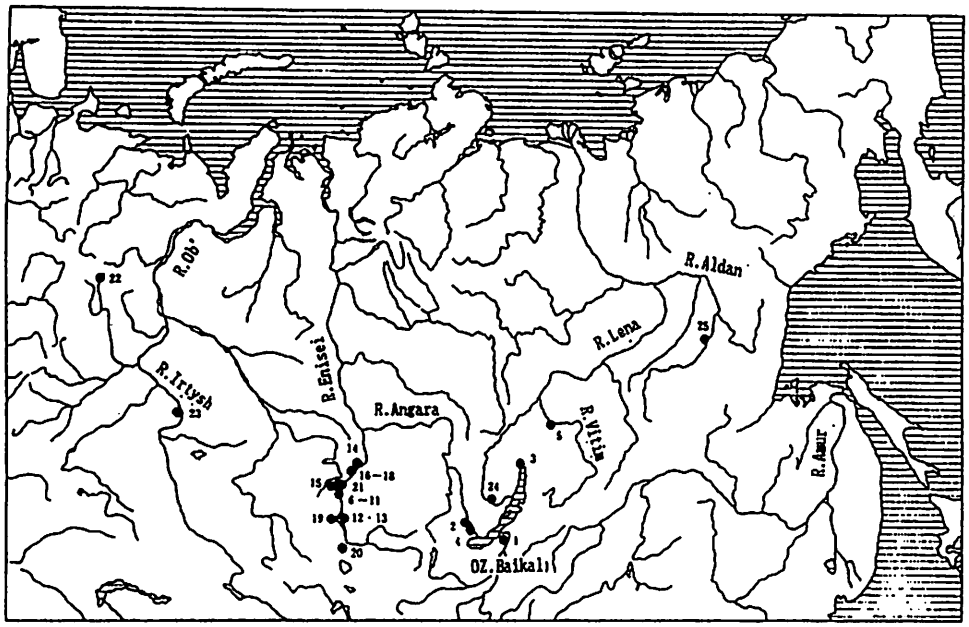
加藤晋平・松本美枝子 1984:「日本細石刃文化の源流」/『史艸』25.39-82.

木村英明 1983:「細石器（北海道）」/『季刊考古学』4.70-72.

木村英明 1992:「シベリアの旧石器と「礫器伝統」について」/『大分県丹生の研究』.345-387.

木村英明 1993「マリタ遺跡（３）」/『旧石器考古学』46.3-20.

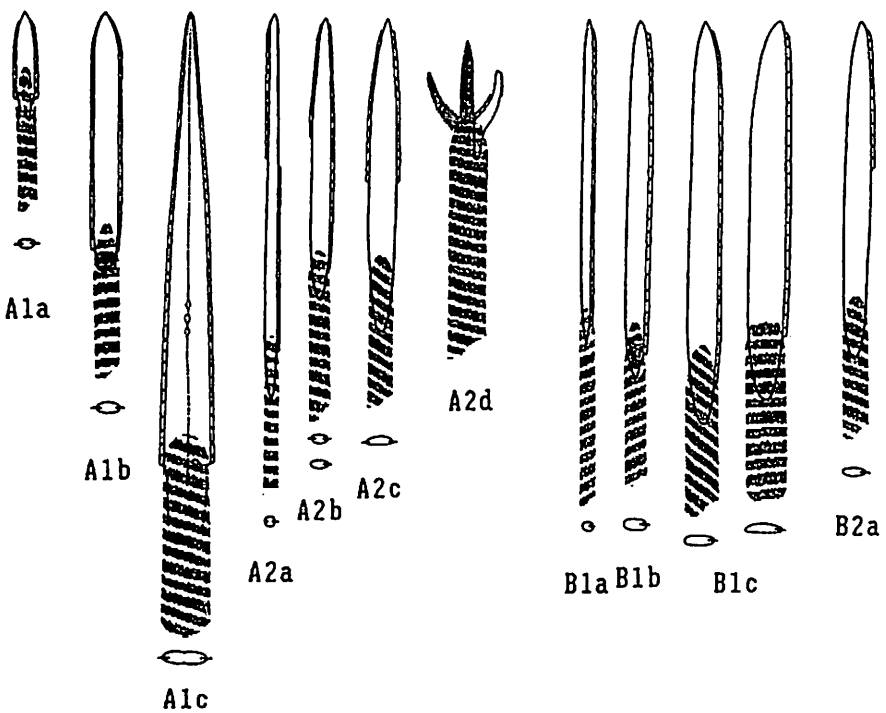
射駿義・梶原洋・佐川正敏 1983:「中国新石器時代の植刃器の機能をさぐる」/『旧石器考古学』46.73-82.



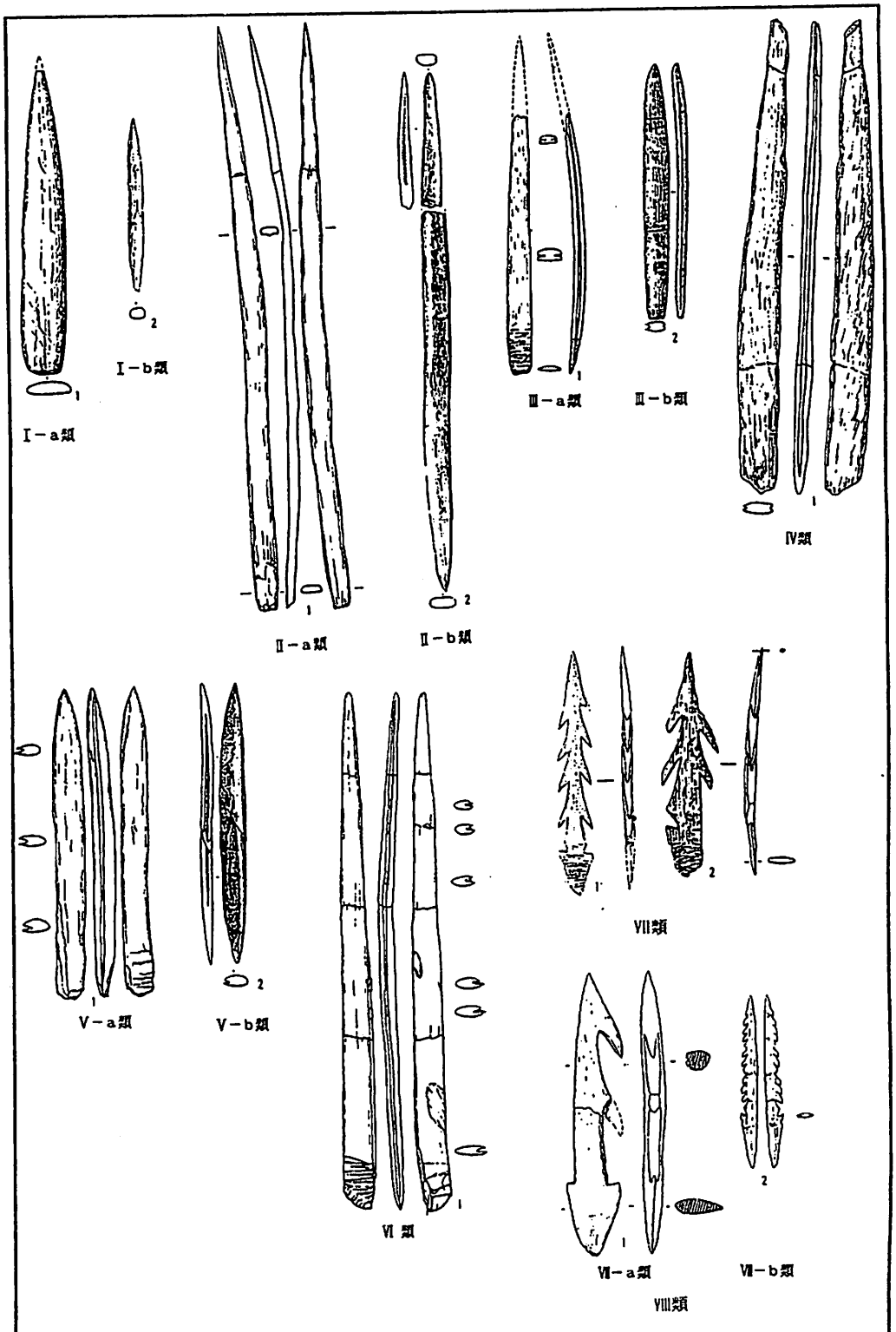
第１図　Sites yield grooved bone shaft
of the Siberian Paleolithic and Mesolithic

1. Oshurkovo 2. Verkholenskaia Gora 3. Kurla I·II 4. Ust'-Belaia
5. Bolishoi-Iakor' 6～11. Kokorevo I·II·III·IV·IVa·VI 12.13. Tashutyk I·II
14. Biriusa 16～18. Afontova Gora I·II·III 19. Maina 20. Kantegir I
21. Listvenka 22. Shaitanskaia Peshchera 23. Chernoozerie II 24. Makarovo II
25. Bel'kachi I

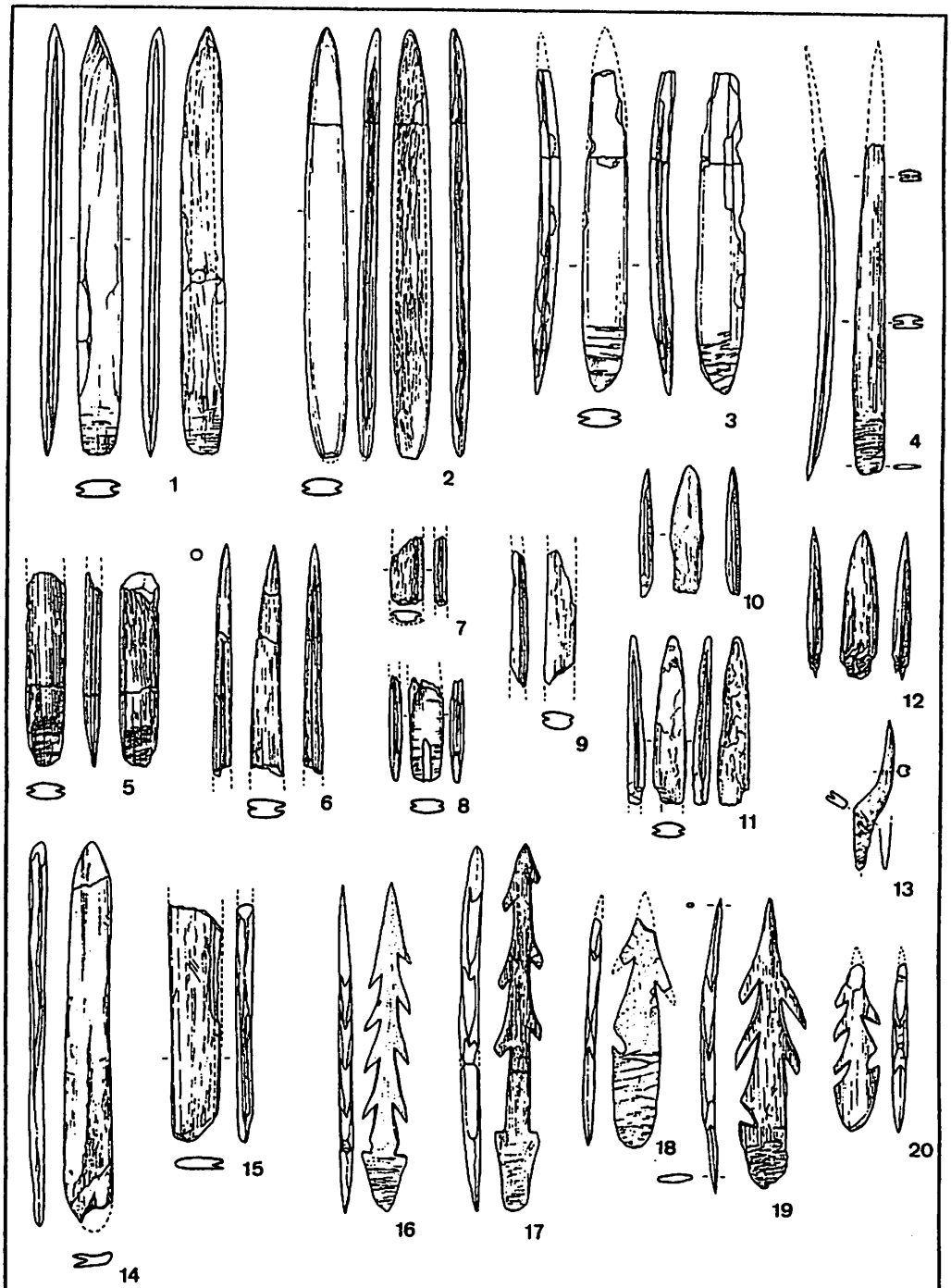
（Obata 1993aより）



第２図　Types of Grooved bone shaft　（Obata 1993aより）



第３図　東シベリアの骨角製槍先の分類（加藤 1993bより作図）

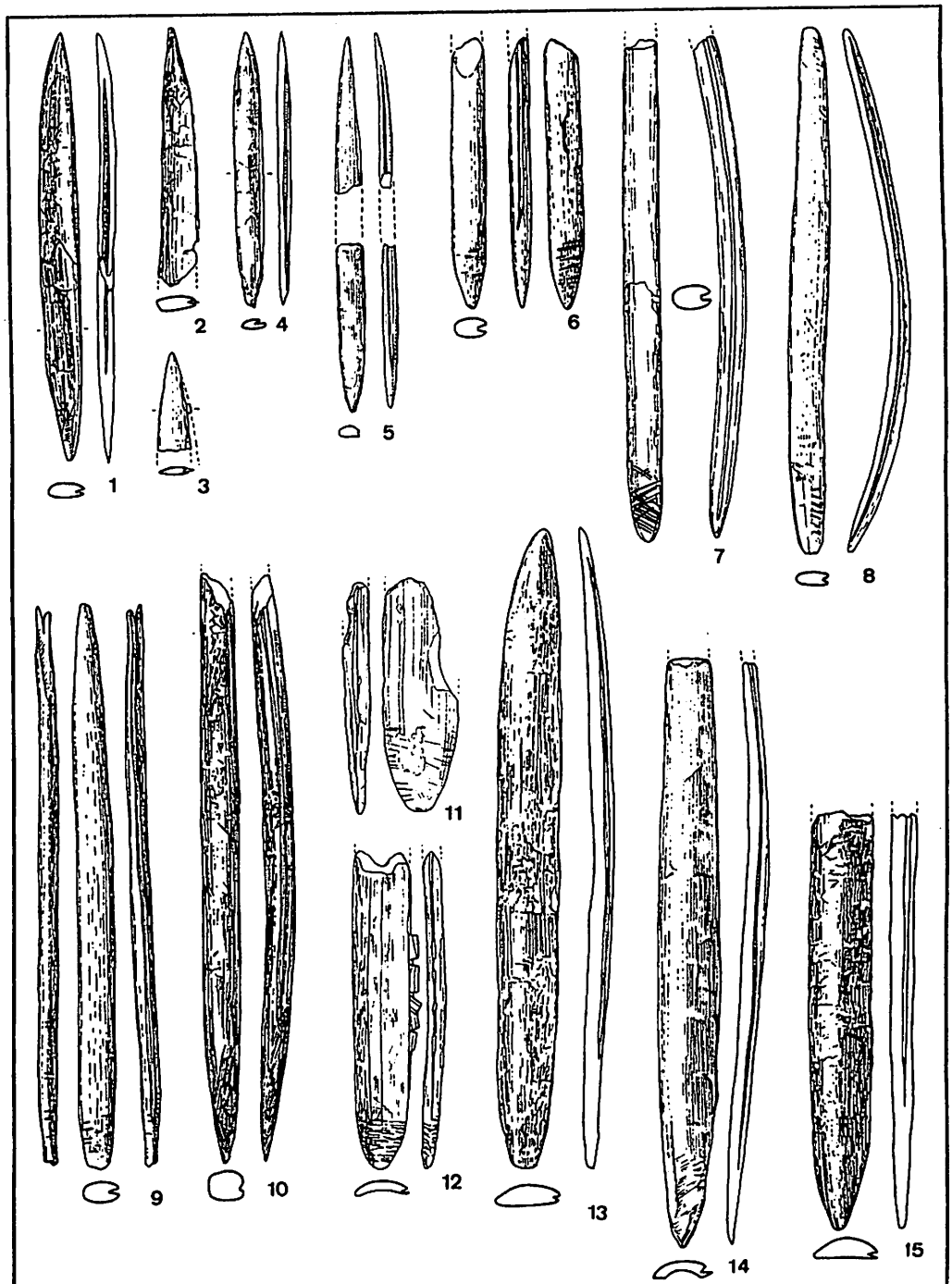


第４図　バイカル湖周辺・アンガラ流域の植刃器と銛頭

（小畑 1992より作図）

1･2･15･20:オシュルコヴォ．3･8:クルラⅠ･Ⅱ．4･6･9･13･14:ウスチベラヤ．

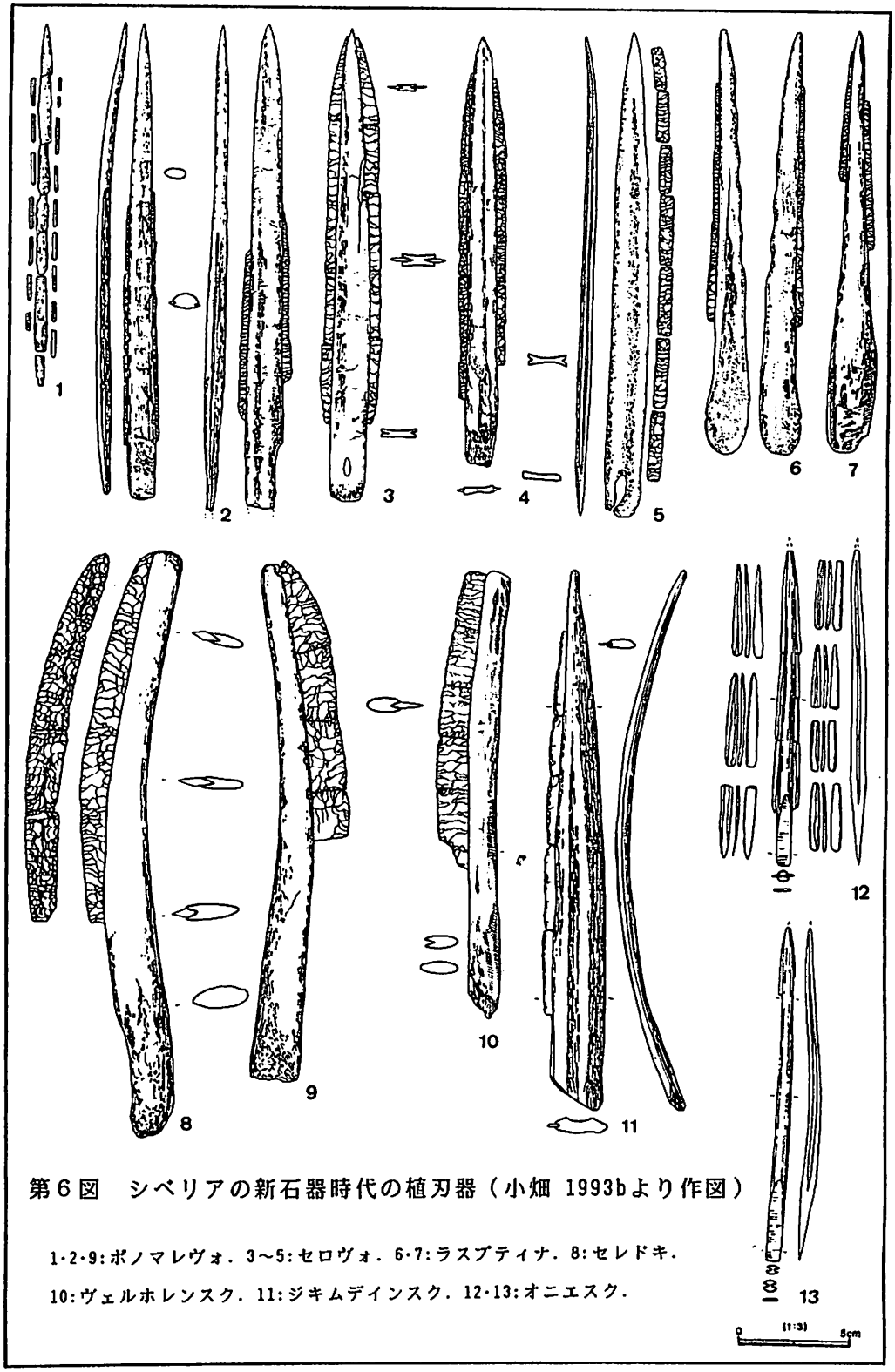
5･7･10～12･16～19:ヴェルホレンスク山Ⅰ．



第５図　エニセイ流域の植刃器（小畑 1992･1993bより作図）

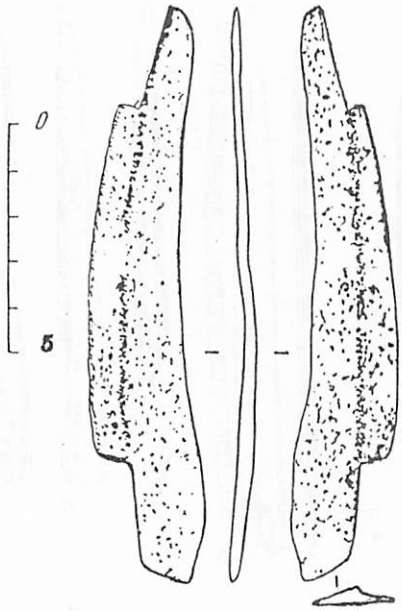
1～4･13～15:ココレヴォⅠ．5:ビリューサ．6･8･9:ココレヴォⅣａ．

7:アフォントヴァ山Ⅰ．10:タシュティクⅡ．11･12:リストベンカ．

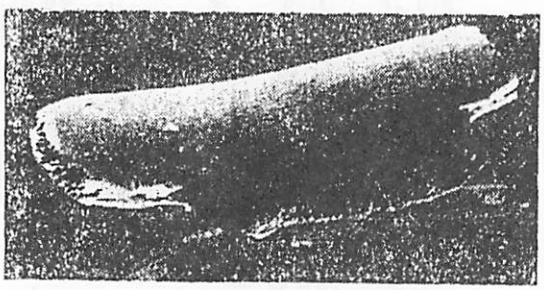


第６図　シベリアの新石器時代の植刃器（小畑 1993bより作図）

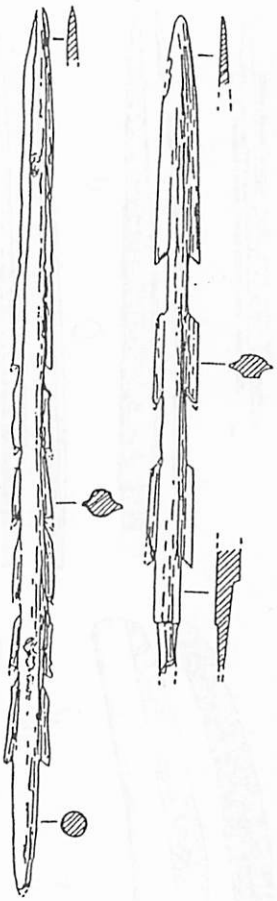
1･2･9:ボノマレヴォ．3～5:セロヴォ．6･7:ラスプティナ．8:セレドキ．
10:ヴェルホレンスク．11:ジキムデインスク．12･13:オニエスク．



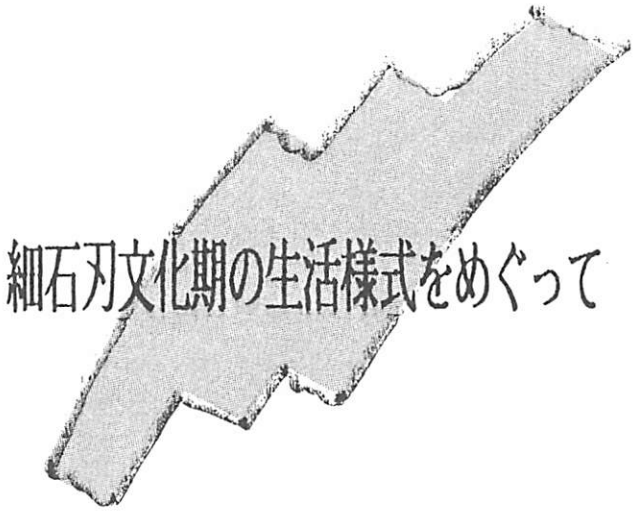
第７図
骨製植刃器を模したと思われる青銅製ナイフ：スュリデュカル遺跡
（V.I.Ertiukov 1990より）



第８図
銅製の刃をはめ込んだ骨製植刃器：臨夏県蓮花公社魏家台子
（田 1983より）



第９図
鏃型植刃器に似た骨製銛：賈湖遺跡
（河南省文物研究所 1989より）



細石刃文化期の生活様式をめぐって

細石刃文化人の生活の一側面として残された石囲い炉や、そのほかの遺構のあり方、そして、その存在の背景についての考察がなされる。

また、細石刃文化期において「内水面漁撈が存在しえたか」という重要なテーゼを含めた、その生業にまつわる問題について議論、一方で細石刃文化期における行動論的な理解に向けての視座が提示される。

細石刃文化の石囲い炉

中村 由克

1　はじめに

細石刃文化における遺構には、住居址、柱穴、土壙、石囲い炉、焼土、礫群・配石などがあげられるが、日本列島ではナイフ形石器文化期にひきつづいて礫群・配石をのぞいては、発見例が少ないのが現状である（辻本，1984）。本稿ではその中の石囲い炉について、旧石器時代の実例を紹介したい。

2　上ノ原遺跡の石囲い炉

1990年に長野県北部の信濃町にある上ノ原遺跡で細石刃文化の石囲い炉が５基直線的にならんだ状態で発掘された。炉址は東西９m、幅１．６mの範囲にあり、炉址を中心に石器、小さな炭化物などが集中する傾向がみられた。焼土や大きな炭化物はみられなかったが、平面形状、礫の焼けたり付着物のついた場所などの特徴から、炉址と判断した（中村，1992）。

3　石囲い炉の出土例

これまで石囲い炉が報告された遺跡は、次のとおりである（鈴木，1983；笹原・瀬川，1992）。

（細石刃文化）

休場遺跡	静岡県沼津市	２基	
上ノ原遺跡	長野県上水内郡信濃町	５基	

（尖頭器文化）

サザランケ遺跡	神奈川県愛甲郡清川村	２基	
駒形遺跡	長野県下諏訪郡下諏訪町		

（ナイフ形石器文化）

大平山元Ⅱ遺跡	青森県東津軽郡蟹田町		石囲い炉？
御渕上遺跡	新潟県南蒲原郡下田村		石囲い炉？
御小屋ノ久保遺跡	長野県茅野市		石囲い炉？
野台遺跡	静岡県駿東郡長泉町	２基	

下長窪上野遺跡	同　長泉町		
清水柳北遺跡	静岡県沼津市		
柳沢Ｃ遺跡	静岡県田方郡函南町		
観音洞Ｂ遺跡	静岡県三島市	２基	
恩原遺跡	岡山県苫田郡上斎原村		
日ノ岳遺跡	長崎県北松浦郡田平村	４基	
岩戸遺跡	大分県大野郡清川村		石囲い炉？

これらの石囲い炉の詳細は、一覧表のとおりである。

４　石囲い炉の条件

石囲い炉は、現状で見るかぎり後期旧石器時代を通じて形状、属性の変化は見られない。平面形状は、休場遺跡例の２形態がひろく見られる。休場１号、野台２号を典型とするこの字状を呈するものと、休場２号、野台１号、下長窪上野を典型とする円形ないしは半円形、Ｕ字状を呈するものである。大きさは、一般的にはこの字状のものの方が大きく、円形・半円形のものは小さい傾向にある。

構成する礫の大きさと個数は、20～30㎝の大きな礫を10点前後使用する例が典型的である。中には、上ノ原遺跡のようにやや小さな礫を多く用いているものもみられる。この点について、小さな礫を主体とするものは、石囲い炉ではなく礫群とすべきだとする意見がある（笹原・瀬川，1992）。しかし、石囲い炉がきずかれた遺跡の立地条件がすべて同じでなく、大きな礫が入手しづらい環境では、素材礫の選択も多様であったことが予想される。

火が多くたかれた結果として、焼土や灰層が残されていれば、炉址の条件を満たすことになるが、現状で見るかぎり、開地遺跡ではこれらが検出される遺跡は稀である。この場合、炭化物の有無、構成礫の被熱の状況（炉心側が著しい赤化を受けていることなど）が決め手になると思われる。

日本列島では、旧石器時代の遺跡で有機質の遺物が残されにくく、また遺構があまり見られない現状なので、当時の人類の生活と社会を復元するためには、残されたわずかな遺物を頼りに研究を進めていくことが不可欠である。そのための１つの方法として、炉址の存在を追求することは、重要な課題だと思われる。

謝辞　筆者が石囲い炉とかかわるきっかけとなった上ノ原遺跡の調査の際、現場において数々のご援助、ご指導をいただいた、稲田孝司、小野昭、織笠昭、岡村道雄、金山喜昭

表1　旧石器時代における石囲い炉の属性一覧表

No.	遺跡遺構名	形状	大きさ (a)	礫径	個数	焼土	炭化物	炉心側赤化	備考
(細石刃文化)									
1	休場1号	この字状	180X100	20~40	14	+	+	内面炭化物	
2	休場2号	半円形	50	15~30	7	−	−	内面炭化物	
3	上ノ原1号	この字状	165X75	8~13	34	−	+	+	
4	上ノ原2号	円形	80X70	7~14	34	−	+	+	
5	上ノ原3号	この字状？	140X60	6~13	30	−	+	+	
6	上ノ原4号	この字状	140X100	7~14	53	−	+	+	
7	上ノ原5号	？	160X160	8~28	24	−	+	+	
(尖頭器文化)									
8	ザランケ1号	U字状	90X70	10~20	20+	+	+	+	
(ナイフ形石器文化)									
9	野台1号	円形	60	幼児の頭大	15+	−	−	+	
10	野台2号	この字状	60X40	幼児の頭大	9	−	−	+	
11	清水柳北	ほぼ円形	150	10~20	10		+	+	
12	柳沢C	この字状？	90X85	30~12	7	−	−	−	熱残留磁化+
13	下長窪上野	U字状	70X60	10~30	12	+		+	
14	恩原	半円形	40X35	10	10		++	+	
15	日ノ岳II1号	コの字状	70X50	こぶし大	12±			+	
16	日ノ岳II2号	？	60~70			+	+	+	
17	日ノ岳II3号	？	60~70			+	+	+	
18	日ノ岳III層	この字状？	50	こぶし大	8±		+	+	
19	観音洞B1号	土壙炉	50+	30	5				土壙
20	観音洞B2号	土壙炉	50+	30	3				土壙

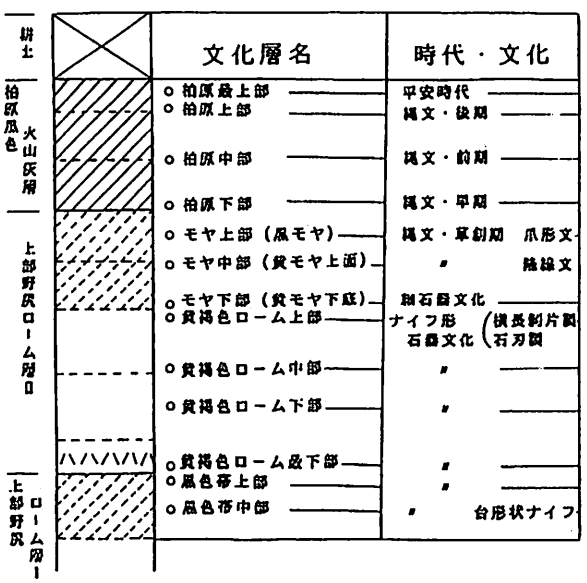


図1　野尻湖遺跡群の文化層

1 立が鼻，2 琵琶島，3 樫ケ崎，4 杉久保，5 川久保，
6 小丸山，7 仲町，8 海端，9 神山北，10 狐久保，11 神山，
12 向新田，13 清明台，14 照月台，15 貫ノ木，16 大久保南，
17 伊勢見山，18 上ノ原，19 緑ケ丘，20 小丸山公園，21 瑞穂，
22 東裏，23 大平，24 柳原（信濃中学校），25 陣場，26 清水東，
27 吹野原，28 砂間

図２　野尻湖周辺の旧石器時代遺跡

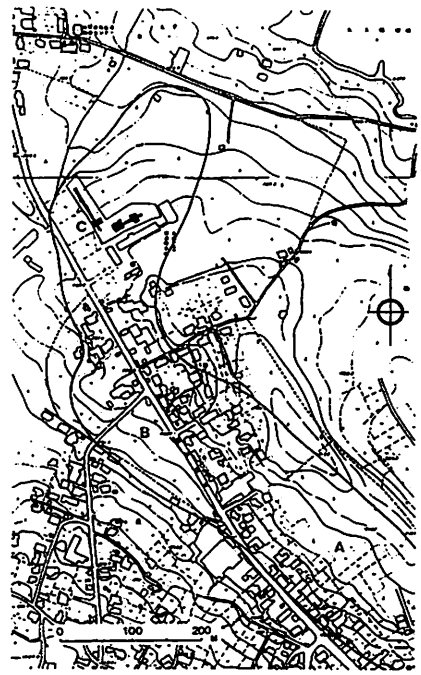
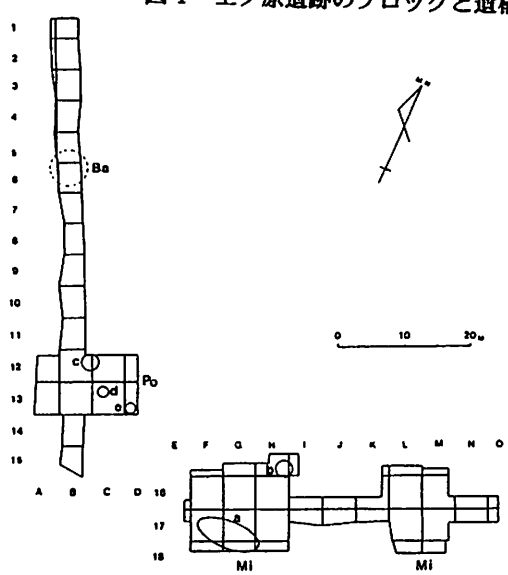


図３　上ノ原遺跡と発掘位置

図４　上ノ原遺跡のブロックと遺構の分布



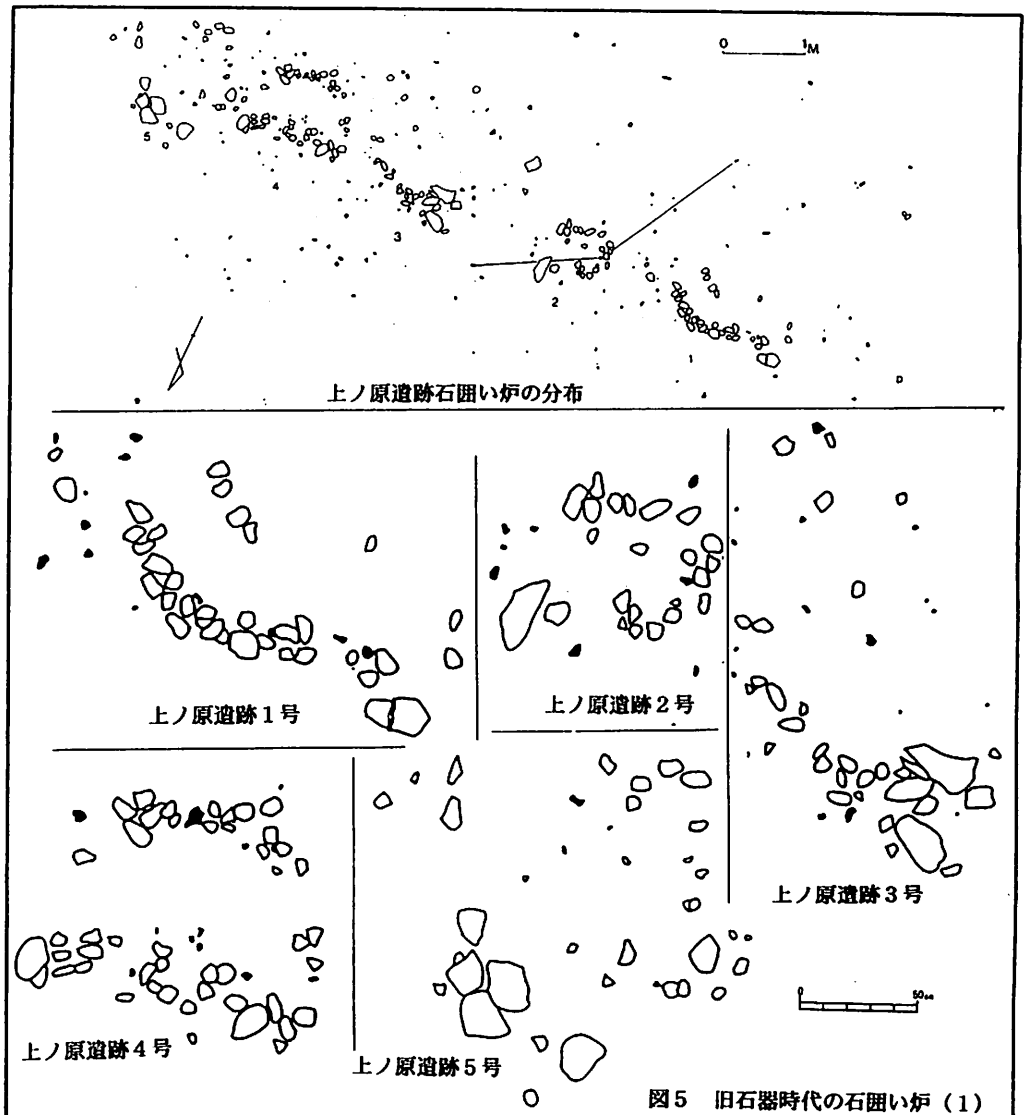


図５　旧石器時代の石囲い炉（１）

表２　上ノ原遺跡石囲い炉の礫

	レ キ 数	レキの円摩度	焼レキ数	黒色付着物礫数	立った礫数	割れ礫数
1号炉址	34	円～亜円レキ 4	20 (59%)	12 (35%)	7 (21%)	14 (41%)
2号炉址	34	円～亜円レキ 4	22 (65%)	13 (38%)	9 (26%)	12 (35%)
3号炉址	30	亜円レキ 3.6	17 (57%)	14 (47%)	7 (23%)	17 (57%)
4号炉址	53	亜円レキ 3.8	44 (83%)	23 (43%)	19 (36%)	14 (26%)
5号炉址	24	亜円レキ 3.4	15 (63%)	4 (17%)	3 (13%)	13 (54%)
合　計	175	亜円レキ 3.8	118 (67%)	66 (38%)	45 (26%)	70 (40%)

円摩度　0－2角礫，2－3亜角礫，3－4亜円礫，4－6円礫

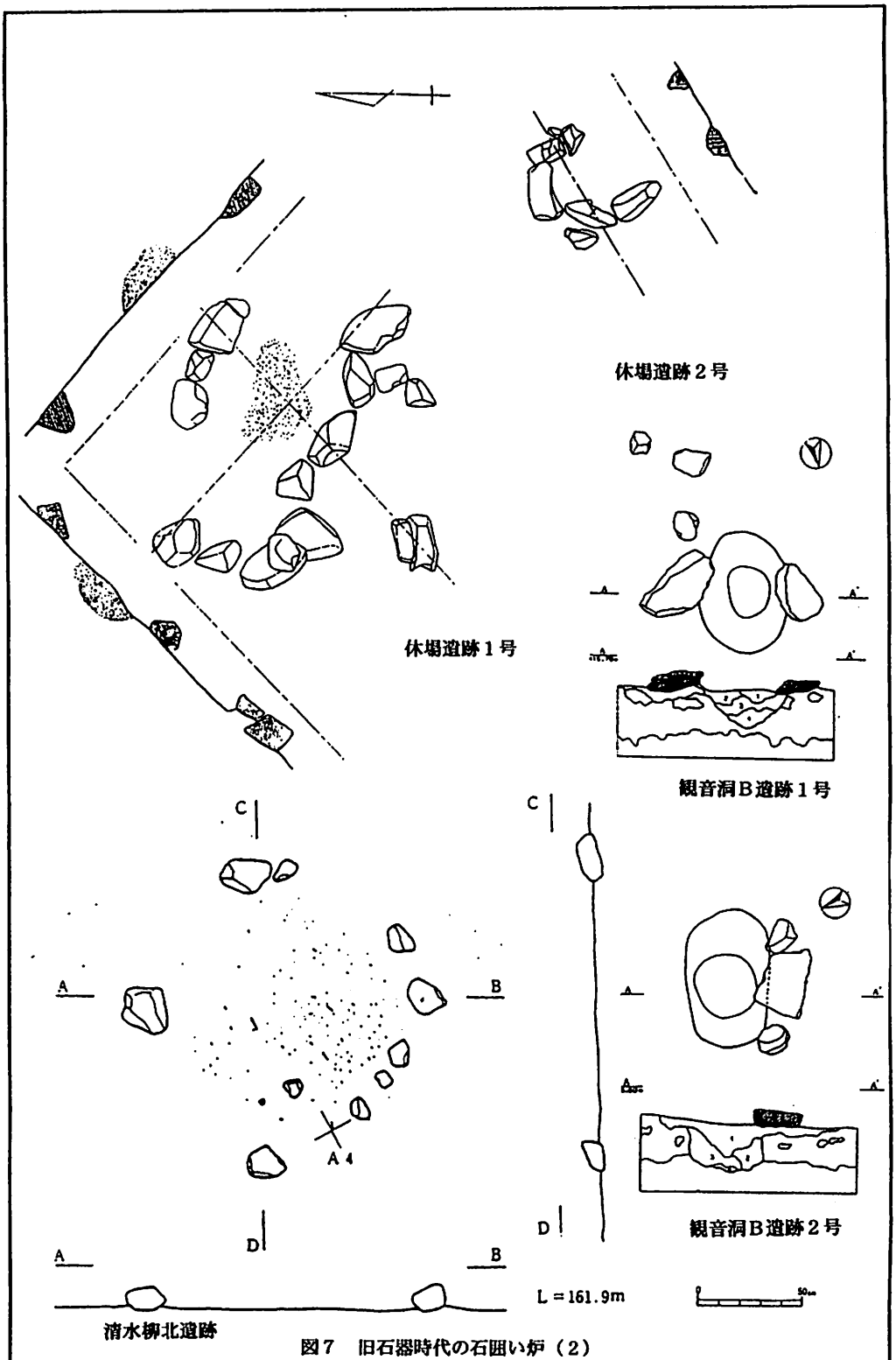


図７　旧石器時代の石囲い炉（２）

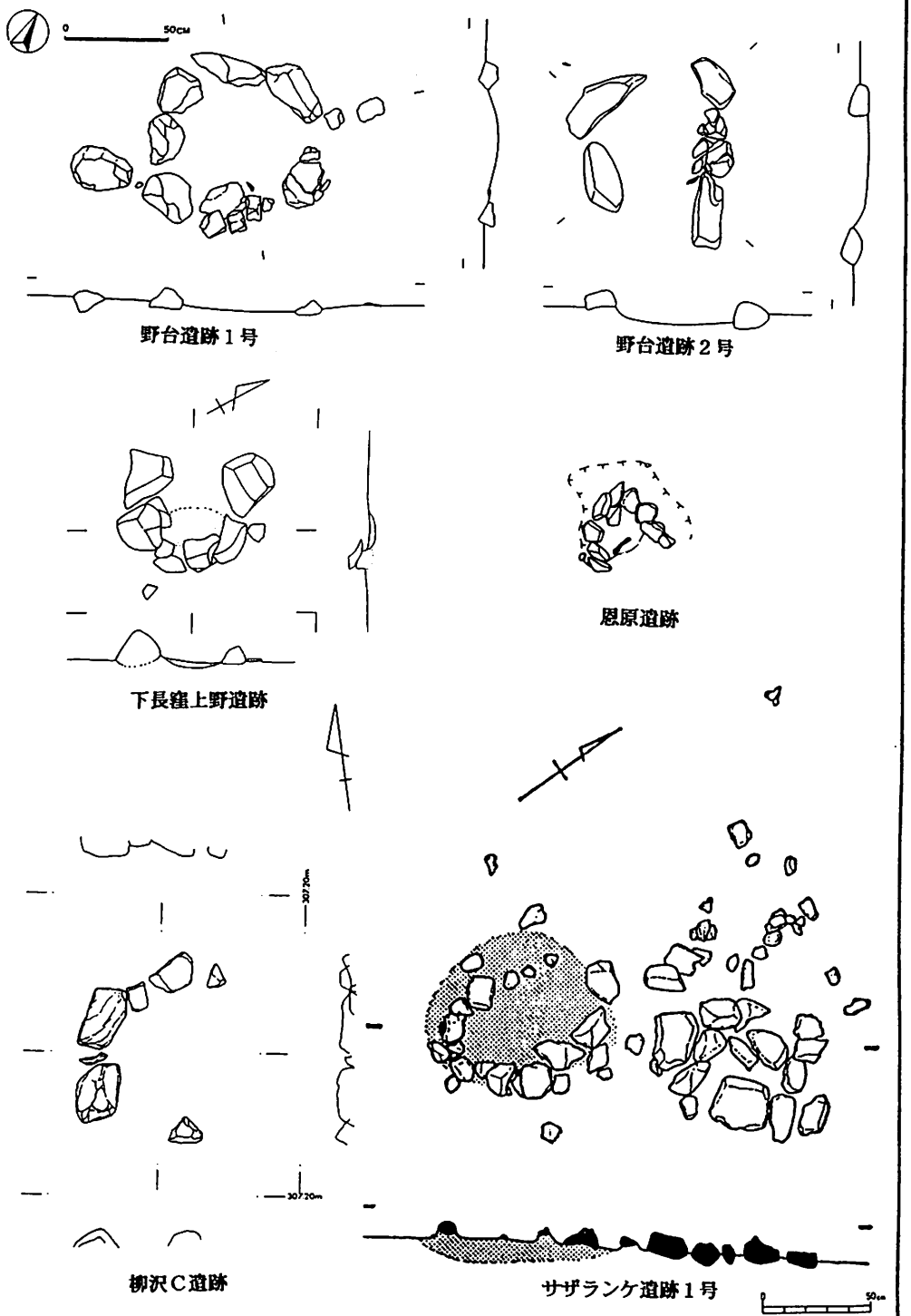
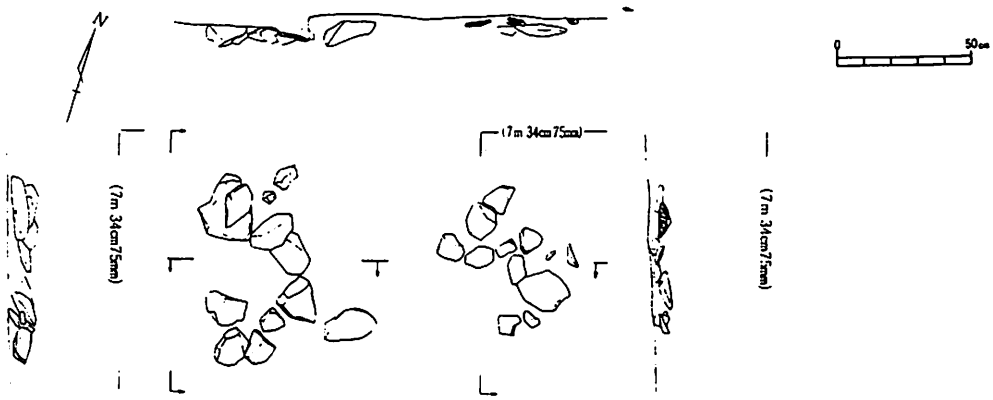


図８　旧石器時代の石囲い炉（３）



日ノ岳遺跡Ⅱ層１号

図９　旧石器時代の石囲い炉（４）

、新堀友行、鈴木次郎、鈴木忠司、瀬川裕一郎、辻本崇夫、保坂康夫の各氏に御礼申し上げる次第である。

引用文献

稲田孝司（1989）岡山県恩原遺跡ＡＴ直下層の石組炉と砂礫堆．日本考古学協会第55回総会研究発表要旨、8-11.

笹原芳郎・瀬川裕一郎（1992）旧石器時代後期の炉跡・焚火跡、とくに愛鷹南麓・箱根西麓を中心として．考古学ジャーナル、351、8-18.

下川達彌・立平進（1981）日ノ岳遺跡．長崎県立美術博物館、44p.

杉原荘介・小野真一（1965）静岡県休場遺跡における細石器文化．考古学集刊、第３巻、第２号、1-33.

鈴木忠司（1983）旧石器人のイエとムラ、住居とピット．季刊考古学、４、37-42.

鈴木次郎・長谷川厚（1987）宮ケ瀬遺跡群サザランケ（No.12）遺跡．神奈川県立埋蔵文化財センター年報、６、10-13.

辻本崇夫（1984）細石器文化の遺構．駿台史学、60、94-117.

長泉町教育委員会（1986）中尾・イラウネ・野台．276p.

中村由克（1992）長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構．考古学ジャーナル、342、42-44；344、33-36.

細石刃文化期の遺構

辻本　崇夫

１．研究の経過

１９５３年　長野県矢出川遺跡で細石刃文化の存在確認される。

１９５４～　矢出川遺跡第１次・第２次調査を契機に細石刃文化期遺跡の摘出例全国に拡大する。

１９５７～　峠下遺跡Ａ地点（柱穴状落込み），常川遺跡・広郷遺跡（いずれも柱穴状落込みと焼土），白滝遺跡群第32地点（礫群），間村遺跡（焼土と大型土坑），中本遺跡（住居址状竪穴）など、北海道地方中心に遺構の事例蓄積される。石器製作時の火の利用や居住の痕跡等の解釈が示された。なお鶴丸（1975）は間村遺跡の「大型土坑」等を周氷河現象の所産と評価、その人為性に疑問を呈した。

１９５８年　新潟県荒屋遺跡で土坑検出される。貯蔵穴あるいは墓と評価された。1988・1989年の第２・３次調査によりさらに多数の土坑，炉の可能性のある土坑，炉を伴う竪穴住居状遺構が検出されたことから、同遺跡における細石刃文化期の居住空間の構成や生業活動の様態の解明が期待される。

１９６４年　静岡県休場遺跡で石囲い炉検出される。住居址の屋内炉と評価されたが、その後小野（1965）はこれを否定し、共同作業場の中核施設と理解した。明確な構造を有する遺構の検出は、石器分布や組成等の研究とともに、細石刃文化期の生活址復元への視野を広げることとなった。

１９６６年　鹿児島県上場遺跡で竪穴住居址２基検出される。居住空間の構成が具体的に検証され、石器製作や厨房的作業は屋外で行われたことが明らかとなった。

１９７０年　宮崎県船野遺跡で礫群と土坑検出される。九州地方では、先行するナイフ形石器文化期と同様の礫群が細石器文化期に継承されていたことが指摘された。

１９７０～　発掘調査の件数・規模の増大により、遺構が検出されていなかった関東地方でも事例が蓄積される。千葉県高根北遺跡（焼土と土坑），神奈川県上和田城山遺跡（住居址状落込み・焼土・礫群）などである。

１９７５～　1970年以降急増した礫群資料に対する属性分析・評価・解釈が金山喜昭により開始，保坂康夫・辻本崇夫も加わり用途論・社会的役割論等展開される。

この頃より、先土器時代遺跡調査にともない層序確立・古環境復元等を目的とした自然科学分析調査が積極的に行われるようになる。

１９７９～　明治大学考古学研究室による矢出川遺跡群総合調査。花粉分析結果に基き細石刀文化期の古植生推定され、ハシバミなど食物として利用された可能性のある植物指摘された。

１９８４年　細石刃文化期を礫群形成衰退期と位置付けた辻本は、これまで事例毎に個別に評価されることの多かった該期遺構を集成し、種類別に整理し評価を加えた。また、自然環境変化やそれにともなう社会集団や技術伝統の変化が、火の使用形態や管理技術の変質をもたらしたことを示唆した（辻本　1984）。

１９８５～　長野県上ノ原遺跡の石囲い炉（1990年）や九州地方各地の礫群など、着実に事例は増加しつつあるが、飛躍的な事例数の増加はみられない。ただし、九州地方では事例数の増加に伴い、西九州以外の各地で細石刃文化期まで礫群が継続することが明らかになりつつある（徳永　1991）。

２．遺跡の分布と地域的様相

遺構の検出が報じられた細石刃文化期の遺跡の数は、現在でもさほど多くないと考えられる。辻本（1984）が作成した地名表では、細石刃文化期総遺跡数400弱のうち遺構検出遺跡数20，遺構数約50である。それから約10年を経過したが、おそらくその倍には至らない遺跡数・遺構数であろう。本予稿集を契機に地名表を改訂するつもりで報文等の検索を試みたが、物理的に全国規模で検索することは不可能であった。この場を借りて準備不足をおわびするとともに、事例に関する情報・報文・論考等御教示頂けるようお願いいたします。

今回の検索で、北海道湯の里４遺跡の墓とみられる土坑（畑　1985），長野県上ノ原遺跡の石囲い炉（中村　1992），鹿児島県榎崎Ｂ遺跡（徳永　1991：正式報文には接していない）の礫群，長崎県鷹野遺跡（長崎県教育委員会　1986）の「集石遺構」などを確認したにすぎない。この他に、正式報文には接していないが、削片系細石刃石核を伴う石器群とともに、炭化物片を覆土中に含む土坑が検出された埼玉県白草遺跡を発掘調査中に見学している。

いずれにしても、現在知り得る限りにおいて、細石刃文化期の遺構が検出された遺跡数は25以上、遺構数は60以上といったところであろう。このような極めて限られた数の遺跡・遺構を機械的に地域別に割りふり、個別的にその形質を述べてもその地域相を理解することはむずかしい。そこで、ここでは便宜的に東北日本（北海道・東北・北陸）と西南日本（関東・中部・近畿・中国・四国・九州）という大区分を設定し、両地域毎の様相把握を試みる。

A．東北日本

北海道では、北見市・常呂町など道東地域に住居址状落込み・柱穴・土坑・焼土等の検出例が集中する。鶴丸（1975）の主張するように、この地域に特徴的に検出される土坑・柱穴・周溝等の落込み類が周氷河現象に伴う土壌攪乱の痕跡であるとすれば、道東地域の細石刃文化期の遺構は、焼土・礫群を特徴とすることができる。一方道南地域では、湯の里４遺跡で坑底に赤色土壌のみられる土坑が検出されており、玉類などの遺物を伴うところから墓と考えられている。それ以上の種類の遺構については把握していないが、最近桔梗２遺跡でＡＴ降灰以前の礫群が検出されるなど、従来分布が希薄とされてきた本地域で資料が蓄積されつつある点は注意される。今後細石刃文化期に相当する礫群の発見が期待される地域である。

東北・北陸地方では、新潟県荒屋遺跡で貯蔵穴・墓の可能性のある土坑（いわゆる相沢土坑），炉の可能性のある土坑，炉を伴う竪穴住居状遺構などが検出されている（東北大学文学部考古学研究室編　1990）。竪穴住居状遺構は一部精査を残しているとのことであるが、かなりの所見は得られている。今後、石器類や他の土坑類を含めた解析が進めば、東北日本本州部分における細石刃文化期の居住形態や生業活動を具体的に論じられるようになるものと期待される。最終報告書における解析結果を待ちたい。

なお、東北地方の遺構については、保坂康夫氏より配石などが存在する旨御教示を得た。しかし、現段階で検索・確認できなかったため、本稿では空白地域としておきたい。

以上、東北日本の細石刃文化期の遺構は、住居址・土坑・焼土・礫群を特徴としている。北海道の住居址状落込みや柱穴・土坑に対してやや慎重な評価を加えるとすれば、住居址の確実な事例としては新潟県荒屋遺跡のみが残る。一方、北海道では焼土・礫群・土坑・墓（湯の里４遺跡）を特徴とすることとなる。いずれにしても、西南日本にみられる石囲い炉は現時点で存在が認められない。

B．西南日本

関東・中部・九州地方に細石刃文化期の遺構が検出されるが、現在のところ近畿・中国・四国地方には見あたらない。

西南日本では、住居址・石囲い炉・土坑・焼土・礫群が検出されている。そのうち、千葉県高根北遺跡（中山・古内・千葉　1976）の焼土・土坑は^{14}C年代が約２万年前と古く、年代観に問題があるので除外する。

住居址は、関東・九州地方のみでみられ、神奈川県上和田城山遺跡（大和市教育委員会編　1979），鹿児島県石飛分校遺跡（池水　1968）で検出されている。そのうち、石飛分校遺跡の事例は、実測図・所見等皆無に等しいので、前二者を検討対象とせざるを得ない。なお、上場遺跡では細石刃文化期の１号住居址と、先行する台形石器の段階の２号住居址が検出されているが、ここでは１号住居址を対象とする。両者とも平面形は円形に近く、断面が皿状で柱穴状の小ピットが存在する点で共通する。しかし、上場遺跡例では磨石などわずかな石器を伴い住居址内に焼土がみられないのに対し、上和田城山遺跡例では遺物が伴わず住居址内中央に焼土がみられる点で異なる。また、上場遺跡例では、住居址に近接して細石刃製作址と敲石・削器を伴う礫群・焼土が分布しており、石器製作や厨房的作業が屋外で行われたことを示唆する。一方上和田城山遺跡例では、同一層準から検出された礫群・焼土や石器類との分布論的な解析が未だなされていない。今後の課題であろう。

石囲い炉は中部地方のみで報告されている。ただし、後述するように礫群あるいは集石遺構と報じられている九州地方の事例には、石囲い炉と判断しても良いと思われるものが存在するので、九州地方も含めて検討する。

中部地方では、長野県上ノ原遺跡（中村　1992）と静岡県休場遺跡（杉原・小野　1965），九州地方では長崎県鷹野遺跡（長崎県教育委員会　1986）が検討されている。平面規模は大小あるが、いずれも直径1.8m・短径1m以内で、平面形はU字形を基本とする。使用される礫は先行するナイフ形石器文化の礫群構成礫に比べ大形のものが目立つが、上ノ原・休場遺跡では小形のものも併用されている。上ノ原遺跡１号・３号炉址や休場遺跡２号炉址に顕著な特徴は、大形礫のわん曲部及び立てた小形礫を配列し弧状の内面を創出している点である。鷹野遺跡の集石遺構を石囲い炉と判断した証拠は、大形礫がU字形の配列性を有することと、構成礫中に立った状態のものがみられることである。このような観点からすれば、礫群として報じられている宮崎県船野遺跡例も端部に立った礫がみられるので、

石囲い炉と同一視できる可能性もある。上ノ原遺跡の５基の炉址を詳細に観察すれば容易に理解できるように、当時の炉の使用者は後世の考古学研究者が便利なように使用当時の炉の姿そのままに保存・伝承してくれたとは限らないのである。５基の炉址が同時に使用された保証も何もない。むしろ５号炉址の様子は次に使用可能な大形礫をストックした状態とみることができる。必要に応じて彼らは、先代の石囲い炉構成礫を抜きとり新たな炉址に使用し、余ったものでまだ使用できるものはストックしていたのではあるまいか。少なくとも鷹野遺跡の事例では、配置性を残した大形礫の内部に小形礫を収納したように捉えられるし、船野遺跡の事例も同様に理解が可能のように思われる。なお、石囲い炉に伴った遺物は、上ノ原遺跡は削器・敲石・細石刃石核などが中心で細石刃は少なかった。これに対し、休場遺跡では細石刃・細石刃石核・打面調整剥片など石器製作を想定させる石器類が集中した。鷹野遺跡では詳細不明である。このような伴出石器の内容は、炉址の性格を検討するうえで重要な情報である。

ところで、休場遺跡の立地する愛鷹山麓や鷹野遺跡の立地する西九州（長崎周辺）では、先行するナイフ形石器文化期より石囲い炉が出現する点は注意するべきである。愛鷹山麓では下長窪上野遺跡（長泉町教育委員会　1979）や野台遺跡（長泉町教育委員会　1986），西九州では日ノ岳遺跡Ⅱ層（下川・立平　1981）である。いずれも後続する細石刃文化期の石囲い炉とほぼ同様の形質を備えた事例である。このような地域では、比較的早い時期に礫群を用いた火の使用形態から石囲い炉を用いた新たな形態への移行が行われたものと考えられる。さらに、上場遺跡で細石刃文化期に先行する段階の住居址（２号住居址）が検出されていることを考慮すると、少なくとも西南日本の一部地域すなわち九州地方や中部地方などでは、住居址や石囲い炉など後続する縄文時代の生活遺構と共通性を持ち、より定着性を連想させるような施設の使用が細石刃文化期に先行して開始されていることが理解される。その背景としては、古植生や古気候などの環境条件や、生業活動などの変化が想定されるが、いずれにしても未解決であり今後の研究課題と言わざるを得ない。

以上、西南日本の細石刃文化期の遺構の大きな特徴として住居址と石囲い炉を取り上げ、これらを中心に論議した。先行するナイフ形石器文化期からこれらの遺構が出現する点は、現状ではやはり本地域の特徴と見るべきと考えたからである。しかし、九州地方などではナイフ形石器文化期に盛行した礫群が、細石刃文化期にも継続されていることを示す事例が着実に増加しており、しかもその分布には地域的な偏りがあるとの予察が示されている（徳永　1991）。このような事実をみれば、今後の試料の蓄積に伴いより細かな地域相の

把握が迫られるであろうことが予想される。その前提として、詳細な遺構の形質把握や他の遺構・遺物を含めた遺跡の構造的解析などの考古学的方法の駆使が要求されるのは言うまでもないが、立地条件をはじめとする古環境解析成果が居住環境や生業活動の成立環境を考慮する際の重要な情報をもたらすものと期待される。

3．研究の課題

A．遺構摘出への努力

細石刃文化期の遺構は、上述した様に矢出川遺跡の発見から40年を経た現在でも極めて事例に乏しいのが現状である。その原因として、礫群など比較的摘出しやすい遺構が少ないこともあげられよう。事実、住居址や土坑の検出状況を報文等で確認すると、土質の変化や炭化物などの混入状態の差等、非常に微妙な観察結果に基き摘出されていることがわかる。少なくとも、遺構検出の経過や遺構として判断した根拠などは、報文等に示され他の研究者がこれを追認できるようにするべきと考える。また、これらの情報を持ちより、研究者間で論議し、住居址・土坑などの検出・調査方法や遺構として認定する基準などを統一する必要があろう。結果としての実測図と写真、そして若干の「客観的事実記載」のみが示されても、多くの研究者はその吟味すらできないのが現実である。極めて事例の乏しい現状であるからこその要望であり、まだまだ遺構の研究は新試料の発見に負うところが大きいのである。

B．石囲い炉の評価

本稿では、西南日本の細石刃文化期の特徴的な遺構として、石囲い炉を取りあげた。礫に火熱を保存させる礫群に替わり、より直接的な火の使用・管理方法が採用されたのである。石囲い炉の出現は、自然環境の変化や生業形態の変質、社会集団や技術伝統の変化など様々な要因との関わりを予想させる。住居址とともに定着性を連想させる石囲い炉の出現が、礫群多出地域である中部・九州地方ですでにナイフ形石器文化期にみられる事実は、西南日本における上記の変化が細石刃文化期に先行して胎動していたことを示唆する。改めて遺構を伴う遺跡の構造的解析と、地形判読・花粉分析・炭化材同定・炭化種子同定などの手法を駆使した、よりミクロな古環境解析が問題解決の方法であることを痛感する。

一方、東北日本、特に北海道で多出する焼土の評価も忘れてはならない。これらの焼土が石囲い炉と同等視できるのか否か、礫群との消長関係把握やシベリアなどの類例との比

較検討作業は、遺跡の構造的把握や古環境解析とともに重要な検討課題である。

C．古環境・生業と遺構の関わり

数少ない細石刃文化期の遺構ではあるが、住居・炉・墓・貯蔵穴など、後続する縄文時代にみられるような基本的な種類が含まれているのも事実である。このことは、将来該期の遺跡も集落論的視野から語られることを期待させるし、すでに新潟県荒屋遺跡などでは一つの遺跡の中で集落構成が論じられる程豊富な材料が得られている。また、貯蔵穴の存在や細石刃からの淡水魚の脂質の検出は、そこで展開された生業の一端を解明する大きな手がかりとなるであろう（佐藤　1992）。

ところで、細石刃文化期に限らず、先土器時代における研究材料として石器（主に利器類）が主流を占めていたため、当時の生業も狩猟・動物の解体加工などの視点に偏る傾向があった（山下　1992）。現在では、その反省に立って内水面漁撈（佐藤　1992）や植物質食料（黒坪　1983・1984）の問題が論じられるようになった。前者については遺跡そのものからの検証は難しいものの、遺跡内土壌や石器・礫類の脂質分析や焼土のウォーターセパーレーションによる微細遺物の抽出・同定が有効な方法となるであろう。後者は、磨石・敲石類の分布と古植生との相関関係を基に、先土器時代の植物質食料の利用状況を解明しようと試みている。敲石類がナイフ形石器文化期・細石刃文化期を通じて西南日本に偏在する傾向は、礫群多出地域（保坂　1986）であることの意味やナイフ形石器文化期から定着性の強い要素として捉え得る住居址や石囲い炉が出現する事実を評価するうえでも、示唆に富むものである。

矢出川遺跡（安田　1982）などでは細石刃文化期の低湿地堆積物の花粉分析が行われ、当時の古植生のなかからハシバミなどの食料として利用可能な植物の存在が注意された。東京都野川中洲北遺跡（パリノ・サーヴェイ　1989）や栃木県長為遺跡（パリノ・サーヴェイ　1991）でも、至近に該期遺跡は立地しないものの当時の古植生が把握されている。黒坪（1983・1984）のような試みをする場合、安田（1980）や塚田（1975）のように、大まかな植生分布図を使用せざるを得ないのが現状である。その遺跡付近の植生環境を把握するのであれば、少なくとも流域別程度の細かさで低地堆積物の花粉分析を実施し、よりミクロな環境条件を理解してゆくことが必要となろう。このような作業は、細石刃文化期・遺構の存在に関わらず各遺跡・流域ともに必要であるが、いま現在特にその情報が必要な地域は、本稿の論旨からみて静岡県愛鷹山麓と長崎県の両地域である。なお、周辺に花

粉分析に適した低地堆積物が存在しない場合は、遺跡内より出土した炭化材片（かなり細片でも最近は同定可能）や炭化種子片などの同定を数多く行うことでこれを補うこともできるであろう。いずれにしても、とかく等閑視されがちな植物質食料の利用実体の解明は、今後細石刃文化期の人々の適応戦略を理解するうえで重要な位置を占めることになるであろう。

４．引用文献

池水寛治　1968　熊本県水俣市石飛分校遺跡．考古学ジャーナル21号．

池水寛治　1974　鹿児島県上場発見の住居址．鹿児島考古第９号．

小野真一　1965　沼津市休場遺跡の細石器文化．沼津女子高等学校考古館第４回考古学講座要旨．

小野爾良・加藤晋平・鶴丸俊明　1972　北海道訓子府町増田遺跡の第１次調査．考古学ジャーナル71号．

加藤晋平・桑原　護　1969　中本遺跡．

加藤晋平・藤本　強　1961　１万年前のたんの．

金山喜昭　1992　４住居と集落　ｂ礫群，配石，石囲い炉，土坑，住居．図解・日本の人類遺跡．東京大学出版会．

黒坪一樹　1983　日本先土器時代における敲石類の研究（上）．古代文化第35巻第12号．

黒坪一樹　1984　日本先土器時代における敲石類の研究（下）．古代文化第36巻第３号．

佐藤宏之　1992　日本旧石器文化の構造と進化．柏書房．

下川達彌・立平　進　1981　日ノ岳遺跡．

白滝団体研究会　1963　白滝遺跡の研究．

杉原荘介・小野真一　1965　静岡県休場遺跡の細石器文化．考古学集刊第３巻第２号．

鈴木忠司　1983　住居とピット．季刊考古学第４号．

芹沢長介　1959　新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について（予報）．第四紀研究第１巻第５号．

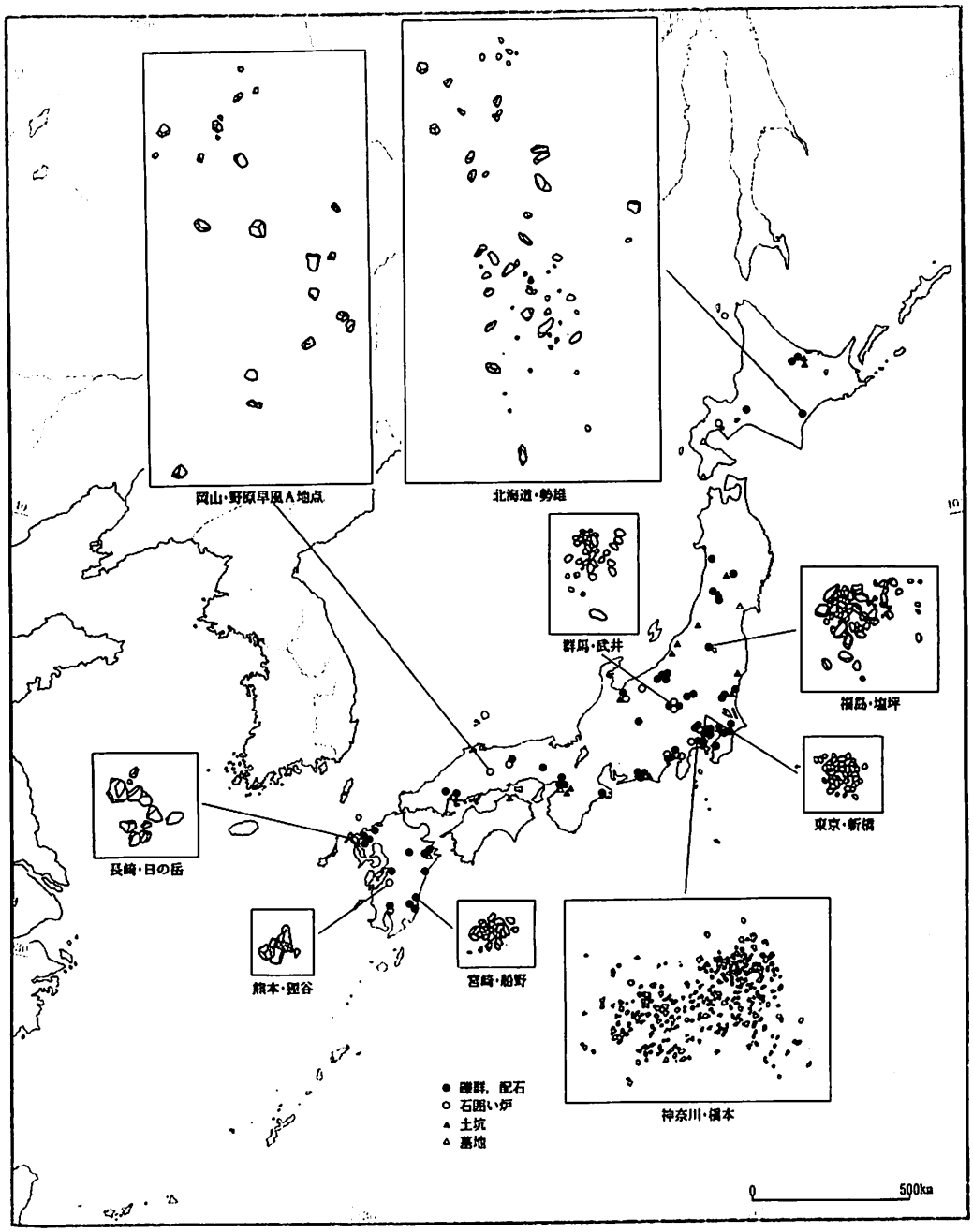
芹沢長介　1974　最古の狩人たち．古代史発掘１．講談社．

橘　昌信　1975　宮崎県船野遺跡における細石器文化．考古学論集３．

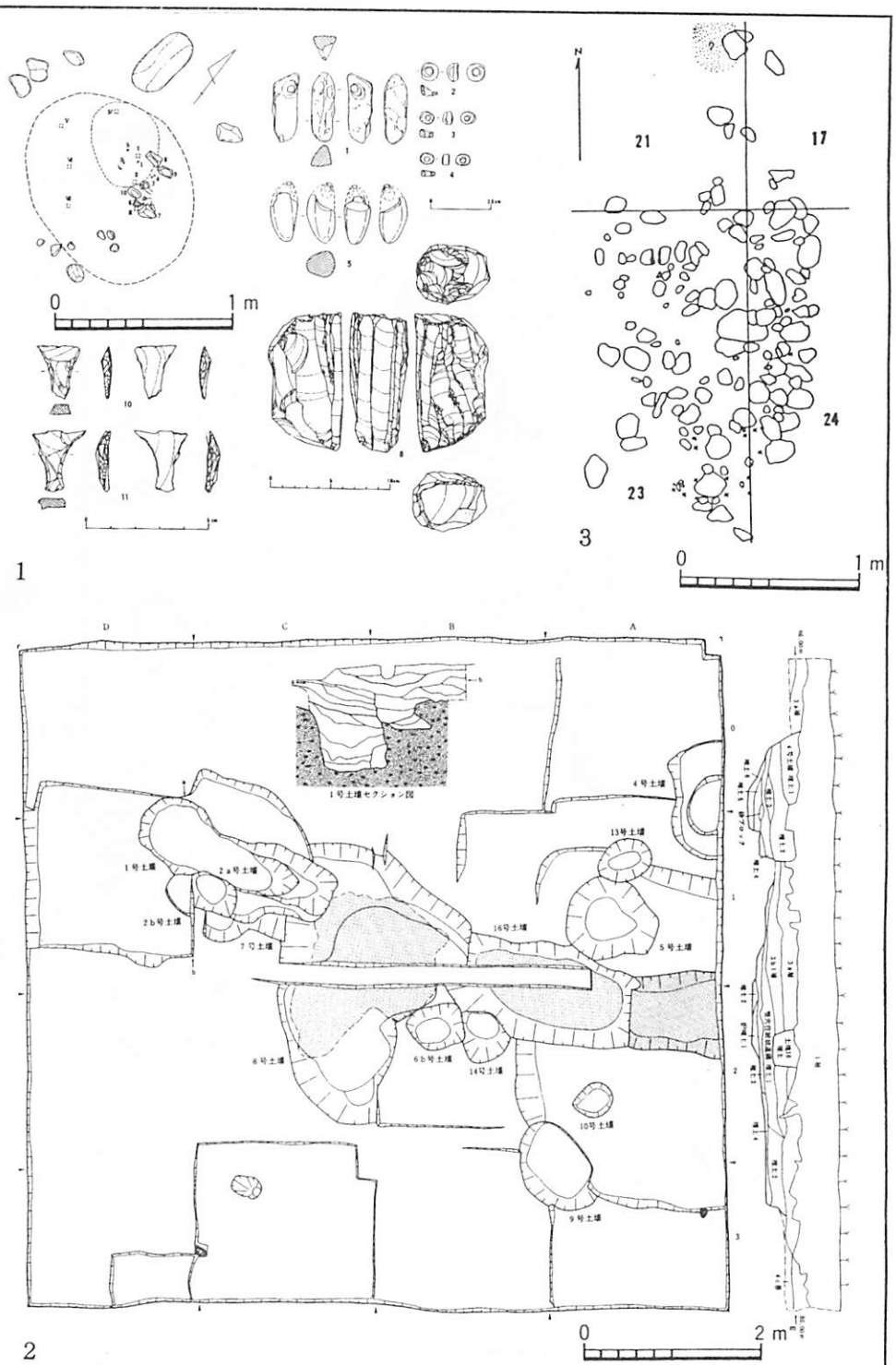
塚田松雄　1975　古生態学Ⅱ．共立出版．

辻本崇夫　1984　細石器文化の遺構．駿台史学第60号．

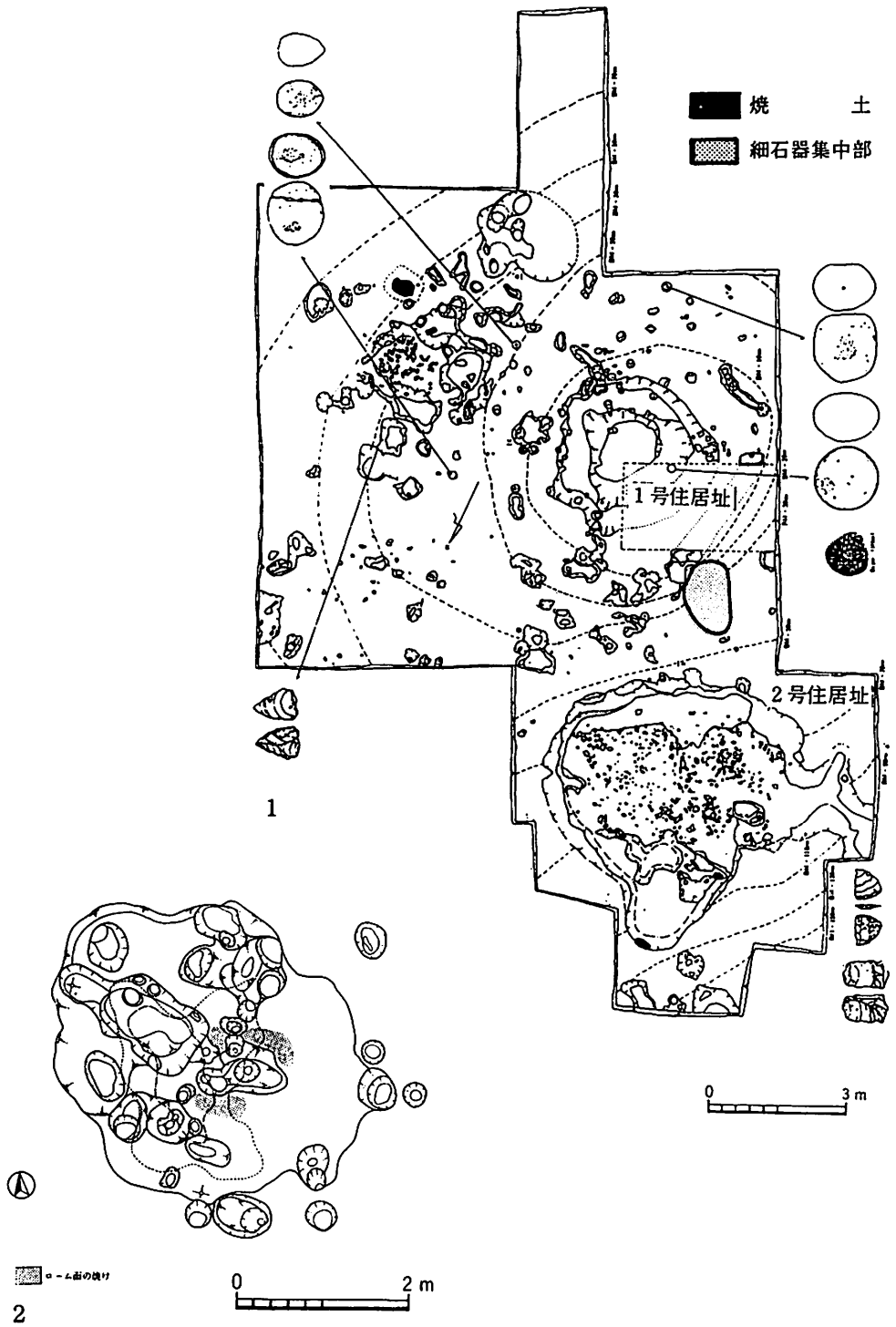
辻本崇夫　1987　礫群の形成過程復原とその意味．古代文化第39巻第７号．
鶴丸俊明　1975　増田遺跡．日本の旧石器文化２．有斐閣．
東北大学文学部考古学研究室編　1990　荒屋遺跡　第２・３次発掘調査概報．
徳永貞紹　1991　九州の礫群等に関する覚書．九州旧石器第２号．
中村由克　1992　長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅱ）．考古学ジャーナル344号．
中山吉秀・古内　茂・千葉健造　1976　高根北遺跡．
長泉町教育委員会編　1979　下長窪上野遺跡．
長泉町教育委員会編　1986　中尾，イラウネ，野台遺跡．
名取武光・松下　亘　1961　峠下遺跡調査　報告書．
畑　宏明　1985　Ⅳ湯の里４遺跡の調査　５．Ｖ層の遺構．湯の里遺跡群．
パリノ・サーヴェイ株式会社　1989　野川中洲北遺跡植物化石層の堆積環境と植生．東京都小金井市野川中洲北遺跡　自然科学分析編．
パリノ・サーヴェイ株式会社　1991　長為遺跡周辺における12,000年前以降の古環境変遷．長為遺跡．
保坂康夫　1986　先土器時代の礫群の分布とその背景．山梨考古学論集Ⅰ．
保坂康夫　1992　「礫群」は何を語るか．考古学ジャーナル351号．
安田喜憲　1980　環境考古学事始．ＮＨＫブックス．
安田喜憲　1982　長野県矢出川遺跡群の古環境復元調査報告（２）．報告・野辺山シンポジウム1981．
山下秀樹　1992　岩宿時代研究と古植生復元．植生史研究第１巻第１号．
大和市教育委員会編　1979　上和田城山遺跡．



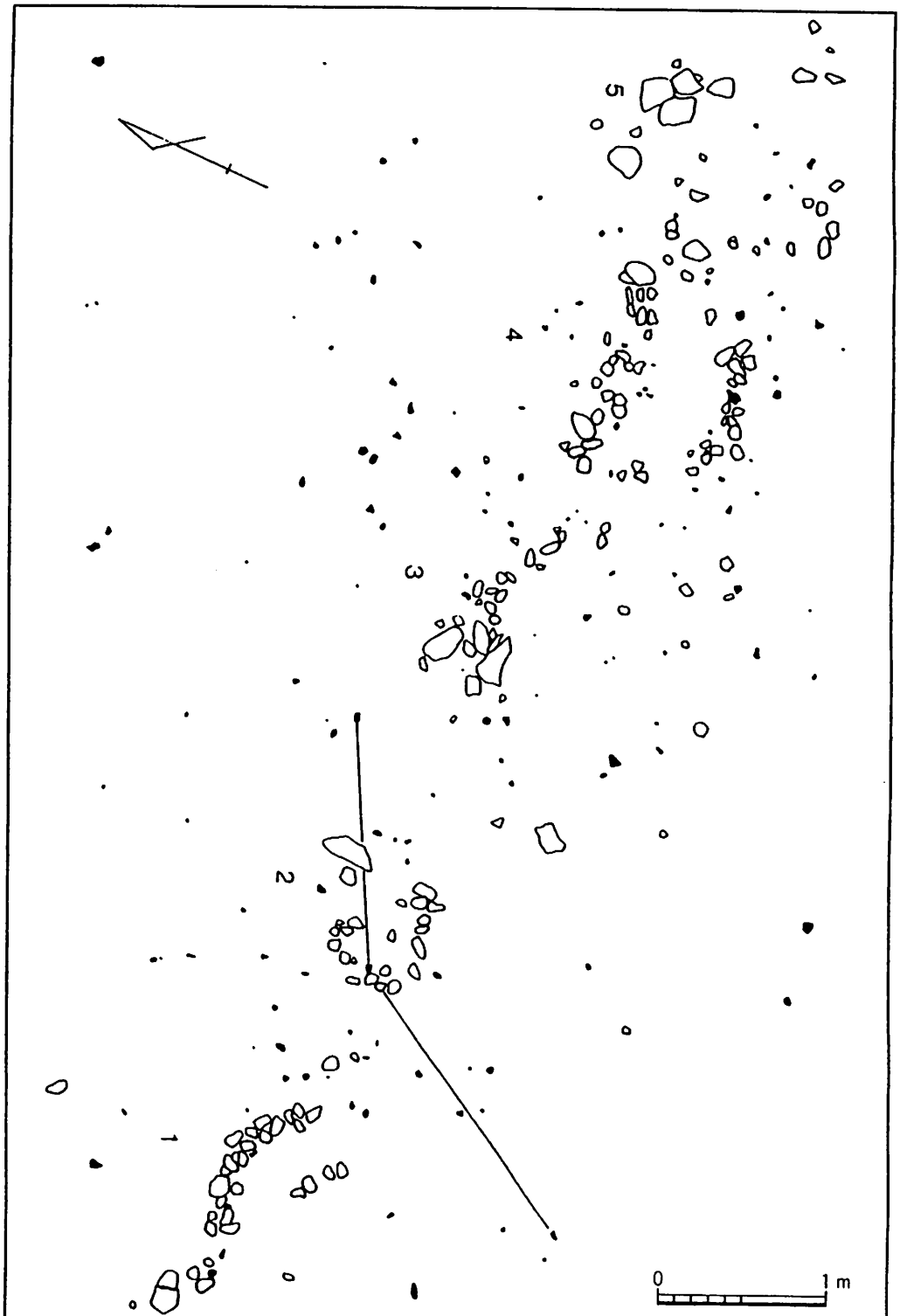
第1図　先土器時代の遺構分布図（金山 1992 より引用）



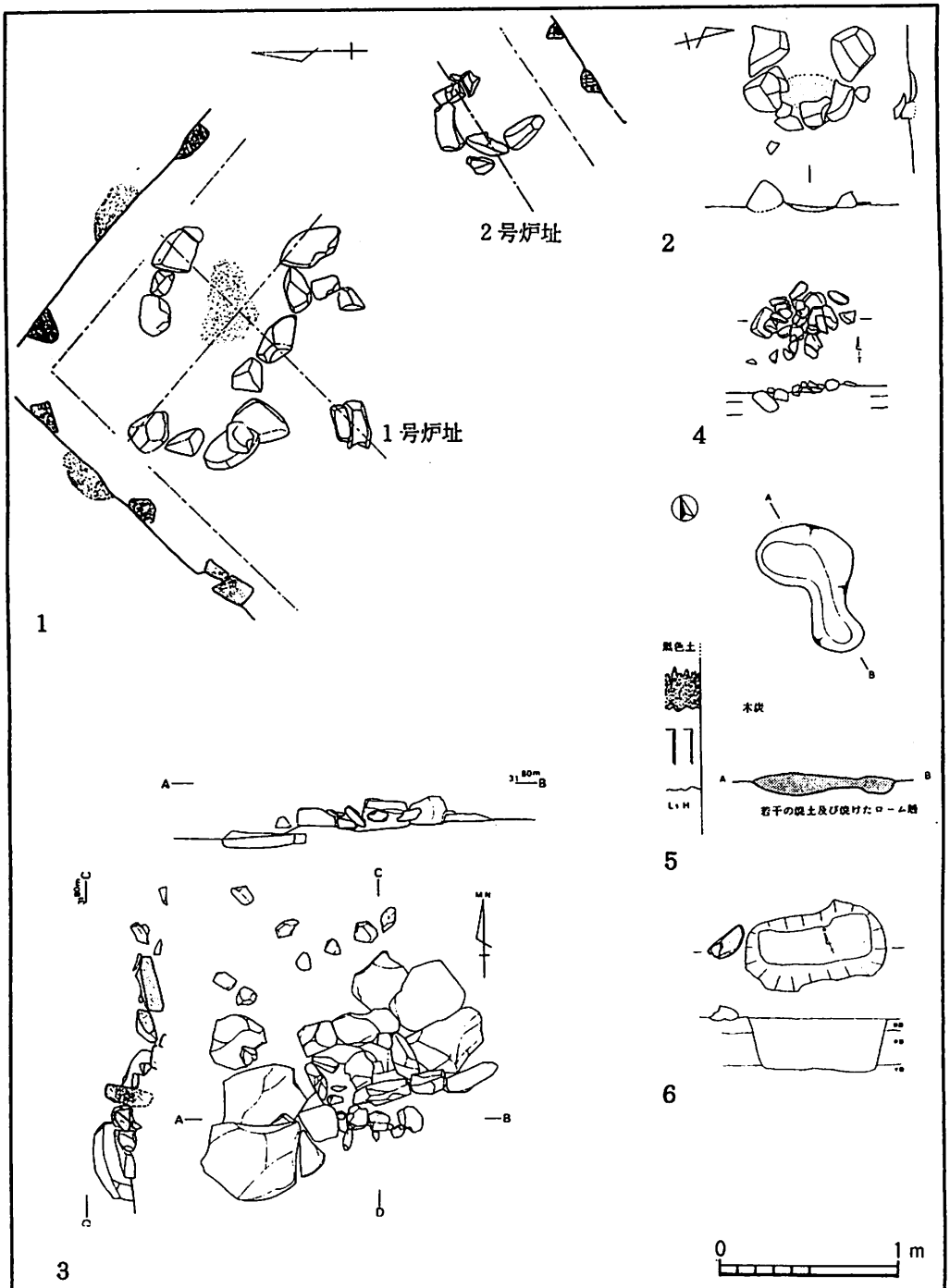
第2図　東北日本の遺構：墓（1．湯の里4）・住居址と土坑群（2．荒屋）・礫群（3．白滝第32地点）



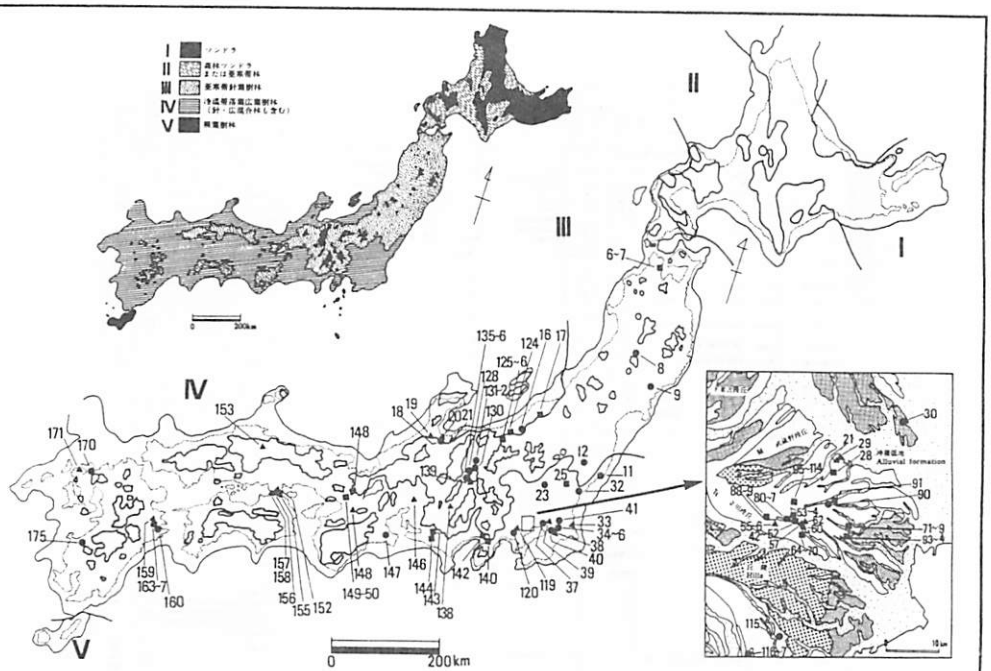
第3図　西南日本の遺構：住居址（1．上場，2．上和田城山）



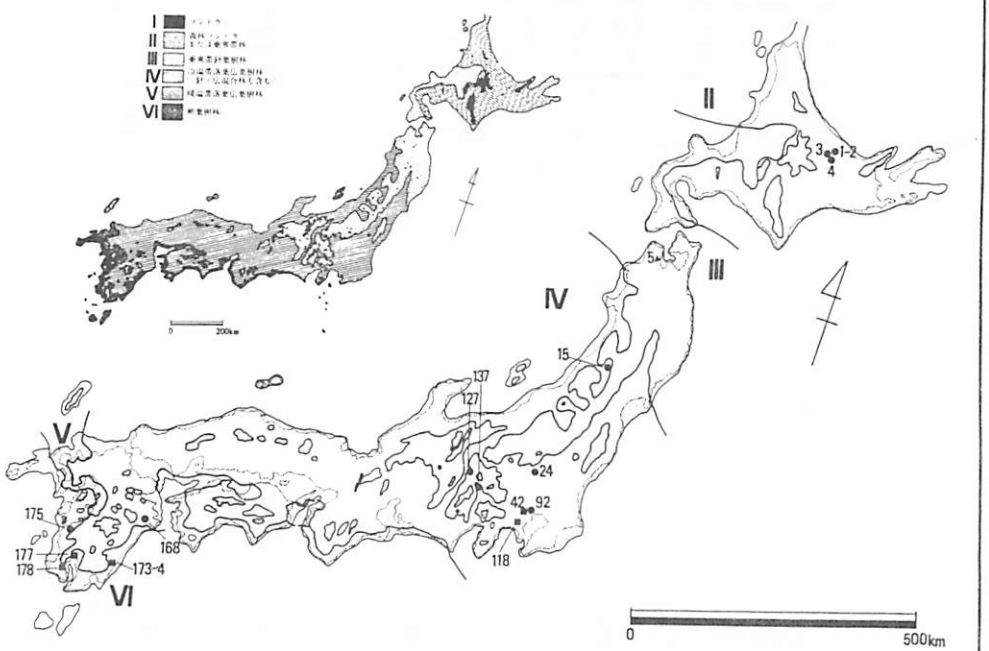
第4図　西南日本の遺構：石囲い炉（上ノ原）



第5図　西南日本の遺構：石囲い炉（1．休場，2．下長窪上野，3．鷹野）・礫群（4．船野）・焼土（5．上和田城山）・土坑（6．船野）

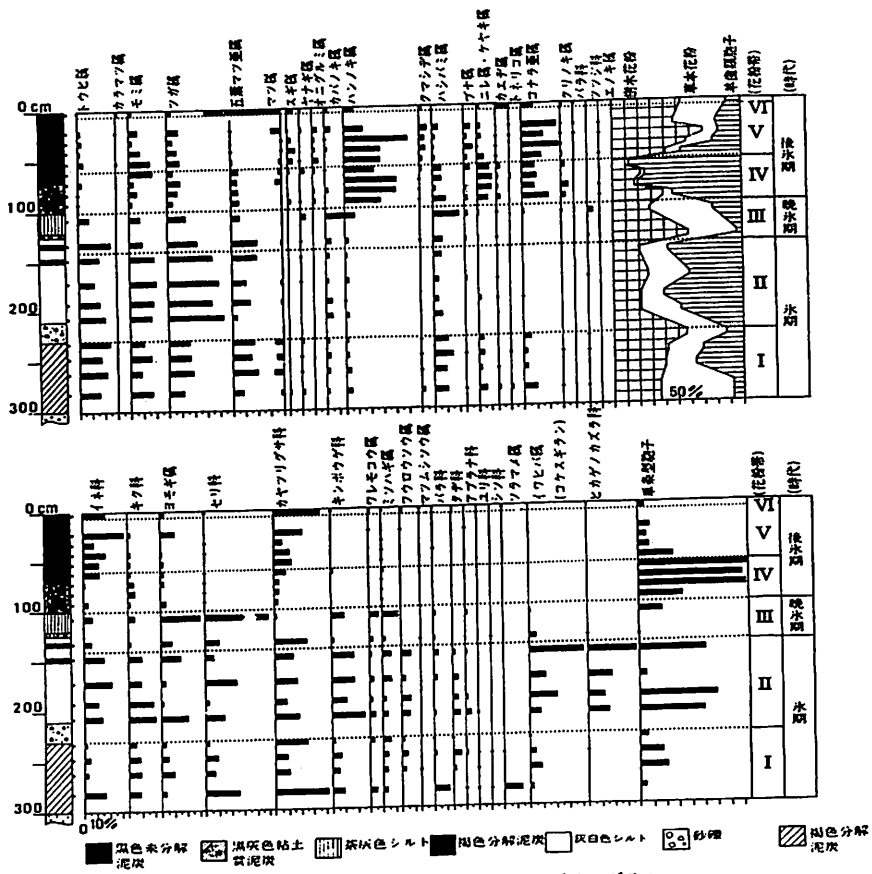


ナイフ形石器文化期の植生と敲石類分布（1）（植生図は安田，1980を使用）
●敲石出土遺跡，▲磨石出土遺跡，■敲石および磨石出土遺跡

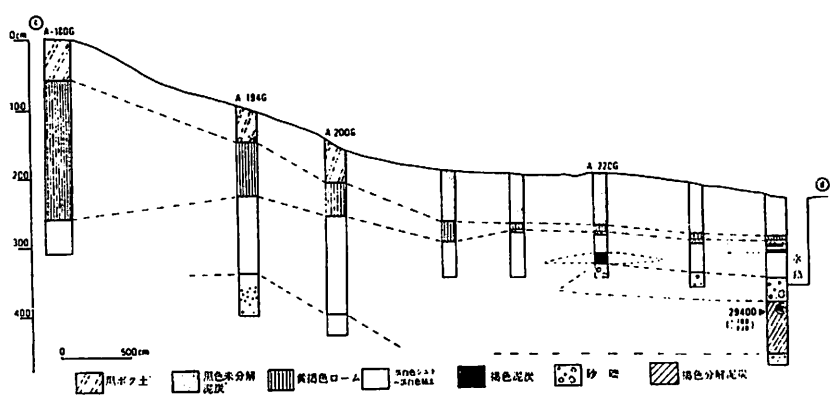


槍先形尖頭器・細石刃文化期の植生と敲石類分布（植生図は安田，1980を使用）

第6図　先土器時代の古植生と敲石類の分布（黒坪 1984 より引用）

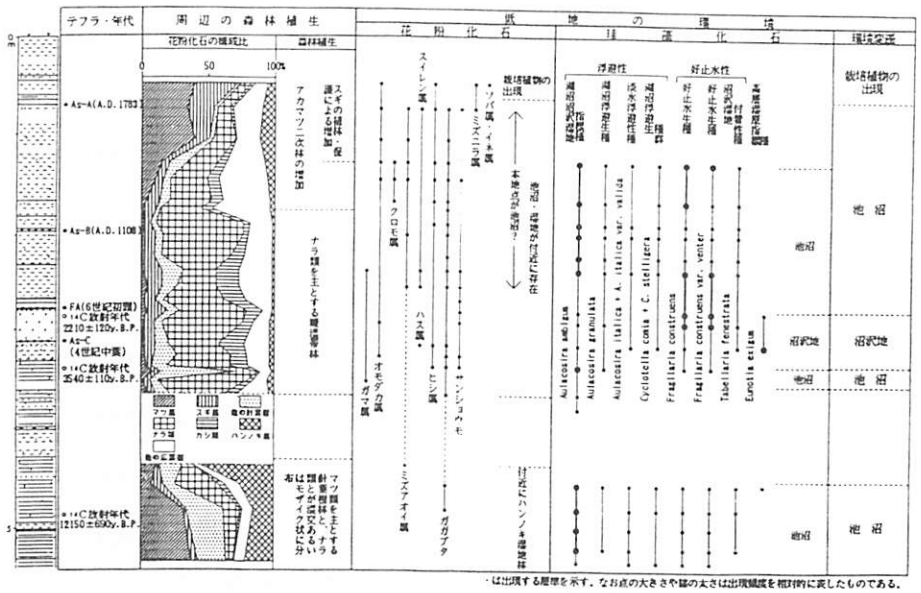


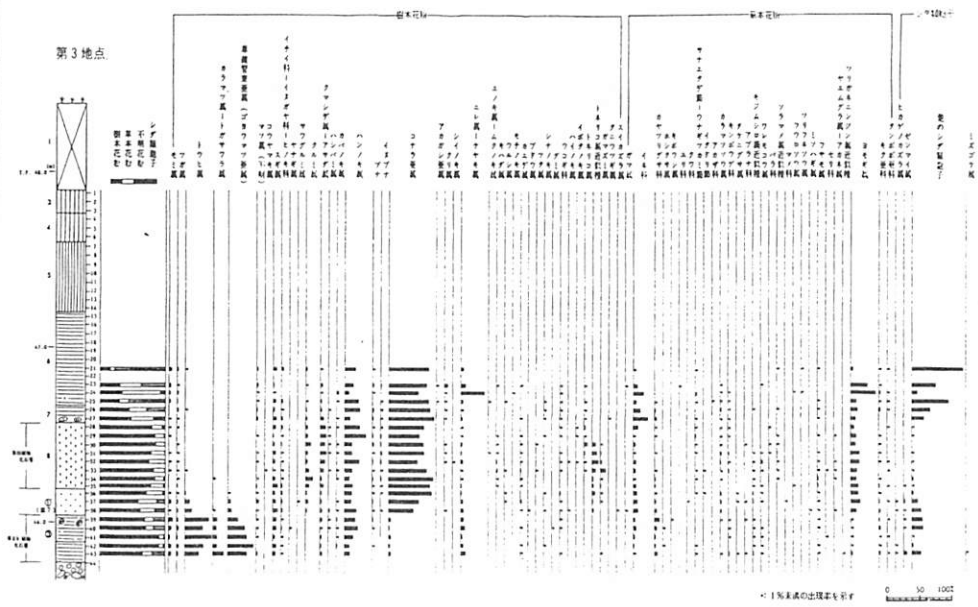
矢出川遺跡谷底低地部の花粉ダイアグラム
(出現率は樹木花粉の総数を基数とする)



1981 年度調査 c-d 断面図 (図のⓒ, ④は逆)

第7図　細石刃文化期の古植生 (矢出川：安田 1982 より引用)





第8図　細石刃文化期の古植生（上．長為，下．野川中洲北：パリノ・サーヴェイ1989および1991より引用）

細石刃文化遺跡と河川次数

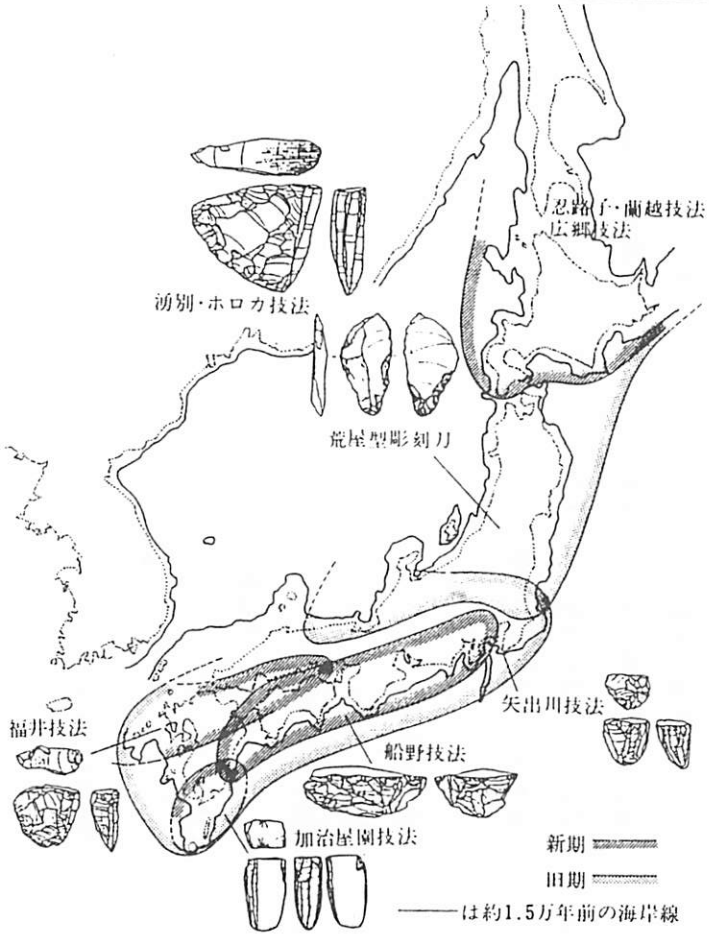
－　内水面漁撈を考える　－

桜井準也

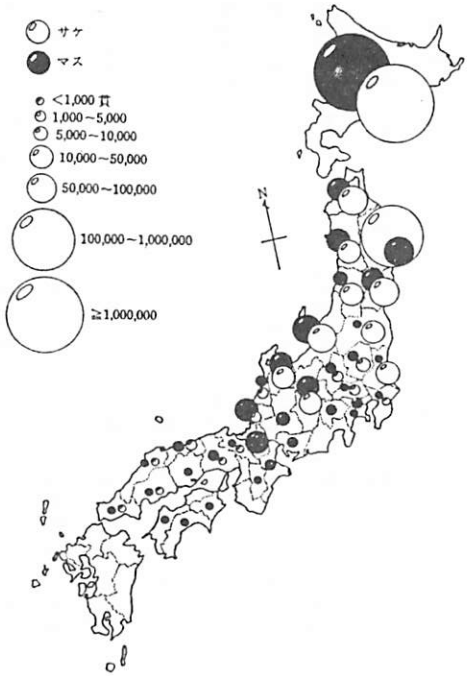
1　はじめに

本州地方の細石刃文化は細石刃の製作技法、石器組成などから関東地方と北陸地方を結ぶラインを境に、北側の地域と南側の地域に大まかに地域区分が可能である（第1図）。北側では湧別技法など、削片系細石核が卓越し、荒屋型彫器を伴う地域、南側は非削片系細石核が卓越し、荒屋型彫器を伴わない地域である。このような細石刃文化期の遺物の分布状況について、加藤晋平は本州北半の細石刃文化をバイカル・アンガラ川上流域からの流れとして捉え、シベリアでの魚骨の出土例などを参考にして、荒屋型彫器は骨角製のヤスやモリの製作具であり、その集団はサケ・マスなど遡河性魚類を対象とした内水面漁撈を行っていた集団であったと推定した（加藤 1983、加藤・松本 1984）。昭和初期のサケ・マスの道府県別漁獲量を検討すると関東地方と北陸地方を結ぶラインを境として北側にサケの漁獲が限定され、細石刃文化期の地域区分とほぼ一致していることがわかる（第2図）。このように、直接的な証拠となる魚骨の出土例こそ僅かであるが、既に細石刃文化におけるサケ・マスを主体とした内水面漁撈について検討する条件は整っていると言える。また、従来の研究が出土遺物のみを対象としていたのに対し、鈴木忠司は細石刃文化における遺跡の立地に注目し、意欲的な研究を行っており（鈴木 1983、1985）、その方向性は高く評価される。

このような先学の研究成果に対し、筆者は先史時代の河川漁撈について考察する場合、川幅や深さ、流水量など遺跡が立地する河川の規模について検討する必要があると考えた。しかし、従来の研究では河川の規模が考慮されておらず、河川の区分について上流・中流・下流という不明瞭な区分のみが用いられていた。そこで、計量地理学で用いられいる河川次数という指標を使用し、遺跡が立地する地点の河川の規模を数値化することにより、細石刃文化遺跡の内水面漁撈の可能性を論じた（桜井 1989）。ここでは、この論考に若干の新資料を加え、民族例も参照しながら、細石刃文化期における内水面漁撈について考えてみたい。



第1図　細石刃文化期の地域差（岡村 1990）



第2図　昭和初期の道府県別
サケ・マス漁獲量（市川 1977）

2　河川次数の考え方

地形図の河川をたどってゆくと、水系ごとに網状のパターンがみられることがわかる。これらは水系網 channel net と呼ばれ、そのパターンは一般的に樹枝状型、平行型、なし棚型、たんざく型に分けられている（第3図）。このうち樹枝状型が最も一般的で地形的制約のない地域に発達し、平行型は地形面が傾斜していたり、水系が発達する過程で地形が傾斜運動をおこした地域に発達すると言われている。また、なし棚型は硬軟の互層が地表面で斜めに切りあった地域に、たんざく型は岩石の節理の方向が大規模に直交している地域に発達すると言われている（樫根 1973）。

これに対し、水系網を定量的に把握するため、水流に順位（次数）をつけて表現する方法がホートンによって提唱された。ホートン以前は本流を決め、それを第一級として第一級に流入する支流を第二級として順次上流に遡って等級を決定する方法であったが、ホートンの方法は本流、支流に関係なく水源を一次水流として、一次水流同志が合流したものを二次水流、二次水流同志が合流したものを三次水流として順次下流に下っていきながら等級を決定するものである（第4図）。この方法では、合流した水流の次数が異なる場合、次数の高い水流がそのまま適用されるため、合流すれば必ず次数が高くなるというわけではない。また、本流・支流をあらかじめ決定することがなく、水源から下流に下ってゆくため、従来の方法に比べ、より合理的な方法であると言える。

ホートンの方法では、次の四つの法則が成り立つとされている。

第一法則（水流数の法則）

$\alpha N_{u+1} = N_u$　　ただし、αは分岐比

第二法則（水流長の法則）

$L_{u+1} = \beta L_u$　　ただし、βは長さ比

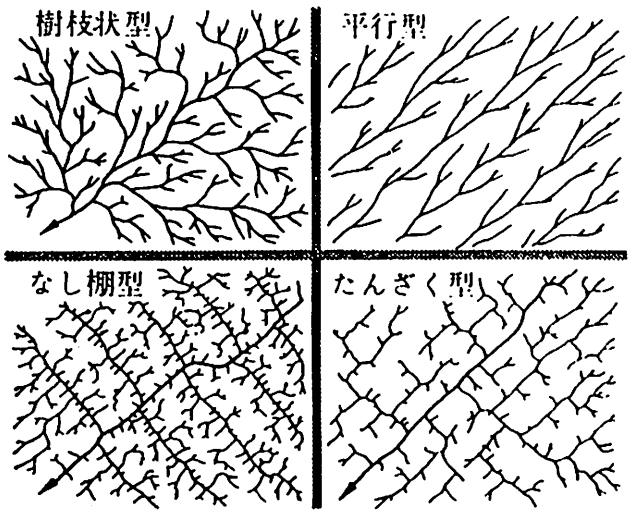
第三法則（水流勾配の法則）

$\gamma S_{u+1} = S_u$　　ただし、γは勾配比

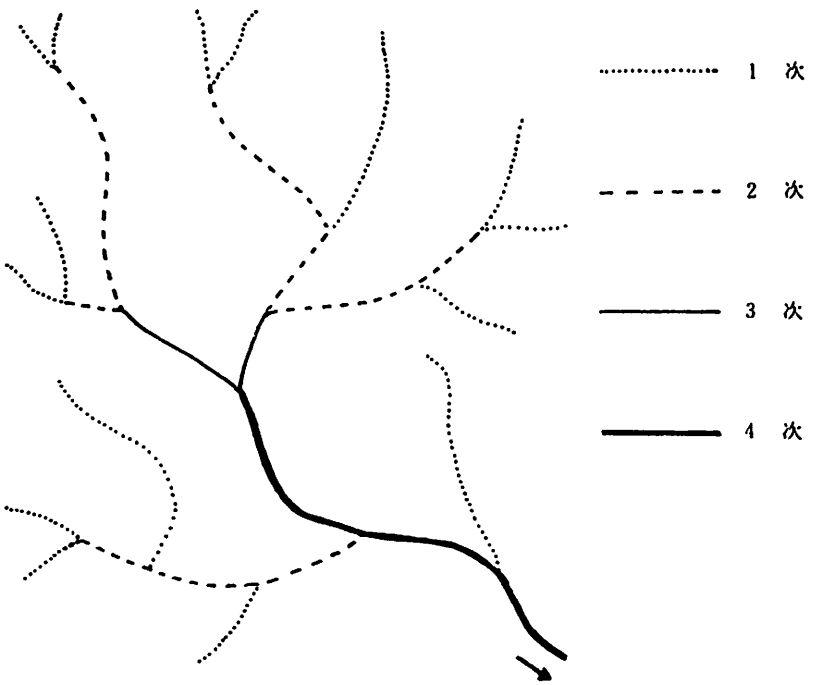
第四法則（流域面積の法則）

$A_{u+1} = \delta A_u$　　ただし、δは面積比

この法則は、次数が大きくなるにつれて水流長と流域面積は等比数列的に増加し、水流数と勾配は等比数列的に減少してゆくことを示している。これらの諸法則の中で、第一法



第3図　水系網の地域的パターン（榧根 1973）



第4図　河川次数の決定方法（桜井 1989）

則と第四法則が実際のデータとの整合性が高く、これに対し、第二法則と第三法則はやや劣ると言われている。本州の河川の場合、一般にα（分岐比）は4程度、β（長さ比）が2程度、γ（勾配比）は2程度、δ（面積比）は4.5程度である。つまり、次数が一つ大きくなるに従い、水流の数が1/4倍、水流の長さが2倍、河川の勾配が1/2、流域面積が4.5倍になることになる。また、考古学で河川立地や内水面漁撈の問題を考える上で重要な要素として川幅や流水量があげられるが、次数が一つ大きくなるにつれて流域面積が4.5倍大きくなり、水流の長さが2倍になることから推定して、次数が大きくなるに従って川幅や流水量は数倍になると想像できる。

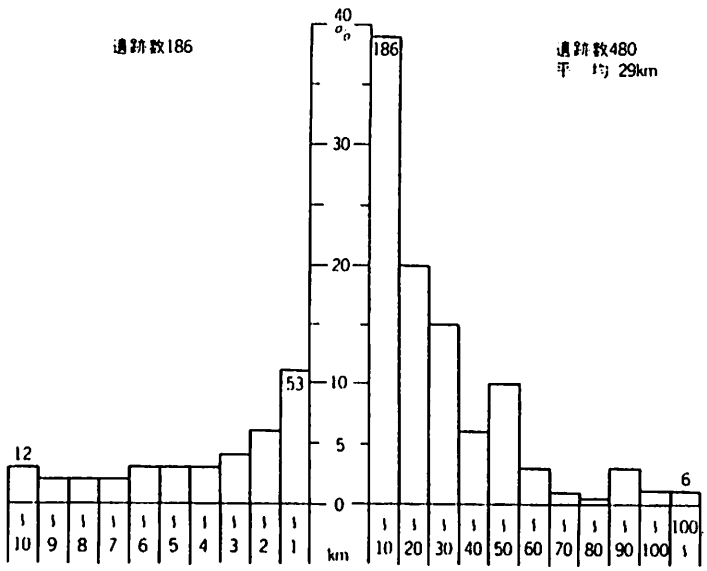
3　細石刃文化遺跡における内水面漁撈

（1）細石刃文化遺跡の河川次数

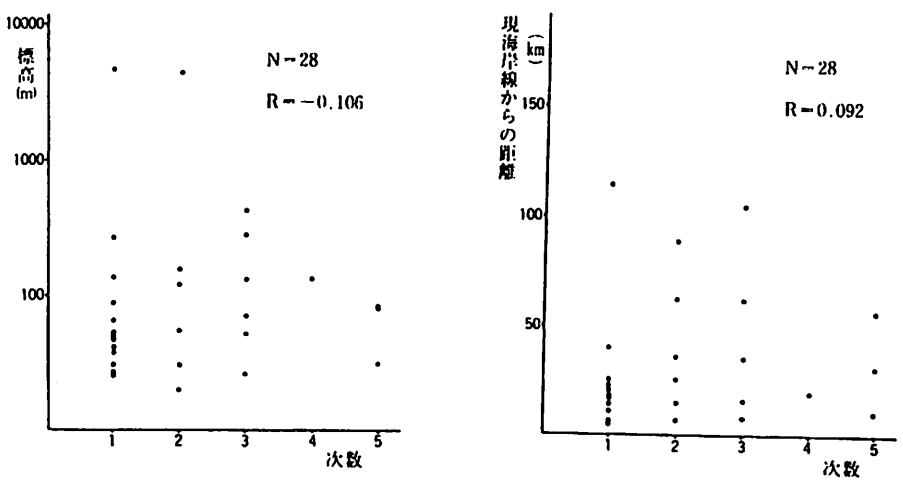
細石刃文化における遺跡の立地分析については、既に遺跡の標高や海岸線からの距離などについて検討した鈴木忠司の論考（鈴木 1983、1985）がある（第5図）。ここでは鈴木のデータをもとに、遺跡の標高や海岸線からの距離と河川次数との関連について検討し、河川次数がそれらと独立した変数であることを確認した上で細石刃文化遺跡の河川次数を求めてみたい。

海岸線からの距離、標高と河川次数との関係

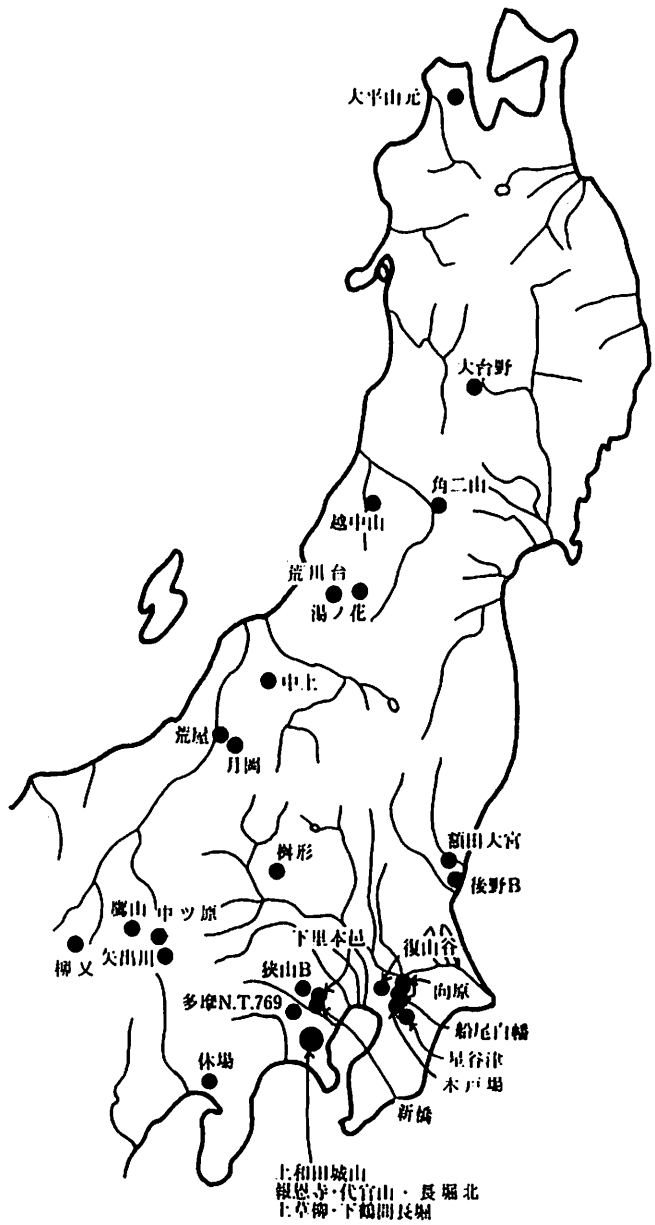
ここでは標高、現海岸線からの距離と河川次数との関係について検討する（第6図）。両者ともに対象遺跡数がやや少ないが、河川次数と標高については、河川次数が１の遺跡が標高100m以下に集中する傾向があるものの、積率相関係数（R）は-0.106であり全体としては相関関係は認められない。また、河川次数と現海岸線からの距離についても、河川次数が１の遺跡が現海岸線から30km以内に集中する傾向があるものの、積率相関係数（R）は0.092であり同じく全体としては相関関係は認められない。これらの結果は、遺跡の標高や海岸線からの距離と河川次数とは独立した変数であることを示しているとともに、標高の高い上流部は河川の規模が小さく、海岸近くの標高が低い下流部になるつれて河川の規模が大きくなる傾向を示す大・中河川流域だけでなく、河川の全長が短く、次数が低いまま海に注ぐ小河川流域にも遺跡が分布することを意味し、「河川の規模」という観点から検討する場合、河川次数が有効な指標となることを示している。



第5図　現海岸からの距離別遺跡分布（鈴木 1985）



第6図　河川次数と標高・現海岸線からの距離との関係（桜井 1989）



第7図　分析対象とした遺跡

次数＼合流先次数	合流なし	1	2	3	4	5
5				●額田大宮 ○荒川台	●角二山	●荒屋
4					●越中山 （前田耕地）	
3	●桝形 ●中ツ原５Ｂ	○上和田城山 ◎下鶴間長堀 ●長堀北	◎大平山元Ⅱ ○大台野Ｉｅ		●中土	
2	●復山谷	○下里本邑	○矢出川	○大平山元Ⅲ	●湯ノ花	●月岡
1	●後野 ○船尾白幡 ○向原 ○星谷津 ●木戸場 ●狭山Ｂ ○多摩ＮＴNo.769 ○新橋 ○報恩寺 ○代官山 ◎上草柳 ○鷹山 ○休場			●柳又Ａ		

凡例　●船底形石核（剥片系）主体、◎船底形石核（非剥片系）主体、○円錐形石核主体
斜体－サケ科魚骨出土、（　）縄文時代草創期

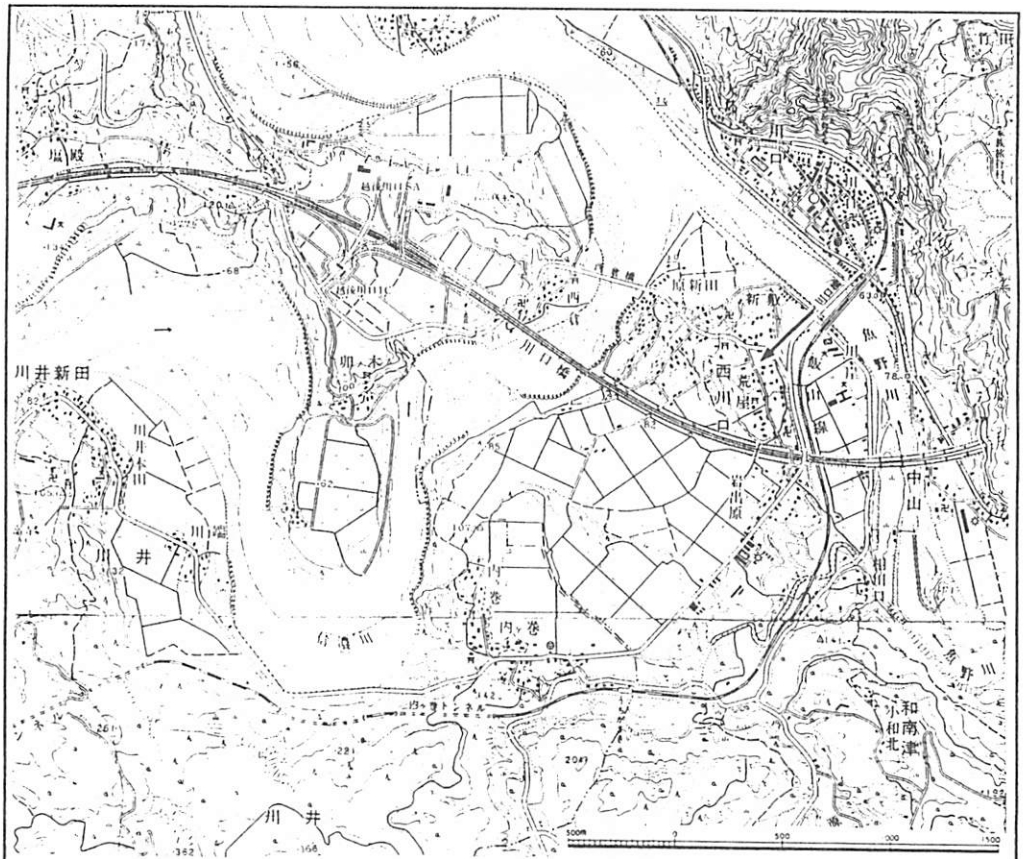
第1表　河川次数分析の結果

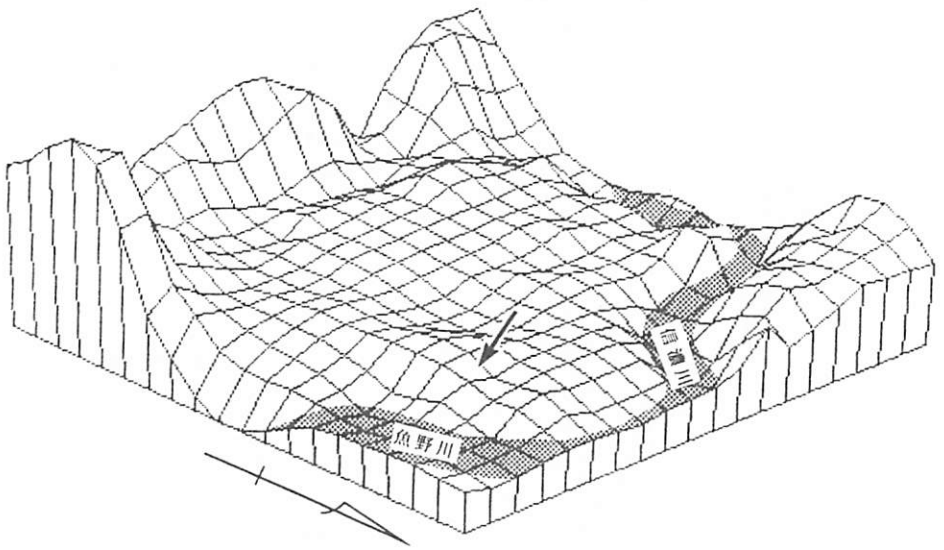
細石刃文化遺跡の河川次数

そこで、既に述べた方法で東日本の細石刃文化の主要遺跡（第7図）の河川次数を求めた。なお、合流点付近に立地している場合は合流先の河川の河川次数も求めた。第1表はその結果を示したものである。それによると、新潟県荒屋遺跡、中土遺跡、山形県角二山遺跡、越中山遺跡、茨城県額田大宮遺跡のように、河川次数、合流先次数ともに高い遺跡ではほとんど削片系船底形石核が主体をなしていることがわかる。また、これらの遺跡群の中でも遺物の出土量が圧倒的に多く、遺跡の規模が大きいと思われる荒屋遺跡や角二山遺跡はともに河川次数の高い河川の合流点に立地している。このうち、荒屋遺跡（第8図）は信濃川と魚野川の合流点にあたる低位段丘上に立地し、近年の調査でサケ科魚類の魚骨が出土している（東北大学考古学研究室 1990）。同じくサケ科魚類の魚骨が出土した事例として縄文時代草創期の東京都前田耕地遺跡があげられるが、前田耕地遺跡も多摩川と秋川の合流点の低位段丘上に位置することから両遺跡の立地は類似しており、細石刃文化期から縄文時代草創期にかけて、このような景観を呈する地点に好んで遺跡が形成され、内水面漁撈と深く関わっていると思われる。

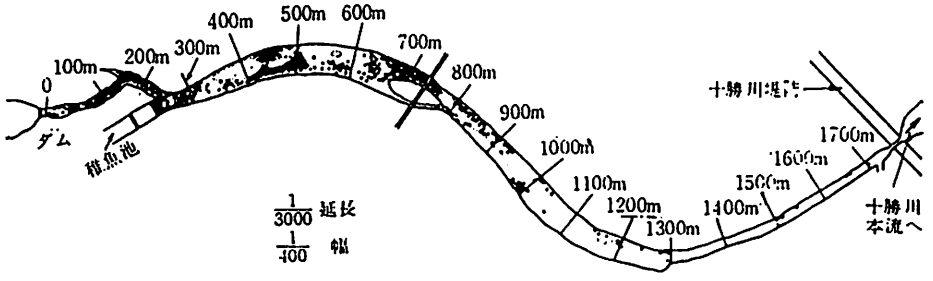
民族例との比較

次に、このような細石刃文化の遺跡立地の特徴と生業活動の中でサケ・マス漁が重要な位置を占めていたアイヌのコタン kotanの立地と比較してみたい。北海道の諸河川は秋にサケが遡上し、サケはアイヌにとって食料、特に越冬用の食料として重要な食料源であった。サケは遡河するのは産卵のためであり、その産卵区域は特定の地点（河川の屈曲点や合流点）に限定され、その地点は毎年ほぼ一定している（第9図）。また、サケの行動は、盛期には通常夜間に活動し、昼間は遡上中には河川の屈曲点等の深場、産卵行動中は産卵区域付近の深場に潜んでいるという（渡辺 1963）。そのため、アイヌのコタンは産卵区域付近に立地し、産卵区域を中心として漁撈活動を行う。つまり、コタンの位置はサケの産卵場所と強く関連しており、コタンはサケを対象とした内水面漁撈において最重要地点に位置していることになる。実際に享和頃（19世紀初頭）の十勝地方のコタンの分布をみると、明らかに河川の合流点や屈曲点にコタンが分布していることがわかる（第10図）。このことから、河川の合流点がサケ漁にとって重要な意味を持つことがわかる。また、河川次数と関連する河川の規模については、小河川にも多量のサケが遡上する北海道とは異なり、本州の場合はある程度の規模の大きな河川でないと一定の漁獲量を確保できなかった

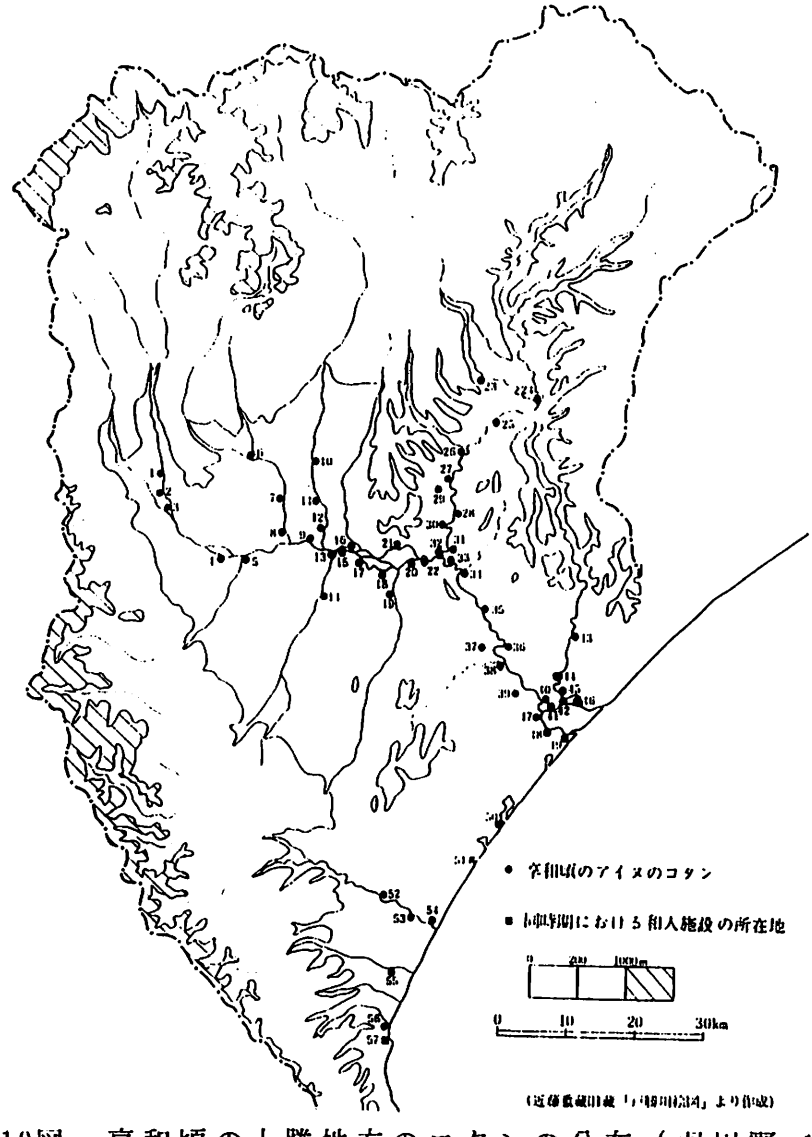




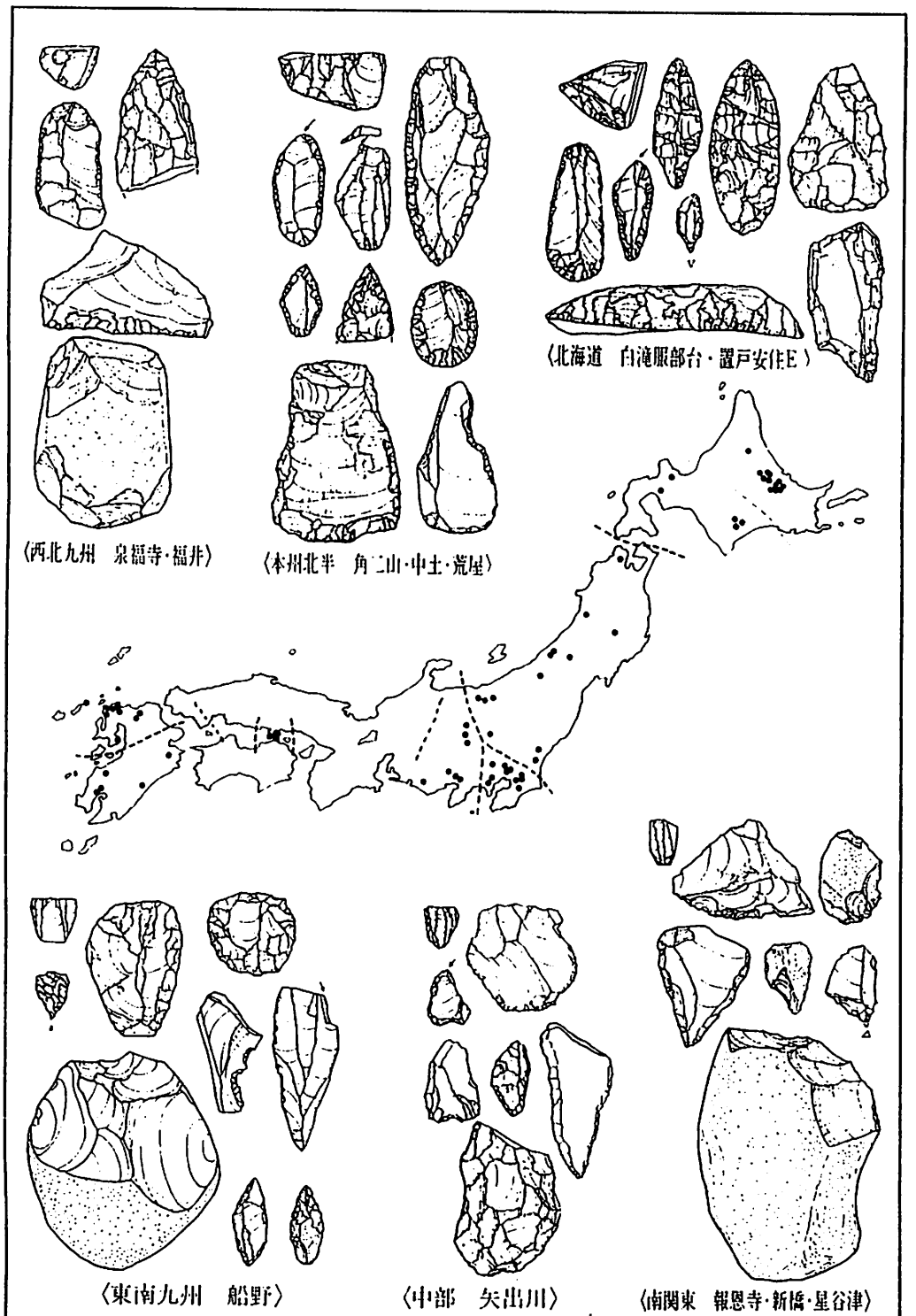
第8図　新潟県荒屋遺跡の立地



第9図　メム川サケ産卵床及び産卵区域分布（渡辺 1963）



第10図　享和頃の十勝地方のコタンの分布（羽田野 1981）



第11図　細石刃文化期の各地の石器組成（織笠 1984）

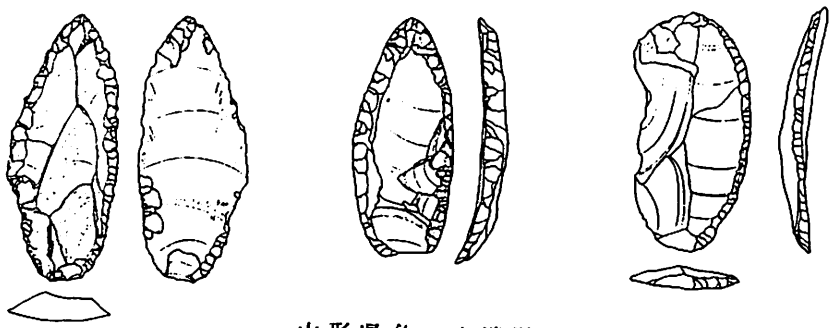
と考えられる。

（2）細石刃文化遺跡と伴出石器

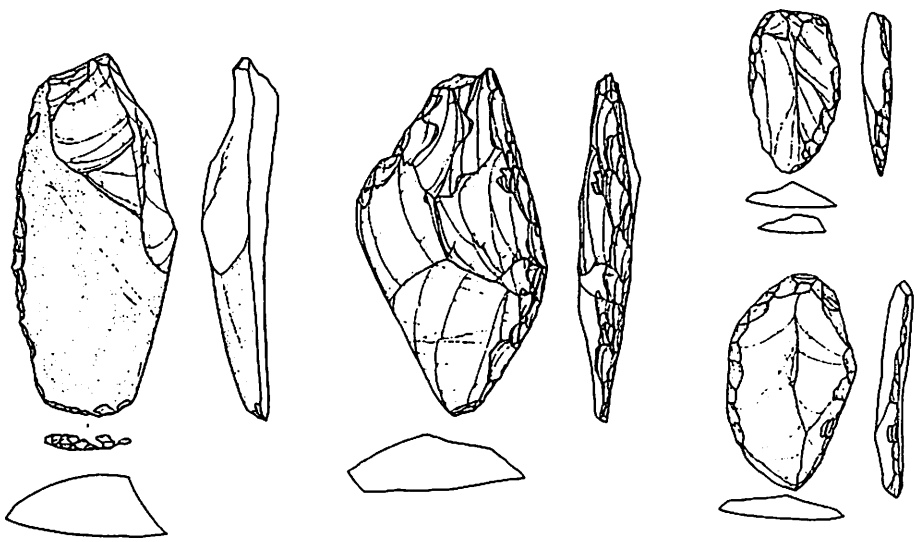
細石刃文化遺跡の出土石器群について、織笠昭（織笠 1984）は細石刃文化における石器組成の特徴として、本州北半で彫器やエンド・スクレイパー（掻器）が多く、関東地方ではサイド・スクレイパー（削器）、尖頭状スクレイパー、礫器が特徴的であるとした（第11図）。この傾向を内水面漁撈に結びつけて考えると、彫器はヤスやモリなどの骨角器製作に用いられ、掻器は魚の解体や鱗の処理に用いられたと想像できる。また、一般に削器とされている道具の機能として主に肉や魚を切る「切断具」と主に木や骨を削る「削り具」が考えられるが、従来は両者を意識的に区別することはほとんどなかった。しかし、「切断具」と「削り具」では、その作業に適した刃部の角度や使用方向が異なり、使用痕の観察等によってその区別も可能である。阿子島香（阿子島 1989）によると、宮城県座散乱木遺跡での使用痕観察の結果、スクレイパー類の使用法は刃部角と相関しており、切断は刃部角が35～60°、削りは52～62°に集中、掻き取りは43～90°で55°以上に集中するという。また、魚の肉は筋ばっておらず、肉が柔らかいため陸生哺乳類に比べ切断しやすいという特徴を持っている。そのため、サケ・マスのように比較的大型の魚を解体・調理するには、北米の北西海岸インディアンが用いているサケを解体する魚用のナイフ（第13図）のように比較的大型で刃部が長く、やや凸刃の石器が向いている。これと類似した形態を呈する削器は本州北半の細石刃文化遺跡で一般的にみられ（第12図）、魚類の切断・解体具として機能を想定することができる。

5　おわりに

本稿では、河川次数を用いた立地分析によって、細石刃文化期の本州北半においたサケ・マスを主体とした内水面漁撈が行われていた可能性が強いことが示した。また、新潟県荒屋遺跡でサケ科魚類が検出されたことは、この仮説を裏付けるものとして注目される。今後は発掘調査においてフルイを用いた精密な調査を行うことにより、魚骨が検出される遺跡が増加すると予想される。しかし、この時期の出土遺物は石器類がほとんどであるため、漁撈具の種類や形態、具体的な漁撈の方法などはわかっていない。現段階では出土遺物だけでなく、遺跡立地などについても検討するとともに、大陸での事例を参考にし、民族考古学的手法を用いて、当時の内水面漁撈の実態を明らかにし、細石刃文化の中での位置づけを行うことが急務である。



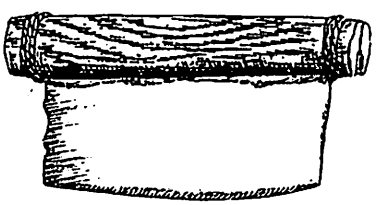
山形県角二山遺跡



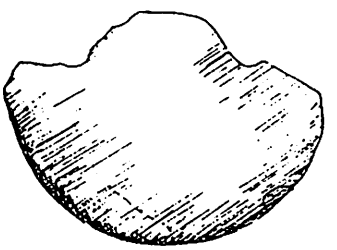
神奈川県下鶴間長堀遺跡

0 5cm

第12図　細石刃文化期の削器



魚切り用磨製スレート製ナイフ



半月形磨製スレート製ナイフ．上部のでっぱりは柄をとりつけるためのもの　14.5cm，12・CS

第13図　北米北西海岸インディアンの
魚用ナイフ（Stewart 1977、木村訳）

＜参考文献＞

阿子島香 1989 『石器の使用痕』ニューサイエンス社

市川健夫 1977 『日本のサケ』日本放送出版協会

岡村道雄 1990 『日本旧石器時代史』雄山閣

織笠　昭 1984 「細石器文化組成論」『駿台史学』60号

加藤晋平 1983 「日本旧石器文化の流れを遡る」『歴史と人物』2月号

加藤晋平・松本美枝子 1984 「日本細石刃文化の源流」『史艸』25号

桜井準也 1989 「遺跡立地と河川次数分析」『考古学の世界』新人物往来社

佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29号

鈴木忠司 1983 「日本細石刃文化の地理的背景」『古代学叢論』

鈴木忠司 1985 「再論日本細石刃文化の地理的背景」『論集　日本原史』吉川弘文館

東北大学考古学研究室 1990 『荒屋遺跡－第2・3次発掘調査概報』川口町教育委員会

羽田野正隆 1981 「十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷」『北方文化研究』14号

橘本　正 1975 「石器の機能と技術」『日本の旧石器文化　第１巻総論編』雄山閣

樋根　勇 1971 「自然地理学の理論について－水系次数に関する研究を中心として」『東京教育大学地理学研究報告』ＸＶ号

樋根　勇 1973 「地表事象の空間的規則性　３、水系網の規則性」石水輝雄・奥野隆史編『計量地理学』共立出版

樋根　勇 1974 「河川の樹状発達」『数理科学』132号

四柳喜章 1983 「サケマス」『縄文文化の研究２　生業』雄山閣

渡辺　仁 1963 「アイヌのナワバリとしてのサケの産卵区域」『民族学ノート　岡正雄教授還暦記念論文集』平凡社

渡辺　仁 1977 「アイヌの生態系」『人類学講座１２　生態』雄山閣

Stewart,H. 1977 Indian Fishing.木村英明・木村アヤ子訳『海と川のインディアン』雄山閣

Watanabe,H. 1964 The Ainu. Journal of the Faculty of Science Sec.V,vol.II, University of Tokyo.

細石刃文化と生業

鈴木忠司

はじめに

標題のようなテーマが独立項目として掲げられるのは、おそらく今回がはじめてのことではないだろうか。この一点をみても矢出川後４０年の時間の意味について考えさせられるし、オーガナイザーの意気込みと見識に敬意を表さなければならないと思う。ところで、標記の課題にたいしてはたしてどこまで現状で回答が可能かと考えると、はなはだ心もとない気持ちにとらわれる。というわけで、小稿でははじめに理解の現状を示し、その後に課題の二、三についてまとめてみたい。

Ⅰ　細石刃文化の生業

１．陸獣の狩猟、２．植物質食料の採集、３．水産資源採捕の漁業の三部門について概観してみたい。あらためて記すまでもなく、採集経済の生業の研究にとって食料資源としての動植物相、水域的自然そしてこれを利用する人間側の技術の問題は相互関係的に捉える必要がある。こういう理由で、ここではできるだけ自然の側と文化の側の双方から記載をすすめる。なお、生業に関する記述は、筆者のこれまでの見解を基本的に踏襲することをあらかじめお断りしておきたい（鈴木1988）。

１．陸獣の狩猟

A）動物相と狩猟対象

動物相の理解については、華北からの温帯系動物群およびマンモス動物群の移入について、近年新しい展開があったので河村善也氏の見解を引用再現しておく（図１）。

> 3.5 万年ないし４万年前後にかけての動物相には、・・・・・北方から小型のウマ、ヘラジカ、オーロクス、バイソンなどか南下して本州陸塊の動物相に加わったのも，この時期であろう．・・・・このような北方系あるいは草原的環境に適した動物の出現は，本州陸塊の動物相にとって一時的な付加的現象と見ることができる．
>
> （中略）
>
> 2.5 万年前から1.5 万年前にかけての時期には気候はさらに寒冷化して，・・・・ナウマンゾウ，ヤベオオツノジカ，ニホンムカシジカなど古くから本州陸塊に住みつ

いていた動物は，この寒冷な時期にもまだかなり生息していたようで，ウマ類，ヘラジカ，バイソンなど北方からの侵入者と共存していたものと考えられる．

（中略）

1.5 万年前から1万年前にかけて，・・・・最終氷期を生きぬいた多くの種類が本州陸塊から姿を消していったのである．ナウマンゾウやニホンムカシジカ，ヒグマは完全に絶滅し，ヤベオオツノジカも急激に個体数が減少して絶滅寸前の状態に追い込まれた．最終氷期後半になって北方から侵入した大型有蹄類も全て絶滅した．

（中略）

1万年前頃になると，・・・・イノシシ，カモシカ，ツキノワグマが増加する．（河村1982）

かつては，後期更新世の日本列島には中国北部の動物群とシベリアの“マンモス動物群”が大量に移入してきたと考えられていたが，最近ではこの時期の動物は，北海道のものを除いて，大陸の動物群からほとんど隔離されていたと考えられるようになってきた．上に述べた大陸との共通種は，この時期ではなく，それ以前に渡来してきたものなのである．後期更新世の後半には，中国の東北部と同様，“マンモス動物群”の要素が日本列島にも現れるが，その主な分布は北海道までで，津軽海峡を越えて本州まで南下できたのは，その一部にすぎない．本州のこの時期の堆積物から発見されるヘラジカ，オーロックス，ステップバイソンなどがその例，これらは本州以南の地域に定着することなく，短期間のうちに絶滅してしまった。（河村1992）

細石刃文化の年代をどの辺りにおくかは議論の余地があるが、とりあえず14,000～12,000年B.P.あたり、あるいは晩氷期あたりということにしておこう。先に引用した動物相の変遷からみて、細石刃文化期の動物相に関して留意すべき点を、私見をまじえながら記せば以下のようなことになろう。

1．ナウマンゾウ・ニホンムカシジカ・ヒグマはすでに絶滅していた。

2．オオツノジカが生き残ってはいたが、当時すでに棲息数は著しく減少していたし、縄文期の化石の発見地が本州のもっとも山深い山地帯に限られていたことから推して、棲息域は細石刃文化人の日常的行動域から隔絶しており、狩猟獣の主座の位置をとっくに失っていた可能性も高い。これに対しシカは一層その重要性を増したことであろう。そしてこのころ西南日本地域では、イノシシも狩猟対象として一定の位置を占め始めていたのではないだろうか。

3．北海道はどうだったろうか。ここはマンモス動物群の本格的移入のあったところである。宗谷・間宮の両海峡が成立するのはずっと後のことであることを考えれば、大陸側の現生種も縄文時代直前まで生きつづけていた可能性が十分にあるのではないだろうか。

4．花泉などで出土しているノウサギなどの小動物や毛皮獣も捕獲の対象であったであろう。

狩猟の考古学的証拠でナイフ形石器文化以降に属する例は、岩手県花泉がほとんど唯一の例であろう。しかし、これは明らかに細石刃文化に先行する。このほかに、北海道上川郡日東遺跡から「シカの骨ではないか」という骨片の出土があり、長崎県福井岩陰2・3・4層から、相当量の骨片が出土しており、「鹿・猪程度の動物らしい」とある。

B）西南日本細石刃文化の狩猟

上記の諸条件を考えると、主たる狩猟獣はシカ主体で、これにイノシシ、ノウサギ、タヌキ、キツネ、ツキノワグマ、カモシカ、オオツノジカなどが加わっていたと考えておきたい。動物の棲息と狩りの舞台は主として森であり、基本的に森の文化である。森に棲む単独生活者的な動物に対し、個人あるいは小規模編成の狩猟を行っていたと考えておきたい。

C）東北日本細石刃文化の狩猟

先の動物相の概観からみて、本州域と北海道は別個に考えておく必要があろう。本州域はほぼ西南日本と同じと考えておきたい。しかし、すくなくともイノシシは除外しておくべきであろう。この分だけシカに一層ウエイトがかかったと理解したい。いずれにしろ本州以南の細石刃文化においては、大型獣の狩りではなくシカを中心とし、これに各種の小動物を加えたものではなかったかと思う。

北海道の事情はこれとは全く異なっていたであろう。北海道固有の動物群については詳らかにしえないが、ここはマンモス動物群の本格的流入のあったところである。間宮・宗谷両海峡の成立は後のことであり、トナカイについては、本州域への移入が那須孝悌氏によって言及されており（那須1985）、縄文時代直前までトナカイ・バイソン・ウマなど大陸側の現生種を含む北方系動物群のかなりが健在であったことであろう。

ところで、最近東シベリアの細石刃文化の狩猟獣の研究を公にした加藤博文氏によれば、トナカイが圧倒的に重要な位置を占めており、シベリアの細石刃文化にマンモスハンターのイメージを与えるのは難しいようである。ただし、IV期の後半、日本の細石刃文化に相

当する頃、アカシカやノロが主として狩られるようになるという（加藤1993）。また、加藤晋平ら氏は、シベリアでは1万5千年前頃から北緯50度以南では、大型・群棲動物が姿をけすと述べている（加藤・松本1984）。

ところで、細石刃文化期の遺跡は北海道東部で著しい集中を見せる。後述するように、ここは疎林と草原環境が卓越していた。ここから針葉樹の森にかけて、トナカイ・バイソン・ヘラジカなどの大型、ノロを含む中型のシカ、ノウサギなどの小型獣に依存した狩猟文化として、本州以南の地域とは相当異なった光景が展開されたのではないだろうか。この地ではまだ大型動物群の狩りも一部に健在であったのではなかろうか。

北海道の細石刃文化が、皮革・骨角の加工具である多種多様の彫刻器・掻器・錐を発達させることは周知の事実である。とりわけ道東では岩宿時代のうちでも陸獣依存形にもっとも傾斜し、草原と疎林の文化が発達した。日本列島史のなかでも稀な類型の文化を築いていたと評価できるのではないかと思う。

2．植物質食料の採集

A）植物相と採集対象

まず、五十嵐八枝子氏の最終氷期最寒冷期の植生図を概観するところから始めよう（小野・五十嵐1991）。これによれば、八つの植生帯に区分される（図2）。細石刃文化との対比を念頭におき、これをもう少し単純化して、グイマツ・ブナの有無による区分、照葉樹林を除外しておく。そうすると、1．北海道東北半にグイマツ・ハイマツの疎林と草原（図2-2）、2．中部地方内陸高地までの亜寒帯針葉樹林（同図3•4）、3．東北南部の沿岸部から九州までの冷温帯落葉広葉樹林（同図5•6）の三つの植生帯に区分される。北端に草原景観がひろがり、これ以南を針葉樹林と落葉広葉樹の森が二分するかたちになる。

なお、北海道の細石刃文化期は剣淵亜氷期に相当する。この時期に寒さのぶり返しがあり、最寒冷期とほぼ同様の植生図が描かれるとされる。このあたりの事情を五十嵐氏は次のように述べている。

> その後，剣淵盆地では，再びグイマツとハイマツ，ツツジの仲間が増える時期がおとずれた。最寒冷期に比べると，グイマツとハイマツは同じくらいに回復したが，エゾマツあるいはアカエゾマツとカバノキはかなり減少し，トドマツはほとんど姿を消してしまった。こうした変化から，気候が再び寒冷になったことが推定される。剣淵盆地では，この時期もそれまでと同じような草原と疎林の植生であるが，ミズゴケが生育しはじめたことから，気候が湿潤になってきたことがわかる。

上記の寒さのぶり返しについては、本州地域においても辻誠一郎氏によって次のように説かれているところである。３Ｃ期および３Ｄ期（図３）の後半が細石刃文化期に相当する（辻1985）。

平野部では，約1.8 ～1.6 万年前のハンノキ拡大期（植生期３Ｂ）を除くと約2.1 万年前以降1.1 万年前まで，チョウセンゴヨウとバラモミ節を主とする針葉樹林が広範囲に分布していた．針葉樹には，シラカンバやハンノキ属などの落葉広葉樹も混在していた．チョウセンゴヨウやバラモミ節は，現在，高所の山岳地帯に分布が限られているが，当時はかなり広範囲に分布し極めて普通な森林要素であったと言えよう．約1.8 ～1.6 万年前のハンノキ拡大期は，シデ属－アサダ属等の落葉広葉樹の増加が目立つので，短期の温暖期として位置づけられるかもしれない．

（中略）

約1.1 万年前，それまで栄えたチョウセンゴヨウやバラモミ節を主とする針葉樹林は，カバノキ属やハンノキ属にとって代わられる．

岩宿時代遺跡出土の植物質食料は、オニグルミ（東京都御殿山、静岡県広野北）、くらいで貴重な具体例の域を越えないので、植生から可能性のあるものを拾い上げてみよう。

Ｂ）東北日本の植物質食料

日本では南下するにしたがって植物的自然は豊かになり、可食植物の種類・量が増す。北海道の低地から本州の高原地帯では、ハイマツの利用が可能であり、東日本の針葉樹林帯の南半ではチョウセンゴヨウの利用が可能である。ヒメウスノキ・クロマメノキ・コケモモなどの漿果は高地や北にいくほどに豊富であったであろう。とりわけ道東では、亜寒帯の各種の漿果の群落が食料として一定の重要性を占めたことは想像にかたくない。

Ｃ）西南日本の植物質食料

関東低地以西の西日本の冷温帯落葉広葉樹林帯では、クルミ・ハシバミ・クリ・ブナ・ドングリ・トチなど各種の堅果類がある。ヒシやヤマノイモなどもある。なおこの植生帯は温帯性針葉樹林とか冷温帯針広混淆林とも呼ばれるように、針葉樹要素が多くチョウセンゴヨウは重要な食料資源となりうる。漿果ではヤマブドウ・サルナシ・イチイ・ノイチゴ・ウスノキなど。果実にはスモモがある。

植物質食料の加工具と考えられる敲石・磨石は、縄文時代に比較して非常に少ない。石皿はまずないと言ってよい。敲石類もドングリやトチの粉砕、水さらし等に関与した姿を窺うことは出来ない。道具側から考えると、落葉広葉樹林に豊富な食料資源のほとんどは、

岩宿時代にあっては潜在的食料であったにに過ぎず、縄文時代に至って初めて利用が可能になったと考えなければならない。神奈川県二ノ丸遺跡でドングリが出土しているようであるが、評価が難しい。

3．漁業

A）水域環境と食料資源

内水面や海を食料の資源環境としてどの様に捉えておくべきかは、まだ定見を持たない。ただ、サケ・マスの遡上範囲が今日より広かったことが予想されており、加藤晋平氏は次のように記している（加藤1981）。

> 前者（サケ：筆者注）は日本海岸一体と太平洋側では利根川以北、後者（マス：筆者注）もほぼ同様な遡河河川の分布をもっている。ただ、先土器人が体験した最終氷期の寒冷期には当然河川の水温も下がり、その遡河範囲はさらに南下したであろう。

気候と水温、黒潮・親潮の位置とサケ・マスの遡河条件など整理すべき点の多いことが予想はされる。

B）細石刃文化の漁業

岩宿時代の漁業については、概説書などではその可能性に言及されることが多い。しかしきちんとした発言はおそらく、加藤氏および佐藤宏之氏の労作につきるのではないだろうか。これらに具体的に触れていこう。加藤氏は１９８１年に、サケ・マスの捕獲を岩宿時代の生業のなかでもっと積極的に評価し、岩宿時代＝ハンターの生活という常識を疑ってみるべきだという提言を行った。

少しその内容を整理しておこう。はじめに、世界各地の旧石器遺跡中から魚骨の出土遺跡を多数紹介する。前期旧石器時代から各地で各種の魚骨の出土があり、フランスのアシュール文化、オルニャック遺跡ではすでに遡河回帰性をもつトラウトが捕獲されはじめているという。ついで、世界のサケ地帯中日本の位置する地域では、遡河期間が陸生資源の少ない時期にしかも長期間にわたっていることを指摘し、台地縁辺に連なって分布する遺跡の立地性もその要因の一つであることに言及しつつ、最後に“内陸漁撈から沿岸漁撈への発展が後期旧石器から中石器文化への展開である”と結んでいる。

提言の趣旨、サケ・マス資源の分布から見た日本の位置、食料資源の季節的変動とサケ・マスの有用性など、どの点から見ても傾聴すべき説得的なものである。

その後、シベリアの実情を紹介しながら、とくに東北日本の細石刃文化に対し、サケ・マス漁説を具体化、強化された（加藤・松本1984，加藤1984）。シベリアでは1万5千年

前頃から魚骨の発見率が高くなり、1万3千年前以降漁撈活動はきわめて顕著になり、定着的な狩・漁撈民としての第一歩を踏み出したという。

新潟県荒屋遺跡は本州におけるその代表的な遺跡であるが、同遺跡に対する最近の発掘では、多量の炭化物を伴う多くの土坑が切り合い関係をもって検出されており、またサケ科の脂肪酸が確認されたともいわれ、こうした点を踏まえながら、佐藤宏之氏はここがサケの解体処理の作業場であり、季節的な生業集団によって残されたものではなかったかと解釈している。縄文定住社会への移行過程の解明を視野に入れつつ、定住化に果たした漁業の役割と前史的意義を説いている(佐藤 1992)。

筆者は遺跡立地論の立場から岩宿時代の漁業に対して否定的な見解を述べたことがある(鈴木 1985)。これに対しては桜井氏準也から反論をいただいた(桜井1989)。ここでは、遺跡と川との関係の分析方法に興味深い方法が呈示されている。

その後遺跡分布の量的検討からまたこの問題を考えてみた(鈴木1992・93)。東日本に分布する湧別系遺跡140ケ所のうち約80%が北海道(とくに東部)に集中し(図4)、そこが草原的景観に位置している事実から見て、これらを支えた主たる生業が、少なくとも北海道東部ではトナカイ・バイソンなどを含む草原に群棲する動物群の狩りをまず第一に考慮すべきではないかと思う。近代におけるサケ・マスの漁獲高の地理的分布勾配からみても(図5, 四柳1983)、東日本における細石刃文化が本州で激減する遺跡分布の量的勾配は説明しにくいように思われるからである。

いずれにしろ、岩宿時代の漁業の問題がようやく現実の課題になりつつあるようにみえる。その際、議論は漁業の存否問題を越えて、生業体系全体のなかで論ぜられる必要があり、具体的な検証作業が求められる段階に来ているように思われる。近年、縄文時代でもサケ・マスの骨の発見が急増しているという。沿岸部の貝塚地帯では少なく、内陸部の河川上・中流域に多いという。岩宿時代に関しても、遠からずサケ・マスの食料に占める位置をはっきりさせることが出来るであろう。

4. 生業と季節性

縄文時代では、単純化すれば、春の貝、夏の魚、秋の木の実、冬の獣という4シーズンの季節性が明瞭で、生業の季節配分構成と定住とがないまぜになって、縄文の生計戦略と社会が成立していた。細石刃文化はどうであろうか。同期を含めた岩宿時代全般と縄文時代の生業体系の相違点は、1. 漁業と植物質食料の利用の未発達、2. 生業の四季的配分構成の未完成の二点に集約されよう。

1．はすでに述べた。2．について記す。東北日本の細石刃文化では、典型例として、道東を念頭におけば、利用可能な植物はハイマツとノイチゴ・クロマメノキ・コケモモなどのベリー類であろう。ハイマツは種子の大きさの点で主要食料に加えられるかどうか。夏の短い期間に集中的に漿果類を集めねばならなかったであろう。西日本では直ぐに食べられる植物は秋に結実する堅果類等である。したがって、動植物の比率の問題は別にして、生業の基調は通年の狩りと付加的な植物の採集ということになり、2シーズン制の中にあったと理解される。狩りが年間を通しての主要な生業であったであったと考えなければならない。

II　細石刃文化生業研究の現状と課題

1．現状

生業の三部門について概観したところからも明らかなように、生業研究の現状には大きすぎるほどの制約がある。生業活動によってもたらされた具体的な食料残滓を欠くことがその主因である。縄文時代の生業研究に貝塚・特殊泥炭層・岩陰などが欠如した場合を想定すれば、それがどのようなものか容易に想像がつく。また、最近の訳書『ゲナスドルフ』に日本のように石器しか出土しなかったとしたら、どのような物語が可能であったかを考えてみてもよい。

また、食料資源としての種々の自然はあくまでも潜在資源として存在しているのであって、人間側の技術を含む社会の諸側面との関係を具体的に捉えなければ、生業研究を現実的な課題には成しえないからである。このような自然と人間との具体的な諸関係の埋蔵地が、結局貝塚などだと考えればよいであろう。

というわけで、先に記した生業に関する記載は、潜在食料資源としての自然的背景と先縄文段階というほどの意味で、岩宿時代の技術・社会の段階を想定し、これを前提とした関係のなかで、ありうべき生業形態を推測したに留まっている。あくまで抽象的、概念的であり、人間と食料資源環境の具体的な結節点の資料を欠いたままの議論であることが、決定的な弱点である。

2．課題

思いつくままに記してみる。

縄文時代の貝塚や花泉のような例が近い将来望めなくはないが、まず期待しないほうがよい。そこで先に記した結節点を他の普遍的な材料に求めえないか考えてみる必要がある。筆者は、これまでに遺跡立地から生活空間論とその延長での生業論を試みたことがある。

また、まだはっきりした形にはなっていないが、遺跡分布の量的問題について検討し、これを遺跡量／人口を支える生業基盤の問題として考えようとしている。こうした作業がどこまで有効か、その可能性はどうかという点についてはいまは触れない。ただ、現時点ではっきりしているのは、人類の食性や生態系と生業との関係に関する一般論とは別に、具体的な資料分析のなかから、問題を掘り起こす方法を開拓する必要があるということである。

西南日本の採集活動については、チョウセンゴヨウ・クルミ・ハシバミ・クリなどの堅果類やヒシ・ヤマノイモなど、アク抜き不要の食料がどの程度実際に用いられたかという点が大きな課題となろう。また、植生の三区分の際にとりあえず無視してきたが、南九州から関東地方沿岸部に分布する暖温帯常緑広葉樹林帯も気掛かりな地域である。ここには、アク抜きを必要としないシイ・イチイガシが産する。九州の細石刃文化では、敲石の増加が指摘されているし（黒坪1983・84）、近年調査成果の著しい南九州での礫群等の問題もある。さらに、隆線文段階で九州から東北地方まで、土器の使用が一気に広がる事実にも注意をしておきたい。この地域は、冷温帯落葉広葉樹林帯から亜寒帯針葉樹林南半のチョウセンゴヨウの利用可能地域と重なる。縄文的な高度な植物質食料の利用段階の前史がこの辺の事情と係わりをもつことになろう。

筆者がここまで述べてきた記述の中では、北海道に一番問題が多い。狩猟・漁業ともシベリア研究の第一人者による最近の成果を承知しつつも、これと相当に距離のある描写をした。漁業重視と森林棲の中型動物の狩猟という図式を採用すれば、常識にも沿い、研究の現状に照らして無難であろうし、妥当な考えかたであろう。しかし、あえてそうしなかった理由は、彼の地の事情で此の地を説明することを避けたかったことと、我々自身が直接手にし、批判検討しうる材料をできるだけ掘り起こしたかったためである。そしてこの際、生業の三部門を全体的な構成関係の中に置き、列島各地の地域の実情を考慮しつつ、これをなしたいという思いによっている。

加藤先生はパイオニアワーカーであり、いわば旗振り役でもある。フォロワーであり、カルティベイターである筆者にとって、“その可能性は十分にある”といった概説書風のけっして否定されることのない賢者の弁を弄するのは、かならずしも学問的な態度ではないのではないかと考えている。今後も生業研究の資料的結節点となる遺跡・遺物の属性を求めつつ、新発見によって兜を脱がねばならなくなる日まで、愚者の弁でしばらくこの問題に対処していきたいと考えている。

引用・参考文献

小野有吾・五十嵐八枝子１９９１『北海道の自然史』、北海道大学図書刊行会。

加藤晋平１９８１「日本旧石器時代の漁撈活動」『信濃』３３－４。

加藤晋平１９８４「日本細石器文化の出現」『駿台史学』６０。

加藤晋平・松本美枝子１９８４「日本細石刃文化の源流」『史艸』２５。

加藤博文１９９３「東シベリア後期旧石器の骨角製槍先について」『古代文化』４５－７

河村善也１９８５「最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷」『月刊地球』７２。

河村善也１９９２「哺乳動物相の移り変わり」『科学』６２－４　。

黒坪一樹１９８３・８４「日本先土器時代における敲石類の研究（上）（下）『古代文化』３５－１２，３６－３。

桜井準也１９８９「遺跡立地と河川次数分析」『考古学の世界』新人物往来社。

佐藤宏之１９９２『日本旧石器文化の構造と進化』、柏書房。

鈴木忠司１９８５「再論日本細石刃文化の地理的背景」『論集日本原史』、吉川弘文館。

鈴木忠司１９８８「素描・日本先土器文化の食糧と生業」『朱雀』１。

鈴木忠司１９９２「日本列島細石刃文化の分布論的検討－地理・動植物そして人口－」『国際シンポジウム　北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』発表要旨。

鈴木忠司１９９３「日本細石刃文化の分布論的検討」『シンポジウム　東アジアの文明の盛衰と環境変動１９９２』、印刷中。

辻誠一郎１９８５「最終氷期以降の植生史」『月刊地球』７２。

那須孝悌１９８５「先土器時代の環境」『岩波講座日本考古学』２．環境と人間、岩波書店。

四柳嘉章１９８３「サケ・マス」『縄文文化の研究』２．生業　雄山閣。

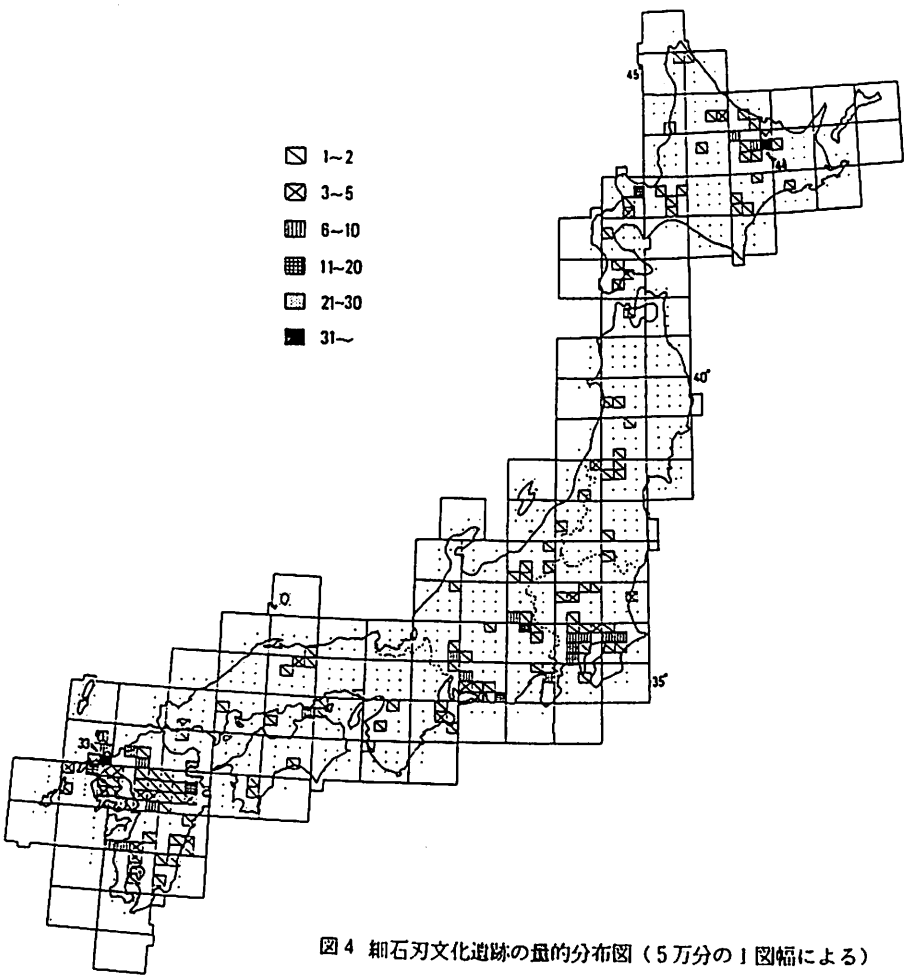


図4 細石刃文化遺跡の量的分布図（5万分の1図幅による）

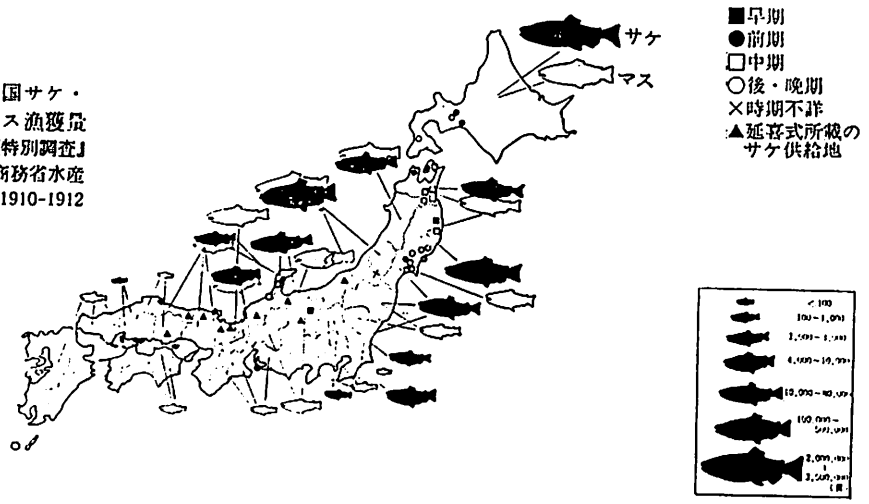


図5 全国サケ・マス漁獲量（『水産事項特別調査』1891,『農商務省水産統計年鑑』1910-1912より作成）

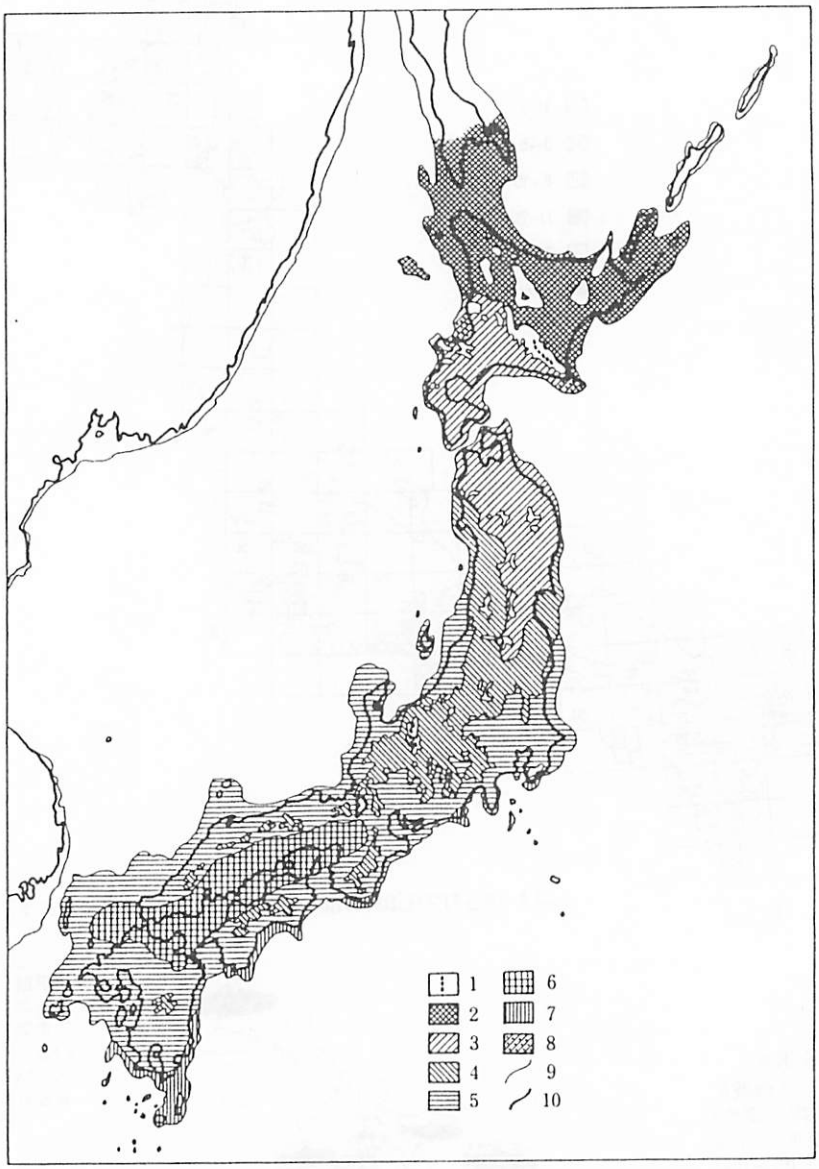


図2 日本列島における最終氷期・最寒冷期の植生図(那須, 1980 を一部改変して五十嵐作成)。1：氷河(黒点)および高山の裸地，草地(ハイマツ帯を除く高山帯に相当する地域)，2：グイマツ・ハイマツを主とする疎林と草原，3：グイマツを主とする亜寒帯針葉樹林，4：グイマツをともなわない亜寒帯針葉樹林(中部地方，および近畿地方では一部カラマツをともなう)，5：冷温帯落葉広葉樹林(ブナをともなう)，6：ブナをほとんどともなわない落葉広葉樹林，7：暖温帯常緑広葉樹林，8：草原，9：最終氷期最寒冷期の海岸線，10：現在の海岸線

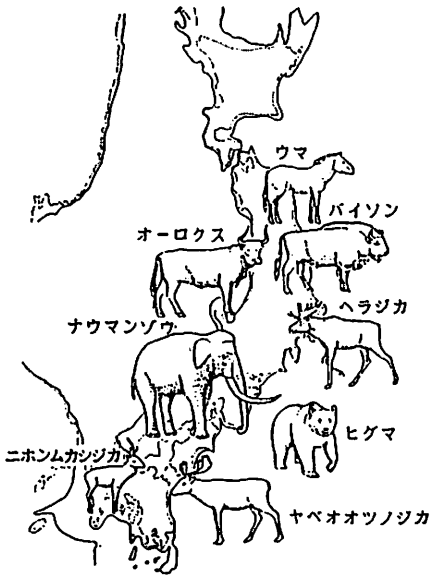


図 1　2.5 万年前から 1.5 万年前までの時期の動物相を代表する中・大型哺乳動物と推定される当時の海岸線.

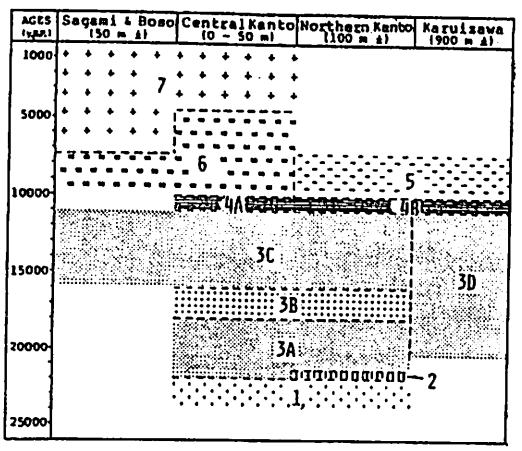


図 3　関東地方における約 24000 年以降の植生の時間空間的分布（辻 1985），1：コナラ亜属の優占する冷温帯落葉樹林（ブナを殆ど含まない），2：チョウセンゴヨウとシナノキ属の優占する森林，3A：チョウセンゴヨウ，バラモミ節，カラマツ，モミ属を主要素とする針葉樹林，3B：ハンノキ属の優占する森林，3C：3A の要素に温帯落葉広葉樹を比較的多く含む森林，3D：バラモミ節，ハイマツ，モミ属，カラマツを主要素とする針葉樹林，4A：ハンノキ属，カバノキ属の優占する森林，4B：カバノキ属とカラマツの優占する森林，5：コナラ亜属とブナ属の優占する冷温帯落葉広葉樹林，6：暖温帯落葉広葉樹林，7：照葉樹林.

野辺山を視る眼－石器の行動理論構築に向けて－

田村　隆

どのような石器群も構造性と組織性という視点から考察することができる。この技術的構造組織からのアプローチが有効であるのは、個別石器群の狩猟・採集民の生業・居住といった基本的経済行動への組み込みをその理論的射程に収めているからである。換言すれば、それは石器の社会生態学的研究の一分野を構成しているからに他ならない。石器群の組み合わせ、各器種の員数、それに狩猟具の成り立ちなどを規定するのはどのようなメカニズムなのであろう。また、石器群を残した狩人達が日々の糧を得るために一生反復せねばならなかった彷徨は、石器石材やコア・リダクションにどのような影響を及ぼすことになったのであろう。更に、変転する環境に対して彼等は如何なる対応が可能であったのだろうか。こうした様々な問いかけに対して具体的な解答が可能であり、かつそれに歴史的展望を与え得るのは今のところ、社会生態学的アプローチを措いて他にはない。すなわち、本小論は安斎の「宣言」(1993)に呼応するものであることを最初に明言しておきたい。われわれは伝統的考古学の成果は尊重するが、それを墨守する者には仮借のない批判を加えていくであろう。

細石器石器群の地域的研究のためには、いくつかの理論的前提を等しく共有しておく必要があろう。具体的資料に即した理論的展開が分かりやすい。その意味で、欧米における細石器に関する社会生態学的研究は、わが列島の細石器石器群研究に非常に有効な理論的な手がかりを与えてくれる。本論ではMyers(1989)とJochim(1989)の英国中石器と南西ドイツ中石器における細石器石器群評価を詳しく紹介し、そこに抽出し得た内容をわが国の細石器研究に逆照射するという、一見迂回した手順を踏むことにしたい。この過程でBleed(1986)の中位理論が再三議論されることになるであろう。また、われわれの議論の始点がBinfordにあることも再確認することになる。

ヨーロッパ中石器の様相

英国中石器は前後２期に大別されている。前半期（c8300-6700bc）には大型の非幾何形石器と片側に逆鈎のつく鹿角槍(わが国では銛先と訳されることもあるが不適切な場合が多

い)があり、後半期（c6700-3400bc）には小型化した幾何形細石器が著明である。鹿角槍は減少する。このような一般的な傾向の他にいくつかのパターンが指摘されている。

(1)中石器前半期と後半期と比較すると検出される細石器数に決定的な差が認められ、前半期の検出例は非常に少ない。これは１個体あたりの投射具に装着される細石器個体数の差(前半期３点位、後半期６点～18点)に起因するものと説明されている。

(2)剥片は前半期から後半期への時間的推移に従って、狭長で企画的なものから幅広で短めのものに変化していく。これに呼応するかのように、石器石材にも変化が生じる。前半期の場合厳選されたフリントのノジュールから企画性の高い細長い剥片(石刃)を剥離するのに対して、後半期になると粗悪なものも含む多様な石材から企画性に欠ける剥片が生産されるようになる。

(3)一方、セトルメント・パターンにも大きな変化が生じる。前半期の遺跡の分布状況と比較して、後半期では広い範囲内に小規模な遺跡が散在する傾向が明確化する。個別遺跡での石器群も量的に減少に転じる。

次に、南西ドイツの中石器の様相を簡単に見ておきたい。この地域でも中石器は大きく２期に分かれ、前半期は更にBeuronien A期～C期に3細分されている。この地域でも中石器前半期(Beuronien)と後半期には技術面ばかりでなく、生業やセトルメントパターンにも大きな変化がモニターされる。

(1)Beuronien A期、B期には多数の遺跡が知られているが、C期以降後半期にかけて遺跡数は減少に転じる。特にBeuronien B期での断絶、C期での新たな形成というパターンが著明である。

(2)後半期では大型で定型的な石刃が一般化し、細石器は衰退する。これにともない梯形直剪鏃が三角形の尖頭器にとって代わる。また後半期では逆鈎つきの鹿角槍、磨製石斧、それに少数の磨石などが登場する。

生産活動再構成のための動物遺存体の研究は両地域とも資料数が限られていて決して十分とは言えない。イギリスではヨークシャーのStar Carr遺跡(Clark 1950)を挙げ得るにすぎないが、アカシカを主体とし、ノロジカ、エルク、ゲンギュウ、イノシシなどからなる遺存体の存在が報告された。また近年再検討が加えられ個体数、齢査定、性別、季節性など多岐に亘る分析が実施されている(Rowley-Conwy 1987,Legge and Rowley-Conwy 1988)。この分析で特に興味深いのは、アカシカの遺存部位とBinfordによるヌナミウトの形成した遺跡におけるカリブーの遺存部位の調査(Binford 1978)比較検討であろう。LeggeとRoley

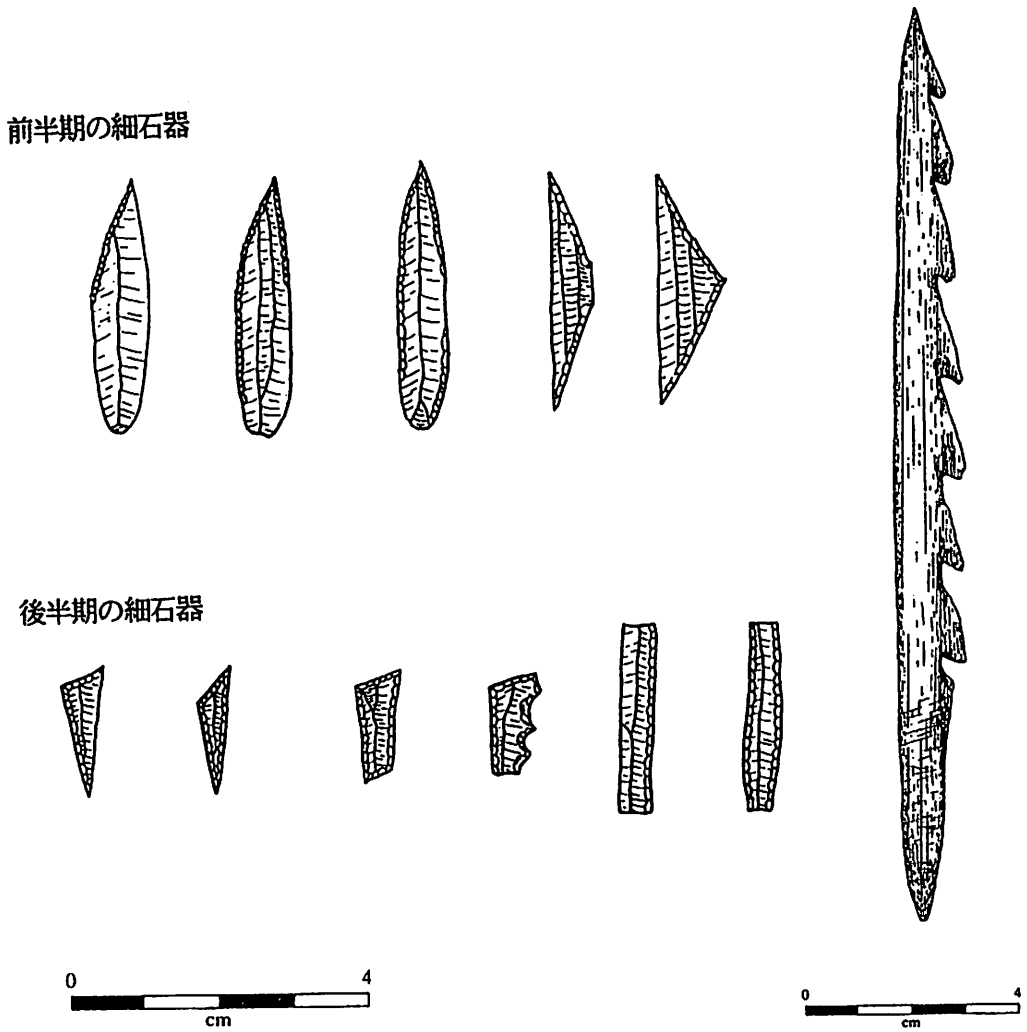


fig. 1　英国中石器の細石器と前半期の鹿角槍(Myers 1989原図)

-ConwyはStar Carr遺跡のパターンとヌナミウトの夏季の狩猟キャンプ(例えばKongumuruk)のパターンが非常によく類似することを見出し、Star Carr遺跡が短期的な狩猟キャンプであるという説明をしている。これと関連して、欧州中石器の文献に引用されることの多いZvelebilの仮説を補足しておく(Zvelebil 1986)。

(1)中石器時代において細石器を嵌挿した狩猟具が採用された最大の理由は、ハンターの狩猟対象が特定の動物に限定されず、いくつかの選択肢から構成されていたためである。いつ、いかなる場所においても、短時間であらゆる規模の対象の捕獲に対応しうる装備が誂えねばならない。

(2)細石器が(1)で述べた遭遇猟に適応した装備であるとした等、逆鉤つきの鹿角槍はヘラジカなどといった大型のシカの季節的ピーク時のインターセプト型狩猟(Binford 1978:204-21)に備えて周到に準備された装備であった。

・ヘラジカ(elk : Alces alces)は英国では中石器前半で絶滅しているので、こうした仮説によっても、インターセプト・ハンテングから遭遇猟へという戦略的シフトを背景とする鹿角槍から細石器への変化を一応説明することができるかもしれない。一方、南西ドイツの状況はどうであろう。Jochimは次のような傾向を抽出している。

この地域の中石器時代の主要食糧資源はアカシカ、ノロジカ、ボア、魚類を主体としている。他にウマ、ヘラジカ、ゲンギュウ、ビーバーなどが少量ある。イガイはBeuronien B期に出現し、以後断続的に利用される。植物資源としてはハシバミが前半期末葉に登場している。重要なのは食糧資源の多様性が時期をおって増大し、小型哺乳類や鳥類も目立つようになるとともに、遺存体規模も大型化する傾向である。

さて、英国と南西ドイツに看取されるこうした対照的パターンはどのように解釈し得るのであろう。MyersとJochimの解釈を検討する前に、われわれはいくつかの概念を明確化しておかねばならないだろう。というのも、わが国先史学の伝統は未だ進化生態学に立脚した石器の行動理論とも言うべき分野を受容していないからである。とりあえず、遠く野辺山を視る眼を模索せねばなるまい。

進化生態学的アプローチ

動物生態学や経済学などの分野における一般的適応モデル、就中進化生態学による最適行動戦略の人類学、考古学への導入は、狩猟採集民の諸行動の持つ組織性に関する一般理論の構築に大きく寄与するものであった(Bettinger 1980)。しかし、われわれが研究の対

象とし得る殆ど唯一の資料である石器に関しては、土俗考古学的情報が余りにも僅少であったという制約もあり、その社会生態学的コンテクストへの参入は、今日においても大きく立ち後れているというのが偽らざる現実であろう。しかし近年における石材論(Banforth 1986)やreduction theory(Dibble 1987)の導入、あるいは、狩猟具を巡る時間・エネルギー収支の最適化、リスク回避等の視座からの技術論の新地平の開拓(Torrence 1983,1989)は、石器研究における進化生態学的パラダイムの有効性を示唆し、新たな段階へのエキサイティングな突入を予告している。

経済活動の基本である捕食(採餌)行動とは、個体、あるいは集団(個体群)が、自己の位置する生態系内で物質とエネルギーを回収し、自己の生命を維持する行動に他ならず、そのような回収行動には当然ながらコストが必要である。このコストが物質とエネルギーの回収総量を上回った場合、生活の、そして何よりも種(生命)の再生産は不可能となるであろう。従って、「最適な採餌戦術は、採餌による収益と費用の差を最大にするものである。自然淘汰は労働監督官のように作用し、こうした最適採餌行動を進化させるようしばしば働いてきた」(Pianka 1978、伊藤監訳 1880、170頁)のである。

生態学の分野では捕食行動における最適化度の目安・尺度を通貨(currency)と呼ぶが、生態人類学的通貨としては一般にエネルギー(総量)と時間、特に単位時間あたりのエネルギー収支が選択される(Dyson-Hudson and Smith 1978)。換言すれば、食糧資源の獲得(=エネルギー収支)のための時間は常に制限されているのであり、逆に、限定された時間内で効率的に食糧資源は獲得されねばならないという原則が常に想定されている。狩猟・採集民の集団的再生産を保証する食糧資源は、季節的に、また年毎の、さらには中・長期的な気候変動によっても変動するであろう。気候変動は植生の変化を、ひいては動物相や、その捕食行動の変化をもたらすことにもなろう。狩猟・採集民の集団にとって、こうした変動の入力がストレスであり、出力、つまり多様なストレスへの解決策、対応を技術(物質文化)と規定することができる。次に考慮されねばならないのは、狩猟・採集民は食糧資源との遭遇・捕獲に際して、いつも所期の目的を達成し得るとは限らないことである。彼らは常に失敗する確率を考慮しなければならない。こうした失敗によって生じる影響(特にロスの生起する確率)をリスクと定義することができる(Smith 1987,Torrence 1989)。従って、集団に入力されたストレスが直接技術として出力されるのではなく、ストレスに対する解決策・対応としての文化的行動には、リスク回避という回路が常駐し、上部構造的領域をも包摂する複雑な行動様式を生み出すのである(Weissner 1982)。

Weissnerはリスク回避戦略の一つに資源ロスの回避を挙げたが、石器を含む食糧獲得用具の技術的性格は、捕食行動に介入するリスクの質的、量的変化によって本質的に規定されている。技術の性格はリスクの生起する時間因子と、生起したリスクの量的因子という二重の規定から決して自由になることはできない。言い換えれば、何時、どの程度のリスクが予測されるのか、という問題設定こそが技術的投企の質と量とを規定する究極的な決定因子とみなすことができよう。このような理論的前提のもとで、いよいよ狩猟具の構造(われわれはこれを積極的に石器群の構造と読みかえる)が考察されることになる(Torrence 1983,1989)。

Torrenceは民族誌的検討を踏まえて、狩猟具の構造(assemblageの組成・多様度・複合性)に関して極めて重要な指摘を行っている。一つは、資源利用が時間的かつ空間的に限定されていることから生じるリスクの性格は利器の選択を左右するが、それは利器のタイプが獲物をすばやく捕獲し得るか否か、あるいは、資源分布場所、棲息場所が限られたものであるか否か、という基準に従って変動する。また、ロスが惹起するリスクが非常に深刻である場合、非常に複合度が高くかつ機能の特殊化された利器が多量に製作される。あらゆる利器の製作と保守・管理には、原材料、エネルギー、時間の大きな支出が不可欠であるため、利器製作を生産活動に組み入れることにおいて生じる利点は大きい。

この利器の製作の生産活動への組み込みをTorrenceは技術の組織性と呼んだが、技術の構造性と組織性及び両者の相互関係に関してはBleedが全く異なったアプローチを試みている(Bleed 1986)。現代の工業デザインに立脚するBleedの考察は伝統的考古学の陣営の眼にはいささか奇矯と映ずるかもしれないが、物質文化のデザイン・プロセスとデザインの最適化という斬新な視点を呈示しており、学ぶべきところが多い。既に紹介したTorrenceのassemblageの構造、組織理論とともに、特に本稿の目的である細石器石器群の理解にとって不可欠の理論的枠組みであるため、以下やや詳細にその内容を紹介するとともに、その理論的有効性を確認しておこう。

旧石器時代の打製石器から、現代のコンピューターに至るまで、あらゆる技術的システムの構築の前提にはデザイン・プロセスが存在する。個々ののデザイナーは実用性やコスト、あるいは美的センスなどに基づいて、互換的オプションを一つずつ選択しながら全体的システムを組み立てていく。この過程をデザイン・システムというが、個々のデザイナーの選択基準は同時にシステムの評価基準でもある。客観的評価基準として最も重要なのはシステムの効率性であろう。ことに運用面での効率性はユーザーにとり重大な関心事と

なるが、こうした効率性の確保と向上のためには二つの戦略が採用される(読者は自動車のカタログを想起されたい)。

一つは信頼性(reliabirity)であり、他の一つは保守性(men- tainability)に他ならない。信頼性を重視したシステム(reliable system)は、各部品にストレスに耐え得る十分な強度と耐久性を要求するため、基幹的部品は特に入念にデザインされるばかりでなく、補助的な過剰部品や、万一に備えた待機部品も用意される場合がある。つまり、一部の部品にトラブルが生じてもシステム全体は作動し続けるように企図されている。このためどうしても全体は大型になり、重量も重くなってしまう。システムの運用面においてもいくつかの著しい特徴がある。まず第一に、システムの稼働時とメンテナンスの期間が完全に分離されねばならない。次に、システムのオペレーション、メンテナンスにあたるスタッフも別々のスペシャリストから構成されねばならない。最後に、各スタッフの使用する修理・調整用のギアは、どのようなトラブルにも対処できるような汎用性をもったものでなければならない。

保守性を重視したシステムは、信頼性に振ったそれよりもシンプルな構成であり、それぞれ独自の役割を担った部品を組み合わせて全体的システムができあがっているため、一つの部品が故障したら全体的システムも駄目になってしまう。しかし、故障箇所の検知は容易であり、部品交換によって迅速かつ容易に復旧することができる。運用面では、システムの使用期間とメンテナンス期間を分離する必要はないし、使用者自身による保守・管理が可能である。

工業デザイナー(旧石器時代の石器製作者もこの一員である)の頭の中には常にこうした二つのデザイン・システムがオプションとして認識されている。信頼性重視のシステムが選択されるのは、換言すればその最適条件は次のような場合である。

(1)付加されるデザイン・コストを有用性が上回る場合。

(2)システムの故障によるコストが非常に高くつく場合(すなわちリスク低減戦略である)。例えば、メンテナンス期間と稼働期間とのスケジュール調整がうまくいけばロスは抑制されるであろう。

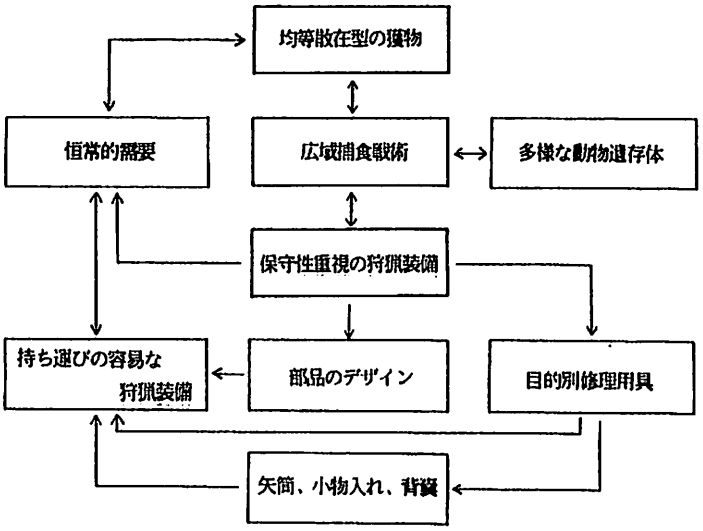
(3)サイズの大きさや重量の重さを無視し得る場合。

一方、保守性重視のシステムの最適条件は次のようにまとめることができる。

(1)システムの稼働時期の予測が困難な場合。

(2)システムの不都合によって生じるコストが軽微であり、重大な損失を生じない場合。

保守性重視のシステム



信頼性重視のシステム

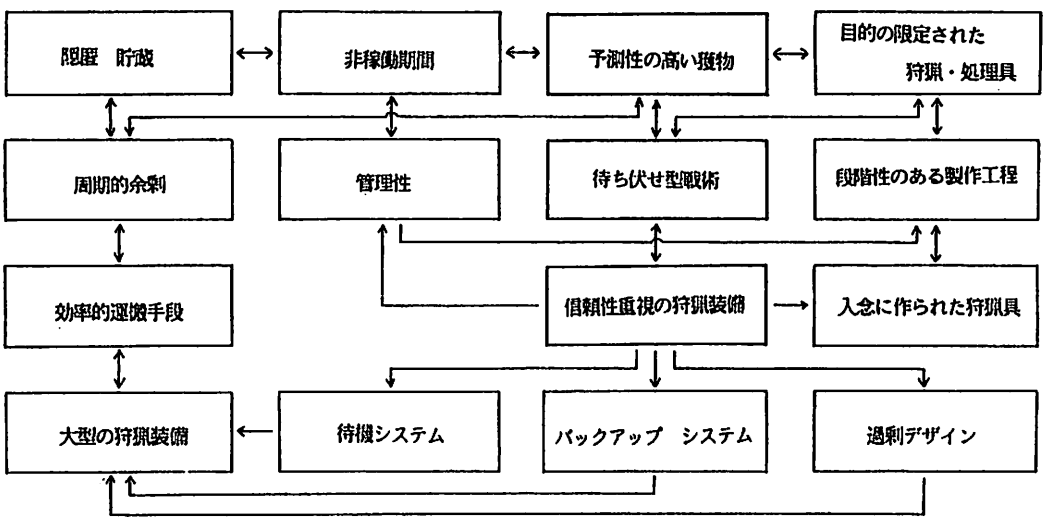


fig. 2　保守性重視のシステムと信頼性重視のシステム(Bleed 1986原図)

(3)アプリケーションの組み込みを意図したシステム、あるいは、僅かな手直しで別の用途に転用し得る場合。

(4)大型化したり、重量の増加が好ましくない場合。

Bleedはこの指摘に続けて装備システム、就中狩猟具に関する民族誌的検討を行い、狩猟具の体系が信頼性、保守性という二つのシステムから構成されていることを指摘する。保守性重視の狩猟具は、時間的かつ空間的に遭遇することの予測が困難な均等分散型(scattered but ubiquitous)狩猟対象を継続的に追い求める場合を最適条件とする。例えば、巡行型狩猟・採集民(Binford 1980)の代表としてしばしば引用されるクン族の男達は、どこに行くにも常に矢筒を携帯するが、その中には若干の毒矢を含む10～15本位の完成された矢とともに、多数の矢柄が入れられている。それらの矢柄は移動過程で必要に応じて適宜仕上げられるため、矢筒は狩猟具であると同時に「動く作業場」とも評価されている(Lee 1979)。アマゾン流域に居住するヤノマノ族の場合、狩猟対象に応じて矢尻を使い分けているが、それらの全てを携帯することはない。しかし、弓矢と別に持ち歩かれる矢筒にはスペアーの矢や、その製作、補修用具一式が収納されている(Hames 1979)。

信頼性重視の狩猟具は兵站型狩猟・採集民(Binford 1980)にその典型的姿が見いだされる。Binfordが詳細な現地調査を実施した(Binford 1977, 1978a, 1978b, 1979, 1980)ヌナミウト族は1年間の必要食糧の70%以上を僅か30日間の猟期で獲得する。この集約性の高い狩猟行動は群れの存在予測が立て易い春と秋のカリブー移動期に集中する。この期間の猟法をBleedは遭遇猟(encounter hunting)としているがBinfordの用語ではインターセプト型狩猟(intercept hunting)と呼んだほうがよいであろう。(参考までに補足しておくと、生態学ではこれを待ち伏せ型戦術(sit-and-wait tactic)というのが普通である。この対極にあるのが広域採餌型戦術(widely-foreging tactic)である。)昔も今も輸送技術が高度に発達しているため、大型狩猟具の猟場への輸送は可能であり、従って大きさと重量の制約はクリヤーされている。また猟具の準備は狩猟シーズン以外の期間に集中的かつ入念に実施され、原材料の調達、道具製作の段階的工程は完全にスケジュール化されている。

ヌナミウト族の狩猟具の著しい特徴は、その作りが非常に入念であることである。それは耐久性に富み、同時に扱い易い。猟場に持参される修理用キットは汎用性に富み、原材料がこれに加えられる場合もある。更に、キャンプ間の要所には非常用装備の備蓄のためのキャッシュ(cache)が設営される。また、彼らの狩猟具のシステムは、常に余裕を持った過剰的要素が組み込まれている。ライフルは1挺では不安だし、弾薬もたっぷりあったほ

うが安心できるのだから。こうしたサポート・システムは海獣猟用の様々な装備に典型的に観察される。

狩猟用装備の保守性と信頼性という視点は、先に紹介したTorrenceの狩猟用具の多様性と複合性、あるいはBinfordの管理的技術と便宜的技術(Binford 1979)とも密接に関連し、かつ重複する部分も多い。こうした２項的モードは何れも狩猟・採集民の複雑多様な技術的システムと考古学的資料との架橋を企図した中位理論にほかならないが、その理論的有効領域には各研究者の視点と経験の違いに応じた異差性と限界性を指摘することができる。Bionfordの議論は最も包括的であり、以後の社会生態学的な技術論はこれに淵源すると言っても過言ではないが、石器の専門家であるTorrenceの技術構造・技術組織に関する議論はBinfordの技術論の狩猟具への引き寄せであり、Bleedの場合は技術構造と技術組織の相互関係に関する狩猟具からのアプローチであった。各理論の相互検討は別な機会をまつとして、とりあえず、ヨーロッパ中石器の解釈に赴くための準備は整ったのである。ここで再びMyersとJochimの論考にたち戻ろう。

パターンの解釈

英国では、7000bc頃に気温が急激に上昇し、低地では8000bcには平均気温が摂氏０度であったのが6000bcには12度に達した。しかし、海水面の上昇と大陸性気候の緩和のため、高地における気温上昇は妨げられ、低地にあっても気温の年較差は縮小する方向に向かった。このような気候変化にともなって7000bc～6000bcにかけてカバとマツ属が各種の落葉樹に置き換えられると言う植生変化が引き起こされた。この植生の変化期と、中石器前半期から後半期への移行が照応している。

こうした7000bc～6000bcにおける気候の好転は冬季の期間短縮と温暖化、春季と秋季の期間延長という事態を生じる一方、海洋性気候化と落葉樹林の発達は動物群の捕食戦略にも大きな影響を与えた。すなわち、中石器前半期における森林的景観を背景とした移動・非移動という戦略的対立は徐々に希薄化し、非移動型戦略が一般化した。と同時に、この結果は狩猟・採集民にとっても無視し得ぬ狩猟戦略のシフトを余儀なくさせたのであった。

中石器前半期においては、集団にとってある期間におけるシカを主とする移動性の高い獲物の棲息場所はある程度予測可能であった。このため狩猟戦略としてはインターセプト型狩猟が最も効率的であり、秋季におけるシカの大量捕獲は冬季のリスク回避戦略としてのキャッシング戦略を採用させることにもなったであろう。春季～秋季にかけてはロー・

リスクな植物性資源の採取を主体と、広域採餌型戦術によって獲得された動物性資源がこれを補った。ところが、7000bc～6000bcにおける環境の変貌は、狩猟対象の棲息場所と捕獲タイミングに大きく依存せざるを得ないインターセプト型狩猟の有効性を喪失させ、均等分散型の獲物の捕獲に最適の広域採餌型戦術への周年的依存傾向を強化させたのであった。

7000bcを画期とするこうした生業活動のシフトは、環境に内在する資源の集約的利用(兵站型戦略)から環境の多角的利用に適した小規模・分散型のセトルメント・パターンへのシフトを促した。更に、特定時期におけるインターセプト型狩猟に適した鹿角槍を主体とする信頼性重視の装備システムは、細石器を使用した植刃槍主体の保守性重視の装備システムにその座を明け渡すことになったのである。石器石材と剥片生産技術という面においても、石器製作が全生業活動の中によくスケジュール的に管理され、原石の採取・石器製作・維持管理という分節性が明瞭であった前半期と比較して、後半期では石器製作と生業活動がいわば不規則に熔融し、明瞭な分節性が認められなくなるという傾向が看取される。

こうしたMyersのシナリオに対して、英国とは種々の点で反対方向への変化が指摘されている南西ドイツ中石器に対してJochimは次のような解釈をしている。

Boreal期～Atrantic期にかけての中部ヨーロッパにおける気候と植生の連続的変化の結果、大型草食獣は食糧資源の深刻な枯渇に直面し、次第にその頭数を減少していった。しかし、植生の多様化は人類にとって利用可能な植物性資源の増加につながった。加えて、落葉広葉樹林帯の成立により四季の巡りは一層明確なものとなった。河谷とモレーンのある低地が落葉樹に覆われたのに対して、高地では依然としてマツ属とカバの群落が広く残存しており、食糧資源の地理的分布と時間的予見性は、前代に比較してむしろ明確化する方向に向かった。このような変化は集団移動による広域捕食のコストを増加させることになる。

叙上の変化につれて、生業・セトルメント・システムもリスク回避原則に従ったシフトを遂げた。まずハイ・コストな大型獣が主要食糧から除外された。ただし、小数の大型獣ついては、森林の伐開や焼き払いに伴い局地的に密度を増した場合などには集約的に利用されたこともあったかもしれない。この結果食糧資源の幅が大きく拡大され、相対的にハイ・コストなものも含まれるようになった。パッチ状植生のモザイク状の展開は、空間的特異性を拡大し、パッチ内・間の予見性を向上させたに違いない。更に、多様なパッチ状資源の不均等分布のため、居住地としての最適占地は一層限定されたものになり、特定空

間での利用可能な資源量は減少傾向を辿った。これに呼応するかのように狩猟具には、居住基地から遠く隔たった地点での、そして特定時期における限定的使用を前提とする信頼性重視の装備が採用されるに至った。

このように、南西ドイツにおける中石器が英国と対照的パターンを示した最大の要因は、英国における環境が一層均一化していったのに対して、南西ドイツでは逆にパッチ化していった点に求められる。資源構造の面においては、均一分散型の英国では予測可能性は低いが、パッチ型の南西ドイツでは相対的に高い。従って、英国では兵站移動型戦略が衰退し、生業・技術面でのリスク管理が重視されたが、他方南西ドイツではむしろ兵站移動重視の方向へのシフトが計られたのである。このため英国では居住地(＝遺跡)の広域分散傾向が、南西ドイツでは特定地点の集約利用傾向が生じ、技術面でも、英国では保守性へ、南西ドイツでは信頼性へという対照的傾向が生じたのであった。

ちなみにJochimの解釈をHornの最適集団モデル(Horn 1968)と比較してみる。Hornは資源分布とその予測可能性、採餌集団の分布との相関性を数学的にモデル化しているが、中石器南西ドイツの場合のように、移動性動物が不均等に分布している場合、特定地点における食糧捕獲確率によって計量される幾何学的距離ｄ(情報因子量捨象)は、分散採餌の場合ｄ＝3.86、集合採餌の場合ｄ＝2.94であり、集団採餌が明らかに最適である。Wilmsenが指摘したように、これに情報因子が関与すればｄ値はさらに低減される(Wilmsen 1973)。

これまで等しく進化生態学的基盤に立つMyersとJochimの解釈を紹介してきたが、一見全く逆とも見える英国と南西ドイツ中石器における諸パターンの変化が統一的な理論の適用によって解釈し得ることが示された。このことは、これまでの検討過程において具体的な考古資料の仮定的解釈に際して、常に諸変量のコントロールとして運用してきた中位理論の有効性を示唆するものである。特に石器を巡る技術系の組織的性格と環境構造との内的関連性を指示するBleedの技術論は、日本細石器石器群の社会生態学的理解においても等しく有効であるはずである。最後にこの点についての若干の展望を語っておきたい。

考察

わが国の晩氷期には気温が急速に上昇し、これに伴って植生も急速に変貌したという時実はよく知られている。例えば関東地方では、この時期に冷温帯林の一部を構成していたトウヒ、モミ、ツガ、ゴヨウマツなどといった亜寒帯針葉樹は次第にその姿を消しつつあった。確かに長期的な気候と植生の変遷観としてはこのような見解は妥当であるかもしれ

ない。ところで、晩氷期の細分が進んでいる北欧では、この時期に、ベーリング亜間氷期、古ドリアス亜氷期、アレレード亜寒氷期、新ドリアス亜寒氷期とめまぐるしく亜氷期と亜間氷期が交替していたこともまた周知の事実である。そしてこのような変動は北欧に限られるものではなく、わが国晩氷期も同様の状況であったらしいことが、尾瀬ヶ原の古期泥炭層の分析から明らかにされている(阪口　1989)。

遠くから眺め遣ると急速な気候の回復と受けとめられるが、接近してつぶさに観察してみると実は極めて不安定な気候が支配していた、というのがわが国晩氷期の実際の姿であったというのが適切であろう。そして、もう一つ軽視してはならない事実がある。福井県三方湖の花粉分析(安田　1982a)や尾瀬ヶ原原古期泥炭期の花粉分析(阪口　前掲書)結果から窺われるように、この時期に日本海側で多雪化が始まっていた点である。太平洋側でのハンノキ林の発達も、この多雪期をもたらした気候の湿潤化の傍証とされている(安田　1983)。

晩氷期におけるわが列島中央部は、矢出川湿原や武蔵野台地における花粉分析結果による限り(安田 1981,1982b,1983)、高地では依然として亜寒帯性の森林と草地が発達する一方、低地にはハンノキを主体とした疎林と草地が広がっていた。特に関東平野では「大陸性気候の下に発展したチョウセンゴヨウやヒメバラモミの森林が、ブナやナラの落葉広葉樹の森林へ移行する過渡期には、比較的森林の少ない粗林の状態が出現した」(安田　1983　686頁)。このように、関東、中部地方における晩氷期の植生は点在するハンノキの疎林、広大な草地、亜寒帯性の疎林と草地という複雑にからみあったモザイク状のパッチから構成されていたと考えることができる。そして高地は冬季には根雪におおわれ、低地も激しい降水量の変化にさらされていた。こうしたはなはだ安定性を欠く環境は晩氷期に突入するおよそ13000年前に始まり、関東平野に落葉広葉樹からなる森が定着する縄文草創期の頃まで続いていたらしいのである。現状では、石器群と気候変化との厳密な対応関係を見出すことは困難であるが、まさにこのような不安定な時期に細石器石器群が形成されていたと考えておくことにしょう。

この時期の動物相に関する情報は無いに等しいが、大型草食獣は既に絶滅していたというのが一般的認識である。本論では狩猟対象としてシカ、クマ及び毛皮獣を挙げている鈴木忠司の見解を尊重することにしたい(鈴木　1988)。狩猟対象としてれ列挙された動物のうちシカは本来森林生活者であり、森林内の樹葉や木の芽、樹皮、林縁や林地内の草などを主食としている。雑食に近い肉食獣であるクマもやはり森林生活者である。一方、毛皮

獣は林縁～草地に広く生活域を見出すことができるという(小原　1972)。晩氷期のパッチ状環境が形成されるにつれて、主要食糧であったシカの棲息する疎林はその面積を減らし、同時に一層散在化する傾向にあったはずである。これは理論的予測にしかすぎないが、シカはそれまでのテリトリーを維持するに十分であったパッチ内での捕食戦略を転換し、食糧資源を求めてパッチからパッチへと広域を移動する採餌戦略へ傾斜していったと考えられる。しかしこの移動は季節的なサイクルといった規則性をもった移動ではなく、一層広域化したテリトリー内のパッチ間の不規則な移動であったと想像される。この点は今後の動物行動学的な事例の検討によって検証したい。高地の冠雪による季節的移動も当然想定されるが、積雪量、降水量の年ごとの変動は激しく、移動タイミングと径路の捕捉は困難であったと見られる。

晩氷期の不安定な環境のもとで、狩猟民の捕獲対象であった動物の棲息場所と棲息時期の予測は決して容易ではなかった。ことにその主体であったシカは各パッチでの分散捕食と、複数パッチの統合による広域テリトリーを形成していた可能性が高く、揺れ動く環境の下での各パッチの盛衰も関与して、その予見性は低下する傾向を辿ったであろう。このような状況は、南西ドイツ中石器と等しくパッチ状環境が形成されながらも、資源構造とその予見性という点においては、むしろ英国中石器に近いという、わが国の関東・中部地方特有の生態系が形成されたことを示唆している。

次に、晩氷期に前後する時期の狩猟装備、すなわち石器群の変化について、ごく簡単に総括しておこう。南関東における石器群の層位的出土状況によると、細石器石器群の前後には尖頭器主体の石器群が位置するといわれている。しかし、細石器石器群に尖頭器を伴う例も決して少なくないので、尖頭器石器群が一貫して継起し、ある時期に細石刃を組み入れたと見る方が自然であろう。この細石刃の組み入れについては文化的な伝播という素朴な考え方が流布されているが、われわれはこうした考え方をきっぱりと拒絶したい。

後期旧石器社会は所謂砂川期を結節点とし、広域的な婚姻網(mating network)を形成する段階へと進化していたが、この婚姻網は同時に情報回路であった(田村　1994)。この回路を媒介に無数の情報が往還していたが、そこには当然技術情報も含まれていたはずである。南関東に尖頭器石器群が展開していた頃、北海道では極めて内容の豊富な細石器石器群が形成されていた。それは細石刃ばかりでなく、良質で潤沢な石材資源の存在を背景として、両面打製の大小の尖頭器、削器、豊富な彫器、舟底型石器、そして多量の石刃など多種多様な石器類から構成されていた。興味深いことに、これと類似する石器群は本州の

日本海側にも分布し、さらに南方にも及ぶが、北海道の石器組成と比較してみると、いくつかの器種が脱落している。また、石器群の多様度も低い。このことは地域的生態適応に必要な技術のみが選択的に採用されたことを示しており、この時期に既存の情報網を媒介に集団間で選択的な技術知のやりとりが行われていたことを暗示している。おそらく、われわれが野辺山型と呼ぶ細石核からの細石刃生産技術も、婚姻網外縁部に位置する集団を経由した相互的な技術知の交換という社会的メカニズムによって生まれたものと見られ、それは中枢部から外縁部へ向かう、そして時として集団の移動をも合意した文化伝播概念とは似て非なるプロセスであったことに注意したい。

問題は技術知の選択と淘汰圧との相互関係である。使い慣れた小型石槍の他に、細石刃を嵌挿した植刃槍を新たに狩猟用装備の一員に組み込むということは、決して恣意的な選択の結果ではなく、進化生態学的視座からは、ストレスに対する解決策(solution)と見なさねばならない。放射年代によれば、関東・中部地方では植刃槍が一般化するのは晩氷期直前期であったと言われているが、既に指摘した如く、この時期の動物性資源、すなわち狩猟対象の棲息場所と棲息時期の予測は困難の度合いを増していた。このため狩猟集団は、石槍という信頼性を重視した狩猟具(reliable weapons)の他に、広域捕食戦略に最適な保守性を重視した狩猟具(maintainable weapons)、すなわち植刃槍に依存するパターンが形成されたのである。そして、この場合、選択された技術知は植刃槍という完成された狩猟具の構造であり、構造的要素である細石刃の生産は、大型で良質の石材の欠如という地域的生態条件に強く規制され、野辺山型という旧知の石刃生産技法の小型化によって始めて可能となったのであった。大型で良質の原石の入手さえ可能であれば、別な手法による細石刃生産が行われる可能性はいくらでもあろう。また、狩猟対象の予見性の困難さという生態学的条件がなければ植刃槍がこれほど一般化することはなかったはずであり、大小の石槍のみが継続的に狩猟具の中心を占めていたにちがいない。情報網には実に様々な技術知往き来したはずであるが、それが選択され、物質化されるためには生態的条件との適応が不可欠の要件であったことに留意したい。また、視点を転ずれば、こうした情報回路の存在そのものがリスク回避戦略として有効に機能していたことになろう。と同時に、植刃槍が比較的短命に終わったことについても、落葉広葉樹林の安定化に伴う狩猟対象の予見可能性の回復を与件としていたという解釈を呈示することができるのである。

ところで、関東、中部の細石核には野辺山型の他に湧別技法による札滑型の分布が知られている。札滑型細石核には通常荒屋型彫器や端削器が伴い、その石材に例外なく良質の

珪質頁岩が用いられている。これまでに検出された石器群を観察する限り、比較的類似したスタイルと技法、組成を示すものが目立ち、その存続時期は極めて限定されていたらしい。このような札滑型細石器石器群の広域的な分布という現象の背後には日本海側での多雪化の影響があったのではあるまいか。13000～12000年前頃から開始された日本海側の多雪化はその地域の集団に何らかの越冬対策の採用を強いることになったであろう。それが集団の再生産に必要な食糧資源の貯蔵技術の本格的な開発の契機となったことを認めるのには吝かではないが、既に成立していた情報網を拠り所とした積雪地帯居住集団の一時的な待避が行われたと想定することも可能であろう。

これまでの解釈による限り、関東地方及びその周辺地域の晩氷期の狩猟・採集民は、前後の時期と比較して、むしろ居住地移動の頻繁な広域捕食の戦略に準拠していたことになる。この仮説は、関東地方における遺跡の小規模分散化傾向とも調和し、保守性重視の狩猟具への傾斜という技術的特徴とも調和的である。この時期に定住化への足がかりを見ようとする試みもあるが(佐藤　1992)、筆者は全く逆の立場であり、基本的には一段と遊動性が強化された時期であったと考えている。

日本の細石器に関してはより多面的な考察が必要であったが、残念ながら時間切れとなってしまった。個別石器群の分析も全て省略した。このため、抽象的な議論となってしまったが、これを契機として、石器理解における社会生態学的パースペクティブの有効性と限界性を巡る議論が活性化することを期待したい。

引用・参考文献

安斎正人　1993　「考古学の革新—社会生態学派宣言—」『考古学雑誌』78-4:78-98

小原秀雄　1972　『続日本野生動物記』中央公論社

阪口　豊　1989　『尾瀬ヶ原の自然誌』中央公論社

佐藤宏之　1992　『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房

田村　隆　1992　「遠い山・黒い石—武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察」『先史考古学論集』2:1-46

安田喜憲　1981　「矢出川遺跡群の古環境復元報告(1)」『報告野辺山シンポジウム1980』pp.13-26

安田喜憲　1982a　「福井県三方湖の泥土の花粉分析的研究—最終氷期以降の日本海側の

乾・湿の変動を中心として一」『第四紀研究』21:255-271

安田喜憲　1982b「矢出川遺跡群の古環境復元報告(2)」『報告野辺山シンポジウム1981』pp.50-60

安田喜憲　1983　「多聞寺前遺跡の泥土の花粉分析一氷河時代の武蔵野の原風景を求めて一」『多聞寺前遺跡前II』pp.671-690

Banforth, D. 1986. Technological efficiency and tool curation. *American Antiquity* 51:38-50

Bettinger, R. L. 1980. Explanatory/predictive models of hunter-gatherer adaptation. In M. Schiffer (ed.), *Advances in Archaeological Method and Theory* No. 3, pp. 189-255. Academic Press

Binford, L. R. 1977. Forty-seven trips: A case study in the character of archaeological formation processes. In R. V. Right (ed.), *Stone Tools as Cultural Markers*: Change, Evolution and Complexity, pp. 24-36. Australian Institute of Aboriginal Studies

Binford, L. R. 1978a. Dimentional analysis of behavior and site structure: lerning from an Eskimo hunting stand. *American Antiquity* 43:330-61

Binford, L. R. 1978b. Nunamiut Ethnoarchaeology. Academic Press

Binford, L. R. 1979. Organization and formation processes: looking at curated technologies. *Journal of Anthropological Research* 35:255-73

Binford, L. R. 1980. Willow smoke and dogs' tails: Hunter-gatherer settlement systems and archaeological site formation. *American Antiquity* 45:4-20

Bleed, P. 1986. The optimal design of hunting weapons: maintainability or reliability. *American Antiquity* 51:737-41

Clark, J. G. D. 1972. *Star Carr: A case study in bioarchaeology.* Addison-Wesley Modular Publication No. 10

Dibble, H. L. 1987. The interpretation of Middle Paleolithic scraper morphology. *American Antiquity* 52:109-117

Dyson-Hudson, R. and Smith, F. A. 1978. Human Teritoriality: an ecological reassessment. *American Antiquity* 80:21-41

Hames, R. B. 1979. A comparison of the efficiencies of the bow in Neotropical Fo-

rest hunting. *Human Ecology* 7:219-245

Horn, H. 1968. The adaptive significance of colonial nesting in the Brewers Blackbird (Euphagus cynocephalus). *Ecology* 49:682-94

Jochim, M. A. 1989. Optimization and stone tool studies: problems and potentials. In R. Torrence (ed.), *Time, energy and stone tools*, pp. 106-111. Cambridge University Press

Lee, R. 1968. What do hunters do for a living or how to make out on scarce resources. In R. B. Lee and I. Devore (eds.), *Man the Hunter*, pp. 20-45. Aldine

Legge, A. J. and P. A. Rowley-Conwy. 1988. *Star Carr Revisited*. The Archaeology Laboratory, Centre for Extra-Mural Studies, Birkbech Collage, London

Myers, A. 1989. Reliable and maintainable technological strategies, In R. Torrence (ed.), *Time, energy and stone tools*, pp. 106-111. Cambridge University Press

Pianka, E. R. 1978. *Evolutionary Ecology* (second edition). Harper and Row

伊藤嘉昭監修 1980 『進化生態学』 蒼樹書房

Rowley-Conwy, P. A. 1987. Animal bones in Mesolithic studies: Recent progress and hopes for future. In P. Rowly-Conwy and M. Zvelbil (eds.), *Mesolithic Northwest Europe: Recent Trend*. Department of Archaeology and Prehitory, University of Sheffield

Smith, E. A. 1987. The application of optimal foraging theory to the analysis of hunter-gatherer groupe size. In B. Winterhalder and E. A. Smith (eds.), *Hunter-Gatherer Foraging Strategies*, pp. 36-65. The University of Chicago Press

Torrence, R. 1983. Time budgeting and hunter-gatherer technology. In G. Bailey (ed.), *Hunter-Gaterer Economy in Prehitory: A European Purspective*, pp. 11-22. Cambridge University Press

Torrence, R. 1989. Retooling: toward a behavioral theory of stone tools. In R. Torrence (ed.), *Time, Energy and Stone Tools*, pp. 57-66. Cambridge University Press

Weissner, P. 1982. Beyond willow smoke and dogs' tails: a comment on Binford's analysis of hunter-gatherer settlement systems. *American Antiquity* 47:171-8

Wilmsen, E. N. 1973. Interactin, spacing behavior and the organization of hunting bands. *Journal of Anthropological Research* 29:1-31

Zvelbil, M. 1986. Postglacial foraging in the Forest of Europe. *Scientific American* May: 86-93

細石刃石器群の行動論的分析のための視点

佐藤　宏之
東京都埋蔵文化財センター

1.細石刃石器群研究と行動論

日本の細石器（細石刃）研究と言えば、目的となる細石刃を剥取する行程の技術論的分析と、各種行程を最も表象的に類別化することができると考えられた（遺跡に残存する）細石核の諸形態の形態学的分析をまずその代表とすることが出来よう[1]。実際には、これらの技術形態学的分析を基本に、①組成の変化（より旧石器的な組成をもつものからより縄紋的な組成をもつものへの変化）　②獲得細石刃の変化（細石刃の形態が不安定なもの<短寸、両側縁の平行性に乏しい、厚さが不均質、幅も一定しない等>から安定的なもの<長寸、両側縁の平行性高い、厚さが均質、幅も一定等>への変化）　③細石核自体の形態の変化（粗いabrupt形態形成→整ったfine形態形成）等の細石刃石器群内の一方向的な技術進化を想定し、数少ない部分的な層位的上下関係を勘案して年代編成を行う研究と、近年よく見かけられるように、主に日本列島における細石刃石器群の変遷の大勢を、日本海を取り囲む周日本海地域の文化変化に直接連動して理解し、彼我の技術的・文化的交流（伝播）を強調する研究（加藤1992, 徐・加藤1991, 白石1993, 加藤1991,1993等）が最近の特徴であろう。いづれもこれまでの細石器研究の伝統（就中技術論）の伝統の上に積み重ねられてきた研究であり、総じてより定量化・精緻化していることは大きく評価せねばならないが、同時に当該期の環境や構造性を議論していくにはいくつかの点で検討すべき視点が不足していることは指摘せざるをえない。

例えば、これまでの技術論的分析は、どちらかといえば、製作技術や調整技術上の諸特徴を一線的な変化の方向性に則って配列し、その結果それらの特徴を有する石器群を年代順に編成する傾向が強かった。しかしながら、これらの研究には、技術がもつ本来的な意味、すなわち大局的には各種石器（技術）の存在は、人間が周囲の諸環境系に適応する手段のひとつであるという観点を、表面的にではなく基礎にもつという研究姿勢に乏しく、当該技術の発揮が、どのような適応的な意味をもつかという考察にかけていたと言えよう。すなわち、列島の中央部に分布する細石器石器群を「細石器文化」または「細石刃文化」と捉え、「ナイフ形石器文化」や「尖頭器文化」に後続し「神子柴・長者久保文化」に連接する--文化段階と考え、「細石器文化」はひとつの文化階梯であるから、その変化は、「細石器文化」内で一つの方向性をもった理解が可能であるとする思考を先験的に有していたものと思われる。そうした思考（発想）の枠の中では、たとえ環境適応としての技術という問題を設定しても、技術形態論と同様適応形態論の一方向的な変化過程の想定にと

どまることになるだろう。しかしながら、旧石器的な狩猟と移動を主とする適応形態から縄紋的な採集の比重の増大した定住的な適応形態への過渡的段階という観念的・抽象的な適応形態論の範疇にとどまったままでは、旧石器時代から縄紋時代への移行というダイナミックな時代の変遷を描き出すことは十分にできないだろう。旧石器時代から縄紋時代への変化は、もちろん世界中で認められる完新世の世界的規模での環境変化に対する日本列島人の文化的・社会的・技術的表現形態である。この変化が起こった時期は、ほぼ世界的に同時期であり、しかも大きな変化の流れ（例えば遊動生活から定住へ）は共通でありながら、地域によってきわめて多様な適応形態を示していることが明らかになりつつあるのだから、列島においても、文化段階論のような、時間的・空間的な枠を固定し本来的に変化の相をより単純化する傾向に向かいがちな考え方よりも、システム論的な発想にもとづき、旧石器から縄紋へという大きなシステムの変換期には、各地域の集団の不安定な社会・文化構造を写しだす技術的側面としての石器群の変化を捉える考え方がより有効であると考えている（佐藤1992a）。

恐らく、当該期の日本列島で、技術・社会・生活の相対的関係性が安定して認められるという意味で「細石器（細石刃）文化」と呼びうるのは、北海道と場合によっては九州地方の一部だけではないだろうか。それ以外の地域では、「細石器文化」以前の段階の全体像が不明瞭ではあるが、少なくともそれが比較的明かになっている関東地方を中心に見ても、「文化」的な連続性を看取することは難しい。しかも、時間的継続性に関しても、北海道や九州地方の一部を除いては、相当長期間にわたる継起的存在を考えることは著しく困難である。そしてこの特徴は、他の周辺大陸の細石器石器群が存在するところでは、時間的に相当に長期間にわたっていることが一般的であり、かつ前段階の石器群との連続性を強く示唆することと著しい対照をなしていることは注目されよう。従って、日本列島の本州島を中心とする地域の細石器石器群は、前述の時期を含めて分析・考察することが必要であり、なおかつ「文化」として抽出、一般化することなく、東北-日本海側、関東・中部南部・近畿（瀬戸内沿岸）・中国地方といった後期旧石器時代後半期に成立した地域性と同規模程度の範囲（正確な範囲の把握は今だ難しいが）を設定して、各地域毎の変化の実相をできるだけ具体的に跡付ける作業が重要となろう。製作技術上の強い共通性をメルクマールに、これを集団や社会と同一視して、相当広範囲の社会的・文化的等質性を想定するのではなく、むしろ、細石器石器群の存在した前後の時期の通時的な社会構造上の変遷、すなわち後期旧石器時代を貫いて存在する地域性の成立と分化・確立という社会進化の方向性に注目する限り、細石器石器群の分布する段階においても、各地の地域社会が各々独自の過渡的な適応手段の開発と採用に努めていたのではないかと考えている。石器製作技術上の共通性の範囲は、このような過渡期的段階では、必ずしも安定して単位的な集団や社会と即応するのではなく、各地域社会の選択的・互換的な使用の表現という側面がより顕著なのではないだろうか。このような段階の石器群の分析には、むしろ、石器群の製作構造と、その機能

論的意味を重視し、具体的には、行動論的分析を各地域の実相の中に探っていく方向がより重要な意味をもつと思われる。石器群を成立させる技術構造は、それだけが単独で定立するのではなく、狩猟採集民の有する諸技術構造系とシステムをなして存在し、さらには行動や居住といった生活系をはじめとする各種の生態適応の統合的なシステムの一員として「石器群の技術的組織」を形成するのである（Shott 1986,田村1992等）。地域集団が、どのような行動形態Behavioral Pattern（行動論）、移動形態Mobility、居住形態Settlement Patternを採用し、劇的に変動する環境生態Fluctuationへの適応の模索・試行を行っていたのかを追及してみたい。

2.細石器石器群に至る石器群構造と行動論

細石器石器群を有する時期は、後期旧石器時代末期の大規模な構造変動の時期にあたる。その構造変動の内実を理解するためには、その前段階までの大きな変動史を把握しておかねばならない。日本列島の後期旧石器時代前半期は、石器群構造上2極構造にその大きな特徴がある（佐藤1988,1991）。2極構造は、石器製作技術上では、中期旧石器時代以来の系譜を引く横長・幅広剥片剥離技術とその目的器種たる台形様石器及び後期旧石器時代初頭に新出・確立した石刃・縦長剥片剥離技術とその目的器種たるナイフ形石器という二項的構造からなり、遺跡構造論上では、前者の系列（石器群の発現）の普遍的分布に対し、後者の系列の選択的発現が特徴である。こうした遺跡構造上の差異は、行動論上どのような適応価を有するのであろうか。

近年の世界の先史学の成果を瞥見すると、かつてのハンドアックス石器群=前期旧石器→ムステリアン=中期旧石器→石刃石器群=後期旧石器という図式が各地で成立困難な状況が現出している。このような西ヨーロッパを中心とする地域の年代編成を世界史上に位置づけようとする社会ダーウィニズム的思考に換わり、近年有力になりつつあるのが、大型獣狩猟への漸進的特殊化仮説である。広くユーラシアの旧石器文化の大勢を概観すると、これまでの示準石器とされたハンドアックスやムステリアン石器群が優勢に分布する地域は、相対的により乾燥した草原・疎林状環境の卓越した地域であったらしい可能性が高くなりつつある。ヨーロッパや周地中海域のアシューリアンが草原的環境適応型で、同時期に存在した北部・中央ヨーロッパの小型剥片石器群が森林環境適応型だとするスボボダの説（Svoboda 1987）はすでに紹介して（佐藤1992a:69-70）いる。東アジアにおけるムステリアンの分布限界に関しても、アルタイ山地以西までであり、アルタイ以東には真性のムステリアンは分布しない可能性が高い（Sato et al. 1993）。アシューリアンやムステリアンは、前期から中期旧石器時代への移行期の様相の多様性や同時期の周辺の非アシューリアン・ムステリアン地域等と比較すると、技術的に規格化が進み相対的に特殊化が進行した石器群と考えられ、これがおそらくは草原性大型哺乳類狩猟の本格化への技術的傾斜を示すものと考えられるのである。

石器製作技術の規格化・特殊化は、種々の要因でおこりうるが、ユーラシア規模

での比較の上では、通常狩猟が困難ではあるが嗜好性が高くしかも一時に大量に肉等を入手できる群棲大型獣狩猟を想起する必要があろう。通常群棲するが広範囲に点在する傾向が強く、長距離移動をしばしば行う草原・疎林環境適応型の大型獣の狩猟という目的に適応して、原石消費率の効率と携行石器の利便性を追及する必要性から、石器製作技術の特殊化が進行するものと思われる（Torrence 1983,1989等）。

中期旧石器時代にムステリアンに対峙したアルタイ以東の東アジア的剥片石器群は、狩猟具としての可能性の高いルヴァロワ尖頭器の生産過程を含むルヴァロワ技法を有さず、円盤型石核から求心状剥離技法により斜軸剥片を連続的に剥取し、主に削器を生産しているのである。

さらに、石刃石器群の成立も、同様な視点で理解することが可能であろう（西秋1992）。ユーラシアの石刃石器群は、ほぼ中緯度帯を中心に分布しており、少なくとも、大陸的な草原又は疎林状環境を取り込んでその周縁部にまで分布を広げているかに見える。石刃石器群の機能上の利点は、第一にその優れた可搬性にあろう。石刃という規格化された石器素材（または石器）の量産は、これまでの他の技術系に比して　①原石消費率の効率（例えば不定型な横打系剥片剥離技術に比べて、目的となる剥片<石刃>の獲得効率がはるかに優れている。　②携行石器の選択効率（例えば石刃を素材として各種石器を製作する技術系では、極端な場合石刃のみを携行するかまたは石刃製作用のセットを携えればよいが、その他の場合では目的器種に合わせて各種剥片剥離技術をあらかじめ駆使するか、または実行可能な道具立てをも携行せねばならない）　③石器の携帯効率（石刃製の各種の石器や石刃自体の携帯は、簡便で単一的な携行法が想定できる）等に優れており、特に長距離移動型の行動類型を取る集団には有利であると考えられる。従って、このような行動類型が想定される群棲大型獣狩猟には、石刃石器群の発達は相当に有利であった可能性が高い。

翻って、先述の列島の後期旧石器時代前半期の2極構造を、このような視座から点検してみると、ナイフ系技術の選択的発現、台形様石器系技術の普遍的存在という遺跡構造が重要な意味を有することとなる。前述のごとく、列島の中期旧石器時代は、相対的に狩猟への技術適応を深めていたと推定されるムステリアン石器群ではなく、削器主体で小型尖頭器を含む斜軸尖頭器石器群から構成される。従って、少なくとも、大陸のような大型獣の組織的狩猟が発達していたことは考え難く、後期旧石器時代前半期に於ても、石刃・縦長剥片剥離技術が発生・成立してはいるがその頻度は低く、選択的行使を専らにすることから見て、同時に大型獣狩猟の優勢は考えにくい。恐らく、前半期の日本列島は、台形様石器に代表されるような石器の便宜的使用を主体的に行うことにより森林環境や森林から疎林への遷移的環境に適合した中・小型動物猟を行いながらも、一方では、次第に大型獣狩猟の機会を高めていったものと現段階では理解しておきたい。このことは、前半期を通じて次第にナイフ形石器が確立・分化していく傾向と、台形様石器の衰退・減少及び切出形石器系への代置・置換という石器群構造上の推移に現われているのではないだろうか。

台形様石器を主な目的とする横長・幅広剥片剥離技術は、ナイフ形石器系に比して相対的に原石消費率がきわめて悪く、また石器形態が不安定で管理的使用に耐ええない可能性が高い。従って、可搬性という点では、対照的存在である。こうした技術は、どちらかといえば森林性の非群棲中・小型動物を各所で少数づつ狩猟するための技術的対応であった可能性が高い。そして、後期旧石器時代後半期において、台形様石器系を置換するかのように出現する切出形石器類の存在や各種ナイフ形石器の分化・確立は、ナイフ形石器系技術の中での二項的構造の再編成を意味すると思われることから、引き続き中・小型動物狩猟が活発に行われたことを暗示しよう。

石刃・縦長剥片剥離技術の発達とナイフ形石器文化の展開は、世界的な旧石器時代の技術進化に対応した大型獣狩猟の可能性を強く示唆しているが、同時に見られる　①前半期段階の石器群構造上の列島規模での等質性　②ナイフ形石器の大型化が東北地方を除いてⅦ-Ⅵ層をMax.とすること等から、大陸に比して環境のモザイク状の分布に特徴を有する日本列島では、おおむね群棲大型獣の長距離移動を伴う組織的狩猟を恒常的に実施することはついになかったものと思われる。

細石器石器群は、基本的には石刃技法の特殊形態と把握することもでき、石刃石器群の有する可搬性に富んだ移動性生活適応型の石器群構造をさらに進展させた可能性が高い（加藤1993,白石1993等）。恐らく、最初期段階の細石器石器群を発生させた北部中国から南シベリア周辺での行動論上の意義は、長距離移動を基本戦略とする中・大型獣狩猟の本格化に存するものと思われる。従って、生態条件の大きく異なる日本列島への細石刃生産技術の招来は、周日本海的な環境条件の同質性の仮定を条件に、沿海州から北海道の地域ですくなくとも細石刃技術の技術的組織上の適応的意味が変容を促され、さらに本州に伝播する段階で適応の再編成が図られているのではないだろうか。細石刃技術の本州への伝播には、少なくとも適応論上二段階以上の再編過程が存した可能性が高い。少なくとも本州以南の日本列島では、当該期には生態環境がモザイク上に分布しており、大陸とは異なり、長距離移動を伴う組織的な大型獣狩猟が一体期間継続して展開したとは考えにくい。

3.移動性狩猟採集戦略・居住安定性と細石刃石器群

一般に、本論で扱う範囲の先史狩猟採集民に想定される生態環境適応の相を移動パターンMovement Patternと居住の安定性Residential Stabilityから概括すると第一図のように類型化出来よう。その前提としては、資源構造との関係性の中で規定される石器群の技術的組織を保有する狩猟採集民が、「リスク低減戦略」を行動原理に内置しているという理論的仮説に基づく（田村1992）。この類型化は、決したすべての地域・時代で画然と存在するわけではなく、むしろ移行的な位置にあるものの方が主体的なのかもしれないが、議論上模式的に呈示しておく。この図式から読み取れることは種々あるが、ここで主張しておきたいことは、大陸の石刃石器群や細石刃石器群を担う地域集団が本来大型獣の組織的狩猟の遂行のために相対的に安定したBase Campを設置しながら一方で広大な乾燥的環境（例えばステップ・草原--疎

	長距離移動	短距離移動
居住安定性高 semi-sedetism	大陸の大型獣狩猟民 安定したbase campと 長距離の狩猟遠征 （石刃の発達、道具 の特殊化）	定住的村落<縄紋> 安定したbase campと多角的な 周辺資源開発のための小旅行 （道具の機能別特殊化・分化）
居住安定性低 nomadic	離合集散する狩猟採集民 <小型剥片石器群、東ア ジア的剥片石器群> 広範囲に移動しながら 環境開発	一定地域を回帰的に遊動 <列島の後期旧石器時代後半期> 移動機会は多いが地域性を形成 （器種組成が貧弱、道具の非特 殊化）

第1図　移動類型と居住安定性から見た狩猟採集民の行動論

林等）の各所に点在する群棲大型哺乳類狩猟のための長距離遠征を恒常的に行いうる道具のセットを保持し技術を進化させてきたと想定されるのに対し、周日本海の北側を中心とした地帯やさらに日本列島（就中本州島）では、居住の安定性が低く一定地域を周回するかのように恒常的に遊動する生活パターンであったと仮説される前時代（後期旧石器時代後半期）までの列島の地域社会が、基本的にホモロジカルな細石刃技術を受動した可能性が高いと推定される点である。列島における各種の細石刃技術及び細石核の形態学的研究によれば、その分布は、基本的には前代までのナイフ形石器文化後半期に形成されている地域性を強く反映している可能性が高い。さらに、北海道地域では、細石刃石器群の技術分化が進行し、確立された変異が大きく、石刃製掻器等の他器種も安定的に伴う例が多い。また、相対的な継続期間も、本州に比して長期間にわたったものと思われる。このことは、北海道における生態環境が、沿海州を中心とする大陸側と類似し、北海道型の細石刃文化として一定期間展開した可能性の高いことを強く示唆している。

4.後期旧石器時代後半期から終末期・細石器石器群期にかけての移動戦略と地域性

列島の後期旧石器時代を領域性Territorialityと行動論的側面から見ると、石器群構造同様前半期と後半期に大きく二分される。石器群構造や社会・生活・文化的諸側面にわたる概括的な変化については拙著（佐藤1992a）を参照していただきたい。また、ここでは関東地方の事例を中心に考察していく。

後期旧石器時代前半期の関東地方は、列島全体と基本的構造は同質で、石器群構造の等質性や遺跡構造上の種々の証拠（技術的組織）から、移動性が比較的高く領

域性もゆるやかかつ不明瞭であったと考えられる。埋め込み戦略化した石材採取により、相対的に消費的な石材利用を行っていたのであろう。一方、後半期になると、石器群構造の分立・定立が示すように、地域性が発生・発達し、その結果各社会集団の領域性も強化されるようになると思われる。①礫群の本格的な発達や石器組成にGrinding Toolsが多く見られるようになること等に示唆される植物質食料の利用の進展（高頻度の移動生活には適合しない）　②砂川型遺跡構造論が明かにしたように、遺跡での集団の短期間居住と頻繁な移動の繰り返しが強く示唆されること等の種々の証拠から、各集団は、前半期に比して一定した地域（領域）を回帰的に移動する行動形態を採用していたものと推定される。このことは、石器製作技術上全ての有用石材の採取地が、当該集団の日常的な生計行動中に埋め込まれていたEmbededとは限らないことを意味している。従って、石材等を中心とする物資の交換が次第に恒常的に行われるようになった可能性が高く、このことは、バンド社会の進化、準部族的社会の形成の進行と表裏一体の出来事であったろう。このことを示す石器に現われた現象としては、特に後半期後葉から顕著になる尖頭器を中心とするCuration Systemの発達（佐藤1992a:304-309）が重要であろう。大型両面体の供給が石器であり同時に素材供給母体の供給を意味するというCuration Systemの強化は、激しく変化する更新世末期から完新世初頭にかけての環境変動によって地域社会間のコミュニケーション・ネットワークがより不安定になり、石材原石そのものの交換と入手から、それらに加えて両面体母材の搬入という戦略が加えられたことを意味していよう。東北地方から関東・中部地方にかけて出現する北方系削片系細石器石器群は、こうしたCuration Systemの発達のひとつの相を示しており、同時に両面体母材の調整により生産される調整剥片を専ら他器種の素材供給に使用するという長距離移動に適したReduction Strategyの特殊発達をもよく示している。

関東地方を中心とする地域の後期旧石器時代後半期は、概括的に見れば、主要な器種はナイフ形石器→尖頭器→細石刃と変化している。ナイフ形石器群に尖頭器石器群が介在する過程は、連続的かつ漸増的であるが、細石刃の出現は不連続である。この現象は、一見すると伝統の断絶と見えるが、これは在地を中心とする石器製作技術上の断絶又は飛躍であり、前述したようなCuration Systemやそれに伴うReduction Strategyの発達という行動論上の観点から見ると連続的である。細石刃石器群発生前の石器群構造は、特に南関東地方に顕著に見られるように、尖頭器の発達したグループや「終末期ナイフ形石器」と呼ばれる小型ナイフ形石器のグループ、あるいは各種石器が混合するかのような様相を見せるグループ等がモザイク状に混在しているかのようである。このことは、すでに単一の主要器種の生産とそれを取り巻く石器製作技術という一元的な技術構造に依存することなく、すでに多様な石器製作技術から構成される技術構造等を保持し、それを機能的に選択して発現する行動類型をとっていた可能性が高い。従って、野岳・休場型に代表される初期の細石刃生産技術は、このような多様な石器製作技術の一部と置換する形で発生又は導入されたのではないだろうか。野岳・休場型細石核の生産技術と直前段階の石刃・

縦長剥片剥離技術の類似性はすでに繰り返し指摘されており、また終末期ナイフ形石器の一部が組み合わせ石器として使用されていたとするならば、細石刃技術の出現は、技術上の不連続があったとしても説明は可能である。さらに、行動論上より利便な可搬性が求められていたとするならば、細石刃技術は最も適合する技術のひとつと考えられよう。つまり、終末期ナイフ形石器や一部の石刃・縦長剥片剥離技術という技術的先適応と、後半期後葉から活発化したCuration Systemの発達がもたらした行動上の可搬性の増大という行動論上（社会的）の先適応によって、細石刃石器群が招来されたものと思われる。

例えば、野岳・休場型と北方系削片系の細石器石器群は、技術的にかなり大きな差異があるが、一単位（石核又は両面体）あたりの総刃縁長は大きく増加しており、これは明かに可搬性（特に長距離移動かまたはきわめて頻繁な回帰的移動に対する利便性の増大）という行動論上の特殊化が認められる。このことは、行動論上より有利な機能価が獲得されるのならば、技術系の取捨選択が、この不安定な段階では（恐らく伝統的な価値体系の動揺等も起因して）比較的容易に行われ得ることを示唆しているのではないだろうか。従って、野岳・休場系統の細石刃石器群と北方系削片形細石刃石器群とに認められる細石刃生産技術の差異の他に、行動論上では両石器群では大きな差異があると言えよう。恐らく、前者は、基本的に直前段階の行動類型を反映して複合的な石器群構造の一部を代置するかのような位置を占めていた（一定地域内の頻繁な回帰的移動戦略の一端を担っていたのであろう）可能性が高いのに比して、後者は、長距離移動と特定生業（例えば内水面漁撈<佐藤1992b>）にきわめて特殊化した行動上の機能価を有していたと推測される。よって、次の段階である長堀北遺跡や上野遺跡等の大型尖頭器や各種削器・石斧等をもつ石器群と共伴する段階には、こうした行動論上の特性（有利性）を失い、急速に衰退するのであろう。

（1993.8.20）

註

1）例えば『駿台史学』47号,1979.同60号,1984等の特集号（「日本細石器文化の研究」）が挙げられよう。

2）内水面漁撈の発生も、細石刃石器群を保有する集団の内部で行なわれた可能性が高いが、これは、動物狩猟の技術的系譜の延長の上に、適応放散のひとつとして行なわれたものと考えておきたい。漁撈という本来的に定着的傾向の強い適応形態は、細石刃技術の行動論的適応価の上では、特殊な再適応の可能性が高い（佐藤1992b）。

引用参考文献

加藤真二　1992　「中国細石刃文化の展開とその背景」『筑波大学　先史学・考古学研究』3:1-29

加藤博文　1991　「ソ連邦沿海州地方における細石刃核--細石刃石器群変遷の基礎的研究

として--」『筑波大学　先史学・考古学研究』2:25-52.
加藤博文　1993　「サハリン・北海道地域における細石刃技術の受容の様相--近年の日ロ両国の調査成果から--」『古代文化』45-4:3-12,古代学協会
佐藤宏之　1988　「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3:1-37
佐藤宏之　1991　「日本列島内の様相と対比--2極構造論の展開--」『石器文化研究』3:129-140,石器文化研究会
佐藤宏之　1992a　『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
佐藤宏之　1992b　「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説--関東地方を中心に--『法政大学大学院紀要』29:55-83
Sato,H.,Y.Nishiaki and M.Suzuki 1993 "Lithic Technology of the Japanese Middle Palaeolithic:Levallois in Japan ?" Paper for the international Symposium'The Definition and Interpretation of Levallois Technology',Philadelphia
徐淑琳・加藤真二　1991　「中国山東省沂河・沐河流域の細石器文化」『旧石器考古学』43:17-24,旧石器文化談話会
白石典之　1993　「北東アジアの細石刃石器群--技術よりみた時間・空間的変遷とその背景--」『筑波大学　先史学・考古学研究』4:1-29
Shott,M. 1986 "Technological Organization and Settlement Mobility : An Ethnographic Examination" Journal of Anthropological Research 42:15-52
Svoboda,J. 1987 "Lithic Industries of the Arago,Vertesszollos,and Bilzingsleben Hominids:Comparison and Evolutionary Interpretation"Current Anthropology,28-2:219-227
田村隆　1992　「遠い山・黒い石--武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察--」『先史考古学論集』2:1-46
西秋良宏　1992　「ナヴィフォーム式石刃生産技術と北シリアの先土器新石器時代」『ラーフィダーン』Ⅻ:27-60,国士館大学イラク古代文化研究所
Torrence,R. 1983 "Time Budgeting and Hunter-Gatterer Technology"in;Hunter-Gatherer Economy in Prehistory (ed.)G.Bailey:11-22,Cambridge Univ.Press
Torrence,R. 1989 "Re-Tooling : Toward a Behavioral Theory of Stone Tools" in ; Time , Energy and Stone Tools (ed.)R.Torrence:57-66,Cambridge Univ.Pres

日本の細石刃文化遺跡と細石刃文化資料

日本における細石刃文化遺跡と細石刃文化資料についての現段階での統計的数値を、第Ⅰ部の基礎データをもとに集約する。

日本の細石刃文化遺跡と細石刃文化資料

－　その統計的把握　－

八ケ岳旧石器研究グループ
堤　　隆

1　はじめに

矢出川遺跡における細石刃文化の発見から40年、南は九州から北は北海道までその遺跡分布は拡大した。ここでは、今回のシンポジウムによせていただいた各地域の細石刃文化遺跡の地名表をもとに、現時点での細石刃文化遺跡と細石刃文化資料の集計をおこなっておくことにしたい。

2　日本の細石刃文化遺跡

日本の細石刃文化遺跡は、本シンポジウムにおける集計で１０１３遺跡である。
今回の集計では、例えば表面採集＝細石刃１点といった遺跡もできるかぎり各地域でひろいあげていただき、細大漏らさず、という状況に限りなく近い集計を目標とした。

日本の細石刃文化遺跡の分布については第１図に、遺跡と遺物の便宜的な県別の集計は第１表に示してある。さらに詳しい内容については、各位の労作である地域別の表を参照していただくこととしよう。

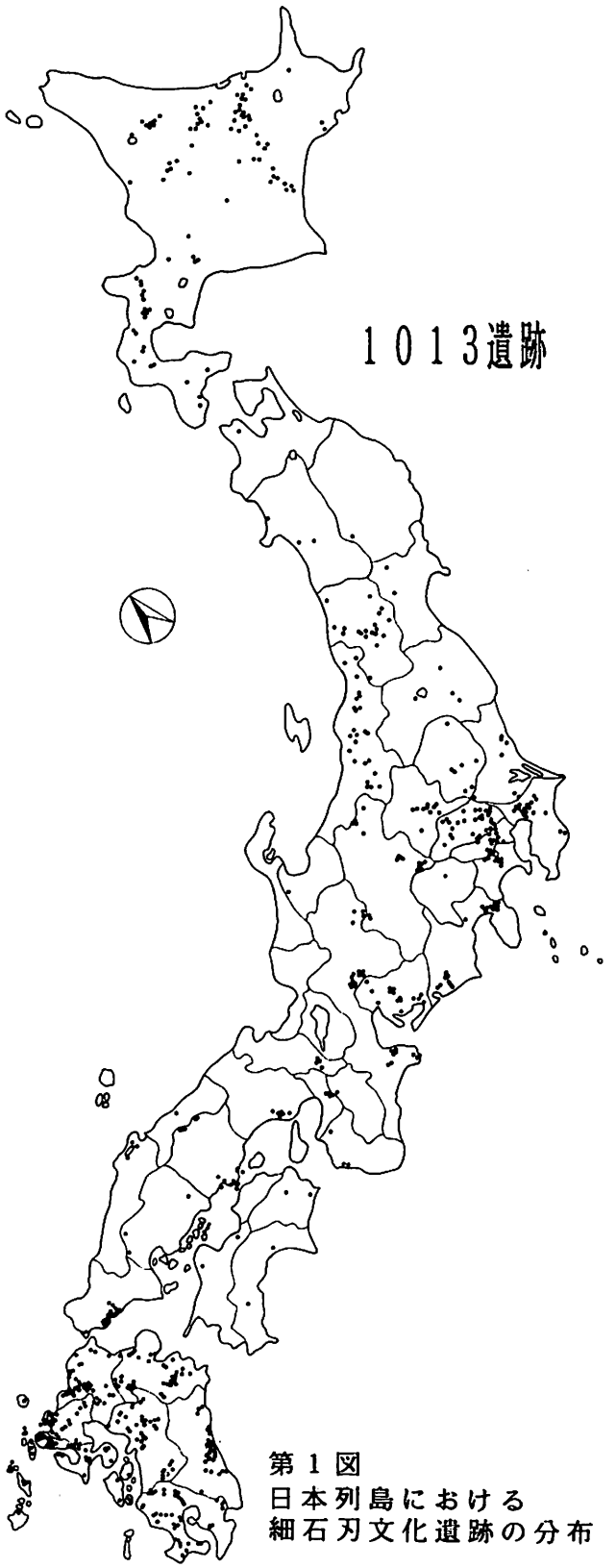
なお、およそ千という細石刃文化遺跡の数は、本書で橋本勝雄が予測したその数と一致するものである（橋本本巻掲載論文）。1983年時点の鈴木忠司による集成が５３７遺跡であり（鈴木1983）、十年でおよそ倍近い数の遺跡が確認されていることになる（註１）。

3　日本の細石刃文化資料

日本の細石刃文化資料、とりわけ細石刃と細石刃石核の数についてみておこう。

その数値が公開されているものの数は、細石刃＝６２９９０点、細石刃石核＝５８７９点である。また、点数は不明であるが、該当ありというものは、細石刃のみられる遺跡で１７５遺跡、細石刃石核のみられる遺跡で１８５遺跡ある。

つぎに細石刃と細石刃石核の遺跡ごとの出土数をみてみよう。



第1図
日本列島における
細石刃文化遺跡の分布

第1表　細石刃文化遺跡数と遺物の出土数

県名		遺跡数	MB出土数	MC出土数
九州	鹿児島	53	4,949	1,077
	宮崎	48	35	87
	熊本	53	389	115
	大分	55	303	233
	長崎	84	15,452	945
	佐賀	89	839	97
	福岡	76	648	259
中国	山口	25	869	79
	広島	4	29	9
	岡山	16	91	32
	島根	4	0	4
	鳥取	1	0	1
四国・瀬戸内	愛媛	5	2	5
	高知	2	0	2
	徳島	2	5	3
	香川	9	1,065	430
近畿	兵庫	6	0	6
	京都	4	2	4
	福井	0	0	0
	滋賀	0	0	0
	大阪	8	0	9
	奈良	1	0	1
	和歌山	3	4	14
	三重	9	0	3

MB＝細石刃　MC＝細石刃石核

県名		遺跡	MB出土数	MC出土数
東海	愛知	16	89	31
	岐阜	18	30	21
	静岡	44	2,492	216
関東	神奈川	22	2,340	169
	東京	23	670	108
	埼玉	44	506	11
	千葉	22	327	102
	群馬	14	166	36
	栃木	7	7	5
	茨城	7	371	15
中部	長野	39	6,004	831
	山梨	1	0	1
北陸	石川	0	0	0
	富山	1	1	0
	新潟	24	1,324	77
東北	福島	4	4	5
	山形	25	1,525	51
	宮城	3	0	2
	秋田	3	15	5
	岩手	2	62	1
	青森	2	19	17
北海道	西部	45	4,220	202
	東部	90	18,136	558
国内総計		1,013	62,990	5,879

※出土点数の公開されている遺跡のみの数値

●細石刃の出土数

まず、細石刃の出土数である。検討の俎上に上がったのは国内の３５７遺跡（文化層単位のものもある）である。このうち１０点未満の出土数のものは１７２（国内検討遺跡数の４８％）遺跡である。１００点未満とした場合２８２（７９％）、２００点未満とした場合３０９（８７％）遺跡が含まれることになる。

逆に、もっとも細石刃を多く出土したのは、泉福寺洞穴第Ⅲ文化層で９５５６点（国内出土数の１５％）、続いて帯広・暁の８７００点（１４％）以上、矢出川第Ⅰの５０００点（８％）以上となっている。いずれも群を抜いた出土数である。

●細石刃石核の出土数

次に細石刃石核の出土数である。検討の俎上に上がったのは国内の５８５遺跡（文化層単位のものもある）である。このうち５点未満の出土数のものは、４２４（国内検討遺跡数の７２％）遺跡である。１０点未満とした場合４９１（８４％）、５０点未満とした場合には５８５（９７％）遺跡が含まれることになる。

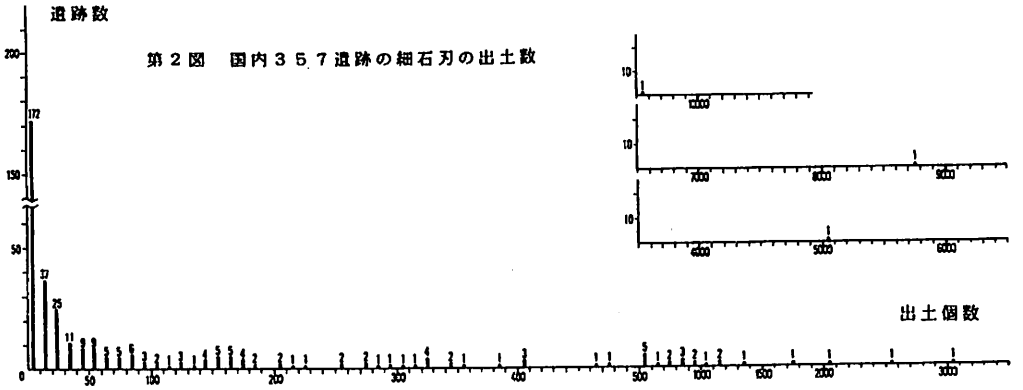
逆に、細石刃石核をもっとも多く出土したのは、矢出川第Ⅰの６４４点（国内出土数の１１％）、ついで加栗山が３４９点・加治屋園３４３点・泉福寺洞穴第Ⅲ文化層３４１点（いずれも国内出土数のおよそ６％）となっている。なお、Ⅰ～Ⅳの各文化層を合計すれば泉福寺洞穴は７２１点（国内出土数のおよそ１２％）となり第一位である。

●細石刃と細石刃石核の出土割合

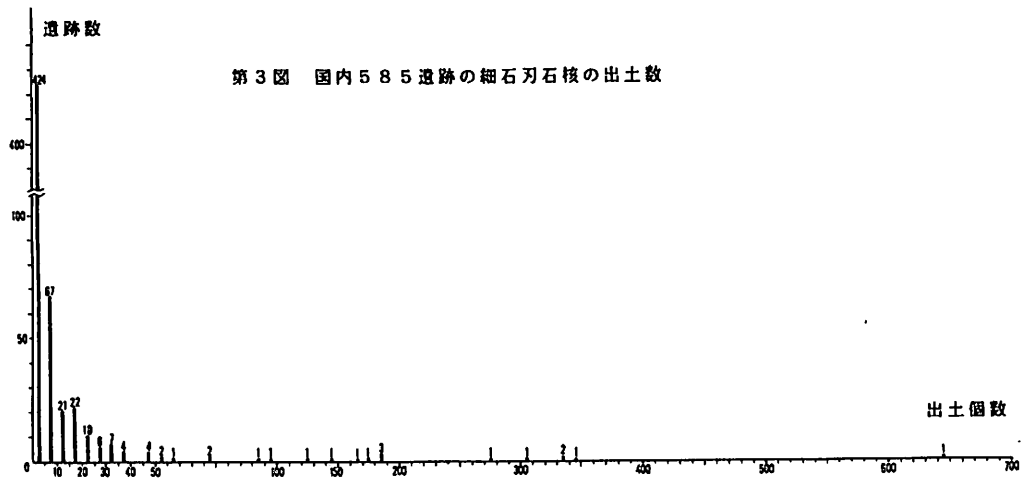
各地域の代表的な細石刃石器群（発掘資料）５７を取り上げその比率を第２表に示した。そのうちのおよそ７割にあたる石器群は、細石刃に対する細石刃石核の出土割合が１割に満たないものといえる。

ここで注意しておきたいのは北海道地方の細石刃石器群の傾向である。そのなかには、９９MB：１MCという比率となる、つまり細石刃石核の数に比べ細石刃の比率が著しく多いものが目立つことである。（例えば北栄・本沢・暁・緑丘Ｂなど）。

これに対し、花見山では６５MB：３５MC、大林では５７MB：４３MCという比率であり、細石刃石核の数に比べ細石刃の比率が少ない例といえる。例えばひとつの細石刃石核から１０本の細石刃が生みだされたと仮定して大林をみると、３３点の細石刃石核からは３３０本の細石刃が生みだされた計算になるが、実際出土したのは４４点（約十分の一）のみである。ただ細石刃はその小形さゆえ、いくつかの遺跡において当然サンプリングエラーの問題はつきまとうだろう。



第２図　国内３５７遺跡の細石刃の出土数



第３図　国内５８５遺跡の細石刃石核の出土数

第２表　細石刃と細石刃石核の出土構成比

	遺跡名	実数比（MB:MC）	百分率（MB:MC）
九州	泉福寺（Ⅱ文）	3098 : 307	91 : 9
	泉福寺（Ⅲ文）	9556 : 341	96 : 4
	加栗山	2532 : 349	88 : 12
	福井　２層	250 : 37	87 : 13
	福井　３層	250 : 23	92 : 8
	西輪久道	381 : 24	94 : 6
	門田（谷地区）	103 : 97	52 : 48
	成岡	721 : 180	80 : 20
	床並Ｂ	406 : 27	94 : 6
	西丸尾	251 : 36	87 : 13
	椎崎Ｂ	162 : 31	84 : 14
	椎崎Ａ	101 : 15	87 : 13
四国	花見山	524 : 277	65 : 35
	大浦	315 : 45	88 : 12
	羽佐島	188 : 73	72 : 28
中国	恩原１	25 : 2	93 : 7
	恩原２	57 : 4	93 : 7
東海	大坂田畑Ａ	750 : 13	98 : 2
	中見代Ⅱ	158 : 30	84 : 16
	休場	891 : 19	98 : 2
中部高地	矢出川第Ⅰ発掘 表採	250 : 145 4750 : 499	63 : 37 90 : 10
	中ツ原５Ｂ	160 : 4	98 : 2
	砂又Ａ	271 : 8	97 : 3
	上ノ原	46 : 23	67 : 33
関東	大林	44 : 33	57 : 43
	向原	59 : 15	80 : 20
	日立	476 : 1	99 : 1

	遺跡名	実数比（MB:MC）	百分率（MB:MC）
関東	新橋	33 : 2	94 : 6
	多摩ニュータウン769	300 : 20	94 : 6
	代官山Ⅲ文	461 : 36	93 : 7
	かしわ台駅１	141 : 4	97 : 3
	上草和第３中央	96 : 7	93 : 7
	下鶴間長堀	321 : 27	92 : 8
	田田大台	204 : 1	99 : 1
	後野Ｂ	167 : 4	98 : 2
	国盛	121 : 1	99 : 1
北陸	月岡	93 : 5	95 : 5
	中土	22 : 3	88 : 12
	荒屋	1163 : 56	95 : 5
東北	角二山	1390 : 13	99 : 1
	越中山Ｓ	79 : 6	93 : 7
	大平山元Ⅱａ	13 : 10	57 : 43
北海道	新道４	951 : 88	92 : 8
	石川１	88 : 2	98 : 2
	美利河１	1107 : 30	97 : 3
	旧部台	507 : 50	91 : 9
	旧部台２	207 : 93	69 : 31
	蘭戸安住	223 : 21	91 : 9
	北栄	2000 : 23	99 : 1
	広郷20	1700 : 33	98 : 2
	本沢	1084 : 11	99 : 1
	幌	8700 : 70	99 : 1
	上似平	408 : 6	99 : 1
	緑丘Ｂ	829 : 4	99 : 1
	旭田	295 : 4	99 : 1

４　細石刃文化遺跡の地域的分布

●九州地方

４５８遺跡（国内遺跡総数の４８％）があり、国内でもっとも高密度な遺跡分布をみせる地域である。このうち長崎・佐賀・福岡のいわゆる西北九州には２４９遺跡（国内遺跡総数の２５％）が存在しており、さらに濃密である（註２）。ここは腰岳・牟田・針尾の黒曜石原産地を間近にひかえる地域である。

このほか、筑後川流域・大野川流域・宮崎平野・人吉～薩摩半島・鹿屋地域に遺跡が存在し、ほぼ九州全域に分布する傾向が窺える。

●中国・四国地方

５０遺跡（国内遺跡総数の５％）が存在する。遺跡は宇部台地に１５、備讃瀬戸に１８、中国山地大山付近に７遺跡が集中するが、それ以外にはごく単発的に貧弱な遺跡がみられるのみである。近畿・東北北部とあわせて全体的に分布が疎な地域である。

●近畿地方

３１遺跡（国内遺跡総数の３％）が存在する。しかしそれらはいずれも細石刃石核が単発で認められる遺跡にすぎず、量的なまとまりをもつ細石刃石器群が存在しない、という点では分布の空白域的な地域といえる。とりわけサヌカイト原産地である二上山地域に細石刃文化遺跡の分布が認められない点は、ナイフ形石器とは対照的なあり方で、サヌカイトとの結び付きの弱さが窺える。

●東海地方

７８遺跡（国内遺跡総数の８％）が存在している。各務原台地（７遺跡）、磐田原台地（１６）、愛鷹・箱根山麓（２４）に遺跡が集中する。

●関東地方

１３９遺跡（国内遺跡総数の１４％）が存在する。

南関東は、台地単位では、相模野（２４遺跡）・武蔵野（３０）・下総（２４）となっているが、とりわけ相模野と下総の遺物が充実している。その遺跡総数は１１３遺跡（国内遺跡総数の１１％）、西北九州・北海道東部とならび、国内で細石刃文化遺跡の集中する地域といえる。

北関東では赤城山南麓に１１遺跡ほどがある。

●中部高地

県的には長野に限られるが、３１遺跡がある（国内遺跡総数の３％）。地域的には野辺

山原に集中するが、和田峠の黒曜石原産地周辺にその存在が貧弱である傾向もみられる。

●北陸地域

福井・石川・富山は分布の空白域である。信州の北端部を含め新潟にかけては３２遺跡が存在する（国内遺跡総数の３％）。

●東北地方

３９遺跡（国内遺跡総数の４％）が存在する。とりわけ山形地域に２８遺跡があり、それ以外では各県に数遺跡が散見されるにすぎない。

●北海道西部

４５遺跡（国内遺跡総数の４％）が存在する。渡島半島から札幌にかけて（特にはシリベシ地域）・旭川盆地・名寄盆地に遺跡の分布がまとまる。

●北海道東部

９０遺跡（国内遺跡総数の９％）が存在する。白滝・置戸・十勝といった原産地をひかえた河川の上中流域に出土点数の多い遺跡が集中する傾向がある。

なお、北海道全体の遺跡総数は１３５（国内遺跡総数の１３％）遺跡である。

５　列島の細石刃文化、その分布的傾向

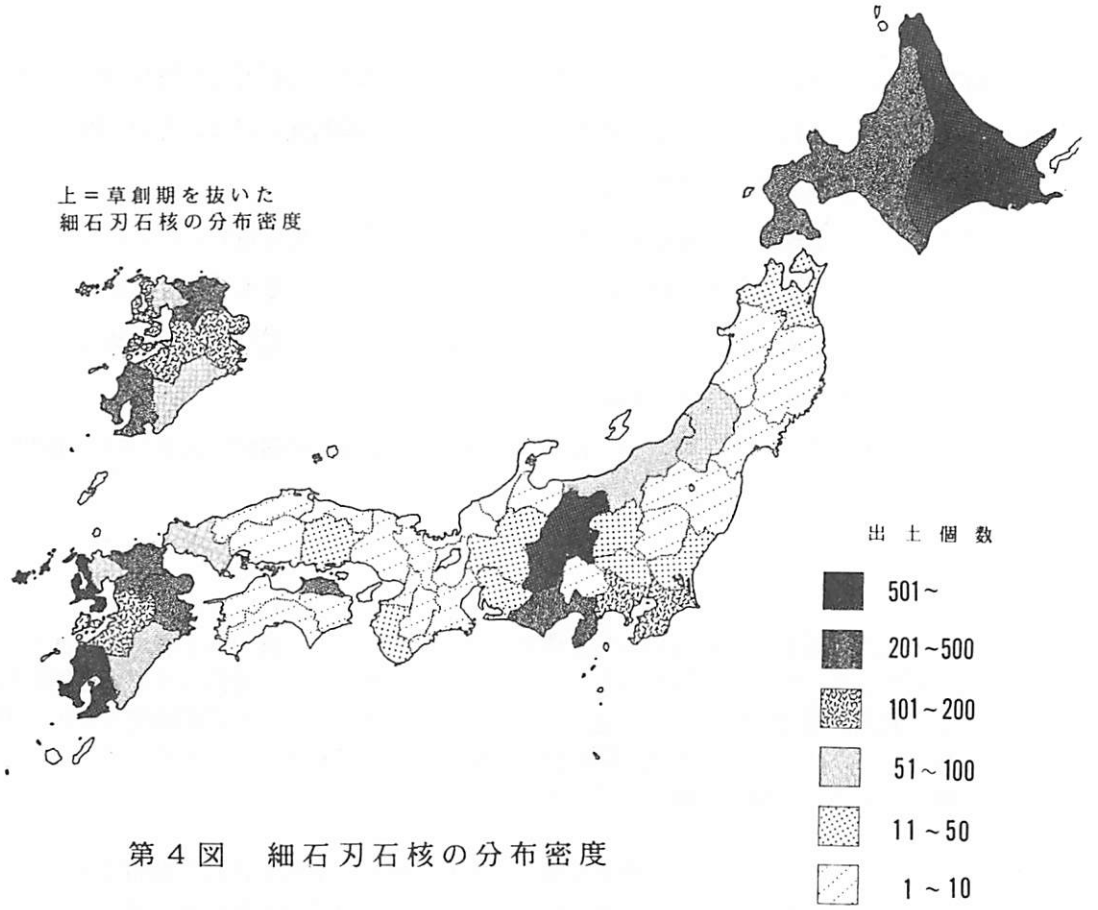
４でみた列島の細石刃文化の地域的分布の傾向をまとめると、細石刃文化遺跡が列島内で特に集中するのは、九州北半・南関東・北海道東部の３地域ということになる。

一方、気掛かりなのは、鈴木も注意するように（鈴木1982）その遺跡を残した当時の人口分布である。その人口という問題については、遺跡数だけではその多寡がはかれない部分もある。遺跡のいわゆる規模（遺物数やその広がりなど）がまちまちだからである。

そこで、人口を考えるための分布的提示の第二点として、２で検討した遺物密度についても眺めておくことにした。第２図は細石刃石核数の県別分布である。便宜的に利用した行政区分が問題にならない程度にその分布の偏りをみると、九州南部・九州北部・備讃瀬戸・中部東半・南関東・北海道東部にその集中がみてとれる。

その遺物密度をさきの遺跡密度に重ねると、巨視的には「九州」（註３）「本州中央部」「北海道」という３つの核地域が抽出されることになる（註４）。

ところで人口分布が語られるうえの原則は、同一時間軸において、ということである。そこで各地域の細石刃文化の存続期間が問題ともなる。おそらく存続期間というそれぞれの係数を考慮した場合、遺跡密度がまず薄まるのは「九州」、ついで「北海道」というこ



第４図　細石刃石核の分布密度

とになるだろう。

さて、鈴木忠司による細石刃文化遺跡の分布論的検討では、その分布は「北海道に一番多く、九州・中部がこれにつぎ、東北地方が一番少ない」という。ただし、これにいくつかの留意点を考慮した場合「細石刃文化遺跡の量的分布はおおよそ北海道に６０％、残りの４０％を本州以南が占めていた」との予測がなされるという。つまるところ、細石刃文化期における人口集中は北海道にあり、その存立基盤は寒冷地草原での大型動物群の狩猟であったという（鈴木1992）。

本稿で抽出した「九州」「本州中央部」「北海道」という３つの核地域と、鈴木の指摘する北海道地方への人口傾斜という問題については、双方の基礎データの抽出法やデータの操作法を明確にしたうえでのつきあわせと解釈とが必要となるだろう。

取り急ぎここでは、そのデータの提示のみとしておき、その解釈については後の検討にゆずることにしておこう。

5　おわりに

本稿では、１９９３年時点における日本の細石刃文化遺跡と細石刃文化資料の統計的把握をおこなった。これについては、鈴木忠司氏から、分布論的検討についてのご教示をえた。厚く御礼を申し上げる次第である。

そしてなにより本集計は、各地域の方々の労作である細石刃文化遺跡の地名表をもとに筆者が電卓をたたいておこなったものであり、データがメリットをもたらすとしたらそれは各地域の方々から出発しているものであることは明白である。忙しい日常をぬってこれを作成されたみなさんに懐中より謝意を表したい。

さらに十年後、細石刃文化発見から五十年、現在の千あまりの遺跡にどれだけの確認数が加わっているのだろうか。

註

1　鈴木忠司は、旧石器（岩宿）時代と縄文時代草創期の細石刃資料および遺跡を区別した統計をおこなっている（鈴木1992）。それに基づくと、５３８遺跡のうち旧石器時代が４０５遺跡、縄文時代が１３２遺跡となるという。ここでは、両者の厳密な弁別が困難であること、またいわゆる過渡期的歴史的動態のなかで両者をむしろあわせて扱うことの意味も考え、一括して検討している。

2　註１によるように、土器の出現する縄文草創期の細石刃遺跡も含めた数値である。
鈴木によれば（鈴木1992）、九州の縄文草創期細石刃遺跡の占有比率は４４%、県別には長崎６２・佐賀６１・福岡３３・熊本３２・大分２５・宮崎３０・鹿児島３３%であるという。この比率にしたがって旧石器時代の遺跡のみを抽出したとするなら、九州全体で３００遺跡、西北九州で１３０遺跡がそれに該当することになろう。

3　九州地域は、草創期と考えられる細石刃の遺跡をのぞいても、その分布が多いことにかわりはないだろう。

4　一方で、遺跡調査の実施率という問題も、遺跡分布の粗密にからむ要素として無視しえないだろう。そういった意味では、本州中央部南関東は遺跡調査の実施率がきわめて高いことを考慮しなければならないだろう。

引用参考文献

鈴木忠司　1983　「日本細石刃文化の地理的背景」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』

鈴木忠司　1992　「日本列島細石刃文化の分布論的検討－地理・動植物、そして人口」『シンポジウム北方ユーラシアにおける細石刃文化の起源と拡散』

橋本勝雄　1993　「日本細石器文化研究の現状と課題」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ（本論文集掲載論文）

シンポジウム
細石刃文化研究の新たなる展開

１９９３年　１０月　３０日　発行

発行者　八ケ岳旧石器研究グループ
　　佐久考古学会

発行所　佐久市岩村田1317-1　堤方

編集者　堤　　隆

印　刷　㈱ほおずき書籍